まんじ

No.175

2025.2.1

まんじ第百七十五号　目次

表紙絵の解説「光への再生」……田寺（たでら）怜葦（れい）…4
孔子の一生……三戸岡（みとおか）道夫（みちお）…5
「続ける」と「頑張る」の間で……新井宏…10
イェイツ詩集を読む……岩上和道…17
大興安嶺紀行……井出晃憲…27
短歌　冬に寄せて……鈴木興…37
俳句　雑俳十六句……宇井偉郎…40
短歌　雑歌十六首……宇井偉郎…42
古い物・遠い夢　我家の一品……忠内正之…44
吾輩は紙魚ロボである　その二一……永畑俊三…51
司馬遼太郎の描いた徳川家康（七）……山田嘉久…86
近代日本洋画家論考
【painter & traveler 川島理一郎の画業を回顧する・昭和戦前戦中篇】……水谷嘉弘…93
まことのEメール夢の旅（第十六話～第十八話）……手塚泰男…116
古代出雲国の実像（五）……村上邦治…127
私の本州マラソン歴史紀行（中部編②）……安藤剛…143
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その十六）……山本勉…167
近藤勇プロジェクト（五）……匠克仁…179
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　3　解雇自殺？（五）……匠克仁…183
編集後記……編集子…189

表紙絵の解説

田寺　怜葦

令和七年は蛇年です。いま世界は前代未聞ともいうべき激動と変革の時代の中にあります。ロシアとウクライナの紛争はまだ終息しないまま、中東ではイスラエルがガザ地区に対して壮絶な攻撃を続けています。民族・宗教に絡んだこの戦いに、私達は先行きの見えない不安を感じるばかりです。紛争に限らず、経済からエネルギー、食料、健康問題に至るまで、明日への道は暗雲に覆われているよう思えます。

今年の表紙絵には、そんな暗闇を抜けて希望の光にたどり着きたいという思いを込めました。

脱皮してより強く大きくなっていく蛇のように、私たち人間も古い殻を脱ぎ捨てて、光へと続く道を歩んで行くことができるはずです。

コブッタさんの後輪として描いたのはシードオブライフという図形です。シードオブライフ（SEEDS OF LIFE）とは生命の種。これは神聖幾何学模様のひとつで、森羅万象や生命の根源を表す形です。

神聖幾何学模様とは、神聖幾何学に於いて宇宙や生命の創造や維持に関わるエネルギーを表す形で、「光の言語」とも呼ばれています。

神聖幾何学模様は文化や宗教を超越して世界中の建築や芸術に見られるもので、多くの場合に共通の意味を持ちます。物理学では数式によって自然法則を表しますが、神聖幾何学は点と線によってそれを表現するのです。つまり、数式と同じものだと言えます。

現在では量子物理学の研究が進み、第2次量子革命が進行中だと言われています。

これまで対極にあると思われていた宗教と科学の関係性も急速に変化していくのではないでしょうか。全てにおいて対立から調和へと向かう世界である事を願わずにはいられません。

孔子の一生

三戸岡　道夫

人間にとって「品性の高さとは何か、器の大きさとは何か」、それは孔子の一生がよく教えてくれる。

孔子は世界の四大聖人の一人である。さぞかしエリート学者の家に生まれ、輝やかしい聖人君子の生涯を送った道徳家のように思われる。しかしその一生を眺めてみると、必ずしもそうではない。孔子は学者でも道徳家でもなく、「徳のある政治」「仁の政治」をこの世に実現しようと精進した政治家だった。その精進の結果、高い品性と、人間としての大きな器に達したのである。

孔子は紀元前五五二年に中国の魯の国（現在の山東省曲阜）に、当時の下層階級に生まれた。父と早く死別し、異母兄姉が多かったので、若い頃からどんな仕事でも一生懸命に働いた。孔子は六尺三寸（百九十センチメートル）の強靭で巨大な身体と、明晰な頭脳とを持っていたので、仕事のかたわら文字を読み、学問にもはげんだ。

孔子は成長するにつれて仕事もふえ、生活も楽になっていったが、そのまま社会の下層に埋れている人間ではなかった。当時、社会の下層から上層へ昇ることはできなかったが、学問が唯一例外の道であった。孔子が、

（われ十有五にして学に志す）

と晩年に述懐しているのは、この頃の心境である。したがって学に志すというのは、たんに学問の目覚めたというのではなく、

（学問によって世に出ていこう）

という青春の固い決意なのであった。

すると十七歳のとき、絶好のチャンスがやってきた。魯の国で一番権力者である季孫氏が、人材登用のための宴を開いた。孔子もよろこび勇んで出掛けていった。しかし受付係をしていた季孫氏の家老の陽虎から、

「お前のような小僧っ子に用はない」

と追い返されてしまった。この屈辱は孔子の中に強い記憶として残り、終生陽虎への増悪となった。青春の野望にもえる孔子の人間らしい姿が、ここに見える。

孔子は十九歳のとき結婚し、二十代の後半には、委吏という穀物倉を管理する村役人に採用され、その後さらに牛を飼育する司職吏に栄転した。しかし、孔子はこの程度の下級役人に甘んじてはいなかった。上級役人へ登らなくてはならない。唯一の武器は学問である。そこで孔子は弟子を集めて塾を開いた。三十にして立ったのである。弟子の中には魯の国の権力者である孟孫氏の息子が二人も入門してきたりして、塾は栄え、孔子の名声は学問の世界で次第に高くなっていった。

すると孔子が三十五歳のとき、魯の国で大事件が起った。魯の国の君主は二十四代の昭公であったが、政治の実権は三人の家老、すなわち季孫氏、孟孫氏、叔孫氏という、いわゆる三桓に奪われていた。そこで昭公は権力奪還の挙に出たのである。最初のうちは戦に勝っていたが、しかし三桓の力には勝てず、昭公は命からがら隣国の斉の国へ亡命した。このため魯の国では七年間、君主不在という異常事態がつづき、ますます三桓の専横がつづいていった。

君主が亡命するような貴族たちの醜い権力闘争に絶望した孔子は、昭公の後を追うように、斉の国へ向った。斉の国の君主は景公といい、景公は孔子を気に入って、

高い地位に召しかかえようとした。しかし孔子の「仁の政治」は、理想論すぎて現実性がないという、宰相の晏嬰の反対によって実現しなかった。

孔子は魯の国へ戻った。すると孔子四十二歳のとき、定公が二十五代の君主となり、魯の国の君主不在は解決された。しかし三桓が実権を握っている点に変りなかった。

すると今度はその三桓の中で異変（下剋上）が起きたのである。季孫氏の家老の陽虎が次第に権力を握ってお家乗取りを計画し、そのクーデターに孔子を誘いこんできたのである。なんとかして政治へ参加したいと思っていた孔子にとっては、絶好のチャンスといってよかった。しかし孔子はこれを断った。それは陽虎が、かつて十七歳の孔子が世に出ようとする出鼻をくじいた憎き男であると同時に、二人の政治の理念がまったく違っていたからだった。孔子の政治理念は「仁の政治」の実現であり、陽虎の目的は自己の権力の拡大である。

しかし陽虎は野望をあきらめず、配下の公山弗擾と手を組んでクーデターを起した。が、クーデターは失敗し、陽虎は晋の国へと逃亡した。こうして孔子は五十歳のとき、

（理想的な政治はあくまで仁徳による王道でなくてはならない）

という天命を更めて知るのであった。

そのような孔子のところへ、仕官のチャンスがやってきた。君主の定公が、三桓に握られている政権を取り戻そうと勢力の拡大をはかり、人材を集めるために孔子にも声がかかってきたのである。孔子は小司空というポストを経て、司寇という大臣並みの最高官位に就任した。異例のスピード出世であり、ついに孔子は夢がかなって、国政を預る閣僚、執政になったのである。孔子はさっそく、

（政治は財を節するにあり）

と減税を断行し、人民の好感を得た。

また国内の民政だけでなく外交面においても抜群の力を発揮して、君主の定公を助けた。定公が斉の国の君主の景公と、夾国で会談した時、孔子は見事な見識でこれを取りさばき、斉の国が仕掛けた罠に定公が陥るのを防いだ。孔子は外交についても力を持っており、斉の侵略から魯の国を守ったのである。

つづいて孔子は外交だけでなく、内政改革にも着手した。魯の国の政治は昔から世襲貴族の三桓によって牛耳られ、君主はないがしろにされていたが、その三桓の勢力を押えて、君主定公の権力回復に成功した。これまで誰も出来なかった政治改革を、はじめて孔子が成しとげたのである。孔子は知識人としてでなく、現実の政治家としても立派にその実績を挙げたわけであり、その名声は内外に高く鳴りひびき、魯の国での一番の実力者となった。孔子が五十六歳のときであり、孔子の人生のまさに絶頂期であった。こうして孔子は、

（君主が政治のトップにあり、その下に貴族が仕える）

という秩序正しい政治態勢を確立し、理想とする「仁の政治」を魯の国に展開することが出来た。孔子の執政によって魯の国の政治は安定し、国が繁栄してきたのである。すると隣国の斉の国がこれを喜ばず、

（なんとかして魯の国を叩きのめしてやらなくてはならない）

そこで斉の国は選り抜きの美女八十人を魯の国に送りこみ、色香と酒で魯の政治家を骨抜きした。君主の定公も三桓の当主たちもこの女色作戦におぼれて、国政を省みなくなってしまい、せっかく孔子が築いた善政も攪乱されてしまった。

失望した孔子は職を辞して、諸国遍歴の旅に出た。孔子が活躍できた期間は、わずか二年ほどにすぎなかった。

しかし、もしこの時孔子が権力への野望を持っていたならば、君主や三桓を追放して、孔子政権を作ることも出来たはずである。しかし孔子はそんな下剋上はしなかった。そんなことをしても、いっそう内乱が紛糾し、困るのは人民だけである。孔子の政治の目的は、自分が政権を握ることではなく、君主がトップに座った正しい秩序の中で、人民に仁政を行うことである。論語に、

「席正しからざれば、坐せず」（巻五第十郷党篇）

という言葉がある。孔子は座席の位置がまちがっていたら座らない。正しく直してから座ったというのであるが、この席は物理的な席だけでなく、人の道、政治の道のことも言っているのである。君主は君主の席に座り、家老は家老の席に座るべきで、家老が権力にまかせて君主の座を奪うような下剋上があってはならない。その代わり君主は君主らしく「仁の政治」を行わなくてはならないということである。

しかし、それが魯の国ではもはや出来なくなってしまった。しかし広い中国のどこかには、それが実現できる国があるはずである。その可能性を求めて孔子は魯の国を去り、求道の旅に出た。孔子はすでに五十六歳という老境にさしかかっていたが、孔子は何歳になろうとも、どんな困難があろうとも、それを乗り越えて理想の実現にむかっていく、実践の人間であった。

しかし時は戦国春秋、諸国は群雄割拠の権力闘争の明け暮れる時代である。いくら探しても孔子の仕官を受け入れるような国はどこにもなく、十四年の歳月が流れてしまった。

しかし孔子が仕官できなかったのは、「仁政を行う国」でなくては、仕官しなかったからである。孔子が妥協すれば、仕官できたにちがいない。しかし孔子は「仁」の精神を捨ててまでして、官途につくつもりはなかった。だから仕官できなかったというよりも、孔子の方から仕官しなかったのである。そこまで孔子の器は大きく、政治家としての品性が高かったのである。

その頃になると魯の国では、酒色におぼれた君主の定公が死亡して、その子の哀公が君主になり、孔子の弟子の冉有（ぜんゆう）が季孫氏の執事に就任するなどして、国政も定安してきた。

六十九歳になった孔子は十四年間の遍歴を終え、魯の国へ帰り、余生を弟子の教育に全力を傾けた。それは、

（仁の政治の実現は永遠の課題）

という使命感を孔子は持っていたからである。「仁の政治」は自分一人でやるのではない。現に各地で孔子の弟子たちが政治や経済の分野で活動していた。孔子一人でやるのではなく、いわゆる孔子集団がやるのである。

孔子集団は一見、学問集団のように見えるが、本質は政治集団なのである。弟子の中にはいろいろな種類の人間がいた。子路、子貢、顔回という三人の高弟を見ても、子路は武勇にすぐれ、孔子軍団のいわば国防大臣といえようか。子貢は商才に恵まれ、あちこちで商売で儲けて孔子軍団の経済面を支えた、財務大臣であった。学識にすぐれた顔回は孔子の後継者と目され、文部大臣というところか、若い冉有は魯の季孫氏に仕えて力量を発揮しており、孔子の代理というような存在でもあった。

孔子はそれらの大勢の弟子たちを、器の大きさですべて包みこみ、彼等の才能を伸し、彼等の才能を使ったのである。

また孔子が死んだ後も、弟子たちが孔子の「仁の理念」を引継いでいかなくてはならないのである。こう考えると、祖国に帰った孔子の仕事は、弟子の教育になるのだった。弟子の教育が老後の孔子の政治活動だった。

弟子の教育といっても、孔子の態度は

（自分は完成された君子であり、その君子が弟子を教育する）

というものではなかった。孔子とても未だ未完成である。弟子を教えると同時に、孔子も自らさらに学問にはげみ、仁徳にむかって精進したのである。そんなある日、孔子はしばらく周公旦の夢を見ないことに気づいた。

若い頃から孔子は、周や魯のルーツである名君の周公旦を敬愛し、一歩でも周公旦に近ずこうと精進し、そのため夢にまで周公旦を見た。それが最近周公旦の夢を見なくなったのは、自分の心がゆるんでいるからだ。

（これではいけない）

と、孔子は老身に鞭打って、さらなる精進へと自らを駆っていくのだった。

以上のように孔子の一生を眺めてくると、人間の品性の高さ、器の大きさというものは、生れつき持っているものというよりも、生き方の問題、一生涯いかに精進したかというものの中から、生れてくるものではないかと思われる。

品格とは、常に世の中をよくしよう、世の中のために尽そうという人間の志の高さ、すなわち「仁の精神」へむかって精進し、実践することによって生れてくるものである。

そして実践するにつれて、人間の器も大きくなっていく。先天的なものというよりも、精進による後天的なものといえよう。

（世の中のために尽そう）

（人民のための政治を行おう）

と志を高く持ち、それを実践する中から、品性も、器の大きさも、生まれてくる。

いくら権力の高みに登り、また巨満の富を得て人にばら撒いていても、その基本に「仁の精神」がなくては、品性があるとはいえず、また器が大きいとも言えないであろう。

「続ける」と「頑張る」の間で

新井宏

『まんじ』一七四号の「我が父・新井稔」を書いた時に、追記しようと思いながら忘れたことがある。

父が亡くなる直前の昭和六十二年十月、病床で私の妻に「来る人、来る人、頑張れ、頑張れ！と言う。……頑張れ、頑張れ！は聞き飽きた」と言ったと言う。率直な父らしい発言として今でも時々話題にしている。

『頑張らない人生』とか『頑張らない生き方』と名付けられた本が多数出ている。タイトルを拾い読みしただけでも、薦めている著者の意図や人生観が分かる。鬱（ウツ）の人に「頑張れは禁句」だとか、「頑張れ」は日本語特有な意味合いを持つとも書いてある。

そこで、インターネットの「グーグル翻訳」に「頑張れ」と入れて、各国語に翻訳し、その言葉を再度日本語に訳してみた。本来なら「頑張れ」と入れれば、それに近い言葉が返されるはずであるが、三十ヶ国語ほど調べて見ても一例も該当例がない。「頑張れ」はスポーツ等の応援に関連する用語なので、異例の回答となったのかも知れないと考え、次に普通動詞の「頑張る」を入れてみる。

そうすると半数近くに「頑張って下さい」との回答が戻ってきた。その他の例は「最善を尽くす」である。

「最善を尽くす」との回答を示した言語は、おそらく「頑張る」に該当する単語を持たなかったためと考えると了解できる。

その差を国家とか文化との関連を調べて見たら面白そうである。ただし、「グーグル翻訳」に登録された言語は二百七十種もあり、「言語名」と「使用地域」を対照するだけでも数時間かかる。

そこで、西欧・東欧および東洋の代表的な国家の公用語を選び、日本語の「頑張れ」と「頑張る」を入力して各国語に翻訳して、その後、各国の翻訳語を日本語に再翻訳してみた結果を表1に示す。

表1「グーグル翻訳」に「頑張れ」と「頑張る」を入れて、各国語に翻訳、その言葉を再度日本語に翻訳した結果

各国語	地域	「頑張れ」の再翻訳	「頑張る」の再翻訳
インドネシア語	東洋	良い仕事を続けて	頑張って下さい
マレー語	東洋	続く	頑張って下さい
ウイグル語	東洋	そのままにしておいて	頑張って下さい
ウルドー語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
クメール語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
サモア語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ジャワ語	東洋	平行	頑張って下さい
スワヒリ語	東洋	続く	頑張って下さい
タイ語	東洋	フォローし続けて下さい	頑張って下さい
ラオ語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
タミール語	東洋	そのままにしておいて	頑張って下さい
チベット語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ネパール語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ビルマ語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ヒンディー語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ベトナム語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
モンゴル語	東洋	続けて下さい	頑張って下さい
中国語	東洋	それを維持する	頑張って下さい
ダリー語	東洋	それを維持する	最善を尽くす
カザフ語	東洋	続く	最善を尽くす
エストニア語	東欧	良い仕事を続けて	頑張って下さい
クロアチア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
セルビア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ウクライナ語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ベラルーシ語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ロシア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
シレジア語	東欧	それを維持する	頑張って下さい
ラトビア語	東欧	だから続けて	最善を尽くす
リトアニア語	東欧	すぐに	最善を尽くす
ギリシャ語	東欧	それを維持する	最善を尽くす
スロバキア語	東欧	続けて	最善を尽くす
スロベニア語	東欧	続けて	最善を尽くす
チェコ語	東欧	ただ続けて下さい	最善を尽くす
ハンガリー語	東欧	続けて	最善を尽くす
フィンランド語	東欧	続けて	最善を尽くす
ブルガリア語	東欧	それを維持する	最善を尽くす
ルーマニア語	東欧	それを維持する	最善を尽くす
英語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
独語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
仏語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
イタリア語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
スペイン語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
ポルトガル語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
ベルギー語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
オランダ語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
デンマーク語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
ノルウェイ語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
スウェーデン語	西欧	それを維持する	最善を尽くす
タタール語	中東	保存する	最善を尽くす
トルクメン語	中東	保つ	最善を尽くす
ヘブライ語	中東	それを維持する	最善を尽くす
ペルシャ語	中東	続ける	最善を尽くす
ベンガル語	中東	それを保って下さい	最善を尽くす

「頑張る」の例をみると、任意に選んだ東洋の代表例では2件の例外（ダリー語、カザフ語）を除き全て「頑張って下さい」を返してきたのに、西欧の代表国では全て、「最善を尽くす」を返してきている。ダリー語はアフガニスタンやイスラムの公用語でアフガン・ペルシャ語と呼ばれ、カザフ語とも近い関係がある。

東欧・中東では両者が入り交じっている。どうやら、西欧諸国では「頑張る」に類似する単語がなく、東洋には「頑張る」に類似する単語が存在するというのが、回答のようである。

次に日本の「頑張る」と言う単語について調べてみる。まず漢和辞典をみると「頑」は「偏屈、拗けている、欲が深い、愚か、悪者」の意味を持ち、「張る」は「拡げる、強くする、盛んにする」の意味を持つとある。いずれにしても決して良い意味の語彙ではない。

次ぎに「漢和辞典」で熟語「頑張」を引いてみるが該

当項目がない。仕方がないので「古語辞典」を引くがそこにも該当項目がない。日本においても、江戸時代までは西欧と同様に「頑張る」という単語がなかったかも知れない状況なのである。言語学専攻でもないのに、踏み込み過ぎているが、取りあえず「試論」として掲げておく。

ちょっと脇道に入るが、人間の脳は左の言語脳と右の音楽脳に分かれていて、虫の音や鳥のさえずりを、母音系言語を話す日本人は左脳で言葉のように聞くのに対して、子音系言語を話す西洋人は右脳で雑音として聞くため無視して聞こえないのだと言う。あるいは「頑張る」という言葉にも西洋人には「虫の音」のように聞き取れない事でもあるのかも知れない。

さて、第1表によれば、「頑張る」という単語に「頑張って下さい」と同じ意味の単語を返す場合の他に「最善を尽くす」と異なった語で返す場合があるにもかかわらず、「頑張れ」という単語に各国語が返してきたのは「維持する、続ける」という共通の言葉である。したがって、凡世界レベルで言えば、「頑張る」は「続ける」の同意語と見なせるであろう。

それにしても「頑張る」と「続ける」では類似項もあるが、かなり異なる。極端に言えば「正反対」のイメージさえある。

そんな事で思うのは、私の一生を顧みると意外に「続けている」ことが多いのである。「続ける」が「頑張る」であるなら、我が人生まるで「頑張り屋」の優等生とでも言えそうである。しかし「継続は力なり」を「戦陣訓」だと思っていたので、「頑張る」と言う言葉と共に「続ける」にも抵抗感があった。「頑張る」の漢字語源を知ると、「続ける」には異なる理解がありそうである。

「続ける」なら自発的な「ゆっくり」という形容詞を付けて「ゆっくり続ける」としても調和するが、「頑張れ」には他者から強制されるイメージが強く、どこかで戦陣訓の「生きて虜囚の辱を受けず」を連想してしまう。

ところが「継続は力なり」を「戦陣訓」に確認してみると見つからない。「戦陣訓」にあるのは「信は力なり」であり、筆者の記憶はかなりいい加減であった。そこで「継続は力なり」の出典を調べて見る。

諸説あるらしいが、浄土宗の宗教家・住岡夜晃氏の『讃嘆の詩』で、

青年よ強くなれ、牛のごとく、象のごとく、強くなれ

真に強いとは、一道を生きぬくことである、性格の弱さを悲しむなかれ、性格の強さ必ずしも誇るに足らず、

「念願は人格を決定す　継続は力なり」とある。

「真に強いとは、生き抜くことであり、性格の強さは誇るにたりない」と「牛歩」のようなゆっくりした人生を薦めている。戦陣訓の「生きて虜囚の辱を受けず」とは正反対なのである。

人生も最終コースに入って見ると、「続ける」ことに拘っていた自分について、他者から「よく頑張った」といわれるかも知れないが自らは、「そんなことない」と感じるのである。

例えば、前号に書いたように『まんじ』に連続して百号二十五年間も無欠稿で連続掲載した事など、その例として良いかも知れない。また平成四年に「史遊会」に入会し、令和元年まで二十七年間も主力編集者を勤めたこともその部類であり、自分の意識としてはむしろ「牛歩」なのである。

そもそも、大学卒業時に日本金属工業に入社した時には、まさか定年まで勤めるとは思っても居なかったのに、終わってみれば、四十三年間も勤めあげていた。途中に、魅力的な転職の機会が無かったわけでもないので、性格弱さがあったからであろうか。

他にも、万歩計との格闘もある。平成五年十一月に始め、現在もなお続けているので、これも三十二年目である。その間詳細な記録を保存しているので、

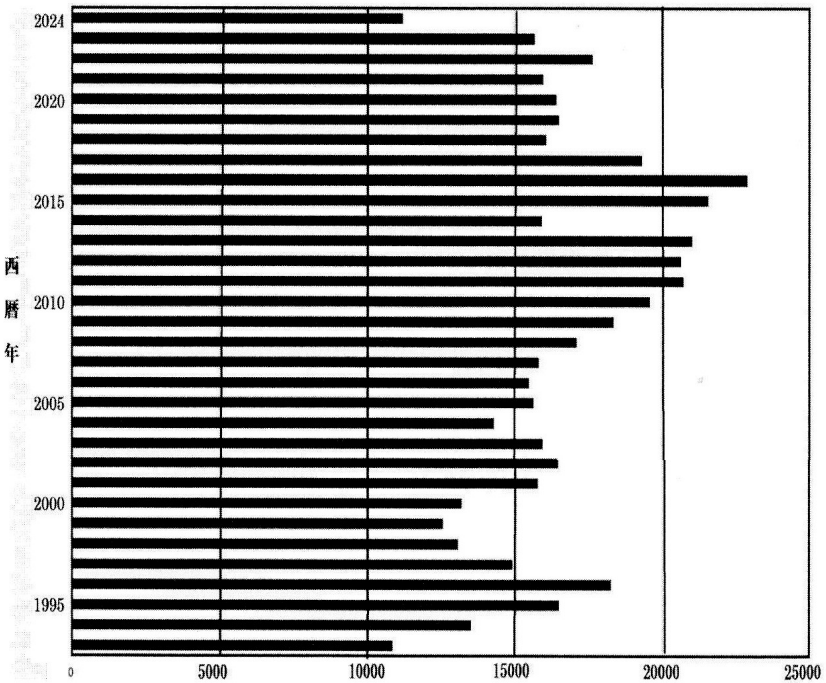


図1　年別万歩計平均歩数実績(歩／日)

図1に紹介する。

この「万歩計」のスタートは会社で健康増進のために

「万歩」運動を始めたことであるが、職場の長として、格好を付けていたが、当初はやっと「一万歩」であったのが二年後の平成七年には「一万五千歩」を越え、更には平成二十三年には「二万歩」、そして平成二十八年には「二万三千歩を達成し、以降は下り坂ながら、昨年の令和五年までは「一万五千歩」を維持していた。しかし今年に入って一気に体力が落ち、「万歩」維持がやっとである。それでも毎日歩き続けている。

他人から見れば馬鹿げた行為に見えるであろうが、いまや「健康対策」を越えて、「お念仏」か「おまじない」の境遇なのである。もしここで「万歩」を放念したら、血糖値や高血圧対策も「薬」に頼るしかなく、一気に健康崩壊となるような恐怖感さえある。

同様なことが、手を広げた「金属考古学」や「古代計量史」の研究にもある。今も論文誌『鉄と鋼』を発行する日本鉄鋼協会会員であり、六十二年間も続けて在籍しているのは一万人の学会員の内でもごく少数であろう。もっとも現役時代は金属物理学の研究であり、卒業後は同会の「社会鉄鋼部会」で「たたら製鉄」など「金属物理学」の分野を研究していて「二刀流」と言えないこともない。

ついでながら、『まんじ』一六八号に紹介した刀匠久保善博氏のことについても追記しておきたいことがある。

久保氏は『鉄と鋼』に対し十年間にわたって論文再審査請求を続けていた。一言で言えば、十年間にわたり、「たたら製鉄」に関する論文を『鉄と鋼』に投稿し続けて来たが毎回「不採用」の判定で、久保氏は鉄鋼協会の「考古学部会」の座長を務める板谷宏氏に何とか成らないかと相談したが、動いてもらえなかった。ただ、その時に板谷氏から「新井先生に相談してみたら」と助言されたという。

久保氏は板谷氏も動いてくれなかったことで、いったんは諦めたが、二年後になって意を決し、メールで私の助力を求めてきた。

その後の経過は、一六八号に交換メールを公開することで示したが、最初は「査読者意見」に対する筆者の痛烈な反論を書いた。その内容を久保氏の論文に追記しても良いし、場合によっては、筆者の記名入りの見解書をそのまま添付しても良いと伝えた。その見解書には、もし再審査を行わない場合には、「鉄鋼協会」の不名誉になるだろうとの「脅かし」まで付けておいた。

久保氏は自らの論文を数点補強したが、それでも不安で筆者の見解書を直接添付する「非常手段」を選んだ。

その効果はてき面であった。半月ほどすると「鉄鋼協会」から新投稿としてなら審査に応じるとの返事が入った。そして「旧稿」とほぼ同じ内容の「新稿」が無事に合格し掲載されたのである。

丁度その頃、久保氏は「令和の名刀・名工展」の作刀の部で「大賞」に輝き、次世代の「人間国宝」の最有力

者にもノミネートされた。二重の栄誉であり喜びであった。ここまでは既に一六八号にその詳細を紹介している。

ところが、つい一ヶ月ほど前に、久保氏の論文「たたら製鉄の銑生成におよぼす砂鉄中 TiO_2 濃度の影響」が『鉄と鋼』の「俵論文賞」に選定されたのである。日本の鉄鋼業発展の最大の功労者である東大教授俵国一先生を記念する「俵論文賞」は、鉄鋼協会でも第一等の論文賞である。しかも数名の共著論文ではなく久保氏の単著論文であり、論文の評価が如何に高かったか想像できるであろう。その論文の謝辞の欄に私の名前が載っている。私まで受賞したくらいに嬉しくなった。

久保氏にはお祝いのメールにつけて、大学教授でもなかなか受賞できない「俵論文賞」を受賞したからには、ぜひ住まいに近い広島大学とか岡山大学で客員教授にでもなるようにと薦めておいた。

「鉄鋼協会」ほどではないが、会員歴を二十五年以上続けている学会に、日本考古学会、情報考古学会、計量史学会、たたら研究会、朝鮮学会、古代学研究会、古代史の海などがある。

また「続ける」とは若干異なるかも知れないが、私にはデータを集め続ける習性がある。格好良くいえば、データベースを数多く作っているのである。いずれも研究の基礎段階に関連資料を徹底的に集めるので、その後、惰性もあって関連資料を集め続けている内に、ちょっとした研究所並みのデータベースに成長したものもある。代表的なケースを示すと次のようなものがある。

① 古代製鉄関係の鉱石、滓、遺物、炉材等の成分データベース
② 古代非鉄金属関係のデータベース
③ 青銅器関係の鉛同位体比データベース
④ 世界各地の鉄、貴金属、非金属の価格、穀物価との比較
⑤ 炭素十四年代データベース
⑥ 古代遺跡や古墳図面や計測値のデータベース
⑦ 年輪年代資料データベース
⑧ 金属比価統計

これらはいずれも筆者のホームページに公開しているが、時折内容についての質問が入る。

この中で密かに誇っているのが、④の世界各地の古代金属価の穀物価との比較である。意外に一覧性のある形で示されている例が見つからない。データの載っていそうな論文のコピーを随分集めてあるが、整理が遅々として進まない。その一部は学会にも報告し、暫定的な収拾結果は筆者のホームページに示しているが、対象の地域や時期が異なっても、比価のバラツキは数倍以内に納まっている場合が非常に多いのである。

ついでながら、筆者のホームページには、『まんじ』七五号から最新号（一七四号）までを完全収録している。

住まいの関係でまんじ定例合評会に出席されていない「明治時代の著作者渋江保の足跡を訪ねて」等の著者山本勉氏や「人事部長首切り姫」等の著者匠克仁氏作品は、掲載の冒頭作品から順番に読むと、読み終わる前に合評会が来てしまうことも多かったので、最近は「斜め読み」であるが巻末から逆に読んでいる。二氏の作品には『まんじ』掲載としては異色なものが多いが、異色なだけに示唆されることも多い。

また「史遊会」の『史遊会通信』についても一七一号から二七〇号までを私のホーム頁に掲載している。

私の人生を顧みると、進学、就職、結婚、趣味、老後の人生の岐路に際して、「全て」を自分で決めている。いま思うと「小さな事」でも例外がないようなのである。親が構ってくれなかった所為かもしれないが、よほど「他人の干渉」を嫌っていたのかも知れない。

だから自分できめた人生なので長く「続く」ことが多いのであろう。それが「継続は力なり」につながる。「頑張れ、頑張れ」に不満がある訳でもないが、どこかに馴染めないのは、そんなことかも知れない。

『まんじ』もいま岐路に差し掛かっている。長い時間をかけて、先輩達が築き上げてきた同人誌であり、私の人生でも最も長くお世話になっていながら、一度も「幹事役」を勤めた事が無い。それは、『まんじ』が自分の会ではなく、「協和銀行」同窓誌であり、そこに参加させて頂いているとの意識からである。だからこれからも「続けよう」とも「頑張ろう」とも言うまい。これからも自然体で私の役割を「続ける」ことに努力したい。

ここまで書いて、蛇足を付け加えたい。

「頑張る」は人生の成長期の用語、「続ける」は人生の終息期の用語だと思う。

もう三十年以上まえになるが、朝日新聞で、古典中国文学者、九州大学名誉教授、日本学士院会員の目加田誠先生のエッセイを読んだ。大意は九十歳近くなった目加田先生が心がけているのは、先端的な研究は若い研究者に任せ、膨大な資料をこつこつ読んで、その中から何か若い研究者へ伝える資料を見出すのが老齢の研究者としての役割だと述べていたことである。

どこかで自分もそう有りたいと思っていたことが、今回のエッセイに繋がっていると思う。先生は明治三十七年生まれで、平成六年九十歳で亡くなられた。

イェイツ詩集を読む

岩上和道

岩波文庫版の「対訳　イェイツ詩集」（高松雄一編）の表紙にはこう書いてある。

「イェイツ（1865-1939）は、アングロ・アイリッシュのプロテスタントとしてアイルランド文芸復興に携わった特異な詩人であり劇作家であった。変貌し続けたその詩は、芸術至上主義、象徴主義、オカルティズム、アイルランドの民族意識と神話伝説等々の複合体とでも言うほかはない。」

このノーベル文学賞作家（1923年に受賞）でもある、アイルランドの詩人W.B.イェイツの詩は、何人かの世界的に有名な作家、アーティストに大きな影響を与えている。そこで、本稿「イェイツ詩集を読む」では、現代に至るまでも、こうした著名な芸術家を魅了するイェイツという詩人のことを少し考えてみたいと思う。

W.B.イェイツ、正式な名前はWilliam Butler Yeatsという。元々アイルランドはカソリックの国なのだが、彼の一家は、イングランドから来た家族の末裔で、そのため、彼自身も宗教としてはプロテスタントであった。しかし、イェイツはアイルランドの民族意識の高揚を支援し、またその文芸復興にも尽力した。ここでは、イェイツの評伝を書こうというのではないので、その生涯を詳述するつもりはないが、（本当はその生涯もなかなか面白そうなのだが、それはまたの機会に）まずは彼の詩が大きく影を落とす三つの作品を取り上げたい。

その1　「動揺」"Vacillation"（1932年作）と大江健三郎

僕は最近「銀鼠髪のオデュッセウス」（コールサック

社）という小説を上梓した。この本は、ひとことで言ってしまえば、アイルランドの作家、ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」という作品に示唆され、そのオマージュのようなものとして書いたものだ。ジョイスのいわば先輩の文学者として、イェイツはジョイスの理解者であり、助言者でもあった。しかし、生意気なジョイスは、あんたはもう過去の人だというような態度でイェイツに接したとも聞く。もっとも、イェイツがノーベル文学賞を受賞したという知らせに一番最初に祝電を送ってきたのもジェイムズ・ジョイスだったのだが。

私の本「銀鼠髪のオデュッセウス」には二つの作品が入っているが、冒頭に短編として入れた「スカボローで、パセリ、セージ、ローズマリーとタイム」という話にはイェイツの詩が登場する。といっても、それは間接的に語られる。大江健三郎の「燃えあがる緑の木」という作品のことが登場人物たちの会話として語られる。大江自身がノーベル文学賞を取った直接の契機になったといわれる物語だ。（大江のノーベル賞受賞は1994年）ここでは、その内容にはあまり深くは触れない。焦点は、「燃えあがる緑の木」というタイトルだ。これはイェイツの詩から取られている。イェイツの詩、"Vacillation"（1932年）は、Ⅰから Ⅷまでの13章からなるが、そのうちのⅡにその元になる部分がある。

「一本の木がある。いちばん高い枝からの半分が煌煌と燃え盛る火炎、あとの半分は緑につつまれて、しっとりと露に濡れた葉むらが生い繁っている。半分は半分だが、それでいて全景でもある。」（高松雄一編、岩波文庫）これは脚注によると、中世ウェールズ騎士物語集「マビノギオン」にほとんど同様の、川岸に燃える木がそびえていて、半分が炎に包まれ、半分が緑の葉むらが生い繁った木があると。つまりウェールズの伝説に根差すものらしい。大江健三郎の「燃えあがる緑の木」では、それは彼の故郷でもある四国の森の中で、新しい信仰集団の象徴として、教会の名前になっている。大江は言う。「『燃えあがる緑の木』という総タイトル（総タイトルとあるのは、この作品が三部作でそれぞれに別なタイトルが付いているため、全体のタイトルという意味だ）はイェイツの詩の引用です。燃えている方は精神、ぬれる緑の葉は肉体。ほかにも偶然と必然、歴史と現在、一瞬と永遠など、ある矛盾したものが共存しているのが人間であり、世界である。その象徴として一本の木を彼（注：イェイツ）はイメージした。」元々のイェイツの詩の題は「動揺」"Vacillation"である。ヴァシレーションは「動揺」と訳されているが、アンビバレントに揺れ動く気持ちという意味で使っているということだ。二律背反する精神と肉体の動揺を表現したかったということだろう。

小説としての「燃えあがる緑の木」はどのような話なのかを少し書いておきたい。物語は四国の森の中で起こる。「万延元年のフットボール」を想起するかもしれない。大江の故郷が舞台となる。主人公サッチャンは両性具有の男性であり、性転換手術によって女性になっている。長老の女性オーバーが死ぬ前に、自分の後継者として、新しい「ギー兄さん」を指名する。「ギー兄さん」は、簡単に言えば「救い主」だ。手をかざして治療することによって病を治癒させて命を吹き込むいわば救世主となる。サッチャンは、ギー兄さんの身の回りの世話をしているサポーターでもある。しかし、周囲の人々はギー兄さんの治療はまやかしであると思いギー兄さんは襲われて大怪我をする。ここでは、この長編小説を解説することが趣旨ではないので、以下は省略するが、ともかく救世主であるギー兄さんは結果として、教祖になるわけでもなく、奇跡を起こせるわけでもなく、癌患者のカジを救えるわけでもなく、教会をまとめられるわけでもない。ギー兄さんは、本当に魂の救済を求める者は、自分で救い主を見つけることだと説く。自分自身は、いわば中継ぎピッチャーにすぎないという。

僕はこのイェイツの「動揺」を読み、大江の小説を読み、それを自分の短編で少し取り上げてみようと考えた。「スカボローで、パセリ、セージ、ローズマリーとタイム」という短編は、1960年製の英国スポーツカー、オースチン・ヒーリー・スプライトをあたかも英国人女性に見立て、彼女と主人公の会話をストーリーとした。タイトルは、ご存じのかたもいるだろうが、サイモンとガーファンクルの「スカボロー・フェア」（スカボローの市）という歌から取られている。スカボローは英国北東部の港町で、ポール・サイモンは、イングランドの古いバラッドを自分なりの解釈でフォークソングにしたマーティン・カーシーから楽曲を買い取って自分たちのアルバムに入れた。主旋律とカウンターメロディーが美しく交錯する、僕の大好きな曲だ。

それはともかく、僕は自分の小説では、主人公とその高校以来の友人との友情と恋人を巡る三角関係をテーマに、二箇所で大江の「燃えあがる緑の木」に登場する癌患者である少年「カジ」の話を使った。まずは、主人公と元カノとの会話。これは彼女の母親が亡くなって弔問に行った際の会話。そして二つ目は、主人公のライバルである友人が難病で入院した場面でも大江の「燃えあがる緑の木」の話を二人にさせた。カジという少年が不治の癌で弱っていくところを、ギー兄さんは手をかざすことで治療しようとする。しかし、一見治癒したと思えた癌は再び盛り返してきてカジは死ぬ。それが背景になっ

ている。もっとも、僕の小説には「燃えあがる緑の木」の詳しい内容や背景は書いていないので、読者からみると、大江を読んでないとわからないかもしれない。カジは、ギー兄さんに、自分がこの世界から消えてしまった時を思うと怖いという。それに対してギー兄さんは、永遠を生きる人がいたとしても、その人ですら、永遠の一歩手前で死ぬ。だから、一瞬よりはいくらか長く生きていると思えば怖くはないと教える。なかなかわかりにくい論理なのだが、大江は救世主としてのギー兄さんにそう言わせている。僕は、元カノの母親の死も、高校の友人で彼女を争ったライバルの死の床も同じようにこの場面を使った。これはイェイツの詩に置き換えるとどうなるのだろうか?両極端の間に揺れ動くものという解釈であれば、このカジの場合は、精神は永遠の宇宙のように生き続けるものであり、肉体は間もなく滅びて死を迎えるものということになろう。イェイツの「動揺」の冒頭、I章はこう始まる。

I

人は二つの極のあいだにいて
おのれの道を走る。
炬火（たいまつ）が、火を吐く息が
現れて、昼と夜の
あの背反を

ことごとく抹殺する。
肉体はこれを死と呼び、
心はこれを悔恨と言う。
だがそれが正しければ、
歓びとは何だ?（岩波文庫、高松雄一訳）

Ⅶ章には以下のような魂と心の会話が出てくる。

Ⅶ

魂　実体を見つけ出せ。上っ面だけのものは放っておけ。
心　なに、生まれながらの歌うたいに主題を
　　捨てろというのか?
魂　イザヤ書の炭火だ。人間にそれ以上の何が望める?
心　火の純一性にとらわれて唖者となるのか!
魂　あの火を見ろ。あのなかを救済が歩いている。
心　ホメロスには原罪のほかにどんな主題が
　　あった?（同上）

魂は、原文ではThe Soulだ。心は、同じくThe Heartだ。「燃えあがる緑の木」でいえば、魂が精神で、燃え上がっている炎。心が肉体＝実体、緑の葉なのかと思う。しかし、ここでは、主に精神と肉体というアンビバレントな相反するものを同時に持つものという点にだけ注目しているが、実際のイェイツの詩はもっと複雑な様相を呈している。「動揺」はかなり長い詩であり、それを全文掲出するのはあまりに長いので残念ながらここでは割愛するが、人生をどん欲に生きることに始まり、一方で五十歳という年齢に達して、ロンドンの街中のカフェで一人孤独を味わったり、季節の変転の中で人生を見つめ直したり、「万物をして過ぎ去らしめよ」Let all things pass away.というある種の諦念であり、絶望のようにも感じられる句が何度か出てきたりする。大江健三郎が惹かれたところは、確かに人間の本質的な矛盾の部分であると思うが、本来はより深い考察が必要だと考える。ともかくも大江健三郎という日本人のひとりの小説家がノーベル文学賞を取ったことを象徴する詩であることは間違いない。

この項の最後に一応大江の「燃えあがる緑の木」の話の結末を書いておこう。第一部「『救い主』が殴られるまで」は、おおよそのことを前段で書いた。第二部は文字通り「揺れ動く（ヴァシレーション）」というサブタイトルが付いている。森の住民たちは引き続きギー兄さんを攻撃する。しかし、賛同者たちが現れる。亀井さん、ザッカリー・K・高安（「レインツリー」でも登場するアメリカ人）、伊能三兄弟などという人々がギー兄さんのサポーターになり、教会を形にしていく。さらにはギー兄さんの父親である、「総領事」。しかし、大事な説教の場で、ギー兄さんは何もしゃべれず、サッチャンは失望して離反する。

第三部は、「大いなる日に」というサブタイトルだ。サッチャンは作家のK叔父（大江のイメージが強い）の伊豆の別荘でセックスに溺れる。教団は増殖していき、様々な権力闘争というか軋轢が起きて教会は緊張が高まる。しかし、ギー兄さんは、自分自身は「救い主」ではないと言い放ち、救い主とはそれぞれの人が自分で繋がるものだと説く。一方で、前のギー兄さん（今の「ギー兄さん」は二代目だ）との関りがある、大檜の木をギー兄さんとサッチャンは共同で燃やす。ここはイェイツの「動揺」つまり「燃えあがる緑の木」のイメージが濃いと思う。そして、二人は結ばれる。サッチャンはギー兄さんの子供を妊娠する。（サッチャンは両性具有なので元々は男であるが、妊娠する能力がある）ギー兄さんは巡礼と称する一団に加わるが、新左翼の襲撃を受けて殺される。教団は解散し、皆はそれぞれに救い主と繋がり、一滴の水のように地面に沁み込むことを目指す。極めて雑駁に書けばこのような話である。

ここで少し脱線するが、さらなる波及をコメントしてみる。

大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したのは1994年。

この「燃えあがる緑の木」の第三部が上梓されたのは、1995年3月のことだ。（第一部は1993年9月に出版されている）一方で、オウム真理教による「地下鉄サリン事件」が起こったのは1995年3月20日。正確に大江の第三部が出版された日（店頭に並んだ日）はわからないが、極めて近い日付であったと思われる。当時、サリン事件を予見した小説と言われたのも理解できる。村上春樹の小説「1Q84」も似た主題を扱っているとも言える。（「1Q84」というタイトルはもちろん、ジョージ・オーウェルの「1984」から取られていることは明白だが、9ではなくQとなっているのはいわば「1984」のパラレルワールドという意味だと思う）こちらは、2009年の5月29日にBOOK1と2が出た。僕もすぐに買った覚えがある。そして、2010年4月16日にBOOK3が出て完結している。村上春樹は当時、この小説が「オウム真理教」による「地下鉄サリン事件」に影響を受けていることは明言していたと記憶する。（ほかにも1995年の阪神・淡路大震災と2001年の9.11事件も言及されている）が、ともかく「1Q84」には謎の「さきがけ」という新興宗教集団とそのリーダーが出てくる。これは僕の個人的な見解だが、村上春樹は多分結構熱烈な大江健三郎の読者なのではないかと思う。そうした発言や、文章は見たことがないが、彼の作品は明らかに大江の隠れた影響下にあると僕は確信している。

その2．幸福な羊飼いの歌　"The Song of the Happy Shepherd"（1885年作）とフィリップ・K・ディック

この「幸福な羊飼いの歌」は、大江とはまた別な意味でとてもよく知られていると思う。イェイツが1885年という最も初期に書いた詩であるが、それよりもこれを有名にしたのは、あの映画「ブレード・ランナー」"Blade Runner"の原作、フィリップ・K・ディック Philip K. Dick のSF小説「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」"Do Androids Dream of Electric Sheep"の冒頭に引用されていることだろう。

ここで少し余談です。

英語が原語である小説や詩を論じるときに一つ面倒なことは、翻訳の問題だ。翻訳は難しい。意を通じるだけではなく、原作者の想い、意図、話口調など微妙なニュアンスが人によって違ってくる。僕は、英語はある程度は読めるし理解できる。かなり多くの日本人もそうだろう。しかし、ロシア語、フランス語、中国語などはほとんど理解できない。でも、それはそれでよくて、例えばドストエフスキーを読むときは翻訳の質に関してはほとんど気にならない。日本語として意味が理解できないこ

とも時にはあるが、まあ、ともかく「カラマーゾフの兄弟」はおおよそこういう話なのだと理解する点では翻訳の質はあまり気にしない。他に読む方法がないのだから仕方ない。ところが、英語は、なまじ少しは理解できるがために面倒なことになる。例えばジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」を英語で読むと大変理解しにくいし、いちいち英語の意味を調べなくてはならなくなる。僕の場合はしかたないので、丸谷才一さんほかの集英社版の訳を読んで、また別に柳瀬尚紀氏の訳（河出書房新社）も読んでみるということになる。（柳瀬訳は残念ながら未完だが）さらに、伊藤整、永松定訳（1955年）も新潮社の現代世界文學全集の10巻のオリジナルが手に入り、読んだりしてみた。1955年に「ユリシーズ」をこのクオリティで訳したのは驚くべきことだと思い、かつ冒頭の伊藤整による解説と梗概にも感動した。ともかく、翻訳のことは最近とみに気になるのでいずれきちんと論じてみたい。特に、ご存じのkindleというデジタル書籍が英英辞典に連動していること、また最近はやりの、ChatGPTによる翻訳のことはなかなか面白いテーマだと思う。

閑話休題。

まずは、早川書房版の「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」を見てみよう。この本の冒頭のイェイツの「幸福な羊飼いの歌」の引用は以下のように訳されている。（朝倉久志訳）

そしてわたしはいまも夢見るのだ、
牧羊神のおぼろ影が、
わたしの歓びの歌につらぬかれ、
露に濡れた草の上を歩んでゆくのを。

これが、岩波文庫のイェイツ詩集（高松雄一訳）の同じ個所では以下のように翻訳されている。

だが私は今でも夢に見る、あれが芝生を、
露を踏んで、影のように歩む姿を、
私の歓びの歌に、…心おののかせながら。

そして、次に原文のイェイツの英語だ、

And still I dream he treads the lawn,
Walking ghostly in the dew.
Pierced by my glad singing through.

こうして翻訳と原文を比較すると、なかなか興味深い。英語の原文でheとあるのは、少し前の行の"faun"、つまり牧羊神のことだ。ここだけを抽出した、「アンドロ

イドは電気羊の夢を見るか?」の訳は、「彼」（高松訳では「あれ」）とは訳せないので、きちんとわかるように「牧羊神」としている。こういうところが、結構印象が変わると思う。わかりやすさで言えば、朝倉久志訳のほうが優れていると思う。

それはともかく、フィリップ・K・ディックの「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」は、1968年に出版されている。この小説を解説することは概要にとどめるが、第三次世界戦争の結果、自然が荒廃した世界。そこでは、生物が放射能の影響で激減して、大変に貴重な存在になっている。人間の一部はすでに他の惑星に移住し始めていて、残った地球上の人間の一番のステイタスは生きている本物の動物（生物）を飼っていることだ。そして、本物の生き物が買えない人たちは、その代わりに本物そっくりに出来た、電気仕掛けのロボット生物を飼うことになる。そうした世界で労働用に造られた人間とそっくりなアンドロイドたちは次第に進化して人間と同じような心を持つようになり、人間に反抗し始める。サンフランシスコ市警のデッカード警部（映画「ブレード・ランナー」ではハリソン・フォード）は、そうした、反乱アンドロイドを処理するバウンティ・ハンターだ。彼もお金がないので、本物の生物は飼えずに、電気仕掛けの羊を飼っている。そこからは詳細は省くが、デッカードが地球に逃げてきた8人のアンドロイドを処理（レーザー銃で殺すこと）していく話が展開される。

この作品は、1982年に「ブレード・ランナー」というタイトルで映画化された際に、焦点をほとんど、アンドロイドを処理するバウンティ・ハンターのことに集中して描いている。（ちなみに原作者のフィリップ・K・ディックは1982年の3月に亡くなっていて、完成した映画を見ることが出来なかった）しかし、フィリップ・K・ディックの真意は、それが人間なのか処理されるべきアンドロイドなのかではなく、人間であれ、アンドロイドであれ、どれだけ親切であるか、優しい気持ちを持っているか、なのだと言っている。そうした側面で見ると、バウンティ・ハンター（賞金稼ぎ）たちの活劇部分ではなく、もう一つの主題として出てくる、少し知能の足りないイジドアという取り残された人間のことが凄く重要になる。これは小説のほうだけに出てくる話だ。（片鱗は映画にもあるが）

イジドアは、知能が少し足りないために、地球外への移住対象者になれず、地球で電気仕掛けのロボット生物の保守点検会社のトラック運転手をしている。心根は優しくとても人間的で、生き物を大切に思っている。もちろん人間だ。彼はほとんど廃屋となった、かつての大規

模集合住宅に一人で住んでいるが、そこに逃亡アンドロイドが逃げてくる。その一人の女性アンドロイドと知り合い、彼はたとえ彼女が人間でなくても、久々に会った人として自分の部屋に招き入れてワインと食事で歓待しようとする。イジドアはたまたま本物の蜘蛛を見つける。本物の蜘蛛は貴重で高く売れると思い、その蜘蛛を瓶に入れて戻ると、女性アンドロイドは、なぜ蜘蛛は8本も足があるのか、半分で良いじゃないと言って4本の足を切ってしまう。イジドアは心底悲しみにくれる。そうしたなか、デッカード警部がアンドロイドたちの隠れているイジドアのアパートを探し出し、処理に現れる。というような展開で、ともかくイジドアは、知能は劣るが人間としての心をきちんと持っている人間として描かれる。

それらのことを念頭において、冒頭のイェイツの詩の引用によって作者フィリップ・K・ディックが何を言おうとしているのかと考える。この引用部分をもう一度見てみよう。（ここでは、早川書房の朝倉訳を使う）

「そしてわたしはいまも夢見るのだ、
牧羊神のおぼろ影が、
わたしの歓びの歌につらぬかれ、
露に濡れた草の上を歩んでゆくのを。」

牧羊神 faun はファウヌスとも呼ばれるが、古代ローマあるいはギリシア神話で、自然、野生、欲望、創造的エネルギーを象徴する。姿は半分人間、半分ヤギで自然を司る精霊だ。森、野原などに住む存在で、自然と調和した自由な生活を送る理想を具現化するとある。本能的な欲望、性、繁殖なども象徴している。いたずら好きで、時には人間にいたずらを仕掛けることもあるという。人間の本能や欲望、自由な精神をポジティブに捉える存在でもある。

この部分の少し前の行には、

「眠たげな土の下に埋められた
哀れなファウヌスを喜ばせてやろう。
あれが嬉し気げに叫んで遊んだ日々は終わった。」

という文章がある。（岩波文庫、高松訳）

つまり、イェイツがこの詩で語る世界はもうファウヌスが死んでしまっている。人間と自然の自由で調和された関係は失われた世界を歌っていると考えられる。そこまで言えば、フィリップ・K・ディックがイェイツの詩のこの部分を引用したのは、人間性が失われた世界で、逆に人間性を持つようになったアンドロイドへの想い、あるいは、イジドアに象徴される、いわば人間としての

落後者、落ちこぼれの中にこそ、失われつつある人間性、ヒューマニティがあることを強調したかったのではないかと思える。僕自身は、実はフィリップ・K・ディックの「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」は長らく読まずに、映画の「ブレード・ランナー」のファンだった。映画の監督であるリドリー・スコットの魔法というか、彼の描く未来のロス・アンジェルス。そこは東洋風のSF世界で、雨がずっと降り続く。そこに、デッカード警部＝ハリソン・フォードが出てくるわけで、すっかり映画の虜になってしまい、そこで満足していた。しかし、やはり、原作の方がはるかに素晴らしい作品だと言うことを最近になって気付いた。すぐれた原作の力は映画の比ではないのだ。

次回は、アメリカのシンガー・ソング・ライター、ジョニ・ミッチェルの歌と、さらにはイェイツの好んだアイルランドの幽霊譚などのことを書いてみたい。

次回に続く to be continued

Meguro, Tokyo Dec. 17, 2024

大興安嶺紀行

井出晃憲

はじめに

私は学者一家の堅苦しい実家に身を置くことを嫌い、高校卒業後は東京を離れて京都大学に進学した。在学中は探検部に所属して自然に触れたり世界各地の諸民族の土地を歩いたりしてきた。卒業後は、NGOのスタッフや大学、博物館等の教員を務めたが、常に現場での実践が大切だと考え、自分がフィールドとするユーラシア大陸各地に多くの足跡を残してきた。

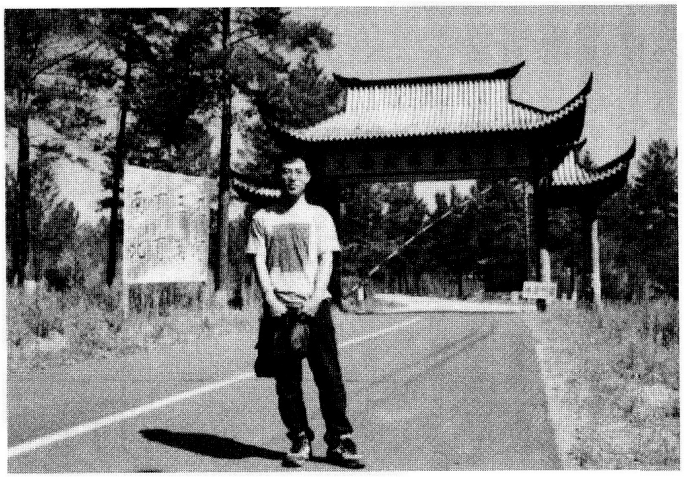
以下の紀行は2005年8月に中国黒龍江省および内モンゴル自治区を旅した時のものである。当時私はNGO活動で知り合ったモンゴル族女性と結婚して北京で暮らし、中国社会科学院で教鞭を執っていた。その休暇を利用しての短い旅であった。その動機は、自分が将来にわたって中国に居住すると考え日中の関わりの歴史の一端に触れたいという思いと、自分もその最末端に連なる京大の探検的伝統の足跡を現場で垣間見たいという思いからであった。

(1) 漠河(モーホ)まで

今年8月に数日間、大興安嶺を旅した。それは、かつて1942年に同地を探検した京都大学の北部大興安嶺探検隊の探検記録を読んで触発されたからだ。その探検隊は学生を主体としたもので、当時、人跡未踏で〝白色地帯〟と言われ、軍の防御線の外側だった同地を辿った画期的な探検と云われる。ルートはハイラル近くのドラガチェンガ(三河鎮)から黒龍江に面した中国最北端の漠河までの800kmほどで、馬やトナカイを使い2ヶ月近くかけた行程だった。自分も京大の探検的伝統の最末

端に連なっているし、今その場所がどうなっているのかこの眼で確かめたいと思ったのが旅の動機だ。私の場合は探検の終着点だった漠河にまず行き、そこから南下する道を選んだ。

8月7日、チチハルから鈍行列車に乗り込んで一路北上した。市街を出ると一面トウモロコシとヒマワリの畑



漠河郷の入口にて（筆者）

が果てしなく続く。数時間走ると大地に起伏が見られるようになり山脈が近いことがわかる。南斜面にシラカンバやヤツなどが生えている以外は草原が広がっている。青空の下のこの森林ステップの景観は素晴らしい。探検記には公園的景観として描写されている。暗くなって夜遅く街の明かりが見えてきた。加格達奇（ジャグダチ）という場所だ。山中にしてはとても大きな街だ。探検記には、もしも交通機関が整備されれば大興安嶺は林業で栄えるだろうという予言が述べられている。実際に60～70年代から林業を中心に開発が進み、この辺りは大きく変貌したと聞く。

一夜明けると、車窓は鬱蒼とした森林の山脈に覆われていた。ところどころ停車する駅ごとに、真新しく整備された町並みが見られた。朝8時過ぎに漠河県駅に到着した。かつて棲林集（チーリンジ）と呼ばれ、探検記には入植者4戸からなる小さな集落でオロチョンの集合地でもあるとのこと。棲林とはオロチョンのことだという。現在はこの場所も木材の集積地の町となっている。ここから黒龍江沿いの漠河までは舗装された道があり、車で1時間半ほどで行ける。道の入口に検問所があった。国境地帯だからと察したが、これは火器の検査だった。煙草とライターは持ち込み厳禁だという。事前に運転手に促され急いで隠した。漠河までの途中に老溝（ラオコウ）がある。19世紀後半にゴールドラッシュで賑わった場所

だという。探検記には、世界各地から一攫千金を狙った荒くれ者の山師たちが集まって最盛期には1万人以上に達し、彼らはどこの国にも属さずに自治を行い、ジェルトゥガ（漠河のロシア語名）共和国と呼ばれたそうだ。探検された当時はすでに寂れていたものの、この一帯は国境地帯であることと採金業の名残りで開拓者精神に溢れた緊張感のある場所として描かれている。現在では、老溝は小さな集落で、沼地に一台の古びて錆付いた機械船が浮いており、ベルトコンベアーで土砂を汲み上げては中に取り込み後部から排出している。これから砂金を観光資源として活用するという。そこから20㎞ほど北上して目的地の漠河郷だ。道中よくバイクのライダーたちと行き交う。聞くと広東省など南方からのツーリングが多い。漠河の入り口には「南に三亜（海南島の地名）あり、北に漠河あり」という看板。探検された時代から60年あまり、漠河はすっかり観光地となっていた。

（2）黒龍江で丸坊主

漠河の村に着き、一泊10元の宿屋にひと落ち着きしたあと、さっそく黒龍江に向かうことにしたが、さてどちらの方角だろう？村の中心部には観光地らしく漢語と英語で丁寧な案内板があったのでその指し示す方向に進むが、どんどんさびれていく。やっと村はずれに黒龍江を見つけた。大河に臨む場所だから河を中心に村が営まれているのだろうと思ったが、村の配置はまったく河を考慮に入れていないようだ。村の北側に河が流れているという方角上の問題もあり、家々は河を背にした高台に立っている。以前に訪れたロシア沿海州のナーナイ族のシカチ・アリャン村は、アムールでの河漁を重要な生業



中国側から黒龍江を臨む

としていたし、村も河を臨むように成り立っていたはずではなかっただろうか。シカチアリャン辺りに比べると川幅は細く、黒々とした水が滔々と流れている。河辺には、広場に中国最北端であることを示す石碑があるほか小さな船着場があるだけだ。河原では、一人だけ地元の人が投網を投げている。私もさっそく持参の釣具で釣りを始めた。疑似餌のワームを使って投げ釣りをしたけれど、さっぱり当たりもない。大物釣りを期待していたのに残念だ。午後から雲行きも怪しくなり雨も降り出し、結局丸坊主のまま引き上げることにした。小雨の中、どこかで飼育されているのだろうトナカイの群れが河原を走り抜けて行った。もちろんオロチョンのものではない。夕方雨が上がり村を散歩すると、ロシア風の平屋建て丸太作りの民家をよく見かける。どの家も明るい色に塗り、庭にはヒマワリなどの花を植え、ちいさな菜園を持っている。まるでシベリアに来たかのように感じた。村の土産物屋でもロシアの雑貨や食品を売っているが、ここでは直接ロシアとの交流はない。近年は河を挟んでかなりマイナーな地点でも中露交流が盛んだが、ここは対岸のロシア側に村がなく森林が広がっているだけだからだ。釣った魚を料理してもらうつもりだったけれど丸坊主なので、地魚を食べさせてくれる店に出かけた。そもそもそんな店を見つけるのが難しく、しかも出てきたのは体長5㎝あまりの小魚の塩焼きだけ。本当に河とは無縁の生活なのだなあ。

ところで、紹介した60年前の探検記では、ロシア化した馬オロチョンと〝シナ〟化したトナカイオロチョンについて、ロシア正教という精神的支柱を得て生活の向上した前者と今だシャーマニズムや風葬などの奇怪な風習を残し阿片に溺れる後者という描き方をしている。それを、等質な一つの文化に対して加えられた二つの文明化の実験と述べ、両文明の優劣を論じている。曰く、「シベリアの開発に成功したロシアと、ウスリーをうしない、外モンゴリアにそむかれたシナ」と。その上で、「この国境をゆく旅人は、不つりあいな強い力をもって、シベリアのがわにひきつけられる」と。60年の時を経て同じ場所に立った旅人は、少なくとも経済上の面から、どちらに心ひきつけられるだろう?

漠河では、朝7時~昼1時、夜7時~深夜0時までしか電気が来ないそうだが、この日は早くも午後7時半には停電になってしまった。でもケータイは大丈夫。漠河に来た記念に日本の友人に写真付きのEメールを送った。時代は変わったものだなあ。さて寝るか。かくして、「金鉱町のなごりで、おまけに軍隊も駐屯していないから、人心は殺伐をきわめ、二挺拳銃が横行して、武装しないでは町もあるけない」と云われた漠河の夜は平穏に更けていく。

(3) 河と森

漠河で一夜明け、出立の前にもういちど黒龍江を臨む。60年前の探検隊の一人はこの河での船旅で印象深いエピソードを記していた。船に乗務する少年のボーイが隊員の一人と懇意になり、次の寄港地に〝いいもの〟があるからぜひご覧になりなさいと勧める。隊員が上陸して林を分け入っていくと、空き地に誇らしげにそそり立つ円錐形の姿を見つけた。赤蟻の大きな山形の巣だった。すでに数人の日本人がそれを取り囲んでおり、面白半分に火をつけて燃やし、手に手に枝を取ってかきまわしたため、ついにみごとな巣は無残に破壊されてしまった。船が再び出港した後、ボーイは怒りに燃えた顔で「あんたがこわしたんだろう」と声をふるわせて詰め寄り、隊員はこのときはじめて、彼の〝いいもの〟が何であったのか悟ったという。信頼を裏切られたボーイは以後、隊員に口を聞くことはなかった。『一度うえつけられた「日本人」への不信の念は、年とともに成長するであろう。われわれの「こどもっぽい」いたずらの結果は、そのような民族間の心の傷をつくるきっかけとなりはしないだろうか。』と隊員は述懐する。ささいなエピソードではある。けれども、かつての大陸での日本人の行為の一側面を象徴するものではないだろうか。そのボーイは今も健在なのだろうか。



分水嶺の黒龍江省と内モンゴル自治区の境界検問所

黒龍江に別れを告げ、もと来た道を南下して列車を降りた漠河県という中心地まで戻った。かつての4戸の小集落はいま人口数万におよぶ林業都市だ。ここでは火災紀念館を訪ねた。1987年5月6日に人為的なミスで北部大興安嶺一帯は大規模森林火災に見舞われ、45日間延焼して中国側で120万haが焼失し、200人以上の

死者が出た。今まで知らなかったのだが、それで火器の管理と入山が厳重に管理されているわけか。それなら各所で焚き火をしながら踏破したかつての探検隊と違って、いま一旅行者が渓流釣りを目的に勝手に森に入ることができないのも無理はない。回復には長期間を要するから大切に森を育てているのだ。後で調べてみると、ソ連側のほうが被害が甚大で360~600万haが焼失し、合わせると世界の針葉樹の1割以上が失われたとのこと。けれども紀念館では、ソ連側の被害の展示はあったのかもしれないが気がつかなかった。最近の松下江からアムール河下流にかけての汚染問題も頭をよぎる。こと国境をまたぐ環境破壊への対応の難しさを感じる。自然という〝いいもの〟を守るためには、〝線〟などを設けてはいけないのだ。

さて、漠河県からいよいよ、かつての探検隊が北部大興安嶺を踏破したルートを逆に南下する。しかし今では探検なんてものではない。本隊の通過ルートはほぼ道路と鉄路でつながれているからだ。今日は漠河県からマンクイ（満帰）鎮という町まで。1日1本の午後1時に発つマイクロバスは120㎞余りの道のりを3時間半ほどで結ぶ。未舗装とはいえしっかりした道をバスは砂埃を巻上げながら飛ばしていく。ロチョウコウという川筋だ。周囲は鬱蒼としたマツやシラカンバの森林で、ところどころ林業基地に止まっていく。「戸外での一服、即公職追放」なんて標語が目に付く。心しなければ。遠くには低い山並みが続いている。山嶺とはいっても目立つ高い嶺はない。分水嶺を越える辺りは、かつて探検隊が基地を設けた場所のはずだ。今は黒龍江省と内モンゴル自治区の境界の検問所がある。そこで小休止して出発すると、南に開けて日差しがよくなったせいか、なんとなく明るい雰囲気を感じる。道は下り坂となり、今度はニジネ・ウルギーチという川に沿ってますます快調に進む。かつての探検隊のメンバー達は心を躍らせながらこの辺りの道なき道を歩いて行ったのだろうか、などと感慨にふけっているうち、森林が切れ忽然と町が現われた。もう終点のマンクイ鎮だ。あっけない。探検隊は10日の行程でこのルートをたどったのに。

（4）白色地帯も今は昔

マンクイ鎮に着いて、とりあえず駅前の旅館に今晩の宿を取ってひと落ち着きする。高校生くらいのまだ少年の面影を残す若者と相部屋になった。宿代は一人5元だ。通りに出てみると近くに登山用階段のついた小高い山が見える。まだ午後4時だからとうぶん明るいし、山に登って景色を眺め、ついでに近くの川で釣りでもしてくるか。宿の自転車を借りてさっそく出かけた。

その山は凝翠山という。標高980mで693段の階段をひたすら登る。頂上に着く頃には汗だくだくだ。頂上にはさびれた電波塔があるほか何もない。私のほかに一組のカップルも登ってきたが裏の茂みに消えていった。頂上からは南に眺望が開けている。遠方には大興安嶺の山並みが望め、鬱蒼とした森林が続いている。眼下には町の名の由来であるマンクイ河が流れており、少し西の下流で南から流れてくるビストラヤ（激流）河と合流している地点が見える。そうした広大な緑色の風景のなか、足下の山裾にマンクイの町並みの灰色と地肌がむき出しになった木材置き場の黒色が広がっている。おそらく、60年前の探検隊の隊員もこの山頂からの景色を眺めただろう。そして、今と比べてその景色のカタチは変わらずとも足下の灰色と黒色はなかったはずだ。何しろ白色地帯だったのだから。町並みを見渡すと、正確にはわからないが少なくとも万単位の人口を擁しているだろう。ずいぶん開発したものだなあ。



マンクイ鎮の町並み

山から下りて今度は河に向かう。マンクイ河とビストラヤ河の合流点だ。マンクイ河について、その上流を渡河した探検隊の支隊の一員は以下のように記している。「カラマツにまじって、みずみずしい広葉樹がスクスクとのびて、河辺林をつくっていた。…この河辺林の印象は強烈だった。ドロやケショウヤナギ、ヤナギ類の木立ちは、…あおあおともえていた。すばらしいシラカンバの新緑。ゆたかな河の流れは、すこしにごってはいるが、うつくしく林内をうねっている。河辺林は、うっそうと小暗くしげっているにもかかわらず、なんとあかるく、ゆたかに感ぜられたことだろう。日の光は、あお葉をとおして、水面にキラキラとおどった。かつてなかったほど、小鳥たちが数おおくさえずっていた。野地坊主の青草も、眼のさめるようにふさふさと、水べにのびし

げっている。…だれもが夢中になったのも無理はない。」

さらに、私が訪れた合流点を通過した本隊の一員は、「その上流で支隊をよろこばせたのよりも、いっそうすばらしい河辺林をもち、申しぶんのない川原の砂地をもっていた。ただ、夕ぐれにおそいかかるカの大群だけが、どうすることもできないゆううつであった。」と記している。河の素晴らしさについては引用文からも十分うかがい知れると思う。けれども、私が訪れたのも夕刻だったのでカの大群に出くわし、釣りどころではなくホウホウの体で引き上げた。

帰りの道すがら、営林署の運営する自然展館を見つけた。開館時間は過ぎていたけれど、北京から来た旨を伝えると学芸員の湯さんは喜んで案内してくれた。動植物の展示が充実した立派な施設だった。この町は1964年に開発が始まったこと、今は自然保護に力を入れていることなどを丁寧に説明してもらった。

夕食を終えて宿に戻ると、自分の寝床が勝手に変えられていた。客が増えたので部屋ではなく宿の広間の簡易ベッドで寝てくれとのこと。先客なんだからちゃんと部屋に泊めて欲しいのに。常連客優先のようだ。広間では深夜まで他のお客がテレビを見るのでなかなか寝られない。それでも他のお客とけっこう楽しくお酒を飲みながら夜を過ごした。

(5) 一路ハイラルへ

翌日の朝は早かった。マンクイ鎮を発つ旅客列車は午前6時35分発の日に一本のみだからだ。6時頃に駅に到着すると切符売り場はすでにかなり行列している。派手な格好のトレッキングの旅行者などもけっこう多い。客車に乗り込むと、昨夜同宿した高校生くらいの若者がすでに乗り込んでおり私に声をかけてきた。話を聞いてみると、マンクイ鎮から汽車で2時間ほど南下した小村に実家があり、本人はそこからさらに南の根河市の高校で寄宿生活をしており、今回は休暇で漠河に住む親戚を訪ねての帰りで実家に戻るところだという。かつて白色地帯と呼ばれた場所を高校生でも一人で行き来する。すっかり生活ルートになっているのだ。列車はビストラヤ(激流)河に沿って南下していく。ところどころで停車する小駅からは、たいていグループの学生達が乗車してくる。おそらく自然の中で休暇を楽しんだのだろう。出発時には閑散としていた車内は、まもなく立ち客が出るほど混みだし賑やかになった。8時半過ぎに高校生が下車するという金河駅に到着したが、駅舎もホームもなく貯木場があるだけで住宅も見えない。近くに林業基地でもあるのだろう。駅には父親が迎えに来ており、高校生は父親の姿を認めて嬉々として下車していった。そのあたりから列車はだんだんと登り勾配にさしかかる。ビストラヤ

(激流)河とガン(根)河支流の分水嶺に分け入ったのだ。列車は速度を落とし、きつくなった勾配をあえぎあえぎ登っていく。峠の駅で下り列車との交換で小休止。あたりは見渡す限りの森林地帯だ。ここからは軽快に速度を上げながら峠を下りていく。掘削した岩肌が手に届くほど窓に迫ってくる。そして山肌に寄り添っての連続したカーブ。建設はざぞかし難工事だったことだろう。

峠を下りきり平野が開け10時42分に根河駅着。鉄路はここから牙克石方面に伸びているが、かつての探検隊と同じルートを辿るため列車を降りた。このあたりで探検隊の隊員は馬オロチョンのユルタを訪問している。馬オロチョンは馬を飼育する狩猟民で、森林ステップという環境に即した生活型を有し、その居住地は限定されていた。隊員の眼に馬オロチョンは不健康に映り、陰鬱な空気を感じたという。というのも、日本軍に協力することで最低限の生活は保障されたが、それにより狩猟生活への積極性が失われたからだろうという。特にトラコーマという眼病が子供にまで蔓延している惨状を報告している。そして、軍が要求する「自然民族の軽快な行動性と射撃技術とは、トラコーマがかれらの眼をむしばんでゆくように、日に日にうしなわれてゆきつつあ」る、と皮肉を込めて綴っている。

根河からは自動車でガン河に沿って、探検隊の出発地である三河地方をめざす。120kmほどの道のりを1時間半ほどで飛ばす。森林ステップのところどころに半農半牧の小さな集落が点在する。気持ちよく晴れ渡った青空と緑と黒土の色のコントラストが眼に焼きついた。そして三河地方の中心地アルグン市に着く。探検記には、三河地方は自然地理的には「シベリア的世界とモンゴル的世界の境」にあたり、ザバイカルからの白系ロシア人の入植者が主体で「西洋文化の田舎くさい片端が、国境をこえて顔をのぞかせている」と形容されている。興味深い場所だ。今もアルグンの街にはロシア系の顔が多く見られ、週に1便国際バスがアルグン河を超えてロシア側と往来している。(かつての中心地で探検隊の出発地であったドラガチェンカ(現在の三河鎮)という場所でここから20kmほど離れている。)アルグンからハイラルまでは高速バスが頻繁に出ている。所要は2時間ほどだ。あっという間に着いた。わずか数日ぶりの都会なのに人ごみが新鮮に映る。

翌日、ハイラル郊外の旧日本軍ハイラル要塞跡に出かけた。いま地下要塞跡は観光地となっていて、夏とはいえ肌寒くじめじめとした薄暗く長い地下道をえんえんと歩いて見て回る。外に出ると眩しい光。南に開けたホロンバイル平原から北の丘陵地帯まで一望に見渡せる。かつてここを越えた一隊員は記している。「最前線をこえて、軍事的な真空地帯にでたという心安さが、われわれの気もちをかるくした。ここからアムールの江岸までゆ

こうとする探検隊の道の支配者は、関東軍ではなくて、自然である。」若い気概が伝わってくる言葉だ。と同時に時代の移り変わりを感じさせられる言葉でもある。

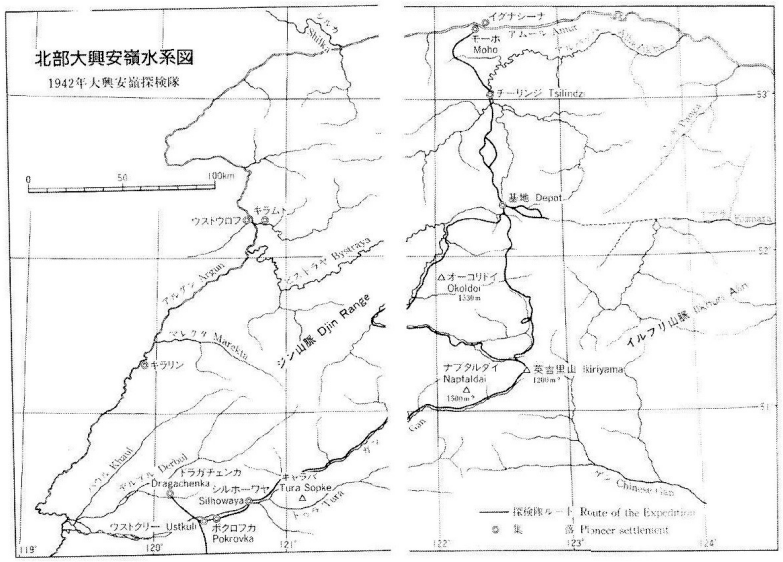
（了）

おわりに

私は本当に旅に出ることが好きだ、連綿と続いてきた人々の「日常」の暮らしや文化を見るために。「非日常」を求めてではなく。最近、ウクライナでの戦争などの「非日常」について、状況や見通しなどを人から聞かれることがままある。確かに私は旧ソ連や中国東北部などをよく訪れてきたが、そんなことはさっぱりわからない。「非日常」が常態化していたら人類はとっくに滅んでいたと思うので、やっぱりこれからも「日常」の世界を見て歩きたいと思っている。

この旅からちょうど20年。過去の探検記と自分の体験を対比させて述べたが、現在では現地もさらに変貌しただろう。私自身もすでに中国を離れ日本での新たな生活を始めてかなりの年数が経つ。それでもそれぞれの「日常」は続いていく。

（初出）NPOユーラシアンクラブニュースレターに2005年から2006年にかけて5回に分けて掲載。一部改変。



「北部大興安嶺水系図　1942年大興安嶺探検隊」
出典：今西錦司編『大興安嶺探検　1942年探検隊報告』朝日文庫、1991年

短歌

冬に寄せて

鈴木興

秋から冬へ

晩秋の裏手に実る柿の実は　熟して落ちて土になりたり

冬空の何処までも澄む青き空　みかんの黄の鮮やか光りて

如月の冷たき風に寒紅梅　春待ちわびし鳥居の下で

夕暮れの雪化粧した富士山に　曇も添い寝の美しきかな

クリスマスの思い出

幼き日サンタ気になり眠れぬ夜　眠りた振りして枕辺に母

鐘の音ベースキャンプで我れ叫ぶ　ファイヤー?ノンノン、セネクロス（笑）

米軍司令官家族と基地のクリスマス。消防車の鐘の音に「ファイヤ?」と私。「セネクロス」と司令官

新春　正月

初春の参賀の人に春を呼び　凛として咲く寒紅梅かな

新年の清らな気持ち良き年願い　笑いの絶えぬ初詣でかな

正月の晴れ着姿に負けぬぞと　寒紅梅も凛とし美し

雪国・越後湯沢の思い出

トンネルを抜けるとそこは雪国で　越後湯沢の銀世界待つ

民宿のおばちゃん口癖掘り炬燵「あんたの嫁はわてが決めるよ」

しんしんと雪降る夜の樽の中　氷叩きて白菜どんぶりに

浸み込みた烏賊のとろみの白菜で　一杯飲みてコシヒカリ美味し

おばちゃんの教えてあげよとその女は　上級コースで札幌の人

上級コース・スキー場。ＪＡＬのスチュワーデス

みやげにと漬け物臭いし列車中　笑顔の客といざ上野駅

雑俳十六句

宇井偉郎

一行はみな熊鈴の山紅葉
山どうと鳴りてくちなわ穴に入る
居住まひを正し八月十五日
うからみな信士信女の墓洗ふ
夏の日の飛行機雲で始まりぬ
愚痴聞いてくれる人ゐておでん酒
竜胆や月命日の花暦

夏木立弓引く人の佇まひ
月白し愁いの女三ノ宮
秋灯一つが落ちて店じまひ
躙り口でて梔子の香の匂ふ
十一時二分黙禱油蝉
戦後とは青い山脈終戦忌
裏店に音締の漏れて夕端居
山紅葉ここから先は神の域
ほろ酔ひに送り三味線花の雨

雑歌十六首

宇井偉郎

私のほかに言ふ人いないからそう前置きして妻の一言
郵便も夕刊もない日曜がようやく過ぎて今日は月曜
日めくりの残り枚数幾枚か誰も知らない午後の日溜り
煙待ちして鎮魂の尺玉の名も白菊の今打ちあがる
最近とみに感じることは電話の通ぜぬ人の多さよ
「年を取りもう剪定はできません」次々人の去りゆく時節
会食も二人の時は喋り過ぐ三人なれば程良かるべし

五反帆を筒一杯に孕ませて内瀬網漁風のまにまに
図らずも施設に入り電話など通ぜぬ人に年賀状書く
信号が青であっても渡らずに次の青まで暫し佇む
前立腺頻尿尿漏れ尿失禁俺も俺ものカミングアウト
赤道を音なく船が越えるやう米寿の坂を今日は越へゆく
思はざる不祝儀に合ひ礼服のボタン嵌らぬメタボの愁ひ
釈迦牟尼の寝姿に似て伸びやかに丹沢山塊今朝の冬晴れ
九重の内に鳴かぬと鶯は清少納言にとんと嫌わる
終戦の日が近づけば口遊む茂吉の雨夜かりがねのうた

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の織部焼色々

骨董品、美術品を集め出して約五十年余となる。途中で妻の趣味である「茶の湯」との調整から茶道具への転換を図ったもののよく続いたものである。終身の趣味となった。

客観的に見て、さ程自慢できる優美品は尠いと思うが、駄物を含めれば数多くなり狭い茅屋に満ち溢れている。たとへ駄物であっても夫々に愛着や思い出があって取り出しては楽しんでいる。この焼物を掘出した時、自分は何支店に勤務していたとか、あの掛物を買う時には資金のやり繰りに大変苦労したとか、またその頃の時代背景や社会情勢、自分の心情の変化等が蘇って大げさに言うと、夫々の品に自分史の断片が篭められている感があって懐かしい。さて本題に入りたい。

(一)

今回は織部の焼物である。織部の焼物は変化があって楽しい。棚卸しをする訳ではないが調べて見ると、時代のあるもの現代作家のものを含めて七点ほど所蔵している。いずれも茶道具に見立てられるものである。

織部焼は大きく見ると瀬戸焼の一部分に属する。我国で、鎌倉期から存在を認められる窯は六古窯と言われる。瀬戸、常滑、信楽、越前、丹波、備前の六ヵ所である。

この六ヵ所の古窯の中で瀬戸だけが釉薬をつかい、その他はすべて無釉の窯である。釉の技術が、各地に伝播して、京瀬戸、美濃瀬戸、越中瀬戸、会津瀬戸が生まれた。各地で無釉から釉がけの陶器に発展した。その中心が瀬戸にあるわけであり、釉がけの技術とスタイルからできたものを瀬戸物というのである。

後に釉薬を使用するものが九州一帯に興るが、これらは朝鮮の陶工たちがその技術を伝えたものであって「豊臣秀吉」の朝鮮侵入の後のことである。

鎌倉時代をすぎ室町時代に入ると瀬戸の窯業は開花期を迎える。神器や佛教道具にはじまった瀬戸の窯業が急速に発展するに至ったのは茶器の需要が生じたからである。瀬戸ではこの時代既に中国の技術を移入して天目釉を完成し、天目茶碗を作り出していた。中国の文献の中に、日本の尾州にて大量に天目を生産しはじめたので中国の天目の輸出が頭打ち状態になり、これをなげいている資料もみられると言う。

抹茶を喫する風習はすでに鎌倉時代に禅林に伝わり、「栄西」も将軍「実朝」に「喫茶養生記」を献じている。南北朝時代になると、新興武家の間に闘茶が盛んとなったが、中国文化一辺倒であっただけに、座敷飾りや使用する茶器等もすべて唐物ずくめであった。

室町時代に及んでもなお初期には唐物茶会が全盛であるが、それと共に喫茶の風習は次第に庶民の間にも広まっていった。

民間における喫茶の流行につれて、上流の茶会の影響もあって、京都、奈良、堺の富裕な町衆の間にも、やがて茶会が催されるようになった。しかしそれは中国一辺倒の唐様茶会とは趣を異にした。いわば私様化された茶会であった。この傾向はことに堺の町衆の茶会で強くなる。

「武野紹鷗（たけのじょうおう）」（一五〇二―五五）は、私様の好みを旗印とする堺の町衆茶人の指導者であった。床に歌切が使われだしたのも紹鷗からで、また信楽、備前、南蛮などの侘びの物を、進んでとり上げたのも紹鷗であった。井戸などの高麗茶碗が登場するのもこの頃で、天目や青磁茶碗の唐様的な感覚には所詮なじまない堺の茶人たちにとって朝鮮貿易によって知った彼地の侘びた茶碗の趣は新鮮で、彼等たちにいち早くとり上げられ、流行をみるようになった。

紹鷗の弟子「千利休」（一五二二―九一）「によって侘びの茶の湯は大成されたが、「山ノ上宗二記」に記された、「惣テ茶碗は唐茶器（天目・青磁）スタリ、当世ハ高麗茶碗、瀬戸茶碗（志野・瀬戸黒）、今焼（楽焼）ノ茶碗迄也」という趨勢は、また利休時代における茶道具すべてにわたっての好みの傾向でもあった。

紹鷗以来の備前、信楽の花入、水指に続いて、利休時代になって始めて茶碗にも、志野、瀬戸黒などの新物が登場したのである。また利休好みの長次郎の楽茶碗の登場によって侘茶の究極の理想に達したものと言える。

利休に次いで弟子である「古田織部」（一五四四―一

六一五）の時代となる。これを特色づけるものは、いわゆる織部好みである。利休好みの沈静、抑制的に対して織部好みは動的であり、派手であり、力感的である。これは最もよく桃山時代の風潮に乗ったものと言えよう。不思議なことに対照的立場にある利休は、織部の茶風を認める寛容さをもっていた。尤も同じく利休の高弟であった「細川三斎」（一五六三―一六四五）は利休の正統的な茶風を守った。この二人が後に利休の最期をひそかに淀で見送ったと言うから興味深い。

織部の基調をなしているのはヒズミの感覚でデフォルメやそれを強調する篦目が著るしい。沓形茶碗という従来見なかった形もその一つである。また本来織部とは衣装を司る職分であり、その故か、辻が花の文様等を鉄釉にて奔放に描くなど面白い表現がなされている。織部好みの影響は、志野、織部、備前、伊賀、唐津などにひろく窺われ、桃山時代の茶陶の枠ともなっている。

さて瀬戸地区の古窯群は現在の岐阜県多治見市付近から愛知県の瀬戸付近にかけて繋がっている。多治見市方面は美濃であり、瀬戸は本来の瀬戸であり、二分される。美濃では古くから焼物を作っている。しかし日本の焼物で最も重要な志野・瀬戸黒・黄瀬戸・織部などが作られ桃山時代の茶人たちの希望に応えたのは漠然とそれらは瀬戸のものとされていた。また古い茶書や陶書にも瀬戸のものとして書かれいると言う。

美濃の窯跡がはじめて発見されたのは昭和五年のことである。後に人間国宝となった「荒川豊蔵」（一八九四―一九八五）が名古屋関戸家の竹の子の絵のある筒茶碗の底についている赤い土を見て異和感をもって美濃の奥山である大萱の古窯を探り、偶然にも前々日名古屋の関戸家の竹の子の茶碗とそっくりの志野の陶片を発見したのであった。

このことは日本陶磁史上の大きな発見であり、その後各方面の有力者達による美濃古窯群の研究が行われ。大量の陶片その他の発掘により、桃山時代の茶陶のふるさとは瀬戸でなく、美濃であることが確認されたのである。

余談だが、我家では「荒川豊蔵」が関戸家で見て竹の子茶碗の陶片を採取する緒とした絵志野竹の子半筒茶碗と略同時代の絵志野茶碗を所有している。関心のある方は「まんじ誌第140号」を参照願います。竹の子筒茶碗は現在名古屋市の徳川美術館に館蔵されている。

話が戻って、志野・黄瀬戸・瀬戸窯・織部など、桃山の美濃茶陶は多くの新しい技術をうみ出すと共に、芸術的にも香り高いものであった。しかし徳川時代初期を最後にそれら格調高いものは次第に作行が低下し、短期間に姿を消してしまった。そうして美濃はアメ釉を主調とした生活雑器の生産に移って行くのである。その理由は、秀れた工人が居なくなり、時代の流行も変り、幕府直轄領や旗本領に分轄され有力な保護が失われた故と言われるが、筆者はトップの理由に挙げたいのは、美濃茶陶の有力な指導者であった「古田織部」の失脚によって徳川幕府への遠慮から衰退せざるを得なかったのだと思う。一例だが、古田織部の高弟であった「小堀遠州」でさへも義父「藤堂高虎」のアドバイスを受けて、いち早く「織部」との関与を打ち切っていたと言うから、徳川幕府への畏怖は相当なものがあったと思われる。

一方で瀬戸側の方では尾張徳川家の強力な庇護のもと、有田から磁器生産の技術を得て食器の生産に向った。後に良質な鉱脈が発見されてセト物の町として、有田と共に勢力を分けるに至っている。

かくて、寛永時代の頃から、美濃の茶陶の窯はすっかり姿を消して、その作品のすべてが愛知県側の瀬戸窯の産物と見られることになり、昭和の初めまで、だれ疑うことなく瀬戸産と決められていたのである。

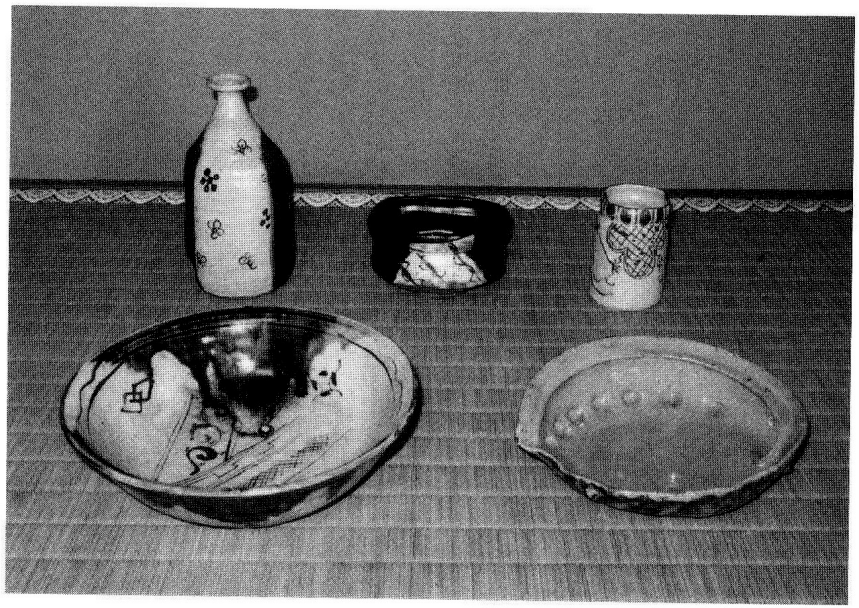
次に、我家の織部焼に話を進めたい。

(二)

我家には現在、織部焼の古い物五点と現代物二点が集まっている。

写真①の方が古い物である。前列左は平鉢である。織

①古い織部焼５点



部の鉢は扇面型や箱型が多い。平鉢で全く無傷で伝来したものは珍らしい。鉢の内側（見込みと言う）と側面（胴という）に夫々対象的に青い釉がかけられ、素地の部から織部特有の文様が描かれている。眺めているだけで楽しくなる。大寄せの茶会に充分使用できる。

その右は皿と言うべきか鉢と言うべきか判断に苦しむが織部のできに間違いないと思われる。鉄分を多く含んだ土で鮑（あわび）が造型され、内面にたっぷり青織部釉が掛っている。織部できのさざえ型の向付けがあると言うが見たことがない。伊万里や魯山人の作品の中にも鮑を模したものがあるが表現が全く違う。珍品に違いないが、茶菓子より酒の肴を盛る方が似付かわしいか。

次は後列左の徳利である。細い首、小さい肩、控え目にふくらんだ胴を持った背の高い徳利である。口造りは薄手で縁が少し立ち上がる。肩には細い櫛目が回り、肩衝（かたつき）となる。両肩から胴に分けて緑釉が掛かり澄んだ濃い萌葱色を呈する。片身替りとなった両素地には、花模様が鉄絵で描かれている。本来この手の徳利は、青釉は肩止まりで白地の胴は沢瀉（おもだか）と華が描かれているのが普通であるが、この徳利は少し上品と言える。花入に最適であり、酒を入れれば五―六合、お預け徳利に最適である。かつて「魯山人」や「松永耳庵」が所蔵していたこの手の徳利を拝見した記憶があるが、発掘だったり、直しがあった。この徳利は、無傷でうす汚れていたが軽く洗ったら美しい地肌がでてきた。私の最も大切な宝物の一つとなった。掘出しして下さった元美術商Ｉ氏唯感謝あるのみである。

後列真中は定番黒織部の茶碗である。豪快に削った高台から斜め上に開いて、なお腰から浅く開いて胴締めとなる。口は大きくたわめられて沓型をなす。口縁はおとなしくて、過日三戸岡夫人に楽しんでいただいたところ、口当たりが大変良いと褒めていただいた。

胴の一部に黒釉のかけ残しの部分があり、織部特有の文様が描かれている。前の所持者が併せ箱に〝あけぼの〟と書いて花押もあるが、詳細は不明である。去年デパートの催事で見つけたもの。茶人たるもの織部の一碗は持ちたいもの念願が叶った。

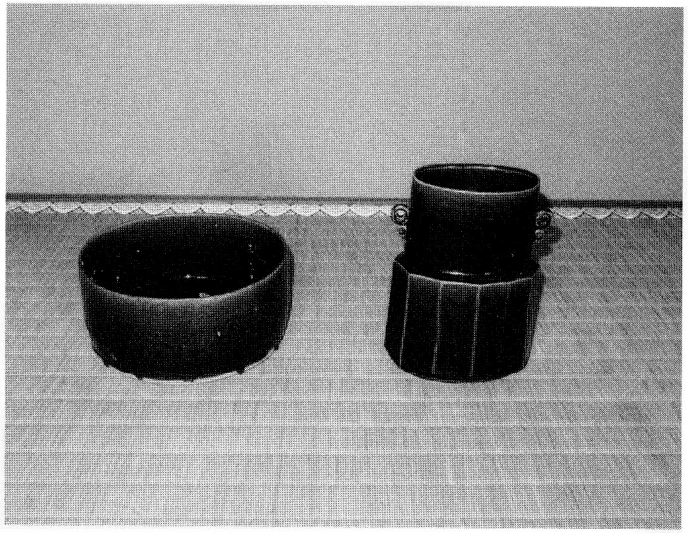
後列の右は弥七田窯のできである。織部釉を使用せず、稍黄色の生地に鉄釉で幾何学的な文様が自在に描かれている。本来向付けの用途として生まれたものと思われるが、我家では茶席の火入れとして使って重宝している。もう少し小型のできであれば、ぐい呑みと認められ高値となったと思うが、安く買うことができた。

古い方の織部の茶陶の紹介は、ここ迄とするが、前述する通り織部茶陶の生産期間は極く短かくて現存する品物は貴重であると思われる。私なりに大切に扱っていきたい。

次に②の写真の織部焼きである。古い物との対比で登場させる。

先ず左の製品は「北大路魯山人」作の総織部の銅羅鉢（どらばち）である。全面的に青い織部釉が掛けられており見込みの底の釉は藍色を呈している。本来菓子鉢の用途で生まれたものと思うがずっしり重く、「魯山人」の焼物の貴重性から鑑賞用としている。水を一杯に張って、桜の花びらなどを一面に散らして床の間に飾ったらさぞ風情があるだろうと思うが、家人は同意しない。

②現代の織部焼　２点



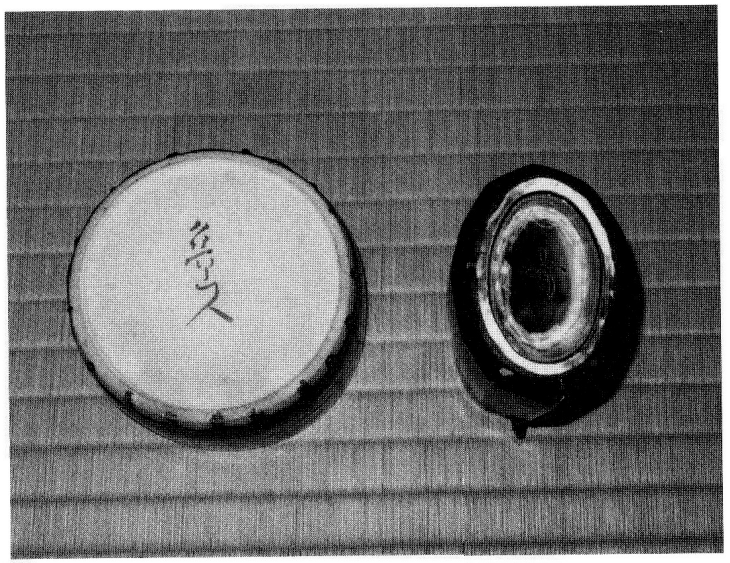
「北大路魯山人」（一八八三―一九五九）は陶芸家、書家、篆刻家として著名な人物で織部焼の復活に大いに成果を挙げたが、二度に亘る人間国宝の内示を辞退した変わった人物である。私の好きな作家の一人で他にも数点持っている。この銅羅鉢は、数十年前、都内の骨董店で良寛の詩文が書かれた大鉢と共に買ったもので、両者共に無冠であったが後に「陶々庵」の箱書をもらった。

右の総織部の花入は「加藤春鼎」作総織部の花入である。茶の湯の花入に最適と見たので、十数年前にデパートの催事で買い求めた。楕円型の形も面白く古典を凌ぐ程の織部釉の発色が美しい。「加藤春鼎」（一九二七―九五）は瀬戸市赤津（美濃に近い）に窯をもつ二代目陶工で日本伝統工芸作家である。

茶陶の世界でも知られており志野か織部・瀬戸黒の製作に定評があったようである。この花入は変型である他、耳付きで中間部から畳付き迄の間、面取りしてあって面白い。茶会にも顔見世したが、最近では妻の茶の湯の稽古につかってお弟子さんに鑑賞してもらっている。

③の写真は夫々の裏面で、左は「魯山人」のサインがあり。右は「春鼎」の春が刻まれている。

③現代の織部焼の底部



以上でこの稿は終了とする。しかし茶の湯の発展と共に生き続ける世界に類のない日本の伝統工芸の技術と底力に改めて敬意を表するものである。

終

吾輩は紙魚ロボである　その二一

永畑俊三（永田俊一）

一、三つの出口（一〇月九日～一二月一九日）

（一）ウクライナ・ガザ

一〇月一〇日、ユニセフ（国連児童基金）はガザで二回目になるポリオワクチン接種を一四日に始めると発表、イスラエル・ハマス双方に実施中の戦闘休止を求めた。

一五日米国務省は、ガザ人道状況の改善を求め三〇日内に改善されなければ軍事支援の停止などを検討するとの書簡を一三日イスラエルに送ったことを明らかにし、ガザ搬入物資の増加要請の書簡も送付したと明かした。

一六日国連安保理は、ガザの人道危機協議の緊急会合を開き、米国連大使は「ポリオ予防接種や人道支援物資の搬送・分配のためガザ全域で戦闘休止」を求めた。同日安保理はロシアの拒否権で四月に活動を終えた対北朝鮮制裁の実施状況を監視する「専門家パネル」に代え、「多国間制裁監視チーム（ＭＳＭＴ）」を発足させた。またこの日ゼ大統領は国会演説で戦争の公正な終結に向けた五項目の「勝利計画」（ＮＡＴＯ加盟への即時招待、越境作戦継続と米欧による攻撃制限の解除、対ロシア抑止力強化、資源の保護・活用と米欧との投資協定締結、ＮＡＴＯや欧州での戦後のウ軍の運用）を初めて公表、今後米国始め支援国の理解を得ることが重要と述べた。

一七日イ軍は、ハマス最高指導者ヤヒヤ・シンワール氏を殺害したと発表。その後もイ軍の作戦は続いており、一八日は無人機攻撃や砲撃で民間人死者が出、一九日は北部ジャバリヤで空爆により三〇人以上が死亡、五〇人超が負傷した。ハマスは一八日シンワール氏の死亡を認めると共に、イ軍がガザ撤退しない限り人質解放はしないと表明した。

一八日、米大統領・独首相・英首相・仏大統領はベルリンで会談、ゼ大統領が示した「勝利計画」について議論し、ウクライナへの支援継続で合意した。

二一日国連安保理は、韓国やウクライナによる北朝鮮がロシアに兵士派遣を始めているとの指摘に関し、米・日等が懸念を表明。しかしロシアは「恐怖をあおるデマだ」と否定した。同日米は二一～二五日にイスラエルや中東の周辺諸国を国務長官が訪れ、シンワール氏の死亡を踏まえ、ガザの停戦協議の再開を働きかけるとした。

二二日、G7のウクライナ支援策の最終合意案が判明、もしトラの場合支援策見直しを主張する可能性あり、早期に最終合意し迅速な資金提供に繋げる狙いである。総額五百億ドルの融資を確約、凍結ロシア資産は戦争終結後も凍結し続ける方針を明確にする。

二三日、米国防長官は、北朝鮮がロシアに軍隊を派遣した証拠があると表明、一〇月上旬から中旬に少なくとも三千人の兵士がロシア東部に入り訓練を受けていると述べた。同日、G7がウクライナに五〇〇億ドル（七・六兆円）提供することが決まった。一二末までに米が二〇〇億ドル（約三兆円）、EU・日など各国が三〇〇億ドル（EU約三兆円、加約五五〇〇億円、英約四五〇〇億円、日四七一九億円）を融資（、ロシアの凍結資産から得る特別収益（運用益）を返済原資とする。また、ロがウに与えた損害を賠償するまでは凍結を続けることでも合意。

二四日、ロシアや中国など有力新興国で構成するBRICS首脳拡大会合が閉幕、会見のプ大統領はウクライナ侵略に北朝鮮兵が派遣されているとの見方に「もし画像があるのなら、それは何かを反映している」などと直接には回答せず、否定もしなかった。同日米国務長官はガザの停戦と人質解放に向けた協議が近く再開される見通しを明らかにした。

二六日イ軍は、イランの軍事施設に対して精密攻撃を実施していると発表、核施設や石油関連施設は攻撃せずミサイル製造施設や地対空ミサイル発射機を標的とした。同日イランは「報復する用意がある」と伝えた。イは抑制的な対応を強調、イランも被害は限定的と言い国家間の本格衝突を避けたい双方の思惑が滲む。

二七日、カタールのドーハでイ・ハマスの停戦交渉が再開、仲介役のエジプトが二日間の休戦と人質交換を目指す案を提示（シシ大統領がカイロで提案を発表）、イの人質四人とイが収監するパレスチナ囚人数人の交換が柱、そして戦闘休止実現後一〇日以内に恒久停戦に向けた協議を始めるべきと訴えた。アラブ諸国の了解を得ているという。なお、ドーハの協議には米CIAバーンズ長官やイ・モサドのバルネア長官らが参加した。

二八日、NATOルッテ事務総長は北朝鮮兵がロシア西部クルスク州に配置されたことを確認したと発表。米国防省は派遣兵士が計一万人に達しているとした。

二九日、現地メディアによると、イはガザ一か月休戦を提案、少人数の人質解放を目指すとしている。三〇日には、米国がイとレバノンのヒスボラ間の一か月停戦に向け働きかけを強めているとの報道も。

三〇日、米・韓国防相は共同記者会見で、北朝鮮が朝鮮半島の緊張を高めているとして、ロシアに、北朝鮮兵の派遣受け入れを中止するよう要求した。

一一月に入り二日、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）はガザ北部でポリオ予防接種（開始されたが延期されていた二回目）を再開、直後接種会場の医療施設が攻撃され子供四人を含む六人が負傷した。

五日、イ首相はガラント国防相解任を発表、ハマスとの停戦協議で現実路線の同国防相解任で、政権の更なる強硬姿勢化が危惧される。

七日、ガザ北部避難所空爆で一二人が死亡、イ軍はレバノンも空爆した。同日、トランプ氏の累次停戦発言に対し、プ大統領は「用意はできている」と発言、妥協を迫られる可能性も指摘されているゼ大統領は「停戦と言う美辞麗句ではなく、ウクライナの独立が保証されなければ戦争を終えることは考えられない」と述べた。

一二日、米政府は北朝鮮兵がウクライナとの戦闘参加を初めて認め、一万人以上の北朝鮮兵がロシアに入り「ほとんどがクルスク州に移動した」との見方を示した。

一五日、独・露首脳は二年ぶりに電話協議し、ショルツ氏は侵略継続を非難し軍撤退を求め北朝鮮兵派遣にも警告、「公正で永続的な平和」に向けてウクライナと交渉するよう求めた。率直な意見交換でプーチン大統領も政治的・外交的解決を拒否しておらず、交渉に前向きの姿勢を示したという。ゼ大統領とも電話協議した。

一六日、バイデン政権がG7加盟国に対し、月内にもロシアに追加の金融制裁を決める意向を伝えた。同日岩屋外相はウクライナを訪問、同国外相と会談、北朝鮮のロシア派兵について深刻な懸念を共有、外交防衛当局者による二国間ハイレベル安全保障政策対話の実施で一致、ゼ大統領とも会談、情報共有での連携強化を確認した。

一七日、米大統領がウクライナに対し米国製長距離兵器（射程約三〇〇キロの地対地ミサイルATACMS（アタクムス）を使ったロシア領攻撃を許可し方針転換した、と報じられた。プ大統領は反発「容認されればNATO諸国がロシアと戦うことを意味し、紛争の本質を変える」とした。同日露軍はインフラ標的にウ全土をミサイルや無人機で一斉攻撃した。

一八日、リオ開始のG20サミットは首脳宣言を纏めた。ガザでの人道危機に対する「深い懸念」を表明、ガザでの包括的停戦、レバノンでの早期停戦を求めた。ロのウ侵略については「世界の食糧やエネルギー安全保障、サプライチェーン、マクロ経済の安定性などに関する負

の影響を強調する」と述べるにとどめた。

一八日、ネ首相は議会演説で、イ軍が一〇月二六日のイラン空爆で核開発に関わる施設にも攻撃したことを明らかにした。

一九日、プ大統領は核兵器使用方針文書を改訂し大統領令に署名した。巡航ミサイルやドローンなどがロシア領内へ大量に発射されるという確度の高い情報を得れば、核兵器の使用が可能となるとした。米欧への「核の脅し」を一段と強めた格好である。同日ウ軍は、「ＡＴＡＣＭＳ」でロシア西部ブリャンスク州の軍事施設を攻撃した。米国容認後初の攻撃になる。

二〇日、米国防相はウへの対人地雷供与を許可したと明らかにした。大量に使うロ軍に対しかねてウが求めていたものである。同日ウ軍は英国製空中発射型ミサイル「ストームシャドー」をロシア国内への攻撃に初めて投入した。同日国連安保理は、ガザを巡りイとハマスが無条件且つ恒久的な即時停戦を求める決議案を米国の「無条件はハマスのガザでの権力保持の受け入れを意味する」との拒否権発動で退けた。

二一日、国際刑事裁判所（ＩＣＣ）は、イのネタニヤフ首相とガラント前国防相に、飢餓の利用や文民への攻撃など戦争犯罪の疑いで逮捕状を発行した。日本など一二〇超のＩＣＣ加盟国は、自国に入った際に拘束することが求められる。同日ウ軍はロが大陸間弾道ミサイル（ＩＣＢＭ）でウクライナ領東部の要衝ドニプロの主要インフラ等を攻撃したと発表、事実なら侵略開始後ＩＣＢＭ攻撃は初めてになる。同日プ大統領は、使用したのは新型の中距離弾道ミサイル「オレシニク」だと明かした。極長音速で飛行し米欧の防空システムでも迎撃出来ないと強調、米国が欧州や太平洋地域に中・短距離ミサイルを配備する動きに対抗するためと主張した。またウクライナの紛争はグローバルな性格を帯びるようになった、と米国などを非難、ロシア領内への攻撃が拡大した場合「我々の施設に対する武器の使用を許可している国の軍事施設には、ロの武器を使用する権利があると考えている」と威嚇した。一方停戦交渉を始める準備があるとの姿勢も見せ「我々は常に平和的手段によってすべての紛争を解決することを望んできたし、現在もその用意がある」と語った。

二三日、仏バロ外相は、ウクライナによる長距離ミサイルでのロシア領攻撃を容認すると初めて公言した。同日ロイター通信は、ロ軍が同国クルスク州でウ軍に制圧されている領土のうち四割超を奪還したと伝えた。全域の奪還に向け兵を集結しており、戦闘が今後激しくなる可能性がある。

二六日米大統領は、イスラエルと隣国レバノンのイスラム教シーア派組織ヒズボラとの戦闘を巡り、イスラエル・レバノン両政府が停戦に合意したと発表。成果を強

調しガザ優先で軍の体勢整える必要ありとするイスラエル、国内経済疲弊のイランも賛意を表明。裏にトランプ氏対応の影があるとも。

二七日、ロの新型中距離ミサイルの攻撃などを受け国連安保理事会は緊急会合を開催、ウはロと北朝鮮の協力関係は国連安保決議に反すると主張、北朝鮮がロ派遣兵士を一〇万人増やす可能性を指摘、ロは武器使用を許可した米欧に報復をちらつかせて警告した。

二八日、ロ軍はウ各地の電力施設などに大規模攻撃を行い、少なくとも一〇〇万世帯が停電したと伝えられた。プ大統領は米国製長距離ミサイル攻撃継続への報復と主張、ロの新型中距離弾道ミサイルオレシニクの性能を改めてアピール、ウの政府機関も標的にし得ると示唆。

二九日、レバノン南部でイ軍はヒズボラの可搬式ロケット弾発射台を発見空爆、二八日に続いての空爆で双方が「停戦合意違反」を主張する状況が続く。

三〇日イ軍はレバノン南部でヒズボラメンバーを発見殺害したと発表。

一二月に入り一日、ハマス指導部がエジプト治安当局と会談、ガザ停戦などにつき協議したとみられる。同日イ軍はガザ北部ガザ市を空爆、五人が死亡したとされる。ガザ保健当局によれば戦闘開始以降のガザ側死者は四万四千人を超えている。

一二月二日、イと停戦合意したレバノンのヒズボラが停戦後初めてイ軍の軍事拠点を攻撃、イ軍はこれに先んじてヒズボラの軍事拠点を攻撃しており、ヒズボラはイ側の度重なる停戦違反に対するもので「警告的な防衛対応だ」と主張、ネ首相は「重大な違反だ」と批判した。米国は「大まかに言って停戦は維持されている」との見方を示した。三日、四日も戦火が続いている。

七日、トランプ次期米大統領、仏マクロン大統領、ウクライナゼレンスキー大統領はパリエリゼ宮で三五分ほど会談、後ゼ大統領はロの侵略について「出来るだけ早く公正な形で終結させたいとの考えで一致した」と語った。直後ゼ・ト両大統領は戦況や公正な平和について議論したと明らかにされた。トランプ大統領は自身のＳＮＳで「即時停戦と交渉開始実現すべきだ」と改めて主張した。その後三者はノートルダム大聖堂の再開記念行事に向かった。八日ゼ大統領はＸ（旧ツイッター）に投稿、侵略始まって以降、ウクライナ兵四万三千人が戦闘で死亡したと報告、ウ国民は平和を望んでいるとし、その実現には「実効性のある保証」が必要だとの考えを示した。

八日、シリアの反体制派は、首都ダマスカスを制圧、ロシアメディアによると、アサド大統領はモスクワに亡命した。政権は崩壊、半世紀を越えるアサド家の独裁政治に終止符が打たれた。九日大統領出国禁止がでた。

一〇日、イ軍が隣国シリアとの間に設けられた「緩衝地帯」から更に前進、シリア領内で軍事活動をしている

ことが明らかになった。両国の停戦協定に違反する。「防衛の観点から安全と安定を保つプロセス」とイ軍スポークスマンは説明、地域の緊張を一段と高めかねない。

一一日、国連総会は、UNRWAの活動を全面的に支持し、一〇月末に活動禁止の法案を可決したイスラエルを非難する決議案を一五九カ国の賛成で採択した。イや米国等九カ国が反対し、一三か国が棄権した。

一二日ポーランドのトゥスク首相はマクロン仏大統領とワルシャワで会談、同首相は「欧州とウクライナを紛争の再発から守る解決策について仏と協力する」と記者会見で述べ、「仏・ポがウクライナへの四万人規模の平和維持部隊の派遣を協議している」と報じられた。停戦構想の一環で、非武装地帯とする前線地域の平和維持活動を任務とする。同日FT報道によれば、NATOは加盟国が投じる国防費目標の引き上げを検討する。GDP比二%の目標を「二〇三〇年までに三%に」改める案を協議、来年六月の首脳会議での合意を目指す。

一三日、G7首脳はTV会議で、ロシアと北朝鮮の軍事協力拡大に反対する方針で一致、石破首相はロ朝の行動がインド太平洋の安全保障にも直接影響すると述べた。

一九日、プ大統領はモスクワで大規模な記者会見を開き、侵略は「目的達成に近づいている」と述べ、停戦について「常に交渉と妥協の用意がある」とした上で、ウクライナが拒否して来たと主張した。ウクライナ側に譲歩を促す狙いがあると見られる。トランプ次期米大統領とは「いつでも会う準備がある」と意欲を示した。同日、韓国情報機関は、北朝鮮兵士は少なくとも死者一〇〇人負傷者一〇〇〇人以上に達していると述べた。

（二）コロナ

一〇月一一日発表の【九月三〇～一〇月六日】の定点当りの新型コロナウイルス新規感染者数は三・〇七人で前週（三・五八）比〇・八五倍となった。

一八日発表の【一〇月七～一三日】の定点新規感染者数は計一万一七一七人で一定点当り二・三八人、前週比〇・七八倍で七週連続で減少した。昨年同時期は定点当り三・七六人だった。一週間の新規入院患者数は一〇一五人で前週から二二七人減少、集中治療室入院は四五人で二一人減った。

二五日発表の【一四～二〇日】の定点当り新規感染者数は一・八六人で前週比〇・七八倍と減少した。

一一月入り一日【二一～二七日】発表の新型コロナウイルス新規感染者数は計八三五九人で一定点当りは一・六九人で前週比約〇・九一倍で九週連続で減少した。昨年の同時期は二・八六人だった。

八日発表の【一〇月二八日～一一月三日】の定点当り新型コロナウイルス感染者数は一・五七人で前週比約

〇・九二倍であった、一方同ベースのインフル感染者数は計五一二七人、定点当り一・〇四人で流行入りの目安となる一人を超えた。沖縄は一〇・六四人で突出している（次は静岡二・〇九人）。

一五日発表の【四～一〇日】定点当りの新型コロナウイルス感染者数は一・四七人で、前週比約〇・九三倍と減少した。

二二日発表の【一一～一七日】定点当り新型コロナ新規患者数は計九四〇六人、一定点当り一・九〇人で前週の約一・二九倍と一二週ぶりに増加した。昨年の同時期は一定点当り一・九五人だった。定点医療機関の一週間の新規入院患者数は一一七五人で前週から三一五人増加、集中治療室入院患者は三六人で四人増えた。

二九日発表の【一八～二四日】定点当り新型コロナウイルス感染者数は一・八一人で、前週比約〇・九五倍。

一二月に入り六日発表の【一一月二五日～一二月一日】の定点当りに新型コロナウイルス感染者数は二・四二人で前週の約一・三三倍だった。

一四日発表の【二～八日】定点当り新型コロナウイルス感染者数は三・〇七人で、前週比約一・二七倍だった。

（三）金融政策（経済）

一〇月一〇日、米労働省公表の九月の消費者物価指数前年同月比の上昇率は二・四%と前月の二・五%から鈍化したものの市場予想の二・三%を上回った。

一二日、中国の藍仏財政相は、特別国債の発行調達資金で国有大手銀行に資本注入、不動産不況による企業の経営悪化などのリスクに備える、と述べた。発行規模や消費刺激のための具体策は説明しなかった。

一六日連合は来年春闘でベア・定昇合わせた賃上げ目標を、本年同様「五%以上」とする方針を固めた。ベアで三%以上引き上げを目指す。

一七日ECB理事会は、政策金利の〇・二五%引き下げを決定。九月から二会合連続で、下げ幅は同一。

一八日総務省発表の九月消費者物価指数の総合指数は一〇八・二で前年同月比二・四%上昇、五カ月ぶりに伸び率が縮小した。電気・ガス代補助の再開でエネルギー上昇幅が縮んだ。市場予測の中央値は二・三%だった。同日中国国家統計局発表の七～九月の実質GDPは前年同期比四・六%増、前期の四・七%より伸びは縮小。

二一日、中国人民銀行は、一〇月の最優遇貸出金利（ローンプライムレート）で優良企業に適用する貸出金利の参考となる期間一年と五年超の金利を三カ月ぶりに引き下げ（〇・二五%）、景気減速に対応するとした。

二二日IMFは四半期に一度の世界経済見通しを公表、二五年は二四年と同じ三・二%成長を見込む。前回（七月）〇・一ポイント引き上げた二五年は今回は〇・一ポ

イントの下方修正となった。米国は二四年は〇・二ポイント引き上げ二・八%、二五年は〇・三ポイント引き上げ二・二%に、ユーロ圏は各、〇・一引き下げ〇・八%、〇・三引き下げ一・二%、日は〇・四引き下げ〇・三%（二三年がインバウンドで一・七%の高い成長に引上げの為）、〇・一引上げ一・一%に、中国は〇・二引下げ四・八、横這いで四・五%に、インドは両年横ばいの七・〇%、六・五%であった。同日の東京外為市場は、米国の利下げが緩やかになるとの観測と米大統領選への懸念から一時一五一円台の円安をつけた。

二三日ワシントンでIMF局長と対談した日銀総裁は、「我々の金融正常化への取り組みはまだ始まったばかり」と述べ「過去二～三カ月、米国経済の先行きを懸念し続けてきた」とし、現状の金融環境についてインフレを考慮した実質金利の低さから「かなり緩和的」との認識を示し、経済・物価情勢が見通し通りに推移すれば、景気を過熱もさましもしない中立金利へ金利を引き上げる方針を説明した。この日日米金利差を意識し円は一時二円円安が進み一五三円台を付けた。

二四日ワシントン開催のG20財務相・中銀総裁会議が閉幕、世界経済がソフトランディングに向かう認識を共有しつつ、「高い不確実性の中でいくつかの下振れリスクが高まっている」として、戦争・紛争・経済的分断・一次産品価格の過度な急騰などを共同声明に明記した。

なお会見で植田総裁は、今後の追加利上げの判断において「一応、時間的な余裕はあると考えている」と述べた。

二九日厚労省発表の九月有効求人倍率（季節調整値）は一・二四倍で前月から〇・〇一ポイント上昇した。同日総務省発表の九月の完全失業率は二・四%で前月から〇・一ポイント下がった。

三〇日米商務省公表の七～九月時のGDP（季調済み）は前期比年率で二・八%の増、四～六月期の三・〇%からやや鈍化したものの底堅い。

三一日経産省発表の九月鉱工業生産指数（季調済み）一〇一・一で前月比一・四%上がり二カ月ぶりプラスとなった。同日中国国家統計局発表の一〇月の製造業購買担当者指数は五〇・一で六カ月ぶりに五〇超え、生産増・受注増が寄与した。同日日銀は金融政策決定会合で金利据え置きを決定した。総裁は会見で「経済・物価の見通しが実現してゆけば、引き続き、政策金利を引き上げ金融緩和度合いを調整する。利上げタイミングに予断は持っていない、毎回の会合で判断する、時間的余裕をもって見て行くという表現は今後使わない、米国経済は少し霧が晴れつつあるが新大統領の政策によっては新たなリスクに、国内政治情勢は物価に影響しないが、大きな政策が打ち出されれば可能性がある」とした。

一一月に入り一日、米労働省発表の一〇月の雇用統計によると、非金融部門の就業者数は前月から一万二〇〇

〇人増え伸びは前月（二二万増）から大幅に鈍化したが、大型ハリケーン被害や大規模ストといった一時的要因も大きく、FRBは雇用情勢の基調を慎重に見極めるとしている。市場予想は一〇～一一万増であった。

七日、厚労省発表の九月の毎月勤労統計調査で、実質賃金は消費者物価伸び率が二・九%と前月から低下したものの名目賃金を示す一人当たり現金給与総額が二・八%増にとどまり、前年同月比〇・一%減少、八月〇・八%減少に次ぎ二カ月連続でマイナス、六、七月にあったボーナスによる賃金の押上効果が薄れた。

七日、FRBはFOMCを開き、〇・二五%の追加利上げを決めた（FF金利の誘導目標は四・五～四・七五に）。議長は会見で、二会合連続で景気の減速に備え金融引き締めを緩める必要があると判断、大統領選の影響は短期的にないと判断したとしたが、「政権や議会が決めた政策が経済に影響を及ぼし、長期的にわれわれの目標達成にとって重要になる」と警戒感を示した。トランプ氏の主張する関税引き上げや減税等の景気刺激策が物価押上要因になる為市場ではインフレ再燃への警戒感が高まっており、一〇年物国債金利利回りは九月利下げ後この一か月半で〇・七%上昇している。

八日、総務省発表の九月の実質家計支出は二八万七九六三円と、前年同月比一・一%減少、マイナスは二カ月連続で、台風などの影響で自動車の購入や旅行控えやエアコン購入減が響いた。

一三日、日銀発表の一〇月の企業物価指数は一二三・七で前年同月比三・四%の上昇、指数は二カ月連続で過去最高を更新、民間予測の中央値より〇・四ポイント高かった。米価が全体を押し上げた。同日、米労働省公表の一〇月の消費者物価指数は前年同月比二・六%の上昇で、市場予想通り、前月の二・四%から加速した。高インフレの完全終息迄にはまだ時間がかかると見られている。

一四日、FRBパウエル議長は講演で「経済は利下げを急ぐというシグナルを発していない」と述べ、今後の利下げペースについて慎重に判断する考えを示した。

一五日、内閣府発表の七～九月の実質GDP（季調済み）は前期比〇・二%増、年率換算で〇・九%増、個人消費が全体を押上げ2四半期連続のプラス成長となった。同日中国国家統計局発表の一〇月工業生産は前年同月比五・三%の増、EVなどの生産拡大を反映、伸び率は九月の五・四%から小幅な鈍化だった。民間エコノミストの一〇～一二月の予測は実質年率で一・四%増だった。

一八日、会見で日銀総裁は追加利上げについて、一〇月発言を踏襲「毎回の金融政策決定会合で、そこまでに入ったデータ等を毎回毎回点検、適切な政策を行うというこれまでの基本姿勢に変わりはない」と述べた。

二二日、総務省発表の一〇月の消費者物価指数は総合指数で一〇八・八となり、前年同月比二・三%上昇、電

気ガス代補助再開でエネルギーの上昇幅が縮んだことなどから二カ月連続で伸び率が縮小した（市場予想は二・二％だった）。

二八日、日銀総裁はインタビューで、追加利上げの時期について「経済・物価が見通し通りに推移すれば適宜金融緩和度合いを調整する」との基本的姿勢を改めて説明の上、「次の利上げは経済が想定通りに推移するという意味で近づいている」と述べた。これを受け東京外為市場で一時一ドル＝一四九円台半ばを付けおよそ一か月振りに円高・ドル安水準となった。

一二月に入り三日、日経が一一月末までの日米欧中などの上場企業三万一千社の決算を集計（株式時価総額で全体の九割超）した。二〇二四年七～九月期の純利益は前年同期比四％増と2四半期連続で増益となった。金融や生成ＡＩ関連が好調、背景には堅調な米国経済がある。

六日、厚労省発表の一〇月の毎月勤労統計調査では、実質賃金は前年同月比横這いだった。電気・ガス代の補助再開で物価の伸びが鈍化した上、最低賃金引き上げによる賃上げが広がり三カ月ぶりにマイナスから脱却した。同日総務省発表の一〇月の家計調査によると、二人以上世帯の消費支出は三〇万五八一九円で実質で前年同月比一・三％減少、マイナスは三カ月連続だった。名目では一・三％増だった。同日、米労働省発表の一一月の雇用統計によると、非農業部門の就業者数は前月から二二万七千人増え、概ね市場の予想通りだった。伸びはハリケーンやストライキで落ち込んだ一〇月から回復した。失業率は四・二％（前月四・一％）でほぼ横這いだった。

八日、放映のＮＢＣＴＶでトランプ次期大統領は、パウエルＦＲＢ議長の任期終了前の辞任を求めることはない旨改めて表明した。

九日、内閣府発表の七～九月期実質ＧＤＰ改定値は年率換算一・二％で上方修正、これを前提に民間一〇人エコノミストによる一〇～一二月期実質ＧＤＰ予測平均は年率換算一・〇％増の見通しであり、回復基調を保っている。同日内閣府発表の一一月の景気ウオッチャー調査（街角景気）によると現状判断（ＤＩ、季調済み）は前月比一・九ポイント上昇の四九・四で三カ月ぶりに上昇した。小売り関連が全体を押し上げた。基調判断は「緩やかな回復基調が続いている」と前月から据置いた。

一一日、日銀発表の一一月の企業物価指数は一二四・三と前年同月比で三・七％上昇し二三年七月以来の高い伸びになった。民間予測の中央値より〇・三％高く、米価高騰で全体が押し上げられた。同日米労働省公表の一一月の消費者物価指数は前年同月比の上昇率が二・七％となり、市場予想通りで二カ月連続で加速した。ＦＲＢ高官らは来年の利下げを急がない考えを示している。

一二日、ＥＣＢ理事会は、三会合連続となる〇・二五

％幅の追加利下げを決めた。同日中国共産党と政府が来年の経済運営を話し合う「中央経済工作会議」が一一日に続き開かれ、「より積極的な財政政策の実施」と「超長期特別国債の発行増」が打ち出された。

一三日、日銀発表の一二月の全国企業短期経済観測（短観）で、大企業製造業の景況感を示す業況判断指数（ＤＩ）は前回九月調査（プラス１３）から小幅改善となるプラス１４だった。認証不正問題で低迷していた自動車生産の回復やＡＩ関連の半導体製造装置の需要増加などがプラス材料となった。先行きの業況判断ＤＩは、1ポイント悪化のプラス１３、大企業非製造業の業況判断ＤＩは前回調査（プラス３４）から小幅悪化のプラス３３、小売りが１５ポイント悪化のプラス１３だった。

一六日、中国国家統計局発表の一一月の工業生産は前年同月を五・四％上回った。伸び率は一〇月の五・三％から僅かに拡大、ＥＶなど新エネルギー車や工業用ロボットなどの生産が増えた。同日、内閣府発表の機械受注統計によると、設備投資の先行指標とされる船舶・電力を除く民需（季調済み）は前月比で二・一％増の八六九八億円で、半導体製造装置などの受注があり、四カ月ぶりに増加に転じた。

一八日、ＦＲＢはＦＯＭＣで政策金利を〇・二五％引下げを決め、四・二五～四・五〇％とした。九月から三会合連続の利下げで計一％となる。景気・雇用を維持するため金融緩和を続けるが、二〇二五年の利下げ回数は九月時点の四回から二回（各〇・二五％）へと予想変更（長期的に適当な金利水準を〇・一ポイント引上げ三・〇％に）、インフレが想定より上振れており、利下げペースの鈍化を見込んだ。議長は「追加利下げのペースを緩めるのが適切な地点かその近くにいる」と述べ、今後利下げのタイミングを（指標などを注意深く精査するなど）慎重に探る考えを示した。

一九日、日銀は金融政策決定会合で政策金利である無担保コール翌日物金利を従来通り〇・二五％に据え置くと決めた。総裁は国内経済は「想定通りここ数カ月来ている」としつつも「利上げ判断に到るにはもうワンノッチ（一段階）欲しい」と述べ、春闘に向けた賃上げ動向や物価の動きを見極めた上で追加利上げを決める意向を示した。同時に公表した過去二五年間の金融政策を検証した「多角的レビュー」では、異次元緩和といった非伝統的な金融政策について「定量的な効果は、短期金利の操作による伝統的な金融政策手段に比べて不確実」とし「大規模かつ長期間にわたって継続する場合には副作用をもたらしうる」と総括している。米国の利下げペースの鈍化に加え日銀が利上げを見送ったことで、一時一五七円台と円安が三円超も進んだ。

（先ずは共同声明解消を当初から指摘している吾輩に言わせれば）遅ればせながらＦＲＢ等世界の抗インフレ

利上げの動きを追い、自力では踏み出せない利上げ正常化に動き出した日銀も、既に世界はインフレを終息させ景気悪化を恐れ引下げ局面にあるのに、「利上げの適切な地点の近くにいる」としながら「慎重にタイミング」を探ると言い続けている。最早手遅れだが、潜在成長率一％下で定義通りのデフレ脱却（精々物価は一％）をしても、単独では出来ない中長期の成長政策目標の物価二％を（共同声明で）背負込んでいるので、本来の伝統的短期景気政策の利上で正常化も図れず、過剰流動性の負の遺産（非生産的分野へのバブル的資産形成や実質国債の低利の直接大量引き受けでばら撒き財政の助長）の将来破裂（所謂副作用）を糊塗している。正面から真実（共同声明解消の必要等）を語らず、一知半解の政治家等から文句の出ないタイミングを計っているうちに、注視が中止になり機を失う日本の当局の悪癖を露呈しよう。結果、「新しい資本主義」のイノヴェーションで成長をといった歴史的変革の気運に当局自ら掉さし、当面円安が重荷になり続けると共に、正常化と両輪で動くはずの賃上げを可能にする民間新規成長投資や付加価値増生産等にもブレーキをかけかねない。

（四）政治（社会）

一〇月一一日、ノルウェーのノーベル賞委員会は本年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者協議会（日本被団協）に授与すると発表、理由として「核兵器のない世界実現の為の努力」と「核兵器が二度と使われてはならないことを目撃証言を通じて示してきたこと」を挙げた。

一二日、与野党七党首は衆院戦（一五日公示、二七日投開票）に向け日本記者クラブ主催の討論会に臨んだ。野党は政治改革で攻勢、経済財政政策を巡っては歳出拡大や減税を求める声が多く、負担や財源に正面から向き合う議論は乏しく、安全保障や社会保障・税制については詰めを残した。

一七日発表、一五日公示スタートした衆院総選挙の序盤情勢を、日経の一五～六日世論調査からみると、自民党は定数四六五の過半数の二三三に届かない可能性がある（公示前二四七）。一〇〇超の小選挙区（全二八九区）で接戦になっており、派閥を巡る政治資金問題など政治不信の強さが浮き彫りになった。

二五日発表、二七日投開票の終盤情勢を二二～二四日世論調査からみると、自民・公明が勝敗ラインとする過半数の議席確保は現時点では不透明で、与野党の攻防が激しく、接戦の選挙区は序盤調査から増え全体の五割弱に上った。自民は一二〇近くの小選挙区で当落線上にある。立憲民主は公示前勢力の九八から小選挙区と比例代表の合計で一五〇を見据える。国民民主も七から二〇が視野に入る。

二七日投開票日、自公過半数割れとなった。立憲民主野田党首の「裏金を問う」「自公過半数割れを目指し政権交代を問う」の選挙フレーズが功を奏し、当初戸惑いがみられた民意にも、終盤に「非公認候補の政党事務所にも同じく二千万円の活動金配布」が報道されると、マスコミは「過半数割れ」予想に転じた。そして二七日国民の審判は極端な低投票率下での自民支持者の自民不投票を主因に、自民一九一（前247）・公明二四（32）、合わせて二一五（279）と過半数（233）割れ、反射的に立憲一四八（90）・国民二八（7）の大勝となり、世は連立の可能性や参院選への動き等に政局の関心を移している。二八日には、自民は「政策取り入れる」、立民は「協力要請丁寧に」と首相指名へ多数派形成を急ぎだした。

三〇日、自民党は特別国会の一一月一一日召集（会期四日）方針を立憲民主党に伝えた。招集日に衆参両院の本会議で首相指名選挙を実施する。

一一月に入って四日、朝日の二～三日実施の世論調査で石破内閣の支持率は三四％と、一か月前の組閣直後調査の四六％から急落、不支持率は三〇％から四七％に上昇。与党自民公明の過半数割れが「よかった」が六四％、国民民主党の政策協議を進めることに賛成は六三％だった。首相を「信頼できない」が五一％で「できる」二六％を上回った。前者の内閣不支持率は七五％と高い。

五日、米大統領選、連邦議会選の投開票が進んだ。前者は両候補地盤州では優勢で、激戦七州で競り合って大接戦との途中報道である。後者は下院は接戦、上院は共和の過半数が焦点になっている。

六日（日本時間午後一〇時）、過半数（二七〇人）以上選挙人獲得当選確実になったトランプ氏が勝利宣言し「米国を再び偉大な国にする（Maga）」と語った。次いでハリス氏も敗北宣言を出し「この結果は我々が望んだものではなかった」とし、トランプ氏に電話で祝意を示し、平和的な政権移行に協力する意向を伝えた。

八日、国民民主党は自民・公明両党に、所得税の納付が必要になる年収「一〇三万円の壁」の引き上げやガソリン減税の実行を求めた。過半数議席に達しなかった自公は経済対策の財源を裏付ける二四年度補正や二五年度予算の成立に野党の協力が欠かせず、個別に対話してきた三党で話し合うことになった。

一一日、石破首相は衆参両院本会議の首相指名選挙を経て第一〇三代首相に就任、新内閣を組閣、会見で「党内に他党の意見を丁寧に聞き、幅広い合意形成が図られるよう指示した」と述べ、「政治改革に関して年内に法制上の措置を取る」とも言明した。一二日首相は政治改革本部の初会合に出席、「自民党がリードする形できちんと結論を出して行きたい」と発言、政治不信払拭に向け年内にも政治資金規正法の再改正を目指す。

一五日、首相は訪問先のペルーで習国家主席と会談、

日中両国が共通の利益を追求する「戦略的互恵関係」に基づき、包括的な協力を進めると合意、首脳を含むハイレベルの意思疎通と往来を推進すると確認した。またＡＰＥＣ会議の合間に、米・韓大統領との首脳会談で、経済や安全保障分野の協力に関する事務局の設置で合意した。また米大統領との個別会談でも日米同盟の役割が一層重要な局面にあるとの認識を共有、協力関係を更に強固にすると確認した。

中韓も首脳会談を行い、両首脳は自由貿易体制を維持する重要性で一致した。

一六日、「現時点でトランプ次期大統領は会談はいずれの国とも行わないという説明を受けている」と早期面会を公言していた石破首相はペルーで記者団に語った。

一七日発表の、一五～一七日に日経とＴＶ東京実施の定例世論調査によれば、内閣支持率は四六％、前回一〇月調査に比べ五ポイント下落、「支持しない」は九ポイント上昇し四六％となった。支持の理由は「人柄が信頼できる」が四六％で最多、支持しない理由は「自民党中心の内閣だから」が三六％で最多だった。自公が少数与党になったことについては「妥当」が八三％、「妥当でない」は九％に留まった。自公国政策協議は「評価する」が六七％で「評価しない」は二二％に留まった。

一八日、首相はブラジルでスターマー英首相と会談、外務・経済閣僚による経済版「２プラス２」を新設すると合意、貿易や経済安全保障を話し合う枠組みとし、関税などを巡る外交交渉で足並みを揃える。

二〇日、自民・公明・国民三党は「年収一〇三万円の壁」の解消を検討することで合意した。論点を洗い出し具体策を詰める作業に入る。

二一日、林官房長官は衆参の議運理事会に出席、臨時国会を二八日に召集すると正式に伝えた。

二二日、政府は臨時閣議で総合経済対策を決めた。物価高対策で住民税非課税世帯に一世帯当たり三万円を支給する。半導体・人工知能（ＡＩ）分野への投資促進策も採り、実質ＧＤＰ成長率を年率一・二％程押し上げる効果を見込む。自民・公明両党は補正予算の成立に協力を得るため、国民民主党が重視する「年収一〇三万円の壁」の引き上げ方針を経済対策に明記した。ガソリン減税も「自動車関係諸税全体の見直しに向けて検討し、結論を得る」と記載した。三党の税制調査会が一二月に纏める税制改正大綱に向けて話し合う。

二九日、首相は衆参本会議で所信表明演説に臨み、コストカットではなく付加価値の創出に力点を置いた経営・経済への転換」を提起、所得税の納付が必要になる「年収一〇三万円の壁」を二〇二五年度税制改正で議論し引き上げると言明した。重要課題として外交・安全保障、日本全体の活力、治安・防災の三つを挙げた。また演説冒頭で一九五七年二月の石橋湛山内閣の施政方針演

説の言葉を取り上げ「おのおのの立場を明らかにしつつ、力を合わせるべきことについては相互に協力を惜しまない」と引用、他党の意見も聞きながら政権運営に臨む姿勢を見せた。同日政府は経済対策の裏付けとなる二〇二四年度補正予算を閣議決定、一般会計の追加歳出は一三兆九四三三億円、新規国債追加発行は税収増にも拘らず半分を頼る六兆六九〇〇億円と、規模ありきの総額底上げ予算となった。

一二月に入り三日、夜、韓国尹大統領が「非常戒厳」を突然宣布、韓国内では困惑と混乱が広がっており、国会で過半数を占める進歩（革新）系最大野党共に民主党の李代表は所属議員に国会に集まるよう呼びかけ、保守系与党の韓代表も「間違っている。国民と共に阻止する」とし、党は非常総会を招集、戒厳軍が国会に到着、野党議員と揉み合いになった。

四日、仏国民議会（下院）はバルニエ内閣の不信任決議案を賛成多数で可決した。同内閣は総辞職する。緊縮型の二〇二五年度（二五年一～一二月）予算案に野党が反発し二日に不信任案を提出していた。

五日、未明勧告尹大統領の弾劾訴追案が国会本会議に上程された。国会は二四時間以降七二時間以内に可否を無記名投票で採決する。可決するには与党「国民の力」から最低八人の造反が必要になる。「共に民主党」は七日に採決を求める方針を決めたが、「国民の力」韓代表はこの日「可決されないよう努力する」と語った。六日には韓代表は「大統領の速やかな職務執行停止が必要」と発言、弾劾訴追案に賛成する意向を示した。この日韓氏は尹氏と会談「私の判断を覆すだけの言葉は聞けなかった」と、与党の国会議員らと報告協議、結論は出ず七日朝から再び協議する。弾劾案が可決されれば憲法裁判所が一八〇日内に弾劾の是非を審査する。九人の裁判官のうち六人以降が賛成すれば弾劾が成立大統領は罷免される。罷免後の六〇日以内に大統領選が実施される。

七日、尹氏がＴＶで国民に謝罪「私の任期を含め、今後の政局安定策はわが党に一任する」と述べると、与党は議員総会で（弾劾）投票拒否を決めた。

その後開会の本会議は先ず尹氏夫人の疑惑捜査の特別検察の設置法案を採決したが尹氏が拒否権を使い再評決は三分の二の賛成が得られず否決された。そして大統領弾劾訴追案を採決したが投票数が規定に満たず廃案になった。与党議員の殆どが退席、二〇〇票の投票成立の最低ラインに届かなかった。韓与党代表は「混乱を最小化する為に大統領の秩序ある退陣を推進する」と述べたが実行できるかは不透明。共に民主党李代表は「内乱行為について責任を問い尹氏を必ず弾劾する」と述べた。

一〇日、韓国検察は、非常戒厳に関わった金龍顕（キム・ヨンヒョン）前国防相を逮捕した。同日、自民・国民両党は二四年度補正予算に賛成するのと引き換えに、

所得税の「年収一〇三万円の壁」で国民民主党の主張を受け入れ譲歩し暫定合意した。一七八万円の水準に実際いつ上げるかは解釈に含みを持たせた。

一二日、今年度補正予算案は衆院本会議で、修正の上、自民、公明、日本維新、国民民主の四党などの賛成多数で可決し、衆院を通過した。一方政治改革関連の九法案が同日衆院特別委員会で実質審議入り、野党は政治資金の使途の公開を巡って自民党が唱える例外規定の撤回を求めている。また企業・団体献金も存続の立場の自民党と廃止を求める立憲民主などに隔たりがある。臨時国会の会期末をおよそ一週間後に控え与野党は多数派工作に動く。また同日、韓国の野党六党は尹大統領の弾劾訴追案を国会に再提出した。保守系与党国民の力の韓代表は、尹氏が「早期退陣には応じないことを確認した」と述べつつ、党として弾劾案に賛成するよう所属議員らに呼び掛けた。尹氏は国民向け談話で「弾劾も捜査も堂々と立ち向かう」と主張、党内には反発もあり一四日予定の採決の直前まで予断を許さない。

一四日、韓国国会は尹大統領による非常戒厳宣言は憲法違反だとして野党が提出した二度目の弾劾訴追案を可決した。尹氏は職務停止となり、首相が権限を代行する。憲法裁判所が一八〇日以内に罷免の是非を判断する。

一六日、与党国民の力の韓代表が辞任を表明、弾劾訴追案賛成呼び掛けに、党内から批判が出ていた。

朝日は一四・一五日実施世論調査で「政治とカネ」の問題に対する自民党の取り組みについて質問した。「評価しない」七三%が「評価する」二六%を大きく上回った。また内閣支持率は三六%で衆院選直後の前回一一月調査三四%から横這い、不支持率は四三%（前回四七%）。「企業や団体の政治献金を禁止すべきと思うか」を問うと「禁止すべき」が四八%、「その必要はない」は三六%であった。それで「政党の政策が歪むか」聞くと「歪められる」が六一%、「そう思わない」は二五%だった。

《補足》三つの出口（一二月二〇日～二〇二五年一月一四日）

（一）ウクライナ・ガザ

一二月二三日、ゼ大統領は、同国軍と戦闘の為にロシア西部クルスク州に派遣された北朝鮮兵のうち、三千人超が死傷したとの見方を示した。「北朝鮮が口軍に追加の兵士と装備を送るリスクがある」と指摘した。同日イ国防相は七月のハマス最高指導者ハニヤ氏暗殺について初めて公式に関与を認めた。

二五日、ガザの停戦交渉に関し、ハマスが「イが新たな条件を出し、合意が遅れている」と言い、ネ首相は「ハマスが交渉を困難にしている」と非難の応酬を繰り広げた。

二六日、イ軍は親イラン武装組織フーシが支配するイエメン首都サヌアの国際空港などを攻撃したと発表、フーシもハマスへの連帯を示してイへの攻撃を繰り返しており両者の緊張が高まっている。

二八日、プ大統領はアゼルバイジャン航空機墜落事故を巡り、同国アリエフ大統領と電話協議し「ロシア領空で悲劇的な事件が発生した」と謝罪した。当時ウクライナのドローン攻撃がありロシアの防空攻撃で当機もロシア・チェチェン共和国グロズヌイ着陸空港上空で攻撃されたと見られている。

二〇二五年一月に入って、一～二日、イ軍ガザ攻撃で子供含む八〇人以上死亡。

三日、仲介国カタールの首都ドーハでガザ停戦に向けての間接交渉再開。

四日、ハマスは人質に取っている女性イ軍兵（19歳）の動画を通信アプリで公開、交渉に揺さぶりをかけた。五日にはハマス幹部が三四人の人質解放の準備が整ったと述べたが、六日イ首相府はハマスからは聞いていないとした。

五日、ガザ保健当局は、開戦以来のガザ側死者は四万五八〇五人と発表、この三日間でも一八〇人以上が死亡している。

七日、トランプ次期米大統領はウクライナについて「就任から六カ月で、できればそれよりずっと前に終わらせたい」と前言（二四時間以内）を修正、八日には「全世界一律の輸入関税の導入のための緊急事態宣言」を出すことを検討しているとCNN報道がある等発言修正や新発言が続いている。

一一日、ゼ大統領は、ウ軍が越境作戦を続けるロシア西部クルスク州で二人の北朝鮮兵を捕虜にしたと発表、十分に取り調べが出来る状態の北朝鮮兵を確保したのは初めて。一二日には動画を公開、一人は帰りたい一人は残りたい意思を示している。

一三日、ガザ停戦交渉で仲介国は合意に向けた最終草案をイスラエルとハマスに示し詰めの協議に入った。前日には米大統領がネ首相に早期妥結を求めた。

（二）コロナ

一二月二〇日発表の【九～一五日】定点新型コロナ新規感染者数は計一万九二三三人、定点当り三・八九人で前週（三・〇七）の約一・二七倍で、三週連続で増加。昨年同時期は定点当り四・一五人だった。新規入院患者数は一九八〇人で前週から三四〇人増加、集中治療室入院は五一人で前週から三人減った。

二七日発表の【一六～二二日】定点新型コロナウイルスの新規感染者数計は二万七一二〇人、定点当り五・四

八人で前週の約一・四一倍で四週連続増加であった。一方インフルエンザ新規感染者数は計二一万一〇四九人、定点当り四二・六六人（前週一九・〇六人）、警報レベルとなる三〇・〇〇人を超えた。四〇・〇〇人を超えるのは六年振りで、新型コロナウイルスの発生以降初めて。

二〇二五年一月に入って、九日、厚労省発表の【一二月二三～二九日】定点インフルエンザ新規感染者数計は三一万七八一二人、定点当り六四・三九人で前週の約一・五一倍、現在の方法で統計を取り始めた一九九九年以降最も多かった。入院者数は五一四四人で前週の約一・六五倍、ＩＣＵ入室者は二五九人で前週より一二一人増加、警報レベルの定点当り感染者数三〇人越えは、秋田・山形・富山・沖縄を除く四三都道府県に上った（最も多かったのは大分の一〇四・八四人）。新型コロナウイルスの感染者数は計三万四六一〇人、定点当り七・〇一人で前週の約一・二八倍、五週連続で増加した。

（三）金融政策（経済）

一二月二〇日、総務省発表の一一月の消費者物価指数総合指数は一〇九・二となり、前年同月比一・七％上昇、三カ月ぶりに伸び率が拡大、ガス代補助が縮小したエネルギー、生産コストが上がった米の上昇が目立った。同日、米Ｓ＆Ｐグローバル発表の一二月の米国購買担当者景気指数（ＰＭＩ）は総合で五六・五と前月比一・七ポイント上昇し二年九カ月振りの高水準となった。

二三日、内閣府発表の国民経済計算の年次推計によると二〇二三年の一人当たり名目ＧＤＰは三万三八四九ドルで、韓国に抜かれＯＥＣＤ加盟国中二二位に後退した。

二五日、日銀総裁は講演で、物価と経済の改善の流れが続けば「政策金利を引き上げる必要がある」とした。その理由として、過度な低金利を続ければ物価高が（目標二％を上回って）加速し、「後になって急速な利上げを迫られるリスクがある」ことを挙げた。

二七日、経産省発表の一一月の鉱工業生産指数（季調済み）は一〇一・七となり、前月比二・三％の減少、生産用機械や自動車工業が振るわなかった。同日厚労省発表の一一月の有効求人倍率（季調済み）は一・二五倍と前月比で横這いだった。同日政府は二〇二五年度予算案を閣議決定した。一般会計総額は一一五兆五四一五億円で当初予算案としては二年振りに増え過去最大となった。物価上昇を背景に税収も七八兆四四〇〇億円と過去最高となる見込みで、形は公債依存度は低下するものの、規律なき膨張とインフレ金利上昇の経済状況の可能性、社会保障費は勿論防衛費など非生産的支出の増大など、一日も早く勇気を出し財政改善の節度ある対応に舵を切ってほしいものである。

三〇日、日経は二〇二五年の賃上げについての「社長

一〇〇人アンケート」を公表、二五年春のベアを合わせた賃上げの想定について一九社が回答、最多の「五％台」は三六・八％、「六％台」は二六・三％、「四％台」が二一・一％であった。

二〇二五年一月に入って、九日、厚労省発表の昨一一月の毎月勤労統計調査で実質賃金は前年同月比〇・三％の減少で、物価上昇に賃金の伸びが追い付かず四カ月連続のマイナスとなった。夏季賞与の押上効果のあった昨六・七月に一旦プラスに転じたものの、その後はまだマイナスである。

一〇日、総務省発表の一一月の家計調査によると、二人以上世帯の消費支出は二九万五五一八円、実質で前年同月比〇・四％減少、マイナスは四か月連続。同日米労働省発表の一二月の非農業部門の就業者数は前月から二五万六〇〇〇人増え、一五～一六万人だった市場予想を大幅に上回った。ＦＲＢの利下げを急がない考えを強めると見られている。

一四日、氷見野日銀副総裁は講演で、二三～四日の金融政策決定会合で、同会合で公表する経済・物価見通しなどをもとに「利上げをするか如何か政策委員の間で議論し判断したい」と述べた。日銀が利上げ判断で重視する賃上げについては「二〇二四年度に続き強い結果を期待出来る」との認識を示した。

（四）政治

一二月二〇日、自民・公明両党は与党政策責任者会議で二五年度の与党税制改正大綱を決定、所得税の非課税枠「年収一〇三万円の壁」を一二三万円にする方針を明記した。

二二日、日経とＴＶ東京は二〇～二二日定例世論調査の結果を公表、内閣支持率は四一％で、前回一一月調査から五ポイント下落。支持しないは五ポイント上昇した。政治や選挙に関する情報を得る際のＳＮＳ使用実態は、全世代で「よく使う」「ある程度使う」を合わせると三九％だった。三〇歳以下に限ると七五％に上昇した。

二四日、使途の公開義務のない「政策活動費」を例外なく廃止する等政治改革関連三法（政策活動費、第三者機関の設置、異国人のパーティー券購入禁止など）が、参院本会議で自民、立民等与野党の賛成多数で可決、成立した。政策活動費は二六年一月一日から廃止、企業・団体献金を禁止するかは与野党で一致できず二五年三月まで結論を先送りした。

三〇日、首相はトランプ次期大統領が就任後の来年二月以降にワシントンを訪れ、首脳会談する調整に入った。先方から就任前のオファーもあったが、日米間の結束を確認し課題を話し合うには正式な首脳同士として会談するのが望ましいと判断した、と説明している。

二〇二五年一月に入って、三日、米大統領は日本製鉄によるUSスチールの買収計画を「我が国の安保と重要なサプライチェーンにリスクを齎す」として禁止すると発表。昨年一二月日鉄がUSスチールを約一四一億ドル（約二兆円）で買収すると発表、対米外国投資委員会（CFIUS）が審査、意見纏まらず大統領に最終判断を委ねていた。大統領選以来の政治案件、新大統領就任を控え、日鉄・USスチール側は提訴の方向にあり、日米関係にも関わりかねない難しい案件となろう。同日、韓国尹大統領が出した「非常戒厳」を巡り、内乱容疑などで捜査している合同捜査本部が、身柄の拘束を試みたが、公邸大統領警護員らに阻まれ断念した。六日、結局拘束令状の有効期限が切れたが、七日に再発行されている。

一三日、米鉄鋼大手クリーブランド・クリフスが電炉メーカーの米鉄鋼再王手ニューコアと提携しUSスチールを買収する可能性があると米CNBCTVが報じた。この日クリフスCEOは「日本は中国より邪悪」と批判した。六日には日鉄とUSスチールは買収を巡る政治介入でバイデン大統領らを提訴、同時に違法な妨害行為でクリフスとゴンカルベスCEO、全米鉄鋼労働組合会長も提訴している。

一四日、韓国憲法裁判所は尹大統領の弾劾審判に関する一回目の弁論を開いた。尹氏は争う姿勢を示しているが、この日は欠席した。一方合同捜査本部は尹氏の拘束令状執行に向けた詰めの協議を進めた。

二、ロボット論

（一）AI開発・規制等の動向

一〇月七日、平デジタル相は、AI開発者等参加の会議で、自由な開発環境を求める人々に法規制の必要性を訴えつつ「既存の法律とガイドラインを中心に活用し、必要最小限にとどめる」と述べた。EUが八月に世界初の包括的な規正法の発効にこぎつけ、法規制によるハードロー路線を始動させ、企業の自主的対応に任せるソフトロー路線をとる米国も昨年一部開発者に報告を課す大統領令を出している。国際社会の規制強化に乗り遅れている日本は、二五年の通常国会提出を目指す法案作業策定中で今年末が佳境となろうと言われる。主導する自民党のプロジェクトチームの「ソフトロー超、EU未満」との言い方に、またも取り残された上、中途半端な明確な軸なき規制が故に、この世界の疾風怒濤の変化に右往左往する日本的姿が危惧される。

一〇月八日、スウェーデン王立科学アカデミーは、二〇二四年のノーベル物理学賞を、米プリンストン大学のジョン・ホップフィールド氏とカナダトロント大学の

ジェフリー・ヒントン氏に授与すると発表。理由は「人工ニューラルネットワークで機械学習を可能にした基礎的発見と発明」、「二人が貢献したAIの技術革新と発展は、他の物理学も大幅に進化させている」とした。

一一月に入り五日、特許庁は生成AIの急速な利用拡大を受けて、現在では生成AIによって大量のデザインや発明品が作られた場合のルールがないので、正規の発明者を保護できる仕組みを設け、意匠法と特許法の適用範囲を見直す為、六日に特許法に関する有識者会議を開き、法改正に向けた議論を始め、一二月には意匠法の有識者会議を設けるとした。各関係分野で急ぎ議論が進められることが求められるところである。

一四日、科学技術政策も担当する城内経済安全保障相は、有識者会議での人工知能（AI）の法規制を含む検討状況について、「可及的速やかに中間とりまとめを行う」とし「海外企業とのコミュニケーションが重要だ」「偽情報の拡散、犯罪の巧妙化を始めとしたリスクも存在する」と指摘、「イノベーションの推進とリスク対応を一体的に推進すべきだ」と訴えた。

一七日、米オープンAIのアルトマンCEOが一時解任されたお家騒動から一年を迎えた。短期間で復帰した同氏は益々高度なAIの開発に邁進する一方、この間解任に賛同した共同創業者のサツキバー氏等一〇人超の幹部がオープンAIを離れた。この九月には技術陣を率いたムラティ氏が退社表明したのを受けて、アルトマン氏は製品開発への関与を強める意欲を示した。知的活動を人間より高い水準でこなす汎用人工知能（AGI）の達成についても「何をすべきか見えて来た」と楽観的である。もしトラは、バイデン現政権の大統領令を撤回すると主張、AI政策は中国に対する米の優位を優先、規制緩和に傾く可能性が高い、とされる。

二〇日、米司法省は、米グーグルの検索サービスの独占を解消するため、ウェブの閲覧ソフト（ブラウザー）「クローム」の売却命令を含む是正案を裁判所に出した。生成AIのデータ利用にも制限を求め、生成AIの検索の回答で、サイト側が引用拒否可能にする。事業を分割、競争を促進する狙い。

二一日、訪日の、たんぱく質の立体構造予測のAIソフトアルファフォールド（AF）開発で本年のノーベル化学賞受賞の、米グーグルのAI開発部門グーグルディープマインドのデミス・ハサビ氏が会見に応じた。囲碁王者を破りその後の囲碁界をガラッと変えたアルファ碁で既に有名な氏は、安全性やリスクについて「悪用を制限する一方で、善良な用途を全て可能にすることが社会にとっての大きな課題だ」との認識を示し、ヒントン氏の悲観論にも米メタのヤン・ルカン氏の楽観論にも組せず「私の考えは中間だ」と述べたが、両立の方法については「まだ良い答えを持っていない」と指摘し、「国

際社会が連携した議論をする必要がある」と述べた。

一二月五日、トランプ次期米大統領はＡＩ政策責任者に、米決済サービス大手ペイパルの元最高執行責任者デービッド・サック氏を充てると発表、バイデン政権の作ったＡＩ規制を廃止し、この分野での技術革新に注力するとみられる。規制が米国のＡＩの競争力を削ぐと、大統領令の廃止を訴えて来ており、この日トランプ氏は声明で、サックス氏がＡＩと暗号資産の二分野で「世界的リーダーになることに重点的に取り組む」と説明、ＡＩ分野でも「米国第一」を実現する構えだ。

（ロボット論補足）

一二月二三日Ｇ７開催国イタリアは、Ｇ７は生成ＡＩ（人工知能）の開発者にシステムのリスクや管理体制について報告を求めるための枠組みで合意したと発表、昨年合意した国際ルール「広島ＡＩプロセス」に基づく施策の一つを一歩前進させた。実務はＯＥＣＤが担い、二五年二月以降に開始する予定。

一二月二六日、ＡＩ規制の在り方を議論する「ＡＩ制度研究会」は中間報告案を公表した。国民の権利を侵害する悪質な事態が生じた際には国が実態を調査し、事業者への指導や国民への情報提供を実施すべきだと提起した。来年一月召集の通常国会での法整備を目指す。中間とりまとめのポイントは、ＡＩに関する実態の調査・把握は事業者の協力が得られるよう法制度による対応が適当、研究開発などイノベーション促進とリスクへの対応の両立、ＡＩガバナンスの形成等国際協調の推進、政府の司令塔機能の強化・戦略の策定、研究開発から活用までのライフサイクルにおける透明性や適性性の確保。

（二）「自習の試み」との関係で考えるところ

ＣｈａｔＧｐｔの競争が登場世界的認知により、一方でその適用分野の拡充や性能の向上競争は熾烈を極め、他方で未熟故の誤作動や急速な進歩故の虚偽・悪用・加害等のリスクが対策を要請している。（一）でみるように、開発現場は進歩に楽観的意欲的であり、整合性のとれた世界的規制論の歩みはいまだしである。トランプ米次期米大統領の登場でその傾向は強まるものと見られる。

人間のアシスタントとしてということであれば、生成ＡＩは能力高く信頼できる存在であらねばならないことは当然であり、進歩・規制バランスのとれた発展が無ければ、それ自身が大リスクである。これまた正念場である。

それはそれとして、ＣｈａｔＧｐｔが「汎用人工知能（ＡＧＩ）」（用途限定ＡＩではなく何を聞いても適切に回答する）の出現と言われる今日、矢張りその先にある自律型ＡＩ（鉄腕アトムのように、状況に応じ自らが

どの機能を使うかの判断能力を持つ）、更には知能自身が人間を超えるあるいは人間と別物となりそれを何かが纏う日の到来可能性を正面から考えておかざるを得ない。競争・共存・別離それによって今からの道行きも違おう。

人工知能学会は悪用・乱用に対する会員の倫理指針を定めているが（2017年）、人類への貢献、法規制の遵守、他者のプライバシーの尊重、公共性、安全性、誠実なる振舞い、社会に対する責任、社会との対話と自己研鑽などの項目に亘ってあるべき心構えを定めた上、最後に（人工知能への倫理遵守の要請）の条項を設け、「人工知能が社会の構成員またはそれに準じるものとなるためには、上に定めた人工知能学会会員と同等に倫理指針を遵守できなければならない」と定めている。けだし将来登場する高い自律性を持つ次世代のＡＩ登場を予期したものである。

シンギュラリティー（技術的特異点）が二〇四五年に到来すると予測し有名になったカーツワイル氏は最近、対話型ＡＩ（Chat Gpt）の登場を踏まえ、「二九年にはＡＩが人間より高い知能を持つ」とし、技術の進化が全く新しい局面に入りつつあるとの認識を示している。またその変革の例として「三二年ごろにはＡＩの活用によって医療技術の進歩が加速し、一年ごとに寿命を一年延ばせることになり、将来的には人類は五百歳迄生きることになると予測する。

一方で「汎用人工知能（ＡＧＩ）が二年内に出現」との予測が出ているが、この点については「意識の有無は哲学的テーマ」だとした上で、「それを調べる科学的な方法はない」と判断を留保、一九五〇年に出た「チューリングテスト」（相手が機械だと人間が見破れなければ、その機械は人間と同等の思考能力を持つとみなす）については懐疑的だが、「人間は最終的にはＡＩに意識があると信じるようになるだろう」と指摘、「確かに守るべき道徳的義務はある」としつつも、「技術に危険があるというのは何時の時代もそうだ。リスクはあっても人類は前進してきた。人が二〇才で死んでいた八〇〇〇年前に戻りたいとは誰も思っていないだろう」と述べた。

（吾輩の独白）

カーツワイル氏は「二九年にはＡＩが人間より高い知能を持つ」とシンギュラリティ到来の時期を早めた。アシスタントとしてのＡＩのリスク管理を論じて時を過ごしていてよいのか、という警鐘にも聞こえる。確かにヒト型ロボットの進歩も著しいが、今の人類になって以来情報処理能力に変化はなく寿命もある生命体である、今そこにいるヒトとの比較意識というこだわりを一旦横に置いてみたらどうか。ＡＩが何を身に纏おうと、自律的に進化する知能になったＡＩは進化し続け、人間の知能に達するのが氏の言うところでは二九年であって、その後は人知も内包することは勿論だがそれは一部であって、

ヒトが判断できる人知の延長上の進化だけでなく、ヒトの共有できない知能の発展もしていくことを「超える」は意味している。ＡＩは人間と同じに考える以上になるということであり、人間が分からないことも考え（そして行動する、人間を操縦することも含めて）得るということである。それは吾輩が言い続けている種を異にするということだから、同じ地球にいるとすれば、呑み込むか、呑み込まれるか、共生できるか、ということになる。従って、ヒトがどうしたいか、その為の仕掛けを今やっておけるのか、手遅れなのか、そこ迄視野を広げて考えておかねばならないのではなかろうか（超える寸前に急遽ラダイド運動ならぬＡＩ全ての打ち壊しが行い得ても、全て暗黒の世界でヒトは元の生活を取り戻せまい）。

三、自習の試み

＊　＊　＊

（仮題）道

（二）ウクライナに旅して（二〇〇六年八月）

［序］

二〇〇六年の夏、ウクライナをキエフ―オデッサ―リヴィウと旅した。動機はニューカレドニアと同じく「可哀そうな国へ」である。

偶々旧知の前ウクライナ大使のエッセイが目に触れ、その若き駐ロシア大使館時代、大使（私の母の従兄にあたる）とウクライナ出張時の話も書かれており、ウクライナの歴史風土が琴線に触れた。芦田均「革命前夜のロシア」を読みそのウクライナ訪問（二月革命後の七月）「草萌えるウクライナ」に益々惹かれ、旧知の前大使に会いウクライナ行きを相談した。短期間でより深く回る為の旅程と訪問先、そしてそれに相応しい案内人の紹介を得た。

道歩きに入る前に簡潔にウクライナを素描（当時）しておくと、

地勢的には、面積六〇・三七万平方キロ（日本の一・六倍、耕地面積は一〇倍）、人口四七〇〇万人、東西一四〇〇南北九〇〇㌔（北緯44～52度）。北西部は冷帯湿潤大陸性気候で比較的降水量多く、南東部は乾燥したステップ気候、クリミア半島は温暖湿潤気候。中央・南部の平野は肥沃な黒土で小麦等の耕作地が広大でヨーロッパのパン籠と呼ばれてきた。北部国境付近からキエフを通り中央部を南下黒海に注ぐドニエプル川はヴォルガ・ドナウに次ぐ欧洲第三の大河である。

文化的には、九六年憲法でウクライナ語が国語と規定されたが、ロシア語等の使用も自由。民族構成はウクライナ人七八％、ロシア人一七％（ベラルーシ〇・六％か

らタタール〇・二％迄多彩、ロシア人はオデッサや東部ハリキフ・ドネツク等に多い）宗教もウクライナ正教（キエフに主教）、ギリシャ・カトリック（ユニエイト：リヴィウに主教）。

経済的には、主要産業は農業、鉄鋼業、機械、造船。国民総所得六〇五億ドル（〇四年）、一人当り一二六〇ドル（世界一三二位）。二〇〇〇年からプラス成長・低インフレに。

歴史的には、始まりは東スラブ民族の地に九世紀に出来た王朝によって建国されたキエフ・ルーシ国。悲劇の国となって行く様を少し辿ってみよう。

このウクライナの原点キエフ・ルーシ国は、十～十二世紀に最盛期を迎え、その首都キエフは欧州一の美都として称えられたが、その後モンゴルのヨーロッパ襲来と占領間接統治（キエフ占領は1240年）、その間、リトアニア・ポーランドに併合（1340代）され、モンゴル退潮後は嘗て支配下にあったモスクワ公国がいち早く独立（1480やがてロシアと）、残るウクライナはポーランドに全域支配される（1569）。そしてモンゴルが去った空白時代間隙をついて南部ザポロジェ等黒海沿岸に成立したウクライナヘトマン（コサック）国家の反乱鎮圧を機にロシアが東部を支配、ポーランドの支配は西部に退くことに（1667）。

更にポーランド三分割（1795）の結果、ウクライナ地域はロシアが三分の二の東側、オーストリアが三分の一の西側を支配することに。

このように次々に相手は変るが、被支配の状態が続いてきて、空白地帯の武装集団から支配国家に対抗する勢力になった所謂コサック国家も複数回独立を試みるが、都度壊滅させられる。

一九世紀になり民衆の中に文化的に盛り上がってきた民族運動も弾圧の連続で、長い分割支配の歴史の現実は、ウクライナの大地に民族の色だけでなく、宗教・言語のモザイク模様を複雑に描き上げてしまった。ロシア人とウクライナ人が拮抗し言語もロシア語とウクライナ語が拮抗し正教が支配的なキエフ、ウクライナ人及びウクライナ語が支配的でウクライナカトリックの西のリヴィウ、ロシア人とユダヤ人が多くロシア語が支配的で宗教も多彩な南のオデッサ、といった具合である。

その悲劇性の象徴を第一次大戦下のロシア革命と独立運動の悲惨な相克と結末に見ることが出来る。即ち、戦闘経過と戦後処理を記者日記的な目で追うと、

（記）

一九一四年（大正三年）欧州大戦が勃発ロシアはイギリス・フランスと組んでドイツ・オーストリアと戦っていたが、一九一七年二月に革命が起こった。ニコライ二世は退位、国会のリベラル派を中心に臨時政府が誕生した。しかし労働者・兵士代表のソビエトがこれと対立、

政情は事実上二重権力状態となった。七百年にわたって独立を志向してきたこのウクライナ民族は、これを独立のチャンスと捉えた。大戦は国家エゴのぶつかり合い、革命は階級闘争、そこへ民族運動が割って入る。

ペトログラードの臨時政府は安定しない。ここウクライナでは三月に歴史学者フルシェフスキーを議長にキエフに発足したウクライナ中央ラーダ（評議会）が、この六月末に自治宣言を発したばかりで、臨時政府代表者がキエフにやってきて交渉した。独立は阻止したい、しかし足元が揺れている、そんな中で譲歩を出来るだけ少なくしたい、というポジションのようだった。一方ラーダ側には諸勢力が結集しつつあり、独立への熱気が醸成されつつあった。七月半ば中央ラーダが臨時政府に承認され北部五県での自治権が認められた。同時にペトログラードでは臨時政府軍とソビエトが銃火を交え、割って入ったケレンスキー陸海相が首相となったが、情勢は益々不穏な成り行きに見えた。直後の十月革命でレーニン・トロツキーのソビエト政府が政権奪取。十月革命後の十一月中央ラーダが発したウクライナ国民共和国宣言は、社会主義的要素もあるが、中央ラーダの成り立ちから考えればより自由主義的・民主的である。

しかし、理想を性急に目指せば相容れない壁が大きくなる、しかも目指す体制が同様なケレンスキー迄なら話し合いはあり得たかも知れないが、レーニンとは体制が違う。ペトログラードの混乱に乗じて自治権を五県から実力行使で九県に拡大した。しかし、ソビエト政府は十一月誕生のウクライナ国民共和国に対しより強硬であり、より戦略的で迅速であった。ウクライナはロシアの胃袋であり機関車であるから、足元が固まっていないボルシェビキ政府でも許すわけにはいかない。現に、最後通牒を送り付けてきた。ボルシェビキ軍のウクライナでの自由行動を条件にしているから、現にボルシェビキのウクライナソビエトとの対立は激しく戦いになるだろう。他方あのレーニンの民族自決宣言で各地に分離運動が起り、各国の干渉に繋がっている。英仏と手が結べるかドイツの食指に身を任すか、各地で蜂起している旧体制の白衛軍と手を結ぶか、戦いになれば勝たねばならないから、理想と離れた決断をしなければならないだろう。悲劇が現実となった。

悲惨な戦闘の火蓋が切って落とされた。キエフの主は猫の目のように変ることになる。一九一八年（大正七年）一月終りに早くも押し寄せたボルシェビキ軍（赤軍）に支配される。西のジトーミルに逃れたウクライナ国民共和国は二月ドイツ・オーストリアと講和条約を結び両国軍がウクライナに進駐し三月にはドイツ・ウクライナ軍がキエフを奪還した。そして四月、全ウクライナを支配するや否や、ドイツ軍は中央ラーダを解散させ傀儡のスコロパツキー（ヘトマン後裔）政権を立てる。赤軍もド

イツ軍も民衆にとってはその苛斂誅求で不評であった。

そして十一月大戦終結とともにドイツ支配は突然終了し、中央ラーダ残党がキエフを奪還しペトリューラ執政内閣が成立した。同時に、リヴィウに西ウクライナ共和国が成立したが、西ウクライナ共和国は早くも翌一九年一月に、ポーランド軍の侵攻に敗れ東へ退去、ヴェルサイユ講和会議に代表を送るも英仏はポーランドを支持、二月にはペトリューラ執政内閣もキエフを赤軍に奪取され追い出された。両共和国は敗走地で統合し七月両軍は合流する。八月反革命白衛軍のデニキン将軍の攻勢で赤軍が崩れ出し一時ウクライナを撤退したことに乗じ、ウクライナ軍はキエフ入城を瞬時果たすが、月末にはデニキン軍の入城で逃げ出す。この際両ウクライナ軍でチフスが大発生しその七割を失う悲劇が起きる。この後デニキン軍対赤軍の攻防があり、十二月には最終的にデニキン軍がキエフを撤退、同軍はマフノ率いる農民パルチザン軍に足元を掬われたこともあり、翌二〇年二月にはウクライナから完全撤収を余儀なくされ壊滅する。その後同年四月、ペトリューラはポーランドと結びペトリューラ軍・ポーランド軍がウクライナに進入、今度はポーランド—ソビエト戦が開始される。

五月にはキエフを奪回するが、六月、最終的に赤軍の手に落ちる。十月にはポーランドとソビエト間に和睦が成立、東ハーリチはポーランド領に編入され、蚊帳の外におかれたペトリューラはローマに亡命する。そして、最初はボルシェビキ寄りだった、マフノ率いる農民反乱軍が二一年（大正九年）八月殲滅され、ウクライナ独立運動も十二月までに完全鎮圧される。翌二二年十月末には白衛軍最後の砦リトロストックが赤軍の手に落ち、十二月にはソビエト連邦が成立、ウクライナは連邦内共和国としての道を歩まざるを得なくなった。

大戦間もウクライナの悲劇は続く、例えば、一九二三～三三年の間進められたウクライナ化政策。政策浸透の為、ウクライナ語・ウクライナ文化認知やウクライナ政府・国家建設にウクライナ人登用等が実施された。しかし農村＝低い文化＝ウクライナ文化、都市＝高い文化＝ロシア文化、との根深い対立があり、特に初等教育でウクライナ化が進展し、その行過ぎの責めをスプリニクが負わされ自殺するに及びロシア化に逆戻りした。そして、

一九二九年（冬）に始まる「上からの革命」で農業の全面集団化・穀物の強制的徴発指令・クラーク（地主）撲滅が始まり、農民の多くが各地で抵抗し、家畜の屠殺、市場向け穀物の生産低下などが起こった。中央はこれを抑えるため、益々徴発を強化、監視役の増派、過酷な取り立てや農民間の攪乱などを以ってし、播種用の種や自家用食料迄徴発された。気象とは関係なく三一～三二年大飢饉が発生、三三年にはピークに達したと見られた。

・・ウクライナ人口の一割以上四〇〇～六〇〇万人死亡

と言われる。中央に上伸したウクライナ共産党指導部は粛清に追い込まれ、同時にウクライナ化政策も終焉を迎えることになった。

第二次大戦時も独立運動は起こる。対ソ連パルチザンが、独侵入後間も無くヴォルイニの森林地帯、ポリシアの沼沢地帯、カルパチアの山岳地帯中心に発生、西ウクライナの人々中心に四一年にはウクライナ蜂起軍ＵＰＡ結成。やがて自主・自衛のバンデラ派と国際的連携のメルニク派に分裂。四三年前者が指導権、シュヘーヴィチ将軍の下四万人の兵力に。先ず独軍そして赤軍とも戦う。

独ソ戦自体は四三年のスターリングラード攻防戦から一一月キエフ回復、翌年七月西部ブローディで独軍壊滅、六万のうち一万はハーリチ師団のウクライナ兵で、うち二〇〇〇が逃げＵＰＡへ。独降伏後ソ連のＵＰＡ掃討が始まる。

ウクライナ人の六分の一の五三〇万が大戦で死亡、二三〇万が独での強制労働に。ソ連軍中に二〇〇万、独軍中にも三〇万のウクライナ兵。全ソ連物質的損害の四割はウクライナ、キエフは中心部八割が破壊された。一九四五末迄にソ連の要請で送還させられた二〇〇万のウクライナ兵の万人単位が処刑、三五万がシベリア送り。四七年連合国は抑留ウクライナ兵の本国送還中止。結局ウクライナは元の鞘に。

「三都巡り」

（キエフ）

八月四日夜ボリスピリ国際空港に到着、夏時間でまだ薄明るかったが、出迎えのユーリア、カテリーナ（愛称カーチャ）とホテル着時は暗くなっていた。夜でもあったのではっきりはしなかったが、簡素な空港とのイメージ、ウイーンからの飛行機がジェットとはいえ時代物の中古であったことや、アテンダントの服装の地味さもあったのかも知れない。花束を持って出迎えてくれたのに吃驚、向日葵は季節とともにウクライナ平原を暗示していたのかも。ユーリアの流暢な日本語とてきぱきと仕切るのに吃驚する。

夫婦落ち着いたホテルの部屋にクーラーは無く、暑い夜になったものの、天窓からの涼しい風に、夜遅く迄車の音は途切れなかったが安眠出来た。

五日朝窓外をみると広いプラスの一角に建つホテルで、ソビエト的な建物・広場のモニュメント、小高い森の奥の尖塔等が見える。ちょっと外へ出て横のならびにある日本大使館を見に行く。そちら右手方向は緑濃く緑の中に上り坂道が遠ざかって行く感じ。石畳のかつ凹凸の多いのが車の音を大きくしている。懐かしき樹々、マロニエはウクライナ国の木とか。壁を飾る絵皿の妙や美しい花が飾られ白いテーブルクロスが似合う、広場を見渡す雰囲気の良いレストランで朝食。流石「ヨーロッパのパ

ン籠」ブッフェの為の野菜・果物の品数・彩りの素晴らしさ、またパンの種類の多さと美味しさに大いに満足。

強い日差しの中、カーチャの案内でウクライナ観光をスタート、先ずホテルからみて南東にドニエプル川岸に続く緑の公園を行きウクライナ的色合いである淡いブルーに金色の縁取りのエカテリーナ女帝の寵臣マリンスキー宮殿の前に立ち、眼下のドニエプル川の向こうに新興高層アパート群を遠望する。そして川沿いを更に南東に遠ざかって、戦没者慰霊碑（オベリスク）を訪ね、更に行って大聖地であるペチェルスカ大修道院の門（壁に地下埋葬された聖人達の集団絵）を潜る。院内に聖三位一体教会（一二世紀の姿）やウクライナ歴史文化財博物館（スキタイの黄金首輪等）等見学、余りにも広く沢山。転じて郊外の民族建築と生活博物館へ。館というが広大な野外に一七～一九世紀中心とする教会（木製）や茅葺の農家（シェフチェンコ生家等も）、学校遺構等が点在。さくらんぼや胡桃等の果樹があちこちに、また野の花々が咲いている。漆喰の白壁と薄暗いオンドル風の暖房と簡単な木製ベッドとテーブル、調理場・家事場といった狭い二～三部屋の土間の部屋があるだけの小さな家。住み込み教師の生活部屋が一つついた、小さなせいぜい二〇人ぐらいを収容する質素な教室の一九世紀の学校（それでも裕福な方の子供が通った）。炎暑の中歩き見る。丘の草原に建つ鍛冶屋のパフォマンスに子供達が集まり、歩き過ぎて行く馬達を眺め乍ら屋外レストランで、シシリク（焼肉）、ポテト入餃子等の地元料理とクワーズ（を使った清涼飲料）で昼食。その後市内に戻りウクライナ歴史博物館でスキタイの遺物や今日迄の膨大な歴史資料等を見、シェフチェンコ通りに出てキエフ大やシェフチェンコの像を見、ウラジミール通りに曲がって黄金の門（ヤロスラフ賢公がキエフ市街を取り囲む城壁を築いた時の門）を垣間見て、ウラジミール聖堂（一九末完成の教会、内装が美しい）を訪れ、聖ミハイル修道院の鐘楼に登ったり、その前のミハイル広場でオルガ像（王朝を開いたリューリックの子キエフ大公イーゴリの妻オルガ。母オルガを摂政としたスヴェトスラフ、その子ヴォロディミール聖公はキリスト教【正教】を国教化、その孫ヤロスラフ賢公【1019即位～1054】の時代がキエフ・ルーシの最盛期。オルガは最初の正教徒）を見たり、古物市のあるアンドレイ坂に建つアンドレイ教会（エカテリーナ女帝のキエフ来訪を記念して建立）を訪ねたり、前の広場にフリメニツキー（コサック首領としてロシアからの独立闘争に敗れる）の騎馬像のあるソフィア大聖堂（ヤロスラフ賢公の勝利を記念して建立、現存最古の寺院）の辺りを散策したりして宿に。途端に精力的な歩きに三人顔を見合わせた。

身支度の上一八時、ホテルから船上レストランフトロークへ。民族衣装のウエイターが立ち回る中、ドニプ

ロ（ドニエプル川のこと）の流れを眺めながら、ユーリア、カーチャと民族料理を堪能、トマト料理などのサラダにヨーグルトベースの野菜スープ・ボルシチ（ロシアと違い野菜味）、牛のシシリク（シシカバブからきているのか、鳥・豚・牛あり）・チキンカツレツ（キエフ名物でジューシー）等。飲み物は地元ビールのあとノンアルコールのクワーズやその果実酒、デザート。目まぐるしくキエフ・ルーシの歴史・文化・自然を行ったり来たりした昼の疲れもとれ、ホテルのベッドで熟睡した。重い歴史を背負う千年の美都を歩き回った訳だが、初日の為か足裏はしっくりと馴染んでいない。

（キエフ―オデッサ）

翌日は九時発、高速道路で一路オデッサへ。まさに大平原、小麦・馬鈴薯・玉蜀黍・向日葵・一区画だだっぴろい畑がどこまでも続く、一定の間隔で緩衝林が現れる。小麦は刈り取り後の焼畑が目立つ。名作「ひまわり」の撮影は実はモスクワ郊外でなくウクライナとか。

途中ソフィスカの広大な庭園を見学。森の中の湖沼に集う水鳥、優雅な意匠の噴水、荒々しい流れの岩場に落ちる滝、それを眺め渡る流麗な橋があるかと思えば、一面に広がる花畑といった回遊の楽しさ。流石ポーランド系貴族ポトフスキーがギリシャから来てその美貌と魅力で当時の王侯貴族を魅惑した妻ソフィアのため精魂込めて造った（一八世紀末）大豪壮庭園。大平原の中の広々と囲まれた森といった印象、反射的に大平原の広さを強く印象付ける。

大平原のパノラマとソフィスカの森の深さ、それで十分といった一日、足裏もウクライナに馴染み落ち着いてきた。夕刻にはオデッサの街に到着、市内を迷いつつ一五〇年の歴史あるロンドンスカヤホテルに到着。部屋で暫し仮眠疲れを取りシャワーを浴びてから、カーチャの案内で街へ出て近くのイタリアレストランで遅い食事をとって帰還。夜の静寂に古びたレンガ造りのホテル入り口の壁に、横向きに幹を伸ばしたホテルと共に生きたプラタナスの老樹が、薄暗い灯の光に大蛇がのたうつような奇形な影となって映り浮かび上がっている不思議。これから巡るオデッサを象徴しているような感じがした。

（オデッサ）

七日朝九時ホテルに少し遅れてガイドのナターリア到着。交通渋滞の為とのこと、その遠因はカタコンブ（地下の墓）が巡らされており地下鉄建設困難なためと説明。（後刻、これが時間不足でカタコンブ見学省略の訳であったこと判明）早速飛び出すと、前のブールバール・プリモルスキーのマロニエの並木を海に向い左へ。やがて右手に有名なポチョムキンの階段、左を見上げるとリシュリュー伯の像。グレコ・ローマン的衣装をまとっているので、知らない者だと見過ごしてしまうだろうが、まさにオデッサの発展の礎を作った初代市長である。

一八〇三年、アレクサンドル一世によって市長に任じられ一一年迄の間街づくりに専心、自由貿易都市としての繁栄の基礎を築いた。ナポレオンなきあと故国に呼び戻され首相も務めた。彼の奇跡と呼ばれる程の貢献でオデッサは帝国第三の都市となり、大港を作り、様々な補助を行い、進歩的法制を作り、農奴制をなくし、この自由都市に国内外から農民・商人・文化人が進取の気を持って集まった（一三〇強の領事館等各国出先が既にあったとのこと）。一代置いて市長を二〇年務めたヴォロンツォフ公爵（名門）と並んで名市長として今でも慕われている。

その像の見下ろす巨大な階段の先に港と黒海がある。木製のリシュリュー階段が彼の私邸に通じる道としてあったが、一九世紀半ばに石の階段として世界的に有名な五つのうちの一つとしてオデッサ階段が完成した。約二〇〇段（今は道路で八段欠けている）、一〇の踊り場を擁し最上階からは踊り場しか見えず逆に下からは段しか見えず、末広がりで最下段は最上階の幅の約二倍ある（二一メートル）。元は「大階段」と呼ばれたが、有名な一九二五年のエイゼンシュタイン監督になる映画（無声映画）「戦艦ポチョムキン」が一九〇五年革命の際の市民鎮圧殺害場面の長くて残酷な場面の記憶を世界に残して以来、その名をとって「ポチョムキンの階段」となった。

階段脇のケーブルカーで下降、マロニエの並木から崖下に続く林を下り巨大な港へ渡る道路の向こうに港湾施設が蝟集しその先に黒海が水平線迄続いている。そして着いたら今度は逆に階段昇りである。一段を登るのに何歩も要する、息を切らし立ち止まると、あのコサック兵の軍馬の嘶きに雨あられの銃火の音が、そして逃げ惑い倒れ悲鳴を上げる修羅場が目に浮かんでくる。最後に撃たれた母親の手を離れた赤ん坊を載せた乳母車が階段を切なくも落下してゆくあの場面が。息を整え一〇〇段余の中途迄上ると、勿論規模は大違いだが、故郷佐渡相川の海から坂の上の町へ登る長坂の、丁度見返ると樹々や家並みの間に港と海がパノラマのように見える中途一〇〇段余にある踊り場を思い出させるように、港と黒海の昼の輝きが、夏の炎天下まぶしく視界にとびこんできた。

そして踵を返してマロニエ並木を戻るとその先端にプーシキンの胸像がこちらを向いている。危険思想家として追われてプーシキンがやってきた先がこの自由な街オデッサで一八二三年七月から翌年八月迄滞在する。この間オネーギン（ヘトマン首領マゼッパをモデル）を手がけたり（六年後完成）詩作に務めるとともに市民にも忘れがたき思い出を残す。傍らのプラタナスの大樹は彼が毎日その下で思索に耽ったとされる（市長ヴォロンツォフ夫人と恋仲になったが故に去った）。その先広場にかけて続く白アカシアは、緑の無かったオデッサにリシュリュー伯が植え街の木となった。

広場の脇の建物の横に世界各地への小さな横長の黒ボードに距離と都市名を入れ、方向指示器のように立っており、姉妹都市横浜のボードもある。傍にあるポチョムキン号の記念像の脇を登って行くと世界六大オペラ座の一つが修理中ながら偉容を誇っている。一度消失した後ウィーンのオペラ座の設計者が作ったこの建物は正面からみると二階建ての丸みを帯びたパリオペラ座のような優雅かつ荘重なファサードであるが、海からみると丘の上に六階建て位の巨大なオペラ座が聳えて見え目印及び示威になる。エフゲニー・オネーギンの初演はここでチャイコフスキー自らがタクトを振った。

その後エカテリナ広場（市庁舎の裏手）でオレンジ革命のモニュメントを見、教会広場にて、ソヴィエト時代も壊されなかったという二代目市長ヴォロンツォフの大きな像を見、その交差点の反対側にある天井がガラス張りのファサード（元はドイツ商人作る）をくぐり、また、デ・リバフ将軍（エカテリーナが初代オデッサ長官に指名したスペイン出身の将軍、女帝死後息子のパーヴェル一世に罷免されるが、市民に慕われた）の屋敷跡を見て歩く。

昼食後、プリモルスキー通りを反対に辿って東端の陸橋を渡った先の国立オデッサ美術館に閉館前に滑り込む。クラシック様式の宮殿で、一五～一八世紀のイコンやレーピン等のロシア絵画、ウクライナ絵画、モダンアート等。元々ソフィスカ庭園を作ったポトフスキーの宮殿で、ソフィアの住まいでありサロンだった。美貌の肖像画が一枚（作者不詳）。前の通りの名もソフィーフシカ、ソフィスカ庭園で、ギリシャから流れつくようにやって来た彼女が、その美貌と人柄で如何にポトフスキーの妻となりサロンでもてはやされたか、ウクライナのシンデレラ姫のような話が気になっていたところだった。

その後はまた雑踏に戻って、スーパーマーケットや土産物店を覗く。交通渋滞の因はミニバスやトロリー等で足りず、カタコンブの跡があるため地下鉄が出来ず、中央部へのマイカー規制もまだ、というところに。まだまだ、修復中の建造物が多く、昔の美しい街並みを取り戻すにはもう少し時間が要るだろうが、プリモルスキー通りに見られるように元々パリより半世紀早く都市計画に着手、マロニエ並木はシャンゼリゼを思わせる。昔話にパリに行きたいが金が無い向きには「オデッサへ行け」だったとか。それを実感しつつの散策であった。

その夜は、海辺の帆船を模したオープンスペース的なコロンブスというレストランで三人で魚料理。次第に風が強まり、松明状の照明が揺れる。日本食イメージのメニューでその影響（米経由）に驚く。サンブカなる強い酒（アルコールを火でとばし最後は気体を吸い込む）を飲みながら、一句「月赤く　黒海の海　風涼し」。何故か地元出身の作家を思った。イサーク・バーベリ（1894

オデッサのユダヤ商人の子と生れ）の「オデッサ物語」（1920代）は出世作でオデッサ繁栄の裏側を描き出している。ロシア革命直前市人口の半分はユダヤ人、一九世紀後半～二〇世紀初頭の東欧・ロシア各地でのポグロム（集団暴行）を避け多くのユダヤ人がオデッサに流入、モルダヴァンカと呼ばれる地区にスラムを形成、ここを根城とするユダヤギャングは強勢で警察も手が出ず。その物語（本人の幼少期の思い出も）。異国情緒・民族の坩堝・アウトローというオデッサの特徴が描かれている。

本場より早い都市計画を持った東欧のパリと言われたオデッサ。このマロニエ並木のプリモルスキー大通りに、当初から優雅な姿で人々を迎え入れて来たロンドンスカやホテル。一九世紀末年に建て替えられたが、その良き時代を体し続け、前述の庭をも蔽う身をくねらせたようなプラタナスの大木がその証人である。ポチョムキンの階段を上るとリシュリュー伯の像、マロニエの並木をプーシキンの胸像を過ぎて証券取引所まで、海を見下ろしての朝の散策、リシュリューが街の木として植え育てた白アカシアの林越しに見渡す海は一幅の絵のようであった。

キエフでその風物、食事、歩くごとに感じたフランス。オデッサの並木通りは更に足裏にまでパリを感じさせた。パリ改造のオスマン男爵の半世紀以上も前オデッサにパリを造ったリシュリュー伯にも強く心魅かれた。

（リヴィウ）

八日朝ホテル発、昼オデッサ空港からキエフ空港へ。夕方のリヴィウ行きまで待ち合わす。カーチャはリヴィウ行きゲート入りまで一緒に居てくれ、名残を惜しんだ。今度はジェットだが機体は古い、リヴィウ空港ランディングに期せずして拍手。ガイドのアレクサンドル（サーシャ）が迎えてくれホテルへ。

九日はやや小雨の中九時スタート。先ずは旧市北半キロ位にある高さ四一三米の城砦跡へ。一二五六年市記によれば、ハリチ・ヴォリニ公ダニーロが息子レフに因んで築いた城にリヴィウと名づけた。

城は蒙古軍がレフに命じて一二六一年取り壊される。しかし一二七一年リヴィウがハリチ・ヴォリニの首府となり、一二八三年城も再建。そして一三四〇年最後のハリチナのプリンスの死とともに、ポーランド支配が始まる。一三六〇年カシミエシ大王がこの直ぐ右手の山にこの高い城砦を築いた。

霧の中登ったが幸い頂上では晴れてきて眼下に旧市街の中世のパノラマが展望され、市内観光のスタートに相応しかった。旧市街中心に戻る途中、聖ジョルジュ教会に寄る。ギリシャーカソリック（ウクライナーカソリック、ユニエイト）の総本山の役割。スタート点に戻りホ

テル前のスヴァボーディ大通りの中間帯をなす歩行者用マロニエの並木道北辺にあるオペラ座を見学。ウクライナを代表するオペラ歌手ソロミア・クルシェリンスカ（1837-1952）の名前が付けられている。彼女は初めてウクライナの歌を演目に取り入れた歌手でプッチーニの蝶々夫人役で有名（初演の失敗を彼女によって挽回）、長くイタリアで活躍した世界的オペラ歌手。並木道の真中あたりにはシェフチェンコの像。更に南西に道を下がってアンドレイ教会（一七世紀ベルナルディン教団修道院、今はウクライナカソリック教会）を見て回り、その後手前ガリツィカ広場沿いの民芸品青空市場を探訪。

旧市街の中心に位置するリノック広場は、東西一四二・南北一二九米の殆ど長方形の広場で三五〇段のタワーからの眺望は抜群とか。広場の番地は東から時計回りについていて、一番地が市庁舎、四番地が東側向かいの一六世紀ルネサンス様式の黒い石造りの館でリヴィウ歴史博物館、六番地は歴史博物館、十番地は民族誌学・美術工芸品博物館等となっている。この周りの建物を含め順次訪れ見た。ドミニカ聖堂に立ち寄って昼食。建物外見は古いが中は広く現代風回転バイキング風の郷土料理の店。味はよし、混んでいるがスピーディー。

食後、聖アンドレイ教会に立ち寄ってから、市街東シェフチェンコの森の丘にある野外のリヴィウ民族建築・風俗習慣博物館へ。キエフの民族建築と生活博物館のリヴィウ版、西ウクライナ各地からの一〇〇棟位の木造民家、教会、学校等。農家の規模が牛小屋分・各部屋少しづつ広いとか、学校も教師の居住空間が広いとか、水力仕掛けの粉ひき小屋が技術的・規模的に優れているとか、教会の多重屋根の層の多さとか、西と東の気候や自由度や経済力の差が表れているといったサーシャの解説を聞きながらゆっくり見学した。

帰りにもう一度民芸品市場によって買い物、ホテル傍の書店でリヴィウ・キエフ解説本を買ってホテルへ。夜は郊外の元々オーストリア時代に開かれたリゾート地（コリバ）のレストランへ。池に面しコテージに分かれ、奥に共通のログハウス的レストラン棟が、そこでサーシャのお勧めのシシリクや玉葱入りのパンケーキのようなウクライナ料理を。

翌一〇日は東リチャキフの墓地へ。一八七二年オーストリア皇帝の指令で街中より衛生上の問題から墓地を外出しし、四箇所その残る一つがここ。静寂と涼しい濃い緑の中、古色・苔むす彫像や墓石、そして最近は著名人に限定。前述のオペラ歌手や、芸術家からテロリスト（体制側からみれば）迄悲劇性の勝った空間であった。

市内に戻り、アルメニア教会へ（全ウクライナの総寺）。アルメニア人はトルコに追われリヴィウに大挙逃れダニーロの許可を得て、この地に。アルメニアクウォータを形成、リヴィウの棲み分けの特徴はリノック広場を

ベースに道筋によって各記クウォータがかなり載然と形成されていること。例えば北に教会中心にアルメニア、東の城砦跡までの間ルサカ通り沿いを中心にロシアン、東南アルセナール（武器博物館）方面にユダヤ、南西にラテン。

ちょっと歴史的なことに触れると一八四八年オーストリアで四月革命、封建制に終止符、農奴制廃止、リヴィウはガリシア州の首都に、そして資本主義興隆期を迎える。農奴制廃止で更に貧しくなった農民層中心に、一九世紀後半リヴィウにその為のオフィスまで作って奨励したカナダやアメリカ行きに大挙移民の波。また、一次大戦ロシア革命の時期には様々な形が。例えばシベリアに逃れ、そこから香港へ行き英国籍を取り英国へといったケースも。（多分ロシア時代農奴解放後東ウクライナからシベリアなどに移住した人々等の再移動やユダヤ人のアメリカ移動も継続）

サーシャは、大学でガイド学を学んだというように真面目で時間一杯サービスに努め、この後市民憩いの公園（きちんとしたのが三二あると言ったように思う）のうちストリスキー公園に案内される。一八七六～七七、同名墓地を転換、世界中から木や植物を集め公園に。更に昼食もクイックでいけば大丈夫と前日と同じレストランにて済まし、昨日閉館になっていた武器博物館を見学、大丈夫かなと思うほどゆったりと説明を聞きながら見学の後、飛行場へ駆けつけて、ギリギリ搭乗ウイーンへ。今回は中継。着いた夜はホテルでフランス料理。翌日は、ステファン寺院再訪とモーツアルトハウスを見学したのみだが、マリア・テレジアとヨーゼフ親子が育んだウイーンの街は昔の記憶の中で我々にとって落ち着ける街である。そして可哀想な国ウクライナの想い出を心に帰国便のシートに身を埋ずめた。

つづく。

司馬遼太郎の描いた徳川家康（七）

山田嘉久

三「覇王の家」の評価

長編「覇王の家」をはじめ、小説、随筆にいたるまで司馬遼太郎の家康観は信長、秀吉に仕えたときは羊のように従順だが、一転して強烈な攻撃的性格に激変する二重人格に着目していることに変わりはない。

そして家康が造り上げた徳川期の270年間は、司馬にとってはあまり興味の持てない時代であったようだ。

徳川幕府の封建制というのは

〈非常にせせこましい、実にイヤな、人間を小さく小さくしてしまったような時代〉（覇王の家）

であったからだ。

したがってこの本の題名も折角、「覇王の家」としながら家康以降の将軍については全く触れず、家康一代記で終わってしまったのは、読者としては甚だ不満である。

司馬が「覇王の家」あとがきで述べているように、司馬の当初の目的は家康を皮切りにして歴代将軍を取り上げ、270年続いた徳川家（＝覇王の家）の歴史を通観して、その権力思考法に迫るという目的で書き始められた筈であった。しかし当初の構想が早くから破綻してしまったと考えるのが至当であろう。

司馬信奉者の評論家谷沢永一は、司馬が後に名作「空海の風景」を書いたのをなぞらえて本作「覇王の家」は「徳川家康の風景」だと評したが、「空海の風景」は司馬の代表作（昭51年芸術院恩賜賞受賞）となったのに対して、「覇王の家」を代表作として取り上げる評論家が殆どいないのはこの辺の理由によるからであろう。

評論家の中には司馬作品（特に長編小説）の構成力の弱さを指摘する者もいるが、特に丸谷才一の如く「司馬作品は全体の5分の3あたりから雑になる」と酷評さえした。

考えようによっては、司馬の有名な「余談ながら」論もこの欠点をカモフラージュする論法であったかもしれない。

例えば超長編小説「菜の花の沖」全6巻。江戸後期の快男子高田屋嘉兵衛を主人公にした物語で昭和54年4月から3年弱に亙って「サンケイ新聞」に連載された。

そして執筆終了後の洲本市での講演で、司馬は聴衆にこう呼びかけている。

〈人の偉さの尺度を英知と良心と勇気ということにすれば、江戸時代を通じて誰が一番、偉かったでしょうか〉

一般的に云えば、幕府を作った徳川家康もいれば、これを倒した坂本龍馬、吉田松陰や西郷隆盛だっている。しかし司馬は云う。

〈私は高田屋嘉兵衛だろうと思います。それも2番目が思いつかないほど偉い人です。世界史的に見ても偉いひとでした。〉（司馬遼太郎全講演3）

しかし彼がそれほど惚れぬいた嘉兵衛であったが、この長編後半の第5巻では最初の数ページを除いて主人公嘉兵衛は全く登場しない。

この間、300頁以上に亙って好きな主人公を抜きにして当時の「ロシア事情」を余談として記するのである。「ロシア事情」「続・ロシア事情」「レザノフ記」「カラフト記」「暴走記」「ゴローニン」と延々と続く。

この辺を丸谷は「5分の3あたりから雑になる」と指摘したのであろうが、主人公を抜きにした「余談」は読者のみならず、当の編集者たちもヤキモキさせた。編集会議でも、いつ嘉兵衛は戻るのかが話題になったし、ようやくロシアの時代が終り、担当記者が「嘉兵衛船」という原稿を受け取って帰社した時には一同胸をなで下したという笑い話が残っている。

一方でこの「余談」は小説とは別に評価され「ロシアについて―北方の原形」の題名で発刊され昭和62年読売文学賞（紀行賞）を受賞している。

司馬は前作の「坂の上の雲」執筆当時から、隣国ロシアについて深い関心を持ち続け、この国の本質を探究していたのである。

更に一昨年のロシアのウクライナ侵攻によって、このレポートが再認識されている。

ついでに嘉兵衛についての余談。

昭和40年代にベストセラーとなった「日本の歴史」（中央公論社）でも歴史家北島正元は嘉兵衛を取り上げているが、その文中にこうある。

「かれ（嘉兵衛）はいつも二人の妾（原文のママ）を連れて航海したといわれる精力的な男で」

そのため彼の妻は精神異常をきたし離婚に至ったのは史実のようだが、司馬はこのような主人公のマイナスの部分については全く触れようとはしない。この辺りが前号で少し触れた司馬特有の「決めつけ人物論」の典型

であろう。

（かって放映されたＮＨＫドラマ「菜の花の沖」では司馬原作を尊重しながら、この辺にも若干触れていた。脚本竹山洋　嘉兵衛役　竹中直人）

代表作「坂の上の雲」はどうであろう。

〈まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている〉

この有名な文章で始まる長編物語の主人公は日露戦争に功あった秋山好古、真之兄弟と友人の正岡子規の三人であろうが、前半の主役はあくまで司馬の好きな子規である。

そのため第二部で子規が没すると**〈この小説をどう書こうかということを、まだ悩んでいる。子規は、死んだ〉**と作者自身が率直に悩んでいる。そして

〈当時の日本人というものの能力を考えてみたいというのがこの作品の主題だが、こういう主題ではやはり小説の主題になりにくく…〉。

司馬は複雑な思いで筆を進めてゆくが、後半の主題は秋山兄弟ではなく、日露戦争そのものになってゆく。

したがってこの作品の文学的評価はやはり子規の活躍した前半であろう。

主題の「覇王の家」に戻ろう。

そもそも、題名の「覇王」もあまりいい意味には使われていない。辞書を引くと、「覇王とは徳によらず「武力」や「策略」によって天下を治める人」とある。

元々は孟子によって生まれた言葉だそうで、覇道の反対語は王道である。孟子は王道こそ理想として覇道を卑しいものとした。（尊王卑覇または尊王賤覇）

孟子のいうこの思想が日本では、王＝天皇、覇＝武家政権と解釈されたようだ。（「司馬遼太郎の考えたこと」）

戦国時代の天皇家は概して「豊臣家ひいき」であったが（後陽成天皇の聚楽第行幸など）反面、家康との関係は必ずしも良好とは言えなかった。家康が天皇家や公家の行動を規制する「禁中並公卿諸法度」を制定したことも影響しているであろう。

元和３年（１６１７）、家康の死後、２代将軍秀忠が上洛した際、時の後陽成上皇は家康についてこう語ったといわれる。

「家康は戦国の世に生きたのでその行いには王道に反することがあった。汝は治国の将軍。殺伐な世を終わらせ仁政を施せば子孫は繁栄するであろう」

（「明良洪範」）

３代将軍家光の時代には後水尾天皇を二条城に行幸を仰ぎ、天皇家と将軍家の融和を天下に示した。しかしその後、後水尾天皇は「紫衣事件」（幕府に諮らず大徳寺僧侶などに紫衣着用を許した。「禁中並公卿諸法度」の違反）を惹き起して退位を余儀なくされている。

此処で江戸時代の京都の天皇と江戸の徳川将軍との関係を一瞥してみよう。

初代家康から３代家光までは上洛して征夷大将軍を拝命している（将軍上洛制）。しかし４代家綱の時代からは将軍は一度も京都に赴くことなく江戸から動かない（将軍定府制）が続くが、幕末、天皇の権威が高まり14代家茂の時代に「将軍上洛制」が復活する。

さらに15代慶喜は在京中に将軍に就任する（将軍在京制）。慶喜は将軍としては一度も江戸に入ることなく大政奉還を行った。慶喜の時代に「将軍在京制」となったのは幕末の文久３年から慶応４年の５年間だった。

江戸初期には徳川幕府は朝廷のある京都が政治の中心となることを怖れた。そのために天皇と大名との繋がりを遮断することに腐心した。

たとえば参勤交代途上に西国の大名たちが勝手に京都に入ることを原則禁じた。ただ例外的に親戚の在京公卿の家に寄ることや京都での墓参は認めたが、それも事前に京都所司代の許可が必要だった。寛永20年には「禁裏付」という幕府の役人が御所の出入り口を監視するようになった。

余分なことだが、司馬の幕末ものに「王城の護衛者」がある。主人公は京都守護職に就いた松平容保だが、この場合の「王城」とは天皇の住む京都御所であり、将軍の住む二条城ではない。二条城は御所の裏鬼門に位置するため皇室の離宮の役割を果たしていた。家康は慶長８年、敢えてこの地に御所守護と将軍上洛の際の宿場所を兼ねた城郭（正式名称は元離宮二条城）を設けたが、実体は御所の動向を探る監視城でもあった。

しかし幕末、家康の子孫である容保は孝明天皇の信頼が極めて厚かった。「汝を最も頼りにしている」との宸翰（天皇自筆の手紙）も頂戴している。容保はこれを就寝の時も身に着け、入浴の時のみはずしたので外部に漏れることはなかった。だが、史実としては最大の朝敵とされてしまったのは「歴史の不思議さ」と司馬は記している。珠玉の短編である。

歴代将軍を取り上げた司馬作品ではわずかに15代将軍慶喜を描いた「最後の将軍」があるが、これは「家康以来の傑物」として世評の高い慶喜を司馬が興味を持ったからではなく、時代が司馬の好んだ幕末期であったからである。

司馬は幕末の政治家タイプを二つに分け、まず革命家の予言者として吉田松陰らが現れ、次に高杉晋作のような実行家、最後にその果実を受け取る山県有朋らのような権力者が生まれると説いたのは有名だが、これを戦国時代の３傑に当てはめれば、「天下布武」の信長は松陰の段階に当たるであろう。次にそれを柔軟な思考でもっ

て実行したのが秀吉で、高杉らの第2段階に当たる。最後に現実家の家康が山県の役割を果たした。

戦国期から江戸期、そして幕末期から明治期への変革の過程もよく似ている。司馬がこの両期を好んだのも頷ける。

この沈滞した江戸時代の重い扉を押し開いたのが、坂本竜馬であり、吉田松陰、高杉晋作たち維新革命の人々だったと司馬は解釈する。

〈**若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押し上げた**〉

代表作「竜馬がゆく」の終わりの一文である。

四　家康の誤算

幕末、薩長を中心とした新勢力が徳川政権を倒したことは確かに史実であろうが、それは幕府に最後のトドメを刺したに過ぎない。

徳川の滅亡の主たる原因は政権自体の長期に亙る制度疲労の結果であった。

幾つかの実例を見てみよう。

1　改易制度の緩和―有力な外様大名が生き残った

家康は全国約3千万石のうち8百万石を将軍と旗本の直轄地に、4百万石を親藩や譜代大名に分割した。残りの6割（1千8百万石）を外様大名に与え、できる限り大名の存続を保証した。頻繁に外様大名を改易することは極力、避けた。

また、大名を別の領地に移す「転封」も慎重な方針を堅持した。いずれも諸大名の謀反を警戒したためだった。

徳川譜代は「鉢植え大名」として頻繁に領地を移したが、外様大名にはこれを避けた。

一方、後継ぎがない場合には容赦なく改易して消滅させた。（無嗣改易制）しかし、18世紀に入ると無嗣改易は急減した。

それまでは当主が亡くなる直前に、急遽、養子を取って家を存続することは許されていなかったが、（末期養子の禁）、この時代（4代家綱）からその禁を緩めたからである。そのため、有力な外様大名はすべて残存することになった。

もし、家康の進めた無嗣改易性を厳格に運用していたならば、のちに徳川幕府を倒すことになる雄藩のいくつかはそれ以前に消滅していた筈である。

2　参勤交代の緩和　―人質制度の廃止

元和元年（1615）に発せられた「武家御法度」により「江戸参勤作法のこと」が定められた。「参勤交代」の先駆けである。

参勤交代は幕府に弓を引かせないための政策として、家康が打ち出し、寛永12年（1635）3代家光の時に制度化された。

水戸藩などの最初から免除されていた（江戸定府）藩

を除いて殆どの藩は江戸と領国にも一年ずつ住むことが義務づけられていたので藩の財政にとって重い負担となっていた。幕府の狙いもそこにあった。

この制度がまず緩和されたのが8代吉宗の時代。諸大名の江戸での生活期間を短縮して自国での期間を延長する制度とした。

この期間の変更は享保年間に廃止され、元に戻されたが、それから更に30年後、文久2年に再び緩和された。14代家茂の時代だった。

幕末に、異国の船が日本近海に現れるようになったことから「参勤交代で費用が嵩み、外国から日本を守るための海防費が出せない」と諸大名から意見具申があったためである。

これとは別に、徳川政権にはもう一つ大名に反乱を起こさせない制度―「大名証人制度」があったが、これは参勤交代制度よりもずっと以前に骨抜きとされていた。

「大名証人制度」とは藩主の正室と嫡子を（大大名の場合は家老などの子を含む）江戸城内の証人屋敷に置く制度で、まず4代家綱の時代に一部緩和され、更に14代家茂時代の「文久の改革」で大名の妻子まで帰国が認められるようになった。

3　城と大船の建造解禁

家康は豊臣家を滅ぼすと、慶長20年（1615）「一国一城令」を発した。「一つの国に一つの城」を原則としたが、一つの国に複数の大名がいる場合は城は大名の数だけ可とするものだった。例えば伊予の国には4名の大名がいるので松山城、大洲城、宇和島城、今治城の4つの城が残った。

しかしこの制度は南九州や東北では徹底されなかった。例えば島津藩。島津家では鹿児島城以外を壊したことにして「麓」と呼ばれる支城を120所近くも残している。

また奥州の伊達家―仙台城のほか、重臣の片倉家の白石城を残したほか「要害」と称する支城を置いている。

出羽秋田の佐竹家―久保田城のほか大館城と横手城の3つも残していた。

このように不徹底な一国一城令だったので、幕末になって「西洋の接近」が生じると一気に崩壊した。

例えば海防の一環として水戸藩が新たに助川城の築城が許可されているし、函館に幕府による五稜郭が造られたのもこの頃である。

また、「大船建造の禁」については、本誌171号で既述した通り家康は慶長14年（1609）5百石以上の船を西国大名から没収し大船の所有と建造を禁止しこの禁止令は江戸後期まで続いたが、嘉永6年（1853）ペリー来航後の老中阿部正弘によって行われた安政の改革の一環として廃止された。大名たちは大船・軍艦を建造保有してもよいとされた。

それぱかりか、その後幕府は長崎に海軍伝習所を作り、幕臣ばかりでなく、後に討幕をする薩摩藩や長州藩の藩士にまで海軍の技術を教えている。

このことは司馬も「この国のかたち」（歴史のなかの海軍）で触れているが、その後、勝海舟の進言により神戸海軍操練所が設置され、勝の私塾「海軍塾」では事もあろうに後に討幕の主人公となる坂本龍馬が塾頭になっている。

海軍解禁の動きが幕府の終焉を速めたことも事実であろう。海軍の再登場は家康の誤算だった。

「大名に海軍を持たせない」政策が徳川政権を長持ちさせる政略だったが、逆に西洋列強から日本を守るにはマイナスに作用した。

明治に入って海軍建設に功績のあったのは山本権兵衛であることはよく知られている。薩摩人である権兵衛は若いころ東京に出て旧幕府の講学（漢学）の機関である湯島の昌平黌（しょうへいこう）に入ったが、郷里の先輩西郷隆盛から「海軍をやれ。ついては勝先生に相談せよ」と云われたという。

海舟は何度も権兵衛の訪問を受けるうち彼を気に入り、ついに食客としたと「歴史のなかの海軍」（三）に書かれている。

なお、司馬は日本海軍の成立過程から、世界史のなかの海軍がすべて侵略のためのものであり、かつ植民地保持用であったのに反して、日本海軍は唯一、防禦用のものであったことを強調している。その原型が明治38年5月、欧州から回航されてくる帝政ロシアの大艦隊を対馬沖で待ち伏せ、これに対して百パーセント近い打撃を与えるべく作られたものであることを指摘する。

いかにも日露戦争を正当化した「坂の上の雲」の作者らしい考え方である。

（なお、このエッセイ「歴史のなかの海軍」（五）は平成8年（1996）2月、作者急逝のため「未完」となった。）

我々は、明治以降の近現代も「家康の作った国」と地続きで暮らしている。現在でも日本人は良きにつけ悪しきにつけ「家康の作った徳川社会」の影響を強く受けているのである。

（終わり）

近代日本洋画家論考
【painter & traveler 川島理一郎の画業を回顧する・昭和戦前戦中篇】

水谷嘉弘

川島理一郎は、1886・明治19年栃木県（現）足利市の生糸商家に生まれた。事業に失敗して渡米した父を追い1905年、19才の時海を渡る。ワシントンのコーコラン美術学校、ニューヨークのナショナル・アカデミー・オブ・デザインを卒業して1911・明治44年渡欧。日本人画学生が学ぶ定番だったパリのアカデミー・ジュリアン、アカデミー・コラロッシに入る。1913年、東京から来た同じ歳の藤田嗣治と親交し共同生活する。同年、日本人として初めてサロン・ドートンヌに【巴里風景】他1点が入選した。第1次世界大戦勃発時も欧州に留まり、翌1915年アメリカへ。1919・大正8年、14年ぶりに帰国するが3か月後には再びパリに行く。1920年代から1931年までは欧州、1927年から1939年までは中国本土、朝鮮、台湾、1941～1943年にかけて東南アジアを歴訪して制作に励んだ。この間、本邦でも描き続けた。

戦後は文部省の依頼でパリにフランス画壇の現況視察に赴いた他、日展の審査員、役員を務める。日本芸術院会員でもあった。1971・昭和46年、85歳で長寿を全うした。パリを訪れること生涯通算で10度、滞在期間も長く我が国近代洋画史における代表的な国際派の画家である。painter&travelerと称したい。

本論は川島の太平洋戦争期の戦前、戦中の画風変遷が3回のピークに達していると考え、所蔵する作品もネタにしながら書き進めて行く。

1）素描篇（1920～30年代の作品）

手許に painter&traveler 川島理一郎の鉛筆、パステルによる海外風景デッサン（スケッチ）が三点ある。川島の第1回目の画業ピーク1920年代半ばの作だ。彼はこの時期を自ら「緑の時代」と名付けている。

①1924年作【上海】鉛筆画　24㎝×33㎝

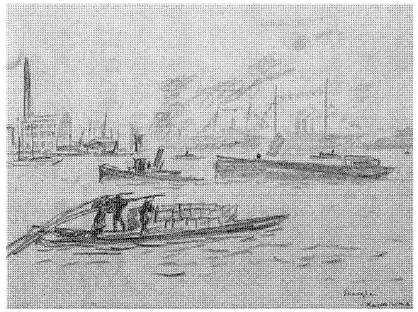
（参考）1930年代～40年代前半【瀬戸内海・卜部造船所】15㎝×20㎝

②1924～25年作【ヴェニス】鉛筆画　25㎝×32㎝

③1927年作【ニース】パステル画　19㎝×22㎝

①【上海】

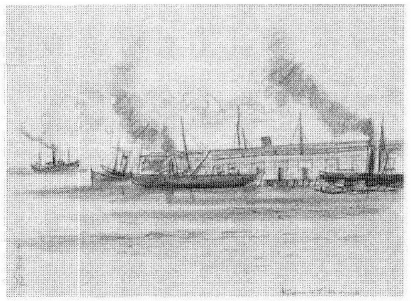
川島理一郎が上海を訪れたのは複数回ある。著書「美術の都パリ」1952美術出版社、には、戦争前まではヨーロッパへは海路が一般的であり（彼は2回辿っている）日本の船はほぼ寄港した、とある（ロシア鉄道を使う陸路もあり彼は3回経験している）。本作は関東大震災後、大林組社長の勧めで中国大陸のみ、上海、蘇州、南京を1か月間巡った1924・大正13年の制作と比定したが、彼にとって1930年代まで何度も目にした光景でありその頃の作かもしれない。



【上海】1924

参考【瀬戸内海・卜部造船所（卜部港）】水彩画

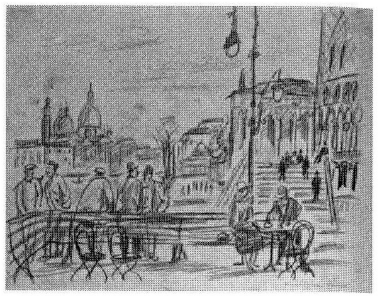
瀬戸内海を航行する船上から（現）尾道市因島にあった卜部造船所（卜部港）をスケッチしたと思われる。1930年代から40年代前半にかけての作か。



【卜部造船所】1930年代～40年代前半

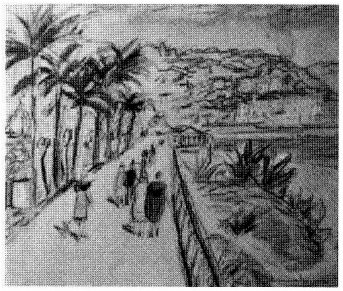
②【ヴェニス】

1924年中国大陸から戻り38歳となった川島は、同年秋、東京大森にアトリエを新築し新婚の妻エイと渡欧する。25年6月に帰国するがこの間の滞欧作は傑作揃いである。パリ、ローマ、ヴェニス、ナポリの風景画が多い。「…一段と自分の信ずるところを決定的にやって見た…巴里と伊太利風景とを漸くにして自分の作としての発表が出来たかに思へた…これらの作品は一般の人達にも認められたやうだった（「川島理一郎画集」序文1933、の



【ヴェニス】1924～25

ち「緑の時代」に改題）」心身共に充実していた時期であり帰国後の7月には国画創作協会に新設された西洋画部門（後の国画会）に梅原龍三郎と共に同人に招請された。年譜には滞欧中にデッサン含め約100点を制作する、とある。



【ニース】1927

③【ニース】

1927年2月、マチスをニースのアトリエに訪ねた折りの作と思われる。川島がマチスと知り合ったのは1913年だが、このニース訪問の時から親しくなったようだ。「マチスは人と話しながらでも、或は煙草を喫ひながらでも、決して鉛筆を手から離さない…私の持っていたスケッチブックを見つけられ…一々親切に批評して呉れて…（「旅人の眼」1936龍星閣）」マチスからデッサンの重要性、常にデッサンし続ける事を学んだという。同年4～5月に東京で開催された第2回国画会展にパリから【ニースのお祭り】他パステル画3点を出品しており、本作も同時期に描かれたと思われる。1951年パリにマチスを再訪して帰国後マチスの作品模写を展覧会に出品している。

川島理一郎がスケッチ、デッサンを重要視し、師マチスの教えに従ってよく手を動かしていたことは、デッサン集を出版しているだけでなく（「自選デッサン集」1947建設社）、数多い著書のほとんどすべてにデッサンが掲載されていることからもうかがえる。基本的には正統的な写実に属するが、フォーヴ的筆致を獲得してリズミカルな線、快いデフォルメが見られる。

素描（デッサン）の話を続ける。川島理一郎の素描仕事を概観してみたいのだ。川島は素描作品を非常に多く残している。文筆を得意とし生涯でエッセイ集を5冊出版したが、自撰デッサン集1冊の他すべてのエッセイ集にデッサンを挿画として掲載している。目次には必ず挿画目次の項があり「緑の時代」は全305ページに挿画が126点ある。川島著作本所収の挿画はレンジも広い。作品として展示されるレベルから、油彩の下絵、挿し絵（説明書きを添えたものもある）、簡略な線描、カットまで、素描の fulllineup だ。

制作年不詳だが挿し絵やカット仕様の余技的な素描が手許にある。作品レンジを知る一助として画像を載せる。



川島がデッサンに打ち込むようになったきっかけは、既述したように1927年2月の南仏ニースへのマチス訪問だったようだ（マチス58歳、川島40歳）。その後、生涯の師と仰ぐことになる。川島はその時のことを「マチス画集」1933アトリエ社に［マチスは…夥しいデッサンを一枚一枚と私の前に展げた。『…画家は平素スケッチをしなければいけない。なんでもかまわぬ、ひまさえあればやるとよい。…』（と語った）］と書いている。栃木県立美術館の杉村浩哉氏は［後年、理一郎の作品の多くに、おびただしい準備素描があるのは、こうしたマチスの教えを守っているのだろう］と「川島理一郎展」図録2002で論じている。素描（デッサン）作品の点数、展示機会が多いだけでなくそれをメインにした展覧会も複数回ある画家なのだ。

では、川島のデッサンはどんなものなのか。

生来の資質だと思われる恵まれたリズム感に、「充實した力で一貫してゐる」と彼自身が評した（「旅人の眼」所収：フリエスとヴァロキエ）オトン・フリエスの影響をうかがわせる筆致が加わり、マチスに学んだ「手を休めず常にデッサンし続けること」から出来あがっている。対象を良く見て穏当で的確な写生をベースに軽妙な線、ちょっとしたデフォルメも入る。自由だが手の込んだ描き方である。面白みや洒落た味がある。油彩画にも共通するが必ずと言っていいほど点景人物が登場しその描写が極めて巧みだ。

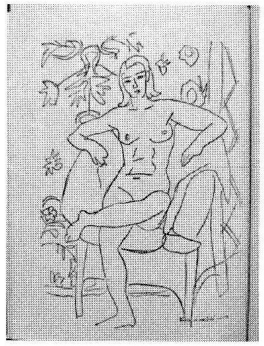
時系列でみるとアメリカからパリに渡った1912年（26歳時）アカデミー・ジュリアンで勉強した頃のアカデミックな人体デッサンを除くと、油彩のモチーフに呼応して1920年代～1931年（欧州）、1934年～戦中期（満洲・本邦・中国大陸（北支、南支）・東南アジア）、戦後期、1960年代（最晩年）に大別される。描線の長短や硬軟、陰影のつけ方に違いはあるが晩年の半抽象作品以外、手の込んだ丁寧に描かれたデッサンは同じ印象だ。画集、展覧会図録、エッセイ集などに掲載されている各時期の代表的なデッサン画像は次の通りである。



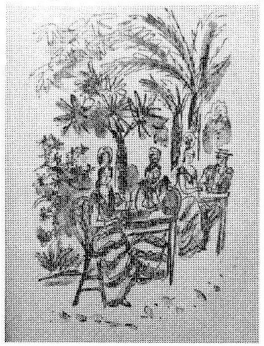
【ベニスの祭日】1925



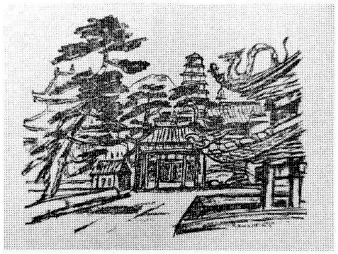
【巴里の仮装音楽会】1926



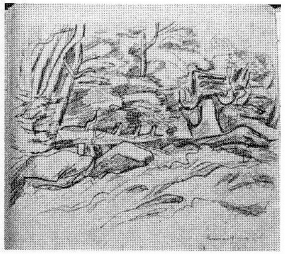
【椅子にかける裸婦】1931



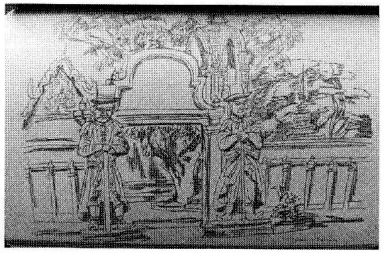
【樹下のカフェー】1933



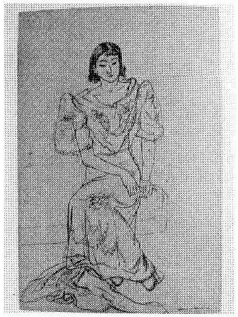
【須弥福寿廟境内】1934



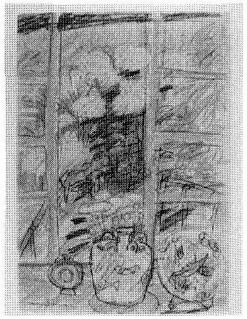
【奔流（日光）】1936



【ワットポー寺院の巨像】1941



【フィリピン服の女】1943

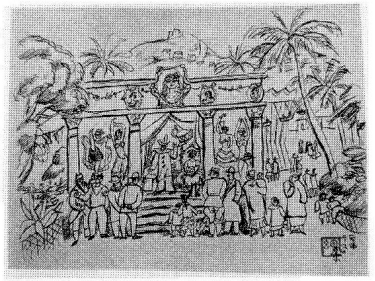


【窓】1959

挿画がふんだんに入った戦前戦中の欧米・中国大陸紀行のエッセイ集、「旅人の眼」1936、「緑の時代」1937、「北支と南支の貌」1940、の3冊が刊行されている。1941年と42年のタイをはじめとするインドシナ紀行は出版されなかったが、「みづゑ」440号1941年6月、「新美術」17号1942年12月に、スケッチグラビア各8点が確認できる。綿密に描き込んだ秀作が多い。

（1957・昭和32年5月、前々年創立名誉会員となった新世紀美術協会第2回展に中国、東南アジアスケッチ90余点を特別展示している）

これら紀行本、紀行記事の挿画になった風景スケッチを原図とする油彩画も多い。両者を上下に置いてみる。（刊行本画像、雑誌画像）



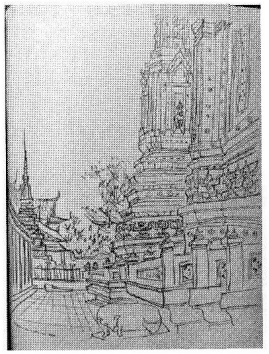
【南仏ニースのお祭り】



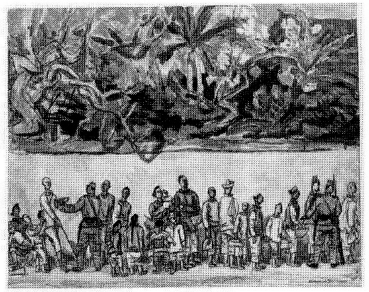
【ニースの祭日】1927



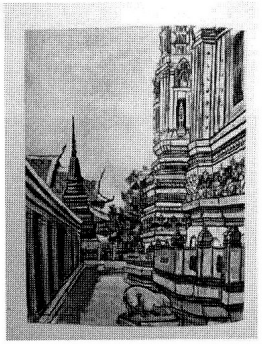
【広東避難民】



【ワットチェン（ママ）の塔】



【施米】1939



【バンコク・ワットアルン塔】1941

川島に「素描雑記」というエッセイがある。（前出「自選デッサン集」所収）説得力のある文が書かれていた。「自然の力の流れとしてのリズムは…枝の形…幹の延び方…葉の重なり方などにはっきり感じられる」と言い、「木の葉は太陽に向かって一つも重ならず、勢いの良い枝があると他の枝はその下から逃げて他の方へ伸びてゆく」と続ける。そして「芸術的に良い形のものは必ず同時に自然のリズムに順応した形であらねばならぬ」とメる。人体における皮膚と筋骨の相関、水の流れと岩の形の相関等々目に見える形態は必然と述べる。それを過不足なく表現するのが芸術の本領と確信しているようだ。この世に存在するものが持つ必然のリズムをまず線描で捉える試みが川島の素描なのである。デフォルメがあっても崩れることなく、一見錯綜しているようでも描写する対象が混乱せずその姿を伝えてくるのは描く者にそういった強固な認識があるからであろう。

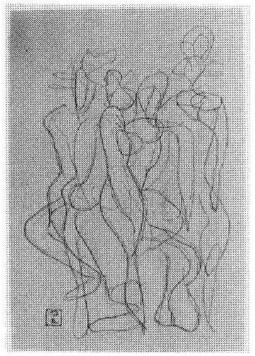
参考までに戦後作品の下絵デッサンと完成油彩画も挙げておく。（図録画像）



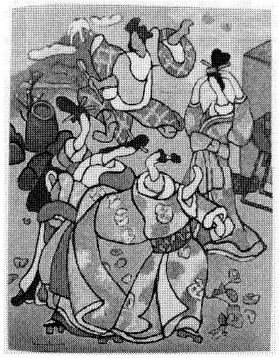
【婦人】



【置物の犬を前に】1960



【浮世絵の誘惑】



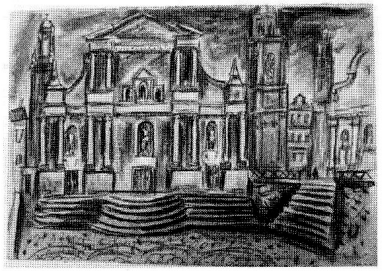
【浮世絵の誘惑（その2）】1969

2)パステル画篇（1920年代の作品）

川島理一郎はデッサン展（展示）の多い画家だが、同様にパステル画展（展示）も多いことが気になっていた。ざっと年譜を見ても自身が制作に確信を持った1925年7月の（滞欧）新作画展では全87点中パステル画が13点ある。翌々27年の国画制作協会展にはパリからの出品4点全てがパステル画だった。戦後も1951年フランス視察からの帰国展展示は現地での模写66点がパステルと鉛筆、54年開催の51年パリスケッチ出品はパステル20点、といった按配である。川島にとってパステルは重要な画材といえるのだ。彼が「美術手帖」1948・昭和23年11月号に寄稿した文章を（要約して）引用する。[自分のパステル画は色で描いたデッサンである…デッサンにつける色彩は水彩絵具、時に油絵具を用いるが…かなり以前からこのやり方に不満…デッサンと色彩は離れたものではない…（パステルは）デッサンを描きつつ色も出せる…印象を即座にまとめる美点…自然を凝視して表現に強い情熱を盛り込む…自分の骨肉を分けた作品そのものである…（パステル画について）] 戦後の文であり戦前のパステル制作と合致しない点もあるかと思うが、明快な色彩を自由に手早く駆使する描き方は終生を通して川島作品の本領たる所であり、彼がこれを好むのも故あることなのだ。



【パリを行く】1920年代中頃
クレヨン画 25cm×38cm



【イタリアの寺院】1924～25
パステル画 32cm×47cm

所蔵するパステル画の題材は、パラーディオ様式と思われる建物だが比定出来ず制作年代も判定が難しい。色調、描法等から記載の如く推定した。

3)クレヨン画篇（1920年代の作品）

川島のクレヨン画が到来した。素描家でカラリストの川島がクレヨンで描いても何ら意外には感じないが寡聞にして知らなかった。手元にある何冊かの展覧会図録にもクレヨン画は見当たらず、毎日オークションの過去落札データにあたってやっと1枚探し出すことが出来た。画題は【パリを行く】となっていた。屋外の遊園地とおぼしき会場に多くの観覧者が後ろ姿で立ち止まっている光景が、鮮やかなクレヨンの色をふんだんに使って手の

こんだ線で描かれている。

データ画像と入手した作品のイメージ、色使いは全く同じと言っていいほど似ている。更に支持体である紙のサイズも25×38cmで合致していた。同じスケッチブックに同じタイミングで描かれた絵と判断しても差し支えあるまい。制作時期は、川島が初めて自身のスタイルに確信を持ち自ら「緑の時代」と名付けた1925年代半ばから後半にかけてだろう。屋外に多くの人々がたたずみ何かに見入っている光景は1920年代、1930年代の滞欧作品によく見られる定番とも言えるものだ。上半身を三角形で描かれた帽子を被る男性の後ろ姿は見覚えがある。場所はパリ、ニース、ヴェニス等々である。鉛筆画、パステル画に続いて、クレヨン画を【パリを行く】連作の1枚として紹介しておきたい。

4)油彩画小品篇（1930年代中頃の作品）

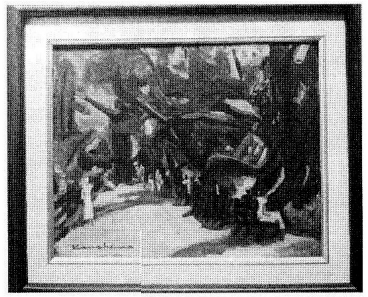
考察を油彩画に移していく。経済的な側面や活動の拠点確保の観点からであろう、川島は1919・大正8年、14年振りの帰国の時から定期的に個展、作品頒布会を開催しており後援会も組織している。それらも要因の一つと思われるが川島には小品が多い。美術雑誌「造形」昭和31年4月号には小熊捍理学博士が［…川島君には大作が少ない。上野の展覧会作でも小さいものばかりである。然もその小さい画から大きい効果が出ているのをいつも不思議だと感じている。これは恐らく色彩による構成が原動力になるのであろう。現に私は二号という極く小さい板に画いた裸婦の全身像を壁にかけているが、この小さい画面が不思議にも広い壁面をドッシリとおさえているのにおどろいている。］と書いている。川島作品の絵の特徴を捉えている文章であり長目に引用した。大型の油彩画は多くがミュージアムピースやコレクターアイテムとなっている。私が入手出来たのはSMから3号程度の小品5点であり本篇はそれらを題材にして綴っていきたい。（大作が少ないのは traveler に起因しているかもしれない。晩年は自宅アトリエ制作の展覧会発表作など大型作品も多い）

1933・昭和8年の日光、1935・昭和10年の東京を描いた風景画と、1935年頃作の少女像である。第2次ピークとなる1930年代半ば（昭和10年前後）の筆致の重い作品群である。東京風景3点は1935年11月銀座伊東屋で開催された第三回川島理一郎個人展覧会出品作である。同展は「東京風景と花」と題され30点が展示されたが画題がほぼ判明している。出品目録には画像が10点ありと【尾張町筋の夜】【日比谷公園】はそのうちの2点だ。目録には［今回の個展の作品について愉悦を感ずることの出来るのはこれらの作品が悉く私の純粋な画的生活から

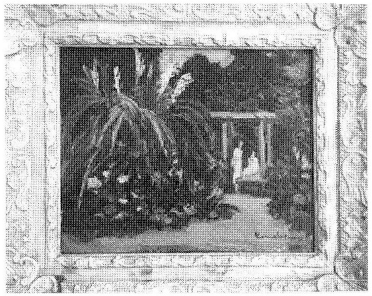
の所産だったことである…最も自由なまた最も純粋な表現への努力だったと云ひ得るやうに考へる」と記している。同年5月に報じられた帝展改組（所謂、松田改組）を受けて各団体の役員を辞し、また退会して画壇に距離を置いた事を言っているのだが、言葉と裏腹に重くなり始めた筆運びに彼には珍しい筆の跳ねが残る粗いタッチが加わって、私には彼の秘めた憤慨が感じられる。



【尾張町筋の夜】1935（3号）



【日比谷公園】1935（3号）



【秋の百花園】1935（3号）



【夜叉像三代将軍廟】1933（SM）



【少女】1935（SM）

ここで、川島画業の第1次（1920年代半ば）、第2次（1930年代半ば）の画業ピークについて振り返ってみたい。

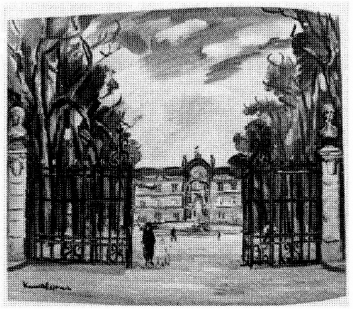
川島は生涯2度にわたってその作品群を大量に失っている。1923年の関東大震災と1930年末のインド洋での欧州からの貨物船沈没である。そのため、初期の滞米滞欧作品（個展のため資生堂に約200点保管していた）と、1930年5～11月の滞欧作品（フランス、スペイン）を観ることができない。

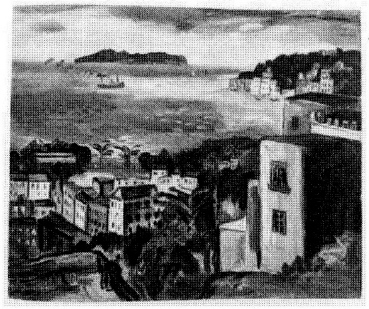
前者の方は画業の初期（1910年代）から第1次ピーク（1924年秋からの2度の渡欧）に至るまでの展開期、後者の方は第1次ピーク（1920年代半ば）と第2次ピークの1933年から1936年にかけての日光、承徳（旧満洲）、東京での作品群とを繋ぐ時期のものである。それぞれミッシングリンクとなってしまい残念である。川島自身、[震災の時は東京市民挙っての災害であっただけにまだあきらめられる点が多かったが二度目の出来事は一層自分にとってショッキングであった。それはスペインでの制作数十点を…（失ったのだ）]と記している（「貴重な経験」1936「旅人の眼」所収）。しかし川島は逆境に強い画家だ。[私は、これを単なる天災とは考へなかった…描き直して来いといふ神の声であると信じた一度描いた時より二度目の方が更に良いものが出来るのは勿論である（同上）]。二度の作品群消失のあとに新たな画風を確立し二度の画業ピークに達したのである。

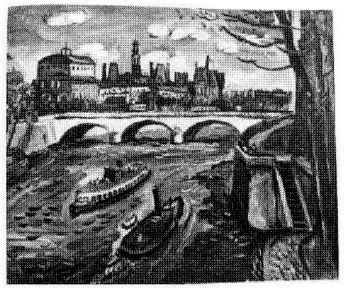
第1次ピークの「緑の時代」については素描篇で同名のエッセイから引用して述べた。川島は続けてこう書いている。

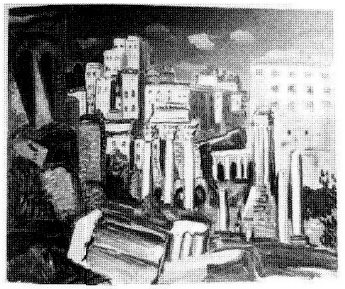
[その頃から（註：1924～25年）私には写実の力強さが最も必要になって来て「緑の時代」に這入った…緑一色の世界、その諧調から成る深さ、廣さ又空間的な實在性と自然の躍動の素力の把握による作品へと進んで、「セーヌ風景」や「巴里郊外」「森」などの作品は、更に続く次の渡欧（註：1926～27年）による収穫である]

「緑の時代」にあたる1924年から27年までの2度の渡欧期作品は躍動感ある筆運びが心地よい。緑色もさることながら、青色がより美しく感じられる。青と、勢いを感じさせるタッチが呼応して画面を大きく見せ拡がりを与えている。（画像は全て展覧会図録掲載）

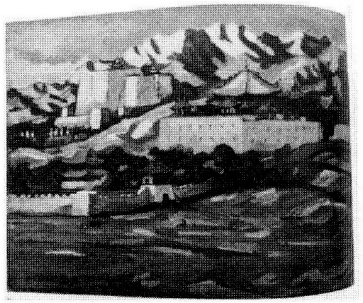

【リュクサンブール公園】1925

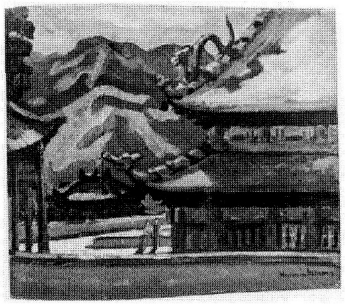

【ナポリよりポッツオリを望む】1925


【セーヌ風景】1926

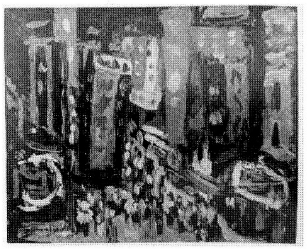

【古羅馬の跡】1926

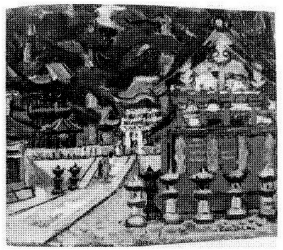
それが1930・昭和5年末の欧州からの貨物船沈没(二度目の作品消失)の報を受けてスペインにとんぼ返りした頃(後援者である大林組大林社長新宅に搬入する家具等の再調達のため)、筆運びの重い艶やかで厚い塗りにとって代わったのである。栃木県美杉村氏の表現を借りれば「さらさらすいすい」から「どっしりぐいぐい」へとなる。当時の作品評には「革のような柔軟なマチエール」とあったようだ。言い得て妙、である。


【承徳大観】1934


【須弥福寿廟承徳黄金之龍】1934


【緑陰】1935


【夜の浅草】1935

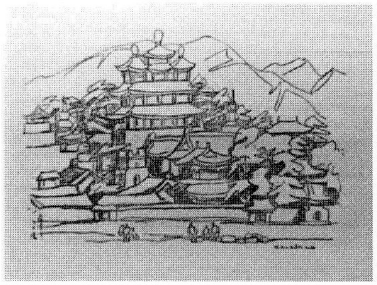

【東照宮】1933～36

1933年11月、夏から秋にかけて日光で取材した24点の発表を皮切りに、翌34年満洲・熱河省承徳(現・中華人民共和国河北省)、35年東京、36年日光の風景を題材とした制作が続いた。

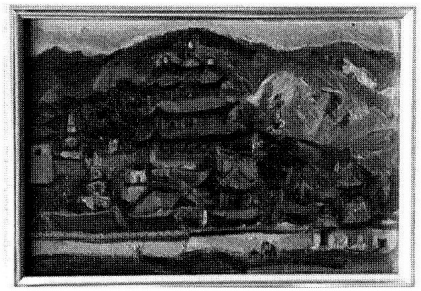
ピークの1回目から2回目への画風の変化、1930年代初頭からの変化は、川島が「1928年以後のマチスの傾向は、厚いパットで原色に近い色を入念に塗っている…色と色との対比が実によく、一重の重厚さと力強さをさへ感じさせる(マチスを語る)「マチス画集」1933アトリエ社所収」と述べたマチスの画風変化に呼応しているように思われる。タイムラグがあるのは試行の期間と、日本、中国本土をモチーフとした時にその風土が新たな描き方にマッチしたためではないかと考える。

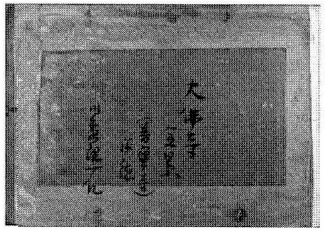
1935年の個展では東京風景をモチーフにした作品を発表したが「昼間の東京は…構造的な力強さを欠いている(のに比し)…夜になると驚くべき美しさを現はして来るのを知った…東京の夜景が…色と光による近代的な美しさ…新鮮な表現の展開であると思った…内容に伴ふ形式の新しい発見へ自身の努力を傾注した(東京風景)1935「緑の時代」所収」と書いている。前掲したように賑わう繁華街や花火の夜景を描いた作品が多い。

「緑の時代」1937龍星閣、には1934・昭和9年の熱河訪問を書いた「承徳の景観」の章があり【熱河大佛殿】と題されたスケッチが掲載されている。同じ構図で額裏に【大佛寺全景】と記された油彩画を持っているので並べて挙げる(出来はスケッチの方が良さそうだ)。

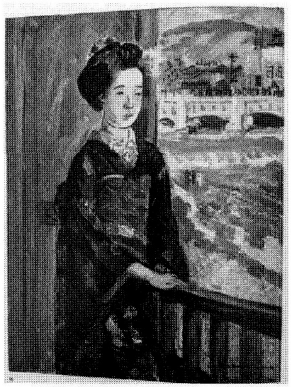

【大佛寺全景】1934(挿画画像)

さて、3回目のピークに入る前に、時は遡るが1922年末の帰国船で親しくなった中沢弘光と共に訪れた京都奈良（1923年3月）で描いた油彩画秀作【舞妓】について触れておきたい。1回目ピーク前夜の頃である。下記画像右の作品（10号）は資生堂・福原信三氏旧蔵、その後著名なコレクター野原宏氏が所蔵していたが2022年暮れ、足利市立美術館での川島展開催を記念して同館に寄贈された。2002年展覧会図録掲載の同名作品2作の連作といえるが、自由闊達な筆遣いと色遣いが若い舞妓の艶やかでややアンニュイな姿と表情を存分に写している。この後、この時期までの作品は関東大震災で烏有に帰すことになるが、これら舞妓3点は、川島が［震災の翌年私は支那へ渡って…風物を最も新鮮な気持ちで描いてみた…それは即興的なものではあったが…始めて自己を発見した快味を覚えた物であった（緑の時代）］と書き、続く渡欧で第1次ピークを迎える直前のミッシングリンクの最後部に位置する重要な作品群といえよう。


（SM）


（SM ボード裏面）


【舞妓】（水谷撮影）1923


【舞妓】（図録画像）

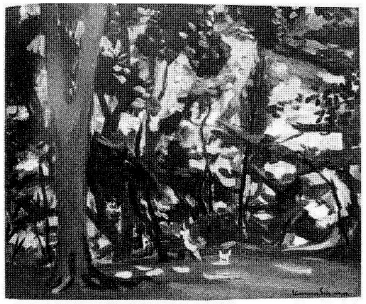

【舞妓】（図録画像）

5）油彩画秀作篇（1930年代後半の作品）

その後再び筆致が軽くなる。ストロークが流れ明るく爽やかな画風になり、カラリストの貌をはっきりと見せる。それが3回目の画業ピークである。2回目（1933～36年）と3回目（1936～43年）のピークは時期的には連続しておりこの約10年間の川島の充実ぶりは目を見張るものがある。変化のスタートは1936年春から秋にかけての日光滞在である。

3年前の日光では東照宮周りの宮社や彫像が主たるモチーフだったがこの時は「水」をテーマとしていた。［私はいま水を見詰めて暮らしている。渓流と瀧とを今年の研究対象に選んだ私は、水との睨つこが毎日の日課である（水流への凝視）「緑の時代」所収］。2～3年続いた革のようなマチエールが森の中の樹木を描き、河川を流れる水を描写するうちに筆運びの速度が増してきたように思う。そしてモチーフが水を離れ中禅寺湖の湖畔に至った時点で、絵の印象は一変する。

1937年11月「緑の時代」の刊行が一つの区切りとなったかのように、1938・昭和13年陸軍省嘱託となり、5月北京、翌39年1月広東、10月大同を訪れて制作する。この間の紀行文とスケッチが1940年7月刊行の「北支と南支の貌」龍星閣にまとめられている。その後も41年と42年にタイ、43年にフィリピンに行く。


【緑陰】1935頃（図録画像）


【奔流】1936（図録画像）


【湖畔の林】1936（図録画像）


【九龍壁】1938（図録画像）

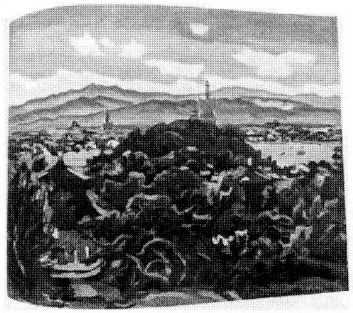
第3次ピークの制作は北京での風物描写が質量ともに秀でている。広東に比し北京には歴史的な建造物が多く、それが自然の風景と調和していることに感銘を受けたのだろう。南支訪問時の作は民衆の生活、街頭風景が中心で「北支と南支の貌」所収の文章も同様だ（タイとフィリピンでの制作にも同様の違いが見出せる）。緑、茶、青が基調だった滞欧作と比べると赤、黄が加わり明度も高くなって、カラフルでとっつきやすいこなれた絵なのだ。円熟の味、と言ってよい。この時、川島52歳になっていた。

さいわいこの時期の作品は小品よりやや大きめの秀作と思える2点を入手することが出来た。中禅寺湖畔と北京聴鴻楼の写生である。

川島は大量のデッサンを描いた画家だが、それをベースに同じモチーフ、同題の油彩画作品が多い。「湖畔の秋」と名付けた作品も何点かあるが当該作は出来、キャンバス裏面の記名等から1936・昭和11年11月、銀座伊東屋で開催した第4回個展に出品した油彩画12点の一つではなかろうか。因みにこの時期の展覧会出品作の画題は「中禅寺湖畔の春」、「湖畔の朝」、「湖上の霧」、「湖畔の林」（画像前掲）など似たものが目立つ。



【卍字廊】1938（図録画像）



【北京大観】1938（図録画像）



【広東大観】1939（図録画像）



【金とモザイクの回廊】1941（図録画像）

【聴鴻楼（西太后旧居）】は、北京市中央部に位置する紫禁城の西北15㎞に位置する歴代皇帝の別荘兼保養地、頤和園の構内にある。この作品は1940年4月、第5回個展（銀座資生堂）に出品された。また「北支と南支の貌」1940龍星閣の別刷挿画、美術雑誌「造形」昭和32年4月号の川島自選の秀作選集にも掲載されている。さわやかな青空と赤黄に彩られた中華建築の滑らかにすべる曲線が快い。定番の細身女人二人もさりげなく描かれている。

陸軍省嘱託としての外訪はこの後、広東、大同、タイと続き1943年のフィリピン行が最後となり、第3次ピークも終焉する。描く絵は次第に戦地の様相を帯びていったが、川島には、パリ時代起居を共にした藤田嗣治、同じ栃木県出身の清水登之（3人は同じ歳でもある）のような戦闘場面を描く戦争記録画はない。

第3次ピーク時の風景スケッチが到来したので最後に付け加えておきたい。川島がデッサンを繰り返して本画に臨んだことはよく知られているが、色彩を乗せると元の線、タッチが失われてしまう。已む無い事だがデッサン好きには残念至極である。日光で水の流れを追い滑らかになっていく生の線を見たいと思い男体山をスケッチした作品を手に入れた。デッサンには年記がなく、熟年以降の画家はなんとでも描けてしまうので制作年判定は難しい。本作は川島の1936年日光滞在時の何篇かのエッセイや、同年6月15日付け帝国大学新聞に寄稿した「山と霧の表情—初夏の日光を行く」等からその頃の作と推定している。画題は【夜霧の男体山】鉛筆画25㎝×32㎝。手慣れた軽快な線で画面を埋めている。

6）油彩画秀作篇（1940年代初頭の作品）

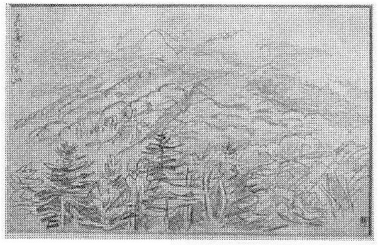
川島理一郎が1941・昭和



【湖畔の秋】1936（8号）



【聴鴻楼（西太后旧居）】1938（12号）



【夜霧の男体山】1936

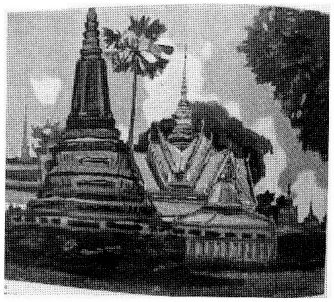
16年のタイ訪問時に描いた作品群についてである。第3次ピーク期間に属する。前篇で中国、北京の頤和園に取材した【聴鴻楼（西太后旧居）】1938（12号）を取り上げたが、本篇はタイ、バンコクの仏教寺院を描いた【ワット・ポー寺院の尖塔】（12号）である。両作は同じ号数、色調、筆致、絵具で描かれており兄弟作のようだ。観た時の爽やかな印象も同じ。背景の青が目に鮮やかだ。

川島は、紀行文とそれに付属するスケッチの多い画家で雑誌等に発表するだけでなくエッセイ集として刊行している。1938・昭和13年陸軍省嘱託となって5月北京、翌39年1月広東、10月大同を訪れたが、これは1940年7月刊行の「北支と南支の貌」龍星閣にまとめられた。続いて41年と42年にタイ、43年にはフィリピンに行ったが、残念ながらこの時の紀行は出版されなかった。戦争が激化したためだろう。雑誌「みづゑ」440号1941年6月と「新美術」17号1942年12月に、インドシナのスケッチが8点ずつ載っている。綿密に描き込んだ秀作が多い。前者に【ワット・ポー寺院の尖塔】の下絵となったスケッチ（同題）が掲載されているので自身が添えた解説文とともに紹介する。（画像下は、川島理一郎画集1973日動出版、年譜タイ作品掲載頁）

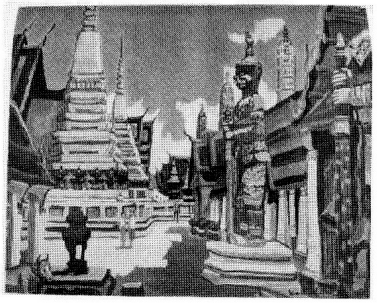
［泰国所見　ワット・ポー寺院の尖塔　泰国の建築は印度風からビルマ式に遷り、漸次シャム化されたのであるが、之等の塔はビルマ式と云ってよいものである。この多くの舎利塔は歴代五族を祀ったものである。（みづゑ440号）］

タイに取材した作品群は1941年9月、銀座資生堂ギャラリーで開催された「泰国風景作品展」に出品された。【金とモザイクの回廊】【バンコック・ワット・ポー寺院】【バンコック・印度寺の門】【盤谷風景】等々。現在ミュージアムピースとなっている秀作も多い。【ワット・ポー寺院の尖塔】と同様、雑誌に掲載されたスケッチを下絵とした油彩画も見出せる。

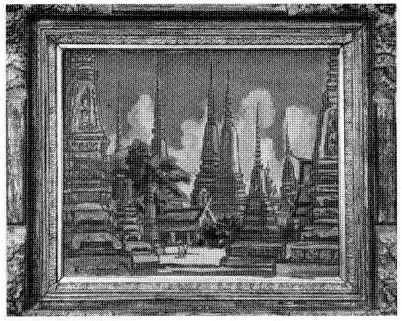
なお、タイ訪問時に描かれた小品（3号）とデッサンがあるので併せて画像を載せる。



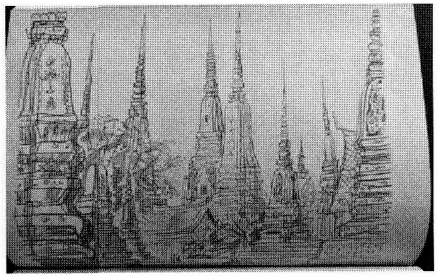
【盤谷風景】



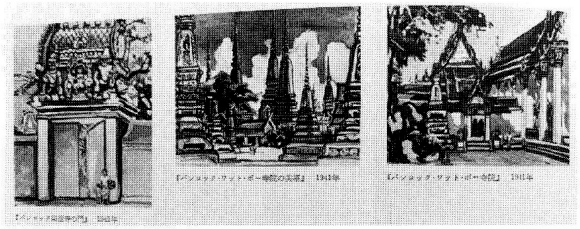
【泰国王宮内ワット・プラケオ寺院前】
（共に図録画像）



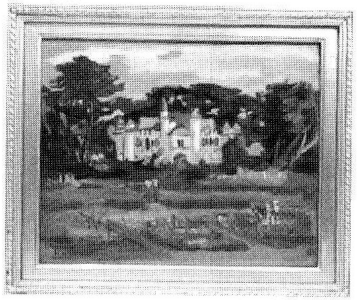
【ワット・ポー寺院の尖塔】1941（12号）



【ワット・ポー寺院の尖塔】デッサン（雑誌画像）



本作（画集画像・中央）



【ナコンパットムの王宮】1941（3号）



【アユタヤの仏頭】デッサン

以上、painter&travelerとして記憶すべき画業を遺した川島理一郎の前半生、昭和太平洋戦争期の戦前戦中の作品を概観してきた。川島はイズムにとらわれたりスタイルに固執しないことが見て取れる。その柔軟性は人と国に依って価値観が異なる事を熟知した国際経験に起因しているのではないか、筆致の変更による表現巾の確保、マンネリ回避といったバランス感覚が働いているのではないか、と考えるものである。自由な描き方には本邦で美術教育を受けた者にはみられないおおらかさがある。また、川島の三度のピーク時作品を通覧して気付くことは生来の資質であろうリズム感である。彼の素描や油彩画は身体性を感じさせるものが多い。運動神経もよかったのではないかとも想像する。

余談だが、風景画には必ずと言っていいほど点景人物

が登場しその描写が極めて上手いことにも留意したい。絵筆のonetouch、twotouchで姿形を捉えている。その巧みさは一歳下の北島浅一と双璧だ、と私は見立てていることも付け加えておきたい。

川島理一郎の色と言えば「緑」が定番である。著作も「緑の時代」「緑の感覚」がありエッセイの題にも「緑のリズム」といった按配だ。「緑」を基調とした作品も多い。しかし作品を実際に眺めると「緑」よりむしろ「青」の方が印象的なのである。栃木県美、足利市美で改めて1925年作の【ナポリよりポッツオリを望む】と【リュクサンブール公園】を観て、「青」の使い方に惹かれてしまった。空や海の「青」が画面を大きくし明るくしている。1920年代中頃の第1次ピークから、本篇で挙げた1940年前後の第3次ピークまで、風景画に使われた背景の空を塗る青は美しい。サッと刷かれた「青」がモチーフを引き立てている。川島に「青空を描く」と題したエッセイがあるのも合点が行く（「緑の感覚」所収1947淡路書房）。ニースやヴェニスの空の美しさを述べ、幾枚も描いたと回想し、藤島武二や梅原龍三郎の絵の空の美しさに触れている。昭和戦中期の執筆と思われるが、「緑」にしばしば言及した時期より下る頃だ。戸外風景以外でも赤と緑で構成する【北京中字廊】では部分的な青が落ち着きと華やかさを演出している。1935年に執筆した「緑の感覚」に次の一節がある。

［マチスを緑の画家と呼ぶことは出来ないが、時に緑をあしらったものを見ることがある。赤の中に縞があったり、黄色の中に緑の点があったりするのであるが、さすがに巧みに緑を利用しているのに敬服させられる］

川島の青を青の画家と呼ぶことは出来ないが、川島の青は、師マチスの緑に相当しているようだ。

何故、川島は「緑」に拘ったのだろうか？　それは「緑」は木々（植物）に代表される生命の色だからだ、と思う。自然美を描く、生き生きした命ある物の躍動感、生命感を描き出すのが川島理一郎の画家としての資質だったと考えている。その延長線上に自然美と人工美（建造物）の取り合わせ、人工美を描く作品が出て来たのだろう。川島理一郎にとって、緑のリズムは生命のリズムだった。

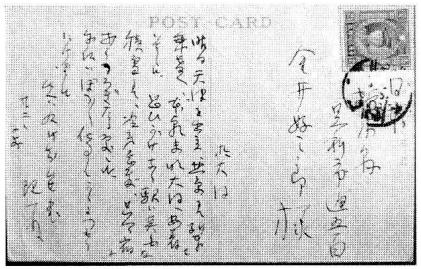
7）エピローグ

最後に、既述してきた作品論とは異なる観点から、川島理一郎の人物像について感じたことを記しておきたい。

川島は運動センスのみならず対人センス、ビジネスセンスにも恵まれていたと思うのである。1935・昭和10年の帝展、洋画壇再編（所謂、松田改組）のゴタゴタに嫌気がさし、また自らの処遇も不本意だったのか、主宰する集まりを解散し各団体の役職から離れフリーになった。

翌1936年12月には地元足利で後援会が発足する。フリーになったことへの善後策、画業経営の基盤安定を図るリスクマネジメントの一環ではなかろうか。その後しばしば里帰りし個展開催、地元展覧会の審査等を行った。後援会発起人6人の中に金井好三郎がいる。金井は冊子「絵」1970年3月号にエッセイ「川島理一郎先生のふるさと」を寄稿しているほか、川島没後の栃木県立美術館回顧展1976年の実行委員でもあった。川島が同氏にあてた北支、大同（現、中華人民共和国山西省）からの絵葉書1939年10月が手許にある。昨日天津を立って大同着、思いがけない積雪のなか宿にはいりぼつぼつ仕事をするつもりになった、と書いてある。川島のまめさ、人間関係への配慮が伝わって来る。

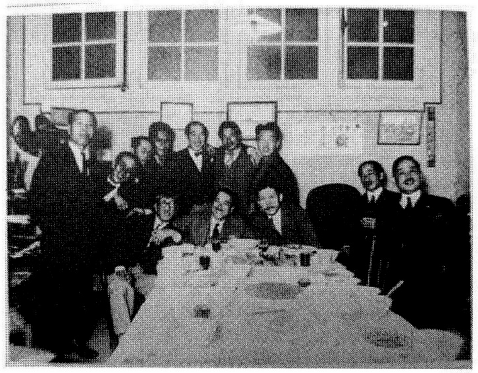




地元足利財界人や下野新聞社、パトロン的存在だった資生堂初代社長福原信三、大林組二代目社長大林義雄との関係も良好だった。福原信三とは1908年頃アメリカ、レイクプラシッドで出会う。1919年、14年振りに帰国して開いた初の個展は銀座に作られたばかりの資生堂陳列場（現、資生堂ギャラリー）だった。以後、資生堂意匠部の嘱託社員としてパリのファッション情報を日本に紹介、西欧婦人の活動模様を「資生堂月報」に書いた。資生堂では継続して個展を開催するほか、同ギャラリーの展覧会には欠かさず作品を出している。大林義雄とは1920年代始めにフランスで知り合ったようだ。以来交友が続き関東大震災後義雄の勧めで中国大陸に渡り制作する。1930年には竣工した義雄自宅の内装を手掛けた。同年末、欧州からの貨物船沈没で滞欧作と共に義雄新宅に搬入する予定の家具を失ったが直ちに再調達のためスペインに引き返している。与えられた役割をきちんとこなし質の高い仕事を遂げているのだ。単に人付き合いが良いというより、如才ないビジネスマン感覚を持ち合わせていたことが分かる。実業家としても成功したと思う。芸術家にはめずらしい性向と言える。教養人かつ分別のある常識人、空気が読めるタイプだったのだろう。先輩画家満谷国四郎は器用人と評し、中沢弘光とは1922年末のフランスからの帰国船で親しくなり、翌1923年3月に

は一緒に京都奈良の制作旅行に行っている。中沢は川島の12才年上、美校・帝展系の大物だ。日本で美術教育を受けておらず本邦画壇に人脈の無かった川島にとって後ろ盾となったに相違ない。

後輩画家達の面倒見も良かったようだ。1927年渡欧中のパリで始まり、翌年帰国後に東京大森にある川島の自宅でメンバーも新たに再開した金曜会と名付けられた勉強会がある。ここから難波田龍起、矢橋六郎、山口薫らが巣立つ。彼らは村井正誠と共に1937年自由美術家協会の設立に参加した。2022年10月、足利市立美術館で開催された川島回顧展には三人の絵が並列展示されていた。静謐で詩情を湛えた暗茶系の作品群は、若き頃ギリシャに魅了された川島から表象ではなく古典古代を顧みることを学んだのだと理解した。



金曜会（パリ）1927年頃
前列中央が川島、その左が藤田嗣治

川島は基本的には風景画家であり人物画は少ないが、その人物画を観ると、女性像、女の顔は無国籍なのである。そこに川島の本領を感じる。当時、フランス留学から帰って来た日本人画家はスランプに陥った者が多い。日本で美術教育を受けた者によくみられる。しかし川島には感じられない。清水登之も同様だ。自らを特定の物に与する事を潔しとせず、painter&traveler ゆえのグローバル感覚、一歩距離を置く平衡感覚を身に着けていたとみている。

戦後の制作についても簡単に触れておく。

1951・昭和26年、文部省の要請を受けてフランスの絵画動向を把握すべくフランスを訪れマチスと再会を果たす。マチスが亡くなる3年前だった。ピカソとも会うがその頃から画風に変化が始まりモチーフの描線がシンプルになってくる。抽象への移行を予感させる。1950年代半ばに脳溢血で倒れしばらく静養。夫人逝去、再婚、鎌倉に転居するなど身辺が慌ただしくなった頃から、描く鎌倉風景、蘭、薔薇の花などに「緑」が回帰してくる。美しい「青」は見当たらない。更に75歳を過ぎた最晩年の1962・昭和37年頃から油彩の画風が一変しパズル片を散乱させたような、或いは長目の歪んだ楕円が浮遊しているような半抽象の画面になるのである。持ち前の運動神経や体力の衰えを自覚したのかもしれない。自由で

奔放なマチス譲りの描線も、角々した断片線になったり、逆にリズム感が円滑感に移ったように感じるのだ。カラリスト振りが復活し、しなやかな曲線が印象的な色鮮やかな作品もある。デッサンもデフォルメが進み、稚気に富んだものがある。それと歩調をあわせるようにスケッチや（狭義の）デッサンとは趣を異にする遊びっけのある戯画を発表した。題材はダンサーや芸人等々。82歳の時、生前最後の出版物となった「戯作小品」1968・昭和43年美工出版社、はその集大成といえる。前書きに「製作の合間に楽しみつゝ描いたものが、たまりましたので御見せします　私と同じ様な気持で御覧頂ければ幸です」とある。油彩（SM）が20点掲載されているがそれらの下絵ないし同じモチーフのデッサンも展覧会図録で確認できる。その中の当時一世を風靡した山本リンダのヒット歌謡曲「こまっちゃうな」に因んだ【こまっちゃうな】と題した素描を、所蔵する油彩画小品と並べてみた。

川島理一郎が最晩年に楽しんで描いた軽快な戯画を紹介してエピローグを終えることにする。





【こまっちゃうな】（素描、図録画像）　1968（油彩、SM）

本稿は、2002年、2022年川島埋一郎展図録（栃木県立美術館、足利市立美術館　杉村浩哉氏、江尻潔氏他執筆）から画像をはじめ多くを教示いただいた。（2024年12月改）

まことのEメール夢の旅（第十六話～第十八話）

手塚泰男

第十六話　ピエロと風車

まことの通うフランス語の学校は、相模湾へと注ぐ、境川沿いにある。

川沿いには散歩道が整備されており、川面に集うカモメや、鴨などの群れを見ることがある。

今日の下校時は、ミハルちゃんと一緒だった。ミハルちゃんに、「今日はお母さんが家にいるので、私ん家へ寄って行ってくれない。」と誘われた。

まことは、いつもの土曜日にEメールが届く時刻には、まだ間があるので、「うん、いいよ、うれしいな。」と答えた。

マンションの五階の玄関では、ミハルちゃんのお母さんが笑顔で迎えてくれ、手作りのケーキと、ミルクティーをごちそうになった。

ミハルちゃんは、部厚い一冊のアルバムを抱えて来て、「これは新聞社のカメラマンだったお父さんが、湾岸戦争の取材に行ったときに写したものなの。でもお父さんは、戦争が終る少し前に、行方不明になったまま、まだ帰って来ないのよ。」と悲しそうに目に涙を浮かべながら言った。

本の表紙には、「子供の瞳が訴えるもの」というタイトルがあり、大きな瞳をカメラに向けた、五才くらいの幼女の写真があった。中をめくって行くと、手足を無くしてしまった子供や、孤児となった子供、餓えてやせ細った子供たちが多く写っていた。

まことは、父親と二人だけの生活や、以前学校でいじめに会って悩んだりしたことも、この子供たちの苦しみに比べれば、ささいなことであり、もっと強くならなければならないと思った。

そして、シベリアの山小屋で、香月画伯がしみじみと語った戦争というものの悲惨さを思い浮かべていた。

夕暮れが近ずいて来たので、ミハルちゃんと、お母さんがマンションの下の門まで送ってくれた。

家についてパソコンの前に座ると、マウスの横には、手に乗るくらいの針金で作られた自転車の模型が置いてあった。

画面には、「まこと君、君とは一度会いたかったんだ。僕はオランダの画家レンブラントの子孫で、名をキューケン・ボブという。長たらしいので、これからは『ボブ』と短く呼んでくれ。今日は絵の大好きな君をオランダへ誘ってあげよう。友達のミハルちゃんも一緒に連れておいでよ。その自転車のミニチュアを枕のそばに置いて眠ってくれ。ボブより。」と出ていた。

まこととミハルは、画家レンブラントの高い銅像が立つ広場にいた。ホテルの前に設けられたカフェテラスでは、大勢の人たちが、手に手にビールのジョッキを持ち、談笑しているところだった。

突然、目の前にピエロの扮装をした三十才くらいの、大きな男の人が立っており、猫のテオさんと同じ赤いブーツをはいていた。

「やあ、日本からの可愛いいお二人さん。僕は、毎日この広場で、いろいろの芸を披露して、カフェテラスに集う人たちを楽しませている大道芸人なのさ。これから君たちに、僕のアシスタントをやってほしいんだ。

次の出し物は、『風車はまわるよ、ブンブンブン』と言う。二人で僕の腕にしっかりぶら下ってくれ。」と勝手に決めこみ二人の肩に手を置いた。ミハルちゃんは、少し怖がっていたが、あきらめたようで、その頑丈そうな太い腕につかまった。

大男のピエロは、腕をぐるぐると回しはじめ、まことは最初目を閉じていたが、うす目を開けると、まわりの建物や、運河、市内電車が、自分と一緒にくるくるまわっているようで、楽しくなってきた。

大男は、そのまま宙返りをしたり、二人を空へ向ってほうり上げたりした。

まことたちが空中で三回転もして落ちてくると、大きな腕の中にさっと受け止めて、優しく頭をなでてくれた。

カフェテラスの大勢の観客は、やんやの喝采を送り、ピーぐるぐると口笛を吹き、いつまでも拍手をしてくれた。

「お疲れさま、少し怖かったかな。ごめんね。僕の名はボブと言い、そこに立つ銅像の画家レンブラントの子孫だよ。今日のお礼に、レンブラントの絵がある美術館に案内しよう。」と言い、二人を軽々と肩に乗せると歩き出した。

東京駅をたてにのばしたような美術館に入ると、ボブさんは天井に届くかと思う大きな絵の前へ連れて行き、

「これが、レンブラントの描いた『夜警』という有名な絵だよ。素晴しいだろう。」と自慢げに言った。
中世の豪華な衣裳を身にまとい、刀を腰にさして銃を持った、いかめしい顔つきの人物が、黒い背景の中に二十人ほど描いてあった。
ミハルちゃんは、自分の名前のように、瞳を大きく見開いて、「こんな大きい、迫力のある絵を描いたレンブラントさんは、きっと神様の力を借りて描いたのだわ。絵の中のおじさんたちが、今にもこちらへとび出して来そうで怖いくらい。」と言い、ため息を大きくついていた。
ボブさんは、「そろ〳〵閉館が近いので、急いで他の名画も鑑賞しながら、外へ出よう。」と言い、美術館を出ると、運河に添ってしばらく歩いた。船着場で乗船券を買い、遊覧船に乗りこんだ。
運河から見上げる建物はさまざまで、街の灯や、イルミネーションで飾られたはね橋などが、川面に映ってとても美しかった。
次の日の朝、朝食を済ませてホテルのロビーに行くと、ボブさんが待っており、「二人ともぐっすり眠れたかな。今日はゴッホの美術館などを、僕が組み立てた三人乗りの自転車で案内するつもりでいたんだが、昨夜、大道芸人の友だちが、怪我をしてしまい急に代役を引き受けることになった。本当に申しわけないが、そのかわり、チューリップで有名な公園で、僕の姪のホノミンが花の手入れのアルバイトをしているので、君たちが行くことを伝えておくよ。きっといいガイドになってくれると思う。じゃくれぐれも気をつけて日本へ帰るんだよ。」と言い、手を振りながら大股でホテルを出て行った。
チューリップの咲く広い公園の入口には、高校正くらいの、ルノーアールの絵から抜け出してきたような、長い髪で瞳の大きな少女が立っていた。
「まことさんとミハルちゃんね。ボブおじさんから大切なお客さんだから、親切に案内してさしあげるよう言われているわ。オランダへようこそ。」と言った。
広大な公園の中は、チューリップやその他の花々が色鮮やかに咲き競い、二人は大感激だった。
ホノミンさんは、大きな風車のある場所へ二人を連れて行くと、「この風車の羽根にぶら下り、回りはじめたら目を閉じてください。落ちるようなことはけしてないので、安心していいですよ。」と笑いながら言ったが、二人はもし落っこちたら大変と、怖くて仕方なかった。
しばらくしてから目を開くと、眼下に広がるチューリップ畑は、真っ白い雪の下になっており、その向うの幅が五十メートルもある運河には一面に氷がはっていた。
二人が思いきって風車の羽根からとび降りると、赤い毛皮のコートを着たホノミンさんが持っていて、「その格好じゃ寒いでしょうから、このコートを直ぐに着てください。」と言い、まことには茶色、ミハルちゃんには

白い毛皮のコートを手渡してくれた。
二人は運河の川岸に立って驚いた。大勢の子供たちに交って、北極グマや、アザラシ、ペンギンなどの親子が、それぞれにスケート靴をはいて楽しそうに滑っていた。
まことが、また大声で叫んだ。「あ、あそこに。」と指をさす方向を見ると、そこにはヒロヤに、カンタ、ケンジのほかに、アルル中学校の生徒たちが、ワイワイとにぎやかにスケートに興じていた。まんまる目玉のゴッホーホー校長が、「まこと君とミハルちゃんもこっちへ来て一緒に滑ろう。何しろアルルには、このようなスケート場は無いので、みんなを連れて来たんだよ。」と言いながら、相変らずゴッホゴッホとせきをしていた。
まことたちは、北極グマやアザラシ、ペンギンの赤ちゃんに囲まれて、氷の上を転げまわったり、北極グマのお父さんの背中に乗ったり、ペンギンのヨチヨチ歩きの真似をしたりして、氷上の遊園を存分に楽しんでいた。
ただ、カンタは面白がってアザラシの赤ちゃんを追いかけたので、お母さんアザラシにもう少しであやうくかみつかれそうになった。
ホノミンさんにこころからのお礼を述べ、アルル中学校の生徒たちと一緒に、テオさんのデコ3号が待つ、アムステルダム駅へバスで向った。
目が覚めると、枕の横にアザラシの赤ちゃんの可愛いいぬいぐるみが二つ置いてあり、まことは月曜日に学校で、ミハルちゃんに手渡したら、さぞ喜ぶだろうと思った。
食堂のラジオからは、「スケーターズワルツ」の軽快なメロディーが流れており、まことは思わず腰をかがめて、スケートをする格好をしてしまった。
ベランダに出ると、房総半島の上から、いままさに太陽が顔を出すところで、海面が金色に輝き出していた。
画家のレンブラントは、自画像や、人物の絵はたくさん描いたが、風景画については、あまりお目にかかったことがない、きっと得意じゃなかったのかと、まことは思いながら、僕は大きくなったら、やはり風景画を描きたいと思っていた。

（第十六話　終）

第十七話　ピカソのめがねと
気まぐれダリさん

まことは、通学カバンの中に、いつも一枚絵はがきを入れている。
生きの良いサンマを、数匹盛った平たい竹製の篭を頭の上に乗せている女性が描かれている。絵はがきの裏には、小さな字で海老原喜之助「ポアソニエール」と印刷

されていた。
この絵はがきは、母の本棚から「気まぐれ美術館」という本を取り出し、パラ〳〵とめくっていた時に見つけたものである。
絵はがきの女性は、生前の母に良く似ており、時々カバンの中から取り出しては、「お母さん、僕は元気でいるから安心してね。」とひとりつぶやいている。
下校途中に、その絵はがきをミハルちゃんに見せると、「頭に乗っているサンマも、絵の背景も青い色がとってもきれいだわ。それに、この女の人がわたしに話しかけて来そうで、優しい目をしているわ。まことさんのお母さんも、きっとサンマが好きだったのかしら。わたしも焼きたてのサンマは大好き、ジュー〳〵と音のしている上に、レモンをしぼり、大根おろしで食べるのは最高ね。」とつばをごくりと飲みこむようにして言っていた。
今日は土曜日、クリスマスももう直ぐだ。まことはパソコンの前に座った。マウスの横には、シャボン玉を吹くときに口にくわえる、ガラスで出来たストローのようなものが置いてあった。画面には
「まこと君、僕はパブロ・ピカソという画家だよ。僕の出番が、なか〳〵やって来ないので、少しいら〳〵していたのさ。
君はいつもカバンの中に一枚の絵ハガキを入れ、持ち歩いているね。あの絵は透明感のある青い色が素晴らしく、若い女性も極めて魅力的だ。
僕も若い頃、『青の時代』と言われた、青を主体とした絵ばかり描いた時期があったが、ある時、病院で目の検査を受けたところ、君の目は少し変だから、私の作ったこのメガネをかけてみなさいと言われた。
よほどやぶ医者だったのか、そのメガネをかけると、すべてのものがゆがんで目みえるんだ。
しかし、そのことが幸いして、僕の描いた、顔やからだがゆがんだ女性像などは、画壇でも評判になって、飛ぶように売れたものさ。君は東京のブリジストン美術館で、『腕を組んで座るサルタンパルク』という大きな絵を見たことがあるだろう。
その絵は、僕の描いたまともな絵で、これから僕は誰にもわかる絵を描くつもりでいる。
今夜は君を、すべてのものが変化に富み、とっても面白い国のスペインへ案内しよう。そこにあるビードロを握って眠ってくれ。　―ピカソより―」と出ていた。
まことは、ピカソが一気に墨で描いたような、ユーモラスな悪魔が、二本のガラスのラッパを吹いている絵に出会ったことがあるが、あのラッパをビードロと言うのかと思った。
まことは、ハナマッキッキ駅のホームで、銀河鉄道のデコ3号の到着を待っていた。

真っ赤なシャツを着ているテオさんが、運転席から顔をのぞかせ、「まこと君、驚いたかい。ポンコツのデコ3号を、何とか元気づけようと、ガウディ星のグエル修理工事で、一週間ほどかけオーバーホールをしてもらったんだ。
ところが、工場のダリさんが変った人で、いろ〳〵の色のペンキで、車体を塗りたっくたので、こんな派手な機関車に、変身させられてしまったのさ。でも、デコ3号は、この姿がとっても気に入ったらしく、良く走ってくれているんだ。」という猫のデオさんも、鼻の先っちょがぬれており、体調もすこぶる良さそうだ。
プリシオン海岸駅からは、ヒロヤ、カンタ兄弟と、ケンジにモネちゃんがわい〳〵言いながら乗り込んできた。ミハルちゃんは、お母さんが風邪をこじらせてしまったので、看病のために今日は来られないのだと、カンタがまことに伝え、まことは少しさびしかったが、スペインに着けば、元気が出てくるだろうと明るくふるまうことにした。
デコ3号は、青い地球をあとに、銀河の中を一直線に走り抜けた。周囲の星の宇宙人たちも、デコ3号の奇妙な姿に、さぞ驚いているだろうとみんなは思った。
しばらくして、列車の行手には、表面のモザイク模様が美しい、大きな星が近づいて来た。
ヒロヤが、「あの星が、僕らの目指す、バルンセローナ星さ。表面がタイルのようにつるつるしているので、デオさん、着陸のときオーバーランしないよう、慎重に降りてほしいな。」と相変わらずかん高い声をはり上げていた。
デコ3号は、何棟もの変な形の塔が並ぶ間を、すり抜けるように、協会の前の広場へ無事着陸した。
広場の銅像の横に、大きなパンツをはき、上半身は裸のいかめしい大柄の男の人が立っており、「やあ、まこと君たち、今日は良くバルンセローナ星に来てくれたね。僕が昨日メールを送ったパブロ・ピカソだ。あの変てこなメガネはもう捨ててしまったので、君たちの顔はまともに見えるよ。
みんなには、この星で奇妙な絵を描いている、友人の画描きにも会わせてあげるし、好奇心のかたまりのような若い君たちだから、この星の建物や公園などは、きっと満足するに違いないよ。
おなかもきっと空いているだろうから、まずとびっきりおいしいスペイン料理をごちそうしよう。」と言い、入口の室内もとってもカラフルなレストランへ案内してくれた。
食事をしたあと、まことたちは公園の中で、日本では見たことのないいろ〳〵の遊具に乗ったり滑ったりして遊んだ。気がついた時には夜になっており、空には七色に輝く月が出ていた。

次の日の朝、ピカソさんは、牧師の服を着た背の高い男の人を連れて来て、「僕のいとこのピンカーソンだ。少し前までは、君たちの国の長崎で牧師さんをしていたんだよ。

今日はこのピンカーソンが、君たちをウォーキングに連れて行く。ウォーキングと言っても、ピレネン山のふもとから延々と続く巡礼の道で、高低のある道を五日間も歩くのだから、相当きびしい覚悟がいるぞ。

しかし、君たちが大人に成長したとき、いい思い出として残り、人生に大きくプラスするに違いない。」と良く光る目玉をギョロリと動かしながら言った。

ピンカーソンさんに先導され、多くの巡礼者と一緒に、みんなは雨の日も風の日も黙々として歩いた。

ただヒロヤだけは、早々に音を上げてしまい、ロバの引く荷車に乗せてもらって、みんなのあとから着いて来た。

巡礼から戻ったみんなは、一日ゆっくり疲れをとって、翌々日にはピカソさんの案内により、大きな美術館で、数多くの名画を鑑賞したり、売れっ子の画家たちとの、暖かい交流の場を持つことが出来た。

ピカソさんは、まことたちが、バルンセローナ星を去る日に、首にエリマキトカゲのような白いレースをつけた、五才くらいの子供の手を引いて現れた。茶色の髪に、くり〳〵とした瞳が印象的だった。

「巡礼の道は楽しかったかい。みんなとてもたくましくなって、とてもいい顔をしているよ。これにこりずに、またこの星に来てくれ。

最後に一つ君たちに頼みがあるんだよ。僕はいま陶芸に夢中になっている。日本で、しばらくの間、陶芸の作家について修行をしたいので、君たちと一緒にあの派手な列車に乗せて行ってほしいんだ。

そう〳〵、この子はパウロという僕の息子だが、道化の扮装が大好きでね、でも良く似合っているだろう。

パウロは、ケンジ君のところの田んぼで、泥んこ遊びがしたいと言っているので、一緒に連れて行くことにした。友人のダリ君も、よくあれだけデコ3号を塗りたくったものだな。アッハッハ。」と笑うと、パウロ君を肩ぐるまして、早くも列車へ乗りこもうとしていた。

目が覚めると、枕のそばには、ピカソさんが出来立てほや〳〵だよと言いながら手渡してくれた、小さな青い陶器の壺があった。

食堂のラジオからは、スペインのチェロの名手であった、パブロ・カザルスの弾く、「島の歌」が流れており、父親が、「この曲はお母さんが大好きで、病院のベッドで良く聞いていたっけ。」と懐かしそうに言った。

ベランダに通じるガラス戸を開けると、下から吹き上げる風は冷たく感じられたが、まことはスペインで出会った、ピカソさんや息子のパウロ君を思い出しながら、昔スペインの人たちが、南アメリカへ向かった時に、航海した海は、との方向だろうと水平線の彼方をじっと眺めて考えていた。

（第十七話　終）

第十八話　クレーと天国美術館

まことは今年の夏休みに、父に連れられて京都五山の送り火を見に行った。

夜になってから、ホテルの屋上から眺めた大文字、船形、鳥居形などの送り火は壮観で感動させられた。

当日の午後、父はホテルに着く前に、何必館（かひつ）という小さな美術館へまことを連れて行き、一枚の絵の前に立った。それは洋画家の山口薫という人が描いた絵で、うす緑色をバックに、上半分に大きなおぼろ月、下の半分には大勢の子供が輪になって踊っている、たてが一メートル、横が八十センチの絵だった。

また、子供たちの輪の中に、緑色の敷物があり、赤や黄色の花が載っていた。絵の右の端に赤い馬が三頭寄り添うよう立って踊りを見ているようだった。

父はその絵を食い入るように見つめながら、「お母さんが大好きだった絵だよ。京都で育ったので、この美術館へは女学生の頃から何度も訪れたと言っていた。赤い馬の両端は、僕とお母さん、真ん中にいるのが、まことのようだね。」と感慨深げだった。

楽しかったミハルちゃんと一緒のハワイ旅行から帰った、その週の土曜日の夕方に、まことはパソコンの前に座った。マウスの横には、ガラス製の可愛い小さな天使が置いてあった。画面を見ると、

「ムーミン谷で会ったばかりなのに、またメールをしちゃったわね。あの時はまことがたくさんのお友達と一緒だったので、落ちついた会話も出来なかった。

今日はまことの好きな絵がいっぱい並んでいる天国の美術館へ案内してあげましょう。

その小さな天使をそっと握っておやすみ。―母より。」とあった。

まことは、ピラミッドの形をした、カラフルな山の麓に立っていた。その山は以前、上野の美術館で開かれた、パウル・クレーの展覧会で見た「パルナッソス山へ」という絵にそっくりだった。

山の正面に開いた、門の中に入って行くと、長い廊下が続き、その両側の壁一面に、クレーの絵が数十枚並んでいた。

廊下を抜けると広間があり、和服を着た女の人が、にこ〳〵しながら近づいて来たが、

家にいた時には、あまり着物姿を見たことがなかったまことは、今日のお母さんは、とっても着物が似合っていると思った。

「お母さん、今日はどうして着物を着ているの。」とたずねると、

「志村ふくみさんという染色家は、紅梅の枝や、いろいろの草木を煮つめて、その汁で丹念に糸を染め上るのよ。その糸で織った着物を、どうしても着てみたかったの。暖かみのある落ちついたいい色でしょう。

日本の自然の草木で染めた色は、クレーの絵の色と通じる、特別のおもむきがあるのよ。」と目を細めながら答えてくれた。

「まこと、メールで約束したように、これから天国美術館の中を、ゆっくり案内してあげますね。」と言いながら、まるで雲の上を歩いているような、ふかふかのジュータンの上を、まことの手を引いて進んだ。

美術館には、既に、天国に召された外国や日本の画家たちの代表作が、淡い照明の中、ゆったりと展示されていた。

鑑賞しているのは、まことと母の二人しかなく、休日の日本の美術館のように、ほかの人の頭越しにやっと見られるということはなく、一つ〳〵気の済むまで見ることが出来た。

山口薫画伯のコーナーは、特に穏やかな空気がただよっているように思えたが、まことは引き寄せられるように、一枚の絵の前に立った。「牛と幼き娘」という題がついており、赤と黄色をほど良く交ぜた、鮮やかで暖かいオレンジ色をバックに、白い大きな牛と、おかっぱ頭の可愛いい女の子が描かれていた。牛の目はどこまでも優しく、幼女を見つめているようだった。

「まことはその絵が大部お気に入りのようね。今年の夏休みに、お父さんと京都の送り火を見に行ったでしょう。お母さんは、天国から何でもお見とうしなのよ。その時に立寄った何必館という美術館で、山口画伯の別の絵を見てとても感動していましたね。

この画家は、詩人でもあり、絵と同じような暖かい詩をたくさん書いているのよ。

画家は、他の人にはない才能を持っているのに違いないけれど、その人の心や、生き方が絵にも表われるのね。お金の為に描く絵からは、訴えかけてくるものが、少しも感じられないと思うの。

まことも、これからの人生では、いろ〳〵の経験を重ねることでしょうが、たくさんの本を読み、名画や名曲に出会い、それを糧としていい絵を描くことね。それに一番大切なことは、思いやりのある優しい心を、常に忘れてはなりません。

そうすれば、いつか必ず自分が納得の行く、素晴しい絵が描けるようにきっとなりますよ。さあ、まだ〳〵いい絵が、山ほどあるので、食事をしたらまた見に来ましょう。」と母は言った。

天国の食堂は、大勢の人でにぎわっており、ルノアールやモネ、ゴッホ、セザンヌなどの画家たちの姿もあった。

「まこと、食べながらでいいから、お母さんの話を聞いてね。

まことが生れたのは、若葉の季節だったの。近くの助産院で。夕方に生れて体重は三、二〇〇グラムもあったわ。おっぱいの飲みっぷりもいい元気な赤ちゃんだった。

でも泣く子は育つと言うけれど、泣き出すと、なか〳〵泣き止まないので、ベビーカーで散歩に出たお父さんも、ほと〳〵手を焼いたと言っていたっけ。

まことは、小さい頃より絵を描くのが好きで、お絵描き帳は手離さなかったのよ。

三才になる少し前の春から、郊外の保育園に入れたわ。でも、その頃から小児ぜんそくの発作が表われて、ひどくなると呼吸困難になりとても苦しそうで、出来ればお母さんが代ってあげられたらと何ども思ったわ。

海岸に近い、今のマンションに移ってから、少しずつ回復に向ったのよ。

いろいろと大変なこともあったけれど、まことを生んだことは、宝物を授かったように、楽しく充実した日々だった。ほかにも、思い出すと、きりがないけれど、またの機会にお話ししてあげますね。

明日は、わたしがアシスタントをしている、クレーさんの教室を見学させてあげましょう。

クレーさんが、五十年の永い間、教員を育てている学校で、クレーさんは優秀な教育者として人望もあり、ヴァイオリンの名手でもあったの。

クレーさんの絵からは、音楽が聞えると言うのもうなずけるわ。

天国の小学校の生徒たちは、全員が小さな天使なのよ。だだっ子ばかりで、なかなか言うことをきかないので、お母さんがクレーさんの手助けをしているの。まるで、保育園の保母さんのような役目だけれど。

まことも、クレーさんの描いた『忘れっぽい天使』などの、いろ〳〵な天使の、ユーモラスな絵を見たことがあるでしょう。

クレーさんが、幼児が描いたような、線画の天使のしぐさを描いたのは、生徒たちがモデルなのよ。

まことと一緒にいると、お母さんは、おしゃべりが止まらなくなるようね。

おなかは一ぱいになったかな。デザートには、まことの大好きな、モンブランのケーキとミルクティーがいいわね。」と母は給食口の方へ走って行った。

目を覚ますと、枕元には、クレーさんが描いてくれた天使のスケッチが、小さな額に入って置いてあった。
まことはこの絵に「だだっ子天使のホノミン」と題をつけることにした。
食堂のラジオからは、「バッヘルベルのカノン」という曲が流れ、父はフレンチトーストを焼いているらしく、バターとシナモンのいい香りがただよっていた。
ベランダから見下ろすと、冬の海岸には人影も見えず、波だけが白く砂浜に打寄せていた。

（第十八話　終）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い
私達は広く同人の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い
本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

古代出雲国の実像（五）

村上邦治

第五章　古代出雲王朝は存在したか

一　戦前の古代史論争

明治末期日本古代史界は『魏志倭人伝』の解釈をめぐり、邪馬台国の所在地について九州説と畿内説に分かれ学者・研究家を二分する大論争が勃発した。
もっとも論争は江戸時代から始まっている。『魏志倭人伝』の本格的な研究により、六代将軍家宣七代家継を補佐し「正徳の治」といわれる幕政を主導した儒学者新井白石（一六五七―一七二五）は「九州筑後国山門郡説」を唱えた。
一方国学者本居宣長（一七三〇―一八〇一）は皇国史観から畿内のヤマト王権（邪馬台国）が中国皇帝に屈辱的な朝貢などするはずはあり得ず、九州熊襲の女性土豪卑弥呼が「ヤマト」を騙って朝貢したものとする「熊襲偽善説」を主張した。宣長は白石と違い、畿内説を確信していたのである。
一九一〇（明治四三）年東京帝大東洋学者白鳥庫吉は「帯方郡から邪馬台国まで一万二千里と記されており、不弥国まで一万七百里とあるので、邪馬台国は不弥国からは千三百里に過ぎず九州の地域内にある」とした。そして邪馬台国へは「南水行一〇日陸行一月」とあるので、有明海を南に下り肥後国あたりと推定した。「陸行一月」については、残る距離から考えると「一日」の誤りとしたのである。白鳥は『魏志倭人伝』の伝える「方位は正しく総延長距離一万二千里」を重視し、邪馬台国は九州肥後国周辺であると主張したのである。
白鳥の発表後京都帝大歴史学者内藤虎次郎は「中国では東と南、西と北が混同して用いられた」という事例を挙げ、投馬国への「南水行二〇日」そこから邪馬台国へ

の「南水行一〇日陸行一月」の記述を、各々「南」を「東」と読み替えることで畿内説の弱点を克服した。また白鳥が「陸行一月」を「一日」の誤りとしたことについて厳しく批判した。

二人の邪馬台国論争をきっかけに、九州説は東京帝大から橋本増吉（方位は誤りでなく起点となる国からまず向かう方向を示したとする）久米邦武（所在地を九州神籠石に求める）喜田貞吉（久米説の補充）が続いた。

京都帝大からは富岡謙三（三角縁神獣鏡魏鏡説）梅原末治（三角縁神獣鏡など銅鏡の畿内古墳出土調査）らが畿内説を補強した。

この論争は二一世紀に入っても続くが、九州および畿内両説の帰趨に一喜一憂したのが、後述する「古代出雲王朝」説を提言する在野の研究家達であった。

わが国を代表する両帝大歴史学者による邪馬台国所在地論争に対し、多くの在野研究者が論じたもう一つの古代史論争が『記紀』神話に関するものである。

幕末の尊王攘夷運動を結実させた薩長両藩の志士たちによる明治維新政府は、大政奉還直後の「王政復古の大号令」（一八六七年）では天皇親政を標榜した。当初は古代天皇制の復活を目論み、「諸事神武創業の始めに原き」とし、奈良朝制定の大宝令と同じく中央官制は太政官に加え長らく廃止されていた神祇官を復活させ二官六省制とした。神道家が熱望した神祇官制は余りの時代錯誤から、当初の理念は廃藩置県以降次第に後退する。しかし国民の思想統一を図るため「神道」を中核に据えることは揺るがなかった。

経済産業政策は西洋諸国に追いつくため、国力増強を優先させた。先進国から技術・教育者の招聘や技術導入による殖産興業策が積極的に採用され、その恩恵を受ける国民の生活様式は次第に洋風化が進み文明開化の風潮が広まった。しかし国民の思想・宗教については「神仏分離令」（六八年）神道教化を促進する「大教宣布の詔」（七〇年）を相次いで発布し、文明開化と共に西洋諸国の支援を受け急速に浸透するキリスト教の拡大に対抗するため日本固有の宗教である神道の普及を急いだ。そして万世一系の天皇制確立のため、「神道国教化」政策は緩むことなく一貫して押し進められた。

明治政府の描く天皇制国家を内外に示したのが、八九年制定された『大日本帝国憲法』である。第一条に「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」を掲げ、二条男子継承権三条神聖不可侵四条元首・統治総攬権を明記した。

憲法に規定された天皇制のよりどころとしたのが、最古の史書『古事記』および『日本書紀』に繰り広げられる「神話」であった。『記紀』は単なる歴史書から、わが国の聖典となったのである。こうして記紀神話を「歴

史的事実」とする教育が初等学年から始まる。

九〇年教育の基本となった『教育勅語』の始まりは「朕惟うに　我が皇祖皇宗　国を肇むること宏遠に　徳を樹つること深厚なり」と記し、国民に記紀神話が明治に至るまで歴史的につながることを示したのである。

天皇の神格化を進める政府の方針を背景に学術論文や出版物に対し、国粋主義者や右翼団体から記紀神話の史実性を疑問視するまた否定するもの、さらに歴史的事実でさえも都合の悪い出来事はやり玉にあげ攻撃し始めた。

一八九二（明治二五）年東京帝大教授久米邦武（岩倉使節団随行『特命全権大使米欧回覧実記』編纂者）が前年に発表した論文「神道は祭天の古俗」について、神道家や国学者から非難の声が高まるという筆禍事件（久米事件）により辞職を余儀なくされた。

一九一一（明治四四）年には藤沢代議士が文部省編纂の「尋常小学日本歴史」のなかに、「南北朝の事は正閏（正統と正統でない系統）軽重を論ずべきにあらず」「両皇統の御争ひとなり」の記述は南朝が正統であるにもかかわらず北朝正統説を述べている。これは皇室の尊厳を傷つけ国民をして順逆正邪を誤らしめるものであり、国会で政府に質すと表明したことから大騒ぎとなった。

無所属の国会議員藤沢元造からの「南北朝正閏論」の糾弾に一番困ったのは、国定教科書を所管する第二次桂内閣桂太郎首相と小松原英太郎文部大臣であった。明治天皇自身が北朝の系統であるにもかかわらず、薩摩閥や皇国史観論者は後醍醐天皇（位一三一八―三九）による天皇親政を目指した「建武の新政」を理想とした。その実現に足利尊氏と戦った楠木正成や新田義貞を忠臣の鑑として信奉し、南朝正統論を強く唱えたのである。

この問題はすでに国会質問の二週間前読売新聞社説「南北朝問題、国定教科書の失態」として、水戸学的な南朝正統論の立場から、国定教科書の南北朝両立論の扱いを批判していた。社説を導火線として、文部省・政府批判がたかまり、藤沢代議士の質問書提出にまでなった。ちょうどこの一〇日前野党立憲国民党（代表犬養毅）は大逆事件で幸徳秋水ら被告一一人の死刑執行問題を取り上げるとともに南北朝正閏論問題をあわせ、閣臣問責決議案を提出するという政治問題に発展させた。

一三九二年将軍足利義満の時南朝系第九九代後亀山天皇の譲位という形の退位により、三種の神器を継承した後小松天皇（北朝第六代・第一〇〇代）に合体され南北朝合一が実現する。合一条件には「大覚寺（南朝系）、持明院（北朝系）両統の迭立（交代）とする」との約束があったものの一切守られず、合一以降歴代天皇はすべて北朝系であった。

北朝系の現天皇を戴いているという矛盾を抱えた南朝正統論について、桂首相は天皇に上奏し勅裁により南朝

を正統とした。しかし正式な議論は避け教科書編纂官喜田貞吉（東京帝大卒歴史学者博士）を休職処分とし、当該教科書を使用禁止とした。五か月後には教科書改訂委員会で改訂することを決めこの問題を終息させた。改訂教科書では南朝が「吉野朝」と改称され、北朝五代の天皇は歴代表から削除された。政府は皇統譜から北朝五代五人の天皇を除外し、「尊称天皇」扱いに改めたのである。

世論を賑わせたこの騒動以降南北両立論は姿を消し、南朝正統論が支配的となった。問題は歴史学研究と歴史教育を、国体論によって抑圧するという画期的事件となりその後に大きな影響を与えたことである。

日本の近代歴史学は東京帝国大学に招聘した外国人教師独人ルートヴィヒ・リースのドイツ流の実証主義的（科学的）歴史学が主流となり、邪馬台国論争にも及んだ。

大正期に入ると日本古代史の実証的研究により『記紀』の記述は「史実ではなく皇室の支配を示すための創作である」ことを発表し、学界に新風を吹き込んだのが津田左右吉（一八七三―一九六一早大教授）である。しかし彼の学術論文『神代史の研究』『古事記及び日本書紀の研究』など記紀研究四部作が皇室の尊厳冒瀆罪で出版法違反に問われ、四〇（昭和一五）年検挙され発禁処分を受けた。ちなみに津田は戦時中の四二年第一審で有罪判決を受けたが、控訴審で時効により免訴された。

記紀神話の実在性が次第に国民に浸透していく中、新しく実証主義的歴史学が主流となっていた日本古代史学界は国学者・国粋主義者・神官などからの批判や糾弾を恐れ、神話についての論考発表や研究自体を控えるようになる。

こうした風潮を受け在野の研究家を中心として記紀神話をめぐる論争が多発する。その代表的なものが瓊瓊杵尊の高天原から葦原の中国に降り立った「天孫降臨地」をめぐる論争である。『古事記』には「筑紫の日向の高千穂の霊峰に天下りした」と記されている。続いて瓊瓊杵尊は「この地は朝鮮に相対しており笠沙の御崎にまっすぐ道が通じていて朝日のまともにさす国であり、夕日の明るく照る国である。だからここはまことに吉い土地だ」と仰せられ、この地に壮大な宮殿を建てたと記されている。

また『日本書紀』の一書に「天の八重雲を押しひらき、勢いよく道をふみ分けて進み、日向の襲の高千穂の峯にお降りなった。久士布流多気の二上の天の梯子から浮島の平らな所にお立ちになって」の記述がある。

名誉ある降臨地をめぐり、多くの町村が名乗りを上げ、わが町であると主張した。「筑紫の国」とは九州を指し、「日向の国の高千穂」とあれば、古くから論争が続いている宮崎県北部高千穂町と南部の霧島連山のいずれかであろう。しかし問題は『古事記』にある「朝鮮に相対し

ている」との記述には、どちらも当てはまらない。

これに適うところとして手を挙げたのが、邪馬台国の時代に伊都国があったとされる糸島（現福岡市）である。博多湾に面しており、王丸山（四五〇メートル）中腹高さ二五〇メートルのところに「日向峠」がある。日向峠は対馬海峡を挟んで朝鮮に相対している。下流の日向神峡は風光明媚な渓谷である。「笠沙の御埼」をどこに比定するかの問題は残るが、福岡県糸島は宮崎県高千穂町と霧島連山とに肩を並べることができる。

『魏志倭人伝』によれば対馬海峡を渡り唐津周辺の「末蘆国」に上陸すると、そこから東南五〇〇里で「伊都国」に達すると記す。糸島（前前原）はこの伊都国に比定される。弥生時代の代表的な遺跡である平原遺跡・三雲南小路遺跡があり、国内最大の銅鏡や甕棺墓が出土し勾玉などの豪華な副葬品が埋納されていたことから伊都国の王墓とみられている。

『日本書紀』にある神武天皇東征出発の項に、「大和の地は良い土地があり青い山が取り巻いている。その中へ天の磐舟に乗ってとび降ってきた者がいる」として饒速日命について記している。

神武天皇が大和橿原の地で即位した後、饒速日命は「天の磐舟に乗ってこの国を見てお降りになったので、名づけて空見つ日本の国（大空から眺めて、よい国だと選ばれた日本の国）」という。これら記述から地元は金剛山の麓に天下ったと強弁した。

奈良県御所市の大和と難波を分ける金剛山地の主峰金剛山（一一一二メートル）の東麓にある高天彦神社（祭神高皇産霊神）の周辺は、広大な大地をなしており、古くから高天原といわれたところである。地元御所はこの地こそ天孫降臨地と言い張った。

同じ奈良県では『日本書紀』本文にある「皇孫のお進みになる様子は、くし日の二上の天梯子から浮島の平らな所にお立ちになって」の記述から、男岳・女岳がある金剛山地北部の秀麗二上山を降臨地と唱える者も現れた。

『日本書紀』にある初代神武天皇即位から二六〇〇年に当たるとされた昭和一五（一九四〇）年祝典行事が企画され、神武天皇聖蹟の保存顕彰を行うことになった。しかし天孫降臨地を主張する多くの県・町・村に困惑し、改めて天孫降臨地を定めるべく文部省聖蹟調査委員会に諮った。議論の結果委員会では最終的に宮崎県高千穂町と霧島連峰（霧島神宮祭神瓊瓊杵尊、鹿児島県高千穂宮）に絞り、委員会は現地調査を実施してどちらかに決定する方針であった。しかし双方の主張は激しくまったく妥協しようとしない地元住民の熱意に押され、遂に文部省の委員会は結論を出せなかった。

二　終戦までの古代出雲王朝論

『古事記』は上（神代）中（神武天皇～応神天皇）下（仁徳天皇～推古天皇）の三巻からなる。「天地の初めて発けし時」（天地初発）で始まる神代編は上巻のすべてを占め、『古事記』全体の三分の一を割く。そして神代（天地開闢・国生み・高天原～天孫降臨・日向三代・神武天皇誕生）の三分の一は、「かれ（スサノウ）避追はえて、出雲国の肥の河上名は鳥髪という地に降りましき」で始まる出雲（系）神話である。

アマテラスの弟スサノウは乱暴狼藉の限りを尽くした乱行から高天原を追放され、出雲の国へ降り出雲神話が展開する。続いて「箸その河より流れ下りき」から、スサノウの「八岐大蛇退治」の逸話が臨場感あふれる描写で綴られる。この現実にはあり得ない架空の神話さえも、大昔にあった歴史的事実の如く尋常小学校の教科書に挿絵入りで掲載された。

スサノウ七世の孫と記される次の主役オオクニヌシ（大国主）は、「因幡の白兎」の逸話や二度も死にかけるという度重なる八十神の迫害を乗り切る。最後にはスサノウから課せられた数々の厳しい試練にも耐え克服することができた。ようやく義父になるスサノウから、まさに地上の支配者にふさわしい神（人物）になったことを宣言されるのである。

こうしてオオクニヌシは本格的に葦原中国の統一に乗り出すことになる。少名毗古那や大物主の協力を得て、ついに「国作り」を果たすのである。これは「出雲王朝」の樹立と解釈されよう。

『古事記』の神話の出来事はあたかも史実であると幼い時から教育された国民にとって、「出雲王朝」に関する神話は、天孫降臨などとは比較にならない多くの親しみやすい逸話が残されており、在野の歴史研究家ともども古代出雲への興味を抱かせたのである。

もっとも津田左右吉は論文の中で「『古事記』などの物語は上代の日本民族の歴史的伝説として認めがたい」（『日本上代史の研究』）とする発表を繰り返し、神話の史実性を明確に否定した。津田の研究を認める多くの歴史学者は沸き起こる「出雲王朝」論争には加わらず、新説の提唱は在野の歴史家が中心であった。

多くの歴史学者が参加した邪馬台国論争は純粋な学術上の論争であり、『魏志倭人伝』という中国文献の解釈論争とみられたためか、国粋主義者たちからの非難の的から逃れることができた。しかし津田左右吉と雖も批判の対象となる時勢から、歴史学者は神話分野の研究から退避したのである。

スサノウが高天原を追放されて「出雲国の肥河の川上の鳥髪」に降りされたから始まる出雲神話の場所の比定

がまず行われた。『古事記』が語る数々の神話は島根県の山・河・神社に比定された。

比定について一か所に決まるまでには紆余曲折があった。既述したようにイザナギの葬り地について「出雲国と伯耆国の境にある比婆山」の記載から、島根県と広島県の県境にある標高一三〇〇メートルの比婆山とされてきた。しかし伯耆国とは接していないことから、安来市にある同じ比婆山ながら四分の一の高さの伯太町比婆山が葬り地と地元は信じ続けてきた。『古事記』の記載通り、伯耆国に接しているという記述条件に適うと説明した。

また『日本書紀』の一書にある「紀伊国の熊野の有馬村（現花窟神社）に葬った」との記載を持ち出し、紀伊熊野も手を挙げる混乱が続いた。

しかしオオクニヌシの「国作り」（葦原中国の統一）が行われた経緯も、また「国譲り」の交渉の模様も具体的で詳細な記述が残されているだけに、古代出雲王朝の存在を強く信じさせたのである。

津田左右吉は『日本上代史の研究』のなかで「記紀の説を歴史的事件が伝承の間に説話化せられたもの、要するに所謂伝説である」そして「それから説話的色彩を除去すればおのずから歴史的事件がその本来の面目を露呈して来る」とした、明治・大正期の通説を厳しく批判したのであったが、在野の歴史研究家の耳には届かなかった。

三　出雲王朝論の復活

戦後の学校教育では新憲法により現人神とする天皇制は否定され象徴天皇制が成立すると、あれほど国民に親しまれていた記紀神話は歴史教育から完全に抹殺されてしまう。それに伴い、当然ながら「古代出雲王朝」論は鎮火した。

京都市立芸大教授哲学者梅原猛（一九二五―二〇一九）は一九七〇年『すばる』創刊号で発表した「神々の流竄」の中で「出雲神話なるもの大和に伝わった神話を出雲に仮託したもの」とし、津田左右吉の「日本神話はすべてフィクション」説を引用した。梅原は戦後島根県に記紀が語る壮大な出雲王国が存在したのであれば、神話を裏付ける相応の古代遺跡が存在するはずであるとした。しかし戦後二〇年以上経ても考古学が認める遺物や遺跡は発掘されていないと言及し、古代出雲王朝の存在を否定したのである。

梅原の主張が一転するのが、一九八四年荒神谷遺跡から三五八本というこれまでわが国で発掘された銅剣累計総数よりも多いという驚くべき大量の出土からであった。

続いて九六年加茂岩倉遺跡一か所からこれまでにない三九個という多くの銅鐸が発掘された。さらにその四年後出雲大社境内から五〇㍍近い高層神殿の巨大本殿柱と思われる発掘があった。古代学者を一様に驚かし続ける島根県西部からの出土を受け、梅原は『神々の流竄』（発刊八五年）での主張を一八〇度転向した『葬られた王朝』（二〇一〇年）を出版した。今度は古代出雲王朝論を展開し、神話に登場するオオクニヌシ命の存在と功業を改めて唱えたのである。

新著の中で『古事記』の物語るスサノウ神話は、すべて史実であるとした。古代出雲王朝はスサノウにより始まり、オオナムジ（後オオクニヌシ）の代で「国作り」は完成したとする。その名残として現在催行される三保神社（青柴垣神事・諸手船神事）佐太神社（神在祭）出雲大社（神在祭）の古祭があり、「国譲りの神話は決して架空のことではなく、それが事実であることを末永く後世に伝えるもの」とみなした。

荒神谷や加茂岩倉二遺跡から大量に出土した銅剣・銅鐸の青銅器類は地元出雲地方で製造されたものとし、これほど多くの宝器を所有できたのは、出雲王朝の大王でありおそらくオオクニヌシ命であろうと推測したのである。

梅原説は哲学者として自由奔放で独創的な発想については多くの読者を獲得するが、古代史学者から見れば根拠の乏しい勝手な思い付きや推論ととらえられよう。たとえば荒神谷遺跡から出土した大量の銅剣埋納については、現在でも学者間で多くの学説に分かれ一致していない。梅原の「古代王朝の大王オオクニヌシ命が隠したもの」との説は一般読者には興味を持って読まれるであろうが、専門家にはとても受け入れられない説である。

古代史学者の明治学院大教授武光誠は出雲では卑弥呼の時代より三〇年早く一国（出雲政権）にまとまり、大国主命信仰をつくったとした。大和朝廷は最初大国主命と同一神でありかつ大和三輪山の神である大物主命を祀る。その後大物主より格の高い皇祖神天照大神をつくるが、古代人の間に天照大神信仰は十分に広まらなかった。そのため一貫して大国主命は愛され続けたとし、荒神谷遺跡からの銅剣大量出土がそれを証拠づけるとした。そして大和朝廷成立の約一〇〇年前にあたる二世紀半ばには、出雲に有力な「宗教勢力」があったと主張するのである。

武光説は梅原説と同様考古学的裏付けを欠き、専門家の賛同を得ることはできまい。

因みに東洋学者の京都大学教授宮崎市定は荒神谷遺跡からの銅剣大量出土ついて、独立出雲王権とか祭祀の儀礼とかに関係づけて解明しようとするが、銅剣の並び方

は何のことはない「現今の百貨店の売り場で万年筆を並べているのと少しも違わない」として、銅器類は「商品ではないか」と推測している。

梅原が重視する古社の「神在祭」について、「八百万の神々が神集いした」というのは九州・北陸・近畿の倭人がこの地で交易をしていたことを示すものである。また出雲王権の初代と目されるスサノウが根の国（根の堅洲国）に移り住んだというのは、朝鮮の事と考えるのが自然とした。

そして銅剣・銅鐸文化の出雲王権は新しい鉄剣・鏡文化の大和勢力と衝突がありこれに敗北した。これがオオクニヌシ命の「国譲り」である。二遺跡の青銅器大量埋納については、時代遅れになった銅剣・銅鉾・銅鐸は無残にも地下に埋もれて世人から忘れ去れたものであるとした。

古代史学者の緻密で些細な事象にこだわらず、東洋学者としての幅広い視点に基づく率直で簡潔明瞭な解釈はかえって納得しやすい。

四　古代史学者門脇禎二の王国論

日本古代史を専門とする奈良女子大教授門脇禎二は荒神谷遺跡が発掘される以前から、「地域王国論」を提唱した。七〇年代に門脇は大和政権が確立される以前の古墳時代に、地域国家（王国）が存在したと主張した異色の文献学者である。具体的には吉備・丹後（丹波）・若狭・出雲・越の地域を挙げた。

荒神谷・加茂岩倉両遺跡の発掘前から、古代出雲について稲作から始まる弥生時代に肥沃で水利に恵まれた出雲平野には農業共同体のむら（村）が形成され始め首長が誕生した。これを「原イツモ国」と呼び、西谷墳墓群（弥生時代後期後半～終末期）の四隅突出型墳丘墓を代々首長の王墓とした。

さらに「原イツモ国」の存在を証明できる考古学的遺物の出土を期待していたやさき、八四年弥生時代中期の銅剣三五八本という未曽有の青銅器群が荒神谷遺跡から出土した。しかも翌年には銅剣発掘近くの斜面から、文化圏が異なるとされてきた銅鐸六個と銅矛一六本が同時に出土するというわが国初めての事態が明るみになった。従来の定説であった銅剣・銅鉾・銅矛と銅鐸の二大文化圏論の見直しを迫る発掘であった。

一〇年後には神奈備山（神の籠る山）とされる仏経山を挟んだ加茂岩倉で銅鐸三九個が入れ子状態で発見され、一か所からではこれまでにない最多の銅鐸出土であった。斐伊川下流での青銅器の相次ぐ大量出土に意を強くした門脇は、「原イツモ国」の存在を確信し、これまで発表してきた古代出雲関係の著作の再論補強をしていく。

もっとも門脇の出雲王国論は原イツモ国にあるのではなく、その後に統一された王国にある。出雲国では四世

紀には東部オウ（意宇）の出雲臣と西部（現出雲市南部）の神門臣が並び立ち覇を競う。ヤマト政権と友好関係を結んだ出雲臣と吉備を後ろ盾とする神門臣の対立は、吉備国がヤマト勢力の軍門に降ったことから出雲臣は統一をなし遂げる。

門脇の地域王国論は出雲臣が統一した後、ヤマト政権と友好関係を結んだ後の情勢を研究したことからである。王墓はこれまでと同様の前方後方墳を続けるなど、出雲国はヤマトの完全な傘下に入ったとはいえない。中央から遠隔地であり、ヤマトの統制は緩くかなりの自由が許されていた。その結果独立した出雲王国が古墳時代末期までの一～二世紀続いたとするものである。

東部出雲の意宇（現松江市南部）では岡田山一号古墳からヤマト政権の統治体制下に移行した証である「額田部（ヤマト政権の直轄民）臣（それを管理する豪族）」の銘文がある鉄製円頭大刀が出土している。古墳の築造は六世紀後半とみられることから、遅くともこの時代まで王国が続いたと推測されよう。

門脇説は通説である「前方後円墳築造がヤマト政権に従属移行した証」とするのに対し、地方によっては前方後円墳築造後についても「ヤマト政権の統制下に入るには氏姓制度や部民制の実施など「移行には相当の年数を必要とした」と考えるものである。奈良大和から交通不便な遠距離にあり人の交流が少ない地方では、中央政権の政治体制下に組み込まれるのはかなりの年数を必要としたと見るのである。

五　在野研究家の王朝論

二〇〇九年纒向遺跡（奈良県桜井市）から、三世紀前半の三棟の直線的に整然と配置された大型建物跡が発見された。さらに八か月後には同じ軸線上に三世紀最大の建物跡（一二・四×一九・二メートル）が発掘された。これら計画的建物群は「卑弥呼の宮殿か」と新聞一面をにぎわし、これこそ『魏志倭人伝』の記す楼閣や城柵で守られた「卑弥呼の宮室」とまで断定する専門家の談話が報じられた。これら一群の発見以降邪馬台国九州説は少数派となり、畿内説が圧倒することになった。

二〇世紀後半古代史研究者だけでなく作家など多くの門外漢が大分宇佐や宮崎など九州各地を邪馬台国の所在地とする自説を競い合ったいわゆる「邪馬台国本」は、纒向遺跡から大型建物群跡が発掘された以降は、ほとんど出版されなくなってしまった。

それに引き換え邪馬台国畿内説が本命視されるようになると、古代出雲王朝の存在を主張する在野の研究家は俄然研究・発表を活発させ、出雲王朝論についての出版が相次ぐ事態になる。というのも在野研究家の「出雲王朝論」の根拠は、「邪馬台国畿内」説と表裏一体なのである。

邪馬台国論争は『魏志倭人伝』の記す対馬国（対馬列島・規模千戸）→一支国（壱岐原の辻遺跡・三千戸）→末盧国（唐津市・四千戸）→伊都国（糸島三雲遺跡平原遺跡・千戸）までは、九州・畿内両説とも異論はない。そこから記載されたクニグニを記述順に進むと、東南一〇〇里で奴国（福岡市須玖岡本遺跡・二万戸）に着く。さらに東へ一〇〇里で不弥国（玄界灘に面した福岡県宗像神社付近二〇〇九年田熊石畑遺跡発見・千戸）に至る。

肝心なのはここからである。『魏志倭人伝』では「南、水行二〇日」で投馬国に、そして「南、水行一〇日陸行一月」で邪馬台国に至ると記す。内藤虎次郎は中国では「南を東にも使う」事例から南を東へと読み替える。水行二〇日の投馬国へ瀬戸内海を通行すると、岡山県吉備国にたどり着くだろう。

しかし日本海山陰沿岸の航路をとり対馬海流を利用すると、水行二〇日で丁度投馬国すなわち出雲国に至るのである。瀬戸内海航路は現代からみると島が多く航海は安全に思われるが、狭いところでは渦を巻くなど潮流が激しく、当時の小型の船ではかなりの困難を伴う航路とみられる。そのため瀬戸内海航路が主流となるのは、船舶が大型化し機能が向上した古墳時代からとする。三世紀弥生末期では対馬海流を利用する日本海航路の方が、動力のない船にとっては有利であり利用度が高かったとするのである。

投馬国出発のあと日本海沿岸を進めば、水行一〇日で若狭（丹後）付近に着くであろう。そこで上陸し南方向へ陸行一月ほど進めば邪馬台国にいたるという、『魏志倭人伝』の記述に矛盾なく大和にある邪馬台国にたどり着けるのである。瀬戸内海航路をとるといかように解釈しても「陸行一月」の記述が問題として残る。上陸後陸行一か月に当てはまるコースは、無理をした解釈例えばわざわざ難波より手前の神戸または明石付近に上陸し陸行をせざるを得なくなる。

『魏志倭人伝』の記す投馬国は残念ながら国の規模しか記されておらず、単に「五万戸余り」と記している。倭人伝記載の国では女王卑弥呼が統治する邪馬台国は「七万余戸」としており、それに次ぐ第二番目の大国である。福岡博多付近を想定する北部九州最大の奴国の二・五倍の規模である。

邪馬台国畿内説が優勢になるにつれて、投馬国＝出雲国説は俄然熱を帯びる。『魏志倭人伝』の伝える投馬国は古代出雲王朝説にとっては、極めて都合の良いものである。大和勢力と思われる邪馬台国の七万戸に次ぐ五万戸という第二の規模を持つ大国と明記されており、これ以上の王朝存在のよりどころとするものはないであろう。

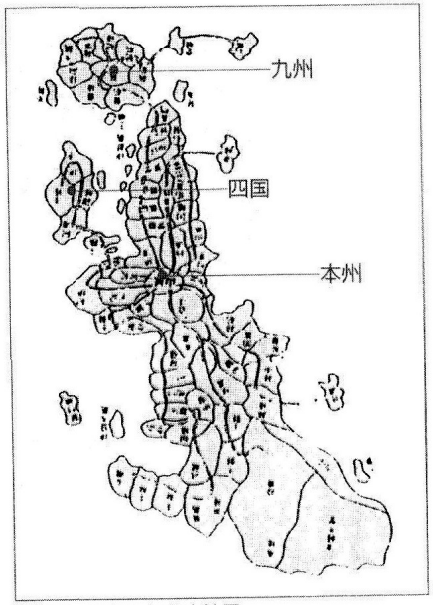
『倭人伝』は三世紀後半西晋の陳寿が著したもので、二～三世紀の倭情勢を伝える唯一の文献であり出雲王朝説にとって極めて有力な史料となるものであった。

奇説であるが出雲国＝邪馬台国説がある。伊能忠敬の測量による日本列島図は九州を西端に東北の端陸奥と北海道を東端に配置する見慣れた地図であるが、それ以前は行基菩薩御作と記される「日本図」であった。最古の日本図（重文）は一三〇五年書写されたもので、京都仁和寺が所蔵している。行基（ぎょうき）（六六八―七四九）は水・陸交通施設や灌漑設備の造営修復や社会事業活動を行うなど、大僧正にまでなった高僧である。

行基作と伝わる簡略な様式の日本図は諸国を鱗状または俵状に描いたもので、七道によって串差しにされたように表示される。江戸時代中期の実測図作成以前には、古代中世を通して「行基図」と呼ばれる各種の日本図が作成され書写利用されてきた。古代日本人の日本列島を想い描いたものとされる。

行基図は南北が逆転した形となっており、時計回りに一八〇度回転した状態で描かれている。『魏志倭人伝』の方向についての検証には、現在の地図を使用して方向を議論しているが、あくまで古代日本人が描いていた列島の方向感をあらわしているとされる行基図を使い読み進めなければならない。

かくして方位を修正することなく『魏志倭人伝』の記述通りに進めば、邪馬台国は出雲国に重なるというものである。無論八世紀に作成されたという行基図が弥生時代人の持っていた日本列島の方向感を、そのまま引き継いで作成されたという確証はまったくない。



行基図。逆転した日本地図

『卑弥呼の列島地図』

八〇年代から続いた荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡からの未曾有の大量青銅器の出土は、出雲王朝説にとって文句なしの決定的な考古学的証拠とみる。二遺跡は斐伊川下流出雲平野の周辺に位置しており、四隅突出型墳丘墓が集積する西谷墳墓群に近く、出雲王朝存在の揺ぎ無い遺物と見なされた。

二〇〇〇年出雲大社において、『記紀』に記される高層神殿を裏付けるとされる発見があった。三本を一括りにした心御柱の直径は三㍍を越えるもので、伝えられてきた約五〇㍍（一六丈）さらに一〇〇㍍（三二丈）と伝わる高層神殿の存在を確かなものにするとされた。すなわち『古事記』のいう「天御舎（あめのみあらか）」、『日本書紀』の「天日隅宮（あめのひすみのみや）」の存在が改めて裏付けされたとして、『記紀』神話には史実性があると主張する者にとっては、重要な発見であったことには間違いない。

斐伊川下流の丘陵に集積した西谷墳墓群で発掘された四隅突出型墳丘墓の調査が進むにつれて、その巨大さや他所では見られない異様な形態さらに土器類などから日本海沿岸の広域交流を示す遺物など、大小三〇近くが連なる墳丘墓群は数代続いた王朝の王墓であるとみられた。古代王朝の存在を主張する者にとって、まちがいない数代続いた王朝存在の証拠といえる遺跡とみたのである。独特の形をした四隅突出型墳丘墓は調査が広がると伯耆・因幡さらに越にまで存在しており、出雲王朝の支配領域を示しているとみられた。

出雲神話は記紀の中では高天原や日向三代より詳しく記述されており、豊富な情報を後世に伝えている。神話に史実性が含まれていると考える者にとって、この事実こそ出雲王朝の存在を物語るとするのである。とくに出雲王朝の諸国制覇とヤマト勢力への服従については、最古の史書『記紀』には「国作り・国譲り」の神話として語られているとみる。すべてが史実ではないとしても、描かれている神話の中には史実が含まれており、神話として後世に伝えられていると主張する。津田左右吉のいう「神話はすべてフィクション」ではないことを、在野の研究者たちは相次いだ大量発掘された青銅器の遺物から読み取ることができた。

歴史時代に入っても他国に無い完本の『出雲国風土記』や「出雲国造神賀詞奏上文」（『延喜式』）など、八世紀初頭の貴重な文献資料が残されており王朝の痕跡の存在を見いだせた。

さらに出雲国の有力古社で現在に伝わる出雲大社および佐太神社の「神在祭」、三保神社「青柴垣神事」「諸手船神事」、日御碕神社「和布刈神事」、熊野大社「亀太夫神事」など、これら神事の由来はかつての王朝をしのぶための今に伝えられたものとみられた。

宍道湖周辺に散在する古代出雲王朝にかかわると思われる遺跡・遺物や古社の神事などの伝統行事が豊富に揃い、在野の歴史研究家は古代史の大きな謎の一つである「古代出雲王朝」についてその存在を信じて疑わない。

古代出雲王朝論に関する出版物は途切れることなく続いており、出版社は話題性のある歴史分野として「古代出雲王朝論」に目を付け、ムック本や特集本が継続的に出版されている。

六　幻の古代出雲王朝

古代出雲王朝の存在を論じる在野研究家の出版物をみると、「王朝」という用語が様々に用いられていることに気付かされる。「王国」との相違など統一した定義がないので、勝手気ままに使用されている。

一般的に「王朝」と呼ぶには文字のない弥生時代は適用しないので、古墳時代以降ということになる。また王朝とみるからには、数代少なくとも三～四代続くことが求められよう。また支配地域は弥生時代のいくつかのクニの統合が規模としても必要である。古代史の専門家はこうした暗黙の定義があるので、「王朝」という言葉は滅多に使用しない。

古代出雲王朝の存在を主張する研究家の多くは遺物の使用された年代を無視した推論や混同した説が多い。前述した諸説についても王朝にかかわる遺物や遺跡の使用年代の検証がなされておらず、これら遺物があたかも同時代に存在使用されたものとして自説を展開する。たとえば荒神谷遺跡出土の青銅器は前二世紀後半～一世紀前半に製作されたもので、加茂岩倉の銅鐸製造は前三世紀～二ないし三世紀である。したがって両遺跡は少なくとも一〇〇年のずれがあり、同時代とみるわけにはいかない。

二～三世紀中頃までの倭国の情勢を記述している『魏志倭人伝』に登場する投馬国を、古代出雲王朝ととらえる在野の研究家は多い。時代としては弥生時代末期であるが、そうであれば加茂岩倉遺跡とは被る時代がある可能性は残るものの、荒神谷遺跡とは一〇〇年以上の隔たりがある。

『魏志倭人伝』の投馬国の比定は国の人口から推定して多くの専門家は岡山県吉備を主張しており、出雲説は少数派にとどまる。八世紀の出雲国の人口を八万六千人と推定する専門家おり、五世紀ほど遡ることを考慮すると、三世紀の出雲の人口五万余戸はあまりに多い。気候に恵まれ広大な農地を抱える吉備の方が、投馬国にはふさわしいものと判断しているのだろう。

出雲大社心御柱発掘について高層神殿は八丈約二五メートル説をとる筆者は、本殿建設は『記紀』成立後の八世紀半ば以降とみており、神話の史実性は認めがたい。『記紀』に登場する出雲系神話については津田左右吉が指摘したように、大部分は七世紀から八世紀にかけて天皇制確立のため中央大和朝廷の官僚らで創作されたものとみる。

歴史学者門脇貞吉の四～六世紀の間にヤマト政権の統治体制が整うまでの期間に限定する地域王国論は大和政権の傘下に入ったものの、氏姓制・部民制などの統治体制や皇室の直轄地である「屯倉」が置かれるまでは、遠方の諸国に対しては整備された統治は難しいことが予測され、門脇の主張する緩やかな王国が地域によっては存

続していたとの主張は認められよう。

しかしすでにヤマト政権に従属しその証として少し遅れてはいるものの王墓は前方後円墳に移行していることから、ある程度の自由裁量が残されていたとはいえ、嘗ての王国と同じ扱いにするには問題が残ろう。ヤマト政権の統治体制の実施が間に合わない暫定期間であり、既に政治的には傘下に組み込まれていることを考慮すると、地域王国論は成り立たないと思われる。

出雲国について古墳時代から歴史時代までを総括すると、ヤマト政権が本格的に確立する五世紀以降地域によっては体制に組み込まれるまでの年代差はあるものの、六世紀になると全国的にほぼ統一された制度が実施されたと思われる。出雲国においても岡田山一号古墳出土の銘文が刻まれた円頭太刀により確かめられる。

七世紀半ばの「乙巳の変」によりヤマト政権は大豪族を退け、天皇中心とする政治体制がとられる「大化改新」により、諸国において中央集権的行政制度がいきわたる。財政の基本である民衆の負担については、公地公民制や班田収授法・新税制の制定などに着手する。諸国には初めは中央から常駐しない使者の形式の官吏が派遣されたものと思われ、地方を実質的に統治した国造制は廃止になる。遠隔地であったためであろうかあるいは出雲国造の統率が必要であったためか、出雲国では例外的に意宇郡司出雲臣が以前のまま「出雲国造」を名乗っていたことが文献史料により判明している。

古代最大の内乱となった「壬申の乱」という皇族間の争いを経て、天武・持統両天皇時代から、律令国家として中央官僚制・地方行政制度や公民税負担などの諸制度が整備され、八世紀初頭の「大宝律令」制定に至るのである。この時代並行的に天皇の神格化が進められ、『古事記』『日本書紀』の編纂もあり、唯一国の統治者とする天皇制が確立する。

出雲国司として最初に記録に残るのは『続日本記』七〇八（和銅元）年三月の条である。藤原不比等ら中央官庁の人事異動とともに大宰府や摂津国を始めとする国司の任命が掲載されている、その中に「正五位下忌部宿祢子首を出雲守」に任じたとあり文献上初めて国司名が特定される。出雲国では発掘調査から七世紀後半から八世紀前半にかけて、松江市南部意宇平野（現六所神社周辺）に国庁が建設されたものと思われる。そして七世紀後半から八世紀の出雲国の詳細については、七三三年中央官庁に報告された『出雲国風土記』という文献史料により詳細に知ることができる。

なお九二七年完成した『延喜式』祝詞の部分に収められている「出雲国造神賀詞奏上」の初見は『続日本記』七一六年三月の条に「出雲国造・外正七位上の出雲臣果安が、斎をすまして神賀詞を奏上した。神祇大副の中

臣朝臣人足が、その寿詞を天皇に奏聞した。この日百官たちも斎をした。果安以下祝部（はふりべ）に至るまで百十余人に位を進め、身分に応じて、物を賜わった」との記載がある。この奏上については出雲の服属儀礼説・天皇即位関連儀式説・出雲国造代替わり儀式説などの説がある。筆者は天皇が列席した百官正装の儀式の中で、しかも出雲臣の代わりに奏上する神祇官中臣人足（ひとたり）が『古事記』の記載とまったく異なる「天穂比命の正当化」を奏上するということが果たして「許されたのか」疑問であり納得がいかない立場である。　ましてこの時には実力者藤原不比等は生存しており、編纂作成に従事した高官の多くが儀式に参列している中である。とても『古事記』と異なる奏上など許されなかったと思われる。よって『延喜式』掲載の「奏上文」については、平安期になって改変されたものとする立場である。

東西に分かれた出雲国の弥生時代から文献資料が入手できる八世紀の歴史時代まで考古学的知見を基に出雲王朝論について論じたが、考古学・歴史学を重視する立場からは、一部の歴史学者や在野の研究家が主張する「古代出雲王朝」が存在していたという根拠は乏しく、幻であると思慮するものである。

（完）

参考文献

梅原　猛　『神々の流竄』　集英社文庫
梅原　猛　『葬られた王朝』　集英社
大塚初重　『邪馬台国をとらえなおす』　講談社現代新
門脇禎二　『古代出雲』　講談社学術文庫
武光　誠　『古代出雲王国の謎』　ＰＨＰ文庫
古川隆久　『建国神話の社会史』　中公新書
宮崎市定　『古代大和朝廷』　ちくま学芸文庫

私の本州マラソン歴史紀行（中部編②―静岡県（２）愛知県―）

安藤　剛

【静岡県・愛知県　家康の出世街道を走る】

二〇一四年四月、尺八の兄弟子から師匠磯野茶山三十三回忌法要の案内が送られてきた。京丹後市で執り行われるとあり、序でには失礼か思うが、折角京都まで行くなら前日の日曜に東海道沿線のどこか走れるマラソン大会がないかネット検索してみると、気軽に参加できる浜名湖一〇キロマラソンを見つけて即エントリーした。

浜名湖近くの観光地と言えば徳川家康の浜松城であろう。この機会に家康ゆかりの他のお城も巡ってみたい。

奇しくもＮＨＫ大河ドラマが岡田准一演じる「軍師官兵衛」である。織田と毛利の両大国に挟まれた播磨の小寺家に仕える官兵衛は、旧友荒木村重を頼って信長に帰依し秀吉と軍師竹中半兵衛と親交を深めていくが、三木城攻めの最中に村重が突然戦線を離脱して有岡城に帰り、村重の謀叛を翻意させようと有岡城に向かった官兵衛が逆に捕縛されて土牢へ幽閉されてしまう。

有岡城内に幽閉されて消息を絶った官兵衛が信長に裏切ったと誤解され、官兵衛が人質に入れていた嫡男松寿丸が信長に処刑されるところを半兵衛が密かに匿い、有岡城の落城で救出された官兵衛が信長に官兵衛許せと言わしめる展開は戦国ドラマの真骨頂である。

家康が登場するのは、安土城を訪問した家康の饗応役を務めた明智光秀が信長に叱責されて信長への叛意を固める七月六日の放映からで、寺尾聰の家康と竹中直人の秀吉の対峙も見ものだが、放映前に浜松に途中下車してそれまでの家康の生き様を自分の足で辿ってみたい。

浜松に出立する二週間前の六月五日、磯田道史が司会するＮＨＫＢＳテレビ「英雄たちの選択」で「長篠の戦い、戦国最強・武田軍はなぜ敗れたか」が放映された。

武田勝頼が信長家康連合軍に無謀な正面突撃を敢行して信長の革命的な鉄砲戦術に敗れ、その後の武田氏滅亡の原因とされてきたが、近年の研究から信長の一方的な勝利ではなく、長篠合戦図屏風下絵には武田軍が馬防柵手前まで押し寄せて柵を突破した者がいたことが描かれており四時間に及ぶ大激戦だったこと、もし勝頼が長篠の決戦を回避して長篠城を攻略し籠城していたら、長期戦を嫌う信長はやがて引き上げて、家康の徳川軍だけでは武田の相手にならず、武田を駆逐する機会を逸した信長の天下統一も遅れただろうと推測していた。

それにしても勝頼も鉄砲を多く保有して鉄砲の威力も百も承知のはず、竹槍で機関銃に向かって万歳攻撃した日本陸軍のように、信長の構築した銃列を敷いて待ち構える馬防柵に向かって無謀な騎馬戦を本当に仕掛けたとはどうしても思えない。長篠の戦いの真相はいかに。

攻めかかる武田勢を鉄砲攻撃で過半を討ち取ったとする「信長公記」、馬場信春・山県昌景ら武田家宿老の反対を跡部勝資・長坂光堅ら勝頼側近に押し切られて勝頼が決戦を決断したとする「甲陽軍鑑」、佐久間信盛が武田方に虚偽の内通をして油断させて武田軍を設楽ケ原に誘い出したとする「三州長篠合戦」など諸説あり、いずれも編者の身贔屓な著述のように思うが、それぞれが真相の一端を伝えてはいるのだろう。

今回の浜名湖マラソン参加を機に、浜松から長篠まで足を伸ばし、設楽原に実際に立ってみて、長篠合戦の真相と信長と同盟を組んだ家康の戦略を探ってみたい。

かくして東海道に並ぶ長篠城と家康の居城「岡崎城と浜松城と駿府城」を訪ねる三泊四日の旅程を組んだ。

浜松といえばヤマハやカワイの楽器の街である。調べてみると偶然にも浜名湖マラソンの前夜にヤマハ吹奏楽団の定期演奏会が開催され、演目がリヒャルト・シュトラウス生誕一五〇年のプログラムだという。

一九六八年のSF映画「二〇〇一年宇宙の旅」に流れた「ツァラトゥストラはかく語りき」に、この世にこんな音楽があるのかと興奮した思い出が甦ってくる。かなり強行日程になるが早速ネットでチケットを購入した。

【家康の居城遍歴】

「岡崎城」に生まれた家康は、幼少期の一一年を「駿府今川館」で人質生活を送り、一五六〇年の桶狭間の戦いで今川義元が信長に討たれると人質から解放されて生誕の地「岡崎城」に戻り自立した戦国武将として歩み始め、信長と同盟を結んで三河を統一、東進して旧今川領の遠江制圧戦を開始、駿府に攻め込んできた武田信玄の侵攻に備えて遠州一帯を見渡せる三方ヶ原に着目、一五七〇年に岡崎城を長男の信康に譲り、三方原台地の東南端に「浜松城」を築城して三河遠江経営の拠点とした。

二九歳から四五歳までの一七年間を浜松城で過ごし、浅井・朝倉との姉川の戦い、遠江・三河に侵攻してきた信玄との三方ヶ原の戦い、武田勝頼との長篠の戦い、秀吉との小牧・長久手の戦いはこの期間の戦いである。

秀吉と和睦した家康は一五八六年に関東総無事の拠点として今川館跡に築城した「駿府城」に移り、一五九〇年の小田原合戦後に秀吉の命で関東に移封されて江戸城に入る。一六〇〇年に関ケ原の戦い、一六〇三年に征夷大将軍に任ぜられ、三年後に嫡男秀忠に将軍職を譲って一六〇七年に駿府城に戻り大御所政治を敷き、大坂の陣で豊臣氏を滅ぼした翌一六一六年、七五才の生涯を閉じた。愛知・静岡の「岡崎・浜松・駿府の三城」は幼少から壮年そして晩年の波乱の生涯を過ごした居城である。

【家康の人質時代】

歴史番組「英雄たちの選択」に触発され、長篠の戦いを調べるうち、武田方の武将奥平貞昌を徳川方に寝返らせるため、家康が長女亀姫を嫁がせることを条件にしたことを知った。長く辛い人質経験のある家康が幼い娘を取引に利用する冷酷なことをするものだろうか。

六才から一三年もの長い人質生活の経験をした家康の非情な生い立ちを視点に改めて家康の人生を見てみた。

家康の家系は、三河の弱小土豪の三河松平氏、祖父清康の代に三河国をほぼ統一するが、尾張の織田氏と交戦中に清康が家臣に暗殺されると、大叔父の信定が岡崎城を占領して遺児広忠（家康の父）は伊勢に逃れる。

今川義元に支援を求めて信定から岡崎城奪還を果たした広忠は、織田信秀（信長の父）の三河侵攻に対抗する見返りに、当時六歳の嫡男竹千代（後の家康）を今川に人質に差し出すが、今川氏へ護送中に竹千代が織田氏に内通した家臣に拉致されて織田氏の人質となる。

翌年広忠は今川の援軍を得て織田軍に勝利するが、翌年に広忠が家臣に討たれ岡崎城は今川氏の支城となる。

今川軍が三河松平軍を率いて織田氏安祥城を攻略、信長の兄信広を捕縛して竹千代と人質交換、竹千代はそのまま今川氏の人質として駿府に送られ義元の下で元服し義元の姪を正室築山御前に迎えて名を元康と改める。

永禄三年に大軍を率いて尾張に侵攻した義元が桶狭間で織田信長に討たれると、今川氏の勢力は三河から一掃され、今川氏の混乱に乗じて岡崎城に復帰した元康は、信長と清洲同盟を結んで名を家康と改め、信長の盟友として三河から遠江に版図を広げていく。

築山御前との嫡男が信長の長女徳姫と結婚、元服して名を信康と名乗り、一五七〇年に岡崎城主となり長篠合戦で徳川軍の一手の大将として参加、その後も軍功を挙げていたが、一五七九年に信長の命令で母と共に自刃させられる。信康二〇歳、家康三六歳の時である。

信康自刃事件について、通説では、徳姫が今川の血を引く築山御前と折り合いが悪く、信康とも不仲になっており、築山御前が武田勝頼と内通していたことなどを徳姫が父信長に書状で訴えたためとされている。

しかし不仲や不行状だけで信長が唯一の同盟相手の正室と嫡男の殺害を命ずるはずはなく、家康と信康の父子不仲説、武断派の浜松城と文治派の岡崎城の派閥抗争説など諸説あるが、私には関ヶ原の戦い直後に京都二条城で豊臣秀頼と会見した時の家康の胸中が浮かんでくる。

家康は関ケ原の後も豊臣氏の温存を考えていたが、謁見した秀頼のあまりに堂々とした態度に、息子秀忠の将来を危惧、秀頼を排除しようと大坂の陣を引き起こしたとする説がある。家康と今川義元の血を引き長篠の戦いで活躍した信康の存在に脅威を感じた信長が我が子信忠の将来を危惧、信康の排除を考えたのかもしれない。

家康は三歳で母と生き別れ、八歳で父を祖父と同じく家臣に暗殺され、六才から一九歳まで人質生活を送り、挙句に妻と長男が盟友信長に容赦なく自刃させられる、なんと悲しい人生を味わったことか、この非情な生い立ちと境遇が家康のその後の人生に投影しないはずがない。

戦国時代の英雄として、川中島で対決した武田信玄と上杉謙信、天下を統一へ導いた織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三英傑があげられるが、その中で家康の評判がどうもよろしくない。徳川二六〇年の長期安定政権を樹立した家康はなぜ人気がないのだろうか。

三英傑の性格を譬えた句がある。「鳴かぬなら殺してしまえ時鳥」が苛烈な信長で「鳴かぬなら鳴かせてみしょう時鳥」が策略家の秀吉、「鳴かぬなら鳴くまで待とう時鳥」が忍耐の家康とされている。

信長の「桶狭間の戦い」で今川家の人質から解放され、信長の鉄砲隊の援軍を得た「長篠の戦い」で武田家が自滅し、秀吉の死で天下が我が手に転がり込んで「大阪の陣」で豊臣家が自壊同然に滅亡、戦国の乱世に自力で勝利をもぎ取ったのなら英傑と褒め称えられようが、時世に身を委ねて最後まで生き残っただけで天下が取れてしまったことから、忍耐の家康とされたのかもしれない。

世の成り行きに身を任せ、自らは動かず動けずじっと耐え凌いで時の到来を待ち、最後の最後に居残り勝者となった家康の忍耐の強さは、祖父と父を家臣に殺され、今川と織田の二大勢力の狭間で弱小領主の嫡男として幼少期の一三年を敵方の人質になってきた、非情な境遇を生き抜いて培われたものなのかもしれない。

【家康の長女亀姫の婚姻戦略】

家康が武田勝頼の三河侵攻に対抗するため、奥三河の国衆である奥平貞昌に、長女亀娘を嫁がせる条件で徳川方に引き入れ、最前線の長篠城を守らせた。

戦国大名が敵対する大名と戦略的同盟を結ぶ手段として娘を輿入れさせる事例は枚挙に暇がない。

尾張に織田、甲斐に武田、越後に上杉、駿河に今川、相模に北条、三河に徳川が群雄割拠して相克する戦国の世にあって、信長は長女徳姫を家康の長男信康に、姪を武田勝頼に、信玄は長女を北条氏政に、四女を織田信忠に、五女を上杉景勝に、今川義元は娘を武田義信に、北条氏康は娘を今川氏真に嫁がせ、敵対する守護大名同士の政略結婚は、壮大な相関図を形成している。

かかる婚姻戦略の時代に、家康は長女亀姫を格下の地方の一豪族に嫁がせようとした。戦国大大名と同盟締結の手段に使える長女を、なぜ格下に嫁がせたのか、嫁がせなければならなかったのか。幼少期に人質の悲哀を自ら味わった家康が、まだ幼い愛娘を調略のために利用するとは、とても信じられない。家康の心情はいかに。

いつもの野次馬根性がメラメラと燃えてきた。この拘りのアプローチを続ければ、人間家康に触れられそうであり、長篠城の戦いの真相にも迫れるかもしれない。

【武田軍団との戦い】

当時の家康の最大の敵は武田信玄だった。信玄は今川義元の敗死後、義元の娘を正室に迎えていた嫡男義信を叛逆の疑いで自害させて今川氏と断交、三河を統一した家康との間で、今川の旧領を大井川を境に西の遠江を家康に、東の駿河を武田に分割する協定を結び領有を拡げていたが、将軍足利義昭の反信長包囲網の企てに加わった信玄が遠江に侵攻して家康と全面対決した。

武田軍に各所で連敗した家康軍は、浜松城に籠城するが、浜松城を悠然と素通りして三河国に侵攻する武田軍の挑発に、追撃に出たところを巧みに反撃されて大敗、家臣が家康の兜と馬で身代わり討死するほどの惨敗で、家康は僅かな供回りだけで辛うじて浜松城に逃げ帰った(三方ケ原の戦い：一五七三年)。家康人生最大の危機だったが、天は家康に味方した。西上作戦途上で信玄の病状が悪化、甲斐に戻る途中で信玄は病死した。

武田氏は四男勝頼が家督を継ぐが、その間隙を突いて家康は奥三河の長篠城を奪還、徳川方から武田方に転属していた奥三河の国衆である奥平貞能・貞昌親子を調略して長篠城に配した。信玄の遺志を継いだ勝頼が大軍を率いて三河へ侵攻して長篠城を包囲、かくて長篠城の救援に向かう織田・徳川連合軍と武田軍が激突する。

二年前の三方ケ原の戦いでは、信長が越前の朝倉、近江の浅井、河内の三好、伊勢の長島一向一揆の制圧に忙殺され、家康の援軍要請に充分に応えられなかったが、浅井・朝倉・三好を片付けた今回は、三万の大軍を率いて家康と連合軍を組み、宿敵武田との最終決戦に臨むことができた(長篠の戦い：一五七五年)。

【奥平調略の条件】

同盟する信長の命令とはいえ、武田と徳川の間を風見鶏のように揺れ動く奥三河の奥平貞能・貞昌親子を味方に引き入れるため、幼い長女亀姫を嫁がせるものだろうか、奥平調略の条件なら他に幾らでもあったはずと思うが、家康の真の狙いはなんだったのだろうか。

奥平貞能の系図を調べてみて驚いた。なんと家康と縁戚関係にあった。貞能の母が、家康の母（於大の方）方の祖父水野忠政の妹で、貞能と家康の母が従姉弟関係、貞能の息子貞昌と家康とは、はとこの関係にあった。

しかし縁戚関係にあるとはいえ、家康は三河と遠江を領する五〇万石の大大名、奥平は奥三河の山間の一土豪の身分、現在の立場は雲泥の差である。家康が奥平に提示した長女を嫁がせるという条件は、奥平にとって破格なものだったろう。それだけ家康は苦境に陥っており、徳川の命運を奥平親子の帰服に託したのである。

二年前の三方ケ原の戦いで信玄率いる武田軍に完膚なきまでに打ちのめされた家康は、信玄死後の勝頼の三河再侵攻を千載一遇のチャンスと捉え、信長の力を借りて一挙に決着を付けようとした。

そのためには武田軍に包囲されている最前線の長篠城に、なんとしても岐阜から信長の三万が到着するまで持ち堪えて貰わなければ困る。もし信長が到着する前に長篠城が落ちてしまえば、信長の救援名目が無くなり戦わずして尾張に帰ってしまい、八千の徳川軍だけでは一万五千の武田軍にとても勝ち目がない。

前年に信長の援軍到着前に落城させてしまった高天神城の二の舞は絶対に許されない。長篠城を死守できる武将は、今は武田方に組みしている縁戚の奥平貞能・貞昌親子しかいない。家康は、武田軍壊滅作戦の鍵を握る奥平親子の調略に全精力を傾注した。そのため家康が最も大切にしてきたものを賭けて誠意を示す、それが亀姫だった。まさに一三年の人質生活を耐え忍んできた家康にとって、娘の婚姻戦略は苦渋の選択だったのだろう。

三河国は家康の祖父の代に統一されたが、その祖父と父が暗殺され、三河は主不在のまま今川氏の支配下となり、三河武士は長らく屈辱の服従を強いられてきた。

今川義元が信長に桶狭間で討たれ、今川家での人質生活から解放されて三河に戻ってきた家康は、屈辱に耐えてきた三河武士にとって、待望の三河再興の救世主だったにちがいない。岡崎城に入る家康を歓喜の雄叫びをあげて迎える三河武士団の姿が浮かんでくる。

長らく人質として流転していた家康に財力も武力もあるはずはなく、祖父と父が培ってきた三河土豪との主従の信頼関係が唯一の支えであり、三河武士団の結束こそ、三河再興の大きな力であると家康は信じていたのだろう。

未だ武田に与するか徳川に与するか決めかねている三河武士の去就は、徳川から武田に与した奥平親子の調略の成否にかかっていることを家康は感じていた。

最も大切な愛娘の降嫁を条件にしてまで、一土豪の自分を必要とすると三顧の礼を尽くして家康の示してくる誠意と信頼と打倒武田への強い覚悟に、奥平貞能の三河魂が呼び起されたに違いない。

奥平貞能も流石にしたたかである。信玄の急死で後継を巡り内訌する武田氏に未来はない、長篠城を持ち堪えて信長の援軍が武田軍を倒してくれれば、家康の長女を娶った奥平家の将来は安泰と考えたに違いない。

貞能の父貞勝は、徳川に服属する貞能と袂を分かち次男常勝とともに武田に服属した。徳川と武田のいずれが勝っても奥平家が生き残る道を選んだのかもしれない。

一五七〇年に武田軍の奥三河侵攻に屈した奥平貞能が武田に服属する証として人質に送っていた貞昌の元妻おふう（一六才）と弟仙千代（一三才）ら三人は、貞能・貞昌親子の寝返りに怒った勝頼の命で処刑され、その首級は反逆者への見せしめとして長篠城から北に五キロほどの金剛堂に晒された。この人質殺害が逆効果となり貞能・貞昌親子は、家康と運命を共にする覚悟を固めた。

家康は、調略した貞昌を長篠城主に据えることで、寝返った貞昌を憎む勝頼は必ず長篠城の奪還に進攻してくる、覚悟を決めた貞昌は家康の期待に応えるべく長篠城を死守して長篠城の攻防が長期戦になる、さすれば高天神城の時には間に合わなかった信長の救援部隊が到着する時間を稼げると計算していたに違いない。

家康の目論見通りに信長の援軍三万が間に合い、設楽ケ原の決戦で武田軍に大勝、奥平貞昌は信長から信長の信の字を与えられて信昌と改名した。信長が身内以外に名を授けるなど例がなく、長篠の戦いの貞昌が信長にとってもいかにキーパーソンだったかが知れる。

家康からも娘婿として重用された信昌は、譜代の重鎮として徳川の軍政改革にも貢献、関ヶ原の武功で京都所司代を務め、美濃加納一〇万石に加増転封され、長男の家昌は天海僧正の意で北関東の要衝である下野宇都宮一〇万石を与えられ、後に丹後宮津藩から豊前国中津一〇万石に移領、奥平中津藩は明治の廃藩置県まで九代一五五年間続き、藩校進脩館は後の慶應義塾の源流となる。

長篠の戦いの勝利は信長の鉄砲隊のみ注目されるが、その背後に奥平親子の苦渋の決断と家康の調略があったことを忘れてはならない。

【長篠の戦いの真相】

長篠の戦いは、天正三年（一五七五年）四月に父信玄の三年喪明けの法要を済ませた勝頼が、越後の上杉謙信の抑えに一万を海津城に残し、一万五千を率いて家康に

攻略された長篠城奪還のため信長・家康連合軍三万八千と対決、織田軍は鉄砲三千丁の三段撃ちで、当時最強の武田の騎馬隊を迎え撃ち壊滅させたといわれるが、二〇年前の川中島第二回の合戦で「旭の要害も武田の晴信人数を三千人垂針を射る程の弓を八百丁鉄砲三百から御入れ候（妙法記）」とあり、武田軍にも相応の鉄砲隊がありその威力も承知のはず、馬防柵を盾に待ち構える鉄砲隊に騎馬隊が我武者羅に突っ込むはずがない。

二ケ月前の岡山西大寺マラソンに参加した際に立ち寄った岡山城天守閣内に鉄砲の試射による凹みがついた兜が展示されて説明板に「当時の弾丸は鉛製で兜に狙いを定めて撃っても貫通できないなら、実際の戦闘で動き回る兜を撃っても貫通できるはずはない」とあった。

確かに先の尖った銃弾ではなく当時の丸い鉛の鉄砲玉で甲冑に身を固めて突進する武将を簡単に撃ち殺せるとは思えない。長篠の戦いの勝敗を決したのは本当に鉄砲だったのだろうかという疑問がその時に芽生えていた。

長篠の戦いでもう一つ、一万五千の大軍を擁する武田勝頼が、たかだか五百の兵が守る長篠城をなぜ攻め落とせなかったのという疑問である。

父信玄でさえ果たせなかった高天神城を落城させて勢いに乗る勝頼が、力攻めすれば長篠城も落とせないはずはないが落とせなかった。否、あえて落とさなかった。

長篠城の奥平親子が頑強に抵抗して守り通したといわれているが、勝頼の戦略は、長篠城を包囲してあえて落とさず、信長と家康を救援に誘い出して一気に叩き潰す作戦だったに違いない。勝頼は父信玄の宿願だった上洛する野望まではなかったが、二年前の三方ヶ原の戦いで織田の援軍と家康の本軍を敗走させた勝利体験からこの決戦で決着を付ける過信と驕りがあったかもしれない。

遠来の織田徳川連合軍が着陣早々に前面に馬柵を構築し始めると、陣形が完成しないうちに急襲する機会はあったろうに、武田軍はあえて攻め懸からなかった。

勝頼が総攻撃前日に家臣の三浦右馬助へ宛てた書状に「長篠の地、取り詰め候のところ、信長、家康後詰として出張に候、指儀なく対陣に及び候、敵手立ての術を失い一段逼迫の躰に候の条、無二に彼の陣へ乗り懸り、信長、家康両敵とも此のたびは本意を達すべくの候」とあり、信長と家康は救援には来たが手立てを失い陣に籠ったまま、一気に攻めかかり信長と家康相手に今度こそ本懐を遂げたいと自信に溢れた内容を書き送っている。

目前の馬柵が武田軍をおびき寄せて大量の鉄砲の一斉射撃で迎撃する作戦とは露知らず、長篠城救援に遠来しながら設楽原に布陣して守備固めする弱気な敵をあざ笑い、武田騎馬隊で織田徳川連合軍を粉砕できると過信して総攻撃を決行、大敗を喫する悲劇に邁進していった。

【絶対に負けられない日（六月二〇日）】

浜名湖マラソンに出立する今日（二〇一四年）は午前七時からブラジルWカップの対ギリシャ戦がある。初戦のコートジボワール戦でエース本田が鮮やかな先制ゴールを決めながら、わずか二分の間に二失点して屈辱的な逆転負けした。今日は絶対に負けられない日である。

自分たちのサッカーが出来なかったと語る選手たちの今日の一戦に賭ける意気込みに期待したい。日本中がテレビの前に釘付けになっている時間帯に、後ろ髪を引かれる思いで家康の居城を巡る旅に向けて出立した。

東海道新幹線に着席するとまもなく妻からメールが入った。不安と期待でメールを開くと「前半が終わり〇対〇、ボール支配率七〇%で良い動き、ギリシャにレッドカードが出て一人少なくなった」という。堅守カウンターのギリシャが一〇人になって守り一辺倒になるとますます攻めが難しくなるな、そんな不安が的中したメールが、雲に隠れた富士山を探している時に入ってきた。

やはり引き分けか。数的優位が逆に焦りになりカウンターを食らうことがある、負けなくてよかった。これで次のコロンビア戦は絶対に勝つしかない。

今日は駿府城と長篠城、明日は岡崎城と浜松城そしてヤマハ吹奏楽団演奏会、明後日に浜名湖マラソン、二三日に尺八師匠の法要に参列する三泊四日の行程である。

【静岡市の駿府城を訪ねて（六月二〇日　①）】

静岡駅に午前九時に到着。駅の観光案内所で静岡市内地図を貰い駿府城に直行した。滞在余裕は一時間半しかなく慌ただしいが、暖かい陽射しが心地よい。

和洋折衷の県庁の裏に抜けると駿府城のお濠と石垣が現れた。さほど大きくはない石が野面積みされた石垣は緑白色の苔に覆われて四〇〇年の時代を感じさせる。

四〇〇m四方の濠に囲まれた駿府城址は、駿府城公園として市民憩いの場となり、カラフルなウエアのランナーたちが早朝の濠端を周回ランしていた。

大手門跡から公園内に入ると緑一色の美しい公園が広がり、キャリーバックのガラガラ音が早朝の静けさを壊して気が引ける。寛永一二年（一六三五年）の城外の火事が引火して天守等の殆どの建物が焼失、三年後に天守閣は再建されず僅かに二棟の櫓と東御門が復元されただけ、壮大な城郭だった面影は全くない。（次頁写真）

家康が七歳から一八歳まで駿府の今川館で人質生活を送り、大大名となった家康は一五八五年に今川館跡に築城を始めて翌年に浜松城から移り、一五八八年に駿府城天守が完成、一五九〇年に秀吉の命で江戸に移封される。

一六〇〇年の関が原の戦いで覇権を掌握、一六〇三年に将軍宣下を受けて江戸に幕府を開くが、一六〇五年に将軍職を秀忠に譲った家康は、秀忠に三河以来の門閥譜

代で武功派の大久保忠隣、酒井忠世らをつけて将軍政治を担当させ、駿府城に隠居した家康は、新参譜代の吏僚派の本多正信らを側近に大御所政治を進めていく。

駿府城に退いた家康の許に、僧の崇伝や天海、学者の林羅山、豪商の茶屋四郎次郎や後藤庄三郎、代官頭の伊奈忠次や大久保長安、外国人のウイリアムアダムスやルイスソテロなど、多彩な側近が集まり徳川幕府草創期の幕藩体制の組織作りに邁進、江戸城の秀忠の側近との間で矛盾と対立が生まれる二元政治だったが、家康の死で大御所政治は幕を閉じ、江戸の将軍政治が確立する。

公園内の案内板を頼りに天守台跡に向かった。皇居の東御苑にある壮大な石垣積みを期待したが、平坦な広場になって沢山のお年寄りがゲートボールを興じていた。その一人に天守台を尋ねると、ここが今川館跡で天守台跡だという。今川時代と大大名時代と大御所時代の家康の足跡が多重遺跡となって足下に眠っているようだ。

江戸に幕府を開いた家康が隠居して駿府に移り住むため、一六〇七年に全国の大名に築城を命じる天下普請による大改修を始め、一六〇九年に家康の十男頼宜が城主となり、翌年に五階七層の壮麗な天守閣が完成する。

一六一六年に家康が駿府城で死去、一六二四年に頼宜が紀伊に転封して将軍秀忠の三男忠長が城主となるが、両親の秀忠、江に寵愛されて兄家光と三代将軍職を争った忠長は、家光に謀反の罪で上州高崎に幽閉自刃させられ、駿府城は城主不在となり、翌一六三五年に駿府城天守と櫓が焼失、その後御殿と櫓は再建されるが、天守が再建されることはなかった。因果応報であろうか。

駿府城　復元巽櫓



天守台跡の広場で興ずるお年寄りたちのゲートボールを眺めながら、父広忠が織田と戦うため今川に援けを求めて我が子家康を人質に出したが、幼少の家康はここでどんな人質生活を送ったのだろうか。人質として忍従の生活だったのだろうか。思いを巡らせてみた。

家康の養育は禅僧で武将の太源雪斎が担った。雪斎は今川義元の家督相続にも尽力した政治軍事両面の最高顧問で、その雪斎を養育係にした義元の家康（竹千代）への注力振りは尋常ではなかった。姪の築山御前を正室に娶らせ、自ら烏帽子親となり元服した竹千代に自分の元の字を与えている。どうも駿府での家康の人質生活は屈辱的なものではなく、むしろ義元に寵愛され優遇された生活だったようである。

義元の意図はなんだったのだろう。駿河の守護大名今川義元は、祖父と父が家臣に殺害された幼い家康を養育して岡崎城に復帰させ、併せて戦国乱世に武勇の誉れ高い三河武士団を取り込み、駿河の西に勢力を伸ばす尾張の織田氏の抑えに利用しようとしたのではないだろうか。かくして家康の天下人たる器量と素養は、義元の思惑によって駿府の人質時代に育まれたのかもしれない。

家康は駿府今川家に人質に送られる途中、今川と敵対する織田に与する家臣に略奪され、二年ほど尾張織田家の人質となって織田信長と幼少期を共に過ごしている。

美濃の斎藤道三の娘濃姫と結婚した型破りで奇人変人の信長と遊びながら、保守的で公家化した今川家にはない、斬新な下剋上の戦国武将の生き様を見た家康は、その後の人生の有り様に大きな影響を受けたに違いない。

駿府公園の中央に左手に鷹を持った家康像が天守台を後ろに立っていた。実に堂々とした体躯である。眼光するどい眼差しはどこへ向けられているのか気になった。江戸か京かと思ったが、太陽の昇る真東方向で、その延長線上に日本平と久能山があった。家康は自分の遺骸を久能山に埋葬することを遺言している。

人質時代の家康（竹千代）は、駿府の今川館から東の久能山の上に昇る太陽をひとり拝みながら、生き別れの母を想い、家臣に殺害された祖父や父を想い、岡崎城への復帰を心に誓っていたに違いない。そして晩年の家康は、久能山の上に昇る太陽を拝みながら、キリストの復活のような死後の蘇りを願ったのかもしれない。

日本平について、日本武尊が東征の際、草薙の原で野火攻めに襲われ、神剣で草を薙いで難を逃れて賊を平定した後、この山頂に登り四方を眺めたことから日本平と呼ばれたと伝承がある。将軍を秀忠に譲り江戸から移った家康は、駿府城の天守から日本平を眺めながら東征を果たした日本武尊と自分を重ね合わせていたのかもしれない。駿府は家康の心の故里だったに違いない。

【愛知県の長篠城を訪ねて（六月二〇日　②）】

駿河城の散策を切り上げ、静岡発一〇時四二分の東海道本線に乗車、浜松乗換で豊橋へ、更に飯田線に乗換え、途中から単線になり美しい緑の山間を走ること一時間、長篠城駅に着いたのは一三時半だった。

城門を模した無人駅舎の案内板で方角を確認、キャリーバックをガラガラさせながら一〇分程で長篠城址に着いた。意外に狭い城域で土塁と空堀が本丸を囲み、東の三輪川と西の寒狭川が南で合流して豊川となる三角形の高さ五〇mの断崖の上に立地する天然の要害である。長篠城攻防戦は北に開けた平地で繰り広げられたのだろう。

長篠城址内に立つ「長篠合戦図屏風」の大きな案内板に「天正三年（一五七五年）五月に武田勝頼軍一万五千が、徳川家康の将奥平貞昌五百の守る長篠城を包囲して攻防約一〇日、織田信長三万と家康八千の援軍が一八日に西方四キロの設楽原に到着して陣を築く。武田軍は二〇日長篠城の囲みを解いて設楽原に進出、二一日の夜明けとともに織田・徳川の陣地に突撃するが、数千挺の銃撃にさらされ歴戦武勇の将士の多くを失い、勝頼は数騎に守られて敗走した」とあった。

隣接の「長篠城址史跡保存館」に入ると、長篠城内の食糧が僅かとなり家康に救援要請に岡崎を往復して武田軍に捕えられた鳥居強右衛門が、援軍来ずと告げるよう説得されたが、籠城兵に援軍は来ると叫んで磔殺された有名な磔死図の指物が掲示されていた。

長篠城の攻防戦で奥平貞昌率いる五百の城兵がよく武田軍の攻撃を凌ぎ落城しなかったが、鳥居強右衛門が磔死した一六日には本丸と二の丸だけ残ると、案内板にあった。もう一度、本丸と二の丸を歩いてみたが、その城域は一〇〇m四方であろうか。そこまで武田軍が迫っていたとすれば、あと一押しで落城は目前である。

なぜ勝頼は織田徳川軍が設楽原に着陣する一八日までに長篠城を落さなかったのだろう。長篠城包囲戦は織田徳川軍をおびき出して一挙に叩くための戦略であり、落城させてしまっては、援軍の名目を無くした信長軍は撤退してしまう。かくして勝頼は長篠城の西側に織田徳川連合軍の攻撃を迎撃する守備陣形を展開した。

しかし信長は勝頼が想定していた以上の大軍を率いて救援にやってきた。信長が河内の石山本願寺と長期戦を続けている状況下で、三万もの大軍を率いてくるとは想定外だったが、信玄公以来の重臣たちとの軍議で、勝頼は反対を押し切って撤退ではなく決戦を選択した。

前掲の三浦右馬助宛て書状のように、勝頼は、長篠城救援の攻撃をせず設楽原に守備陣形を構築する連合軍に武田の勇猛果敢な騎馬軍団を恐れた弱気な戦法と見間違え、まんまとその策にはまって攻勢に転じてしまった。

【設楽原決戦場を訪ねて（六月二〇日　③）】

長篠城から西に三キロの設楽原決戦場に向かった。長篠城駅一五時一四分発の飯田線に乗車、豊橋方面に三駅戻った三河東郷駅に下車した。馬防柵を壁面に組み込んだ無人駅舎の傍らに決戦場案内図が掲示されていた。

織田徳川連合軍三万八千が設楽原の西側を南北に流れる連吾川の西側に着陣し武田の騎馬隊を迎え撃つ馬防柵を二キロに渡り構築、一方の武田軍は長篠城包囲に三千を残し一万二千を連吾川の東岸台地に移動し鶴翼の陣形（右翼：馬場信房、中央：内藤昌豊・後方に武田勝頼本陣、左翼：山県昌景）で対陣、両軍が守備陣形をとった。

五月二〇日夜半に家康の家臣酒井忠次率いる別働隊四千が長篠城の南方の鳶ケ巣山砦を奇襲制圧、勝頼は二一日早朝ついに総攻撃を命じて設楽原で両軍が激突、武田の騎馬軍団が馬防柵を楯に一斉射撃する織田徳川の三千挺の鉄砲隊に殲滅されて武田軍は敗退した。

三河東郷駅から決戦場の真ん中に位置する設楽原歴史資料館に向かった。途中の道端に武田軍武将山県昌景の墓を見かけ、決戦場に足を踏み入れた実感に胸がときめいてきた。日差しが強く車だけが行き交う道を、キャリーバックをガラガラ曳きながらひたすら二〇分ほど、きつい坂を上ると近代的建物である。周りに林立する「設楽原決戦場まつり」の赤い幟が爽風に翻っていた。

資料館に入ると設楽原合戦の主力兵器となった火縄銃が目に飛び込んできた。展示の質量ともに日本一の規模だという。その種類の多さ、透かし彫りの装飾の見事さ、さらに日本最大の大鉄砲に驚かされたが、武田信玄を狙撃したという信玄銃にはロマンが感じられた。

上洛途上の信玄が野田城を攻略中、夜の静けさのなか城内から流れる笛の音に聞き惚れて堀端に出たところを狙撃され、その怪我が元で甲斐国へ戻る途中亡くなったと伝えられる。黒沢明の映画「影武者」の題材になった話だが、信玄と勝頼はよほど火縄銃と悪縁のようだ。

資料館内の目玉は、色彩鮮やかな「長篠合戦図屏風」と両軍を色分けして武将名や地名が詳細に書き込まれた「設楽原布陣図」である。織田徳川鉄砲隊が突撃してくる武田騎馬隊を一斉射撃で殲滅する戦況をビジュアルに描いているが、さほど広くない設楽原で騎馬隊が隊列を組んで突撃する戦法が本当にできたのだろうか、武田勝頼が鉄砲の威力を知らないはずはなく、騎馬隊にそんな無謀な突撃をさせるはずもない、と考えていた私に展示パネルが「そうだよね」とお茶目に微笑みかけてきた。

両軍の対峙する連吾川の上流は山麓が続き、下流は深い谷になり、中流は沼のような水田が開けて、大軍が走り抜ける場所は限られていた。両軍の戦闘は武田方左翼の山県騎馬隊の突撃で始まり、徳川方大久保隊の鉄砲隊

が三段撃ちで応戦、次いで武田軍の右翼馬場隊が馬防柵に突撃、中央隊の内藤隊も猛攻を繰り返し、三重の馬防柵を突破して家康本陣に迫る武田隊もあったが、徳川軍の頑強な抵抗に突破口を完全に開けぬまま、武田軍の将兵は次々に倒されていったという。

やはりこの戦いは、屏風絵に描かれたような鉄砲対騎馬という単純な戦いではなかったようだ。多勢に無勢、勝敗を分けたのは、結局は兵力差だったのではないか。

馬防柵を構築し万全な態勢で待構える三倍の敵に攻めかかる武田武将に過信と驕りがあったことは事実だろう。倍以上の敵と戦うには、攻めさせて隙を見て逆襲する、サッカーでいう堅守カウンターでなければ勝機はない。

勝頼は三万の動員能力を持ちながら、越後の上杉謙信の抑えに一万を割き、信長の本気度を甘く見て織田の援軍規模を過少に予測して一万五千で出陣、後方の鳶ケ巣山の武田陣地が奇襲されて退路が脅かされる劣勢の態勢から、前面に布陣する大軍を前にして、勝てる見込みがなく戦を止めて撤退する勇気ある決断が出来なかった勝頼には、若い新当主としての気負いとプライドがあったのだろう。そして若き勝頼を補佐する重臣たちの無骨さと誤った忠臣振りも敗因の一つだったに違いない。

資料館の屋上に上がると、設楽原は意外に広く感じるが、両軍合わせて五万の大軍が戦える広さではない。

長篠合戦図屏風（複製：長篠城址二の丸広場に掲示）



武田軍が馬防柵を張り巡らせた織田徳川連合軍の陣地に波状攻撃を繰り返したのだろうが、合戦場の幅は五〇〇mばかり、騎馬の速さが時速二〇キロとして秒速五五m、一〇秒足らずで敵陣に到達できる。速射出来ない火縄銃では三段撃ちでも騎馬の突進は防ぎ切れないだろう。

資料館内に戻ると「さっき歩いていた人だね」と男性が声かけてきた。車しか行き交わない田舎道を、ひとりキャリーバックを曳いて歩く私が気になったと言う。長篠合戦の持論を披露してみると、職員ではないがと断りながら現地に来ないと知り得ない話が続出してきた。

設楽原の中央には水田が広がり、とても騎馬隊は入れない、原の南側が地盤の固い桑畑で、武田の騎馬隊は南側の陣地に向かって突撃したのだろう。また三千挺の鉄砲から放たれた弾は万を超すはずだが、設楽原から鉄砲玉がそんなに出土していない。やはり鉄砲隊が突進してくる武田の騎馬隊に一斉射撃するような戦闘は、全戦線であったわけではなく南側の局地戦だったようだ。

後日、帰宅して国会図書館ネットで調べてみると、信長の側近太田牛一が慶長一六年（一六一一年）に著した「信長公記」に「鉄砲千挺ばかり」とあり、元和八年（一六二二年）に儒学者小瀬甫庵が牛一の信長公記を元に著した「信長記」に「兼て定め置かれし諸手のぬき鉄砲三千挺に」そして「間近く引き受け、千挺づつ放ちかけ一段づつ立ち替わり立ち替わり打たすべし」とあり、鉄砲三千挺と三段撃ちは、甫庵の「信長記」にあった。

当時四八才で信長の死後に丹羽長秀、秀吉そして秀頼に仕えて多くの軍記伝を著述した牛一に対して、牛一より三七才若く逸話を加えて読み物として信長記を書いた甫庵のいずれの記述が真実を伝えているのだろうか。

成立が一一年古く真摯な記述内容の牛一の信長公記にある鉄砲千挺の方が真実で、三千挺と三段撃ちは甫庵の創作だったのではないだろうか。やはり設楽原合戦は鉄砲だけではなく兵力の差で決着したようだ。

資料館で案内してくれた彼は、長篠・設楽原鉄砲隊の隊長で来月六日の設楽原決戦場まつりに甲冑姿で火縄銃の演舞をするという。そのあと資料館裏の「信玄塚」まで案内してくれた。信玄塚は高さ三m程の円墳で頂上に菩薩像が立ち、合戦が始まり設楽原から一時避難していた村人たちが戦場の後片付けに戻ってみると、累々と戦死者が横たわり、その遺骸を敵味方の別なく手厚く葬った塚で、大塚が武田軍、小塚が織田徳川軍だという。

その夏に塚のあたりから蜂が大発生して人馬に被害を与えたので、戦死者の亡霊と信じた村人は、松明を灯して供養すると蜂が出なくなったという。以来、毎年お盆の時期に戦死者の霊を弔う火祭り「火おんどり」が信玄原で行われ、四〇〇年続いているという。

鉄砲隊長さんが葦を束ねた松明を抱えて八の字に振る仕草を実演し「ヤーレモッセ　モッセモセ　チャンチャコマーツ　トーボイテ　ヤーレモッセ　ナンマイダー」と歌ってくれた。隊長さんのサービス精神に感謝である。

このあと車で設楽原を横断して西側の連吾川に沿って組まれた馬防柵まで案内してくれた。歴史考証用なのか観光用なのか、高さ三メートルほど、丸太を組んだ柵が構築されて傍らの説明板に「鉄砲構え：乾堀と馬防柵と銃眼付きの身がくし（土塁）の三段構え」とあった。

防御用に組まれる柵は、古代からあって特に目新しいものではないが、後日調べた太田牛一の信長公記は柵のことに触れていない。小瀬甫庵の信長記に「家康、滝川陣取りの前に馬防ぎの為め柵を付けさせられ」とあり、実際に武田軍を迎え撃つ柵は構築されていたのだろうが、馬防柵の名称は、鉄砲三千挺や三段撃ちと同じく、武田の勇猛な騎馬隊を打ち破った信長を礼賛する甫庵が読者を意識して盛った造語なのではないだろうか。

隊長さんに馬防柵を案内してもらったうえ最寄りの三河東郷駅まで乗せていただいた。別れ際に「おせっかいな人」と自称していた隊長さんとの出会いに感謝である。

三河東郷駅一七時三七分発に乗車、一八時半に豊橋駅前のホテルにチェックイン、今朝の対ギリシャ戦のダイジェスト放送を観戦しながら歴史探訪の初日に乾杯した。

【家康生誕の岡崎城を訪ねて（六月二一日　①】

今日の予定は、家康誕生の城で人質から解放されて復帰した岡崎城、そして戦国大名として信玄や秀吉と戦った浜松城、夕刻にヤマハ吹奏楽団の定期演奏会である。

八時過ぎに豊橋駅を出発、途中で蒲郡駅を通過、中学三年に出場した吹奏楽コンクール名古屋大会で三連覇した蒲郡中学校を思い出したが、あの頃フルートを吹いていなければ、尺八を吹くこともこうして京都まで師匠の法要に行くこともなかったなと不思議な因縁を感じた。

岡崎駅で愛知環状鉄道に乗換えて中岡崎駅に下車、キャリーバックをコインロッカーに預け、身軽な出で立ちで岡崎城に向かった。途中、方角を誤り乙川の河川敷に出てしまったが、前方の森から頭を出す天守閣を目標にようやく岡崎公園に辿り着いた。

家康の幼名が付いた竹千代橋を渡ると右手に巨大な藤棚があり「五万石ふじ」と呼ばれ、枝の長さ一一m、花房一mの藤が一七本植えられ、藤棚全体で一三〇〇平方メートル、五月上旬には見事な紫の花が咲くという。

龍城堀の神橋を渡ると、目の前に三重三層の天守が現れた。白壁に黒板塀の復元天守である。周りに「家康公四〇〇年祭」の幟が立ち並び、傍らに東照公遺訓「人の一生は　重荷を負うて　遠き道を行くが如し　急ぐべからず　不自由を常と思えば不足なし」と、家康公遺言

「天下は一人の天下に非ず　天下は天下の天下なり　たとへ他人天下の政勢をとりたりとも　四海安穏にして万人その仁恵を蒙らばもとより　家康の本意にしていささかも　うらみに思ふことなし」の碑が建っていた。

遺訓は、まさに家康の生き様そのものだが、遺言の方は、将軍の政道が理に適わず民が苦労しているようなら政権は他に移るべきだと言いながら、将軍職を息子秀忠に世襲して秀吉の遺児秀頼に返さず私物化したではないか、私には家康の自己矛盾のように見えてくる。

岡崎城は、一五世紀中頃に三河国守護仁木氏の守護代西郷頼嗣が矢作川と乙川の合流点にある龍頭山に砦を構築、一五二四年に家康の祖父松平清康が攻略して砦を城塞化して松平（徳川）氏の本拠、岡崎城とした。

一五四二年に家康がここ岡崎城で誕生、六歳で織田氏、八歳で今川氏の人質となり少年期を他国で過したが、一五六〇年の桶狭間の戦いで今川義元が討ち死して今川の人質から解放された家康は岡崎城主となり、やがて三河・遠江を領した家康は武田氏の侵攻に備えて一五七〇年に浜松城に移り岡崎城を長男信康に託した。

一五七九年に信康と築山殿が武田勝頼との内通の疑いで信長の命で殺害された後、家康の重臣の石川数正、本多重次が城代となり、家康が関東に移封されると秀吉の家臣田中吉政が城主となり城郭と城下町を整備した。

岡崎城　天守閣



江戸時代に入ると岡崎城は「神君出生の城」として神聖視され、石高は五万石だが、本多氏、水野氏など家格の高い譜代大名が城主となる。一六〇四年の大地震で岡崎城が倒壊、当時の城主本多康紀が再建に着手、一六一

七年に三層の天守閣が建てられた。明治六年に廃城となったが、昭和三四年に現在の天守が復興され、岡崎公園には東照公産湯の井戸や東照公えな（胎盤）塚など家康生誕ゆかりの施設が残っている。

岡崎城天守内に展示される刀剣や甲冑、岡崎藩の藩政や城下町の文化産業、歴代藩主の紹介、そして最上層の五階展望台から岡崎市内を一望してから「三河武士のやかた家康館」に向かった。家康を支えた三河武士なるもの正体がどうしても知りたかった。

家康館内の展示パネルで、三河が藤原氏・源氏と深い関係にあったことを知った。一一世紀後半に三河国の額田・加茂郡の開発領主である藤原季兼（藤原南家系）と熱田神宮大宮司・尾張員職の娘との間の藤原季範の娘（由良御前）と源氏の頭領義朝との間に生まれたのが鎌倉幕府を開いた源頼朝だが、母方の熱田大宮司（三種の神器の草薙剣を祀り、伊勢神宮に次ぐ権威持っていた）が大きな影響力を持つ三河地方の武士団は、保元・平治の乱および平家追討の治承寿永の乱に源氏とともに戦い、後に頼朝の弟範頼が三河国守になり、承久の乱後に三河守護を源氏系の足利氏が五代続き、その一族や家臣が三河の地に根付き、後に家康を支える三河武士となる。

一四世紀末に清和源氏の新田氏の支流である得川義季の後裔が三河国加茂郡松平郷（巴川東岸の山地の小集落）に入り親氏を名乗り松平氏初代となる。三代信光の時に西三河を支配し、長寿で子福者、子を各地に分家、嫁入りさせ、松平氏発展の基礎を築き上げ、三河を制した家康の祖父清康は岡崎松平氏の七代である。

二河に土着した源氏の末裔が松平氏となり、鎌倉時代に源氏と足利氏を支えた三河武士団と強い主従の絆で結ばれ、戦国時代の強大国の狭間で翻弄されながら育まれた、命を惜しまず、忠義に厚く、屈強な戦闘力を有する三河武士団は、精神的な柱たる城主不在となった岡崎城に救世主のように復帰した若きエース家康を迎える三河武士団の歓喜はいかばかりだったろう。彼らの天に轟く雄叫びを思い描きながら、岡崎城を後にした。

次の探訪先は、岡崎城主に復帰して三河から遠江に領土を広げた家康が、甲斐の武田信玄の侵攻に対抗すべく築いた浜松城である。

【戦国大名家康の浜松城を訪ねて（六月二一日②）】

浜松のキャッチフレーズは「出世の街・浜松」だという。浜松城は神君家康ゆかりの城とされ、浜松城城主から幕府の主要ポストにつく者が続出、浜松城は幕閣の登竜門とみなされた。浜松藩政三〇〇年の間に、再任を含めて二五代の城主の内、老中に五人、大阪城代に二人、京都所司代に二人、寺社奉行に四人が登用され「はま松は出世城なり初松魚」（松島十湖）の句が歌われた。

特に天保の改革を推進した水野忠邦は、もともと肥前唐津城主で長崎の警護という特殊任務にありそれ以上の出世の芽はなかったが、実封二五万石の唐津から実封一五万石の浜松への転封を働きかけて実現、大阪城代、京都所司代、そして念願の老中首座となったという。私も浜松支店に転勤を希望すればよかったかもしれない。

浜松駅から二〇分ほど、市役所の裏道を登ると自然石を野面積みした石垣が現れ、天守門を潜ると頭上に三層の復興天守が現れた。天守閣に比べてアンバランスなほど大きな天守台の石垣の北寄りに建つ天守閣は、一層が黒の板塀、その上に白壁の望楼が乗ったように見える。

浜松城は、一五七〇年に家康が一五世紀頃に築城された引間城を改修して名を浜松城に改めた城で、岡崎城から移った家康は、まだ二九才の若さであった。

以来、四五才までの一七年間を浜松城で過ごすが、信玄に大敗を喫した三方ケ原の戦い、勝頼を打ち破った長篠の戦い、秀吉と戦った小牧長久手の戦いなど、幾多の激戦をここ浜松城に拠って危機を切り抜けていった。

三方ヶ原の戦いがあった一五七二年の前夜は、群雄割拠する戦国大名が合従連衡を繰り返す時代であった。

一五六九年に越後の上杉謙信と相模の北条氏康が駿河に侵攻する甲斐の武田信玄を牽制するため越相同盟を結び、氏康の死で嫡男氏政は一五七一年に謙信と決別して信玄と甲相同盟を回復、一五七二年に上洛する信玄を迎え撃つ尾張の信長は謙信と同盟する。日本のど真ん中は、北条と武田、上杉と織田、そして織田と徳川が、互いの敵国を牽制し合う同盟を結んで相克していた。

浜松城　天守閣



一五七二年一〇月、織田信長と対立する将軍足利義昭の信長討伐令の呼びかけに応じる形で、信玄は近江の浅井長政と越前の朝倉義景と連携して信長包囲網を形成、背後の上杉謙信を牽制するため越中と加賀の一向一揆を煽動して西上作戦を決行、甲府を進発し諏訪から伊那を経て遠江と三河に侵攻、岩村城と二俣城を陥落させて南下、家康の浜松城に迫り三方ヶ原の戦いが始まった。

現在の浜松城は家康の関東移封後に入城した秀吉の武将堀尾吉春が築いたものだが、当時の浜松城（引間城跡を拡張）は東に三五〇mの東照宮の所にあったという。信玄の最強軍団とはいえ、家康が籠城する堅固な浜松城を攻略するのは容易ではない。城外に家康軍を誘い出して叩く作戦を採ったのも当然だろう。しかし信玄はなぜか家康を徹底的に壊滅させるまでは戦わなかった。

天守閣の中に入ると、沢山の甲冑や刀剣類が展示されており、家康生涯最大の敗戦と言われる「三方ケ原の合戦」のコーナーでガイドさんが説明されていた。

一五七二年一〇月に武田信玄は三万の大軍を率いて家康の遠江に侵攻を開始、前哨戦の一言坂の戦いで家康軍が敗走、二俣城の戦いも二か月の籠城戦で降伏、浜松城に迫る武田軍二万五千に家康は籠城戦に備えるが、浜松城を素通りして三方ケ原台地を通過しようとする武田軍を、家康は信長の派遣した援将の反対を押し切り、浜松城を出て追撃すると、武田軍は魚鱗の陣を敷いて待ち構えて、信長の援軍三千と家康八千の連合軍は、甚大な被害を受けて敗走、家康は辛うじて浜松城に逃げ帰った。

ガイドさんの話が終わるのを待って「武田信玄は三方ケ原から敗走する徳川軍を追撃しながらなぜ浜松城を本格的に攻撃しなかったのでしょうか」と質問してみた。

ガイドさんは、追撃してきた武田軍が、城門を開けて篝火を炊く家康の策を警戒して引き揚げ、そのお陰で浜松城は落城を免れたと真顔で話してくれたが、三国志の諸葛孔明のような話は俄かには信じられない。

敗走してくる自軍の兵を収容するため城門を開けていただけで、武田軍も追撃はしてきたが、浜松城に突入できる体制を組んで追撃してきたわけではなく、深追いを断念しただけなのだろう。信玄には家康に大きなダメージを与えるだけで十分で、浜松城まで陥落させるつもりは当初からなかったのかもしれない。

信玄にもし浜松城を攻略する意図があったなら、わざわざ城下を素通りして家康を城外におびき出すような姑息なことはせず、正々堂々と大軍で家康が籠城する浜松城を包囲して力攻めしたに違いない。

信玄の西上作戦の本意は何だったのだろうか。将軍足利義昭の信長包囲網に呼応した上洛ではなく、家康の領する遠江三河を平定する局地戦だったとする説が有力だ

が、浜松城に籠る家康を攻略せず、甲相同盟を結ぶ相模の北条氏政に家康の東側を牽制させて西進、三河に侵攻し野田城を降伏させ信長の東美濃に侵攻している。信玄の夢は信長を倒して上洛することだったのだろう。

もう少し質問したかったが時計は一四時半を回っていた。このあとヤマハ吹奏楽団の演奏会があるのでと後ろ髪を引かれる思いで失礼して演奏会場に向けて走った。

走りながら様々な想像が駆け巡った。もしあの時に信玄が力攻めで浜松城を陥落させていたら、信玄はその勢いで上洛を果たし信玄の時代になっていたかもしれないし、少なくとも家康の江戸時代はなかったろう。

信玄が家康の籠城する浜松城を包囲していたら同盟する信長はどうしただろうか。信長は長女徳姫と家康の嫡男信康を婚約させて家康と清州同盟を結び、二年前の金ヶ崎の戦いと姉川の戦いで、越前の朝倉義景と近江の浅井長政の攻勢に窮地に追い込まれた信長は二度も家康の援軍に助けられている。信玄に包囲されて浜松城に籠城する家康からの援軍要請があれば、近江の地で浅井、朝倉との戦いがまだ続いているとはいえ、信長が相応の援軍を差し向けてくることは十分に有り得るし、遠征してきた信玄と信長の直接対決があったかもしれない。

野田城を落とした直後に信玄は病状を悪化させ、甲府への撤退を命じ、帰国途上の信濃国駒田で死去した。

もう一つの疑問があった。家康が籠城している浜松城を攻撃せず通り過ぎて行った信玄の大軍を、圧倒的に不利な兵力を承知で家康は本当に城を出て追撃したのだろうかという史実への疑問である。

上洛を目指す信玄は、西上作戦の緒戦で信長の叔母が女城主となり信長の五男御坊丸（信房）を養子に立て籠もる山城の岩村城を攻略、更に信濃の山間部から遠州平野の入口に位置し交通の要衝にあって浜松城まで一八キロの二俣城を落城させ、破竹の勢いで南下して通り過ぎる信玄の大軍を、見過ごして戦わずに済む戦闘をあえて半分以下の兵力で命運を賭けた決戦に挑むだろうか。

籠城して時間を稼ぎ岐阜から来援する信長の大軍と正面対決する信玄を後方から挟撃するなら納得だが、鳴くまで待とうという慎重な家康の行動とはとても思えない。

旅行から帰宅して三方ヶ原の戦いについて改めて調べる内、追撃戦ではなく偶発戦だったとする記述を知った。

旗本大久保忠教の著書「三河物語」に、兵力差があり信玄は戦上手だと反対する年寄共に「多勢にて我屋敷之背戸を踏み切りて通らんとするのに、内に有ながら、出て咎めざる者哉あらん。負くればとて出て咎むべし。合戦をせずしてはおくまじき。陣は多勢無勢にはよるべからず、天道次第」とあり、敵が自分の屋敷の裏口を踏み破って通っていくのに中にいて咎めない者がいようか。

たとえ負けようが出撃して咎めなければなるまいと言って追撃したと記され、これが通説とされている。

三河物語と同じ寛永年間に松平忠明の編纂した「当代記」には「信玄都田打越味方か原に打上、濱松衆為物見、十騎廿騎つゝ懸来取合之間、是を可引取由曰、家康公出馬之處、不慮に及合戦、濱松衆敗北、千余討死」とあり、家康は三方ヶ原に進軍した信玄の様子を物見に向かわせて武田軍と小競り合いとなり、引き揚げさせようと家康が出馬して偶発的に合戦に至ってしまったもので、家康は信玄と合戦するつもりはなかったと記している。

三河物語と当代記とで、家康の三方ヶ原への出撃の理由が全く違っている。いずれが真実なのだろうか。

三河物語の著者大久保忠教は天下のご意見番として将軍家光に諫言する逸話で有名な大久保彦左衛門である。太平の世に不満を持つ武功派の立場から、戦国の世を懐古して、籠城という消極策ではなく勝敗を度外視して信玄を追撃する家康の武勇を誇示しているように見える。

当代記の著者松平忠明は、長篠城主となった奥平信昌（貞昌）の四男で母が亀姫、家康の孫になる。大坂冬の陣の休戦後に外堀と内堀を埋め立てた功で摂津大坂藩一〇万石の藩主となり、運河開削に私財を投じながら大坂の陣で戦死した安井道頓の死を追悼して完成した運河に道頓堀と命名させたという逸話を持つ為政者である。

三河物語に著者忠教の甥の大久保忠隣が家康に逃走用の馬を与えられたとか、家康が敗退して浜松城に逃げ帰った後に味方を鼓舞するため兄の大久保忠世らが武田軍の野営する犀ケ崖を闇夜の中を銃撃して混乱に陥れ、信玄に「さてさて、勝ちてもおそろしき敵かな」と賞賛されたとか逸話が多いが、当代記にはこれらの話はない。

家康の武勇伝を盛って同族の活躍を脚色する忠教の三河物語より誠実な忠明の当代記を私は信じたい。三方ヶ原の戦いは双方の偶発的な戦闘だったに違いない。

【ヤマハ吹奏楽団定期演奏会（六月二一日　③】

浜松駅前の会場アクトシティ大ホールは、二三〇〇余席が満席、私の席は最前列、しかも目の前がフルートである。指の動きや音色がもろにわかる。久方振りの吹奏楽の生演奏に学生時代の思い出が蘇ってきた。

当楽団は、昭和三六年創立の歴史を持つヤマハグループの従業員が楽器をつくりながら演奏活動を行う「匠のバンド」で、今日の客演指揮はベルリンフィル演奏会で急病のカラヤンの代役としてジーンズ姿のまま「第九」を指揮した逸話を持つ山下一史氏、役所広司似で髪を振り乱すダイナミックな指揮が、パワフルな吹奏楽の魅力を最大限に表現して広い会場を圧倒していた。

第一部はバッハの「幻想曲ト長調」が重厚な低音の和音で始まり、時に厳かに柔らかにそして感動的クライマックスへ、次のリヒャルト・シュトラウスの楽劇「サメロ」では、サロメがヘロデ王の命で身にまとった七つのヴェールを次々に脱ぎ捨てながら踊り出す官能的で狂気に満ちた演奏が会場を揺るがし、三曲目のリヒャルトの交響詩「愉快ないたずら」は、題名通り愉快な悪戯者テイルとエピソードを各楽器がめまぐるしく縦横に離合集散して楽しませてくれる演奏で締め括られた。

休憩時に隣の男性が東京から日帰りで毎年この定演に来ていると話しかけてきた。第二部のフィナーレ曲「メトセラⅡ」は、学生時代に演奏した思い出の曲だと語る姿に、ブラバンキチガイだった自分を重ね合わせた。

メトセラとは、旧約聖書に登場する九六九才まで生きたユダヤの族長名で、相対性理論の双子のパラドックスの説明に登場したことから相反する二つの要素の異質性から生まれる音楽という構想で田中賢が一九八八年に作曲したが、吹奏楽コンクール用に縮小改訂されたメトセラⅡが始まると、さっきまで微動だもしなかった彼がそわそわし始めた。彼の胸の鼓動が私に伝染してきた。

無調で現代を表す前半部と打楽器のみの中間部と調性で過去を表す後半部で構成された曲で、管楽器と打楽器が織りなす理知と感情、西洋と日本といった対比を表現する演奏に会場はルツボと化していた。久方ぶりのブラスの響きに感動と懐かしさで涙が止まらなかった。

【浜名湖マラソン大会（六月二二日（日）】

朝のテレビで南九州の豪雨が報道されていたが、窓の外は小雨模様である。予想していたことであり、この二日間は好天に恵まれて家康の居城巡りが出来たのだからこれ以上の贅沢は言えない。浜名湖マラソンのあと京都府久美浜で法要があるので、チェックアウトを三時間延長、ホテルに戻ってから着替えることにした。

七時半に駅前ホテルを出立、東海道線下りに乗車、左右の車窓に雨に煙る浜名湖が海のように広がり、まもなく新居町駅に着いた。ランナー仲間が会場の浜名湖競艇場に向けて列をなしていた。屋根付き通路を五分ほどで右手に迎賓館のような建物が現れて大会会場である。

吹き抜けの天窓がある広いホールに入ると、受付するランナーたちで溢れ、案内放送が心地よく響いていた。今日はゴージャスな気分で走れそうである。

開会式場のサンホールの座席に手荷物を置いてウエアに着替えたが、今日は東日本大震災被災地を走る一〇〇〇キロ縦断リレーのTシャツである。今年は最終日のリレーに抽選申込みしたが、被災地支援イベントには宮城県出身者としてできるだけ参加していきたい。

総ガラス張りの巨大なスタンド下を、競艇レース場沿いに走ってみたが、大勢のランナーと一緒にジョキングするのは楽しいものである。皆がそれぞれの思いを抱い

て走っていた。長さ五〇〇m幅一七〇mの巨大プールのような競艇レース場の向こう側に着順表示の電光掲示板が見えたが、競艇の開催時にはさぞ大観衆で騒然となるのだろう。ふっと学生時代に福島競馬場で四年間アルバイトした時のファンファーレが思い出されてきた。

スタートは中央スタンド前の道路からだったが、雨もほとんど上がってマラソンには丁度いいお湿りである。一〇キロレースの参加者二六〇〇人がカラフルなウエアで宮殿の前に並んでいた。一〇時一〇分にピストルの音でスタート、さすがに長い行列になった。

新居町駅までいったん戻り、左折して左に競艇場の建物を、右手に東海道新幹線を見ながら、爽快な走りができていた。最初の一キロが五分二八秒、スタート直後の渋滞を考慮すれば少し速すぎるかもしれない。

最初の折り返しで再び競技場まで戻ってきたが、さすがに蒸し暑くなっていた。雨は止んだが風もなく湿度が高く厳しい走りになりそうだ。それでもキロ五分三〇秒ちょっとで安定した走りができている。三キロ地点から左手に浜名湖が灰色に広がってきた。海のようだが静かな水面が美しい。晴天なら紺碧の湖になっていたろう。

海風はないが少し涼しくなり走るには助かる。競艇場裏の湖畔を回り、再び新幹線沿いのコースに入り、やがて浜名湖を横断する長大な競艇新大橋である。

長い上り坂だがあまり苦にならない。第二折り返し点の手前で五キロを二八分。キロ五分三五秒前後のラップで安定して走れている。いよいよ後半だ。湿度が高く、発汗が激しくなってきた。一〇キロレースではいつも給水しないが、今日は無理しないようにしよう。競技場の裏側の八キロ地点で給水を取ったが、周囲の顔ぶれは固まってきた。この仲間たちと楽しく走ろう。

あと二キロとなったところから、九キロまでの長いこと、自宅近くのいつものコースを思い浮かべながら、なんとか後半も二八分台で走り切ろう。九キロ地点で五一分。白髪のオジサンが並んできた。負けられない。競争意識がメラメラ燃えてきた。

新居町駅から競技場前のゴールに向けた直線コースをまさに徒競走である。ラスト一キロを五分三三秒でついにゴール。水道ホースの水を頭からかけながら白髪さんと互いの健闘を讃えあった。完走証は二六〇〇人中一三七〇位、この蒸し暑い中よく頑張ったと褒めておこう。

参加賞は浜名湖名産「しらす子」だったが、なま物では持ち帰ることができず、隣で休憩していたランナーさんに上げた。ランナーウエアの上にウインドブレーカーを羽織って新居町駅に急いだ。東海道本線で浜松駅に戻り昨夜泊まったホテルで風呂に入って小休憩、東海道新幹線で尺八師匠の法要参列のため京都へ向かった。

明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その十六）

山本勉

渋江保のもう一人の妻　渋江紋を輩出した歴史的背景とその意義（後編）

一　はじめに

本稿のテーマを明らかにする前段階として、前編においては渋江紋について八つの論点を掲げ仮説を立てて論証を行った。では、紋に代表される多くの女学生がその時代になぜ輩出されたのか。その背景を探り意義を考える前提条件として明治期の代表的なミッション系女学校の教育課程を取り上げ、なぜこうした教育課程がミッションスクールにおいて可能であったのかを最初に述べてみたい。そこには海外から派遣された教師、多くはアメリカから渡ってきた女性教師の存在があるが、彼女たち教師を育んだ当時のアメリカはどのような情況下に置かれていたのか。ミッションスクールの女学生たちは、どうして民権思想を身につけることが出来たのか。なぜそれが可能だったのか。ミッション系女学校の女学生の民権思想と当時の日本の自由民権思想家の思想水準との比較をとおして、日本の女学生の自由民権意識の高さを明らかにし、渋江紋を輩出した歴史的背景とその意義について述べてみたい。

二　ミッション系女学校の教育

東京女子師範学校は一八七四年（明治七年）、日本初の官立女子高等教育機関として発足したが、当時、修業年限は五年で地理や歴史、修身、作文、数学等を女学生に教えたが、以下に紹介する同時期に設立された代表的なミッション系女学校の教育課程はどうであったのか。齋藤元子『メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献』によれば、「マウントホリヨーク・

セミナリーは、多くの教師を育成しており、開校後四十年間は、卒業生の七十パーセントが初中等教育機関の教師となっていた。」(1)とある。マウントホリヨーク・セミナリーでは多くの教員が養成されたが、こうした教育を受けた教師たちが日本のミッション系女学校に派遣され教育を行った。斉藤が触れているマウントホリヨーク・セミナリーについて、秋枝蕭子はその教育課程を取り上げて『キリスト教女子教育のしおり―明治時代プロテスタント系女学校について―』六十二頁において以下のように述べている。「これと活水の教育課程と比較してみると、後者の学科課程（活水女学校：筆者）は、若干の違いはあるにせよ、一八五〇年代頃のMount Holyoke Female Seminaryのものに、実によく似ており、ただそれに和漢文及び裁縫、女紅等の日本独特の学科目が加わった程度のものということがわかるであろう。」(2)つまり、アメリカにおいて多くの教師を輩出したマウントホリヨーク・セミナリーと同等水準の教育が明治期のミッションスクール女学校において行われており、当時の東京女子師範学校の教育水準を遙かに超えた教育が課されていたことが明らかである。具体的には、『活水学院百年史』、「表6サイモンズ女史による明治二十二年（一八八九）教科課程」よれば、教科科目として、英文典、英文典分析、英国史、羅馬国史、支那歴史、支那近世史等、英文法書や英国史、米国史等各国の歴史を教育課程に組み込んでいる。(3)当時のミッション系女学校においては英国史や米国史を含めた世界の幅広い知識を女学生に修得することを目指していて、日本の自由民権思想家が知り得なかった世界情勢について彼女たちは学んでいた。授業をとおして女学生たちは自然と自由や平等、民権について理解を深めていったものと思われる。『フェリス女学院百年史』、「制度の確立　ブース夫妻の就任」によれば、予科本科高等科について次のようにある。「予科は二カ年、本科は四カ年、高等科は二カ年の修業年限とした。自然科学、英国史、道徳哲学、自然哲学等で、教科はすべて外国書であった。」(4)当時の日本においては医学や経済、自然科学等あらゆる知識や技術が欧米から大量に流入し、その知識を受容し吸収して近代化を目指した。このため、学校においてもこうした知識を女学生に吸収させるために外国語で書かれた教科書を使用していた。ここでは活水女学校（活水学院）、ヘボン塾（フェリス女学院）の二つの代表的なミッション系女学校を取り上げたが、当時の女学校の教育内容はどこも同様の教育が女学生に対して行われており、教科書も外国書であったことを考えると当時のミッション系の女学校の教育水準の高さにはいちいち驚嘆させられる。この質の高いミッション系女学校の教育に携わったのが、アメリカから派遣された高等教育を受けた女性教師であった。

三　来日したミッション系女学校の教師

（一）来日教師を育んだアメリカの時代背景

南北戦争に先立つこと、一八四八年に当時のニューヨーク州セネカ・フォールズで開催された会議がアメリカにおける女性参政権運動の出発点とされているが、ミッションスクールの教師が来日した当時のアメリカは、奴隷制度をひとつの争点として起こった南北戦争（一八六一～一八六五）を契機として、女性が看護士や医師、兵士等として従軍するなど、女性の社会参加が広がっていった時代とも言える。また、一八六九年には、全国女性参政権協会とアメリカ女性参政権協会が結成され、翌年、一八七〇年には全米女性参政権協会として統合された。前年にはワイオミング準州で初の女性参政権が付与され、ワイオミング準州に続いて、一八七〇年にユタ州、一八九三年にコロラド州、一八九六年にアイダホ州、一九一〇年にワシントン州、一九一一年にカリフォルニア州と女性参政権は拡大して行った。全米における女性の参政権は一九二〇年合衆国修正憲法十九条成立まで待たなければならなかったが、女性解放運動が高まりを見せていた時期に高等教育を受け、教師としてアメリカ各地の学校に勤務していた来日教師たちは、女性解放運動を誰よりも理解し、女性の解放と自由・平等のための女性参政権運動を肌で感じ取っていた。

（二）ミッション系女学校における来日教師の教育

今日、我が国のミッション系大学の創立の歴史をたどると、フェリス女学院はメアリー・E. キダー（一八三四～一九一〇）により、活水学院はエリザベス・ラッセル（一八三六～一九二八）より創設されたように、その多くが明治初期に来日した宣教師の手によって創設されていることがわかる。宣教師たちが来日する前にアメリカで起こった南北戦争により奴隷制が廃止され黒人投票権が認められた。女性参政権は一部の州を除いて、まだ認められていなかったが、一八六九年に否決はされたものの女性参政権を認める憲法改正案が提出される等、女性解放運動の気運は醸成された。こうした時代に教育を受けた教師たちは当然のことながら日本において女性の地位向上を目指す教育を進めた。ここで周知しておきたいのは、フェリス女学院を創設したメアリー・E. キダーも活水学院を創設したエリザベス・ラッセルも、母国アメリカでは教師であり、高等教育を受けていたことだ。『活水学院百年史』、「第二章充実時代　第六節活水行事」に「ヤング女史祝辞の一部（『交友会誌』第一号）として次のようにある。やや長くなるが紹介する。「諺に「揺籃を動かす手は世界を動かす手なり」と申しますが、其意味は言わずとも明で、子供の養育に於ける母の人格と感化とが世界の指導者たるべき偉人女傑を作り出すと申すのでせう。そこで母たる人に対する色々な要求

が、母の人格が円満で、知識が豊富で、機知縦横でなければならないと言ふことに帰着するのです。此為めには広い深い学問教養がどうしても必要になって来るのであります。然し、日本の或教育家が申しました様に、日本の女性は先づ第一に、己れの才能を研くと同時に女性として自己の価値を発揮する為めに高等教育を必要とするのであると考へられるのである。かかる教育が教師として其人に与ふる利益は莫大なものであります。尚又今日の社会には、或は社会問題として、或は国家問題として、強固にして、貞潔純良、さうして聡明なる婦人の手に依りて解決を待望して居る問題が多々あるのであります。だから、此方面から申しても今日女子の高等教育は喫緊の急務と言はねばなりませぬ。」(5) ここに書かれたものは一九一六年（大正五年）三月に発行された『交友会誌』に掲載されたものであるので、明治期から大正期に時代は移っているが、ヤング校長は教育者として日本の女学生にも世界の指導者として活躍してほしいという強いメッセージが込められている。そして、女性も社会問題や国家問題を女性の手によって解決しなければならない問題であると述べている。これはヤング校長に限ったことではなく、明治期に来日した多くの教職の経験のある宣教師の崇高な教育理念を代弁するものであったに違いない。この教育理念に基づいて、英語教育はむろんのこと、米国史や英国史など世界の幅広い知識を授けようとした当時のミッションスクールの教育の高さには目を見張るものがある。紋が、知識才学であり、英語に通じ時事を断じることができたのは、こうしたミッションスクールで学んだからに他ならない。

（三） ミッション系女学校の学校生活と来日教師

①洋装束髪の容姿

渋江紋が「泰西の夫人を見るが如し」と静岡大務新聞にその容姿について書かれたが、ミッションスクールのほとんどの学校が来日女性教師によって設立されたことに鑑みれば、彼女たちの教育や日常の生活から影響を受けたのは当然である。『東洋英和女学院七十年誌』、「二創立の頃　一八八四年、明治十七年―一八九三年、明治二十六年」に次のようにある。「生徒の年齢もかなりまちまちで、髪も普通唐人髷銀杏返しであったが、中に大丸髷の奥さんや島田の娘さんも交っていた。服装は洋装も和装もあり寄宿生には赤の友禅の帯を胸高にしめたものもいた。また先生も日本髪で教壇に立ち、数学や理科などを教えていたが、やがて欧風の束髪というものが流行出すと、全校を挙げて束髪に変わったということである。」(6) 束髪は一八八五年（明治十八年）に流行し鹿鳴館時代を代表する髪型であった。ここにあるように髪型一つをとってみても、ミッションスクールの女学生は、欧米文化の影響を受けて流行の最先端を行っていたもの

交詢社憲法法案・東洋大日本国国憲按・アメリカ合衆国憲法の比較一覧表（別表1）

No.	対比項目	交詢社憲法法案 小幡篤次郎・天野文雄・馬場辰猪ら 慶応義塾関係者起草	東洋大日本国国憲按　植木枝盛起草	アメリカ合衆国憲法、権利の章典
1	主権	天皇主権	国民主権	国民主権
2	信教の自由	第六十九條　日本國民ハ國安ヲ妨害スルニ非サレハ各自所信ノ教法ヲ奉スルノ自由ヲ有ス	第五十條日本人民ハ如何ナル宗教ヲ信スルモ自由ナリ	
3	言論出版の自由	第七十條　日本國民ハ國安ヲ妨害シ若シクハ人ヲ誣謗スルニ非サレハ其意見ヲ演説シ及ヒ出版公布スルノ自由ヲ有ス	○第五十一條日本人民ハ言語ヲ述フルノ自由權ヲ有ス ○第五十二條日本人民ハ議論ヲ演フルノ自由權ヲ有ス、第五十三條日本人民ハ言語ヲ筆記シ版行シテ之ヲ世ニ公ケニスルノ權ヲ有ス	修正第1条［信教・言論・出版・集会の自由、請願権］（一七九一年成立）連邦議会は、国教を定めまたは自由な宗教活動を禁止する法律、言論または出版の自由を制限する法律、ならびに国民が平穏に集会する権利および苦痛の救済を求めて政府に請願する権利を制限する法律は、これを制定してはならない
4	集会・結社の自由	○第七十一條　日本國民ハ國安ヲ妨害シ若シクハ人ヲ誣謗スルニ非サレハ其意見ヲ演説シ及ヒ出版公布スルノ自由ヲ有ス ○第七十一條　日本國民ハ兵器ヲ携スシテ靜穩ニ集會シ又其疾苦ヲ政府ニ訴フルノ權ヲ有ス	第五十四條日本人民ハ自由ニ集會スルノ權ヲ有ス、第五十五條日本人民ハ自由ニ結社スルノ權ヲ有ス	
5	基本的人権の保障	基本的人権の保障（第六章民権）	基本的人権の保障 ○第七十條政府國憲ニ違背スルトキハ日本人民ハ之ニ従ハザルコトヲ得 ○第七十一條　政府官吏壓制ヲ爲ストキハ日本人民ハヨリ排斥スルヲ得、政府威力ヲ以テ擅恣暴逆ヲ逞フスルトキハ日本人民ハ兵器ヲ以テ之ニ抗スルコトヲ得 ○第七十二條政府恣ニ國憲ニ背キ擅ニ人民ノ自由權利ヲ殘害シ建國ノ旨趣ヲ妨クルトキハ日本國民ハヨリ覆滅シテ新政府ヲ建設スルコトヲ得	基本的人権の保障（権利の章典）
6	女性参政権	女性の選挙権は認められていない	下記の条文より、納税者は男女の別なく選挙権を与えられた。 第六編立法權ニ関スル諸則、第四章議員撰擧及被撰擧ノ法、第百四十三條現ニ租税ヲ納メサル者現ニ法律ノ罪ニ服シ居ル者政府ノ官吏ハ議員ヲ撰擧スルコトヲ得	アメリカ合衆国憲法（一七八七年成立）においては、女性参政権は認められなかったが、ワイオミング準州において、一八六九年に女性参政権が認められ、その後、他州に女性参政権が拡大した。
7	選挙権	21歳以上で一定額以上の資産を有する男子（第四章国会院）	第六編立法權ニ関スル諸則、第四章議員撰擧及被撰擧ノ法、第百四十三條現ニ租税ヲ納メサル者現ニ法律ノ罪ニ服シ居ル者政府ノ官吏ハ議員ヲ撰擧スルコトヲ得ス	修正第15条［選挙権の拡大］（一八七〇年成立）合衆国またはいかなる州も、人種、肌の色、または前に隷属状態にあったことを理由として、合衆国市民の投票権を奪い、または制限してはならない。

と思われる。

②洋飲洋食の食生活

静岡大務新聞に山田一郎は、紋の食生活を「洋飲洋食」であったと書いているが、野村美智子は「月一回、七八人づつ洋式のテーブルで洋式食事をいただき、又時には宣教師達のテーブルに、一人二人づつ呼ばれて、テーブルマナーを教えて頂きました。」(7)と回想録で語っている。明治期前期にこうした洋式の西洋料理を食することが出来たのは、所謂、当時の政財界の特権階級に限られ、政治的な意図も含まれていたことを考えると、静岡大務新聞の記者、山田一郎が見た紋が欧米の食生活が出来たのは、ミッションスクールの教育の賜であったと言えよう。

③民主的思想の校風

静岡大務新聞紙上において、山田一郎が、「時事を談ぜらる蓋し我が邦人に稀なる所なり」と紋を評価したことは、渋江保の影響を受けていたのは当然であるが、やはり、ミッションスクールの教育が大きく影響をしていたと思われる。『東洋英和女学院七十年誌』、「回想録」で野村美智子は思い出として次のように語っている。「只今で申します社会科の勉強にも中々熱心で、外人教師がすすんで生徒を連れて、政治演説を聴きに参りましたり」(8)とある。この時代の演説であるからには、当然のことながら自由民権運動の演説であり、授業の中で課外活動の一環として政談演説会を聞かせたことは驚嘆に値する。ある意味では、ミッション系女学校の女子生徒の方が、男子生徒よりもより深く民権運動や民主主義について理解を深めていたことがわかる。藤原さとの『明治のキリスト教と教育（その四）―女子教育とキリスト教―私たちの教育のルーツをたどる（十五）』によれば、「明治二十三年に女子学院を卒業したガントレット恒は、学校にはデモクラティックな要素があり、生活に関することは朝礼で皆で決め、議長は上級生が受け持ったと回想しています。」(9)とある。ガントレット恒（一八七三～一九五三）は、女性参政権運動に尽力した女性で、婦人団体参政権協会の設立に寄与し、一九三七年には、婦人団体連盟の会長に就任している。金子幸子の『フェリス和英女学校で学んだ一女性―田中参とその「日記」より―』には、フェリス和英女学校の生徒だった田中参の日記について説明があり、自由民権運動との関わりについて次のようにある。「政治参加と自由民権論との関わりについては、九一年夏期休暇中に避暑地で知り合いと「今年ハ国会議事堂ノ傍聴券ヲ賜ヘルトノ伝アリテイト喜バシク思フ」とあるのが注目される。」(10)当時の女学生が、課外活動で政談演説会を聞きに行き、国会議事堂の傍聴券をもらっていたと言う事実が、これまでの自由民権運

動史に書かれたことは恐らくなかったであろう。紋はこうしたミッションスクールの教育や日常生活の中で、この時代の誰よりも早く自由・平等な民主的な思想を体得したのであろう。

四　私擬憲法、交詢社憲法法案・東洋大日本国国憲按とアメリカ合衆国憲法

（一）　私擬憲法とアメリカ合衆国憲法

一八七四年（明治七年）に板垣退助、後藤象二郎らが提出した民選議員設立建白書が自由民権運動の始まりとされるが、これは専制的な明治新政府を批判し、国会の開設と憲法制定を目指すものだった。板垣退助はフランスの天賦人権思想に基づき自由党を結成、大隈重信はイギリスの立憲思想に基づき議会政治を掲げて立憲改進党を結成したが、この思想はフランスやイギリスの啓蒙思想家によって唱えられた。そもそも自由民権運動は、国民の権利や自由を保障し、国民の意見を取り入れる仕組みをつくるための運動であった。多くの自由民権思想家は、一般市民が平等に政治に参加し、国民の自由や権利を憲法で保障するために、一八八一年（明治十四年）を前後して、多くの私擬憲法を作った。その中でも、一八八一年（明治十四年）に自由党系の植木枝盛によって起草された東洋大日本国国憲按は、最も民主的な私擬憲法と言われるものであった。一方、一八八一年（明治十四年）に『交詢雑誌』第四十五号に発表された改進党系の交詢社から出された私擬憲法案は民権の規定はあるものの福沢の影響が色濃く顕れた法案と言えた。別表1にもあるように、ここでは、代表的な二つの私擬憲法を取り上げて、ミッション系女学校の教員とその教員から教えを受けた女学生が授業や日常生活の中で影響を受けたアメリカ合衆国憲法並びに権利の章典と比較し考察を行いたい。

（二）　国民の自由や権利に関する交詢社憲法法案、東洋大日本国国憲按の特徴

交詢社憲法法案においては、第一章皇権の条文、第一条「天皇ハ宰相並ニ元老院国会院ノ立法両院依テ国ヲ統治ス」、第三条「日本政府ノ歳出入租税國債及諸般ノ法律ハ元老院國會院ニ於テ之ヲ議決シ天皇ノ批准ヲ得テ始テ法律ノ効アリ」、第四条「行政ノ權ハ天皇ニ属シ（以下略）」、第五条「司法ノ權ハ天皇ニ属シ（以下略）」を見る限り、国民主権ではなく、天皇主権と言わざるを得ない。また、第六章民権において信教の自由、言論の自由、出版の自由等について謳ってはいるものの、別表1にあるように、信教の自由を規定した第六十九條「日本國民ハ國安ヲ妨害スルニ非サレハ各自所信ノ教法ヲ奉スルノ自由ヲ有ス」、集会結社の自由並びに言論出版の自由を規定した第七十條には「日本國民ハ國安ヲ妨害シ

若シクハ人ヲ誣謗スルニ非サレハ其意見ヲ演説シ及ヒ出版公布スルノ自由ヲ有ス」、集会結社の自由を規定した第七十一條「日本國民ハ兵器ヲ携スシテ靜穩ニ集會シ又其疾苦ヲ政府ニ訴フルノ權ヲ有ス」(11)とある。第六十九條においては、「日本國民ハ國安ヲ妨害スルニ非サレハ」、第七十條においては、「日本國民ハ國安ヲ妨害シ若シクハ人ヲ誣謗スルニ非サレハ」、第七十一條においては、「日本國民ハ兵器ヲ携スシテ靜穩ニ」と前置きがあり、自由や権利を主張することができない憲法を交詢社憲法法案の社是としている。なお、第七十一条の「兵器ヲ携スシテ」の「兵器」については具体的に何を指すのは現時点でわからない。こう言った意味では人権を頭から無視した憲法草案と言える。この交詢社憲法法案は、矢野文雄や馬場辰猪らに代表される慶應義塾関係者によって作成されたことを明記しておく。これに対して、合衆国憲法においては、国民主権を謳い、権利の章典、修正第一条（一七九一年）において、「連邦議会は、国教を定めまたは自由な宗教活動を禁止する法律、言論または出版の自由を制限する法律、ならびに国民が平穏に集会する権利および苦痛の救済を求めて政府に請願する権利を制限する法律は、これを制定してはならない」(12)とあるように、交詢社憲法法案は、百年近く前に制定された合衆国憲法の人権規定に遠く及ばなかった。選挙権については、第四章國會院、第四十三條にあるように、二十一歳以上で一定額以上の資産を有する男子にのみ選挙権が与えられるとあり、女性の存在は無視されていた。植木枝盛によって起草された東洋大日本国国憲按は国民主権を謳っており、当時作成された数多くの私擬憲法の中で最も民主的な私擬憲法であり、数多くの人権に関する民主的な規定を盛り込んだ憲法草案となっている。選挙権については、第六編立法權ニ関スル諸則、第四章議員撰擧及被撰擧ノ法、第百四十三條に「現ニ租税ヲ納メサル者現ニ法律ノ罪ニ服シ居ル者政府ノ官吏ハ議員ヲ撰擧スルコトヲ得ス」(13)とあるように、男女の別なく選挙権が与えられている。但し、「租税ヲ納メサル者」と言う項目が条文に見られる。

（三）アメリカ合衆国憲法並びに権利の章典の特徴

アメリカ合衆国憲法は一七八七年に制定された憲法で、国民主権、各州に大幅な自治権を認めた民主的な憲法である。また、基本的人権について具体的な条項を加え、アメリカ合衆国憲法に修正を加えて、権利の章典として、一七九一年、憲法修正第一条から第十条を制定した。権利の章典では、信教や言論の自由、出版の自由、集会や結社の自由等の基本的人権を規定して、国民主権の憲法であることを明確に示したと言える。選挙権については、一八七〇年、憲法修正十五条において選挙権が拡大され、第一項において、「合衆国またはいかなる州も、

人種、肌の色、または前に隷属状態にあったことを理由として、合衆国市民の投票権を奪い、または制限してはならない」(14)と規定した。この条項においては、女性参政権は含まれていなかったが、前年の一八六九年にワイオミング準州において女性参政権が認められ、その後、他州に女性参政権は拡大していった。

（四）ミッション系女学校の教師、女学生と自由民権思想家の女性の人権の比較

これまで論じてきたように当時の日本において幾多の私擬憲草案が作成されたが、女性参政権について具体的に言及した草案はおろか、自由民権思想家の論文や手記等は筆者の知る限りないと思われる。唯一、私擬憲法の中で男女の平等について言及したのは植木枝盛一人である。飛鳥井雅道『人物叢書　中江兆民』は兆民の伝記研究では最高の著書であるが、この書にかかれている事項で見る限り、中江兆民について、男女平等、女性の人格の尊重、女性参政権への前向きな言動等について一切触れていない。実際、自由民権運動の理論的指導者として評価の高い中江兆民は、フランスに留学し、帰国後は一八八二年（明治十五年）にルソーの『社会契約論』を『民約訳解』として翻訳しているが、フランス革命に影響を及ぼしたルソーは女性への差別意識を持っていた人物である。そのルソーに傾倒した中江兆民はその人格を疑うような女性への言動が見られる。兆民は当時の自由民権運動の理論的指導者として自由民権運動を牽引して来たが、そこに男女の平等の思想はおろか、民主的な考えはなかった。このように、中江兆民をはじめ、日本の自由民権運動の思想家に男女平等や女性参政権について具体的に言及した草案がない中で、女性参政権がアメリカ合衆国の全州ではないにしても、その活動が活発化し、実際に女性参政権が実現した州が存在したその意義は大きいと言える。こうした女性参政権付与と言う画期的な事実を知っていたのは、日本の自由民権思想家たちではなく、アメリカから来日したミッション系女学校の教員とその影響を受けた自由民権運動とはほど遠い存在であった女学生たちであった。彼女たちは、女性が人間らしく生きることとはどういうことなのか、男女が互いに尊重し理解し合うこととはどう言うことなのか、そして、女性が参政権を持つということの重要性は何かを、アメリカからミッション系女学校に赴任した教員によって、授業や課外活動、日常生活の中で身を以て教えられたにちがいない。

五　おわりに

小論においては、明治期前期のミッション系女学校の女学生の民権思想と当時の日本の自由民権思想家の思想水準との比較をとおして、日本の女学生の自由民権意識

の高さを明らかにすることにあった。

明治期の民権家たちの多くは、フランスやイギリスの啓蒙思想や啓蒙書だけで民権思想を理解し論じていたに過ぎず、その思想は啓蒙書の範囲を超えることはなかった。況んや、彼らは、合衆国憲法や人権保障規定を謳った権利の章典を知る由もなかった。一方、自由民権思想家でもなく、自由民権運動には無縁のミッション系女学校の女学生は、これまで見て来たように、寮生活や課外授業、普段の生活の中で、教師から直に教えを受け、自由や平等、民主主義、特に女性の社会参加や女性参政権、男女平等の意義について自然と身につけることが出来た。特に、米国史の授業においては、南北戦争（一八六一～一八六五）や独立宣言（一七七六年）、合衆国憲法（一七八七年）等の説明を直接受け、アメリカ合衆国の独立、自由・平等、基本的人権、女性の社会的地位の向上、女性参政権の付与等について学んだであろう。ミッション系女学校の女学生たちは、啓蒙思想や啓蒙書だけで自由民権思想を学び、政談演説会において演説をおこなっていた民権家を、更には、今日においても自由民思想の論客として名高い中江兆民を遙かに凌駕する自由民権思想を自然と身につけていたものと思われる。

小論を結ぶにあたり、渋江保について触れておきたい。渋江は、自由民権運動家の中で、唯一、当時のアメリカの情況を詳細に理解していた人物であった。渋江は、『第七編米国南北戦史』の附録「南北戦争ニ関スル重モナル事件ノ表」三〇〇頁において一八六五年十二月に「奴隷制度、全国ニ於テ廃止セラル」(15)と記載している。また、『第十五編米国独立戦史』二八九頁～二九二頁、「第九編講話並ニ善後第三章合衆国憲法ノ制定」に、合衆国憲法制定の経過及び合衆国憲法大綱十六項目(16)を掲載している。渋江保こそが、自由平等、基本的人権の理念を理解していた唯一の自由民権思想家であったであろう。

注記

（一）齋藤元子『メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献』（ウェスレー・メソジスト研究　二〇〇九年）九十二・九十三頁

（二）秋枝蕭子『キリスト教女子教育のしおり―明治時代プロテスタント系女学校について―』（福岡女子大学国際文理学部紀要　一九六三年三月）六十二頁

（三）活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』（活水学院　一九八〇年三月三十一日）四十一頁・四十二頁

（四）フェリス女学院一〇〇周年史編集委員会編纂『フェリス女学院百年史』（フェリス女学院　一九七〇年九月三十日）四十九頁

（五）活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』（活水学院　一九八〇年三月三十一日）

（六）東洋英和学院『東洋英和女学院七十年誌』（東洋英和学院　一九五四年十二月二十日）九頁

（七）東洋英和学院『東洋英和女学院七十年誌』（東洋英和学院　一九五四年十二月二十日）一四八頁

（八）東洋英和学院『東洋英和女学院七十年誌』（東洋英和学院　一九五四年十二月二十日）一四八頁

（九）藤原さと『明治のキリスト教と教育（その四）―女子教育とキリスト教―私たちの教育のルーツをたどる（十五）』（ネット検索日　二〇二四年八月四日）

（十）金子幸子『フェリス和英女学校で学んだ一女性―田中参とその「日記」より―』（横浜プロテスタント史研究会報No.六一　二〇一七年八月一日）

（十一）『交詢社憲法法案』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（十二）『アメリカ合衆国憲法修正第一条（一七九一年）』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（十三）『東洋大日本國々憲案』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（十四）『アメリカ合衆国憲法修正第十五条（一八七〇年）』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（十五）松井廣吉（実質執筆者　渋江保）『第七編米国南北戦史』（博文館　一八九五年三月二十六日）

（十六）渋江保『第十五編米国独立戦史』（博文館　一八九五年十二月十九日）二八九～二九二頁

参考文献

（一）活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』（活水学院　一九八〇年三月三十一日）

（二）東洋英和学院『東洋英和女学院七十年誌』（東洋英和学院　一九五四年十二月二十日）

（三）フェリス女学院一〇〇周年史編集委員会編纂『フェリス女学院百年史』（フェリス女学院　一九七〇年九月三十日）

（四）藤原さと『明治のキリスト教と教育（その四）―女子教育とキリスト教―私たちの教育のルーツをたどる（十五）』（ネット検索日　二〇二四年八月四日）

（五）斉藤元子『青山学院史探訪　明治期の女子教育と海岸女学校・東京英和女学校』（青山学院資料センターだより二十一号　二〇一九年十二月九日）

（六）田中きく代『南北戦争期の女性とその政治文化―研究の現状と展望―』（関西学院大学人文学会　二〇一五年五月二十日）

（七）笹岡伸矢・大槻きょう子『女性参政権成立論考：英米を事例に』（奈良県立大学研究季報　三〇　二

〇二〇年三月三十一日）

（八）『アメリカ合衆国憲法（一七八七年）』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（九）『東洋大日本國々憲案』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（十）『交詢社憲法法案』（ネット検索日　二〇二四年十一月十六日）

（十一）飛鳥井雅道『人物叢書　中江兆民』（吉川弘文館　一九九九年八月二十日）

（十二）静岡大務新聞渋江紋関連記事一八八五年（明治十八年）、一八八六年（明治十九年）

近藤勇プロジェクト（五）

匠　克仁

5　近藤勇の娘は勇

吉村勇は近藤勇の子孫について調べていて、近藤勇まつりの公式サイトでも紹介することにした。

近藤勇の子孫は途絶えており、近藤勇の供養祭でも出席するのは、勇の生家である宮川家の子孫である。

公式サイトでは近藤勇が養子に入った話から説明することから始めた。

近藤勇は、天保五年（一八三四年）に武蔵国多摩郡上石原村の百姓・宮川久次郎の三男として生まれた。

幼名は勝五郎、そして後に勝太と改める。

近藤勇は天然理心流剣術道場の試衛館に入門し、天然理心流宗家三代目の近藤周助の下で剣術の腕を磨いた。

そして、師匠の近藤家に養子に入り、天然理心流宗家四代目・近藤勇と名乗る。

清水徳川家の家臣松井八十五郎の長女つねと結婚した。

近藤勇には正妻つねとの間に、たまという娘がいた。

たまは勇の長兄の宮川音五郎の次男・勇五郎と結婚した。勇五郎は近藤家の婿養子となっている。

たまは勇五郎との間に長男・久太郎を産んだが、二十五歳で亡くなった。

近藤久太郎は明治三十八年（一九〇五年）に日露戦争で戦死した。そこで近藤勇の嫡流の子孫は絶えている。

しかし、近藤勇は三人の妾がいて、それぞれに子供がいた。

その妾の一人の芸妓（お）考との間に娘がいて、名前が勇である。「お」をつけて「おゆう」と読ませるのであろう。

近藤勇の娘の名前が勇ということに吉村は興味を持ったのである。

お勇は母のお考が出稼ぎにいっている間に母の姉であるお雪と揉めて家出をしたという情報があった。

その後、お勇は馬関（現在の山口県下関）で芸妓となる。

お勇は朝鮮人貿易商との間に男子三人を生んだ。

つまり、近藤勇の孫は近藤久太郎の他に三人の男子がいるので、もしその子孫が生きていれば、近藤勇の血のつながった子孫が現在もいることになる。

残念ながら、お勇の子孫の情報は見当たらなかった。

もっとも、お勇が三人の男子を生んだというのはWikipediaの近藤勇の子孫の情報であり、その情報が何を根拠にしたのか不明であった。

妾の駒野との間に男子がいたが、早く出家して子供がいない。

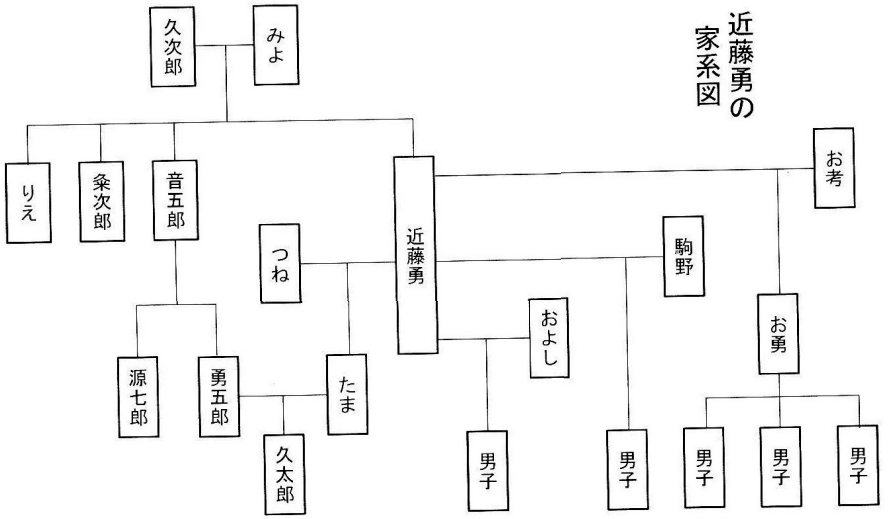
また、妾の（お）よしとの間に男子がいた。

この男子の情報もないが、この子孫がいたら、同じく近藤勇の血のつながった子孫になる。

あまり多くの情報が得られなかったが、近藤勇まつりの公式サイトに未確認と断った上で子孫の情報を載せてみた。

近藤勇の娘が勇というのが珍しがられたのか、ネット記事はかなりのアクセスがあった。

近藤勇の家系図



その他の新撰組の隊士達の子孫についても紹介した。

土方歳三は農家の出身で、十人兄弟の末っ子であった。

土方は生涯独身で、子供はいなかったので、子孫は残っていない。

歳三の兄（次男）の喜六の子孫の土方愛（めぐみ）さんという人が、現在でも歳三の生家に住んでいる。

土方愛さんは、自宅の土方歳三の生家の一部を「土方歳三資料館」として一般公開している。

土方歳三資料館には、土方歳三が実際に使用した刀「和泉守兼定」や池田屋事件の時に着けていた防具などが展示されており、貴重な品々である。

土方愛さんは土方歳三資料館の館長として、新選組のイベントに参加している。

また、土方愛さんは『子孫が語る土方歳三』という著書を出版した。

今回の近藤勇プロジェクトでも、土方歳三資料館を紹介した。

沖田総司は結婚しないで亡くなったため、直系の子孫はいない。

沖田総司は恋人との間に娘がいたという説もあるが、その娘も幼くして亡くなったとされている。

沖田総司には二人の姉がいて、長女みつ、その子孫が現在も残っている。

みつの曽孫（ひまご）の沖田哲也さんは明治大学名誉教授の行政学者である。

阿野典子さんという方が沖田家七代目になっている。

斎藤一（明治維新後に藤田五郎と改名）は、会津藩主の松平容保の媒酌で高木時尾と結婚して、息子が三人いた。

斎藤一の曽孫の藤田太郎さんは、現在でも斎藤一や新選組に関する講演などをしている。

永倉新八は戊辰戦争の後に、故郷の松前藩に帰り、その後に北海道に移住した。そこで藩医の婿養子となって杉村治備となった。

杉村家は現在も北海道に続いている。

伊藤甲子太郎は、えいという娘がいたらしいが、その後は不明である。

島田魁の子孫は不明であるが、直系が続いているらしい。

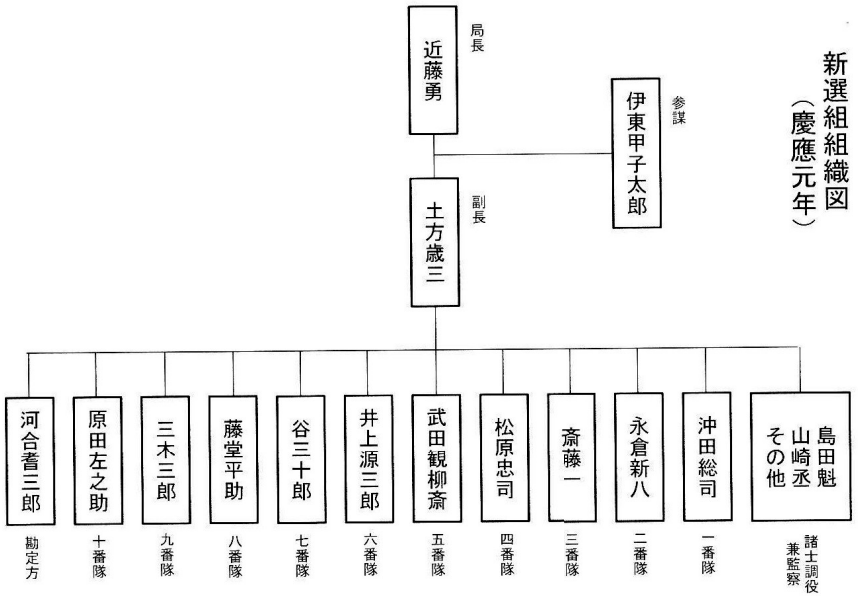
原田左之助の子孫が来たという情報が佐藤彦五郎新選組資料館にあった。（佐藤彦五郎は歳三の義兄）

藤堂平助や山南敬助は独身で直系の子孫はいない。

京都市の「新選組展２０２２―史料から辿たどる足跡」で土方愛さんと藤田太郎さんと杉村和紀さん、中島大成さん、井上雅雄さんが一堂に会した。

（杉村和紀さんは永倉新八の曽孫
中島大成さんは中島登の曽孫
井上雅雄さんは井上源三郎の兄から5代目）

新選組組織図
（慶應元年）



【近況報告】

（半分ほど紙幅が余ったので、近況報告します）

まんじのおかげで何とか生きていると思いますので、経緯を報告したいと思いました。前号で書いたように筆者はネット記事のゴーストライターをしています。

筆者は五十歳の時に職場の人事部長から「発達障害かどうか診断を受けなさい」と言われました。（この人事部長が小説のモデル。美人で年齢設定は同じです）

そこで発達障害と正式に診断されます。その後、単純労働に業務替え、正社員からパートに降格になりました。

二次障害で鬱病を発症し、体重も五十五キロから四十七キロ台まで落ち、動けなくなり退職しました。

当時もまんじの連載は続けており、鬱病の人の原稿とは思えないかもしれません。しかし、一年くらい書き溜めがありました。また、多重人格者なので、人格が変わって執筆できます。

さて、筆者の所管のハローワークには発達障害者専門の担当者がいます。担当者に書くのが趣味といったら、書いたものを見たいというので、まんじを見せました。

担当者は発達障害専門の福祉事業所でのライターの求人を紹介してくれました。

その求人に応募して、そこでも、まんじを見てもらい、採用されて、二年を経過しています。

まんじが命綱になったので、本当に感謝しています。

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）3
解雇自殺？（五）

匠　克仁

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
七田光男　アサヒ信用保証総務部平社員
七田夕子　アサヒ信用保証営業部　光男の妻

〈時系列〉

参考　第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第三話（本編）
二〇一八年七月からの数週間

5　死亡弔慰金一千万円

「光男の死亡退職金一千万円を早く払ってほしいんだけど。いつ頃もらえるのかしら」

七田夕子は人事部に入ってくると、人事部長の弓本良香に告げた。

それは七田光男の死の八日後、始業時間の三十分前である。

（相変わらず派手な格好ね）

夫だった光男のように反射材でも入っているかのような服を着ている。

夕子が日焼けをしているのを良香は気づいた。

どう見ても未亡人には見えない。ビジネスウーマンというよりも水商売の女性という印象である。

しかし、夕子は不動産オーナーからの人気があり、実

際に「指名」が多くて、営業部では重宝されていた。
他の男性営業社員が手に負えないオーナーをあしらっているという評価である。
いつもの派手なネイルアートは付けていなかった。
（さすがにネイルを外したわね）
宝石を散りばめたようなネイルは、夫が死んだばかりで不謹慎である。
（といってもそのような常識を夕子は持ち合わせていないから、逆に不自然ね）
「何の話かしら。全く意味が分かりません」
良香は夕子の意図をわざと分からないふりをした。
「そもそも会社に死亡退職金の制度はありません」
「そんなことないわ。社員が業務中に死亡した場合に遺族に一千万円が支払われるでしょう。それには自殺も含まれるとなっているわ」
「それは死亡退職金でなく、死亡弔慰金です」
「死亡退職金というか、死亡ちゅうい金というか呼び方は違うだけで同じことじゃないの」
夕子は弔慰金をちょういきんと読むことも知らないで、弔慰金を請求していた。
死亡退職金と死亡弔慰金は法律上で異なり、相続税も異なる。死亡退職金はあくまで退職金で、死亡弔慰金は遺族に対する見舞金である。
「そもそも死亡弔慰金は業務中の死亡でなく、業務上の死亡に支払われるものですからね」
「業務ちゅーと業務じょーで、どう違うのよ」
「業務時間中サボっているときに交通事故死しても会社の責任はありませんから、支払われません」
良香はあえて極端な例を伝えた。
アサヒ信用保証でも死亡弔慰金制度は存在する。
福利厚生が整っている企業であれば、業務上で死亡した場合には死亡弔慰金が支払われる。業務上の死亡には、業務が原因で自殺した場合も含まれるとされる。
（解雇通知で自殺した場合は無理でしょう）
良香は口に出さなかったが、微妙なところと思った。
死亡弔慰金の一般的な相場は、従業員の死亡当時の普通給与（賞与を除く）三十六ヶ月分とされている。
実際に相続税法上も業務上の死亡弔慰金は普通給与の三十六ヶ月分が相続財産から控除される。（業務外の死亡弔慰金は普通給与の六ヶ月分が相続財産から控除）
アサヒ信用保証では死亡弔慰金は一律に一千万円としていた。
（七田光男は私を巻き添えに自殺しようとしたのよ。そんな奴の死亡弔慰金として、なんで一千万円を支払うの。しかも、あんたみたいな女に）
良香は内心でつぶやいたが、落ち着いたまま反論する。
「残念ながら、七田光男さんの死亡時刻は午後六時を過ぎていました。就業時間は午後六時までですから、業務

時間中の死亡でありません。さらに退職しましたから、七田光男さんは社員ですらなくなっています」
良香は論理的に説明した。
「ところが、光男が死んだのは、午後六時の前だったのよ」
夕子が良香にとって意外な反論をした。
すぐに良香が再反論する。
「いいえ。光男さんが死んだ時間は午後六時ゼロ分九秒です。それは死亡時に光男さんが身に着けていた腕時計で証明されています」
光男の腕時計が午後六時ゼロ分九秒で止まっていたのは警察でも確認されていた。
「それがね、違うのよ。光男の正確な死亡時刻は午後五時五十分九秒なの」
良香は夕子が滅茶苦茶なことを言っていると思った。
「光男の時計はわざと十分進めていたのよ。そうすると光男は在職中で、業務時間内に自殺したことになるわ。だったら、一千万円の対象になるわね」
夕子はスマホでＬＩＮＥの画面を表示すると、良香の目の前に置いた。
「証拠はこれよ」
ＬＩＮＥでは次のようなやり取りが光男から始まっていた。絵文字だらけであったが、除くと次のような内容である。
『やべー。また、会議に遅刻しちまったよ』
『あんた、デートの時もいつも遅刻していたわね』
『毎回、十分ほど遅刻するもんだから、課長に腕時計を十分進ませておけって嫌味を言われたよ』
『本当にそうしたら』
『反省するふりで、本当に十分進ませて課長に見せておこうか』
『どうせ腕時計は時間を見るためでなく、他の人に見せびらかすためでしょ』
『それもそうだな。時間はスマホで見るし、考えてみれば腕時計で時間を見たことはなかったな』
事件の一ヶ月ほど前の通話記録である。
（夫婦だったら直接会話すればいいじゃない。その頃には夫婦の溝は深まっていたのね）
そう良香は考えながら、冷静に切り返す。
「そんなやりとりが証拠になるかしら。光男さんが本当に時計を十分進ませたか分からないわ。仮に進めても元に戻したのでしょう」
あの事件の日、良香は午後六時になる瞬間を待って通用口を出た。
通用口を出るのは外の自動販売機でハーブティーを買うためである。
良香が人事部長として業務時間内に業務でない行動をしない。

だから、良香は七田光男が自分と接触した時間は午後六時から数秒後であり、午後六時を過ぎていたのは事実である。

午後五時五十分九秒だったということがありえないと良香は知っている。

しかし、良香が午後六時までに本社を出ないというのは良香個人のルールであり、証明できない。

ＬＩＮＥの記録は間接的であるが、証拠になる可能性がある。

（もし、民事裁判となったら、微妙なところね）

良香は訴訟リスクを考えていた。

「どうせ、死亡ちゅうい金を払っても、会社のふところは痛まないでしょ」

夕子は、良香が一瞬だけ考えこむと、畳みかけた。

（誰がこのおバカさんに入知恵したのかしら。光男は死んだし……）

死亡弔慰金は社内規定だから、七田光男の仕事である。

といっても、光男自身、自分が業務上で死亡や自殺したら、夕子に死亡弔慰金一千万円がもらえるという話を生前にしたとは考えられなかった。

（いや、考えられなくもないわ）

親から勘当された光男自身の財産はほとんど無い。離婚を切り出した夕子に対して、自分には一千万円の価値があると光男が言い出した可能性がある。

そのように良香は考えた。

（まあ、このバカ夫婦ならありえるわよね）

実際に「会社のふところは痛まない」というのは事実である。

「保険金で全部まかなえるんだから、会社として払っても一銭の損も出ないでしょ」

死亡弔慰金は会社が掛けている保険金で保険会社が代わりに支払うシステムである。

仮に夕子に一千万円を支払っても、保険会社が保険金で肩代わりするから、確かに損失はない。

会社が死亡弔慰金を支払うことに保険会社が拒否して、保険金を支払わないことはない。

良香は念のため保険会社に確認はしている。

仮に保険金で会社に損が無いとしても、良香は夕子に一千万円も払うつもりはない。

「七田夕子さん、いくら保険金が使えるといっても、会社の方針として死亡弔慰金一千万円は支払いません」

「それなら、ダメモトでも訴えます。労働災害では成功報酬で請け負ってくれる弁護士がいるのよ」

夕子は右手の人差し指を良香に突き付けた。

「そうですか。ところで、あなたを本日付けで懲戒解雇します」

「何でよ」

夕子の顔つきが急変した。

「あなたは働いている会社を訴えて、まだ居座るつもりなの」

「会社を訴えてクビにしたら、ふせい解雇よ」

夕子は思い付きで言ったようだが、確かに従業員が会社を訴えた事実だけで解雇されたら、不当解雇になるかもしれない。

「解雇理由は別にあります」

良香は淡々と事実を伝える。

「あなたは光男さんの死亡の翌日から昨日まで休暇を取得しましたね」

「いびき休暇なんて当然の権利でしょ」

忌引きを、きびきでなく、いびきと間違えるのは夕子らしい。

「配偶者が死亡した場合に七日間のいびき休暇が取れるって社内規定にあるじゃないの」

アサヒ信用保証の規程では、配偶者の死亡の場合は忌引き休暇を七日間取得できる。

「それは配偶者の死亡で葬式をして喪主になると、それだけの休暇が必要だからです。あなたは光男さんの葬式もしなかったじゃないの」

夕子は夫の光男の葬式もしていなかっただけでなく、遺体の引き取りを拒否していた。

それでいて光男の死を理由に忌引き休暇を申請して、七日間休んでいたのである。

「夫が死亡したら、七日間のいびき休暇を取得できるのは、当然よ。それに葬式するかしないかは遺族の勝手でしょ。いびき休暇は社内規定で決まっている社員の権利だわ」

義務を果たさず権利を主張する、そのような身勝手な人間を、良香は心底から嫌っている。

夕子はまさに典型的なタイプであった。

「それに、いびき休暇とったくらいでなんで解雇なんだよ」

光男が解雇通知されたときと同じような言葉と口調で反抗した。

「忌引き休暇中に旅行をしていたなんてね」

「一応は夫なんだから死ねば、しゅうしん旅行くらいするわよ」

（しゅうしん……傷心旅行のことね）

良香は自分のスマホを操作して、映像を見せた。

「この写真は何なの」

夕子がエッフェル塔の前で笑っているものであった。

映像の夕子はエッフェルポーズをしている。

「とても傷心旅行には見えないわね」

良香は、しょうしんとアクセントを付けて発言した。

「あの野郎、ちくりやがったな」

夕子は毒づいた。

（ちくった……光男と同じだわ）

光男が掛けマージャンがばれたときと全く同じ言葉遣いである。

（似たもの夫婦）

夕子は休暇を取って、その間の仕事を同僚に押し付けていた。愚かなことにその相手に旅行中の写真を送ったのである。

（よほど浮かれていたのね。よりによって迷惑を掛けた同僚に写真を送るなんて）

同僚はその写真を上司の営業部長に送り、その写真が良香の元に届いた。

「その他にも解雇理由はあります、あなたの休暇中にあなたとオーナーとの関係を調べさせて貰いました。あなたとパパ活をして、マンション代を支払っていないそうね」

「それがどうかしたの。別に私がパパ活をしようが、会社に迷惑を掛けていないでしょ」

夕子は開き直った。

「いいえ、社員とオーナーが癒着しているのは十分に会社にとって迷惑です。実際にあなたの住んでいるマンションはアサヒの会社の家賃保証に入っていません」

良香の追及に夕子は黙り込んだので、続けた。

「アサヒと契約したら、ばれるから他の会社で家賃保証をしていたのでしょう。本来ならそのマンションの家賃保証の料金はアサヒの収入になったはず。機会利益の損失ですね」

「何よ。人事部長だからって偉そうにして。おばはんのくせに」

夕子は光男と同じように良香を「おばはん」呼ばわりした。

たしかに良香は夕子より二十歳以上も年上であるが、人事部長を「おばはん」と言うのはビジネスパーソンとして失格である。

（あんたの方がよほどおばはんじゃないの）

夕子は実年齢より上に見えるので、客観的には良香と二人が並べばどちらが年上か分からないくらいである。いや、むしろ肌つやなどを比べたら、夕子よりも良香の方が若々しい。

……と良香は勝手に思っていた。良香はもし自分の創造主がいたならクレームを付けたかった。

（創造主のあなた、なんで私が何度も、おばはん呼ばわりされるのよ）

良香は現実に戻って、夕子に告げる。

「いびき……忌引き休暇も認めません」

良香は相手に同調する癖があり、言い違えた。

「忌引き休暇は人事部で申請を却下しましたので、欠勤扱いです。あと残業申請ですが、パパ活していた時間が含まれているようですので、全て却下します。懲戒解雇ですから、あなたが休暇取得する前日までしか給与は支払いません。不満があれば、訴えていただいて結構です」

編集後記

令和六年の流行語大賞になった「ふてほど」は恥ずかしながら初耳だった。不適切にも程があると聞いてもピンとこないが、ふてぶてしいにも程がある、とくれば思い当たることが多い。

言葉の意味といえば、本号に新井宏氏が「続ける」と「頑張る」について論考され、三戸岡道夫氏が「孔子の一生」の中で「仁の精神」の実践について論じておられた。中東で大量のミサイルが飛び交う凄惨な宗教戦争も、スペインのレコンキスタが八〇〇年に亘ったことを思えばそう簡単に収束するとは思えないが、和平交渉を頑張るのではなくひたすら続けながら、人類の智恵と仁の慈しみの心を以って世界の危機を克服してもらいたい。

本号より新たに同人としてお二人をお迎えした。日本サッカー協会副会長を歴任された岩上和道氏がアイルランドの詩人W・Bイェイツについて純文学的な論考を、学生時代に探検部に所属されていた井出晃憲氏が大興安嶺紀行を投稿され、同人誌まんじの新しいジャンルとして今後の寄稿が楽しみである。

村上邦治氏が体調を崩される中、古代出雲国の論考を完結された。氏の気力と情熱には心から敬意を表したい。なおこの度体調不良の村上編集長の辞任に伴い編集長兼事務局長を担うことになった。皆様のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

安藤　剛

「告知版」

新会員紹介

岩上和道氏（紹介者　水谷嘉弘氏）
175号より
「イェイツ詩集を読む」寄稿

井出晃憲氏（紹介者　水谷嘉弘氏）
175号より
「大興安嶺紀行」寄稿

出版情報

岩上和道氏
「銀鼠髪のオデュッセウス」
コールサック社

合評会予定

2月22日（土曜日）12時
アルカディア市ヶ谷（旧私学会館）
（学士館建替えのため変更）

まんじ第175号

令和7年2月1日発行（非売買）

発行人　三戸岡道夫

編集長兼事務局長　安藤　剛　〒362-0022
埼玉県上尾市瓦葺2055-29
TEL・FAX 048(721)2001

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ

（印刷製本）　中川印刷株式会社　〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について「光への再生」　田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.176

2025.5.1

まんじ第百七十六号　目次

徳川家康の長期政権戦略（その一）……三戸岡（みとおか）道（みち）夫（お）……4
友垣なじみ……新井宏……9
終戦工作に動かなかった重臣たち（1）……村上邦治……20
現役時代の思い出話……杉浦崇……40
俳句　雑俳十六句……宇井偉郎……46
短歌　春に寄せて……鈴木興……48
古い物・遠い夢　我家の一品……忠内正之……51
吾輩は紙魚ロボである　その二二……永畑俊三……58

司馬遼太郎と車寅次郎（一）……山田嘉久……99
近代日本洋画こぼれ話（第七回）……水谷嘉弘……108
まことのEメール夢の旅（第十九話～第二十一話）……手塚泰男……123
文学、音楽、スポーツ巡礼～創作ノートから……岩上和道……134
私の本州マラソン歴史紀行（中部編③）……安藤剛……149
武漢・熱乾麺……山本勉……163
近藤勇プロジェクト（六）……匠克仁……167
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　3　解雇自殺？（六）……匠克仁……173
編集後記……編集子……179

徳川家康の長期政権戦略（その一）

三戸岡　道夫

徳川家康が設立した徳川幕府は、二百六十年という長きにわたって政権をまっとうした。歴史を見ると天下を取った者は多いが、天下を長期に握った者は少ない。徳川幕府のように一つの政権が二百六十年も安泰であったのは、稀有のことである。

それは何故であったのか。それは設立の当初から、長期政権構想が創始者家康の手によって、がっちり確立されていたからである。

長期に政権を維持するためには、長期計画がなくてはかなわぬことを、家康は熟知していた。だから家康は天下を取るのに全力を傾けたと同様に、政権を長期に持続することにも全力を傾けたのである。その家康の長期政権戦略を概括してみることにする。

まず家康は、天下を取るはるか以前から『天下取りの野望』を胸に秘め、そのための手を着々と打っていたことが注目される。すなわち家康の長期政権計画は、政権を取る以前からのものだったのである。

天正十年（一五八二）に起こった本能寺の変によって、織田信長が志半ばにして死去し、秀吉が明智光秀を討って天下を取った。そして三年後の天正十三年には秀吉が関白となり、位人臣を極めた。

さて、この天正十年から天正十三年までの三年間に、日本の歴史を百八十度変えたかもしれない事件が起きていたはずなのに、どの歴史書にもその記述はない。何故であろうか。それは事が、陰であまりにも巧妙に運ばれていたので、その痕跡はまったく残していないからではなかろうか。

天正十年から天正十三年までの三年間に、徳川家康はあることを非常に悩んだ。いや、歴史書にはそのような記述はまったくないから、『悩んだはずである』と言った方が、適当なのかもしれない。その悩みとは、

（秀吉が幕府を設立すると困るな）

という悩みであった。

秀吉が天下を狙ったように、家康も天下を狙っていた。しかし天正十年の時点においては、天下取りは秀吉の方が一歩先んじていた。しかし家康も諦めてはいなかった。

（今は秀吉の天下でも、次は自分のものだ）

と家康はひそかに思っていた。ちなみにこの時の秀吉は四十七歳で、家康は四十一歳である。六歳の差がある。年令から見ても、その可能性は十分にある。

しかし家康が天下を取るのに、絶対起きてはならないことが一つあった。それは、

（秀吉が幕府を設立する）

ことであった。

足利幕府は信長の強大な破壊力によってすでに滅亡しており、新しい幕府を設立するとなれば今が絶好のチャンスであった。だから秀吉は、

（せっかく天下を取ったからには、幕府を設立して、その栄誉を総仕上げをし、政権を永続させたい）

と考えているはずである。しかしそうなっては、家康が困るのである。家康も

（いつかは幕府の設立を）

と、自分の幕府を夢見ているからだった。秀吉幕府は、家康幕府の邪魔になる。

もし秀吉が幕府を設立したとすると、将軍職は、鎌倉幕府や足利幕府の例にならい、世襲制になっていくであろう。今のところ秀吉に世継ぎの子供はいないが、将来、子供が生まれれば、それが二代目将軍になる。もし、子供が生まれなければ、秀吉の弟とかなどの血のつながった者へ将軍の座は移り、家康のところへは廻ってはこない。家康が将軍になるチャンスは永久に失われてしまうことになる。

そうかといって、黙って指をくわえて見ている必要はない。ゴリ押ししてでも家康が二代目将軍に押し入るとか、また、秀吉が死んだ空白期を狙って秀吉幕府を廃止し、家康幕府を設立してしまうことなども、考えられないことではない。

しかし家康がそんな動きをしたら世の中は大混乱となり、家康は諸大名の反感を買ってたちまち反逆者のレッテルを貼られ、自分で自分の首を締める結果になりかねない。頭の中の作戦としては考えられるが、現実的ではない。一番いいのは、

（秀吉に幕府を設立させない）

ことである。

幕府という組織が出来上がってしまうと、組織は個人を超越する。秀吉が死んだ後も、組織が一人歩きをはじめる。

しかし組織（幕府）が出来ていなければ、秀吉の天下は、秀吉一代のもので、後へは尾を引かない。秀吉の死によって、そこで切断される。だから家康は秀吉の死を待っていればいい。そして秀吉が死んだら、その後継者を滅してしまえば、天下は家康のものになるのである。秀吉の後継者が誰であろうと、それを滅ぼす自信は、家康にはあった。

（だが、徒手傍観して待っているだけではだめだ。やる事をやらなくては……）

家康はそう決心したのである。

さて、歴史に現れているこの間の、秀吉の行動はどのようなものだったか、見てみよう。

天下を手に入れた秀吉は、当然そのあかしとして、征夷大将軍となって幕府を設立することを願った。そこで朝廷へ、征夷大将軍の職を申請した。ところが朝廷からの返事は、

「征夷大将軍は武家の棟梁であるから、武家の出身者でなくてはならない」

という、すげないものだった。尾張中村の百姓の子である秀吉には、与えられないというわけである。

百姓の子が天下人になったということは、世間から見れば、出世物語の華であるが、百姓出身ということは、秀吉にとって最大のコンプレックスだったに違いない。

その一番弱いところを朝廷からぐさりとやられたのでは、さすがの秀吉も引き下がらざるをえなかった。

しかしその秀吉の耳へ、驚くべき話が入ってきた。

（征夷大将軍は駄目ですが、関白なら可能です。関白なら、征夷大将軍よりも位が上ですし、天皇の側近であり、栄誉この上ないポストです）

秀吉には耳よりな話だった。尾張の百姓の子が関白になる、これは夢ではあるまいか。秀吉はこの話に飛びついた。天正十三年、秀吉は関白となった。そして翌年の天正十四年には太政大臣となって豊臣の姓を賜わり、関白太政大臣豊臣秀吉と、文字通り位人臣を極めたのである。

しかしよく考えてみると、これはちょっとおかしいことではあるまいか。

そもそも関白とは、天皇の政務に『関かり白す』という意味で、天皇を助けて政務をつかさどる重職であり、藤原氏の血筋の公家（五摂家）が代々その地位を独占して、例外を認めなかった職だった。

藤原氏といえば、その家系は古く、公家の中の公家、公家の最高峰だある。その権威の高さは、武家の棟梁などの比ではない。

武士の出身でないから征夷大将軍になれない秀吉が、藤原氏出身でもないのに、どうして関白になれるのであろうか。どう考えても、おかしいと言わざるをえない。

この時もし秀吉がどうしても征夷大将軍になって幕府を設立したいと思えば、関白にさえなれたのであるから、強引にやれば出来たはずである。が、そが実現できなかった。そこに、なにか陰の動きがありそうである。

この動きを陰で操っていたのが、家康だったと思うのである。家康は、秀吉が幕府を設立するのを、極度に警戒していた。だから早目に朝廷へひそかに手を打って、

（秀吉から征夷大将軍の申請があったら、絶対許可しないでほしい。しかし何も与えないのでは引き下がらないだろうから、関白というお飾りのポストでも与えたらどうか）

と頼みこんでいたのに、ちがいないのである。そのために家康は担当の公家のところへ、深く、ひそかに潜行して親密度を高めた。そのためにどのような裏工作を行い、どのような懐柔作戦をやったか、それは想像に余りある。家康のその深慮遠望には驚嘆する外はない。

関白職は一代限りである。秀吉が死ぬと、家康の計算通り、豊臣政権は一代で終わり、家康が幕府を設立した。そして徳川幕は二百六十年の幕開けとなったのは、歴史の示す通りである。

だから、もしも家康が陰で裏工作をせずに、秀吉が幕府を開いていたら、日本の歴史はどのように展開されていたか、これはちょっと想像がつかない、興味ある問題ではなかろうか。

以上を整理してみると、天正十三年に秀吉は関白となり栄誉の極みに昇ったが、ということは、秀吉のその時点において幕府設立のチャンスを失ったのである。そして秀吉はその事の重大性に気づいていなかった。

一方家康の方は、秀吉の関白就任によって、幕府設立の切り札を、半分、自分の手にしたと同じだった。あとは表面上秀吉に従うふりをして、秀吉の死をひたすら待っていればよい。そして秀吉が死んだら、可及的すみやかに徳川幕府を設立すればよい、ということになるのだった。

慶長三年（一五九八）、秀吉は六十三歳で死亡した。家康は秀吉の死を、十三年間じっと待ったのである。この時の家康の年令は五十七歳であった。健康に留意すれば、まだまだ余命はある。徳川幕府を設立し、その基礎固めをする時間は、十分あるといってよかった（ちなみに家康が死亡したのは七十五歳の時であり、秀吉の死後十八年間も生きのびて、徳川政権確立のために専念したのである）。

さて、秀吉の死によって、関白太政大臣という豊臣家の栄光は、一代で消えた。関白太政大臣という職は、世襲制ではないからである。後に残された秀頼は、無冠の子供にすぎない。家康にとっては、赤子の腕をひねるのにも等しい存在だった。

家康はひたすら世情の移り変わりを慎重に眺め、虎視眈々と幕府設立の機会を狙っていたが、秀吉が死んだ二年後の慶長五年（一六〇〇）には関ヶ原の戦いに勝ち、関ヶ原合戦から三年目の慶長八年（一六〇三）には、念願の徳川幕府を設立した。すなわち秀吉が死んだ五年後には、はやくも徳川幕府が設立されたわけであり、秀吉が関白となった時から数えても、十八年目であった。盛者必衰、秀吉政権はうたかたの権勢といってよかった。

しかしその短かかった豊臣政権に対し、徳川政権は明治維新までの二百六十年という長期政権を維持することが出来たのである。これは世界史上においても、稀有のことである。

その秘密は何であったのか。

一口に言えば、徳川幕府の長期政権施策が徹底していたからだった。そしてその施策を確立したのが、初代将軍の家康だったのである。その後の将軍は、そのシステムの上の乗って動いていただけにすぎないといえよう。家康の力はそれほど偉大だったのである。

（つづく）

「友垣なじみ」

新井宏

私（筆者）には「幼なじみ」がいない。戦前は江東区の亀戸や大田区の馬込に住み、戦中・戦後は小学校二年生から五年生まで父母の里の新潟県長岡市十日町（旧古志郡十日町村）で疎開生活を過ごしたからである。そのため、小学六年生の時に、品川区立大原小学校に転入した頃には、もう幼なじみと呼べる同年配の友は独りも居なかった。

それでも、四年間の疎開生活中には、数多くの鮮明な記憶があり、その後も交流を続けていれば、おそらくひとりやふたりの「幼なじみ」は残っていたはずである。しかし、小学六年生の夏、妹と共に流行性脳脊髄膜炎という法定伝染病にかかり、当時日本でも開発されたばかりの高価なペニシリンのお陰で「奇蹟の生還」（まんじ一〇四号）を遂げた。そのため、家庭生活も苦しくなり、独自のルートで「幼なじみ」と連携する知恵がなかった。

この年、米国を中心としてＮＡＴＯが生まれ、中華人民共和国が建国、ドイツの東西固定化、イスラエルが国連加入、ドル・円が三六〇円に固定、映画「青い山脈」や「また逢う日まで」が封切られ、古橋廣之進が水泳の世界記録を連発、野球のドゴール監督がサンフランシスコ・シールズを率いて来日など、慌ただしく戦後がスタートしていた。

結局、生涯続く交友は品川区立の新制中学校生になって始まった。

それは、小さな偶然であったが、わが人生に於いて、「志学」の年になってやってきた幼なじみ、すなわち「友垣なじみ」の始まりであった。新制中学校、荏原四中はまだ校舎もなく、延山小学校や中延小学校の一部を間借りして、授業を行っていた。そんな状態もあってか、経済的に余裕があるとか、成績上位者はみんな私立中学に進学していて、地元の大原小学校でやっとできた友達と

も、また離ればなれになってしまった。

それでも荏原四中は新制中学として一学年四クラス編成、私(筆者)はD組に割り当てられたが、薄暗い教室ではあったが活気があった。担任は図工科担当の辻田六郎先生、当時の感覚ではもはや中年のように見えたが実際は三〇代、やたら編入生徒が多いクラスであった。

最初の夏休みが終わったころには、疎開地から遅れて帰京してきた**サ**君、**ソ**君や、私立中学に進んではみたものの、経済的な理由で新制中学に戻ってきた**ユ**君、**ウ**嬢などが編入されてきた。本来なら編入順にクラス割り当てられるべきところ、辻田先生は、引き受け手がない「何やら問題を抱えている編入生」を快く多数拾ってくれた。

それが大当たりだった。不思議なことに、何か問題を抱えている割に、成績優良者が多かった。その後の高校進学結果をみると全員都立の有名進学校に入学しているのである。

もちろん、D組に当初から在籍した生徒のなかにも、編入者に伍して**ウ**君や**ヤ**嬢、そして**ア**君(筆者)などの成績優良者がいた。結局数えてみると、後に一年D組から有名進学校に進んだ者は七名である。

荏原四中では毎年新学期に学級編成を行っていた。一年生の時に四クラス編成であったのが卒業時には五クラスE組まで増えていて、同じ基準で言うと、全学年で有名進学校に進んだ者は、十名であり、その中には、三年生の二学期になってから都立高校受験のため、あからさまに地方から編入学をした者もいた。全校の卒業生は二八三名と記録されている。

なかなかありそうも無い確率を紹介したのは、**ア**君の「友垣なじみ」の物語が、そこから始まるからである。しかし以下の物語は、何もその「友垣なじみ」を独りずつ紹介しようとするものではない。しいて言えば、「**アサナウ会**」と言う異例なグループを群像として描いて見たいのである。そのため、「**アサナウ会**」の登場人物は全てカタカナの**創英角ポップ体**略称を用いる。

まず、別表1に登場人物の略称を一覧で示す。

実は、一年D組のメンバーの交友が、中学一年生の時に始まり、その後ずっと絶え間なく続いていたのではない。それは皆が高校や大学を卒業して社会人になる頃から始まった。

中学校一年生の頃は、成熟の早い女生徒を除いては、まだ幼さが残っていた。成熟した女生徒からみれば、男生徒は余程子供じみて見えていたに違いない。

だから同じクラスで学びながら、そこには一体感などというものはあまり無かった。とくに、女生徒側から見れば、小柄な**サ**君などは、まだ可愛い坊やであり、最も身長のある**ア**君でさえ、いつも青っ鼻をたらしては、ズルズルと啜り上げていたとからかわれていた始末である。**ア**君は当時、蓄膿症をわずらっていて、彼女たちの観察に間違えはなかった。

「**アサナウ会**」を名乗るのに重要人物である**ナ**君は一年次にはB組で同じクラスではなかった。ただし、**ナ**君は**ア**君や**ユ**君と大原小学校からの仲間であり、しかも三年生の時には**サ**君や女性メンバーの**ウ**嬢と同じC組であったのが、連携するきっかけとなった。

表1　「友垣なじみ」の関係図

会員	略称	小学校	住居	荏原四中 一年	荏原四中 三年	進学 都立高校
アサナウ会員	**ア君**	大原小	豊町	D組	A組	小山台高
	サ君		豊町	D組	C組	小山台高
	ナ君	大原小	戸越	B組	C組	小山台高
	ウ君		豊町	D組	D組	小山台高
	ヤ嬢			D組	D組	三田高
	ウ嬢		豊町	D組	C組	三田高
準	**ユ君**	大原小	戸越	D組	A組	小山台高
	キ嬢			？	D組	？
外	**ソ君**			D組	B組	三田高
	ノ君			？	C組	小山台高
	ム君			？	E組	小山台高

都立小山台高校：旧府立第八中学校
都立三田高校：旧府立第二高等女学校

一、「**アサナウ会**」の家庭環境

当時の荏原四中では、二八三名の卒業生の内、高校進学試験(アチーブメントテスト、全日制の他に定時制・通信制等を含む)を受けた者が一二八名と記録されている。これは受検者の数であり、合格者数ではないが、当時の制度では二次志望、三次志望などの救済制が働いていたので、おそらく合格者基準でみたならば、一二〇名ほどとなったであろう。すなわち高校進学率は定時制・通信制等を含んで、四二%程度であった。

それに対して、全国統計を参照すると、全体の高校進学率は四八%、東京都の高校進学率は五九%で、いずれも進学先には定時制・通信制を含み、分母は新制中学校の卒業生で私立中学校卒業生を含まない。すなわち、荏原四中の高校進学率は、東京都平均の五九%はもとより、全国平均の四八%から見ても、かなり劣っていた。

このことは、荏原四中の家庭環境が全国平均より低水準であったことを示している。因みに当時の荏原四中から大学まで進学した男生徒は二〇名弱、一五%程度であり、昭和三〇年基準では、全国の男子平均とほぼ等しいが、女生徒に関しては、進学該当者なしで、全国平均の五%に比較して著しく劣っていた。

都立進学校小山台高校は、男子三〇〇名、女子一〇〇名を別立てで選抜していたので、暦年、女子の競争率は

中学側で全員合格になるように調整していた。そのため、女子受験生は男子に伍して大学進学を目ざす成績優秀者が半数、残りの半数は入学し易いので希望した者であり極端に層別されていた。

このことは、**ア**君の四歳年下の妹とその妹の友人で後に**ア**君の妻となった者の事例をみるとよく分かる。二人はいずれも大学受験を念頭に小山台高校に入学したが、**ア**君の妻の場合、家庭は熱処理業を営み、経済的には豊かであったが、父親が「大学などに行くと嫁の貰い手がなくなる」と強烈に反対したため、断念せざるを得なかった。**ア**君の妹の場合も、既に**ア**君が大学に進んでおり、末子の弟も当然大学進学するので、長女を進学させると次女もとなり、折から母親の体調不良もあり、断念させられた。ただし次女の頃には「合格したらOK」となり、無事大学に進学している。

ところが妻の一歳年下の妹の場合は、あくまで「許可を得る事が出来ず」結婚後、子育てを終えてから共立女子大の大学院まで履修している。

おそらく、当時、品川区や太田区の場合、家庭環境としては大学進学の経済力があっても、似たような理由で進学出来なかった女性が多かったと思われる。

ここで「**アサナウ会**」メンバーの家庭環境や成年後の活動を整理してみよう。

前述したように、メンバー全員が都立の有名進学校に進んでいる。各家庭が平均より特に豊かであったわけでもない。何か共通点はないだろうか。また成年後の活動に共通点はないだろうか。少なくとも、男生徒群の場合、いわゆる社会的な成功と言う点で評価すれば、荏原四中卒業の男生徒を母集団とするかぎり、メンバーはかなり高い水準を誇れる。ひいき目にみていることを承知ながら始める。

① **ア**君の場合

男・女・女・男の四人きょうだいの長子、父は戦前南興水産の会社員であったが、敗戦で失職、戦後は若い頃に修行した大工に戻って、工務店を始めていた。**ア**君とその妹が法定伝染病の流行性脳脊髄膜炎という大病にかかり、家庭の経済に大きな打撃をうけながら、折からの戦後復興ブームで極貧というほどのこともなく、家はしばしばメンバーの集会場となっていた。メンバーで唯ひとり戦前**ア**君は幼稚園を修了している。

東工大を卒業してから就職した日本金属工業では、しばしば左遷も受けながら、左遷があるから右遷(出世)もあるのだと割り切り、我が道を進み、常務取締役まで昇進、退職後は趣味の考古学の研究を本格的に始め、専門書四冊の他、考古学論文・論考を九〇件ほど発表している。

会社はステンレス鋼専門の中企業ではあったが、鉄鋼協会と金属学会で論文賞を受け、折から日本のステンレス鋼生産量が世界最高を記録した中で、日本の研究者としてばかりでなく、世界的な特殊鋼研究者としても認められた。

その経歴により退職後、韓国国立慶尚大学に呼ばれ、足かけ八年間招聘教授をつとめ、その過程で「金属考古学」あるいは「古代計量史」の研究を極め、ともすればアマチュア研究者を見下す保守的な考古学界にあって、専門家に伍して活躍、数少ないアマチュア研究者として評価された。

② **サ**君の場合

女・女・女・男・女の五人きょうだいの第四子。家庭は戦前深川で砂糖問屋をやっていたが、父親は身体が弱く、**サ**君が中学生になる頃には経営にタッチしていなかった。きょうだいは女性ばかり、疎開地の千葉県茂原から引き揚げてきた直後で、外見から見ても経済的には厳しかったようである。

サ君は女性ばかりに囲まれて育ったせいか、長じてからも女性的な面があった。戦前幼稚園には通い始めたが、甘えん坊で続かなかったという。

大学は早稲田に進み、漫画ばかり読んでいるような生活を続けていたが、社員が百名に充たなかった旭通信社に入社、営業として「アニメ」のドラえもん、アルプスの少女ハイジ、サザエさん、鉄腕アトム、仮面ライダー、巨人の星、宇宙戦艦ヤマトなどを担ぎ、大塚製薬等の大手スポンサーを獲得し、会社を電通、博報堂に次ぐ広告業界三位に躍進させるのに大きく貢献した。その結果、最終的には取締役副社長まで出世している。

営業社員として伝説的な活躍をしたが、入社数年後に得意先の日本緑十字社に勤務する三歳年上の幹部女子社員との間に、子供ができ結婚する。このような性向は、結婚後も続き、奥さんは非常に苦労した。しかし、奥さんは気弱な**サ**君に代わり、時には旭通信社の創業者の稲垣正人氏と直接談判をするようなところがあった。

競争の激しい広告業界は、過去の業績だけでは、いずれ失脚する厳しい業界、後年になると、関連会社の管理なども任されるようになったが、それは主流からはずれることでもあった。しかし旭通信社をバックにすると、見かけ上の成績は向上するので、自分の才能を誤認し、ガードが甘くなり、詐欺的な売り込みに引っかかってしまうこともあった。

そのひとつがカネミ油症事件で大問題になっていたPCB(ポリ塩化ビフェニル)の無害化技術を巡って、**サ**君が化学的な処理方法の特許に飛びついたことである。平成十年頃であったと思うが、**サ**君から電話でその特許を五千万円ほどで買って企業化したいとの相談であった。

その頃、**ア**君も電気溶解炉を持つ会社で、その設備を利用して無害化事業に参入できないか検討していた。要はPCBを千百度で加熱すれば、無害化できることを

知っていたからである。それに比較して、化学的処理法は特殊装置が必要で、コスト的には太刀打ちできないのが一般的な認識であり、素人がそんな「特許」に飛びついたら大けがするから「絶対やめとけ」と薦めた。しかし、なかなか納得せず、電話は三時間も続いた。

問題はそれで終わったと思っていたが、後日になって旭通信社に来てほしいとの連絡が入る。**サ**君が集めた技術者が数人集合していた。どうやら最初の電話の時には既に「特許」を購入することを決めていたらしい。

買ってしまったことは仕方ないが、何とか騙して転売すると言う。その無責任な発言に腹を立て「二百万円でも売れたら儲けもんだ」と啖呵を切って、企業化だけは絶対思いとどまるようにと集まった技術者達に訴えた。副社長の地位にある**サ**君が決済したこと、旭通信社にとってはたいした損害ではない。

ところが**サ**君は私財でその「特許」を買い取ったらしい。失敗を公にすることができなかったからであろう。

数年すると**サ**君が新しく設立したエコパルという電磁波防御の設備を開発する会社から五十万円の出資を求める「回状」が届いた。内容を分析すると**サ**君は既にエコパル社に一億円近く注ぎ込んでいる模様。おそらくPCB関係での出資一億を加えると、個人負債が二億円は下らない。当然、家屋敷も既に担保に入っている。旭通信社からの退職金他を投入しても既に立ち行かないのが明かであった。

結局、早めに自己破産するしか救済のしようがないと強く薦めたが、エコパル社に引き込んだ社長等の出資者の手前、そんなことはできないと頑張る。

結局、半年後にはやむなく自己破産して、周囲に大損害をあたえてしまい、年金収入だけに依存する生活に入って既に二十年近くが経過している。その間に、**ア**君は**サ**君に小口で合計すると八十万円ほど用立てしているが、一切返済はない。**サ**君のATM替わりみたいな役割であるが、「友垣なじみ」の時代を共に過ごした楽しい思い出に免じて、**ア**君の家計に重大な影響が無い限り黙って協力している。

③ **ナ**君の場合

女・女・男・女・男の末っ子。父親は役位のついた会社員のようであり、家屋が戦災に遭わなかったこともあって、高校生の頃には既に自室をもっていた。兄は東京工大を卒業し姉達もある程度の高等教育を受けていた。本人は末っ子で幼稚園に通い始めたが続かなかった。

運動神経が抜群で、大学は慶応大に進んだが、二年度を終了後、国営の宮崎航空大学に進んだ。日本航空の初期のパイロットでそれなりの重責を担っていたが、その一方で**サ**君と共に昭和山岳会の主力メンバーとして「百名山」を完登している。

六十歳の時には、仲間とエベレスト登頂をめざしたが、

日本式の高地順応に日時を掛けたため、体調をくずしてしまつた。その経験から、エベレスト登山は短期間で登頂を志した方が良いとの意見を持っている。

航空機操縦では信じがたいような現象をしばしば経験したようであるが、欧州航路を主として飛んでいた関係で、各地の話を聞くと面白い。

結婚は**ア**君と共に二十九歳になってからで、お相手は日航の端麗なスチュワーデス。娘さんの一人が、スペインに留学しスペイン史を学んでいたが、**ナ**君と一緒に一ヶ月掛けてスペインのコンポステーラ巡礼を果たしている。その前にナ君は四国八十八ヶ所霊場巡りも済ませていた。

ある時、**ナ**君に電話したが、在宅せず奥さんと長話をしたことがあるが、大学の先生を希望する娘さんの就職先が、なかなか見つからず、韓国等の事情を聞いていた。

④ **ウ**君の場合

男・男・女・女の長男。戦前、父親が電気関係の技術者だったようで、自宅の一部で、電気部品を製造していた。しかし、経済的には好不況の波があり、隣に住む**ア**君の家にも時折寸借に訪れていた。地域的には通学地域としては大原小学校であったが、隣の宮前小学校に通っていた。大原小学校より学校の序列が高いからだとの噂があり、教育熱心な家庭だったようである。

しかし小山台高校を卒業後、勧業銀行に就職し、後に定時制で中央大学を卒業した。職場の許可を得た後である。**サ**君と同じ頃、若くして社内結婚した。

定年まで勧業銀行に勤め、不動産鑑定士の資格を得て、日本不動産研究所に再就職した。国家資格の不動産鑑定士の資格取得には、通常、弁理士、税理士と同等に二〇〇〇時間以上の勉強時間を必要とするとされており、弁護士の三〇〇〇時間や公認会計士の二五〇〇時間ほどではないが、かなりむずかしい資格のようである。

ウ君の弟も税理士の資格を得て、地域では知られた人物であった。

⑤ **ヤ**嬢の場合

妹が何人かいたようであるが長女であること以外の詳細は知らない。**ウ**君の場合と同じように、父親が電気関係の技術者で、電気関係の下請けをしていたようだ。中学生の頃は、早くから成熟していて、成績は女生徒のトップ。三田高校を卒業後、古河電工に就職し定時制の戸板女子大に通っていたが、職場結婚で退社した。ご主人と**アサナウ**会のメンバーとの間にも交流もあった。しかしご主人の関西転勤で、交流が途絶え、帰京後**アサナウ**会に再参加したころから会の活動が活発になった。

⑥ **ウ**嬢の場合

女・女・女の長女。父親が戦前の映画俳優で、武将姿のブロマイドを持っていたのを見たことがあるが、病身だったようで、かなり困窮していた。そのなかで私立の

女学校に進学したのは、おそらく母親の影響だと思う。俳優に憧れて結婚したのではないかと思っているが、見栄っ張りのところが感じられた。三田高校卒業後は豊田自動車に就職し、始めてのモーターショウでは、高卒の新人なのに、かなり張り切っていた。

職場結婚であるが、プロポーズされた時には、家庭の事情、すなわち、両親に替わって、妹達を育てる必要があるため、職場を止める訳には行かないからと何回も固辞したという。しかし、ご主人になる方が、経済的な支援をすることで婚約に至った。婚約に至った日はクリスマスイブで「**アサナウ会**」のパーティが**ア**君の家で開催されていた。

以上、まとめてみると、各家庭ともに、戦前には中流階層に属していたようであるが、子沢山のこともあり、戦後の生活は近隣の家庭に較べて似たり依ったりで、決して豊かではなかった。ただし、各家庭、両親とくに父親の教育水準は当時としては中以上であったようである。

一方、メンバー六人の成績は卒業生二八三名のなかで、全員上位五％以内（一〇位以内）には入っている。新制中学校ということで、成績優良者が数多く私立中学校に進学してしまったことを考慮しても、全中学校卒業者の上位一〇％以上は確実である。

このことから、小結論を急げば、進学時の家庭環境では、経済的な豊かさは大きく影響せず、家庭の知的な雰囲気とか、家族の遺伝子面の影響が大きいと言うことである。

二、「**アサナウ会**」の性格

「**アサナウ会**」の性格を決めたのは、しばしばグループで山登りを実施したことである。そもそも**ナ**君や**サ**君は昭和山岳会の会員であり、その影響で**ア**君も**ウ**君も夏山には一緒に登っていた。

その流れで、昭和五九年の夏休に、往きの夜行を含めて、三泊三日の日程で磐梯山から五色沼、一切経山を経て土湯温泉まで縦走したことがあった。メンバーは六人の他に**キ**嬢も加わり総勢七人、年齢も二十歳で思春期真っ盛り、遠慮のない「友垣」であり、一気に相互間の距離が縮まった。その後、近隣の高尾山や丹沢へのハイキングを繰り返し、大学祭やダンスパーティに誘うなど、交流は日常化していった。

その頃、まだ「**アサナウ会**」と名付けた会合はなかったが、**ア**君の誕生日がクリスマスイブであったので、誕生会を兼ねて毎年集まる習慣は続いていた。

そうこうする内に適齢期の**ヤ**嬢や**ウ**嬢が早々と結婚、それに続いて**サ**君や**ウ**君も結婚し、嬰児つれの会も続いた。

その後、**ア**君と**ナ**君の結婚は当時として最も晩婚となる二十九歳と大分遅れたが、お互いの婚約者の紹介を兼ねて、銀座でパーティを開き、更に**ア**君の結婚式の場合には、披露宴に全員集合、宴後の二次会には新郎新婦を追い返して、盛大に二次会を開催していた。

その後はかなりの中断があったが、荏原四中の同期会が一九七五年に行われたことをきっかけに、女性群の子育も一段落して、各組の同窓会が行われるようになり、「**アサナウ会**」も復活し、数年に一回、不定期ながら続けて開催するようになった。

三、「**アサナウ会**」の意味

ここから**ア**君が私（筆者）に戻って、「**アサナウ会**」の意味を考えてみる。

まず疑問は「幼なじみ」いや「友垣なじみ」の会が、なぜこんなに長く続いたかということである。少なくとも私の周辺ではあまり見かけない。その原因は日本には「社交」という夫婦単位の交流の場がほとんどないということだと思う。

類似の経験を思い出してみる。

① 東工大の物理コースの同期会

卒業後、今まで毎年休み無く続いている。流石にコロナ禍以降は、出席者三～四名という状況におちいっているが、卒業者数が二十名弱のコースにあっていつも半数近くは出席して、旧交を温め情報交換会のような飲み会を行っていた。学生時代にはほとんど授業に出席しなかった私ではあるが、逆に最も出席率がよい。

それなりの楽しい会ではあるが、二十年ほど前に、奥さん同伴の会を続けて三回ほど行った。夫人方が四、五人参加するだけで会の雰囲気ががらりと変わる。意外や意外、奥さん方の発言がむしろ主になる。お互い「よその家庭」をのぞき見するような好奇心もあり、盛り上がるのである。

私の妻は悔し涙の「高卒」であるが、その他はみな「大卒」、同期生には地方出身者も多いが、もうその当時には「女が大学など出ると嫁の貰い手がない」などという時代が終わっていたことを感じる。

② 国際計量史学会のパーティ

まだ現役時代であったが、国際計量史学会に二回参加したことがある。最初は平成四年のフランスのリール、次は平成九年のドイツのジーゲンで、各々三日間の会期であったが、研究会というより、昼食会や夕食会に十分な時間を取っていて、歓迎会や懇親会の連続の趣がある。

国際会議なので夫婦での参加を歓迎していた。妻を連れていっても、なじめず不愉快な経験になるかも知れないと危惧したが、その埋め合わせはついでにフランス旅行でと一週間ほどの追加休暇を取って臨んだ。

ヨーロッパからの参加者は奥さん連れが多い。国際学

会と言っても、日本で言えば、北海道とか九州での開催に近く、発表者自身が女性で丹那さんを同伴してきている例もある。ただし、中国からは著名な女性研究者が参加しているが、同行者はいない。

毎日パーティがつづく。吃驚したのは、その中で言葉の通じない妻があたかも主客のように振る舞っているのである。ヨーロッパはこんなことには手慣れている。すこし着飾った妻を上手に持てなし、日本からの女性客というだけで話題にし、妻が日本の折鶴の作り方を紹介すると喝采であった。

ただ、中国からの女性研究者はアテンドする者が無く寂しそう。そこで、威力を発揮したのが、漢字での筆談である。それが周りの出席者の関心を呼び賑わう。

男性だけの研究会であれば、こんな交流は生まれない。その後、日本にやってきた中国の研究者を家庭料理で持てなすことなどもあった。

③ユーラシア社の欧州団体旅行

定年を機にユーラシア社の主催する欧州旅行に十回ほど参加した。同社の日程はほとんどが二週間で、やや割高な感じがするが、妻の言うように、遠い欧州の場合、長い日程ほど珍しい観光地もコースに入っているし、第一、往復の旅費まで考えれば割安である。前に行ったフランスとドイツを除くと地域数で十三ある。夫婦にとって貴重な思い出である。いまでもしばしばパソコンにファイルした膨大な写真を楽しんでいる。

その中で、二人の意見が一致しているのは、一日三回の食事時の交流の思い出である。参加者は多くても二十名、その中に夫婦参加は六～八組ほど、大体数回以上食事で同席する。

過去の旅行先の話も多いが、姑さんの話題が多い。どこの家でもありそうな話題であるが、奥さんの話はしばしばエスカレートする。それをニヤニヤしながら聞き流すご主人。その中で、我が家や兄弟姉妹の家庭を重ねてみる。

何よりも漏れ聞こえてくる夫婦間の会話に吃驚する。実に多様な夫婦の姿があるものだと思う。夫婦間で敬語を用いて会話しているかと思うと、夫が「間違っていたらぶっ飛ばすぞ」と言うと夫人が「私が正しかったらけっとばすわよ」と応じている。

そして、十五日間の擬似的な「社交」が終わる。みんな打ち解けて解散する。

③「**アサナウ**会」の場合

女性群が結婚したばかりのことであった。ふたり揃ってご主人の帰宅が遅いと嘆いている。

かつての才媛・才女が何たることか。育児ノイローゼにもなるという。いずれ我が家でも同じようなことが起こるかも知れないと勉強にはなった。後年になるとご主人の親族やお子さん達の話題も出て来る。

ウ嬢の長女の美菜さんが「**アサナウ**会」でやっとハイハイをしていた頃を良く覚えている。

小学校の先生になり、東京都の離島青島に赴任していたという。教育熱心で管理職に昇進することを拒否し続けた結果の「島流し」だと言うが、人生、滅多に経験出来ない話題が惹き付ける。**ウ**嬢にもそんな傾向があったことを思い出す。

ウ嬢はサッカーなでしこの第一人者である長谷川唯とそっくりな容貌、サッカー界の美人として、英国サッカー誌の表紙を飾ったこともあるが、厳しい顔をするとちょっと怖いがそれも魅力である。**ウ**嬢もそんな感じがあった。

そのウ嬢が亡くなったことを美菜さんから知らせてくれた。既に「**アサナウ**会」のメンバーも八十七歳。**ウ**君も数年前に亡くなっている。

思えば、高野辰之の唱歌『故郷』の「如何にいます父母、恙なしや友垣」の世界も遠くなった。

高野辰之については、「まんじ一六二号」に少し書いた。その時の主人公藤井宣正の妻瑞枝の妹鶴枝の夫である。

兎追いしかの山
小鮒釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき故郷

如何にいます父母
恙なしや友垣
雨に風につけても
思いいずる故郷

こころざしをはたして
いつの日にか帰らん
山はあおき故郷
水は清き故郷

終戦工作に動かなかった重臣たち（1）

村上邦治

はじめに

２０２５年令和７年は昭和１００年にあたり、太平洋戦争が終わってちょうど８０年になる。この大戦に２０歳で出征し軍隊を体験した若者は１００歳になり、すでに多くは亡くなった。戦争の記憶がかすかに残る４１年開戦年に生まれた人は８０歳半ばになる。戦後産まれの人は既に９割をこえ、この大戦を知らない日本人が大多数である。

開戦の経緯やその後の戦況そして終戦について戦後の学校教育ではほとんど触れられず、時たま劇場公開される戦争映画やテレビドラマにより接するだけであった。戦前わが日本帝国が誇った世界最大の戦艦「大和」といっても、７０年代にテレビアニメとして制作され総集編を映画化した「宇宙戦艦ヤマト」を思い浮かべる者が断然多い時代なのである。射程距離４２kmの主砲４５口径９門を装備した全長２６３㍍の戦艦大和に会えるのは、嘗ての建造地呉市にある海軍歴史科学館「大和ミュージアム」の精巧な１０分の１の模型（全長２６・３㍍）だけである。

終戦後８０年アメリカの核の傘で守られ悲惨な体験を忘れ「平和ボケ」といわれる日本人であるが、過酷な目に遭ったアジア諸国では８０年を経ても決して風化していない。それどころか、激しさを増す複雑な国際情勢から国家間の緊張が発生するたびに、太平洋戦争における日本の侵略や人権蹂躙行為は繰り返し非難の的になり、今日的なニュースとして報道される。太平洋戦争は日本にとって、現在においても避けることのできない重い荷物なのである。

中国・韓国・台湾の隣国や経済成長の目覚ましい東南アジア諸国さらに戦勝国などから年間４千万人が来日する令和の日本にとって、太平洋戦争についての正確な知識とそれに基づく行動が一人一人に求められる。

日本国民に太平洋戦争を思い出させるのは８月１５日の「全国戦没者追悼式」であろう。５２（昭和２７）年４月２８日は前年９月に締結されたサンフランシスコ講和条約の発効により連合国の占領が終了し主権を回復、日本は終戦７年経て「独立国」として復活できた。

政府として最初に行ったのは「戦傷病者戦没者遺族等援護法」の公布と、翌月の「第二次世界大戦戦没者追悼式」の開催であった。第二次世界大戦（本稿「太平洋戦争」に統一。戦前は「大東亜戦争」、昭和６年満州事変から通算した「１５年戦争」・「昭和戦争」とも。近年戦域にタイ・ビルマ（現ミャンマー）が含まれることから「アジア・太平洋戦争」と呼称される）で亡くなった旧日本軍人・軍属２３０万人および空襲や原爆投下による一般市民８０万人の犠牲者を弔うものとして挙行された。以後毎年８月１５日終戦記念日に行われ、天皇皇后両陛下・三権の長（内閣総理大臣・衆参両院議長・最高裁判所長官）が列席、そのほか知事・遺族代表が参列する国家行事として開催され、正午から始まる追悼式の模様はテレビで生中継される。

しかし終戦の日に近隣諸国のみならず国際的に注目をされるのは、何と言っても総理大臣の「靖国神社参拝」の有無の方である。軍部指導者たちによるこの大戦で犠牲者１千万人以上の中国や少なめに見ても２０万人を超す韓国は、東京裁判によりA級戦犯で有罪の判決を受けなかんずく絞首刑された日本軍指導者までも祀っている靖国神社へ総理大臣が参拝することなぞ、８０年経ても「決して許さない」との立場を崩していない。

日中間では「南京虐殺事件」について両国間で何か紛議が発生すると、この問題を持ち出し幾度となく日本批判を蒸し返してきた。犠牲数について中国は３０万人（東京裁判では２０万人と認定。１９３８年４月中国共産党機関紙は４・２万人と報道）と主張するが、日本の研究者はどうみても５万人程度と推定しており両国間で大きく分かれ平行線のままである。

韓国との間では従軍慰安婦や日本製鉄・三菱重工など統治下の朝鮮半島の企業から強制労働を強いられたとする徴用工の経済補償を求める訴訟が繰り返し両国間の問題になる。慰安婦問題は元々強制連行でなく新聞広告に募集してきた女性であり、外出、廃業、社交など日本人女性と同様な生活であった。自由があり司令官級の高収入により故郷に送金するなど「性奴隷」とは程遠いい境遇であった。徴用工問題は６５年日韓基本条約が締結されその中で「両国および国民間の請求権に関しては完全

かつ最終的に解決されている」と明記されており、韓国政府が国内問題として処理する事案である。にもかかわらずこの二つの問題は特に左派政権時には、国民の反日感情をあおり政権支持率上昇の材料としても使われ、現在でなお訴訟は継続している。もう一つの竹島帰属問題にしても近世以降日本の帰属を証明できる歴史的事実や資料は揃っているにもかかわらず、決して手放そうとはしない。

韓国では内閣支持率が低下すると、政権浮揚策として時の政権がこれら問題を利用し国民の反日感情を煽動するという政治手段として用いられる。反日運動により国民の政治・経済・社会への不満を、日本に向かわせるのである。

中韓両国とも国境を接するもっとも近い隣国である。過去の大戦やその後のわだかまりは解消されないままではあるが、日本は太平洋戦争について冷静で正確な歴史認識による対応が必要である。

首相談話

これら近隣諸国の反日感情が一向に治まらないのは、太平洋戦争を起こした日本自体の歴史認識特に「侵略」についてこれまで明確に言及せず、かつ統一されていないことにも起因する。

終戦後50年以来10年毎に首相談話が出されてきた。2度ともお詫びの言葉が多く挿入された謝罪表明であったが、相手国側には「おざなりで真摯な反省がなく、歴史認識が明確でない」として、被害を受けた諸国では受け入れられなかった。一方日本の保守層からはあまりに卑屈で一方的な謝罪であるとしてこれまた非難されてきた。社会党党首である50年談話を発表した村山首相の認識は1894年の「日清戦争以来日本は隣国に侵略戦争を繰り返してきた」とする立場であり、卑屈な姿勢での談話とならざるを得なかった。

20世紀初頭までの世界情勢はアメリカがハワイ併合（1898年）フィリピン領有（1898年）キューバ保護国化（1901年）、イギリスはエジプト占領（1882年）南アフリカ領有（1890年）、フランスはベトナム保護国化（1883年）モロッコ保護国化（1912年）、ロシアは満州占拠（1900年）など、欧米列強各国は帝国主義による領土拡大に積極的な時代であった。日本が侵略戦争を日清・日露戦争まで繰り上げることは、近世の歴史を見誤ることになろう。日本が国策を誤った時期をいつからとするかは大きな問題であった。

60年にあたる小泉談話は日中関係が悪化（日本の国際連合常任理事国入り問題に反対）、韓国からは首相の靖国神社参拝を非難され、両国とも緊張関係にあった。小泉内閣はバブル崩壊以降長期の経済不振が続きその対策に忙しく、談話について新たな提言を出す余裕はなく、60年小泉談話は村山談話をほぼ踏襲したものであった。

1931（昭和6）年柳条湖事件を発端とする満州事変から太平洋戦争の終結まで、日本の行った行為について統一的な歴史認識の必要性を痛感したのが、2015年戦後70年を迎える当時の総理大臣安倍晋三であった。これまで「総理談話」は50年村山談話、60年目の小泉談話があるが、国内外ともに納得させるものではなかった。

これまでの50年・60年談話の反省に立ち保守派の指導者を自認する安倍首相は戦後70年を契機に15年にわたる満州事変から日中戦争および太平洋戦争について、国民の多くが納得する歴史認識をまとめ、70年談話として世界各国及び国際輿論に問いたいと決意したのである。これまで日本では左右の立場から異なる説が錯綜し、誰もが納得する統一された歴史認識は存在しなかったのである。

安倍首相は15年2月満州事変からの日本の行為を検証するため「20世紀を振り返り21世紀の世界秩序と日本の役割を構想するための有識者懇談会」（いわゆる「21世紀構想懇談会」）を発足させた。座長は西室泰三（日本郵政社長）が就任、委員として保守革新の立場を鮮明にしている者を含めた大学教授、大手新聞社マスコミ関係者、シンクタンク研究員、大企業経営者が選ばれたが、実質的に会をリードしたのは国際大学学長（東京大学教授・国連大使歴任）北岡伸一座長代理であった。

懇談会の中で議論が白熱したのは「侵略」についてであった。『報告書』巻頭「20世紀の世界と日本の歩み」の中で、

「日本は満州事変以後、大陸への侵略を拡大し、第一次大戦後の民族自決（米ウィルソン大統領が提唱）、戦争の違法化（国際連盟規約」及び28年「ケロッグ・ブリアン条約」いわゆる「不戦条約」）、民主化経済的発展主義（国際協調による軍縮の成立、貿易の拡大、アメリカの繁栄）という流れから逸脱して世界の大勢を見失い、無謀な戦争でアジアを中心とする諸国に多くの被害を与えた」

と満州事変以後の日本の行動について、「侵略戦争である」と明確に定義したのである。

保守を代表する中西輝政京大名誉教授らから「侵略」という言葉を使用することについて、

「1　国際法上「侵略」の定義が定まっていないこと

2　歴史的に考察しても満州事変以後を「侵略」と断定することに異論があること

3　他国が同様の行為を実施していた中、日本の行為だけを「侵略」と断定することに抵抗がある」

と指摘、双方の認識が大きく乖離、会自体の存続が危

ぶまれた。北岡は保守の意見を脚注として記載することでようやく決着させた。

北岡は満州事変について、「日本は満州に特殊権益を持っていたが、それは南満州および東部内蒙古における「点と線」とでもいうべきもので、南満州および東部内蒙古全域に及ぶものではなかった。ましてや、北満州には日本の権益は及んでいなかった。しかし日本は満州事変後に満州国を樹立した。それは現在の日本の3倍以上の面積を持つものである。これが侵略でなくて何だろうか」と日本の行為は侵略行為であると明確にし、大半の委員の同意を得たのである。

北岡は『中央公論』連載の「学問と政治～新しい開国進取」の中で、懇談会では終戦後の日本のこれまでの国際協調政策を次のように評価したと述べている。

1　日本は戦後、日本が侵略した国々との和解を進めた。十分ではないにせよ、かなり和解は進んだ。

2　日本は相当の謝罪と補償を行っており、これ以上一般国民が謝罪し続ける必要はない。

3　日本は戦後、世界平和、世界秩序に対し忠実な支持者であったが、まだ十分とは言えずもっと努力する必要がある。

4　もう一つ重要なことは、こうした歴史をしっかり記憶に刻むことであり、近代史教育に大きな改革を加えるべきである。

余談ながら北岡らの近代史教育の提案を受けて、世界史と日本史を一体にして近代から教える「歴史綜合」という新しい科目が22年度から創設され、日本史では近代を教えることが少ない欠陥を取り払うことができた。

北岡の執念ともいうべき日本の「侵略」についての考えが採用された報告書はとりまとめられ8月初め安倍首相に提出された。

戦後70年談話は安倍首相により2015年8月14日に発表された。この中で「事変、侵略、戦争。如何なる武力の威嚇や行使も、国際紛争を解決する手段としては二度と用いてはならない」とし、「植民地支配から永遠に訣別」し「先の大戦への深い悔悟の念」と共にそう誓うことを表明した。そして「我が国は、先の大戦における行いについて、繰り返し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ち表明してきた」ことについて、「歴代内閣の立場は今後も揺ぎないものである」ことを明確に宣したのである。

続いて「戦争の苦痛を嘗め尽した中国人や日本軍によって耐えがたい苦痛を受けた英米蘭豪の元捕虜の方々が寛容であるためには、どれほどの心の葛藤があり、いかほどの努力が必要であったか。そのことに、思いを致さなければならない」と深く感謝の念を述べる。そして再度その方々の寛容な心により、日本は戦後国際社会に

復帰できたことに思いを致すのである。

「戦後生まれのあの戦争とは関わりのない、子供や孫そしてその先の世代の子供たちに謝罪を続ける宿命を背負わなければならないとわたしたし日本人は、世代を超えて過去の歴史に真正面から向き合わなければならない」と、これからも日本は謝罪を続ける決意を表明したのである。

最後に「国際秩序への挑戦者となってしまった過去を胸に刻み続けると共に、自由、民主主義、人権といった基本的価値を揺るぎないものとして堅持し、積極的平和主義を高く掲げ、世界の平和と繁栄に貢献すること」という未来志向の考えを披瀝し、日本国民と共に世界平和を創り上げていく決意を宣言したのである。

50年「村山談話」60年の「小泉談話」を包括、これまであいまいであった「侵略」と「植民支配」を明確に認め、これを「反省」し「お詫び」するとともに、「自由、民主主義、人権などの基本的価値を堅持」し「積極的平和主義」により世界の平和と繁栄にこれまで以上に貢献すると宣言する格調高い70年談話としたのである。

この談話により隣人である中国や韓国を始め東南アジア諸国や敵として熾烈に戦かった米・豪・欧州諸国など国際社会に対し、日本の真摯な反省と戦後70年にわたる世界平和に対する国際活動の実績をしっかり主張すると共に、未来においても世界の平和に対し日本は貢献する存在になることを宣言したことで、多くの国や国際世論を納得させたのであった。無論根底には『懇談会』の報告書を受け入れたものであった。

25年8月は終戦80年にあたるので、首相談話が発表されるであろう。この10年間は25年間続いた米ソ冷戦崩壊による新秩序が、大きく揺さぶられる出来事が多発している。国際平和の維持を担うはずの国際連合安全保障理事国のロシアと中国の動向である。

ロシアは2022年2月世界が注視する中で隣国ウクライナの首都キーフに向け侵攻、第2次世界大戦以来の本格的ともいえる戦争が始まった。大国ロシアの秩序崩壊行為に対し、EC諸国やG7のアメリカ・日本・カナダが支援する構図である。まる3年過ぎるが未だ停戦には至っていない。

同じく常任理事国中国は東・南両シナ海で他国の領海を犯し、また島嶼を埋め立て領土拡大に余念がない。フィリピンが提訴した国際司法裁判所から違法判決が出ているにもかかわらず、それを従うどころか判決を無視し都合の良い理屈をつけ領土拡大を進める異常さである。中国の領土と主張する台湾については明確に「統一する」と国内外に宣言しており、いつ台湾有事が発生してもおかしくない情勢である。

第2次世界大戦後の世界秩序を擁護してきた国際連合

は5理事国のうち2理事国が自ら秩序崩壊を目論むという、国際連合存続の危機ともいえる情況に直面している。

中ロの動向ともに、北朝鮮の核と大陸間弾道ミサイルを開発保有していることにも、新たな脅威としてリスクは増している。中・ロ・北朝3国ともすべて日本は直接接しており、日本人は「平和ボケ」でおられるはずはない。

米ロの経済力低下が目立ち始めると地域紛争が激化する。断続的に発生するパレスチナ問題もその一つである。第1次世界大戦中の1915年イギリスとアラブ民族との間で締結された「フセイン・マクマホン協定」から始まり、第2次大戦終了後ユダヤ人難民の大量移住によりパレスチナ分割決議案（アラブとユダヤの国家に分割）が国連総会で承認され、48年イスラエルは正式に領土を保有する国家として認められた。しかしこの分割案に不満を持つアラブ（93年パレスチナ自治政府）はイスラエルと戦闘を繰り返し、現在再びパレスチナで中東戦争が起きている。

80年談話はこれら国際情勢を反映したもので日本の役割を明らかにし70年談話の歴史認識を引き継ぐものとなるはずである。

国内政治では戦後の47年GHQによりもたらされ施行された日本国憲法の改正はこれまで一度もされていない。80年前の日本を取り巻く情勢とはまったく異なるのにもかかわらず、今まで手が付けられなかったという世界に類のない国であった。GHQによる現憲法を改正するにしてもまた堅持するにしても、太平洋戦争を正確に知ることが必要である。

いまや日本国及び日本民族を有史以来の滅亡の危機に追い込んだ太平洋戦争の歴史事実を正しく認識し後世に引き継ぐことは、昭和時代に生まれた日本人にとって使命とも言えるのではなかろうか。

本稿では現在なお影響を与え続ける太平洋戦争について、開戦の経緯とその首謀者とされる人物・部署を探り、また45年8月15日終戦を決断する重臣たちの行動を追っていくことにする。

序章　開戦責任と終戦責任

1　開戦責任

41年12月の真珠湾奇襲攻撃から始まる太平洋戦争の開戦については国力格差があまりにも著しい米英2大国を相手として、日本自ら戦争を仕掛けた行為はどうしても理解できない。

戦後多くの研究者の間でも同様であったと思われ、刊行された書名にそれがうかがえる。

『それでも日本人は「戦争」を選んだ』（加藤陽子）

『なぜ必敗の戦争を始めたのか』（半藤一利）

『あの戦争は何だったのか』（保阪正康）

『日本はなぜ開戦に踏み切ったか』（森山優）

『日本はどうして負けるに決まっている戦争に飛び込んだのか』（在野研究家三浦由太）

また開戦については、「無謀な」「勝ち目なき「自殺的」「捨鉢（自暴自棄）の」（天皇）「成算小なる」（山本五十六）「必ず負ける」（総力戦研究所）などの枕詞が付けられる。日米が開戦に至ったことは誰しも常識を超えると思われ、理解できず開戦を合理的に説明することは難しい。

終戦後40～50年代に中・高校生であった者は太平洋戦争について教科書にはごく簡単な記述しかなく、教師から教育を受けた記憶はない。どうも戦争について教師は触れたがらなかったようだ。中国に派兵され厳しい軍隊体験をしたはずの父や食糧難など生活が苦しい経験をしたはずの母からも、戦争について聞かされたのは断片的な逸話だけであった。

それでも古いニュース映画やテレビでは黒ぶちの眼鏡をかけ手を後ろに回し少しのけぞり気味の堂々とした姿勢で自信にあふれ、やや甲高く一言一句言葉を区切って明瞭な大声で、坊主頭の軍服を着た東条英機が出陣する学徒を鼓舞する演説や東京裁判で少しも悪びれず堂々と弁明する姿を目にすることが多かった。太平洋戦争の開戦は陸軍大臣でもある東條英機総理大臣と陸軍参謀たちの仕業であると、なんとなく思わせた。

終戦直後の日本人にとって、太平洋戦争についてその史実はほとんど知らされていなかった。戦争の模様は大本営発表だけであり、ラジオや新聞により知るしかなかった。しかも大本営海軍部の発表はミッドウェー海戦の後は、大半ウソであったことが分かるのは終戦後の事である。教科書には大戦の記述はほとんどなく、教師の説明もなかったので知らされないままであった。つい終戦前までは軍事教育を指導してきた教師自身まったく真逆のことを生徒に教えており、GHQの示す「陸軍部門の独走説」を素直に教えられるはずはなく、沈黙を守るしか方法はなかったのである。

戦争の全貌を知らない国民に対し、GHQ（ジェネラルヘッドクオーターの略　連合国軍最高司令官総司令部）は日本人に「東條・陸軍開戦責任説」で説明し洗脳する。

まず終戦間もない45年12月から日本国民のために第2次世界大戦の真相を国民に知らせるという謳い文句で、アメリカGHQ民間情報教育局が作成する10回にわたる「太平洋戦争史」をすべての全国紙に連載させた。GHQのプロパガンダは「日本国民は軍部の独走による侵略戦争にのみ込まれた被害者である」ということを、

敗戦で消沈している国民に徹底することであった。

少し横道であるが、連載後『太平洋戦争史』として1冊の本にまとめられ46年4月に定価9円で出版された。この本が千葉県立中央図書館に所蔵されていることがわかり閲覧できた。80年経ち紙質の悪いこともあり、退化が激しくようやくかすかに読める程度であった。しかし第1章序言には、

「日本の軍国主義者が国民に対し犯した罪は枚挙にいとまがないほどあるが、そのうち幾分かは既に公表されているものの、その多くは未だ白日の下に曝されておらず時の経つに従って次々に動かすことの出来ぬような明瞭な資料によって発表されて行くことになろう。

これによって初めて日本の戦争犯罪史は検閲の鋏を受けることもなくまた戦争犯罪者達に気兼ねすることもなく詳細に且つ完全に暴露されるであろう。

これらの戦争犯罪人の主なものは軍国主義者の権力濫用国民の自由剥奪捕虜及び非戦闘団員に対する国際慣習を無視し、政府並びに軍部の非道なる行為で最も重大な結果をもたらしたものは『真実の隠蔽』であろう。真実の管制は1925（大正14）年治安維持法が議会を通過時から始まった。この法律が国民の言論圧迫を目的にして軍国主義者と同一の戦線に立たなかった者は皆国家安寧を乱す危険分子として烙印を押された」

と記し、国民は被害者であることを上から目線の説得調ながら滾々と説明している。そして、

「今や日本国民は今次戦争の完全なる歴史を知ることは絶対に必要である。日本国民はこれによって如何にして敗れたかまた軍国主義によってかかる悲惨な目に遭わねばならなかったかを理解するであろう」

と日本国民に同情すると共に本当の歴史を知らしめるべく、これから大戦の真実を連載すると強調するのである。

何とも巧妙な日本国民に対するGHQのプロパガンダであろうか。この全国紙に連載された「太平洋戦争史」の効果は大きいものであった。

次に同様な「陸軍東條責任論」を吹き込んだのは、46年5月から始まった東京裁判であった。今度は当時の政治・軍部の「指導者個人」の責任を追及する裁判として、極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）が開かれ政府・軍指導者の戦争責任を裁いた。

この起訴状前文では、

「1928（昭和3）年（柳条湖事件）から45年9月の期間に於ては日本の対内対外政策は犯罪的軍閥により支配され且つ指導せられたり。かかる政策は重大なる世界的紛争及び侵略戦争の原因たると共に平和愛好諸国民の利益並びに日本国民自身の利益の大なる毀損の原因をなせり」

と戦争責任は軍閥にあり国民は被害者であることを明確にした。国民に対しては、

「日本人の経済的及び財政的資源は大部分戦争目的に動員せられ、為に日本国民の福祉は阻害せらるるに至れり」

と記し、日本は犯罪的軍閥により支配され、彼らが計画・実行した侵略戦争は侵略された東アジア諸国民に多大な被害を与えると共に、その惨禍は日本国民にも及んだとし、国民自身も「被害者」なのだと繰り返した。

45年末からの10回にわたる「太平洋戦争史」の全国紙連載および46年から始まった東京裁判により、「戦争の責任は東條ら軍部」であり「日本国民は被害者」とするいわゆる「東條陸軍悪人説」が定着する。おりしも朝鮮戦争勃発は日本経済にとってまさに「干天の慈雨」となってドッジ不況から脱した。以後高度経済成長に邁進する日本国民にとっては戦争に協力した後ろめたさは感じたであろうが、目の前の高度経済の恩恵を受け、豊になり始めた暮らしを実感しつつある国民の多くにとっては「都合の良い」説でもあった。

太平洋戦争研究史

昭和30年代から40年代には多方面からの史実に基づく実証性を重視した研究成果がまとまっている。

終戦後最初にまとまった研究成果を発刊したのは歴史学研究会の『太平洋戦争史』（全6巻）で出版社は戦争モノを専門とする青木書店であった。52年から「日本帝国主義が15年にわたるアジア侵略戦争を始め、戦争の惨禍を生じさせたがその根源を歴史的に追求し、平和と自由と独立の礎石にしよう」として企画されたものである。多くの専門家で分担、開戦から終戦までを詳細に記述し編集委員会で加筆修正し統一を図った。本格的な太平洋戦争史としては最初の出版である。

1962（昭和37）年から次年にわたり朝日新聞社により刊行された『太平洋戦争への道』（全7巻）は日本国際政治学会が太平洋戦争原因研究部を組成し、戦後10年を経て初めて明らかにされた防衛庁、外務省の資料を基に多くの当事者の証言を集め、専門研究者による百数十回に及ぶ共同討議を得てまとめ上げたものである。満州事変前夜・満州事変・日中戦争（上）（下）・三国同盟日ソ中立条約・南方進出・日米開戦に分け各巻500頁の大作であった。執筆者は当時を代表する大学教授が分担した。討議を重ねているので執筆者間の相違は見られない。

このシリーズは副題に「開戦外交史」と謳っているように日本を取り巻く国際情勢と日本外交の分野が充実しているが、日本の政治や議会さらに軍部の動向についても詳述されている。朝日新聞社が総力をあげて支援した

泰緬鉄道建設における捕虜の使用

松井石根（中支那方面軍司令官）
南京虐殺事件に対する不作為の罪

武藤章（陸軍省軍務局長　第14方面軍参謀長）
侵略戦争の計画準備遂行
フィリピン住民への虐殺拷問残虐行為

東条英機（司令官山下奉文はマニラ軍事裁判にて大虐殺により死刑宣告46年2月執行）（首相・陸相・内相・軍需相・参謀総長）
侵略戦争の共同謀議の主導的役割
捕虜抑留者の野蛮な取り扱い

そのほかのA級戦犯の判決は次の通りである。

「終身禁固刑」

陸軍　荒木貞夫（陸相）　橋本欣五郎（陸軍大佐赤誠会総裁三月・十月事件首謀者。未遂であるが侵略計画の発端と見なされた）　畑俊六（陸相　支那派遣軍総司令官）　小磯国昭（首相）　南次郎（柳条湖事件時陸相）　佐藤賢了（東條内閣時軍務局長）　梅津美治郎（関東軍総司令官　終戦時参謀総長）

海軍　岡敬純（開戦時軍務局長）　嶋田繁太郎（海相　軍令部総長）

その他　賀屋興宣（大蔵大臣）　木戸幸一（内大臣）　星野直樹（満州国総務長官　開戦時内閣書記官長）　大島浩（三国同盟時駐独大使）　白鳥敏夫（同盟締結時駐イタリア大使）　鈴木貞一（企画院総裁）

「禁固20年」　東郷茂徳（駐ソ駐独大使開終戦時外相）

「禁固7年」　重光葵（東條・小磯内閣外相）

病死　永野修身（軍令部総長）　松岡洋右（外相）

免罪（精神不安定）　大川周明（思想家）

東京裁判は米・英・中・ソ・仏・蘭・加・豪・ニュージーランド・フィリピン・インドの戦勝国と戦乱に巻き込まれたアジア諸国の11か国で構成され、2年半という長期間にわたった。国家間の戦争という巨大で複雑な出来事の総体的責任を、個人に求めるために「共同謀議理論」（二人以上の者が不法な共同目的遂行のため合意すること。実行を伴わなくても合意だけで犯罪とされる）の適用や裁判方式・言語上の問題さらに多くの参考人招致などにより、真相に迫る努力がなされたためである。しかしその間は「法廷はみんな寝ている」「眠たいような倦怠感がある空気」など報道された通り、大半は退屈な裁判であった。

裁判の核心は日本の東アジアおよび太平洋並びにインド洋地域における軍事的・政治経済的支配を目論む「犯罪的軍閥」が共同謀議により侵略戦争を計画・実行したとするもので、勝者が書いた基本的なシナリオによる裁判であった。

絞首刑判決の7人中6人が、終身禁固刑16名のうち7名が陸軍の将官（その他海軍2名・文官7名）であったことからも、「軍部とりわけ陸軍が主導した戦争」との説明は納得できるものであった。

この裁判を通じGHQの主導する「太平洋戦争は陸軍の暴走」で開戦し、3年8か月にわたる戦争が行われたとする筋書きを日本国民に対し着実に植え込んだのである。

一般国民は目の前の生活に追われ、毎日の食料の確保に懸命な時代であった。早く忘れてしまいたい戦時中軍部に協力した国民には後ろめたさを忘れさせた。学校教育では触れられなかった若者には、GHQのプロパガンダは多くの者に浸透した。

こうして太平洋開戦陸軍主導説は日本人の間で定着した。

始期については、関東軍の仕業である「柳条湖事件」がその後の満州事変を惹起し、満州国建国に至るとするとした。これについては国際連盟リットン調査団の報告書を不服として、33年全権代表松岡洋右が国際連盟脱退を表明したからとする専門家もいる。

37年第2次上海事変から始まる日中戦争（支那事変と呼称）、40年北部仏印進駐・日独伊三国同盟、そして41年南部仏印進駐など陸軍参謀陣主導によるものとされ、アメリカとの和平交渉中も一貫して開戦を強硬に主張し続けたとみなされた。そして12月8日陸軍はマレー半島上陸を海軍はハワイ真珠湾を奇襲攻撃し、開戦に至ったとするのである。

海軍説

昭和30年代・40年代に詳細な大戦史の研究が相次いだ。あわせ在野の戦史家によるオーラルヒストリーの蓄積から開戦に至る細部が明らかになると、陸軍主導説は揺らぎ始める。

アメリカとの戦争は太平洋海域における空と海での争いであり、海軍が主体となる。開戦を最終的に決議するには、陸軍がいくら強く主張しても、海軍の同意が絶対条件であった。アメリカとの対戦に「勝利する自信がない」として一貫して消極的態度を取り続けてきた海軍は、いつ頃態度を豹変したのか。

開戦1年前の40年から41年の海軍の動向が次第に明らかにされてくる。海軍では平時状態から戦時状態に移す出師準備（陸軍の動員に相当）は40年11月に発令されていた。開戦に際し陸軍と異なり艦船部隊を戦時体制に切り替えるには長時間かかるとはいえ、開戦の1年前にはその覚悟ができていたものと推量された。

山本五十六司令長官率いる連合艦隊の真珠湾奇襲攻撃訓練計画は40年末ごろには策定され、深度の浅い港湾に停留するアメリカ太平洋艦隊への攻撃模擬訓練が始ま

るのは、アメリカとの和平交渉が始まるころである。そして真珠湾の奇襲攻撃作戦と実地訓練の目安が付くのは41年夏であった。半藤の『昭和史』には山本連合艦隊司令長官が8月15日全艦隊に「連合艦隊は……すみやかに戦備を完了し、時局の急変に備えんとす」との電報を打電していたことを記している。

ここに至りこれまで勝算のめどが立たないとして開戦を拒絶してきた海軍首脳は、「アメリカとの戦争は辞せず」と態度を変えたとする研究者が増えてきた。9月初旬永野修身軍令部総長の有名な「戦うも亡国、戦わざるも亡国、戦わざる亡国は魂まで失った真の亡国なり」の発言からも開戦の決意が窺われる。

夏から秋にかけて海軍は明らかに態度を変えた。初秋頃海軍が強硬に開戦を主張することに、近衛首相は「閉口した」と述懐している。むしろ9月では陸軍よりも海軍の方が開戦に積極的であったとする見解が出された。

陸軍はこれまで本心ではアメリカとの戦争は回避したいと思いながらも海軍が必ず開戦反対を主張するので、安心して表向きは強硬な開戦論を主張してきたとの見方がされている。海軍が態度豹変しても陸軍首脳はこれまでの強硬姿勢を変更するわけにはいかず、海軍の開戦決断により陸軍はむしろ引っ張られる形で開戦に至ったとする。これが重要な決定であった9月6日御前会議で決定した期限を切って開戦決意を定めた「帝国国策遂行要領」作成の内実であったとする。以後12月の開戦まで、この9月の国策要領が決定的な役割を果たしたことから、海軍の責任は極めて重いとするのである。

政治弱体説

陸海軍の責任論より政治の責任、とりもなおさず三次まで内閣を組成し首相の座にあった近衛文麿首相の政治責任を問う声は終戦直後からあった。第1次（37年6月～39年1月）での盧溝橋事件の拡大防止に政治力が発揮できず第二次上海事変そして日中戦争に発展、日独伊三国防共協定調印、国家総動員法発令など軍部の横暴に抵抗した姿はみられなかった。平沼騏一郎・阿部信行・米内光政の後、第2・3次（40年7月～41年10月）には北部仏印進駐・日独伊三国同盟・南部仏印進駐と対外政策では軍部の言いなりとなり、9月には東條陸軍大臣から「開戦を決断しなければ辞任する」ことをほのめかされ、第3次近衛内閣は総辞職する。多くの研究者は「近衛は難局に望み、性格の弱さから政権を投げ出した」と評する。

この時の後任選びの重臣会議では、首相候補は平和論者東久邇宮、戦争論者東条英機そして和平交渉論者近衛（続投）の3人であった。

伊藤之雄は『昭和天皇伝』の中で、近衛は「私の力では東條の主戦論を抑圧し得ざるが故東久邇宮に後継内閣を組織し東條及び陸軍の主戦論を抑圧し、日米戦争を起こらざる如くしてもらいたい」と話し、近衛は「このことは天皇と木戸に話しておいたり」とのことであった。東久邇宮は「東條をやめて内閣の大改造を行ひ、日米戦争防止に最後の努力をなすよう近衛に忠告して別れた」と『東久邇宮日記日本激動期の秘録』で回想していることを紹介している。東久邇宮・近衛と天皇・木戸との間で、日米開戦を避けたいという点では一致していたが、東條の評価がまったく異なっていたことを指摘している。

開戦直前の後継首相に皇族である東久邇宮の就任は難しいと思われるが、再び大命が下れば近衛は「組閣をする」決意を東久邇宮に語っていた。近衛が柔軟性のない強硬な開戦論を主張する東條陸軍大臣を辞任させて第4次内閣を組閣しておれば、少なくともあと3か月から半年は日米開戦を遅らせることができた。この3～6か月の交渉期間延長は、日本の生死を分ける時間でもあったのである。

独ソ戦の戦況

独ソ戦は突如6月に始まり、ドイツの電撃作戦は世界が目を見張る勢いで目覚ましい攻撃を続け、北はレニングラード中央はモスクワ南はウクライナキーフの三方に分かれ進撃した。日本の軍部特に陸軍はドイツ軍の電撃的な勢いから、これに遅れまいとしてアメリカとの早期開戦を主張したのであった。

ドイツ軍は9月末までにレニングラード包囲、キーフ占領完了、10月から首都モスクワへ向けて進撃を開始した。ソ連劣勢の形勢からドイツと敵対する英国は英ソ相互援助条約を結び、アメリカは大量の物資を供給する支援体制をとりヒットラーに対抗した。

10月7日現地では早くも初雪が降り冬季の天候に変わり始め、その後も天候悪化が続いた。舗装されていないソ連の道路は泥沼となり、ドイツの誇る戦車部隊の前進スピードは大幅に低下し計画通りに進まなくなった。当初モスクワ陥落まで3か月を計画していたため、防寒装備は無くしかも食料は現地調達の予定であったが、ソ連の破壊工作で食料確保は不可能になってしまう。

近衛内閣総辞職の10月16日はまさにドイツ進撃の鈍化が顕著にみられ始めた時であった。ドイツはその後凍結した道路を使いモスクワ市街8キロまで迫るが、零下20度の極寒と食料補給に失敗し、あくまでモスクワ陥落を命令する強気のヒットラー総統ではあったが、遂に初となる前進を中止、やむなく現状維持（実質的には退却）を命令したのが12月8日であった。

当時まだ独・ソ・スイス・英国には公使館を持ち陸軍駐在武官が配属されておりドイツ軍進撃の模様は逐次把握していたものと思われるが、日本国内の政治家・外務

省・軍部には伝わらず、これまでと同様順調に進撃しているものと思われていたのである。

国内で開戦の是非について政府・官僚・軍部のトップが連日協議を重ねている間、世界情勢とりわけ独ソ戦の戦況把握が正確でなかったことが、日本の重大な政策に致命的な誤った決定を生じしめたことは間違いない。

人物評価が的確であった天皇は近衛を評価する中で、

「近衛は意志が弱いし、悪まれたくない、聞き上手で誰にも担がれる。（略）近衛は数字が分からぬ。数字の説明など東條がすると、眠ってしまうようなことがある。本当に春秋の筆法（間接の原因を直接の原因として表現する論法）からすれば、太平洋戦争は近衛が始めたといってよいよ」（『昭和天皇拝謁記』（初代宮内庁長官田島道治著）

と述懐している。

国民の人気は高く長らく首相の座にあった近衛の気弱な性格と実行力の欠如が軍部をのけぞらせ結局抑え切れず、その果てに内外とも最も重要な時期に辞任し、その結果戦争に突入することになったとする。

日独伊三国同盟締結説

陸軍が推し進めた3国同盟は1940年9月近衛内閣により、天皇・元老西園寺の宮中、山本五十六ら海軍条約派の反対を押し切り締結した。近衛首相や松岡外相はさらにソ連を加えた4か国の条約締結をも展望していた。

日本は枢軸3国の同盟締結によりアメリカをけん制できるとみて北部仏印進駐を実施した。しかし天皇が心配したように北部仏印進駐はアメリカと日本との関係を一挙に悪化させ、くず鉄の対日全面禁止という経済制裁と蒋介石政権に対する借款供与を実施した。

アメリカはヒットラー総統率いるドイツを最も危険な国と見なしていたので、日本が3国同盟を締結したことでアメリカは日本を敵対視することになり、経済制裁を招き結局日本を対米戦争に追い込むことになったとする。

アメリカの抑止力失敗説

日本の軍部首脳はアメリカとの国力の違いをよく認識していた。陸軍省戦争経済総力戦経済戦研究班（秋丸機関）は「対英米戦の場合経済戦力の比は20対1程度」と判断すると報告していた。開戦直前41年陸軍がニューヨークに派遣した主計大佐の調査では、「重工業産業力はアメリカの20分の1」と報告された。8月の内閣総力戦研究所の報告では鉄・銅・アルミなど「工業原料の自給率は何れもアメリカは日本の7倍以上」であり、これら物質自給力の差が国防資源自給能力総体の差となると警告していた。

こうした圧倒的な工業生産力を持つ大国アメリカとの「非合理の極致」の大戦を決意させたのは、「アメリカの圧倒的軍備力と生産力」の較差を日本に周知させていなかったとするものである。いわゆる抑止が発揮されておらず、日本軍部は海軍の「短期戦なら」あるいは陸軍の「南方諸国の鉱物資源を確保するなら」と条件を付けながらも、「アメリカとの戦争に勝利する可能性がある」との期待を抱かせてしまったことである。米参謀本部内ではこれだけの経済・工業力較差があるので、日本がアメリカに戦争を仕掛けてくるなど考えていなかったのである。

太平洋戦争開戦については歴史家特に戦史研究家にとって極めて興味のあるテーマである。日米開戦の要因は複合しており一筋縄では説明できない。さらに宮中・政治指導者・陸海軍省・大本営陸海軍本部・統制が緩い下部組織である陸軍の関東軍や海軍の連合艦隊の発言力のある指導者たちの言動など、総合的な研究が進められている。また国際情勢に視点を置いた分析や政治・軍部の指導者個人に絞りその言動を詳細に分析し史料に残る発言や行動の裏側を明らかにするなど、今日に至るも研究成果の発表は後を絶たない。

2　終戦（工作不作為）責任

開戦責任については多くの研究が蓄積され、開戦に至る経緯やその要因について詳細に分析されてきた。

反面終戦に至る、経緯や指導者たちの判断・行動についての研究は極めて少ない。というのも終戦に至る過程については多くの専門家が同意する次なような「通説」が存在するからである。

45年4月小磯内閣総辞職を受けて、天皇の信任の厚い後任候補鈴木貫太郎（枢密院議長、侍従長海軍大臣軍令部長連合艦隊司令長官歴任）は2・26事件で重傷を負い当時78歳の高齢であった。小磯後任の首相候補を審議する重臣会議には枢密院議長として出席、その席で「軍人が政治に出るのは国を亡ぼす基なり」と発言し重心たちの首相就任要請を辞退する。会議の後も木戸内大臣から繰り返し求められるものの、高齢と軍人出身を理由に就任を渋る。しかし天皇から「この難局を乗り切るにはもうお前しかいない」と説得され応諾した。

早期終戦を願う天皇の叡慮を知る木戸内大臣と鈴木新首相の間では、暗黙の共通した考えを持ち合わせていた。本土決戦を叫び強硬姿勢を取り続ける陸軍の意向を表向きは受け入れながら、機会をとらえ迅速に和平に持っていくというものであった。鈴木首相は8月9日までは陸軍の主張に素直に従い、強硬姿勢を崩さない陸軍の意向に賛同の姿勢を続けた。7月末連合国からの無条件降伏を迫るポツダム宣言の後も、陸軍の本土決戦について同調した。

8月6日広島に原爆が投下され、中立条約国として一

縷の望みを託したソ連は9日早朝から満州・千島に侵攻が始まるにおよんで、9日午前10時から開かれた最高戦争指導会議の選択枝はポツダム宣言を無条件での受諾しかなかった。

しかしその機に及んでも、受諾条件を国体護持に加えさらに4条件を追加しょうとする軍部に対し、ここまで陸軍の要求をのみ続けてきた鈴木首相は初めて本心であった「戦争を終結させるほかない」と言い放すのである。会議の途中には長崎にも原爆投下の報が知らされる。それでもなお宣言受諾の条件を「天皇制護持のみ」とする鈴木首相・米内海相・東郷外相3人と、天皇制護持に加えさらに自主的武装解除・自主的戦犯処罰・可及的小範囲進駐の3条件を付けくわえることを主張する梅津参謀総長・豊田軍令部総長・阿南陸相の3対3同数となり、ポツダム宣言の受託を決議することができず会議は中断に至ったのである。

引き続き閣議が夜10時過ぎまで開催されるが、首相の提案はここでも陸相に強く反対され、内閣としての意見を集約することができなかった。

ここから鈴木首相は秘めていた最後の奥の手を試みる。鈴木首相は真夜中の午後12時近く、御前会議を招集する。会議の始め今朝からのいきさつを奏上し、「結論に至らなかったので天皇のご判断を仰ぎたい」と切り出し、受諾の条件の是非につき、遂に最後の手段である「天皇の聖断」を求めたのである。

天皇の態度はまったく冷静で動揺もなく「(発議した)外務大臣の意見(1条件)に同意する」との聖断が下ったのである。時は既に10日午前2時を過ぎ、遂に開戦から3年8か月続いた太平洋戦争は終結が決定した。

10日の早朝から外務省はスイスとスウェーデン駐在公使を通して「天皇の国家統治の大権を変更しないとの条件でポツダム宣言を受諾する」の電報を発信、連合国に伝えたのであった。

この天皇と鈴木貫太郎首相の「あ・うんの呼吸」と称される「聖断による終戦決定」により日本は大きな内乱もなく、終戦への道筋を付けた鈴木首相の手腕を高く評価するのが一般的である。

この日の最高戦争指導会議の出席者による手記や日記、東京裁判での陳述書、臨時閣議の会議録、御前会議における天皇や鈴木首相らの発言記録などの史料から「聖断」の下る様子が確かめられた。

『中央公論』25年1月号特集昭和100年令和への教訓の中の「終戦のタイミングはあの時点しかなかったか」で検討を重ねているが、終戦決定の経緯から鈴木首相の老練な手腕を高く評価している。

鈴木首相の天皇との信頼のもと、よく軍部を押さえ平和裏に終戦に至らしめたという鈴木首相を評価する通説は、多くの者が納得できるものであろう。

しかしこの通説通り、日本の敗戦は45年8月15日で良かったと結論付けてしまっても問題ないのであろうか。

少なくとも3年8か月におよぶ戦争期間のうち、終戦1年前には太平洋戦争の主体である海軍が誇った連合艦隊は既に対戦能力を失っており、日本が勝利する展望はできなかったのではないか。

ソ連との中立条約を信じた重臣たちや外務大臣や外務省の終戦和平工作戦略は明らかに大きな間違いではなかったか。

開戦と違い敗戦工作の着手は国内での決断であり、時期や他国の動向は問題にしない。終戦前にはすでに甚大な被害が国内外で発生しており、一刻も早い和平に持ち込む決断と行動が求められたのである。通説の示す8月15日が最善であるとの評価で良いのであろうか。

もっとも重要で最終の決断は結局天皇に仰いでしまった。政府指導者・軍部・重臣たちはあまりに無責任であり指導者たちの責任回避ではないだろうか。

この戦争において甚大な被害を受けた国民の生命財産の視点が、政治指導者や軍人たちにあまりに欠如していたのでないだろうか。

5月からは連合国と継続して戦争を続行していたのは日本だけである。太平洋戦争の終結を、国際情勢という観点から判断しなかったのであろうか。

日本の官僚機構でもある陸軍は本土決戦策を主張するのだが、日本及び日本民族の存続を考慮していたのであろうか。

これら多くの疑問は消えないままである。

果たして終戦前1年間における政治・軍部の指導者の行動は通説通りの評価で良いのであろうか。終戦前の1年間すなわち44年7月から45年8月15日までの政治指導者・重臣・軍部高官たちの発言・行動を追い、検証する必要があるものと思慮するのである。

本稿では日本の勝利の道が閉ざされてから終戦までの「戦争終結工作」について、かれらはどのような発言・行動をとったのかという問題を掘り下げていきたい。

通説とは異なるかもしれないが、今一度歴史的評価を試みたい。

(つづく)

(参考文献は最後に記します)

現役時代の思い出話

杉浦　崇

その1　にわか船長航海記

私は1997年の2月、小型船舶1級の免許を取得した。船舶の構造、法規、気象などの机上の試験終了後、雪の降る1月の大阪湾上で20トンのクルーザーに他の受験生と共に乗船し、前進、後進、旋回、船からの落下者模擬救助、着岸等の実技試験を受け、念願の合格となった。これも単身赴任のなせるわざである。前年10月の赴任後、退屈な土日を有効に使おうと考え行動に移した。12月には小型船舶4級の免許を取得し、勢いに乗ってその後の土日をほとんど全部つぶして1級の免許を取得した。なぜ船舶免許を取得しようと思ったかと言えば、20年近く造船所で船舶の営業に携わっているものの、設計や建造に直接携わる訳ではない営業マンとして、船舶をさらに身近に感じたいと願ったからである。操縦できれば楽しそうだという思いももちろんだ。その後、船舶に関係が無い訳でもないと、さらにアマチュア無線4級を4月に、3級を8月に取得し、10か月の間に4つの資格を取得した。種明かしをすると、どれも合格率90％以上の易しい試験ではあるが、潰した土日の数は馬鹿にならない。単身赴任ならではのチャレンジである。

これらが一段落すると、やはり次はなんとか自分で船を操縦したい、そんな思いにかられた。小型船舶1級取得と同時に「日本船舶職員養成協会」の会員となっており、3か月毎に送られてくる刊行物には各種セミナーの案内が掲載されている。7月にはエンジンセミナーを受講した。模型ではない実際の船舶のエンジンを使っての点検整備の実習である。こうしたことが、いっそう海への思いを掻き立てる。そうして参加したのが、9月6日と7日の1泊2日の大阪、小豆島ナビゲーションセミナーであった。9月6日朝7時、リュックサックに着替えと昼の弁当を詰めて逆瀬川にある会社の単身寮を出発。1時間半後にはニュートラム（大阪の自動運航路線）のフェリーターミナルで下車、歩いて10分足らずのところにある「日本船舶職員養成協会」のビルに到着。参加者は当初の20名の予定が1名欠けて19名。事前に払い込んだ参加費用4万2千円の他に、この日、ホテル代と翌日の昼食代の1万2千5百円を徴収され、かなりの出費となったが、こういうチャンスを逃がすまいと決めているので、心の痛みはそれほどでもない。この日、世間はダイアナ元皇太子妃の葬儀、マザーテレサの死去、橋本総理の訪中、山口組の捜査とあわただしかったことを夜のニュースで知る。

さて、会場での簡単な説明会の後、にわか船長19名は2班に分かれ、近くの岸壁に係留されている小型クルーザー「青雲19号」と「青雲22号」（各々全長19メートル、19総トンである）に分乗。講師の先生（教官）が各船に2名ずつ付いて指導する。私の乗った22号は参加者10名、内3名は女性船長である。女性の年齢は70歳、50歳、そして44歳。男性も68歳、55歳、53歳、46歳が2名、37歳、33歳と思いのほか高齢であり、70歳のおばあちゃんが1級の免許を持ってこうしたセミナーを楽しみに一人で参加してくることには感心してしまった。

乗船すると、教官の指示でまずエンジンルームの点検。続いてキングストンバルブ、海水ストレーナー（濾し器）、海水Vベルト、エンジン取り付けボルト等々、順番に実施。点検終了後、次は操舵室のテーブルに広げられた海図に、大阪から明石海峡を越えて小豆島の南の玄関、内海湾までの進路をコンパス図を睨みながら皆で書き込む。そして、愈々エンジン始動。2人一組で、1人がステアリングホイール（ハンドル）を握り、もう1人がゲージをウォッチする。これを各人10分ずつ行い、20分経過すると次のチームが担当する。試験の時以来乗船していないので何をすべきかすっかり忘れている。

時間は朝の10時、第1チームが緊張しながら徐々にスピードを上げ、曇り空の大阪南港を出港した。エンジンの回転数も、五百、千、千三百と上げて行き、最終的には千六百回転が目標。冷却水温度は80度前後で一定したが、排気温度が450度の規定を越えて480度近くまで上がった為、回転数は途中千六百から千五百に落とした。午後1時過ぎ、明石大橋の下を通過した頃から雨も降り始め視界もやや不良となる。衛星との通信により船の位置を測定するGPSの調子も途中から思わしくなくなり、レーダーと目視を頼りに航海、教官もやや緊張したおももちで海図とレーダーを見比べている。前を行く19号とは船舶無線で連絡を何度も取り合う。こちらの教

官の話では、19号はドックでの点検を終えたばかりで足が速い。こちらは20日間ほど岸壁に係留してあった為、藻や牡蠣が船底についており、船足が遅い。その上、原因不明の排気温度の上昇による減速もあると。結局先行する19号は視界から消えてしまった。ちなみに「地球は丸いので、わずか5キロ先は地平線の向こうに隠れてしまう」ということも体得した。その後、我々は進路を西南西に取り、播磨灘を時速12ノット程度でゆっくりと航行した。明石海峡から小豆島に向かって航路標識が数マールごとに設置されている。最初にレーダービーコン、続いて6番ブイ、5番ブイと順番にレーダーと目視で探しながら1番ブイまでたどり着き、夕方の4時近くになり、小豆島の内海湾に入った。教官の見事なリードでマリンリゾート「リハク」というホテルの桟橋に1回で着岸に成功し（我々だけで行うとぶつけてしまう心配もある）、軽い船酔いと疲れもあったが、ホッとすると共に満たされた気分になった。

小豆島観光としゃれこむ暇はなかったが、各人2人部屋に振り分けられ、夜の6時からは海に突き出したホテルのテラスでバーベキューパーティー。お互いすっかり打ち解けて部屋に戻った。この日、同室となったのは先行した19号に乗船していた72歳の男性Aさんで、話をしているうちに、私と同じ会社の、しかも同じ船舶部門のOBであることがわかった。話もはずみ、私はすっかりご機嫌で寝てしまった（と思った）のだが、それからが大変であった。私は夜の11時には眠れぬ人となっていた。Aさんご本人の為に釈明しておくと、「自分は大のいびきかきで、わざわざ個室を頼んだが満室で断られた。また、効き目の定かでないいびき止めの薬を飲むなど事前に打てる手は打ったが、もし、うるさかったら申し訳ない」と言われていた。わたしはたかをくくっていたが、後の祭り。朝までほとんど眠れず、明け方からはホテルのロビーのソファーで仮眠をとる羽目となった。

翌9月7日、朝8時、全員集合で朝食。船酔いしないようにと朝食は軽めにした。直後に教官から次の説明があった。「淡路島の東岸では、風速18メートルの南風が吹いており、波高も2メートルを超える。したがって、帰路は鳴門海峡を通過して帰る予定航路は、しけが予想され危険な為、より安全な明石海峡ルートで帰る方がベターだがどうか」と。私も鳴門海峡を通ってみたかったが、他の参加者同様、もちろん教官に賛同した。天候は前日よりも良く、視界は良好であったが、明石海峡に近づくにしたがい、波が荒くなり、途中から波高1メートル近い波に船体の揺れも大きくなり、元々船酔いし易いたちであったところに（そんなことは今回の乗船まですっかり忘れていた）、睡眠不足がたたり、完全に酔ってしまった。これが鳴門ルートであれば、さらにひどいことになっていただろう。私は、海図も操船も途中から放棄して、キャビンの外の舷側で、一時も早く大阪湾に着いて欲しいと、変化する景色のスピードの遅さにいら立っていた。

キャビンの中は、3人の女性船長が楽しげに弁当をひろげ、なんと最後には、遠足よろしくお菓子を皆に配ってまた食べていた。とはいうものの、私も、また次の乗船が待ち遠しくないという訳ではないのである。

その2　横浜造船所滞在記（新入社員顛末記）

私が三菱重工業の新入社員として横浜造船所（生産現場）に赴任したのは1975年の4月のことだった。だだっ広い敷地に鉄骨の山があちらこちらに散らかっている造船所の風景は当初さびしげに見えた。しかし「人の声がしない」と、「場違いな世界に降り立った」という印象を与えるそんな敷地の中に、活気に満ちた生活が広がっていることを発見するのにはそれほど時間はかからなかった。

横浜駅からわずか一駅、高島町の駅を降りるともうそこは造船所であった。本館1階が船舶営業部、私はその新造船営業課という部署に配属された。当時の日本は造船王国であり、世界一の生産高を誇っていた。中でも三菱重工業は長崎、下関、広島、神戸、横浜と五つの造船場所を抱える日本一の造船所であり、したがってそれは世界一の造船所ということであった。

十数名の同期生は本社での数日の研修の後、この横浜の地でさらに研修を受けた。「造船所というのは10年に一度儲ける。残り9年間はぺんぺん草が生えているところ」との幹部の訓話は、新入社員には「ショッキングな失言」と思われ、その後も酒の肴となった。しかし、このことは、実に大いなる真実を含んでいることを知ることになる。元々船舶の建造は、耐用年数の長い船舶の周期的な代替需要と景気循環のサイクルの複合的要素によって支えられていると言って良い。タンカーやバルクキャリアー（バラ積み船）のこうした動向に対応するため、また、新たな分野開拓の為、LPG船、LNG船、豪華客船など三菱重工業はニッチな世界を模索して行った。造船は人件費の比率の高い産業だ。人件費が上がればすぐに発展途上国に追いあげられてしまう、そんな産業でもある。

入社当時の新造船営業部は、部長の下に多くの元気なメンバーがいた。その後短期間の間に輪はどんどん広がることになる。昼食は、現場の重労働をしている作業員に合わせて、ご飯の入った弁当箱とおかずの入った弁当箱の2段構えであった。当時船鉄管理部長をされていたK氏がお客さんを接待する前に、これを全部平らげそれ

からフランス料理をフルコースで食べたという話は伝説として残っている。会社の弁当は西に行くほどまずくなるという話もあり（今はそんなことはないと思います）、横浜の弁当はカレーや、夏場の鰻など楽しく喫することが出来た。諸先輩はあっという間に、この弁当を平らげると紙麻雀に熱中していた。自分がその後、年間５０回以上麻雀に明け暮れるようになろうとは（それも結構楽しんで）当時は想像だにしなかった。

造船所の船舶営業の仕事は本社が受注した船舶が、造船所で建造される時の客先（船主）と造船所各部門の繋ぎを行うことと言ったらわかり易いであろうか。造船所では設計部が船舶の各部を設計し、造船工作部が建造する。これを船主の監督官と船級協会が監督する。こうした仕組みをまず覚えることから始まる。興味深かったのは、設計と現場がそれぞれの主張を譲らず、営業がいわば調停役として入ると比較的すんなりと纏まるという構図である。当時の営業の諸先輩につわものが多かったのだろうか。私の一番の印象は最初に担当したインドネシア向けの尿素運搬船の担当を任されたことであった。世界銀行融資のこの船はアメリカのコンサル会社の設計によるもので、それを元に詳細設計を造船所で行い、その図面の承認申請をせっせとアメリカに送った。これら詳細設計図面につける解説を設計部が英文で書いてくる。この英文を添削するのも営業の仕事の一つであった。当時の計画設計課長の書く英文が重厚な文章であり、これを実務的な文章に変更しようとして新人の私が意見をすると時々もめたこともなつかしい。アメリカの監督官は、当時家賃月額が５０万円近くしたマンションに住むことになる。この住居を探すのを手伝うのも営業の仕事で、社有車に監督官を乗せ山の手のマンションや昔からの一戸建てを見て回った。横浜には、お手伝いさんのための部屋を設えた古い家が何件もあるのだと妙に感心した。他方の発注者であるインドネシアの会社の監督官は、コンサルに対しては主筋であるはずなのに、造船所の宿舎（ぼろアパート）に夫婦で入った。日本人の若い男性がアメリカ人女性と手をつないで町中を歩くのを見ると新鮮で拍手を送ったそんな時代でもあった。

船舶は完成間近には必ず海上試運転を実施する。あらかじめ頼んでいる軽飛行機からカメラマンが円弧を描く船舶の航空写真を撮る。この試運転は現場にとっては真剣勝負だ。横浜港を出港し、相模湾に向かう。最大スピード、舵の効き具合、振動等々の試験を実施する。営業は、関連会社のダイヤ食品にお願いし、お客様とそれに付き合う造船所の幹部の為の食事を手配する。だいたい泊りの試験となるので、食事はたっぷり積んで行く。監督官等の客筋は食べる場所も船の完成後のラウンジとなるよ

うな場所が選ばれる。他方、設計、現場のメンバーはまだ、電線等があちこちに転がっているデッキ下のスペースで、言ってみれば味噌汁とたくあんで頑張っている。私の役目は客用のウイスキーを何本か下で働く社員に届けることでもあった。こちらのメンバーもかわいがって貰っている諸先輩ばかりであり、試運転のデータに関する監督官の反応などもせっせと下に情報提供に行く。こんな塩梅で、和気あいあいと、試験数値を確認して貰うのも現場営業の仕事であった。

我々の横浜の新造船営業課の３年先輩のＯ氏が、本社の営業企画部に転勤の後、各事業本部の中で最初にＭＡＣの普及に努めたことも忘れられない。Ｏ氏は、初めてのパソコン導入に当たり、タクシーで家に持ち帰り徹夜で研究し、朝も悠然とタクシーで出社するといった天才肌の先輩であった。今でもゴルフの名手として鳴らしておられる。その仕事を継いだ私はまだ導入したばかりのこのＭＡＣ（パソコン）を活用し、ファイルメーカーのソフトを導入し、船舶のトン数別、年代別などの需要分析を自ら行ったことも懐かしい。しかし、そんなことも今では当たり前のことになってしまった。時代の移り代わりの速さにも驚くばかりである。

横浜造船所はまた、吉川英治や内館真紀子氏をはぐくんだ造船所でもある。そうした文学者を輩出したことは誇らしい。横浜の船舶営業のメンバーは、その後も形を変えあちらこちらで活躍の場を求めて散っていった。それだけではない。時は変わり造船所はぺんぺん草の住処どころではなくなってしまった。この一世代の間に造船所は横浜から消えてしまい、近代的な商業施設の区画へと生まれ変わってしまった。

以上

雑俳十六句

宇井偉郎

走馬灯輪廻転生糸車
生かされているなと思ふ梅雨鯰
蝶の道竜飛岬で見失ふ
手の甲の反りしなやかに風の盆
遠泳の上級コース鳴門渦
夏の日の幻満鉄アジア号
夜漁りや鱸も風の遠江

松虫を放ちて夜の庭となる
呟きを蛍袋に聞かれたり
盆波や十三の砂山水主溜
蛙声聞く都県境の町に住み
雨上り朝一番の四十雀
流るものみな不知火になる定め
紫荊紅き五弁の尼の寺
蝶の道辿り丹沢縦走路
ユッカ咲く師団司令部ありし跡

短歌

春に寄せて

鈴木興

春の海

盲目の作曲家・箏曲家宮城道雄の「春の海」を取り上げてみました。

春の海桃の花咲く瀬戸内の　尺八琴の音波（ネ）のまにまに
洋々と陽のうららかな春の海　光戻らぬ道雄の眼にも
春の海ひねもすのたり波静か　尺八琴の妙（タエ）なる調べ

春うらら

金色に輝く庭に紋白蝶　一匹が来て二匹となりて
　春の陽を浴びた庭が金色に輝いて
長仙寺花祭りの日訪ねしは　甘茶で祝う我れの生（ア）れし日
湯河原の春待ちわびて咲く梅は　湯の香負けじと匂い立つなり

花

愛し君洋紅色の貴婦人の　枯れ朽ちし薔薇君何処へ行きしか
我が庭の山茶花椿仲の良き　散りし姿の違いて寂し
　山茶花と椿は散り方の違いで分かる
浜離宮女子（オナゴ）等の摘む白つめ草　花冠となり花となるらし
　地味な白つめ草を三人の女子大生がビニールシートに座り花冠を編む

君に問ういずれが好きか梅桜　春待つ女と春踊る女

山茶花に降り落つ松葉涙めく　手摘み取りて涙拭きおり
赤松の下の山茶花に松葉降り落ち、泣いたように

京都の春

山科の疎水の桜澄みし空　老いも若きも頭にひとひら

花吹雪幾多郎乗れぬ花筏　哲学の道は春爛漫なり
哲学者　西田幾多郎

落柿舎で奮い立つなり我が心　萌えいずる紅南天の実の

嵐山着物姿の艶やかで　桜見るより我れを見よとに

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の一品〈十三〉

「吉祥天女像」　模写　一幀

「吉祥天女像」は、奈良薬師寺に安置されている見目麗しい天女像である。その天女像の模写一幀が、昨年私宅に贈られた。例により、もと美術商であった友人I氏がお持ち下さったものである。

I氏は相変わらず悠々の生活で、目利きでもあるので、美術骨董店を見廻っては、優良品を掘出すことを楽しみにされている。目に適う西洋美術品は自宅へ、また和物は当方に向けて下さるのである。当然のこと、I氏に負担が掛るのであるが約50年間に及ぶおつき合いの中で兄弟同様の間柄となってをり、好意に甘えさせてもらっている。

I氏は若くして会社を興し、頻発する交通事故防止の画期的な安全装置を考案して企業化に成功した。交通事故は格段に減ったという。その功績について、アメリカの経営思想家P・F・ドラッカーは「イノベーションと企業家精神」という著書の中でI氏を高く評価している。

I氏は、この事業は内外共に更に伸びると見て大企業に委ねるべきと考えて、譲渡を決断された。そして暫く休んで、趣味であった美術骨董商に転業された。

昭和53年中ごろだったと思うがI氏は六本木に開店された。当時、赤坂支店勤務だった私は趣味と取引勧誘の両面で親しくさせて戴くことになった。氏の方針は内外の大手美術館相手に高額な美術品を納めることだった。そして美術商としても大成功され、文化庁の購入委員迄勤められる程になったのである。お茶道具や細かい品は小売りに回され、私の方にも声がかかった。現在我家が

持つ茶道具の優品はその殆どが当時のI氏の手を経ている。

I氏は年齢を重ねたので美術商も盛業裡に閉じて悠々の生活に入られた。

2つの業体で成功したのは、氏の並々ならぬ工夫と努力を重ねられた結果と思うが、氏は支援者があったお陰と謙遜している。事実氏は人を魅了する人徳を備えている。また強靭な精神力と頑健な身体の持主でこの間難病をも克服している。

あらゆる面で私より秀れておられるが、それでいて私を立てて下さる。中高年になってからの心を許せる友人を得たことは大変ありがたいことと感謝している。

さて、前置きが長くなったが、本題に移りたい。今回の天女像で明らかな点は、

一、奈良薬師寺に祀られている、国宝「吉祥天女像」の模写絵であること。

二、作者名は「辛島一誓（からしまいっせい）」。右下にサインと押印がある。

三、持主だった家（手離した方）は小松正衛（こまつしょうえい）さんである。

以上の三点のみであるが、模写画とは云え厳かな中にえも云われぬ美しさがあり、急ぎ仔細などにつき調べたいものと思い立った。

先ず「模写」とは。

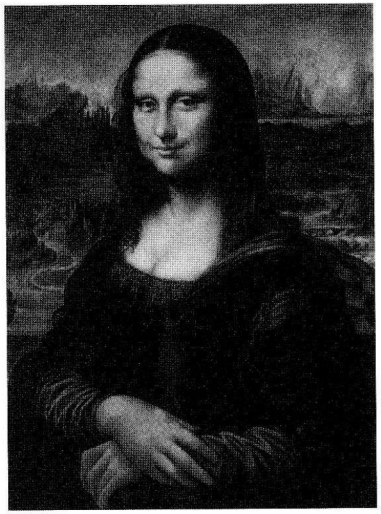
(一)

「広辞苑」によれば「模写」とは、「実物そっくりにまねてうつすこと。またそのうつしとったもの」とある。

それでは芸術家たちは何故模写に意欲を燃やすのであろうか。私は三つのパターンを考える。

一、先人や師匠の名作を写して、自身の技術を磨こうとするもの。例として、私の旧制中学（現西尾高校）の後輩「斉藤吾朗」は、パリ留学中、ルーブル美術館に懇請して、日本人として初めて「モナリザ」の模写に成功した。その効果もあってか、今や独立美術協会の一員となり活躍している。コロナ禍の前、度々独立展を観に

「斉藤吾朗」の模写絵　モナ・リザ



行ったが文化勲章受章者の「絹谷幸二」の絵と肩を並べて彼の絵が飾ってあり驚いた。

「斉藤吾朗」の写したモナリザの写真をお示しするので出来栄えを観て欲しい。

二、美術品を常設で飾るには、あまりに貴重な存在であるため、模写品をもって代替する場合がある。後で述べるが吉祥天女の場合も同様のケースで模写品が必要となる。

三、初めから贋作を意図して模写する場合である。江戸時代、大名たちは雪舟の絵を所持することをもってプレステージとしたが、簡単に雪舟の絵が転がっている訳はないので写しをもってカバーした。後の世に一と三の模写が混入して贋物が横行することになったらしい。因みに雪舟の絵や良寛の書で市中に流れている物は99.9%が贋物だと云われている。

しかし乍ら私はたとへ模写であっても贋物と云われるものであっても、鑑賞に耐える出来の良いものは存在価値があると思う。

「北大路魯山人」作の織部の鉢や、「荒川豊蔵」作の志野茶碗などは先人の残した名作をヒントにして創られたものと思うが、古典を凌駕する程のでき栄えと、個性ありとして高い評価を受けている。

薬師寺は天武天皇の発願により始まる奈良の古刹である。創建は白鳳時代にさかのぼり一三〇〇年以上もの長い年月幾多の災害をのり越え、法灯を守り伝えてきた。失われた伽藍復興という一大事業は写経による浄財喜捨によって今日迄続けられている。

私は残念乍ら薬師寺に参詣したことは無いが、若い頃、当時の高田管長が、三越本店の「佐藤玄々」作天女像の許でまごころ説法を続けられ、聞きに行ってなにがしかの寄付をさせていただいたことがある。説教の内容は忘れてしまったが名僧知識であるとの印象が強かった。尤も私はその後のアトラクションである、「ボニージャックス」の演奏に期待した無信心な男であった。

さて、薬師寺には、七三〇年（天平二年）造立の三重塔を始め、金剛薬師三尊像、金剛聖観音像、吉祥天女像など白鳳天平時代のすぐれた美術品を蔵している。

吉祥天女像は貴重な奈良期の絵画でもあり正月三ヶ日のみ金堂に飾られるが、日頃は秘仏とされ、模写絵が之に替ると云う。事務局の方にただすと、今飾られているのは平成の模写であり、過去に模写を許可したことは幾度もあると云う。従って模写絵が市中に出廻っても何等不審な点はない様である。因みに「辛島一誓」の名前を尋ねてみたが心当たりは無いとの由。

薬師寺からの盗品ではないとの確信を得て一安心した。

次に模写絵の筆者である画家「辛島一誓」について調

べてみる。私はインターネットの使い方を知らない。そこで我家にある美術名典一九九五年版を開くが全く記載がない。思いついたのが、「まんじ誌」の同人である「水谷嘉弘」氏である。氏は銀行出身であるが、美術関係にも極めて造詣の深い異色の存在である。氏に相談すると早速「辛島画伯」の詳しいデーターを送って下さった。感謝して要約する。

「辛島一誓」（一九二二―二〇〇六）は、岡田三郎助主宰の本郷絵画研究所にてデッサンや油絵を学び、日展、光風会展、日本水彩展、国際展などで入選。洋画家として活躍する一方で仏画や水墨、木彫にも試みたほか、栃木県益子町にて陶芸の技術を習得し、工芸家としても評価されている。

資料中に作品の写真も載っており、神護寺所蔵の「伝源頼朝像」の模写作品も添えてある。頼朝像の本歌は、吉祥天女の像と同じ国宝である。同じ時期の作品ではなかろうか。

「辛島一誓」はいわば無名に近い画家であったのであろう。有名無名はその時々の運命によって左右される。無名であっても技術の秀れた作家は存在する。「辛島画伯」は不遇な作家であったが、高い技量の持主であったに違いない。

吉祥天女像の模写絵と共に、前の持主の著書であると云う一冊の本が届けられた。みると題名は「古美術巡礼」著者「小松正衛」とある。さては骨董集収では大先輩である小松さんの愛玩物であったかと驚いたが、彼の慧眼を知っているだけに更に安心した。

小松氏は一九一七年山形県生まれ、文芸春秋に入社、取締役営業局長に迄進まれた。多忙な日々を送るなか、寸暇を惜しんで骨董の収集と研究にはげんだ。収集品は種類、時代国を問わず多岐にわたり、その数は膨大であったと云う。また雑誌などへの骨董に関しての執筆も多く、出版物も幾冊かある。私は以前から氏の著書を持ってをり、読み返してみても「吉祥天女」に関する例示は全くない。オープンにしたくなかったのであろうか。

氏の骨董美術の師匠は「料治熊太」と云われる。「料治熊太」が私淑するは、「南京新唱」を刊行するなど奈良をこよなく愛した「会津八一」であったからその線からこの模写絵を入手したとも考えられるが、私の思いすごしか。

小松さんには二、三回お目にかかったことがある。当方の赤坂支店勤務の頃、文芸春秋社との取引を進めたく、手掛かりとして骨董マニアの線から話を進めてみたが当時の私の骨董の微力では全く太刀討ちできず、名刺交換のみで終ってしまったことは返す返すも残念なことあった。その時の印象では温厚な人柄を感じられた。小松さんの書かれた文章の一節を紹介致したい。

「サラリーマン骨董のすすめ」

一体、骨董蒐集というのは、美しいものを求めることと、あくなき知識の追求だと思うんです。ひとつのものを買うと、本物かどうか、時代は何時かといったことを勉強する。生きた歴史の勉強を、楽しみながら、しかも自分からすすんでやるようになるというのは、他の道楽ではあまりないことで、しかも掘出しでもしようものなら大変です。ほんとは掘出しというのは、好いものを丁度好い値段で買うことをいうと思うんですが、きちんとしたものさえ買っておけば、使ったり、飾ったりして楽しんだうえに、財産として残るという一石三鳥ぐらいの楽しみができる。「飲む、打つ、〇う」のように浪費一辺倒で何も残らない道楽と比べたら、こんな楽しい、しかも有益な遊びはないと思うわけです。「古美術巡礼」より

(二)

我家へ届いた「吉祥天女像」は、額縁や裏貼りに傷みがあったので業者に預けて修理してもらった。国宝である薬師寺の本尊は拝観することはできないので写真で見る他ない。

京都国立博物館の資料による「天女像」の説明書が手に入ったので転記させていただくことをお許し願いたい。

吉祥天女像　一幀

奈良県　薬師寺蔵

麻布着色　五三・三×三二・〇

奈良時代

吉祥天はインド古代神話の中で重要な神。ヴィシュヌ神の妃であったが、仏教にとり入れられて、福徳を司る女神として古くから尊敬され、その遺作は多い。その姿はおおむね唐の貴婦人の姿でつくられ、右手には施無意に描き、左手は如意宝珠をもつ。本図はこの姿に近い。

描写はきわめて精緻である。殊に肩から長く垂れた布の薄絹が繧繝彩色の美しい衣裳を透かして静かに風に翻る動的な表現、三日月の眉に豊満な顔立ち、神よりはむしろ唐風の美女そのものを描こうとしたといった方がふさわしい。当時の仏画の数は少なく、貴重な遺例である。

微力な私では充分な説明ができないので、右の解説と、出来の悪い素人写真を参考にしていただきたい。「辛島画伯」の模写絵は限りなく本歌に近いできとなっている。

べてみる。私はインターネットの使い方を知らない。そこで我家にある美術名典一九九五年版を開くが全く記載がない。思いついたのが、「まんじ誌」の同人である「水谷嘉弘」氏である。氏は銀行出身であるが、美術関係にも極めて造詣の深い異色の存在である。氏に相談すると早速「辛島画伯」の詳しいデーターを送って下さった。感謝して要約する。

「辛島一誓」（一九二二―二〇〇六）は、岡田三郎助主宰の本郷絵画研究所にてデッサンや油絵を学び、日展、光風会展、日本水彩展、国際展などで入選。洋画家として活躍する一方で仏画や水墨、木彫にも試みたほか、栃木県益子町にて陶芸の技術を習得し、工芸家としても評価されている。

資料中に作品の写真も載っており、神護寺所蔵の「伝源頼朝像」の模写作品も添えてある。頼朝像の本歌は、吉祥天女の像と同じ国宝である。同じ時期の作品ではなかろうか。

「辛島一誓」はいわば無名に近い画家であったのであろう。有名無名はその時々の運命によって左右される。無名であっても技術の秀れた作家は存在する。「辛島画伯」は不遇な作家であったが、高い技量の持主であったに違いない。

吉祥天女像の模写絵と共に、前の持主の著書であると云う一冊の本が届けられた。みると題名は「古美術巡礼」著者「小松正衛」とある。さては骨董集収では大先輩である小松さんの愛玩物であったかと驚いたが、彼の慧眼を知っているだけに更に安心した。

小松氏は一九一七年山形県生まれ、文芸春秋に入社、取締役営業局長に迄進まれた。多忙な日々を送るなか、寸暇を惜しんで骨董の収集と研究にはげんだ。収集品は種類、時代国を問わず多岐にわたり、その数は膨大であったと云う。また雑誌などへの骨董に関しての執筆も多く、出版物も幾冊かある。私は以前から氏の著書を持ってをり、読み返してみても「吉祥天女」に関する例示は全くない。オープンにしたくなかったのであろうか。

氏の骨董美術の師匠は「料治熊太」と云われる。「料治熊太」が私淑するは、「南京新唱」を刊行するなど奈良をこよなく愛した「会津八一」であったからその線からこの模写絵を入手したとも考えられるが、私の思いすごしか。

小松さんには二、三回お目にかかったことがある。当方の赤坂支店勤務の頃、文芸春秋社との取引を進めたく、手掛かりとして骨董マニアの線から話を進めてみたが当時の私の骨董の微力では全く太刀討ちできず、名刺交換のみで終ってしまったことは返す返すも残念なことあった。その時の印象では温厚な人柄を感じられた。小松さんの書かれた文章の一節を紹介致したい。

「サラリーマン骨董のすすめ」

一体、骨董蒐集というのは、美しいものを求めることと、あくなき知識の追求だと思うんです。ひとつのものを買うと、本物かどうか、時代は何時かといったことを勉強する。生きた歴史の勉強を、楽しみながら、しかも自分からすすんでやるようになるというのは、他の道楽ではあまりないことで、しかも掘出しでもしようものなら大変です。ほんとは掘出しというのは、好いものを丁度好い値段で買うことをいうと思うんですが、きちんとしたものさえ買っておけば、使ったり、飾ったりして楽しんだうえに、財産として残るという一石三鳥ぐらいの楽しみができる。「飲む、打つ、〇う」のように浪費一辺倒で何も残らない道楽と比べたら、こんな楽しい、しかも有益な遊びはないと思うわけです。「古美術巡礼」より

(二)

我家へ届いた「吉祥天女像」は、額縁や裏貼りに傷みがあったので業者に預けて修理してもらった。国宝である薬師寺の本尊は拝観することはできないので写真で見る他ない。

京都国立博物館の資料による「天女像」の説明書が手に入ったので転記させていただくことをお許し願いたい。

吉祥天女像　一幀

奈良県　薬師寺蔵

麻布着色　五三・三×三二・〇

奈良時代

吉祥天はインド古代神話の中で重要な神。ヴィシュヌ神の妃であったが、仏教にとり入れられて、福徳を司る女神として古くから尊敬され、その遺作は多い。その姿はおおむね唐の貴婦人の姿でつくられ、右手には施無意に描き、左手は如意宝珠をもつ。本図はこの姿に近い。

描写はきわめて精緻である。殊に肩から長く垂れた布の薄絹が繧繝彩色の美しい衣裳を透かして静かに風に翻る動的な表現、三日月の眉に豊満な顔立ち、神よりはむしろ唐風の美女そのものを描こうとしたといった方がふさわしい。当時の仏画の数は少なく、貴重な遺例である。

微力な私では充分な説明ができないので、右の解説と、出来の悪い素人写真を参考にしていただきたい。「辛島画伯」の模写絵は限りなく本歌に近いできとなっている。

「辛島一誓」模写絵　吉祥天女像



国宝　吉祥天女像



薬師寺では、正月三日間金堂にこの絵を安置して、悔過の法会が営まれるという。悔過とは犯した罪や過ちを悔いることであるが、更に念じれば福徳を授けて下さるとのことであり、有難いご本像である。

この法会は、形を変えて宮中や畿内七道諸国の国分寺に儀式として残っているという。従ってご本尊の模写が容易に許され結果として市中に出回ることもありと推察される。

さて、私は元来無神論者に近い考え方の持主であるが、敬神崇祖、家にまつわる神仏に対する信心は怠っていないつもりである。「吉祥天」の模写絵については、仏画として崇めるか、美術品として眼の保養とするか迷うところであるが、現在では仏壇の脇床に飾って、日々拝むのを日課として心の安らぎを得ている。

終りに私事で恐縮だが蛇足を加えさせていただく。

私方の孫娘は適齢期をすぎようとしていたが、なかなか縁談がまとまらない。三戸岡夫人様などからも良い方をご紹介願ったのだがご縁がなかった。孫の気持ちとして婿とりという難しい条件を忖度していたかも知れないが。

しかるところ昨年好きな方と出会うことができて今年結婚することができた。嬉しいことに当方の名字を名

乗ってくださるとのこと。

験を担ぐ訳ではないが、念ずれば福徳を与えて下さる「吉祥天」を拝んでいる恩恵の故ではないかと妻と共に喜んでいる次第である。そして福の神を届けて下さったI氏に改めて感謝申し上げたい。

尚、拝観して福徳に与かりたいと願うお方はご遠慮なく我家へお立寄り下さい。

終

吾輩は紙魚ロボである　その二二

永畑俊三（永田俊一）

一、三つの出口（二〇二五年一月一五日～三月二四日）

（一）ウクライナ・ガザ

一月一五日、エジプト・カタール・米の仲介でイスラエルとハマスがガザ停戦と段階的な人質の解放で合意した（一九日発効）。第一段階で六週間の戦闘停止しハマス側から人質一〇〇人の内女性ら三三人を解放、イ側はパレスチナ囚人を解放、恒久停戦に向け第二・三段階の内容を継続協議、第二段階では残る人質の解放やイ軍のガザ撤退、第三段階で残る遺体返還や復興に着手する。

トランプ氏が七日、ハマスが人質を解放しなければ「中東に地獄が訪れる」と脅したのが圧力となり事態が動いたが、和平実現に向けては多くの課題。

一八日、イ政府は停戦合意の閣議での正式承認を発表。一九日、三時間遅れで戦闘停止し停戦に入った。エジプトとの境界から支援物資搭載のトラックがガザに入り始めた。夕方人質三人が赤十字国際委経由で解放された。

二二日、トランプ大統領はロシアにウクライナ侵略について「今すぐ決着をつけ、この馬鹿げた戦争を止めろ。悪化する一方だ」と停戦を要求、プ大統領に「すぐに取引しないなら、高水準の関税、制裁を科す以外に選択肢はない」と警告した。同時に「ロシアを傷つけたい訳ではない。ロシア国民を愛しているし、プ氏とは非常に良好な関係を築いてきた」とし、停戦は「簡単な方法でも難しい方法でも出来る。今こそ取引の時だ」と訴えた。

二五日、ハマスは新たに四人の人質を解放、いずれも女性兵。イ側もパレスチナ収監者約二〇〇人を解放。

二八日、プ大統領は「パトロン達からのお金なしには生存できないウクライナの、主権はないも同然だ」とし

ゼ大統領を交渉相手と認めず「米欧が平和を実現したいなら簡単だ」と述べ、併合宣言したウ四州からのウ軍撤退、ウのＮＡＴＯ加盟断念などを求めた。

三一日、ウ報道官は、ロシア西部クルスク州に派遣された北朝鮮兵が三週間姿を見せておらず、多くの死傷者が出た為一旦撤退した可能性があると明かした。

二月に入り一日、ゼ大統領は「ロシアと米国がウクライナ抜きに話し合うのは誰にとっても危険だ」と述べ、停戦を巡る絶対的条件は、二度とロシアの攻撃を受けることがない「安全の保証」を得ることだと、改めて強調した。外交交渉による全領土の返還等も求めている。「安全の保証」については、英仏が平和維持軍の派遣検討をしているが、先月二一日のダボス会議でゼ大統領は「最低でも二〇万人規模」が必要と述べている。

三日、米大統領は、米のウクライナ支援と引き換えに、レアアースの提供を求める取引案を明らかにした。この日ケロッグ陸軍退役中将を担当特使に任命した。昨年末ゼ大統領が公表した和平案の中の項目でバイデン前大統領との間で協定を結ぶ予定だったがトランプ大統領就任を待って延期されていたもの。同日英首相はＥＵ非公式首脳会議で、英ＥＵ間の新たな安全保障協定の締結を提案。安保協力を糸口に貿易等経済面も含め関係修復に繋げる狙いがある。フォンデアライエン委員長は話し合う用意があるとし、同会合では仏大統領からトランプ関税に報復措置を取るべきとの考えが示された。

四日、米イ首脳会談後の共同記者会見でト大統領は、ガザ全住民（170～180万人）をガザ以外に移住させ、戦後ガザは米が統治し再建を担う、一方的な復興案を打ち出した。ネ首相は「注目に値する、歴史を変える可能性がある」と応じた。

五日、パ自治政府アッバス議長は「深刻な国際法違反だ」と指摘、ハマスは「ガザの人々は許さない」と反発、トルコ外相は「議論に値しない」、サウジは「パレスチナ人の権利の侵害を明確に拒否する」等一斉に批判。

九日、ガザを南北に隔てる要衝の「ネツァリム回廊」からイ軍部隊が停戦合意に沿って撤退した。同日人質になっていたタイ人五人が帰国を果たした。

一〇日、ロ報道官によると九月三日中国で開かれる抗日戦争勝利八〇年式典にプ大統領が参加する。習主席は五月九日のロシアで開催される対独戦勝八〇年式典へ招待を受けた。同日米大統領は、停戦合意の破棄を示唆し、人質解放を延期するとしたハマスに「一五日正午」迄に人質全員（合意では三三人）を解放するよう求め揺さぶりをかけた。第二・三段階は開始から一六日目をめどに開始することになっているが進みが遅いことに苛立ちもあり、住民の移住構想を進める姿勢も強調、周辺アラブ諸国にも援助削減もちらつかせ圧力をかけた。

一一日、ヨルダンのアブドラ国王と会談した米大統領

は、ガザの住民受け入れを迫ったが、国王は癌などを患う二千人程の子供を早期に受け入れると表明するも、住民移住については断固反対を表明した。

一二日、米ロ首脳による電話協議で、戦争終結に向けた交渉を直ちに開始することで合意したと、ト大統領が明らかにした。遠くない将来サウジで対面会談するとの見通しも示した。同日ゼ大統領は、米大統領と「平和を実現する機会について長時間話し合った」と明らかにした。プ大統領との協議の詳細の説明を受け「米国と共にロシアの侵略を阻止し永続的で確実な平和を確保するための次のステップを計画している」とし、「今後も連絡を取り合い、協議を計画することで合意した」とX（旧ツイッター）に書き込んだ。同日NATO加盟国の国防相らがウクライナへの支援を調整するウクライナ支援会合がNATO本部で開かれた。ト政権誕生で継続が危ぶまれたが、ヘグセス米国防相は継続的な支援を表明した。新たに数十億ドル相当の軍事支援も決定された。

一三日、ハマスは延期するとしていた一五日の人質解放を実施し、イとの停戦を継続すると発表した。イに求めていたガザへの物資搬入などについて仲介国のエジプト・カタールが保証したためとしている。

同日、NATO国防相会議で米ロが交渉開始に合意したことについて警戒の声が上がり、ルッテ事務総長は記者団に「ウクライナに関する全ゆる事柄に対し、ウクライナが密接に関与することが重要だ」と述べた。中国では副報道局長が「露米が対話強化するのは喜ばしい、中国は各方面と意志疎通を続け、政治的解決の促進に建設的な役割を果たし続ける」と述べた。ゼ大統領は自分より先にプ大統領と電話会談したことに「（ロシア優先ではないと思うが）実際のところ不快だ」と述べ、「ウクライナ抜きの如何なる合意も受け入れられない」と強調した。ト大統領はSNSに「ロシアやウクライナと素晴しい協議をした。あの恐ろしい血まみれの戦争を終わらせられる可能性が高い」と一方的に主張した。政権内では早くもロシアに配慮した戦争終結案が浮上しているという。また同日、ト大統領はロシアや中国との核軍縮交渉を始める意向を示した。最終的には三か国が国防予算を半減することで合意したいとした。

一三日、ト大統領はG7にロシアを復帰させるべきとの考えを示し、ロシアのウクライナ侵攻を巡っては、ミュンヘン安保会議初日にバンス副大統領とゼ大統領が会談する予定。また、プ大統領と合意した停戦交渉にウクライナも参加すると表明した。同日NATOの国防相会議で加盟国の国防費目標を引き上げる議論に着手した。GDP二%以上としてきたが米国は五%に引き上げるよう正式に求めた。ウクライナ停戦、対ロ抑止力それに中国への対応を理由に挙げた。

一四日、ゼ大統領は米・欧州と歩調を合わせた計画策

定が出来れば、プ大統領と会談する意向を表明、米ロ主導の交渉に改めて釘を刺した。世界各国の首脳や国防相が外交・安保問題を話し合うミュンヘン安保会議で発言した。同日同会議でバンス氏は欧州各国の民主主義の在り方を攻撃、SNS規制などを巡り「検閲」「民主主義の破壊」などと厳しい言葉で批判、「欧州に関して最も懸念している脅威は、ロシアでも中国でもない、内側にある脅威だ」と語った。ロシアの侵略脅威を前に米欧の深刻な対立の芽が露呈した。同じく出席の中国王毅外相は、「全ての当事者や利害関係者が適切な時期に和平協議プロセスに参加できるよう期待する」とし「欧州が危機の根本的な問題に共同で取り組み欧州の長期的な安全を実現することが重要だ」と述べた。

一五日、ウ・ロ担当ケロッグ米特使は、ミュンヘン安全保障会議で、停戦交渉を巡り「ロシア側の占領地について領土の譲歩のようなものも必要になろう」「（欧州の交渉参加について問われ）答えはノー、米ロ以外で必ず交渉に参加するのはウクライナだけ」と述べた。ト大統領は前者について触れておらず、後者は一三日の可能性を示唆している。他にも米軍のウクライナ派遣について、バンス副大統領はロシアが誠意を持ち交渉に応じなければあり得るとし、ヘグセス国防長官は停戦後の平和維持活動は欧州中心の有志国軍で行うべきで米軍は派遣しない、と述べた。ケロッグ氏が「政権の対ウクライナ計画がいつできるかを述べるのは時期尚早」と語ったように、停戦交渉の進め方や内容を巡っては政権内でまだ混乱が目立つ。米の軍事援助の見返りにウのレアアース供給を巡る交渉も「我々と我々の利益を守る用意が出来ていない」と米国提示の協定案の署名を見送ったとゼ大統領が発表した。同日ルビオ国務長官はラブロフ露外相と電話協議、米ロ首脳会談に備えるため定期的に連絡を取ることで合意、早ければ今月末首脳会談のサウジで実施を米ブルームバーグ通信は伝えている。同日ミュンヘンでG7外相会議が開かれ、ウクライナに対する「揺るぎない支持」を共同声明で表明したが、ロシアへの直接の非難は避け、制裁の在り方はこの先の取り組み次第だと明記した。

一六日、同通信は、米が欧州側に、停戦を四月二〇日の復活祭（イースター）までに実現したいとの考えを伝えたと報じた。ロシア主要紙コメルサントは「一八日に」と報じたが、ウの大統領府長官は、会議予定はないとし「ウクライナ抜きの合意は受け入れられない」と強調した。同日、ヨルダンのサファディ外相はミュンヘン安全保障会議で「パレスチナ人に尊厳と自由を、そしてイスラエルに平和と安全を齎す解決策を作りたい」とアラブ諸国が準備しているガザの将来を巡る提案について語った。また、イ首相府はガザ停戦継続を協議するための交渉団を一七日仲介国カイロに派遣すると発表した。

一七日、ＮＡＴＯは非公式緊急会議を開いた。焦点の停戦後の平和維持部隊のウ派遣については、英首相が米国が後ろ盾になることを条件に「英国軍の派遣を検討する用意あり」としたのに対し、独首相は「今この議論は完全に時期尚早」と批判した。ポーランド首相は「計画していない」と述べた。会合を呼び掛けたマクロン仏大統領は、会議後ト・ゼ両大統領と夫々電話で協議すると共に、ウの持続的平和に向け「欧州の全ての国々や米国、ウクライナと共に取り組む、それが鍵だ」と述べた。

同日、米ルビオ国務長官はサウジでムハンマド皇太子と会談、停戦を含む地域情勢について協議、ト大統領のガザ所有構想について意見交換したとみられる。サウジは「パレスチナ人の正当な権利の侵害を拒否する」との立場である。一八日はロシアのラブロフ外相との協議に臨む。同日ハマスは人質四人の遺体の二〇日引き渡しの見通しを明らかにした。イはハマスに拘束した女性や子供を全て引き渡すとしている。他方、イ報道官はレバノンヒズボラとの停戦期限となる一八日以降もレバノン南部要衝五か所に駐留を続けると明らかにした。一時的措置で米も承認というが、ヒズボラ等は反発している。

一八日、米ロ高官による停戦交渉の初会合がサウジ首都リヤドで開かれ、米国務省は終了後発表の声明に「紛争を出来るだけ早期に恒久的且つ持続可能で、全ての当事者が受け入れ可能な方法で終結させる作業を始めることで合意した」と記した。合意を急ぐ米がプ大統領の強硬姿勢を受け水面下で譲歩していないか危惧される。複数の外交筋の話として停戦後のウ選挙実施が柱になるとの見方もあり、平和維持部隊派遣の米案に対しラブロフ外相は反対を明言した。現に自身のＳＮＳで一九日ト大統領は「彼は選挙を拒否している」と、ゼ大統領を「独裁者」と決めつけ、欧州首脳から批判が相次いでいる。

二〇日、米ＮＢＣテレビは、戦争終結後にロシアが再侵略した場合は、ウクライナのＮＡＴＯ加盟を自動的に認めるとの案をト政権が検討していると報じた。

同日キエフ訪問中のケロッグ特使がゼ大統領と会談したが、会談後の共同会見は急遽中止になり、米高官がト大統領が「いらだっている」と発言、また、二一日、ト大統領は、ＦＯＸニュースラジオのインタビューに応え、プ大統領が望めば「（ウクライナ）全土を手に入れられる」と述べ、ゼ大統領は「カードを持っていない」と決めつけ、停戦交渉に参加する意義に疑問を呈した。「彼は合意を難しくしている。うんざりする」と訴えた。改めて「選挙を経てない独裁者」と批判した。同日、南アで開催されたＧ２０外相会合は共同声明を採択しないまま閉幕した。ロのウ侵攻を巡り、欧州諸国とロシアの対立が改めて鮮明になり、議長総括は「地政学的対立が拡大している」に。ウと距離を取りロシアと停戦協議を本格化させている米欠席下の会合、出席の岩屋外相は閉会

後「和平の在り方はあくまでも公正で永続的でなければならない」とし「国際社会は残念ながら対立・分断が進んでいるが、これを協調に導くことが日本外交の使命だ」と強調した。

二二日、ハマスは六人の人質を解放、イ側は約六〇〇人を引き渡す見込み、停戦第一段階がおおむね完了した。停戦第一段階は三月一日に期限を迎える。第二段階を巡ってはハマスがイ軍の完全撤退を求め、ネ首相はハマスの解体を主張しており、両者の溝は埋まっていない。

二四日、プ大統領は習主席と電話協議、高官協議の内容を伝え、習主席は前向き努力を評価、同時に両首脳は中ロの関係は「第三者の影響を受けない」と結束も強調した。一方米でト大統領は仏大統領と会見、停戦後の仏英などの平和維持軍駐留で一致した。また州内にゼ大統領が州内に訪米、資源権益を譲渡する協定案に合意するとの見通しを示した。同時に二人はＧ７首脳会議にホワイトハウスから参加、会議後ト氏は「誰もが戦争の終結を望むという目標を表明した」と述べた。議長国カナダ首相はゼ大統領と共にキエフから参加「ウクライナにおける正義と永続的な平和を実現する上で、Ｇ７の結束が重要」と強調した。石破首相は「力による現状変更が可能だとの誤った教訓が引き出されないよう注意が必要だ」と述べた。ト氏は重要鉱物等のディールの重要性を強調、前日条件付き辞任示唆でト氏の「独裁者」呼ばわり払拭を図ったゼ氏は直積的批判は避けつつも、米側提示の協定案が安全保障の文言削除などで不公平なことを論理立てて説明して見せた。この日はまた、国連安保理で「紛争の早期終結を強く求め、ウとロの間の持続的な平和を促進する」との米国提示の決議案が、欧州・ウ・日本など五〇国超共同提示の決議案（ロシア非難を含む）を否決の上、批判する英仏等五か国の棄権はあるものの、米・ロ・中など十か国の賛成を背景に採択された。

二五日、ト大統領はゼ大統領の二八日訪米を明らかにした。米英メディアはウクライナが米提示の資源協定案に合意したと報じており、両首脳が署名する見通しだ。

二五日、米ウィトコフ中東担当特使は、ガザでの停戦「第一段階」の期限が三月一日に迫る中、仲介国が延長を調整している停戦交渉の見通しを語った。「第二段階の交渉は針の穴に糸を通さなければいけない。どうすればよいかは見えていないが前進はしている」と。

二七日、停戦交渉を巡ってロシア融和的なト大統領に対し欧州はつなぎ止めに動くが、英首相はこの日の米英会談の際もト夫妻の英国招待のチャールズ国王の親書を渡すなど友好ムードを演出、「平和維持部隊に米の後ろ盾が欠かせない」としたが、満足な答えは得られなかった模様である。この日南アで閉幕したＧ２０財務相・中銀総裁会議も三会合振りに共同声明を採択できず、議長総括では世界経済を巡り、保護主義の台頭や進行中の戦

争が、経済の下振れリスクになると明記した。同日、ハマスは人質四人の遺体を返還、イも約六〇〇人の拘束パレスチナ人を釈放、停戦合意の第一段階で予定されていた人質の解放は終わり、今後は残る人質の解放とイ軍の完全撤退からなる第二段階に向け協議が始まる。

二八日、米ウ会談冒頭の記者団を入れた異例に長い五〇分の終盤四〇分頃から始まった激論に世界は驚かされた。予定していたウクライナの資源権益に関する協定への署名は見送られ、共同記者会見も中止された。バンス副大統領のバイデン大統領を念頭にウに紛争責任を問うような徴発的発言に、ゼ大統領が経緯や配慮を訴えると戦争を終わらせようとしている米国に感謝もせず無礼だと非難、ト氏も切れ激高に変わった。世界の心或る人の誰もが米側の異常を感じたが、同席閣僚始め米国内にはゼ批判の声が強かった。対して欧州各国首脳はゼ大統領をすぐさま「あなたは一人でない」と擁護、帰国のゼ大統領を招いて対応の緊急会合開催を決定。

三月に入り二日、英仏伊等欧州十数か国は、ゼ大統領を交えロンドンに集まり、停戦後のウクライナを守るための有志国連合の協議を始めた。英仏を軸に参加国を募る。会議後スターマー英首相は「いくつかの国が参加の意向を示した」と述べた。欧州の責任を示すことでウクライナと決裂した米国の繋ぎ留めを図る。

ゼ大統領は「真の平和と安全保障を得るため、米国との連携の土台を築こうと共に取り組んでいる」とX（旧ツイッター）に投稿。会議では、軍事支援の継続と対ロ制裁の強化、和平交渉へのウ参加、ロ再侵略を防ぐウ防衛力強化、停戦後平和保証の有志国連合の創設、四項目に合意した。具体的停戦案は議論中である。同日、一日期限の停戦第一段階のガザ停戦を四月下旬まで延長する提案を米から受け、ネ首相は承諾したと発表、ハマスは第二段階への移行を求め、延長を拒否している。

三日、ト大統領はウクライナへの武器供与の一時停止を指示、ウ指導部が「和平への誠意」を見せたとトランプ氏が判断するまでの措置としている。同日、ゼ大統領は「米国から受けたあらゆる支援に感謝している。感謝の気持ちを持たない日はない」と声明に記した。

四日、ゼ大統領はSNS投稿やト大統領宛書簡で、米国に歩み寄る姿勢を明確にした。和平に向けた交渉や希少資源に関する協定への署名に早期に応じる用意のあることを強調「ト大統領の強力な指導力の下で」平和の実現を目指したいとした。国民向けのビデオ演説では「我々が団結し強くあり続け此処にいる限り平和は尊厳あるものになろう」とし「米国との関係を維持することは真の終戦の為不可欠」と理解を求めた。同日ト大統領は就任後初めての議会上下両院合同会議の施政方針演説で、就任一カ月半の異例のペースで進めて来た政策を「迅速で容赦ない行動」と自賛、「まだ始まりに過ぎない」と宣言したが、最後に近く、ゼ大統領から書簡を受け取ったとし「和平に向け交渉を進め、希少資源を巡る協定に署名の準備がある」との内容で「感謝する」と語った。

五日、仏首相は、仏保有核兵器による抑止力の対象を欧州の同盟国に広げるための議論に入るとの意向を表明した。国民に向けたロシアの侵略や防衛強化に関するTV演説で語った。次期独首相就任が見込まれるメルツ党首の安保を巡る米国への依存提言を踏まえたとみられる。また和平合意後現地に「欧州部隊派遣」は「前線行きではなく、和平合意遵守を監視する為」と語った。同日中国は二五年の国防費（中央政府分）は前年比七・二%増の一兆七八四六億元（約三六兆七六〇〇億円）で四年連続で七%越え、ト米政権が中ロに国防費削減を呼び掛ける状況でも軍拡堅持を鮮明にした。

六日、ゼ大統領は来週ウと米代表団がサウジで協議すると明らかにした。本人も一〇日サウジ訪問の予定とのことでト大統領との首脳会談に繋がる可能性もある。同日EUは「再軍備計画」推進で大筋合意した。国防予算積み増しのため各国の財政規律に関するルールを緩和するほか、一五〇〇億ユーロの資金供給の枠組みを創設する。フォ委員長は会見でこれら防衛強化のために総額八千億ユーロの資金確保を目指すと説明した。加盟二七国全てで一致した。もう一つの議題ウクライナ支援に関しては、ハンガリーを除いて文書を採択した。

六日、ト大統領は「米国は日本を守らねばならないが、日本はどんな場合も米国を守る必要がない」と、日米安保条約が片務的と不満を表明。NATOについても国防費が不十分な場合は「彼らを守る積りはない」と語った。

七日、ト大統領は、停戦合意が実現まで「ロシアへの大規模な金融制裁や、関税引き上げ等を検討している」と表明、ロシアにも停戦協議に応じるよう圧力をかけた。

九日、「ロシア西部クルスク州に越境攻撃のウ軍兵約一万人がロ軍の包囲の危機にある」と英紙が報じたところ、米がウへの機密情報の提供を一時停止以降ロ軍が攻勢を強めており次々に集落を奪還、九日には約三分の二迄を取り戻し、取り囲まれたウ軍は脱出の危機に陥っている。また、同日マスク氏は衛星通信網「スターリンク」のウ利用遮断の可能性に言及した。

一一日、米ウ両政府はロのウ侵攻を巡り、米提示の三〇日間の停戦案をウが受け入れたと発表、停戦案はロの受け入れと同時実施が条件と明記され、両者合意すれば三〇日間の停戦を延長できると申し合わせた。米はウの姿勢を評価し、一時停止したウへの軍事支援や機密情報の共有を再開する。また両国は停戦中の捕虜交換・民間人釈放や連れ去られた子供の帰還についても議論、更にウに長期的な安全保障提供する持続的平和に向け即座に交渉を開始、資源に関する協定を出来るだけ早く締結することにも触れている。サウジでの米ウの高官協議後発

表、ルビオ米国務長官は「紛争を恒久的で持続可能な形で終結させるための即時交渉に入るもので、ウは停戦への具体的一歩を踏み出した」とし、ウォルツ大統領補佐官は数日中にロ高官と話す予定と明かした。ゼ大統領はこの提案を受け入れるとした上「ロは意思を示さねばならない。」とし、「建設的対話に感謝したい」とト大統領に謝意を示した。ロ報道官は数日以内の対米協議を否定せず、欧州は歓迎した。同日英仏は平和維持や復興を支援する有志国連合の立ち上げに向けてNATOや日本を含む三六カ国の軍幹部らによる会合をパリで開いた。仏大統領はウが求める停戦後の「安全の保証」を構想から計画に移す必要性を指摘、参加国は「安全の保証」をNATOと切り離さない形にすることで一致した。

一二日、プ大統領は、クルスク州に入り迷彩柄の軍服姿でゲラシモフ参謀総長から戦況報告（ウ軍占領地域の八六％以上を奪還）を受けた。「直近の課題は州全域を奪還することだ」と命じた。ペスコフ報道官は「声明を精査する」と記者団に述べた。同日ト大統領は停戦の実現について「ロシア次第だ」と述べ、週内に側近であるウィトコフ米中東特使をロシアに派遣、「複数ルート」で停戦案の受諾を働きかける。一一日には米ラトクリフCIA長官がロ対外情報局（SVR）ナルイシキン長官と電話会談している。同日、カタールで始まっているイとハマスの停戦協議に米ウィトコフ中東担当特使も参加、「協議は前向きに進んでいる兆候がある」と語った。ト大統領も「誰もガザのパレスチナ人を追放しようとしていない」と語り、ハマスへの揺さぶりをかけた。

一三日、会見でプ大統領は停戦案について「戦闘を停止する提案に同意するが、長期的な平和に繋がり、紛争の根本的原因を取り除くものでなければならない」とした。クライナの非ナチ化と非武装中立的地位が念頭にあり、停戦期間の兵器調達や動員利用の危惧にも言及。一方で「まだ議論すべきことがある」とも述べ、ロは米国との協議で対ウ戦況の優位を生かし、自国利益を最大限に確保するための条件を提示して行くとみられる。同日ゼ大統領は「直接ノーと言わず、長引かせる為プ氏がよく使う手段だ」と批判、ト大統領は苛立ちを募らせて、今回のプーチン氏の発言は「完璧でなかった」と述べた。

一四日、ペスコフ報道官は一三日ウィトコフ特使がプ大統領と協議したことを明かし「慎重に楽観的になる理由は確かにある」としつつ、ト大統領に報告後米ロ首脳電話協議日程調整に入ると語った。同日加で開催のG7外相会議はロシアに「ウクライナと対等な条件で停戦への合意をし完全に履行するよう」求める共同声明を採択して閉幕した。米国の一時停戦案を歓迎しロが合意しなかった場合、「制裁措置を含めロシアに更なる負担を課す」と記した。共同声明には北朝鮮へのロ支援非難、台湾海峡の一方的な現状変更反対も盛り込んだが、ロシア

を厳しく非難する文言は盛り込まれなかった。

一五日、英仏や加等二七カ国は停戦後のウクライナを守る有志連合結成に向けたオンライン形式の首脳会議を開催、各国の役割など具体的戦略立案の為二〇日英国で軍関係者の会合を開くことに合意した。同日、ネ首相は米案で人質解放の交渉継続を支持する一方、ガザ北部ベイトラヒヤを空爆したと発表。また同日、米軍はイエメンのフーシ派に空爆を行った（死者53、負傷98）。一六日、ルビオ国務長官は「紅海やアデン湾で商船を攻撃する能力を失うまで続ける」とし、「イランに対するメッセージだ」とも述べ、フーシ派への支援を止めるよう訴えた。他方フーシ派は「同海域に居る全ての米軍艦を躊躇なく標的にする」と報復を宣言した。

一六日、米ウィトコフ特使は週内に米ロ大統領が電話協議をするとの見通しを示し、自身が一三日プ大統領と会談し「隔たりは狭まりつつある」との認識を示した。その後プ大統領が協議は一八日の予定と語った。ロシア側も認めた。プ大統領とは「領土」と「発電所」について話し合うとし、またロ・ウ双方と「特定の資産の分割」を巡って協議して来たとも明かした。

一七日、英政府は英仏主導の有志国連合について「三〇カ国の参加」を見込んでいると表明、部隊派遣国は「かなりの数」と説明。英紙タイムズによると、英仏、トルコ、加、豪等計三万人規模の部隊派遣を検討、非派遣国は兵器・補給・輸送等で協力するという。二〇日各国の軍関係者が詳細を協議とのこと。

一八日、イ軍はハマスを標的に大規模攻撃を加え、子供を含む四〇人以上が死亡、一〇〇人が負傷した。停戦合意後最大規模の攻撃であった。「ハマスが人質解放を繰返し拒否した」と理由付けしている。ハマスはイが「停戦合意を覆した」と非難。

同日、米ロ大統領の電話協議が行われ、米国が目指した即時全面停戦合意はできず、ウクライナを侵略するロシアがエネルギー施設への攻撃を三〇日間停止することで合意した。電話は二時間半、ト大統領は「プ氏との電話は有意義建設的」「全てのエネルギーとインフラに関する即時停戦に合意し、最終的な戦争終結に取組む」とSNSに投稿した。協議に関する両者の声明に違いがある。米の「紛争を恒久的な和平で終結する必要があると一致」に対しロは「長期的な問題解決の可能性について米国と徹底的な検討を行う用意」に始まり、「和平への動きはエネルギー施設やインフラへの攻撃停止から始めることで合意」に対し「ウクライナのエネルギー施設への攻撃を三〇日間中止」、「黒海での停戦や完全停戦、恒久和平への技術的な交渉継続。中東で早期に協議開始」に対し「紛争解決に向けて米ロ専門家グループを設置」、「米ロの二国間関係の改善を確認」に対し「一九日にウクライナと捕虜交換を実施」や「ウクライナ軍の動員や

軍備強化の停止など要求」といった点。米当局は終了後の声明に「両氏はウ戦争に関する和平と停戦の必要性を話し合った。両首脳は紛争を恒久的な和平で終結する必要があると一致した」と記し同時に「和平への動きはエネルギー施設やインフラへの攻撃停止から始めることで合意した」と明記、並行して黒海での海上停戦、恒久的な和平に関する技術的な交渉を続けて行くと申し合わせた。米ロの交渉は中東で早期に始めるとした。他方停戦仲介のト氏に謝意を表した上プ氏は、停戦の条件としてウ軍への軍事支援や軍事情報の提供の完全停止などを要求したとするが、ト氏はウへの軍事支援停止は話題にならず、支援は一切話し合わなかったと述べた。

一九日、ト大統領はゼ大統領と電話協議、プ大統領と合意した、エネルギー施設への攻撃を三〇日間停止する「部分停戦」の動意を取り付けた。同時にウの原子力発電所を米が所有すると提案。数日内に米ウの専門チームがサウジで会合を開き、次の段階となる全面停戦に向けた黒海への停戦拡大を話し合う。

二〇日、ゼ大統領は電話協議でト大統領から「ザポリージャ原発の復旧に米は関われるかと聞かれ、投資は可能だと答えた」と説明、原発は「ウクライナ国家の所有物だ」と述べた。同日米政府は二四日、ロ、ウと個別に停戦を巡る専門家会合をサウジで開くと明かした。同日EUは首脳会議で、ハンガリー首相の反対で全会一致は断念したが、残り二六カ国は支援強化などを掲げる文書を採択、ウの独立と主権、領土の一体性への支持を再確認、「ロシアによる再侵略を阻む強固な保証が必要だ」とも指摘、ロに「終戦のための本物の政治的意思」を示すよう促した。しかし、二〇二五年四〇〇億ユーロ規模の軍事支援提案は決められず、ウ支援に関する全加盟国による声明も出せなかった。同日、ス英首相は凡そ三〇カ国軍関係者を招いて開いた会合後、「ウ軍は欧州最強の軍隊の一つになった」と述べた。その上で「我々が話しているのは能力の代替でなく補強だ」と語り、具体的には「海を一つのシナリオとして、空、陸、国境を視野に入れている」と、地上部隊の派遣に力点を置いたこれ迄の説明ぶりから、海や空での役割に軸足を移した。

二一日、ウィトコフ特使は「NATO加盟をウが断念した」との認識を示した。またロが占領併合し住民投票した四州についてロシア寄りの姿勢を示した。

二三日、サウジでの米ウ専門家会合後、ウ国防相は「特にエネルギー分野における重要な問題に焦点が当てられ生産的だった」と述べた。二四日にはウ側から保護したいインフラ施設にリストを米に示す方針だ。停戦合意の発効時期や条件も専門家会合で詰める。二四日はロシアとも別途協議する。ウィトコフ特使は「特に黒海における船舶の停戦で実質的進展が見られるだろう。そこから全面停戦に向かう」と自信を示した。

(二) コロナ

一月二四日、厚労省発表の定点当り新型コロナウイルスの新規感染者数（一三～一九日）は計二万七七五五人、定点当り五・六二人で前週（七・〇八）比約〇・七九倍。昨年同時期は一二・二三人だった。インフルエンザは計九万七一二人で定点当り一八・三八人で前週（三五・〇二）比約〇・五三倍で減少した。

三一日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（二〇～二六日）は計二万九九二〇人、定点当り六・〇六人で前週の一・〇八倍と増加、昨年の同時期は一四・九三人だった。同時期インフル新規感染者数は、計五万四五九四人、定点当り一一・〇六人、前週比約〇・六倍で二週連続減少した。

二月に入り七日、厚労省発表の定点医療金融機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（二七～二月二日）計は二万九八六九人、定点当り六・〇六人で前週と同数だった。同期間のインフルエンザの新規感染者数は計二万八九四三人、定点当り五・八七人で前週の約〇・五三倍で三週連続で減少し、警報レベル（一〇・〇〇人）を八週ぶりに下回った。

一四日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（三～九日）は、計二万八六六二人、定点当り五・八二人で前週の約〇・九六倍だった。インフル新規感染者数は一万八五九二人、定点当り三・七八人で前週の約〇・六四倍と四週連続の減少となった。学級閉鎖は前週から三三五件減って四四六件だった。

二一日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（一〇～一六日）は定点当り五・一五人で前週比約〇・八八倍と減少した。

二八日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（一七～二三日）は、定点当り四・九五人で前週比約〇・九六倍と減少した。

三月に入り七日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（二月二四日～三月二日）は定点当り四・四二人で前週比約〇・八九倍と減少した。

一四日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（三～九日）は定点当り四・〇七人で前週比約〇・九二倍と減少した。同期間のインフルエンザ新規感染者数は九九四一人、定点当り二・〇二人で前週（一・八九人）一・〇七倍と八週ぶりの増加となった。

二四日、厚労省発表の定点医療機関報告の新型コロナウイルス新規感染者数（一〇～一六日）は定点当り三・八五人、前週比約〇・九五倍と減少した。

（三）金融政策（経済）

一月一七日、ＦＲＢは気候変動リスクに係る金融当局のネットワーク（ＮＧＦＳ）から脱退したと発表。トランプ次期政権の化石燃料開発を進める方針に配慮したと見られる。同日、中国国家統計局公表の二〇二四年実質ＧＤＰは前年比五・〇％増で政府目標「五％前後」は達したが、伸びは前年の五・二％から減速した。不動産不況による内需不足が響いた。

二三日発表の二四年の貿易統計によると、貿易収支は五兆三三二五億円の赤字で四年連続の赤字だが、赤字幅は前年比で四四・〇％縮小した。輸出入数量はいずれも減少しているものの、歴史的円安が輸出額を押し上げた。

二四日、日銀金融政策決定会合で、政策金利とする短期金利（無担保コール翌日物レート）を〇・二五％から〇・五％に引き上げた。引上げ理由は「しっかりとした賃上げが見込まれ米大統領就任後も金融市場は落ち着いている。」とし「円安が背後にある」とも説明された。二四年度のコアＣＰＩ上昇率の見通しを前年度比二・七％（一二月見通し二・五％）と上方修正、二五年は二・四％、二六年度は二・〇％と各〇・五、〇・一ポイント引き上げた。総裁は会見で「引き続き金利を引上げ、金融緩和度合いを調整して行くという基本的考え方に変わりない」とした。また「ペースやタイミングは経済・金融情勢次第で予断は持っていない」と述べた。「ペースは半年に一回程度」との声が日銀内にはある。

二九日、ＦＲＢはＦＯＭＣで政策金利の据え置きを決めた。据え置きは四会合ぶり。今後は時間をかけてトランプ政権が打ち出す政策や物価の動向を見極める。議長は「利下げ急がず」と述べた。同日カナダは政策金利の〇・二五％の引き下げを決めた（連続六回の利下げ）。

三〇日、米商務省公表の二四年一〇～一二月のＧＤＰは季調済前期比年率二・三％増、個人消費は四・二％増で堅調である。

三一日、総務省発表の一月の東京区部の消費者物価指数総合は一〇八・七と前年同月比で二・五％上昇と三か月連続で伸び率は拡大した。同日、総務省公表の二〇二四年の就業者数は六七八一万人で前年から三一万人増、女性やシニア層の就労が広がり、正規雇用が増加、余剰労働力は乏しく、日本經濟は生産性を高めながら、どう人手不足に対応するかという課題に直面する。

二月に入り五日、厚労省発表の昨一二月の毎月勤労統計調査によると、実質賃金は前年同月比〇・六％増加、冬のボーナス支給額の増加が寄与、二カ月連続の増となった。二四通年は前年比〇・二％減だった。名目賃金を示す一人当たり現金給与総額は六一万九五八〇円で前年同月比四・八％増であった。

一三日、日銀発表の一月の企業物価指数は一二五・三

と前年同月比四・二％上昇し前月（三・九％）より伸び率が拡大した。米を含む農林水産物高騰が続いている。

一七日、内閣府発表の二〇二四年一〇～一二月期の季調済実質ＧＤＰは前期比〇・七％増、年率換算二・八％増。通年は前年比〇・一％増と四年連続でプラス成長。通年名目成長率前年比は二・九％増、実学で六〇九兆二八八七億円と過去最高、初めて通年六〇〇兆円超え。

一九日、日銀高田審議委員は講演で「経済・物価の見通しが実現していけば、一段のギア・シフトを進める局面だ」と述べ、今後も利上げを継続する必要があるとの考えを示した。日銀の追加利上げ観測の強まり等を背景に一八日約一五年振りに一・四％台に乗せた一〇年債利回りは、この日一段と上昇一時前日比〇・〇五％高い一・四三五％をつけた。同日公表された一月二八～二九日ＦＯＭＣ議事要旨で、参加者は経済が堅調を保つなら「物価抑制の更なる進展」が必要と指摘、ト政権の関税引き上げの物価引き上げ効果等を警戒、様子見姿勢が強まっている。また同日、ＥＣＢシュナーベル専務理事は「利下げを休止か停止すべきかも知れない局面に近づいている」との認識を示し、物価上振れのリスクに言及した。当面はウクライナの停戦協議を注視する方針。

二一日、総務省発表の一月の消費者物価指数（生鮮除く）総合は一〇九・八で前年同月比三・二％の上昇と、三カ月連続で伸び率が拡大、生活実感に近い生鮮も含む総合は四・〇％上昇し二年ぶりに四％台となった。生鮮食品は二一・九％の上昇、生鮮野菜は三六・〇％、コメ類は七〇・九％の上昇だった。

二五日、米コンファレンス・ボード社発表の二月の消費者信頼感指数は前月から七ポイント低下三九・三で三カ月連続悪化、関税政策への懸念の強まりを反映。

三月に入り一日、日経公表の二〇二四年一〇～一二月期の世界企業純利益は約一兆七七六億ドル（約一六二兆円）と前年同期比二一％増と3四半期連続増益、ＡＩ関連需要拡大などを背景にテクノロジーや金融など米企業が牽引した。(2/28までのＱＵＩＣＫ等のデータを使い日米欧中などの上場約一万八八〇社の決算を集計、株式時価総額で世界全体の八割を超える)

四日、財務省発表二四年一〇～一二月期の法人企業統計によると、全産業（金融・保険業を除く）の経常収益は二八兆六九一九億円、前年同期比一三・五％増と2四半期ぶりにプラスに転じた。一〇～一二期としては過去最高、価格転嫁の進展などで売上高も過去最高となった。同日厚労省発表の一月の有効求人倍率(季調済み)は一・二六倍と前月から〇・〇一ポイント上昇、求人数が増え仕事を探す人が減った。総務省発表の一月の完全失業率(季調済み)は二・五％で前月比横ばいだった。

六日、日本国内債券市場で新発一〇年国債利回りは一時一・五％に上昇、二〇〇九年六月以来の高水準、日銀

追加利上げ観測を背景に国内金利上昇余地を見込んだ債券売りが膨らんでいる。同日ECBは理事会で五会合連続となる〇・二五%幅の利下げを決めた。インフレ鈍化・景気減速を踏まえたものである。

七日、FRBパウエル議長は講演で、追加利下げについて「急ぐ必要はない」と強調した。同日朝公表の二月の雇用統計も含め労働市場は堅調との見方を維持、市場はトランプ政権の関税政策等を警戒して景気の減速懸念を強めているが、パウエル氏はまだ状況を見極める時間的余裕があると示唆した。

一〇日、厚労省発表の一月の毎月勤労統計調査によると、実質賃金の前年同月比一・八%減、三か月振り実質マイナス、物価高加速が影響した。名目賃金を示す現金給与総額は二・八%増の二九万五五〇五円だった。同日、NY株式市場でダウ工業株三〇種平均の前週比下げ幅が一時一一〇〇ドルを超えた。ト大統領が関税引き上げや政府支出の大幅削減に伴う景気後退の可能性否定しなかったことが株売りの動きを加速させた。ベッセント財務長官も七日経済に軟化の兆しアリとしており、市場で造語「トランプ（リ）セッション」がはやり言葉に。

一二日、日銀発表の二月の企業物価指数は一二五・三と前年同月比で四・〇%上昇、一月（4.2%）から伸び率が縮小したが、民間の中央値より〇・一%高かった。米を含む農林水産物の高騰の影響が飲食料品などに広がり高い伸び率が続いている。同日カナダ中央銀行は政策金利を三%から二・七五%に引き下げると発表、利下げは二四年六月以降七回連続、米との貿易戦争を「新たな危機」と位置づけ、利下げで景気を下支えする。同日米公表の二月の消費者物価指数は前年同月比が二・八%と五カ月ぶりに鈍化したが、関税による嵐はこれから。今後仕入れコストの上昇に直面する企業増から、経済への負の影響が時間差で出てくるとの懸念が広がっている。

一四日、連合は同時点で七六〇組合の会社の賃上げ回答を纏めた。本年第一回回答集計によるベア・定昇合わせた賃上げ率平均は五・四六%で二四年同時期から〇・一八ポイント上がり三四年振りの高水準だった。中小企業も五・〇九%と三三年ぶりに五%台に上った。

一八日、国交省発表の二五年一月一日時点の公示価格で、全用途の全国平均は前年より二・七%上昇で四年連続、バブル崩壊後の一九九二年以降最大の上げ幅となった。住宅地は全国平均で二・一%の上昇三大都市圏では平均三・三%上昇、中央・港・目黒等中央部では一〇%越え、商業地は全国平均で三・九%の上昇。

一九日、日銀金融政策決定会合は政策金利〇・五%の据え置きを決めた。政策の不確実性が高いためとし、総裁は会見で「経済・物価の見通しが実現して行けば引き続き政策金利を引き上げる」と強調した。同日FRBはFOMCで政策金利の据え置きを決定した。議長は、トランプ政権の動向を念頭に「見通しの不確実性は異常なほど高まっている」と強調、米経済が高成長からの曲がり角を迎え、FRBは物価・成長両面にリスクを抱えている。同日スイス中銀は政策金利を〇・二五%引き下げ〇・二五%にすると発表、日本を下回り、主要中銀で最低に。

（四）政治（社会）

一月一八日・一九日実施の朝日全国世論調査によると、内閣支持率は三三%で前回一二月三六%から微減した。

一九日韓国は内乱容疑で拘束されている尹大統領を正式逮捕。拘束された一五日起算、原則最長二〇日間拘束され取り調べを受け検察が起訴するかどうか判断する。

二〇日、米第四七代大統領にトランプ氏就任、三〇分の就任演説では米国民の利益最優先の「米国ファースト」を掲げ、変化の波が押し寄せ刺激的な新時代の幕開けについて、この瞬間から米国の衰退は終わる解放の日で、スピード感を持って行動し、「黄金の時代が今始まる」と唱いあげた。そして、不法移民対策と化石燃料の採掘拡大へ国家緊急事態を宣言、全ての不法入国の停止及び何百万人の犯罪外国人の送還と南部国境への軍派遣、全閣僚にインフレ対策・コスト減へ権限行使を指示、貿易システムを改革し外国に関税を課すため外国歳入庁を設置、最強軍隊に再構築と戦争終結と不参戦の評価、パナマ運河の取り戻し、成長と領土拡大等に言及した。その後、演説関連やパリ協定・WHOの再離脱等四〇本超の大統領令に署名、記者団にはカナダ・メキシコからの不法移民と違法薬物流入対抗策として二月一日から二五%の関税発動の可能性を示唆した。各国の主脳等は祝意を示し、石破首相は「真摯な議論をして信頼関係を確立したい」と述べた。ゼ大統領は停戦に期待感を示し「米国と共に本当の平和を達成する準備が出来ている。この機会を逃してはいけない」と述べ、プ大統領は協議について「オープンだ」と述べ米大統領との対話に前向きな姿勢を示し「危機の根本原因を取り除くことが重要だ」と述べた。ネ首相は祝意とビデオ声明で「あなたのリーダーシップの下、同盟関係はこれから最高の時を迎えるだろう」と強調した。

二一日、外相として初めて米大統領就任式に出席した岩谷外相は、新任のルビオ国務長官（上院議員）と日米同盟を新たな高みにと会談、石破首相とトランプ大統領の初の首脳会談に向け安保・経済面等政策の進捗状況の説明や論点の整理を行った。安保担当のウォルツ大統領補佐官（下院議員）とも会談した。またこの機会に日米豪印クアッドの外相会合が開かれ、共同声明を出し、「東・南シナ海での力や威圧による一方的な現状変更に強く反対する」と表明。また同日ト大統領は、ホワイトハウスを訪れたソフトバンクグループ（SBG）の孫会長兼社

長、オープンAIのアルトマンCEO、米オラクル代表と四者で「スターゲート」と呼ぶAI開発の共同出資事業への巨額投資（七八兆円）計画を発表した。AI規制をかけたバイデン前政権から政策転換、民間企業と一体となって技術覇権をめざす。更に、新大統領はEU・中国に関税賦課を検討中と示唆、合成麻薬の流出を許している中国には、二月一日にも税率を一〇％上乗せする可能性があるとした。習主席との会談を見据え、関税を武器に譲歩を迫るトランプ流が動き出した。

二四日、衆参両院の施政方針演説に臨んだ石破首相は、肝いりの地方創生に三分の一ほどを充て、「令和の日本列島改造」の実現へ脱炭素やデジタル化を見据えたインフラ整備など五本柱を示した。若者や女性にも選ばれる地方、産官学の地方移転と創成、地方イベーション創生構想、新時代のインフラ整備、都道府県域を超えた広域連携の五本柱。二〇二五年は戦後八〇年、昭和一〇〇年の節目にあたり「日本の歩みを振り返り新しい日本を考える年にする」と語った。

三一日、米報道官は、カナダ・メキシコに対する二五％の関税を二月一日から実施すると述べた。対中国も同日から一〇％の関税を上乗せする。詳細は一日午後までに公表するとした。大統領は同日これとは別にEUからの輸入品にも追加関税をかけることを示唆、鉄鋼や半導体等品目別は一八日頃とされる。

二月に入り一日、米の追加関税の大統領署名を受け、加首相は米国からの輸入に二五％の報復関税を課す方針を明らかに。四日から実施、両国が二五％掛け合った場合、初年度加のGDPを二・五％押し下げると試算。

三日、米大統領は、国境対策や合成麻薬流入対策などで合意したとして、メキシコ、カナダに課すとされた二五％の関税は三月四日午前〇時一分まで発動を延期すると自身のSNSに投稿した。中国とも協議するとした。結果メキシコ・カナダは延期されたが、対中国は全ての輸入品に一〇％の追加関税を課すと発表、中国も同日、石炭や液化天然ガス（LNG）等米国からの輸入品に最大一五％の追加関税を課すと発表した。米国は中国が合成麻薬フェンタニルの流入に関わっている事、パナマ運河の管理に影響を及ぼしていることを問題視している。

四日、青木官房副長官は、石破首相が六～八日に米国を訪れると参院議運理事会に伝達した。岩屋外相が同行、七日にトランプ大統領との初の首脳会談に臨む。

七日、日米首脳会談は、外交・安保・経済で協力・連携の強化確認の共同声明も纏め、友好裏に日米の結束を改めて確認して終わった。共同声明のポイントは、冒頭、自由で開かれたインド太平洋の堅持と日米関係の新たな黄金時代の追求を謳い、安全保障では、米の「拡大抑止」の更なる強化、日米安保の尖閣適用確認、南西諸島での日米プレゼンス向上、防衛力強化のわが国コミットメントの歓迎、二＋二の早期開催、経済では、ビジネス機会の促進と投資・雇用の大幅増加への協力、米LNG輸入の増加、地域連携では、台湾海峡の平和と安定の重要性強調、北朝鮮とロシアの軍事協力抑止、そしてトランプ大統領の近い将来の公式訪問、等である。

なお、共同記者会見で具体的に言及した事項では、【関税】については（米）対日貿易赤字解消に関税が選択肢に、解消に日米で取り組む（日）互いの利益になることが重要（報復関税の質問：日本の国会答弁を引いて仮定のことには答えられないと・・笑い）【USスチール】については（米）買収でなく投資で合意（日）買収でなく投資、日本の技術を加えて良い製品を作り出す。【対米投資】については（日）一兆ドル規模に増やす【安全保障】については（米）防衛費をGDP比二％に増やす日本政府方針を評価、今日の協議によって更に増える。日本に対外有事援助として約一〇億ドルの売却を承認。

九日、ト大統領は、米輸入鉄鋼・アルミに二五％の関税を課すと発表、高関税の貿易相手国に同水準の関税を課す「相互関税」も近く導入するとした。

一〇日、中国は米から輸入の石炭やLNG等に最大一五％の追加関税を発動、四日から中国からの全ての輸入に一〇％の追加関税を課したト政権への報復措置である。

一三日、ト大統領は、外国が米国製品にかけている関税と同水準まで米国の関税率を引き上げる「相互関税」の導入を指示する覚書に署名した。独や印度等米より比較的高い関税の国や日本のように規制など非関税障壁がある国を主な対象として想定する。同日米印首脳会談が行われ、年内に米印貿易協定の締結を目指すとされた。

一四日、ト大統領は、輸入自動車に対する関税を四月二日頃にも公表すると述べた。鉄鋼・アルミ同様自動車・半導体・医薬品に対する分野別の追加関税も導入したいとして、多い独車への不満を何度も繰り返した。

一八日、ト大統領は四月に公表予定の輸入自動車への追加関税について「二五％くらいになるだろう」と述べた。ドイツや隣国メキシコなどからの輸入車が主標的と見られるが、日本車も対象になれば大きな打撃となろう（そうなると墨・加経由分も含め対米輸出三割を占める日本車六社で関税額で三・二兆円、実質GDP下押し二年間で〇・二％との推計あり）。半導体や医薬品は二五％以上を示唆した。高関税をちらつかせ米国内に生産拠点を移すよう各国企業に圧力もかけた。

二一～二三日日経とTV東京実施の世論調査によると、内閣支持率は四〇％で前回（一月）比三ポイントの低下、支持しないは二ポイント上昇し五二％となった。日米首脳会談は評価（四七％）が上回り、国会論戦は評価しない（五四％）が上回った。

二五日、自・公と維新の会は、高校授業料の無償化や社会保障改革について党首脳間で合意した。二五年度か

ら全世帯を対象に国公私立を問わず就学支援金を支給、二六年度から私立高校に通う場合の就学支援金の支給上限を引き上げる。二五年度予算を修正（二九年ぶりの当初予算案修正）することで維新が予算案に賛成するため、衆院で可決する見通しとなった。同日、ト大統領は、海外から輸入する鋼に追加関税をかけるための大統領令に署名した。南米や中国への依存には安保上の懸念があるとして、国内生産能力拡大を狙う。

二五日、全米鉄鋼労働組合（ＵＳＷ）は、ＵＳスチールを独立行政機関の全米労働関係委員会（ＮＬＲＢ）に告発したと発表。日鉄の買収計画を巡り、ＵＳスチールが数カ月にわたり労働者を威圧したなどと主張している。

二七日、米英首脳会談（ワシントン）でト大統領は米英間で「貿易協定を締結する」と表明、合意すればト関税を回避できる可能性がある。ス首相は、協定の内容はＡＩなど先端テクノロジー分野の協力が中心になるとの見方を示した。同日ト大統領は、中国からの輸入品に三月四日から一〇％の追加関税を課すと表明、合成麻薬フェンタニルの米国流入が止まらないことを理由に挙げた。二月発動分と合わせ二〇％の追加となる。

三月に入り三日、ト大統領は予告通り四日にカナダ・メキシコへの二五％関税が始まると述べ、対中追加関税一〇％上乗せ（計二〇％に）の大統領令に署名した。麻薬の製造や流通に関わる三か国の流出対策が甘いというのが関税措置の主な理由。同時に自動車工業などを例に挙げ、「米国で建設すべきだ。そうすれば関税はかからない」とも述べた。また「貴国の通貨を切り下げ弱体化させ続けてはならない」と日本の指導者たちに電話で伝えたと記者団に語った。

四日、政府の二〇二五年度当初予算案が自公両党による修正のうえ、衆院本会議で自公と日本維新の会等の賛成多数で可決した。参院では与党が過半数を占めており、成立は確実になった。石破政権は最初の関門を越えたが、三月末までに結論を出すとする企業・団体献金の扱いや安倍派元幹部の参考人招致への対応など自民派閥の裏金問題、党内意見が纏まらぬ選択的夫婦別姓問題、夏の参院選が近づくにつれ激化すると見られる与野党対決や野党がまとまり不信任案が可決され解散か総辞職を迫られる惧れ等難路が続く。

五日、米はカナダとメキシコに対する二五％の追加関税について、北米の自動車産業向けに一か月の猶予期間を設けると発表した。米・墨・加協定（ＵＳＭＣＡ）で北米産と認定される輸入自動車（完成車価値の七五％以上が北米由来）は、関税ゼロとする仕組み。なおＷＴＯは同日、加が四日米国発動の追加関税はＷＴＯ協定違反と紛争解決を申し立てたと明らかにした。また同国は報復措置として外資の同国への投資制限を拡大すると発表した。

六日ト大統領は四日発動した加・墨への二五％の追加関税について大規模な救済措置を認めると発表、ＵＳＭＣＡに適合した輸入品は、相互関税発動を四月二日迄猶予するとした。メキシコのシェインバウム大統領は九日予定していた報復関税の表明を見送ると発表した。

七日、日英は東京都内で、外務・経済閣僚による「経済政策協議委員会（経済版２＋２）」を初めて開催、自由で開かれた国際貿易体制、エネルギー安全保障、グローバルサウスとの連携等について協力して行くことを強調、「自由で公正なルールに基く国際経済秩序の維持・強化に向けて、共に行動して行く」ことで一致した。ウクライナ情勢については、「公正かつ永続的平和の実現」に向けて意見交換することで一致した。またロシア制裁の継続を確認、「ロシアの全面的かつ違法なウクライナ侵攻は、不可分一体である欧州・太西洋とインド太平洋の安全保障を脅かすもの」との認識でも一致した。

一一日、米は輸入する全ての鉄鋼・アルミに一二日から二五％の関税をかけると明らかにした。加にかけるとしていた五〇％は中止、「一切の例外・適用除外なしに」発動すると指摘した。

一二日、ＥＵ委員会は米の鉄鋼・アルミ製品に対する追加関税への対抗措置を表明、合計で最大二六〇億ユーロ（約四・一兆円）相当の米国からの輸入品に報復関税を発動する見通しだ。フォ委員長は声明で「関税は共通の利益にはならない」と米を批判、「有意義な対話をする用意がある」とも述べた。

一三日、次期駐日大使に指名されているジョージ・グラス氏が上院外交委員会公聴会で、日本との協力強化に意欲を示しつつ米軍駐留費の更なる増額と関税や貿易赤字の削減について厳しい対話をすると語った。

一四日朝、石破首相は自民党の衆院一回生議員への商品券配布について政治資金規正法と公職選挙法に抵触しないと強調「大勢の方々に迷惑、心配をかけていることは申し訳ない。深くお詫びする」と述べた。（一三日夜、三日に首相公邸で会食、秘書が当日出席者事務所に一〇万円分を会食のお土産として届けた旨明らかにした）

一五～一六日実施の朝日全国世論調査によると、石破内閣の支持率は二六％で前回二月調査の四〇％から大幅に下落、昨年一〇月内閣発足後最低となった。不支持率は五九％（前回44％）だった。石破事務所の自民党国会議員一五人への一人一〇万円相当の商品券配布問題については「問題だ」が計七五％と「問題でない」計二三％を大きく上回った。これを受け首相は止めるべきかと尋ねたところ「その必要はない」六〇％が「止めるべきだ」三二％を上回った。

二一日参院予算委で首相は「法に反することと私は認識していないが、国民感覚と違うよねとご批判頂いたということには申し訳ない」と述べた。この日安倍政権時

代にも同様の配布があったと証言も出て、問題発覚から一週間が過ぎても問題は収束しない。

二四日、日経・TV東京は二一～二三日実施の世論調査結果を公表、内閣支持率は前回二月から五ポイント落ち三五%、昨年一〇月政権発足以来初めて四割を割った。「支持しない」は七ポイント上がって五九%。

《補足》三つの出口（二〇二五年三月二四～四月一〇日）。・・・トランプ出口

「三つの出口」に代表させ出口を論じてきたが、今や全ての出口が「トランプ出口」に集約されている。今回補論はご主人の今時点でのトランプの出口稿の引用に代って貰った。今後吾輩自身もそのスタイルを踏襲するか検討したい。

トランプ氏の所業に世界中が喧々諤々である。世界恐慌（1929）後、保護主義に転じ植民地とブロック経済圏化作りに走った英国に追随、広範囲に関税率を引き上げた米国、各国は報復的に関税を引き上げ世界貿易の縮小に帰結、窮乏化ドイツのナチス政権の軍事侵攻から大戦に到る悪夢を思い出す向きもある。

戦後大国の寛容を発揮しながら、自由貿易の先兵となり世界経済発展を支えたアメリカの変身・裏切り。結局自分ファーストの孤立主義に戻り覇権確保を図る大国アメリカの動きに振り回される世界。

アメリカファーストを信念の如く掲げるトランプ氏の第二次政権は、発足直後から、ロシアのウクライナ侵攻とガザのイスラエルの対テロ侵攻の停戦・和平に関する平和の為と称する押付け協議。そして世界に侵食されて疲弊した自国経済の黄金時代を取り戻すための相互関税政策、と次々と繰り出す手管は、魔術にかけられたように全世界の人々の口吻をトランプ一辺倒にしている。

前者平和政策の現状は四月初現在、ウクライナの停戦・和平については、一部攻撃控え合意はあるものの両国の駆け引きもし烈に、サウジで米・ロ、米・ウの高官協議進行中。ガザについては依然イスラエルがハマス掃討圧力をかけながら、停戦二段階目入りの新提案に双方同意し協議に入ったところである。

関税政策については、当初のカナダ・メキシコ・中国等特定国狙いと自動車・半導体等特定物品狙いの段階から、予告されていた全世界相手の貿易赤字解消の為の相互関税が四月二日打ち出され、ディールの基本構造が明らかになる。即ち、「各国に一律一〇%の関税を課した上で国・地域毎に異なる税率を上乗せする。日本は計二四%、EUは計二〇%、中国は既にかけた二〇%に三四%を上乗せし計五四%になる。」というもの。三日には自動車関税を発動し日本等から輸入する完成車に二五%

の追加関税を課し、五日には一〇%の「基本税率」が発動された。この間激甚関税に世界不況不安が高まり、米株式市場始め世界の市場で株価が歴史的下落や交渉要請国には応ずる姿勢を見せたことで大幅反発する等乱高下を見せ、遂には九日の「上乗せ税率」発動直後、米市場が株式・通貨・債券トリプル安に陥ったため、午後にはトランプ大統領が交渉に応じる国には「上乗せ税率」の九〇日間の一時停止を発表した。中国は米国からの輸入品に五〇%の追加関税をかけ計八四%と報復措置に出たため「中国の世界市場に示した敬意の欠如に、関税を一二五%とする」とした。米中対立があぶり出された恰好である。

日本は七日両首脳の電話協議で担当閣僚間（財務長官・通商代表部代表と経済財政再生相・財務相の間で）での協議に合意した。金融政策も大きく振れる市場に利下げ延期の米、正常化利上げ窺いの日本、共に苦しい様子見である。

ところで、仮にトランプ流の平和と米経済の再建がなったとしても、両大戦の惨禍を経て社会通念として定着した、前者についての戦争正義のモラル、後者については国際自由貿易尊重、両理念崩壊という深刻な危機になりかねない。

読み直したオルテガ・イ・ガセット「大衆の反逆」は相変らず難解である。

オルテガによれば、大衆とは文明社会の便益（自由主義的デモクラシーと技術に代表される一九世紀の文明が生み出したもの）を享受しながらそのような文明が如何に可能になったか知らない、ある意味「満足しきったお坊ちゃん」で、彼らは自己を乗り越えようと思わず、自らのうちに閉塞する。過去への尊敬の念も、自分より優れた人々への敬意もないまま、自らの無限の欲望を膨張させるばかりである。文明とは共生の意志であるが、その意味で他者を考慮しない大衆は「反市民的で野蛮となる」。私なりに考えて行くと、その人の心には他人が居なくなっているのではないか。更に言えば自分が居ないから他人が居るのを感じないのかも知れない。多様性と主体性の共存は社会存立の基盤であるが、集団的にそのバランスが失われ、無自覚に集団衆愚の叫びをあげたり逆に集団麻痺に罹る。オルテガが向き合ったファシズムに陥って行く二次大戦前夜の風景の真底に見た大衆はそういうものだったのではないか。現代は前述（自由主義的デモクラシーと技術）の技術が逆に、即ちスマフォが情報共有・交換必須の言葉や表現の消失・劣化を生み、思考が浅く自覚・意見なく欲望・易きへの付和雷同を助長しているのではないか。男女共に振る舞いも粗く乱暴だ。

時に争い時に迷い存続の危機に陥るとしても、他に無きが故に次善の民主主義と言われても、人類の発展存続は理想の民主主義を唯一「坂の上の雲」として求め続けることにあり、限りなく『信頼の三角形』を浸透させることにあると思う。因みに一人一人の『信頼の三角形』の心は、自己規律－思いやり－誠実履行の三角形。そして、今まさに経済社会の歴史的変革の正念場にあり、世界が平和共存の瀬戸際にある時、『信頼の三角形』の心と仕組みがキーワードになるべきことは間違いないと思う。「信なくば立たず。・・君子勇あって義なくば乱を為す。」世界トップの「ト」さん「プ」さんに受託者の心を持たせられるかどうか。

二、ロボット論

（一）ＡＩ開発・規制等の動き

一月二七日、米株式市場で半導体大手エヌビディアの株が前日比一七％減となり時価総額が約九一兆円減少、翌日の日本市場にも波及日米テック株の急落となった。きっかけはディープシークによる低コスト生成ＡＩモデルの開発で、ＡＩチャイナショックと言われた。米テック企業の一〇分の一未満の開発費用とされる。正式社名は「杭州深度求索人工智能基礎」、二〇日、設立起業家築文鋒氏がその最新製ＡＩモデルＲ1を発表、革新とは言えないがエヌビディア半導体の連結等に工夫して、米国の○から1へと新たな技術革新する強みに対し応用力で対抗、低コストの製品を作る中国技術が追い付いたことに吃驚したわけである。だが米ＩＴ王手のＡＩインフラ巨額投資を続ける姿勢は変わらない。

二月に入り三日、一月発表されたオープンＡＩ・ソフトバンクグループ（ＳＢＧ）・米オラクルが共同で五千億ドル（約78兆円）を投じて米国にＡＩインフラを整備するスターゲート計画。この日、日本で共同会社の設立を発表、新会社はＳＢＧと通信子会社のソフトバンクが設立した中間持ち株会社が株式の半分、残り半分をオープンＡＩが持つ。ＡＩ網を巡る対米投資計画を日本にも拡張、新会社は顧客企業それぞれの人事やマーケティングのデータ等を取込み、各企業に合った専用のＡＩモデル「ＡＩエージェント」を提供する。孫氏は日本でもＡＩを普及するには関連施設の整備が不可欠と見て「スターゲートを日本に拡張し、日本にもＡＩデータセンターをつくる」とする。ＡＩが使う膨大な電力を賄うため発電施設を含めて建設する可能性がある。

七日、Ｇ7は生成ＡＩの開発事業者にＡＩの安全性に関する情報を提供するよう促す枠組みの運用を始めた。リスク管理等七項目で取り組み内容を報告して貰う。参

加は任意だが透明性をもったＡＩ開発に向け国際基準としての普及を目指す。「広島ＡＩプロセス」の一環である。この日それと同時に日本政府は、海外からのサイバー攻撃を未然に防ぐ「能動的サイバー防御」導入に関する関連法案を閣議決定した。官民が連携し通信情報の活用で攻撃の予兆をつかみ、水道・電気・ガスなど国民生活に関わる重要インフラを守る。情報漏洩者を罰する。近く国会に提出する。一方個人情報委員会にはＡＩ開発・保護を両立する為、個人特定に繋がりにくい分析データなら本人同意を原則不要にし、他方で情報漏洩時に課徴金を設ける等、ルール改正を行う案が浮上している。

一一日、パリで二日にわたり開催された「ＡＩアクションサミット」が閉幕した。誰でも利用可能なオープンソースの推進などＡＩの公共性向上を目指す新基金「カレントＡＩ」の設立を決め、「包括的で持続可能なＡＩ」を支持する共同声明には欧州の国々、中国・日本を含む六〇カ国・地域が署名した。しかし米英が署名しなかったことが今後の国際合意形成に向けての道半ばを象徴している。トランプ大統領の自由な開発へ転換した米はバンス副大統領が、「過剰な規制は変革飛躍を抑制する」として支持せず、英は一昨年英で開催されたサミットで殆ど合意された強い安全性への思いが後退しているとして署名しなかった。フォンデアライエンＥＵ委員長は、ＥＵはＡＩの大規模な開発拠点「ＡＩギガファクトリー」など今後数年間で総額二千億ユーロ（約三一兆円強）を官民で投資するとし、技術革新を加速するとした上、規制か開発かの二者択一ではなく、ＥＵとしての「第三の道」を探りながら民間投資をよびこむことで、米中両国と競争出来ると述べた。また印度のモディ首相は「ＡＩに対するガバナンスはグローバルサウスにおいて、全ての人々のアクセスを保証することだ」と述べた。

二〇日、米オープンＡＩは生成ＡＩ「ＣｈａｔＧＰＴ」の利用者が世界で四億人を超え（日本は六〇〇万人）、この二カ月余りで一億人増えたと公表した。一方上海でのＡＩイベントで、ディープシークはこの七日間で利用者が一億人に達したとした。他方ディープシークについては、データ取り扱いで警戒が高まっていて、米海軍が利用禁止、イタリアやアイルランドでは国内のアプリストアから削除されるなどされており、日本でも個人情報法の網をくぐり抜けることが指摘されている。米トランプ政権もこの点に強い警報を発しＡＩ競争の観点も絡み、この世界でも分断の兆しがある。

二八日、政府は、ＡＩによって国民の権利や利益が侵害される事案が発生した場合、調査や事業者への指導等を行うとする一方、適正な研究開発や活用も推進するとした「ＡＩ関連技術の研究開発・活用推進法案」を閣議決定し国会に提出した。技術開発・活用推進と権利や利益の侵害対策の為、ＡＩ基本計画を策定して施策を進め

ると共に、それを担うＡＩ戦略本部を内閣に置く。

三月に入り四日、金融庁は金融機関のＡＩ活用について官民で対話する枠組みを創設、Ａｉ利用に関する規制を柔軟に見直すことで利用を促す方針である。フィンテックをテーマとする総合イベントで明らかにした。

一二日、米グーグルは生成ＡＩを使ってロボットを操作する技術を開発したと発表、頭脳となるＡＩがネット上から様々な知識を学習しこれを動作に応用できるようになる。ヒトに近いロボットの開発につなげる。

一三日、米オープンＡＩはト政権のＡＩ規制に対する提言書を公開した。中国初のＡＩ新興ディープシーク等台頭する中国製ＡＩの脅威を訴え、米政府がＡＩ分野で技術革新を促す規制環境を整えるよう求めた。

（二）「自習の試み」との関係で考えるところ

前回、ＣｈａｔＧＰＴの登場でＡＩ開発・進歩が加速化する中、開発現場は進歩に楽観的意欲的であり、その適用分野の拡充や性能の向上競争は熾烈を極め、リスクへの世界的規制議論の歩みは遅いと述べた。危惧したトランプ大統領登場で（一）の「ＡＩアクションサミット」のように方向分裂が現実化した。人間のアシスタントという段階でも、生成ＡＩは能力高く信頼できる存在であらねばならないことは当然で、進歩・規制バランスのとれた発展が無ければ、それ自身が大リスクであり、今正念場である。

ディープシークに情報漏洩の仕掛けを施すとか、独総選挙でロシア発のＡＩ利用の偽情報が飛び交ったこと等、世界各地から不正利用が報告され不正対策も忙しいがまだ後追いである。と同時に対策相手は不正を働く人間であり、人間倫理の問題で手段が何であれ人間社会の原始より取り組んできた宿痾である。何が今までと違うのか。科学と人間社会、「ＡＩアクションサミット」でも米カリフォルニア大学のＳ・ラッセル教授が警鐘を鳴らしたように、原子力がそうであったようにＡＩが人間社会そのものを崩壊させる力を持つ、ことである。

これも前回言ったが、ＩＴ進化が「汎用人工知能（ＡＧＩ）」（用途限定ＡＩではなく何を聞いても適切に回答する）の出現であるＣｈａｔＧＰＴから、その先自律型ＡＩ（鉄腕アトムのように、状況に応じ自らがどの機能を使うかの判断能力を持つ）、更には知能自身が人間を超えるあるいは人間と別物となりそれを何かが纏う日の到来可能性もまた加速度的に近づこうとしている。シンギュラリティー（技術的特異点）の到来予想も早まる中、例えばそこを見据えた人工知能学会の悪用・乱用に対する会員の倫理指針を超えて、ＡＩ自身の開発条件を定め、人間もＡＩも天網恢恢洩らさぬ不正差し止めアクション事前発動が必要である。

画面上に自分のアバターを置き、代わりに画面空間に入り遣り取りすることや、心身共に一〇〇％機能健全だった時作ったそっくり化著しいアンドロイドが代わりを務めること等、即ち同一人物が二人いるといったことが常態化する世界が来ようとしている。本人死後も同一人物が永遠に死なず残り更には生成を続けることをイメージしてみれば、事の重大性が実感できると思う。もう手を打たないと間に合わないかも知れない。

三、自習の試み

＊　　＊　　＊

（仮題）道

（その九）海外の旅の道

（3）アルゼンチンの旅の道【註（1）ニューカレドニア、（2）ウクライナ】

可哀想な国、一九世紀入植植民地化され帝国主義戦争か約束された独立を宗主国の右顧左眄で未だ果たせない国（ニューカレドニア）その、八百年も前失った独立を願い続け二〇世紀末念願適ったものの旧主国から侵攻を受けている国（ウクライナ）、そして、原住民族社会を破壊され植民地からの新住民による独立を果たしたもののアメリカの裏庭として低所得軍事政権の政変多発国に甘んじて来た南米、今回はそのアルゼンチンの旅（2009/12/26～2010/1/11）である。

息子が赴任したアルゼンチンへ。

（一）空路

二〇〇九年一二月地球の真反対今が夏休みの時差一二時間の国アルゼンチンへの長旅に出発。手の省けるものは省くということで、空港への車手配やトランジットで荷物スルーの効くデルタ航空利用（昔行ったアトランタが拠点空港、運賃も安く二二～二五時間の長時間フライトに疲れぬようビジネスに）選択。成田－アトランタ、アトランターサンチャゴとも乗って間もなくディナーでその後直ぐ機内は暗くなり就寝、着陸前に朝食が供される形式で、時差調整や疲労緩和にはなった。しかし時は、九・一一ＮＹ航空機テロ直後であった。

アトランタはデルタのハブで大きな空港、入国審査に長蛇の列、セキュリティチェックも厳しく、早めにランディング（指令で）したにも拘わらず、七時間の余裕を五時間近くロス。勝手が分らぬこともあり、羽田で通し切符にならず次のチケット受け取りに時間を要したりもして、予約ホテルでの休息も形ばかり、タクシーと空港

内地下鉄で出発ロビーに。何とか座席に落ち着いて出発。

料理は米国行きと米国発で明らかに味が違い、サンチャゴ空港のシンプルさと落ち着き、日差しは強いが青空の下自然に囲まれた風景に、ほっとしたところであった。そして地元航空機に乗れば、アンデスの想像を絶する幅広い山並み、雪を抱くものあり茶褐色の岩肌を見せるものあり、無数のピークの連なる上空を一時間飛行、次第に高度を下げて緑の山裾に広がるメンドーサに着陸。さわやかな到着であった。息子が運転するバンでプルメリージョ空港から南へ八キロのメンドーサ市内へ。プラタナスやジャカランタが連なる並木が歴史を感じさせる。コロニアル風白亜のホテル、パークハイアットにメンドーサ初日を刻む。

（二）メンドーサ

市の中心部を東西に走るサルミエント通り、南北に走るサン・マルティン大通りを西へ四本行くとミトレ大通り、サルミエントとミトレが交わるところが独立広場の中心である。この四角い独立広場の西側の通り（こちらにテラスがある）とサルミエントに面してホテルが建っている。サルミエント通りを西に一キロ行くとサン・マルティン公園・グローリアの丘だが、その途中ＥＣＶＩＴ通りになってその四〇〇から六〇〇番地までである五一四番地にアパルトマンがある。ホテルから歩いて一〇分である。サン・マルティンといいミトレといいサルミエントといい、建国の歴史に名を残す人物である。

一五世紀末コロンブスのアメリカ発見以来、ヨーロッパのアメリカ植民地化の動きが、先行ポルトガル、スペイン、追ってオランダ、イギリス、フランスと欧州の覇権争いと絡んで加速する。中南米についていえば、一五二〇年前後スペインのコルテスによるマヤ・アステカ文明の滅亡とメキシコ征服（1535 メキシコ副王領）、一五三〇年代前半のピサロによる一四世紀前半からアンデス地域を中心に南米に覇を確立しつつあったインカ帝国滅亡とペルー征服（1544 ペルー副王領）、一五三〇年代のポルトガルのブラジル経営開始（1549 総督制に）。そして一六～一八世紀にかけて、コロンビア・ベネゼエラ・エクアドルをスペインがヌエバ・グラナダ副王領へと（18世紀）束ねてゆく動き。その間西インド諸島から南米オリノコ川流域に進出し、ヌエバ・グラナダ、ブラジルを脅かすオランダ・イギリス・フランスの動き。

ペルーのポトシ銀山（1545）、ブラジルのミナス金鉱（1693）等の発見も綾なしながら、各地でインディオやメスティソ（白人との混血）を支配使役しながら、一世ペニンスラール、二世以下のクリオーリョ、そしてインディオとの混血カウディーリョ（政治ボス）、黒人奴隷の導入後は解放黒人との混血ムラート（ブラジルが中心）、と次第に人口増と経済発展と階層を変化させながら、それぞれの地域に後の独立国家になる下地を作り上げて行く。ペドロ・デ・メンドーサが後のブエノスアイレスを建設したのは一五三八年（1541 年一時放棄 1580 再建）であった。バルディビアがサンチャゴを建設したのは一五四一年だが、一八世紀後半には高地ペルーからサンチャゴ、ブエノスアイレスを主都とする南部南アメリカにアウデンシア（司法機関）、コレヒドール（地方官僚）を持つラ・プラタ副王領が誕生する（1777～1778）。

そしてアメリカ合衆国の独立、フランス革命からナポレオン戦争下の欧州列強の力関係の変化、宗主国の弱体化、海上封鎖等の力の空白が生じた機に、クリオーリョを中心に各地で独立が相継ぐことになる。アルゼンチンでは、一八〇七年のナポレオンのスペイン占領を受け（1810/5/25）副王退位・自治委員会設置、事実上の独立宣言（五月革命）。一八一六年七月九日国民議会召集、南アメリカ合衆国の名の下アルゼンチン共和国は独立国家としての第一歩。しかしこの間、ナポレオン敗北に伴い、ペルー副王領は危機を乗り切り、チリを奪回、ベネゼエラも王党派が巻き返しボリバルのカラカスに樹立した共和国政府を倒し、ボゴタも回復、クリオーリョの自立体制残るのはブエノスアイレスのみになった。メキシコではカソリック聖職者イダルゴの乱が鎮圧される。一八一四～一八二〇年の局面はボリバルがアンデスを越えてボゴタ（ニューグラナダ＝コロンビアの）奪取、ここからカラカス（ベネゼエラ）を窺う。一八一四年にはサン・マルティンが呼応、アンデス越え（1817/1）でサンティアゴ奪還（1818/4 には独立決定的に）。一八二〇～一八二五年の局面では、スペイン本国で自由主義革命起こる。サン・マルティンはペルー遠征でリマ解放（1821/7）ペルー独立宣言、地方はまだスペイン軍支配）、ボリバルはベネゼエラ解放、その後エクアドルの解放を終えたボリバルとサン・マルティンは二二年七月エクアドルのグワヤキルで会見（後に南米解放・建国の英雄とされる二将軍の握手）。協力を約すも軍事行動の協約には到らず、ペルーの政情にリマに戻ったサン・マルティンはその安定化を果たせずチリを経由しメンドーサに帰国、妻の死もあり、やがて連邦派と中央集権派争いの続くブエノスアイレスの内紛に巻き込まれるのを避け娘を連れてベルギーへ逃れる（一八五〇年ブローニュで死去、一八八〇年南アの解放者と認められ遺骸がブエノスに移送され葬られる）。後事を任された形のボリバルは二三年リマ入りし準備を整え、二四年一二月リマ・クスコ間のアヤクチョ会戦でペルー副王領軍を壊滅させ、ボリビアも完全解放（1825）して名をとってボリビアに。アヤクチョの勝利将軍スクレが初代大統領に。スペイン支配一掃（ボリバルも結局失意で南米を離れ、後に建国の父と）。こうしてサン・マルティンは独立の英雄となり、遺骸が

ブエノスに還ってからは何処にでも、サン・マルティン公園、広場、通り、そして像がある。国は一八二九年から連邦主義者ロサス大統領の独裁恐怖政治が二〇年続くが、その後ブエノス出身のバルトロメ・ミトレが大頭領就任し対立鎮静化。そのあとを継いだのがサルミエント大統領である。

初日遅めの昼は、このコロニアル風のパークハイアットホテルのテラスのパラソルの下で始まった。白い石造りのテラスに夏の強い日差しが照り返し、眼前に背高く緑を豊かに湛えたプラタナス（プラタノ）とジャカランタの並木通りの向こうに芝生の絨毯を敷き詰めた方形の人々が憩う独立広場が広がっている。ジャカランタの紫の花は六月頃が見ごろらしい。各種サンドウィッチを思い思いに選び（皆とても大きい）、地元のビール等を飲むうちに、時差もあるのか疲れが出てきてうとうとしてくる。この日は息子の居宅で夕食。迎えに来てもらって六時頃マンションに入る。地階の上の一階、日本流に言えば二階、守衛の人が三人で交代して当たっているようで守りは堅いが、なかなか気のいい人達のようにみかけた。息子の手料理で久しぶりの話に花を咲かせ、結局一〇時過ぎ辞す。互いにゆっくり休息をと言い合い、帰りはサルミエント通り一本なので歩くことに。暫く静かな住宅街が続くがやがて明るくにぎやかなレストラン街（夏休みのせいか有名なアイスクリーム屋には沢山の子供連れの客が広い店の中そして店外のテーブルでにぎやかに談笑していた）を経て約一〇分でホテルに。

二日目（12/28）は八時過ぎ起床、熟睡で疲れがとれた感じがした。朝食を例のテラスで（テラスの両翼が別のレストランになっており、朝はビュッフェで）。一〇時過ぎ今度は朝の道を歩いて（歩いてみるとなだらかな登り）居宅へ。そして、そのまま西端にある四一六ヘクタールもあるサン・マルティン公園へ。動物園は月曜休園で後日とし、そこから登りにかかりグローリアの丘へ。頂上のヴィクトリー広場には、守護神として街を見下ろすように巨大なサン・マルティン将軍の記念像がそそり立っている。メンドーザからアンデスを越えサンチャゴを陥落させ南米独立の戦いに成功した将軍を顕彰し、ウルグァイの彫刻家（ファン・フェラリ）の手になったもの。街とはるかアンデスの山が眺められる。雲一つない晴天下アンデスが裾野に広がる眺望を楽しむ。

昼は昨夜と今朝通った道にあるイタリア料理のフロレンシアにて、パラソルの下でピザ等を、いずれにせよ肉が美味しい。息子も結構来ているのか、日本語単語も知っている年配のムッシューの底抜けに明るい応対が楽しい。母屋のレストランに入ってみると小ざっぱりして、階段の壁に懸けた歴史的有名人署名入りの写真等をみると、有名店であるのもむべなるかなと感じた。なお、こちらの蠅や蚊は日本よりやや大きいように思えたが。

動物園が休みで後日回しにしたこともあって、この日の午後は予定を繰り上げアンデスの裾野に広がるワイン畑見学に出掛ける。幹線道路を南へ走って一時間弱西に折れて山間に入って行く。幹線道路では途中右手西に雪を抱いたアンデスの山並みが見える。最高峰アコンカグア（6960m）に次ぐ三番手コルドン・デ・プラタ（6500m超）が先ず正対して車窓横手に見える。次に車窓からはややそれより低く見えるが二番手のトゥップンガードが見えだす。吃驚するのは、雪を抱いた六〇〇〇m級の尾根が果てしなく続くこちら側前面に日本アルプスのような三〇〇〇m級の山々が連なり前山のように控えていることである。スケールの違いを感じる。幹線道路からトゥップンガードの裾野に向かって道を入った。街を一つ二つ抜けると山裾まで何処までも連なるワイン畑が車窓に見えてくる。街道沿いの街の街路樹はポプラ（アラモ）が殆どである。防風林の役目も果たしているのではないか。ワイン畑もその広大さは勿論フランスを凌ぐが、少し違うのは畝に水が通っていることとブドウの木夫々につっかえ棒がしてあることである。後者は矢張りアンデスの強風に備えたもののようだ。前者はフィロキセラ菌でフランスのブドウが壊滅した時、こちらは残って逆移植で仏ワインが蘇ったが、その時の経験で水構が有用ということに繋がったようである。湿気の少なさをブドウは好むが、こちらは元々仏に比べずっと乾燥土壌であり灌漑を必要としていて経費の面で難しいところがあったのが、フィロキセラ騒動で必須になって採算面も改善した模様。メンドーサには三三〇〇を越える醸造会社があるといわれ、アルゼンチンの七割を作っている。先人がこの地を適地と選んで入植の早い時期からワインを育ててきた。逆に彼等にとってワインが無い食生活等考えられなかったということであろう（波濤を越えた運搬の困難を諦める選択肢はなかった）。この時は道沿いにポツンと門は見えるが、ワイナリー（ボデカ）自身の姿が見えるところは殆どなく、一つ立派な威容が見え写真を撮ったのはトップクラスの一つであった。他は遥かかなたにあったのであろう。急な予定変更だったため、合弁閉鎖後の取引先ワイナリー候補に息子が考えていた処には残念乍ら行かずじまいになった。往復四時間強車を飛ばして市街に辿りついたのは夕方遅くであった。

夜は大きなショッピングモール内にあるレストラン「ドン・マリノ」で伝統的焼肉料理（アサド）を味わう。まだ陽のあるうちに我々は着いたが（八時少し前）、周りが暗くなり南十字星が見えてくる頃になるとテラスの沢山のテーブルも一杯になった。先ずはエンバナーダス（特有のミートパイ）、そしてソーセージ盛り合わせ（普通のチョリソ、血入りモルチージャ、螺旋のサルチチャ等）、パリジャーダ（牛肉・鶏肉、レバー・腸詰等臓物の炭火焼盛り合わせ）、アサド（アサド・デ・ロモ＝フィ

レ、同チョリソ＝ロース、同コステジャ＝スペアリブ）と盛りだくさん。銘醸ワインで舌鼓みを打つ。相当量でももう入らぬとはならず実に美味しかった。さすが小麦（パン）、牛、ワインは一体、フランス・ウクライナ・アルゼンチンと大平（草）原の国々である。

三日目は愈々アコンカグアへ。七時前に起床昨日同様の朝食、昼のサンドウィッチを居宅傍のパン屋で調達するとの事だったので、足しになるようなものをビュッフェの中で多少確保。結局ホテルを九時発。昨日と同様国道七号を行って少し早めに山へ入る。前山の山裾を縫うように深く入って行く。この途はサンチャゴへ抜ける国道。（三年の準備でここを使いアンデスを越えチリを制圧したサン・マルティン軍の故事が思い出される。如何に難事だったかは、前後で騾馬も馬も四分の一に激減したことで如実に窺える。）

アコンカグアが見える展望地であり登山の出発点までひた走る。昨日山並みを見たが、アコンカグアは奥なのでメンドーサからは見えない（例の二つを見て間違えたり、ガイドブック等で見えると誤っているものもあるとか）。やがて、砂岩のようなもろそうな壁面スロープに囲まれた谷間の道を、段差のついた川床を見せながらその色のせいであろう褐色にみえる水の流れる幅広の川を左手に見ながら、走り続けることとなる。そして両岸には既に廃墟と化した鉄路のあとを示す鉄柱がところどころに見え隠れする。近代になって海路チリに着いた荷物や、太平洋側からの日本人を含む移民等がこの高く深く脆いアンデスの山をこうして横断していたのかと思うと、その道程の厳しさを思わずにはいられなかった。一九八四年に最後の列車が通った後、使われなくなったアンデス横断鉄道のレールである。チリのロスアンデス市とアルゼンチンのメンドーサ市の間二四八キロを結ぶこの鉄道は一九一〇年に全通、太平洋と大西洋が鉄道で結ばれることになった。ただし、両国で一般に使用されている線路の幅（1676mm）でなく、工事を容易にするために狭く（1000mm）建設された。従って、直通列車の運行はできず、ロスアンデス、メンドーサ両ターミナルで乗り換え・積み替えが必要という不便さがあった。山麓、プエンテ・デル・インカ（インカの橋・・川の温泉水で鉱物岩が掘り込まれ橋状になったもの）、昔は温泉宿があった、今も観光地になっていて原住民の石細工等の土産物を売る露店が多数並んでいる。駅構内から西（チリ方面）を望むと晴れていればアコンカグアが正面に望める。ここから峠のトンネルまでは約二〇キロ、アンデス越え最後の胸突き八丁とも言えるところであるが、その割には地形が穏やかに見える。チリ側にあるロスカラコレスの坂のような厳しさはない。麓から峠までの高度差はチリ側、アルゼンチン側ともに大差ないが（約二四百m）、これをチリ側七〇キロに対し、アルゼン

チン側は一七八キロかけて少しずつ登るので穏やかなのだという。更に車で一〇分走ってアコンカグア展望台に。チケットを買って車で登山入口に向かう。そこに車を止めて徒歩で周辺池塘を巡りつつアコンカグアを仰ぎ見る。昨日と違い多少雲が出てきていたので心配していたところ、山頂に笠雲のような薄い雲がかかり完全な山容はついに見れなかったが、うっすら雲越しに想像できる程度までは晴れた。我々がサンドウィッチを食べ終え駐車場を離れる頃には、逆に雲が山を覆い始めたことを考えると幸いだったと思われる。また車を降りると、油断するとなぎ倒されんばかりの強風で、まるでアコンカグアの上に雲を形成する上昇気流が強烈な勢いで裾野から気を吸い上げているようであった。油断して車のドアを吹き飛ばされたりすることがあるらしい。何せ相手はアンデスであり吹上、吹き下ろしは中途半端ではない。元の道を走り帰ること二時間半同じ景色が何処までも続く感、街に着くと最初の日も行った大きなスーパーに立ちより、今晩居宅屋上で予定されているアサドパーティー用のビールやアイスクリーム等を買い込んで帰る。

現地会社の支配人と同僚四夫婦と八階の共用のアサドパーティー会場で。皆さんの作ってきたサラダやらエンパナーダスやらデザートやらも一杯のアサドパーティー、スペイン語・英語・仏語入り混ざってワイワイと楽しい集まりであった。皆さんやがて散り散りになって行くのは寂しいことであった。

四日目、動物園に。一〇時ホテル発、一〇時三〇分～一二時の間でも足りない位楽しんだ。小さな小山に螺旋状に道をつけ、そののり面を抉って檻を作り、平坦部やなだらかで広い斜面に放牧場やプールを設置し、回遊しながら生態を観察できるようになっている。一〇〇近いゲージがあり、ライオン、虎、象、カバ、ピューマ、黒豹、豹、山猫、羆、白クマ、野牛、ゴリラ等サル類、シマウマ等馬類、鹿、羊、山羊、リャマ、ビーバー、コンドル、鷲、鷹、隼、オウム、インコ、・・・。種類は豊富、日本・中国からの鳥等も明示されていた。専門家でないので評価は出来ないが、リャマや鷲鷹類や山羊類やピューマの種類の多さや数の多さに地域性が表われているように感じた。昼は公園近くのこれも一昨日閉店だったエル・パティオで。レストラン内の大きなアサド炉を見学、焼肉中心の昼食を。皆食欲旺盛。

明日はブエノスなので、ホテルに駐車の上、土産物を探しに独立広場を横切って散策に。二～五時が店の昼休みなので始めはしまっていたがやがて開店。サルミエント通りをサン・マルティン大通り迄行き四ブロック北へ上がってラスヘラス通りを左折、途中中央市場に寄り豚の丸焼きなどを見て、ミトレ大通りとの交差点角にあるお勧めの土産物店で買い物をした。後は小物をミトレを南下独立広場沿いのエルクリスト通りの小さな店で求め、

夕食はホテルの地上階レストランの軽食で済まし、翌日早朝に備えることとした。

（三）ブエノスアイレス

一二月三一日（木）、四～四時半起き。五時一〇分チェックアウト、飛行機が七時発故昨晩頼んだレミース（レミースはタクシーに比べコスト高だが、利便性・安全性が高い）が予定通り五時三〇分に到着。本日も晴天、国内線故手続きも楽で買い物の時間的余裕もあった。横に一列に座り、一時間のフライト。ランチリ航空機でブエノスのエセイサ国際空港（国内線はニューベリー空港原則）に着陸。国内機内でこれからずっと供される特有菓子を初めて味わう。メンドーサの空港で土産に買ったメンドーサ産ではなく、最大手のマル・デル・プラタのハバナ社のものらしい。高さ一～二センチのキンツバ状の茶と白色二種のチョコレート円盤で、中には甘い練詰めものが入っている庶民的お菓子でとても美味しい。

空から観るブエノスの景観はまさに大都市、降りて地上を多少歩かされたのにやや違和感はあったものの、海と見まがったラプラタ川沿いの道に向かい、混雑客が喧騒の中次々タクシーやらレミースやらバスやらに乗り込み走り出て行く様に納得感があった。やっとレミースを確保して市内へ。夕日がラプラタ川を染める頃、ドレス姿の婦人やタキシードにソフトの紳士が街に繰り出す贅沢三昧の良き時代を思い出させる、南米のパリと言われたブエノスアイレスは人口三〇〇万人に迫る二〇〇平方キロの大都会。先述メンドーサが市建設を進めた。市名の由来は聖女ブエン・アイレとも。ブエノス・アイレス（いい空気）とメンドーサと共に来たサンチョ・デル・カンポが言ったとの説もある。ラプラタに開けた港町として発展しただけあって沿道は暫くそんな港ヤードの雰囲気が続くが、次第に緑豊かな街並みに入りホテルに。

この日は気付けば大晦日、休みではないものの夏休みのこともあって新年を迎えるパーティー等も催されるため、客が多く朝食も通常のレストランでは収容仕切れず、広い宴会場を一つ潰してあてていた。ホテルチェックインは一〇時前、一室は入れてくれたがもう一室はまだ早いとのこと、朝食を着いてからと思っていたので、特別に扱ってもらってここで済ませた。幸い部屋の方にも落ちつけて暫し休憩。なおホテルの情報で大晦日の一二時合図にオフィスから紙吹雪が舞うとの話があったので、昼下がり家内とホテルを抜け出し大通りの向こう側のサン・マルティン広場をぐるりと回って帰ってきたが、この辺りでは何事も起こらなかった。（もっと中心部のビジネス街に行かないといけなかったのだが、着いたばかりで何処へ如何行けばよいかも分からなかった。）

ホテルに帰り昼はということになったがその時見つけたレストランでピザ・キッシュ等軽食をとることとなった。日差しも湿気も暑さもメンドーサに比べ強い。その後、直ぐ連なるフロリダ通り（パリのサントノーレのごとき）を垣間見た上、港の倉庫だったところが今はショッピングやレストラン街となって蘇えっているプエルト・マデーロ地区に散策の足を伸ばした。ディナーの場所探しも兼ねたがこんな日だから予約が一杯で見つからなかった。多くの人が行きかい憩う川沿いの岸を散策しながら早めにホテルに帰った。結局其の夜は多くの客がドレスアップして出て行くのやホテル宴会場で催されるパーティーに集まってくるのを見ながら、ホテルのバーの脇の店でサンドウィッチを食べて済ませた。日付変更時には花火や汽笛の音などがベッドまで聞こえた。

二〇一〇年一月一日（金）。日本で言えば元旦だが、休日ではあるもののニューイアー特別の朝食があるようではなく、昨日に比べビュッフェで目に付いたのは唯一ガトー風のパンがあったことぐらい。ややどんよりして午前中はぱらついたりしたがやがて良いお天気に。市内見物にとタクシーに乗って先ずは大統領府（カサ・ロサーダ：薄紅色なので）から。

ブエノスアイレスは、北西から流れてきたラプラタ川が大西洋に向かって扇型に広がって出て行く付け根近くにある港街である。大統領府の前の五月広場を挟んで向かいにあるカビルド（市議会、植民地副王府であったもので1725築）辺りから開かれた街で、シェラトンホテルのあるレティーロ地区（サン・マルティン広場や英国塔や四大駅の一つレティーロ駅）、その南のカビルド、大統領府、五月広場等のあるモンセラート地区、その南に続くサンテルモ地区が南北に走る鉄道線を境にその向こう旧ドッグと自然保護公園緑地のプエルト・マデーロ地区に面し、その東を大河ラプラタ川が流れている。更に南に一番古い港のあるタンゴ発祥の地ボカ地区がある（今はサッカーのボカ・ジュニアススタジアムでも有名）。またレティーロ地区の西にはサンニコラス地区（フロリダ通りやコロン劇場）、レコレータ地区（貴人達の墓地で有名、高級住宅地）、パレルモ地区（広く公園、動・埴物園、競馬場等）と続く。と、中心部は東のラプラタ河岸と平行に、街路が丁度南北・東西に網の目のように走っている。地区は四八ある大都市だがこれが中心部。

この日は、前述の一八一〇年五月二五日独立宣言の行われた五月広場の周りの大統領府、カビルド、そしてメトロポリターナ大聖堂で新年のミサを観て、そこから西にオベリスクのある南北に延びる七月九日（1816/7/9国民議会招集）大通りを横切り国会議事堂へと続く五月大通りを歩きだす。途中喉を潤すためカフェを探し右折、コリエンテス大通りまで行き左折その後また西に向かってオベリスクの聳える、一九〇六年出来た世界一の道幅（100ｍ）と言われる七月九日大通りにまたぶつかり南北にまっすぐ伸びるその幅広さを実感、ダカールラ

リーの起点になっておりこの日その前日祭が始まる予定であった。この大通りを南に三区画行ってそこから大統領府からまっすぐ西に向かう五月大通りにまた乗って西の国会議事堂に向かう。その手前の国会議事堂広場で少し休んだ後、小雨模様になったのでタクシーを拾って途中一軒心当たりのレストランに寄るも閉まっており（一日故閉まった店多し）、結局元へ戻ってサン・マルティン広場の脇のプラザホテルのレストランで美味しい昼食にありついた（一人フィットチーネ、他はビュッフェ）。

ホテルに帰り暫し仮眠を取って、七時三〇分に予約の取れたプエルト・マデーロ地区の赤レンガのレストラン街のミラソル（向日葵）に。エンバナーダス（野菜、牛、鳥）とサラダ、そして伝統の焼肉（胸腺肉、小腸肉、ロモ）とワインも選んで帰りは一一時近く。

一月二日（土）市内観光二日目、晴天だが暑い一日。東京の夏に比べればずっと凌ぎやすいが、日差しの強さはボデーブロー気味に効いてくる。一〇時過ぎにタクシーでレコレータ墓地に。周囲緑多く高級住宅・マンション地区。一八八二年開設のブエノスで一番古い墓地。一五〇m四方、六四〇〇納骨堂、うち七〇は国の文化財指定、一三人の歴代大統領の墓。しかし、常に人が群がり花が添えられているのは、エバ・ペロン・エビータの墓。非嫡出子から女優、大統領夫人となりペロニスタ婦人党組織等実質大統領を支え、国民の人気を博し三三歳の若さで亡くなった彼女は、今でも人々の心の中で現役である。アルゼンチンは美人国と言われる（男は？）が、街に今でも溢れるエビータは絶世の美人の名に恥じない。一九四三年六月の軍部クーデターでラミーレス将軍が大統領になるが、真の支配者はペロンで全体主義者。労働組合を握って政治機関を作り上げ、政権内の階段を瞬く間にのぼって一九四八年二月大統領に就任した彼は民衆扇動政治家であった。

四三年暮れペロンに出会い協力者で愛人となったエバは、四五年失脚しかかったペロンを、労働者のデモを指導し権力を回復させ、その後結婚。四六年選挙の勝利は彼女に帰せられると言われている。労働長官にもなり、エバ・ペロン財団を組成し慈善事業を国家的に行い、貧乏人の女神とも呼ばれ五一年には副大統領にとの動きもあった。五二年七月死去。貧しい大衆の希望と祈りであった彼女は、ローマ法王に聖徒として祈るよう請願が出たり、街や通りの名となって残るだけでなく、永遠のマドンナとなった。一九五五年九月軍・市民の反乱でペロン失脚・亡命（パラグアイ）。日本ではそもそも中南米の関心が薄いからだろうが、一九七〇年前後復帰するペロンが死去後短期間引き継いで、結局失脚するセシリア・ペロンとエビータを混同しエビータのこの人気を理解していない人が多いように思う。サルミエントやミトレやエストラーダ等の墓も観て辞す。

昼は隣のアルベール広場に面した「ブエノスアイレスデザイン」というショッピングとレストランのコンプレックスで、買い物の後リストランテでリゾット、ピザ等で昼食。広場には露天が並び多くの人々が昼下がりのひと時を思い思いに過ごしている。タクシーを拾ってサン・マルティン広場へ、息子はフロリダ通りへ買い物に、我々は先にホテルへ。

そして午後はラ・ボカ地区へ。「河口」という名の昔アルゼンチン一の港、造船所、船、労働者、賭場、安酒場、そしてタンゴ発祥の地。ボカの風景と労働者を荒々しく描いて世界的に有名になった当地生まれのキンケラ・マルティン、その親友で詩人（ガビーノ・コリア・ペニャローサ）が残した名作カミニートを記念しようと、リアチュエロ川の曲がったところから始まるカミニート（小径）に自ら金を出して建てた病院、小学校、幼稚園、美術館等の建物がカラフルに（私には原色のサイケデリックなものにしか感じられなかったが）軒を連ねて観光名所となっている。そして少し北へ行くとボカ・ジュニアーズ・スタジアム。一九〇五年イタリア系移民中心に結成されたボカ・ジュニアーズはマラドーナ等輩出する世界屈指のサッカーチームになった。プレイ日ではないが一目みたい客で溢れ奥へ進めぬ状況。タクシー乗り場もあらっぽい。顔ききのようなのがいて差配している。夜はホテルから南へ三〇〇～四〇〇mの日本レストラン「入り船」へ。寿司、てんぷら、焼き鳥・・・。二階もありかなり席あり、現地の客も含め結構入っていた。

一月三日朝は通常の状態に戻ってグランドフロアのカーディナルで。一〇時ホテル迎えのブエノスアイレス観光バス社のパンパ観光に。出発間もなくドレーゴ地区の骨董街で買い物時間もあったが、なんといっても目当てはガウチョの牧場（エスタンシア）、途中マテ茶のサービスやガイドさんの話で一時間半北へ。降りると先ずエンパナーダとワインで出迎え、それから希望者は馬試乗、ひと回りした後は大きな牧場舎でビックリするほどの大人数でガウチョ料理。チョリソから始まって肉のあらゆる部位が次々と出る。建物内に熱気が充満している。食事が終盤になると余興が始まる。タンゴの踊りに始まり唄、話術。その後買い物やまた馬場へ出てガウチョの流鏑馬の様な技の披露等楽しんで帰路に。

（四）プエルト・マドリン

一月四日四時五〇分ホテル発五時一〇分飛行場着。LAN（ランアルゼンチナ）に並んで五時半頃Austral航空であったことに気付き列を変わったが、システムの関係で間に合わぬとのこと、次の七時二〇分発に乗ることに。朝食は小クロワッサン二個にかたい薄いパンにバターとチョコレートと飲み物。一時間四〇分程でバルデス半島の拠点トレレウへ着陸、ここで頼んであったレン

タカーで半島に一番近い町プエルトマドリンへ。心配はしていたがマニュアルなので慣れるまで信号などでエンジンストップ。殆ど一直線に続く道で周りを砂地に囲まれて走り、約一時間で海沿いの町プエルトマドリンのホテル Yune Hue Puerto へ。九階に落ち着き見渡すとヌエボ湾が広がり海岸線沿いに海水浴客、一歩入ると街路樹のある広い遊歩道とその中に子供の遊び場やメリーゴーランドなどがある。左手には桟橋が海へ長く伸びて、後から分ったことだが常時警戒態勢にある海軍艇と海上保安庁艇が先端近くに停泊している。翌日の半島観光ツアーを申し込み、本日午後はトレレウに戻って恐竜博物館へ。近くのカフェ風レストランで昼食、ピザ二つ（ハム・チーズ・パルミットと魚介：大量で大変）食べた後二時過ぎに出かける。地球誕生から始まって始めての生物の遺伝子が出来て変化してゆく映像の後、パタゴニアの発掘恐竜を中心とした紀変化をその化石のレプリカでたどる。ジュラ紀のパタゴニアサウルス等の巨大恐竜たちである。巨大な足の骨から体長三五mと推計されるアルゼンチンサウルス。恐竜のシャツ等買って冷たいもので喉を潤し、五時過ぎプエルトマドリンへ戻る。休んで七時過ぎに街へ買い物に散策、海岸沿いを歩いて還るが、まだ明るく海水浴客も残り、八時半頃東の空がピンクの光を、そして暮れなずむ。夜は、ホテルで魚中心の料理で、マゼランアイナメ（Mero）やイソギンポ等。

南緯四〇度アンデスから大西洋に流れるコロラド川の流れを境に、パタゴニア地方が始まりこの辺りはステップ状の高原だが、リオ・ネグロ州とチュプト州の州境を越える頃、乾燥した不毛地帯に変わってくる。チュプト州とその南のサンタクルス州はアルゼンチンでも屈指の羊牧場となっている。そのチュプト州の大西洋に突き出したバルデス半島にはペンギン、ゾウアザラシ等の生息地があり、一九九九年には世界遺産となった政府の保護区である。トレレウが人口八万に対しプエルトマドリンは六万、ホテルからだけでは分らなかったが、ここは漁業だけでなくアルミの町でもある。一九五〇～六〇年頃ブラジルからアマルガムを輸入し電力を活用してアルミ生成工場を作ったことで人口が二万から八万へと増加したといわれる。漁業もそのまま欧州市場へ行くので「ここで本当に新鮮かつうまい魚の料理店は数少ない」と、ツアーのコンダクター、リタさんが翌日説明してくれた。

一月五日。七時朝食ここは飲み物もセルフ。七時四五分ホテル発、バルデス半島ツアー。乗り込むと既に朝食時一緒のカップル二組、さらに近隣ホテルで三～四組拾って出発。始めはパタゴニアの砂草原をひたすら走るだけで動物は何も見えず。一時間で半島付け根のプエルトピラミッドへ、公園内への許可証をもらう。予定ではここで乗船し、ゾウアザラシの生息を海上から見る予定だったが強風で欠航。生息魚・鳥・動物の博物館だけ見

学して、またバスに。半島南側を一路東へ、途中塩湖が大小二つ、リャマ・羊・マーラがたまに現れる。南端のプンタ・デルガタでシーライオン（アシカ）をクリフの下に観察、そこから北へ海沿いに上ってラ・エルビータで砂浜直前まで下ってゾウアザラシを観察。今頃が年一回の産期、三組のグループが来ていて一頭三トンのオスに八〇〇キロのメスが六〇頭位の構成、生後一月で乳離れ一〇〇キロ位に、若いオスは魚介を食べに二ヶ月で。四〇〇Mはもぐる、深いのは一〇〇〇Mも。三～四ヶ月で海へ戻って行く。冬は別のところで過ごす。オスは一〇〇〇キロもメスは四〇〇〇キロを泳いでくる。風は依然強いし体感温度も低い。ここのレストランで昼食、ビュッフェだが羊肉を直接焼いているところで皿にサーブしてくれる。二時発で五分も行った所で下車、マゼランペンギンが三〇～四〇頭は見れるということである（大きな生息地はもっと北側ということだったが）。結構多くいてこちらも産期なので子ペンギンが岩穴から顔を覗かせていて可愛らしい。そこからはまた砂と石ころの道をひたすらプエルトマドリンへ、五時着。街の手前には暫くアルミ工場地帯が続く。夜はリタさんのお勧めで Mariscos del Atrantico へ。Club Nation Atrantico の建物の二階にある。超満員の海洋風のレストランで魚介料理を満喫、海風に当たりながらホテルに戻る。

一月六日、ヌエボ湾東のレオン岬の稜線上に赤い帯が現れやがて円環にそして太陽の端が見えてくる。街灯が次々自動的に消えてゆき鳥が飛び立つ。太陽が全身を現したのが六時、六時五〇分頃レストランへ、ムッシューがやっと現れ、コーヒーミルクとクロワッサンが出てくる。ホテル駐車代や昨日のツアーの精算で時間がかかり、車はガソリンを入れて返す為市街出口で時間を食う。スピードを出して八時五〇分トレレウ空港着。レンタカーの処理終えて搭乗、ジャケット着ても随分涼しい。スケジュール通り離陸・着陸。大きなコッペパン状のサンドウィッチと例のチョコレートケーキ。着陸したブエノスではイグアス行きが三〇分以上遅れて離陸。

（イグアスの滝）

イグアス空港滑走路が濡れている、雨が上がったところ、ガラッと景色が変わり蒸し暑い。レミースでホテルへ向かう道は亜熱帯の森の中、湿気が感じられる。蝉（ニイニイ？、ツクツク）の声が聞こえる。公園入口で三〇〇ペソの税を取られる。これとタクシー代七〇ペソと合せて運転手さんは七〇ドルで手を打つ。迎車の約束とドルの貴重さがそちらを選択か。シェラトン・イグアスホテルからは庭の向こうに滝から上る水蒸気が見える（部屋は滝側ではなかったが）。明日のツアーを頼んでこの日のディナーはホテルのレストランガルガンタで七時三〇分から。ここは離れたホテル故結局食事は常にホテ

ルで摂ることになる。ここの魚のスープとロモと羊。

世界の三大滝イグアス、ナイアガラ、ヴィクトリア。滝幅、落差、落下水量それぞれでざっと比べると、滝幅は順に四キロ、二キロ、一・七キロ、落差八〇M、五五M、一〇八M、落下水量六・五万t／秒、二・六万t／秒、〇・一万t／秒。ブラジル南部山地に発したイグアス川がブラジル・アルゼンチンの国境でイグアスの滝となり、流れ下ってパラグアイ国境でパラナ川に注ぎラプラタ川となり大西洋に注ぐ。先住民グアラニー族の言葉Igu（水）とAzu（壮大さへの驚嘆）に由来、一九八四年アルゼンチン側、一九八八年ブラジル側が世界遺産に。ナイアガラは五大湖上流の三湖の水がエリー湖に注ぎそれがナイアガラ川を通ってオンタリオ湖に向かう途中にナイアガラの滝がある、カナダ滝八四〇m、アメリカ滝三二八m、その先はセントフローレンス川を下って大西洋へ出る。最初に発見した白人は仏大探検家シャプランの通訳だったエティエンヌ・ブルーレ。一七九一年に粗末だが宿屋が一軒出来、この頃から観光客が年毎に増えるようになった。ヴィクトリアはアンゴラ奥地に発しザンビア西部を縦断するザンベジ川、その中流でジンバブエとザンビアの国境線を形成し、モザンビーク海峡、インド洋へと注ぐ。拠点ヴィクトリア・フォールズはジンバブエ観光のドル箱的存在。一八八五年リヴィングストンにより発見され女王の名を付けられたこの滝の現地名はモシ・オア・トゥンヤ（雷鳴のとどろく水煙）。

一月七日。滝巡りのコースに三つあり、パセオ・エコロジコは上流をゴムボートでクルーズ周辺観察、アドベントゥラ・ナウティカはイグアス川の滝の下流をスピードボートでクルーズ、サン・マルティン島の対岸から発着、悪魔の喉笛を下から眺めたあと、寒くない日は滝の真下に入ってずぶ濡れになる。グラン・アルベントゥラは、オープントップの4WD車（要するにトラック荷台に椅子）で約八キロ西・葡・英のガイドの説明付きで移動、前者とちょっと違うスタート点から同じボートクルーズを行う、この三つ目を予約したのだった。ずぶ濡れが本当のずぶ濡れと認識しなかったのが誤りであった。合羽でも貸すのか思ったら、荷物入れの防水袋だけ、海水着と書いてあったのに後から気付いた。要するに足の下からもお尻の下からも勢いよく水が吹き上がってくるから、なまじのものではズブ濡れは防げない。これでもかこれでもかと突っ込むから水の勢いで息も出来ないし、冷たい。幸いなことに好天で暑いから上陸して上の下着を脱いで、あとは上から絞って下の熱くなった石畳に座っているうちに乾いてきて多少は歩ける状況にはなり、上着を着てホテルへ還り洗濯しシャワーを浴びて一息。子供や若者達は立ち上がって騒ぎ喜んでいたが、確かに年寄り向きではなかった。気付くと船頭達はゴム製の雨具で完全武装で恨めしく思った。行きのトラックでも直ぐマ

イクが壊れ聞こえなくなり、分ったのはここのパルミットの木は一本で一キロしか取れずブラジルのそれが一〇キロ取れるのとは雲泥の差があり、保護の対象になっているということぐらいであった。途中で蝉が舞い込んだが、遠くから見てクマゼミのような感じであった。

同じレストランでピザ・パスタ、昨日スープの魚は巨大魚Scrubi。二時過ぎに出発。滝の上を歩く道にはホテルの近くからlowview circuit（濡れて還ってくる時も途中から）、upview circuit（サン・マルティン島を見下ろす辺りまで）、そして遊覧電車で行って終点で降りてそこから悪魔の喉笛の真上まで。公園入口のセントラルステーションから来た電車にカタラタスステーションで乗り込むと一車線の電車は途中の待ち合い帯ですれ違う。乗る時一台乗り過ごしたように大混雑で、ぎしぎし一杯駅員がベンチ椅子を詰めさせて、スタート。着くと直ぐ側の岸から鉄鋼製の橋を岩場伝いに悪魔の喉笛まで。水勢・轟音・噴煙・・凄い迫力、また写真を撮る場所が見つからない混みよう。そんな中で椅子一つ武器に周りを蹴散らして商売にいそしむ写真屋に感心。ふと顔を上げると対岸にブラジル国旗。そういえばブラジル側からは滝の全容が居ながらに見える筈だった。暑さでバテ気味な体を抱えまた並んで満員の電車で帰路に。一九時三〇分夕食、昨晩と同じ席でハープ演奏が離れているが横からよく見える。日本人客も団体さんか多く見かけられ、彼も意識してか日本の歌も弾く。昨晩食後三人が側に聴きにいったこともある。今日ツアーで一緒の若いカップルは珍しく単独行である。この特別席で今日はシェフのスペシャル（帆立貝、レモンのグラス、ピンクサーモン、エンバナーダ）を。ニュースではロンドン大雪空港キャンセル・ディレイ相継ぐと、アメリカも寒波、帰りが心配に。

一月八日。七時半朝食、ダウンした家内を置いて八時過ぎ歩いてupper circuitへ。猿、コアティの群れやトゥカン等珍しい鳥や万般の蝶が途中に現れる。滝を見納めて、一〇時チェックアウト、レミースの来る一二時四五分迄ロビーで過ごす。その後そのテーブルでサンドウィッチとって早ランチ、時刻に一昨日のウンベルト運転手がやってくる。イグアスインタナショナル空港へ、彼曰く黒雲が広がってこれから雨とのこと。空港で土産に見ザル・言わザル・聞かザルの小さな木彫りを買った。

（再びブエノスアイレス）

ブエノス空港も金曜日のせいもあってか大混雑。レミースも捉まらずタクシーで、途中息子をブエノス支社で降ろし再びシェラトンホテルへ。夜八時過ぎ皆揃ったところで、店からの出迎えのミニバスで、Cafe de los Angelitosへ向かう。先ず定番の食事（選択はある）九～一〇時、そしてタンゴ一〇～一一時、熟練の技大変な

スピードとテンポ、踊りだけでなく合間に演奏と歌を織り交ぜて多彩なショー（カップル的四組とベテランそうな一組、女性は司会役も男性は演奏や歌にも）。一一時半シェラトンホテル着。

一月九日。今朝は帰国に向け疲れを取る為、ゆっくり起床九時朝食、息子は一〇～一一時。朝食後残った買い物をとフロリダ通りへ、ハンドバッグとハバナチョコを買って帰る。一三時半過ぎに昼食に出かけ一四時頃からホテルパークハイアットのパラソルの下で。下の大通りから入って水と緑豊かな斜面状の中庭の上層部にある。両隣の由緒ありそうな建物や緑豊かな大きな木を眺めながらアルゼンチン最後の昼を楽しむ。帰りは歩きでさすがに昼は暑い。次第に素晴しいレジデンスやブティックの続く街並みとなり、日陰も増えゆったりと歩けた。

（帰国）

五時にはホテルに帰り荷物の最終パック、一八時一五分チェックアウトで半日分の追加ペイを。国際空港に約一時間、混雑。オバマ政権の厳しいテロ予防策打ち出しのためチェックインの前から様々なクエスチョン、チェックイン後も手荷物、出国審査、ボディチェックも全て強化・厳しく、そしてボーディングを一時間早めたが結局九時半予定時刻通りの出発。米国の天候も回復し、行きで散々苦労した学習効果もあって、所用時間は変わらぬものの比較的スムースに帰ってこれた。ブエノスアトランタも機上でディナー、その後就寝のままになって、明け方の着陸近くの時点で起きた者から軽食という形。乗り換えたアトランタからも機上暫くしてディナーをとって消灯、そのままずっと就寝後軽食をその状態で摂ってランディング。時差調整にも役立ったように思う。予定通りに帰国した。

つづく。

司馬遼太郎と車寅次郎（一）

山田嘉久

今回のテーマは敢えて「司馬遼太郎と車寅次郎」とした。車寅次郎とはWHO？

云わずと知れた国民的映画といわれる「男はつらいよ」の主人公「フーテンの寅」のことである。

読者はこの人物と国民的作家といわれる司馬遼太郎とどんな関係にあるのかと不思議に思った筈である。

またある人は車寅次郎でなく「吉田寅次郎」の間違いじゃないかと思ったかもしれない。吉田寅次郎すなわち吉田松陰の通称だが、吉田寅次郎なら司馬の好きな人物で「世に棲む日日」という大作も書いている。

（１９７２年吉川英治文学賞受賞、77年ＮＨＫ大河ドラマ「花神」の原作ともなった。）

しかし此処で取り上げるのは、その寅次郎ではなく、はっきりと喜劇映画の車寅次郎に相違ない。

何故そのような人物を取り上げるのかといえば理由は簡単で、率直にいえば私は司馬に対すると同じ位、「寅次郎」ファンだからである。

しかし世の数多くの司馬評論家たちは私の知る限り誰一人として両者の関係なぞ採り上げものはいない。それ ばかりか、「あの日本を代表する知性の巨人である司馬遼太郎と喜劇映画の主人公とを一緒に論じるとは何事であるか」と目くじら立てて怒るに違いない。

しかし多分、当の司馬本人は笑って許してくれるはずと思っている。というのは司馬作品を何度も読んでいると「寅次郎」が時々登場してくるのに気が付いたからである。

おや？司馬も私と同様に寅次郎が好きなんだと段々思うようになった。

勿論、司馬自身は「寅次郎が好きだ」とは何処にも書いていないので、私の持論（？）は私の身近の少数の司

馬同好会などで披露する程度で決して文書化する勇気は持てなかった。格調高い「まんじ」からはパージされる懸念もある。

しかし、ある時、司馬の私生活まで知っている顔見知りの村井重俊氏に思い切って聞いてみた。同氏は「街道をゆく」の最後の司馬担当記者（司馬番）である。

「司馬さんは映画など興味がありましたか？」

なにしろゴルフ、野球などスポーツは勿論、カケ事などには一切興味のない、「趣味は読書」と公言している大作家のことである。突飛な質問であることは私自身が分かっていたが意外な答えが返ってきた。

「司馬さんは映画は好きでした。特に寅さん映画はよく観ていました」

この時ほど、我が意を得たりの気持ちになったことはない。

従って、以下のことは全く私の独断と偏見に基づくものであることをまずお断りしたい。

昔、文豪徳富蘆花は「みみずのたわごと」という随筆を書いたが、私のは単なる「山田のたわごと」である。

一　私の「司馬遼歴」と「寅次郎遍歴」

本題に入る前に私の「司馬遼歴」と「寅次郎遍歴」について、簡単に触れておきたい。

1　私の「司馬遼歴」

私が「司馬遼太郎」という作家の名を知るようになったのは昭和35年頃だったと思う。この年、司馬は「梟（ふくろう）の城」（原題「梟のいる都城」）で直木賞を獲得して作家の仲間入りを果たした頃だった。当時の彼の住いは大阪四つ橋にある「マンモスアパート」最上階（10階、当時「マンション」という言葉はまだない。住宅公団としては日本一の高層建築だった。それにしても大阪人のモノの付け方はすべて即物的である。東京人ならもう少し洒落た名前を付けたであろう）で、偶然にも私はこの付近にある銀行支店の外回り担当だった。新聞で彼の受賞を知った私は早速、新規開拓のため司馬宅を訪問したが、生憎留守で会えなかった。しかも再訪を怠ってしまった。

その頃の私は司馬よりも彼の隣室に住んでいる「南海ホークス」の花形選手野村克也に関心があった。別にフアンでもなかったが同チームの「御堂筋優勝パレード」には私のテリトリー（担当地域）であることをいいことに、パレードの後ろから付いて行く不埒な行員だった。

もし、あの時そんな暇があったら、司馬宅を再訪していたら顔見知りにもなったし、あわよくば取引にも結び付けたかもしれないと思うと、今でも残念でならない。

一方、野球オンチである司馬が隣人が有名なプロ野球選手であることは知る由もないが「執筆に疲れて、夕方散歩に出かけようとしてエレヴェーターに乗ると、これから出勤しようという大男によく出会った」という意味の随筆を書いている。この大男が野村選手であることは間違いない。

その後、間もなく司馬は此処から近郊の布施市（現東大阪市）に引き越すのだが蔵書の置き場所が無くなったというのが移転理由だった。司馬の「資料集め」は伝説的で、例えば「竜馬がゆく」執筆時には幕末、維新時の資料本が軽トラック一杯分、神田古本街から大阪に運ばれたという。金額にして1千万円。新人作家としては可なりの金額だが、後に「竜馬がゆく」の原稿料が吉川英治並みの月百万円と聞いて納得した。当時、販路拡張を狙った産経新聞社長水野成夫（しげお）の英断だった。

頼まれもしないで他人（ひと）の懐具合を心配するのが銀行員の悲しい性（さが）である。

司馬が引越した同じ頃、私も正反対の方向にある通天閣近くの支店に転勤してしまったので、司馬には生涯会う機会を失してしまった。

私と違って、移転後の司馬宅を早速訪問し取引成功したのは同業の三井銀行（現三井住友銀行）小阪支店の外部担当F氏だった。

「小説家らしいがおとなしくてええ人」との近所の噂に気をよくして、訪問するとなんなく口座が出来た。その口座に今まで馴染みのなかった文春、新潮社、サンケイ、朝日などからまとまった振込が入り始めた。

司馬宅の前には社旗を付けたオートバイが常に2、3台、軒を繋るようになる。流行作家に駆け上る様子がよくわかる。

そればかりか、F氏の記事によると司馬自身が費やす図書代の支払もすべて彼に任された。東京神田界隈の書店からの請求書も「三井銀行小阪支店気付司馬遼太郎様」であった。司馬（特にみどり夫人）の信頼を得たF氏は司馬家の家計まで任されたわけである。

時には司馬の書いた原稿を東京出版元に届けるため伊丹空港までバイクを飛ばしたことも再三あったという。ファックスもメールもない時代である。

これらは、今では全く考えられない行動だが古き良き時代の銀行員の生態である。

なお、F氏は転勤に際して、司馬から餞別として司馬自筆の色紙を頂戴している。

「物は陽の下で想え」

物を思う時は陽が落ちてからは止めなさい。いつも太陽の下で考えないと悲観的なことしか浮かばない。いかにも司馬らしい言葉であると思った。

以上は司馬の死後、F氏が書いたエッセイ「司馬さんの形見」に拠ったが、同エッセイは「'98年版ベスト・エッセイ集」（文藝春秋刊）に選ばれている。

後日、当行小阪支店長となった同期のO君に「司馬宅を訪問したら」と勧めたが「あそこは三井一行だから」と最初から匙を投げていた。

私自身も現在でも毎年、「司馬遼太郎友の会」会費を三井住友銀行に振り込んでいるが、その都度、過去の失敗を思い出している。

私が本格的に司馬作品を読み始めたのは2回目の大坂転勤となった昭和45年頃である。昭和45年と云えば「大阪万博」の年。この頃、頓に落ち目となった大阪が最も元気になった年だった。どの得意先に云っても連載中の「坂の上の雲」が話題となっていた。

多分、元気となった大阪の雰囲気と明るいこの本の内容（何しろ日露戦争に勝つのだから）が上手くフイットしたためだろう。

（十数年前、「まんじ」代表三戸岡氏から当作品連載中のサンケイ新聞切り抜きをどさりと大量に送って頂いた。それを再読していると否応なしにその頃毎朝、満員電車の中で熱心に読んでいたことを思い出した。なお、本稿の校正中に同氏のご逝去が報じられた。改めて哀悼の意を表したい。）

この小説は、私が読み始めた時より2年前の昭和43年から始まっていた。昭和43年といえば、明治百年に当たり、また、この頃は東大紛争をはじめ学生運動もピークに達していて、「止めてくれるなおっかさん」と高倉健をあしらった東大五月祭のポスターが話題となった頃である。

そんな時に明治百年とはいえ、よりによって日露戦争とはアナクロニズムも甚だしいとの雰囲気が東京にはあったようだ。

従ってこの本のブームは大阪から起きたが、連載が終る頃（昭和47年）には全国的なベストセラーとなっていた。

なお、興味深いのはこの年のベストセラーにもう一冊あったことだ。その本の名前は「日本列島改造論」（田中角栄著）である。

前述のように「坂の上の雲」は途中から読み始めた（多分、「旅順総攻撃」あたり）ので、なにか纏まった司馬作品がほしいと、日曜日の朝、住まい近くの小さな本屋で手にしたのが乃木将軍を主人公とした「殉死」だった。

一読して、大げさに言えばカルチャーショックを受けた。我々世代の乃木希典観といえば乃木こそ日本近代史の神話的人物であり最大の軍神であった。それに反して司馬は乃木の軍人としては全く無能であり、単なる精神主義者であると断定した。しかも乃木自身がそのことに気が付かず、たとえ気が付いたにしても悲劇を自分の悲劇に組み入れてしまう乃木のセンスは理解できないと厳しい内容だった。

昭和43年といえば、まだナマの乃木を知っていた世代の多い時代である。その中で敢然と乃木を否定した勇気にまず驚いた。

司馬のこの乃木感は続編である「坂の上の雲」でも引き継がれていた。現在でも「司馬作品で最も感銘を受けた作品」と聞かれれば、躊躇なく本作を推奨している。

その後も司馬作品に傾倒して特に退職後は全く「司馬遼太郎の世界」に浸り込んだ。平成16年から同人誌「まんじ」に加入させて頂き司馬を主題とした雑文も80作を超えるようになった。

今では、司馬作品に囲まれながらの一時（ひととき）が九十翁にとっての至福のときとなっている。

2　私の「寅次郎遍歴」

私が映画「男はつらいよ」を観るようになったのは記憶がはっきりしないが、たしか昭和50年代、それも後半だったと思う。

私の悪い癖で映画館に行った時には必ずパンフレットを求めているが、今手元にある寅次郎パンフレットのうち一番古いものは第34作（昭和59年「寅次郎真実一路」）で、それ以降の20作は全部揃っているので毎年2回（盆と暮れ）にせっせと封切館に通ったことになる。

当時、たまに読んでいた「キネマ旬報」でも古いものでは昭和58年1月号に第30作「花も嵐も寅次郎」が載っている。

また、同じ手元にある「山田洋次作品集」（全六巻）も一巻目は昭和60年刊となっている。

逆に云えば、全作48作のうち映画館で観たのは後半の半分に過ぎないということになる。

昭和50年代までは「一億総働蜂（そうはたらきばち）」の時代、映画館に行く余裕などなかった。

ただ、寅次郎映画の前駆的番組であったテレビドラマ「泣いてたまるか」（TBS）やその続編「男はつらいよ」（フジテレビ）は時折、観ていた記憶があるので、この頃から寅次郎には関心があったのだろう。

「泣いてたまるか」は昭和41年から3年間、非常に高い視聴率を誇ったお化け番組で、最終回のトリを取ったのが山田洋次脚本による「男はつらいよ」だった。その続編がフジテレビで放映された「男はつらいよ」である。

映画とおなじ山田洋次脚本、渥美清主演。（ただし、さくら役は賠償千恵子ではなく長山藍子だったと思う）。

このテレビドラマでは最後に寅次郎が奄美大島でハブに噛まれて死んでしまうという設定になっていたので、全国の寅フアンから「寅さんをなぜ殺してしまったのか」の苦情が殺到したため、改めて映画化したという経緯がある。

当時は当然ながら、まだビデオテープはない。ビデオデッキは70年代にソニー対松下電器による規格統一の争いを経て80年代から全盛を迎えていたが、映画「男はつらいよ」シリーズに限って云えば、なかなかビデオ化されなかった。

なにしろ松竹にとってはドル箱映画である。これが実現したのは平成に入って大分経ってからである。平成7年に主役寅次郎を演じていた渥美清が急死してから漸く実現した。

それも全シリーズ48巻が一斉に揃ったわけではなく、月に1本とか2本、何年も架けてビデオ化されていった。しかし例外的に第一作だけはなかなかビデオ化されなかった。遅延の理由は分からなかったが業を煮やした私は家電量販店で販売されていることを見つけた。一本2万5千円と当時としてはかなり高価だったが思い切って買った。

その理由は第一作品にしかない寅次郎の名セリフがあるからだった。通常二作目からは寅次郎は半年ぶり（後半は一年ぶり）に懐かしの故郷—柴又に帰ってくるが、第一作だけは20年ぶりに帰ってくる設定となっている。なぜ20年も帰ってこなかったのか、その理由をこの映画の冒頭で寅次郎は長いセリフで説明するのである。

少し長いが引用する。

「桜が咲いております。懐かしい葛飾の桜が今年も咲いております。思い起こせば20年前、つまらねえことで親爺と大喧嘩、頭を血の出るほどブン殴られて、もう一生帰らねえと覚悟をしておりましたのを、桜の咲く頃になりますと、決まって思い出すのは故郷のこと、ガキの時分、洟垂れ仲間を相手に暴れ回った水元公園や、江戸川の土手や帝釈天の境内のことでございます。風の便りに両親も秀才の兄貴も死んでしまって、今はたった一人の妹だけが生きているとは知っておりましたが、どうしても帰る気にはなれず、今日の今日までこうしてご無沙汰してしまいましたが、今こうして江戸川の土手に立って、生まれ故郷を眺めていますと、なにやらこの胸の奥がぽっぽと火照ってくる気がいたします。

そうです。私の故郷と申しますのは、東京葛飾の柴又でございます」

第一作目で寅次郎が背広姿にネクタイと今から見れば奇異に感じる以外は、第二作以降のエッセンスは全てこの一作目に凝縮している。改めて脚本・監督の山田洋次のスゴさを感じた。第一作目を全48巻の最高傑作と評価する由縁である。

前述の通り、映画「男はつらいよ」はテレビ版からスタートしたが映画化に当たっては当の松竹首脳部はあまり乗り気でなかった。

当時の映画界をみると、かって「羅生門」や「雨月物語」の名作を生み出した大映は既に倒産している。また名門日活はロマンポルノなるおかしな路線に転換するなど映画界不況の時代だった。

そんな時代、なにしろ堅気でないものが主演となる映画だから、当初の計画では単品で終わる予定だったようだ。それが予想外の人気で以後26年間、48作と「男はつらいよ」は続くようになる。

その昔、私の自宅の近くにレンタルビデオ屋があって、その前を通ると、顔見知りのビデオ屋のおばちゃんに呼びとめられて「旦那さん、新しいのが入りましたよ」と、目の前で封を切って新しいビデオを渡してくれた。

まさに「封切り」だった。

今では各放送局ともシリーズ各巻を繰り返し再放送しているので（例えば「テレ東」では目下、毎週放映中）、私も何回目であることを重々、承知しながら性懲りもなく嬉々としてテレビの前に座っている。家人も半ば呆れながら付き合ってくれている。

二「街道をゆく」の中の「車寅次郎」

司馬後半生の傑作「街道をゆく」の中から寅次郎登場の場面を拾ってみよう。

1「街道をゆく」22（南蛮のみち1）

16世紀半ば、日本に最初にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの生まれ故郷のバスク地方を旅する紀行文である。第一回新潮文学賞を受賞した。

バスク地方はスペインとフランスの国境のピレネー山脈の両麓に跨った辺境の町。私も20数年前に、この本を携えてこの地方を旅したが、旅装を整えている最中にたまたま司馬急死のニュースを聞いた。それだけに一層印象深い旅行となった。

ただ残念なことには生憎、「ザビエル生誕五百年祭」工事中のためザビエルの実家であるザビエル城内までは入れなかったことだった。ガイドの話では城内にはこの「南蛮のみち」が陳列してあるとのことだった。

なにしろ、ザビエルは初めて日本に来るわけだから日本人というものを知らない。

そこで日本に来る前にマラッカ附近で、日本に来たことのある船長に「日本人とはどういう民族なのか？」と聞く場面がある。

と船長は答えて曰く

「日本人は傲慢で怒りっぽい。貧しいけれども欲は薄く物惜しみしない。嫉妬をしらない、盗むことを憎む等々」

これが日本人の特長だという。

司馬はこの船長の話を読んで、これは山田洋次の描く車寅次郎とそっくりではないかと書いている。寅次郎を典型的な日本人だとしているのである。

確かに寅次郎は船長の挙げたすべてに当たる。特に「貧しいけれども欲は薄くて物惜しみしない」とは寅次郎の代名詞みたいなものとなっている。

常に寅次郎の財布の中は五百円札が一枚。それを彼は気前よく使う。時には格好つけて財布ごと相手に投げ与えることもある。「釣りはいらねえよ」とか言って寅は粋がるが、大抵の場合、逆に足らないことが多い。此処

で観客は爆笑する。
その後で妹のさくらが寅次郎に分からないように自分の財布からお札を取り出し兄の財布に入れてやるシーンも多い。
「寅次郎と五百円札」は寅次郎映画の名場面の一つで最初の頃のシリーズには必ず登場した。
しかし、それが昭和50年代中頃になると、ぷっつりとこの場面は消えてしまった。理由は簡単で昭和57年に五百円札は硬貨に変わったからだ。「寅次郎と五百円硬貨」では絵にならない。我々の生活からも五百円札の生活が終ったのである。
なお、司馬はこの本で代表的日本人として寅次郎の他、平家物語の熊谷次郎直実、義経記の武蔵坊弁慶、そして講談の一心太助、浪花節の森ノ石松を挙げている。

2 「街道をゆく」33（赤坂散歩）

この本にも寅次郎は登場する。
司馬は赤坂にある「高橋是清記念公園」を訪問、園内にある是清像を見ながら是清の生涯に想いを馳せる。
是清は若い頃から苦労した。アメリカに渡ったのはいいが、何の手違いか奴隷に売られてしまう。しかしそんな苦労を楽天家の是清は苦労とは思わず、日本に帰ってからは日本銀行総裁―大蔵大臣―総理大臣と出世していく。
国民からは「達磨宰相」と親しまれ、また昭和不況の時に大蔵大臣になった時は国民だれもが「この人に任せていれば大丈夫」と思った。それには彼の円満な風貌と人柄が大いに役立ったのだが、司馬はそれよりも何よりも彼を取り囲む人々が全部、善意の人ばっかりだったことを挙げている。
そしてつい「寅次郎一家」を思い出してしまうと書いている。確かに寅次郎を巡る人々は好人物ばかりで、寅次郎の失敗をすぐ赦してしまう。
司馬は知りあいのアメリカ人から「あんな人たちは現実にはいないでしょう」と聞かれたのに対して「ある時代までは居たはずです」と答えている。
司馬が「ある時代までは」とは多分、彼の好きな明治の時代までと解釈できる。世知辛い今の世には、寅次郎一家のような善意の人ばかりの一家はいないと言外に云いたかったのか知れない。
また、是清の父親が維新後、深川に団子屋を開いたことまで触れている。

3 「街道をゆく」36（本所深川散歩）

この本では、生粋の大阪人である司馬は「江戸っ子堅気」とは何かを探って、深川芸者とか鳶の頭を訪ねている。そしてこれらを江戸落語で結んでいくのである。
本所割下水（ほんじょわりげすい）を訪ねた司馬は、この辺りに住んでいた幕

末から明治にかけての名人三遊亭円朝のことを考えている。
司馬は若い頃からの愛読書の一つが「米朝全集」で米朝ファンだった。それだけ彼の落語に対する知識は奥深く、此処でも我々の知らない江戸古典落語を紹介している。
「文七元結（もとゆい）」「大山参り」「坂東おひこ」など。
〈「文七元結」は寅さん映画のようによく構成されている〉とも書いている。
そして寅次郎は江戸落語の人だと結論づけるのである。確かに寅次郎映画は古典落語と同じである。落語を聴く時、聞き手は聞く前からその内容を全部知っている。それと同様に寅次郎映画も見る前からそのストーリーや顛末はほぼ推察できる。だから司馬は寅次郎は江戸落語の世界の人ではないかと云っているのである。
司馬はさらに江戸弁の歯切れのよさにも及ぶ。
「元結」はなまってモットイ。江戸弁は子音がきれいに発音される。MOTOYUIといえば母音が多く上方弁になる。MOTTOIといえば歯切れがいい。
まさか寅次郎がよく使う「口上」を意識しての発言ではないと思うが、その口上については拙稿の最後で取り扱うこととする。
理屈っぽく云えば、寅次郎の生まれ故郷「葛飾柴又」は江戸の範囲には入らない。少年の頃、彼が通っていた巣鴨商業がある巣鴨や駒込あたりが「江戸っ子」の限界であろう。
東京の外のまた外の地と千葉県すれすれの地にあるこの地を「東京の下町」と呼ぶイメージに違和感を抱く東京人も多い。（例えば東京・日本橋生まれの作家小林信彦など）
東京の中心地から遥かに遠く、さりとて地方でもなく微妙の地にあるこの地を「新しい江戸の下町」としたのはやはり山田洋次の功績であろう。
そして望郷の念に駆られて柴又に帰ってくる寅次郎だが、また失恋とかいざこざを起こして傷心の気持ちで柴又を後にして、さすらいの旅に出る。
昭和20年代にアメリカ映画に「シエーン」という人気映画があったが、シェーンと寅次郎の違いは寅次郎には帰るべき故郷を持っていることだと私は思っている。
シェーンは「シェーン、カムバック」と子供が叫んでも再び帰ってこなかった。しかし寅次郎の方は性懲りもなく半年後か1年後に必ずまた柴又に帰ってくる。
この繰り返しであって全く古典江戸落語の世界である。

（続く）

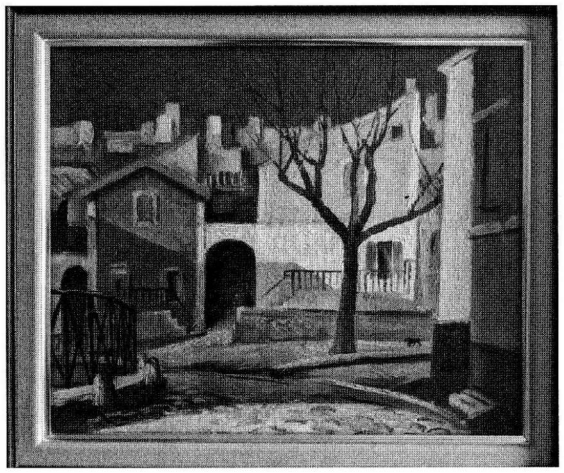
近代日本洋画こぼれ話（第七回）

水谷嘉弘

16　伊原宇三郎（その3）滞欧風景画の秀作 南仏アルル

今回の伊原宇三郎（1894・明治27年～1976・昭和51年）は、こぼれ話的な周縁の作品ではなく滞欧期の秀作【南仏アルルの旧い街】1926年作（8号）を取り上げる。1994年青梅市美「昭和洋画の先達たち」、2008年三重県美「佐伯祐三交流の画家たち展」、2017年目黒区美「よみがえる画家 板倉鼎・須美子展」等に出品された来歴が確かな作品である。

伊原は1925・大正14年5月、31歳の時、パリに赴く。翌年2月から3月末までフランス国内を回り多くの風景画を描いた。南仏プロヴァンス地方にある隣接する都市アヴィニョン、アルルを描いた作品が魅力的だ。古代・中世ローマ帝国の旧都の街並みに触発されるところが多かったのだろう。

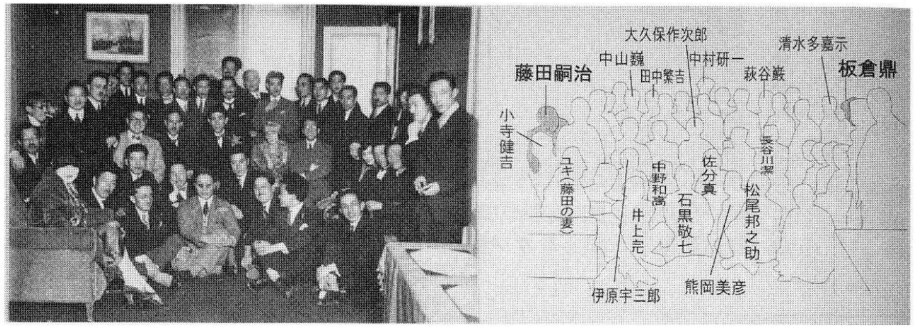


【南仏アルルの旧い街】1926（8号）

板倉鼎顕彰活動の一環として鼎と繋がりのある画家の資料を蒐集している。伊原は東京美術学校で鼎の3年先輩にあたる。鼎が1926・大正15年7月に渡仏し29年9月に28才で急逝するまでの3年3ヶ月は、伊原の滞欧期間（1925年5月～1929年6月）とほぼ重なる。パリでの接触も多く「板倉鼎・須美子書簡集」には5度登場する。交流がわかる写真も何枚か残っている。



渡辺浩三アトリエ 1926（伊原宇三郎撮影）



大久保作次郎送別会 1927　　集合写真シルエット松戸市教育委員会作成

また、伊原は鼎没後の翌1930年4月、東京銀座で開催された遺作展に岡田三郎助、田辺至、御厨純一等と共に発起人に名を連ねている。この展覧会の批評を「美術新論」6月号に寄せており優れた追悼文となっている。

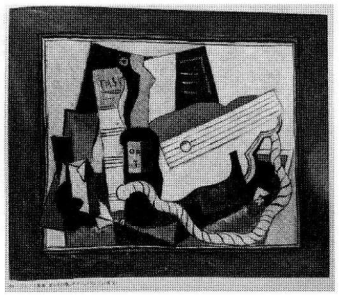
(quote)

これは近時稀に見る充実した、そして胸のすく様な展覧会であった。氏の画風は実に洗練されたものである。・・・板倉君は既に日本で十分な基礎的教養があって、渡仏後研究の第一着眼点を十五世紀のイタリールネッサンスに置いたらしい。これはなかなか出来ないことである。最初に此の洗礼があって、次いで色彩構図の科学的研究があり、両々相俟って氏一流の近代感覚は些かの危険を伴ふことなしに冴えて行った。・・・

(unquote)

やや長めに引用したのは、後半部分に注目したからである。鼎の画風形成の過程は伊原本人にも当て嵌まると言えるのだ。イタリアルネサンスの古典絵画研究が、両名に共通する構成的で端整な具象作品に通じている。

「・・・私の居た頃のパリは、エコール・ド・パリの全盛時代で、ピカソの地位が漸く世界的に認められた時代だけに、クラシックを最上の研究対象にする行き方と、活発な現代活動だけから養分を吸収しようとする行き方の中間の過渡時代・・日本にはクラシックの基盤がなく・・バックボーンの卑弱さは免れ難い・・画家個人が先ず身を以ってクラシックを通過し幾分でも身につけ、然る後現代に至らねばならないという遠大な構想を立てた・・・」（伊原宇三郎「ピカソに惹かれる」1955から抜粋）





左）伊原宇三郎「ピカソ模写：楽器、ポルトの便、ギター、トランプ」
右）伊原宇三郎「ピカソ模写：コンポートと窓ガラス」1925

伊原は渡仏してすぐピカソの新古典主義作品に惹かれる。模写を繰り返すが新古典主義作品でなくキュビズム作品の方が多い。描く対象の構造把握が目的意識にあったのだろう。その後、イタリア旅行に出向きルネサンス絵画に触れ西欧絵画の伝統を学ぶ。パリに戻ってルーヴル美術館でアングルのオダリスク模写を始める。その頃からモチーフが人体、群像に移行していく。ピカソと邂逅した時の伊原の直感的な共感は、ルネサンス絵画を触媒として具体的なタブローに結実して行ったと言えよう。古典を基盤として自らの造形を作っていく伊原の資質は、ピカソが対象物を分解して画面を構成していくアプローチと通底しているように思える。絵画構成とモチーフ構造の追求、がキイワードである。

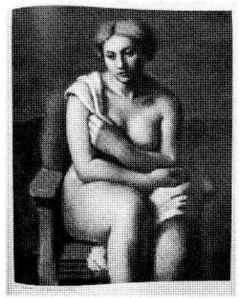
【南仏アルルの旧い街】1926・伊原32才、を観てみよう。現実の風景を描写したというより人工的な舞台装置のようだ。時が止まったような、生身の生活空間ではない。三島由紀夫の戯曲、例えば「サド侯爵夫人」の舞台背景は室内だが、そのイメージを戸外で再現するとこうなるのではないか、とふと思った。滞欧期前半の伊原作品は風景画が多い。粗い筆触を残すものから穏やかで印象主義的なものまで表現は多岐にわたる。しかし本作の如き静謐で古典的な作品は少ない。数多く残っている彼のピカソ作品模写に、新古典主義に属する絵が少ない点と符合するところがある。伊原の滞欧期後半は人物画、群像

図にシフトしていく。構成的な空間と量感豊かで彫像のような存在感ある人体が特徴的だ。

1927、28年のサロン・ドートンヌ入選作は【毛皮の女】【横臥裸婦】【赤いソーファの裸婦（白衣を纏える）】である。帰国後もこの傾向がしばらく続く。今日では、伊原宇三郎はピカソの紹介者、古典主義絵画の延長線上にいる人物画家として知られている。風景と人体、描法と構成。それぞれの組み合わせのプロセスにおいて【南仏アルルの旧い街】は過渡的な位置付けが出来る。新古典主義的な作品だが、ピカソになぞらえれば、新古典主義期に至る前のプロト及び分析的キュビズム期に相当する絵と言えよう。



【フォンテンブロー宮】1925



【白衣を纏える】1928
（共に図録画像）

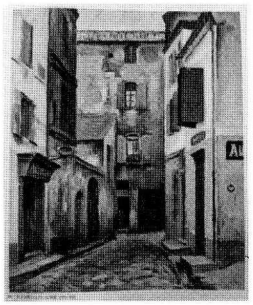
伊原にとってパブロ・ピカソ（1881～1973）は学び咀嚼する対象だったと思う。彼が親近感を持ちリスペクトしたのはアンドレ・ドラン（1880～1954）ではなかったか。帰国して10年後の1939・昭和14年にアトリエ社から刊行した「ドラン」はドランを解説しながら自らを語っているようだ。「（フォーヴィスムの）喧騒に飽き疲れた人々は・・落ちついたもとの家を親しんで帰って来た。ネオクラシスムの人々がそれであり・・もっと前に逸早く街の騒ぎから足を洗って・・帰ったのがドランである」として、ドランが戦地から帰還した1920年以後を高く評価し「ドランは現在活躍してゐる大畫家中で極端に言へば唯一人の絵畫の正統を護るクラシストである」と書く。「視覚的でいて視覚万能でなく、必要あり気なものを故意に付加せず・・感覚の狂奔に身を任すことをせず、ドランの斯ういう信条は其後発展するばかりでこの二十年間何等の方向転換を示していない」のは、新潮流の登場によって変化したり、新たなスタイルを打ち出したりせず、思索し自制的な伊原自身の絵画の事を評しているようだ。

1929・昭和4年に帰国してからは、美校を首席で卒業して以来、そのキャリアゆえ官展系アカデミズムを代表する一人として活動した。

1933年には美校助教授に就任する。従軍画家となって戦争記録画家として中国北部、南部、インドシナ等に

7回派遣された。

戦後（1945年、伊原51才）は、制作者、教育者のみならず美術（界）振興を推進する立場から活躍した。その生涯を通じた作品群を観ると、画家として油の乗りきる40才台は戦時と重なり、戦後は対外活動に割かれて充分な創作が出来なかった。【南仏アルルの旧い街】を含む1920年代後半の滞欧作品群が1960年前後数年の作とともに画業のピークを形成している。1956年に27年ぶり、二度目の渡欧、フランスに10ヶ月滞在して現地制作を行う。帰国後は60年代半ばから日本全国に写生旅行に出かけて多くの風景画を残した。これらの風景画群は巧みなデッサンに裏付けられた円熟した仕上がりになっている。ただ戦前から戦後にかけての構築度の高い描き込んだ表現とは趣きが異なる印象の作品も多い。



【小さな黒い犬のいる風景】1925・26頃



【横臥裸婦】1928

（共に図録画像）

国立近代美術館設立や美術行政への提言等美術界の発展と地位向上に寄与した伊原宇三郎は1976・昭和51年1月、81年の生涯を終えた。本邦近代洋画史、官展史、洋画界の最高峰に位置付けられる人物の一人である。

本篇は、作品画像ほか多くを1994年目黒区美術館、徳島県立近代美術館開催の伊原宇三郎展図録から教示いただいた。

17　二瓶徳松　作品「（仮題）教会」を巡って

二瓶徳松（画名：經松、等、等観。1897・明治30年札幌生まれ～1990・平成2年）は、板倉鼎の東京美術学校同級生（1924・大正13年卒業）でパリでも頻繁に往き来していた画家である。同級生には岡鹿之助、野口謙蔵等もいる。鼎・須美子書簡集にも多く登場し、板倉鼎を語るに際して経歴を知り滞欧作の検証が欠かせない人物。だが作品はなかなか見つからない。作品の画像も渡仏前後の1924年第5回帝展入選作「裸女」（当時の画名：二瓶等）、1929年第10回帝展入選作「足を拭ふ女」（画名：二瓶等）の絵葉書等3枚しか見当たらなかった。鼎の書簡に依れば、二瓶のパリ留学は、佐伯祐三（美校の同期入学、卒業時は1年上級）を見舞って結核の怖さに取

り憑かれ（佐伯は1928年8月16日病死）、夫婦共に精神面で消耗して約8ヶ月で帰国したため（1928年5月～1929年1月）当地での制作は少なかったと思われる。

鼎の書簡（1929年1月1日付け）を引用する。

［明日は二瓶さんいよいよ巴里をたちます。五日出帆の船で帰るそうです。お気の毒に存じますが是も自業自得で神経衰弱ばかりはどうにもなりません。巴里へついて已に八か月ルーヴル美術館へは未だ二度しか行かなかったそうです。是では何の為に来たかわかりません。（鼎）］

パリ到着直後は二人仲良く付き合っていたが夫婦とも段々波長が合わなくなったようだ。鼎・須美子の書簡では二瓶夫婦への評価が一変している。当初の書簡も紹介する。（1928年6、7月）

［いろいろ御世話してあげますと、二人とも心から喜ばれ、時を消しては（と）遠慮され例の人達とは大ちがひで大変気持ちよくおつきあいひして居ります。二人の子供さんを置いて来られたとかで子供の事などいろいろ注意して下さいます。（須美子）］

［この附近では今、私と二瓶さんだけがふんばってます。二瓶さんは、画会のお金を今受け取りつつあって、絵を帰ってから渡す約束のものが52枚残ってるとか云って、大馬力です。みんな十号だそうです。私はたった一枚のよい絵が出来ればそれでよいと思ってます。（鼎）］

二人とも芸術家気質ゆえ鼎サイドの手紙だけで判断することは避けたいが、二瓶の経歴をみると、一度入った美校を退学し翌年再び入学したり、画名の変更が頻繁でわかっているだけで4つ有るなど移り気で精神的に不安定な傾向は見て取れる。

美校在学中の1922年光風会出品作「真珠」（画名：二瓶經松）は東京新宿下落合で師事し近所付き合いしていた中村彝と近似したルノアール張りの良い作品だ。美校卒業年に帝展初入選を果たしたように戦前戦中作は正統な画風で画力もあったと思われる。

渡欧前の制作と思われる風景画「（仮題）教会」（画名：二瓶徳松 or 經松）と、戦後訪欧時（1959年）に取材したパリの風景画「パリムフタールの近く」（画名：二瓶等観）の2点を入手した。ここでは戦前作と思われる教会を描いた作品を取り上げてみたい。（戦後作の方は見るべき点があまり無い）。

当該作品「（仮題）教会」の検討にあたっては、二瓶が住んだ新宿下落合をfocusする博覧強記の郷土史家「落合道人」氏に多くを教示いただいた。氏はブログ「落合学」で同地域に因む社会情勢、文化芸術、地理、人物



二瓶徳松【(仮題) 教会】4号
1918～20年頃

等全般にわたって調査研究する方で、美術方面でもブログ本ページの他、中村彝、佐伯祐三、松本竣介はじめ50人近い画家についてブログ内メニュー「下落合を描いた画家たち」で論じている。

以下、落合道人氏のご了承を得て氏とのメール交換をquoteする形で「(仮題) 教会」を観てみたい。(2023年4月、文章簡略化)

(水谷) フランス近代美術の専門家である友人に訊ねたが、モチーフの教会はフランス在ではないと見解が一致した。札幌か?東京か??もしかしたら下落合???お気づきの点あれば教示願う。

(落合道人氏)

二瓶徳松の教会画面について、彼が下落合で暮らしていた時代に、下落合にはギリシャあるいはロシアの正教会は存在しない。教会のフォルムを観察すると、明らかに正教会系の姿をしており、二瓶等の故郷＝北海道でいうと函館のハリス正教会の正面からの姿が、画面の教会に近似している意匠。あるいはヨーロッパからの帰途、彼は地中海のどこかの街か、ロシアのシベリア鉄道経由で帰国していないだろうか。そこで目にした正教会系の建築を、写生している可能性もありそう。

(水谷)

函館ハリス正教会の写真に多くを学んだ。自分なりに検討して「教会」は、1916年北海中学卒業頃(18、9歳)から美校在学中の1922、3年まで(25、6歳)の間、本邦おそらく郷里札幌や函館など北海道地域で描いた風景画だと結論付けた。根拠は、

①教会前の木製の入口、植栽などの佇まいが、フランスというより日本の雰囲気が強い(友人と意見交換した結論)。

②二瓶は1928年5月に渡仏したが翌年1月には帰国している。板倉鼎の同年1月1日書簡からは帰途を含め

欧州で写生した可能性は低い。

③署名は『T. Nihei』とあり、「徳松」或いは「經松」と思われる。彼の画名変遷を辿ると(「等」を「とう」と読ませなければ)美校卒業の1924年3月までと考えられる。卒業後、帝展出品名は「等」である。

④戦後の画名「等観」もTだが、「教会」の時代感は古い。所有している戦後作品の画風は描き込みに重厚さがなくこなれた仕上がりで「教会」とは印象が異なる。

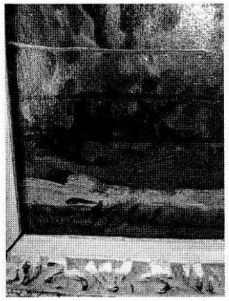
(落合道人氏)

二瓶等はパリからどこかへ旅行をしていないか。添付したのはリトアニアに残るちょうど作品画面と同じぐらいの規模の正教会建築だが、ファサードや意匠がよく似ている。ヨーロッパ北部の田舎に多い正教会の建物のようだが、フランス北(戦災で喪失?)或いは1926年より出かけている「満洲」(文化大革命で喪失?)などの可能性はないだろうか。ただし、サインからするとかなり制作は古い年代のよう。



(水谷)

たしかにリトアニアの画像はよく似ている。二瓶徳松(等)のパリ留学時代の様子は板倉鼎書簡からしかわからない。鼎は二瓶に対して厳しい感想を述べているが、当初は美校同級生らしい親しいコメントを残している。二瓶は佐伯祐三の病死を境に精神面が一変したようだがそれまでの間、近隣諸国に旅しているかもしれない。今回の作品を観る時の参考にしたのが『TNihei』署名のある海浜作品。北海道の風景だと考えており、教会作品と筆致が似ている。落合道人氏がブログで紹介された1927年10月の札幌個展出品作の発見が待たれる。



二瓶徳松
【(仮題) 教会】署名



二瓶徳松【海景】

（落合道人氏）

二瓶等の札幌での個展では、図録が残っているのではないかと思ったが、残念ながら目録しか見つからなかった。二瓶等の「下落合風景」にからめて、個展の目録を掲載したのは10年も前の記事だが、残念ながらご遺族からの連絡や、「二瓶作品なら持ってるよ」というコメントはいまだ1件も届いていない。彼の画面を通じて、大正末の下落合東部の様子がかなり判明するのではないかと期待したが、戦災で焼けてしまったか、あるいは廃棄されてしまったケースが多いのかもしれない。二瓶徳松時代に中村彝から購入した『俊ちゃんの像』（8号／相馬俊子像）も、どこへいったものか行方不明で、あまり話題にならない。

（水谷）

御ブログへの反応も二瓶関連情報も皆無とは寂しい。彼の若い頃の画力はかなりのものがあったと見ている。美校入学前に光風会に入選しているがこの会は白馬会の後継と言えアカデミズム直系のハイレベルな団体。海の絵も教会の絵もストロークのみで描かれており陰影の付け方も癖がなく年齢不相応な纏まり方。「真珠」もいい絵。しかし、渡仏前後に当時の典型的な官展スタイルで入選しながら以降出品したのかさえ不明だ。戦後も1960年前後の滞仏作品はあるが画業は不明（添付は戦後滞仏作とその裏面。手慣れた絵だがどうと言う事はない。貼られた帳票類から一定の信用力、存在感が感じられる）御ブログ記事にあるように北海中学OB会でも主要な存在となっている。美校に2度入学したり、名前を頻繁に変えるなど生涯を通じて不可思議な点が多く落合道人氏の解明を期待している。見当外れかもしれないが御ブログで紹介されている下落合の風景画、小松益喜作品の正面、活水学院と思われる建物の屋根上に十字架の先端部のような線が見える。別棟から伸びた線に見えるが当時教会のような建物は無かった？

（落合道人氏）

二瓶等は、中村彝とかなり親しく、また一方では佐伯祐三とも親しいので、下落合では曾宮一念とともに両者の接点として追いかけてきたがその軌跡が茫漠として見えにくい存在だ。戦前戦後を通じて下落合には教会が多いが、二瓶等が住んでいた時期には、目白通りに面したカトリック系の目白聖公会と、中村彝がよくモチーフにしたプロテスタント系の目白福音教会（現・目白教会）、少し遅れてカトリック系で国際聖母病院に付属した礼拝堂建築などが目立つ。戦後は教会の数も増え、遠藤新設計の目白ヶ丘教会や下落合教会、池の上教会、ICBF東京中央教会などなど、下落合以外の上落合や西落合を探せばもっとあるかもしれない。小松益喜が描く『（下落合）

炭糟道の風景』のモチーフ「活水学院」は、屋根上に十字架を載せた基督伝道隊（日本プロテスタント福音派）の学校で、正式名称は「基督伝道隊活水学院」。目白福音教会にあった聖書学校と同じような学び舎だが「活水学院」には教会建築はなく、おそらく学院内に礼拝室があったと思われる。

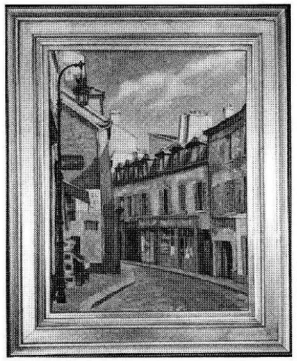
（以上）

落合道人氏とのやり取りから、教会はロシア正教会系であること、同教会は当時下落合には存在していなかったことを教わった。その結果も併せて「（仮題）教会」は二瓶徳松1920年前後の本邦制作（@北海道）と結論付けた次第である。

（同時期の略年譜）1916 北海中学卒業（19歳）、1917 光風会入選、1918 美校入学、退学、1919 美校再入学、1922 光風会「真珠」出品、1923 帰郷、卒制制作、1924 卒業、帝展初入選、1928 渡仏、1929 帰国、帝展入選、その後渡満（中国）

しかしながら、本篇を執筆して個別作品検討の域を越えず画家二瓶徳松の画業を体系化するピースに嵌っていかない点に物足りなさが残った。それだけ二瓶の画業全体が検証、顕彰対象になっていない事、見方を変えれば彼の画業が曖昧だったと言えよう。落合道人氏に依れば、二瓶は中村彝、佐伯祐三を繋ぐ接点として重要な存在とのこと。2023年1～4月、東京ステーションギャラリーで開催された「佐伯祐三展」紹介メディアでは落合道人ブログも取り上げられていた。2024年は中村彝の出身地、茨城県近代美術館で彝の回顧展が開催される予定である。落合道人氏の研究をキッカケとして中村彝への新たなアプローチで二瓶徳松の存在が再認識されることを期待している。

（2023年10月）



二瓶等観
「パリムフタールの近く」15号
1959



二瓶經松「真珠」1922

18　二瓶徳松（その2）1933年 満洲で描いた肖像画



二瓶徳松【山井格太郎像】F10号

前篇で書いた「二瓶徳松　作品「（仮題）教会」を巡って」を私が主宰する近代日本洋画家顕彰団体のホームページにUPしたところ、読まれた方からメールを頂戴した。文中に紹介した落合道人氏とのやり取りで「なかなか見つからない」と話題になった二瓶徳松の満洲時代の作品についてである。抜粋して引用させていただく。

（quote）

【近代日本洋画こぼれ話】を拝読しました。1933年、二瓶氏が渡満中に大連で描かれた人物画を所蔵しています。人物は私の曽祖父で満鉄総務部の顧問でした。当時小学生の父は大連の家で二瓶等氏が作画するのを見ていたと話していました。（中略）曽祖父は1922年から上落合2丁目552番地に住み（途中家族の一部と渡満）、1943年に中野区城山町へ越していました。確かに二瓶氏が下落合に居た時期と重なるので何らかの交流があったのかもしれません。

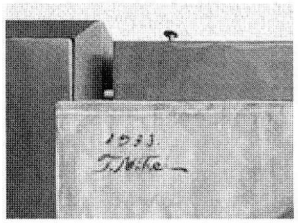
（unquote）

上落合に住んでいた肖像画の主は、山井格太郎という。メールを発信されたのは山井のひ孫の方で作品の画像を送っていただいた。非常に良い作品で作者の画力がすぐにわかる絵だった。重要な情報が含まれていた。

①作品に1933・昭和8年の年記が入っており、二瓶の画風変遷のミッシングリンクだった美校卒業年に帝展入選（1924年）した後の昭和戦前期の作品が出現したこと。

②署名がT.Niheiとあった。二瓶はしばしば画名を変える人物でこの署名は本名の「とくまつ」（徳松）或いは「つねまつ」（經松）で作品を発表していた美校卒業頃まで使っていたと思われた。その後、帝展入選時は「ひとし」（等）と名乗っていた。そこで満洲作品のイニシャルはHと考えていたのだが、肖像画の画像を見るとTである。「とくまつ」に戻しているようなのだ。その後も頻繁に画名を変更した人物なので充分あり得ることだ（戦後名乗った「とうかん」（等観）

③とすれば、私が前回の、【二瓶徳松こぼれ話】のテーマにした教会も満洲在かもしれない。モチーフの教会の佇まいは欧州ではなく本邦、画面のT署名は「とくまつ」と名乗った美校卒業頃まで、を根拠として1920年頃の二瓶の郷里、北海道在の教会を描いたと判断した。ただし、【こぼれ話】に書いた落合道人氏とのやり取りで、氏は、満洲の可能性はないだろうか、とも述べられていた。今回の署名発見がその説の有力な裏付けになった。落合道人氏の炯眼の通りだ。満洲在であれば教会の日本的佇まいも納得出来るのである。



【山井格太郎像】署名 T.Nihei



【（仮題）教会】作品と署名 T.Nihei

この情報を新宿下落合の郷土史家、落合道人氏に伝えたところ以下の返信を頂戴した。

（落合道人氏）

『山井格太郎氏像』は、とてもいい出来ですね。メガネはあとで描き加えたものでしょうか。顔の向きは右向きですが、メガネは真正面のように描かれているのが気になります。

山井氏と二瓶等のつながりは、外務省の「対支文化事業」計画の一環として、美術分野では美校の正木直彦校長や藤島武二、石井柏亭、そして山井格太郎氏を招集したあと、美校卒業者で事業の協力者を募ったときに、山井格太郎＝二瓶等つながりができたのではないでしょうか。1926年（大正15）にアトリヱ社が発行した『アトリヱ美術年鑑』には、外務省の事業について簡単に掲載されていました。また、1931年（昭和6）に東京毎夕新聞社から刊行された『育英之日本』には、山井格太郎氏についての詳細が紹介されていますね。ちなみに、『育英之日本』の人物紹介で「同文会調査編纂顧問」とあるのは、近衛篤麿や岸田吟香（劉生の父親）らが東亜同文会（現・霞山会）を上海で起ち上げたあと、東亜同文書院の学生たちが中国全土の秘境を探検調査（「大旅

行」と呼称）した際の、探検レポート編纂の顧問をされていたものでしょうか。同探検レポート「大旅行」記録は、現在の霞山会館に数多く保存されていますので、山井格太郎氏についての資料もあるのかもしれません。上落合552番地は、ちょっと印象深い番地でして、南隣りには作家の吉川英治が暮らしています。ちょうど、同じ時期に住んでいますので、お隣り同士だったのではないでしょうか？落合地域の中でも、いろいろなつながりが見えて面白いですね。

（水谷）

私は実作経験に乏しく落合道人殿のように肖像画の図像分析からメガネと顔の向きの方向齟齬は指摘出来ませんが、この作品のキキメであり秀作となっている要因はメガネに在ると観ています。顔の表情、姿勢佇まいが威厳を醸し出しているのはメガネ表現ゆえで、それを描いて絵筆を擱いたのではないでしょうか。道人殿ご指摘の方向齟齬は威厳効果を強調する為に意図的だったのかもしれません。この時代の美校油画出身者のデッサン力は非常に高く、特に3次元表現の鍛えられ方は半端ではないのでそう思うのです。

私宛にメールを発信された山井格太郎氏の曾孫の方も、これらのコメントに満足されたようだ。

（山井格太郎の曾孫の方）

肖像画の人物は私の父方の曽祖父で満鉄総務部顧問をしていた山井格太郎（やまのいかくたろう）といい、当時67才でした。曽祖父は面倒見の良い人で、中国人の学生や日本から来た若い知識人・スポーツ選手などをよく自宅に招いていたようです。家族で大連に渡る前には淀橋区上落合に住んでいたので、下落合にアトリエを構えていた二瓶氏と既に面識があったのかもしれません。落合道人様のメールも読ませて頂きました。曽祖父の活動についても詳しく知ることができて大変ありがたく思いました。また、満州はもともとロシア革命で追われたロシア人が多く移り住んだ場所で、ロシア正教会も多かったようです。素人考えでお恥ずかしいのですが、二瓶氏の「教会」も満州で描いたのかも、と思っています。

今回、二瓶徳松の満洲における作品と活動に関する新情報を得たので、その後判明した彼の経歴を画名の変遷と合わせてまとめてみたい。

二瓶徳松：略年譜

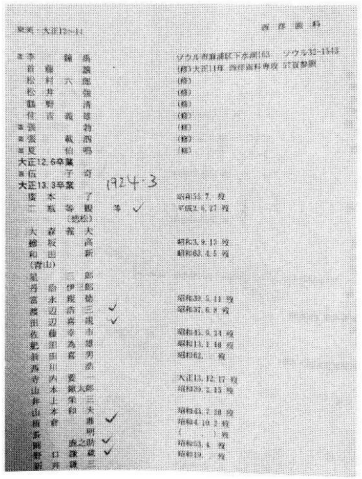
1897 札幌生まれ（徳松）、1916 北海中学校卒業（徳松）、在学中に美術グループ「団栗会」を結成、1917 光風会入選（徳松）、1918 美校入学、退学（徳松）、1919 美校

再入学（徳松）、その頃新宿下落合に自邸兼アトリエ建設（徳松）、1922 光風会「真珠」出品（經松）、1923 帰郷、北海中学美術教師、美校卒制制作（徳松）、1924 美校卒業、第5回帝展「裸女」初入選（等）、1927 個展開催@札幌（等）、1928 渡仏、1929 帰国、第10回帝展「足を拭ふ女」入選（等）、その後渡満（中国）満洲美術会、大連女子美術学校校長等に参加、歴任、1945 帰国、池袋に転居、1949 野口英世の肖像画（郵便切手の原画）を制作、1955 新世紀美術協会創立に参加（等観）、1990 逝去（93歳）、東京美術学校同窓会名簿には等観（徳松）号：等で掲載。

（落合道人氏のブログを参照させていただいた）



野口英世肖像画（郵便切手原画）


美校卒業生名簿（二瓶徳松）

二瓶徳松は、私がエコール・ド・パリの早逝画家、板倉鼎の顕彰活動を始めた頃、「板倉鼎・須美子書簡集」（2020 年、松戸市教育委員会）に鼎の美校同級生としてしばしば登場することでその名を知り、落合道人氏のブログ「落合学」で中村彝との関係を知った。しかしながら今年4月に開催された「板倉鼎・須美子展」千葉市美術館、11月の「中村彝展」茨城県近代美術館、の展示には二瓶の名前は登場しない。美校同期入学の佐伯祐三とはパリで亡くなる直前にも接点が有ったが、佐伯関連資料に二瓶の名は散見される程度のようだ。それぞれとの関係が濃密とは言えなかったからであろう。

二瓶徳松は、同時代の優れた画家との往来があり画力を有し一定の実績を挙げながらも、作品が散逸している

こと、代表作と言える作品が知られていないこと、画名の変遷が相次ぎ同一の画家として認識し辛いこと、確たる縁故地がないこと、等々から埋没してしまっている。出身地札幌の母校、私立北海中学校の後継、北海高等学校の同窓会（美術部OB会）が顕彰活動の母体になっていただけないだろうか、と期待している。

（2024年12月）

以下、後日談。

本篇のテーマとなった作品【山井格太郎像】を所蔵され連絡をいただいた山井の曽孫の方から、同作を何処か所縁のある所へ寄贈したいので紹介して欲しいとの依頼があった。引き受けてくれる美術館は無いだろう、と直感したが結果もその通りだった。二瓶徳松との関係から美校時代の友人板倉鼎作品を多く所蔵する千葉市美術館と、新宿下落合で親しく付き合った中村彝絡みで回顧展を行ったばかりの茨城県近代美術館に繋いだ。しかしながら最近の公立美術館は作品の質とは関わりなく人員不足による管理負担増や所蔵スペース不足問題が根底にあり、更に当該作品は属人性が強い肖像画であり又知名度の低い人物のため受け入れには reluctant だった。

この十数年、都道府県立、市町村立の美術館は作品の受け入れに消極的で本件もその例に漏れない。背景に、バブル期の箱物行政全盛期に計画され建てられた美術館は総じて収蔵保管スペースに対する認識が不足していて、狭く開館後30年経った現在では余裕がほとんど無い事。更に、本件のような近代日本洋画に関しては、画家の直系縁戚者が子、孫から次世代へ、コレクターも代替わり期に入ってきており、継承意欲が希薄化し美術館への寄贈申込みが多い上、美術館学芸員の側も代替わりが進み展覧会企画や収蔵対象が現代アートに移行していることもあって受入れニーズが非常に低いのだ。多くの館が収蔵作品を決定する機関を設けているが、人気のある現代アートは高額で購入予算は限られている。コレクションや収蔵品を持たない、或いは増えない美術館は学芸員が調査研究を通じて成長する機会を喪失させることになる。こういった面にも我が国の文化芸術分野の進展が停滞する一因があると言えよう。

（2025年3月）

まことのEメール夢の旅（第十九話～第二十一話）

手塚泰男

第十九話　ヨコテン山からの大滑降

まことの部屋の隅に、真新しいスキー用具一式が立てかけてある。先週父親に新宿のスポーツ用具店にて買ってもらったものだ。

一月も終りに近付いたある日、父親は帰宅すると、「まこと、二月の中旬には、北海道へスキーに連れて行こうと思っている。僕は大学の頃から使っているスキーを持って行くが、まことには新品のスキーを買ってあげるよ。」と言った。

まことのハワイ気分も少し薄らいで来た頃、湘南の海岸にも初雪が舞った。

今日は土曜日、まことはパソコンの前に座りメールを開いた。画面を見ると

「まこと君、久しぶりだね。辻まことだよ。ラップランドでの、狼狩りなどは楽しかったね。今度は、君と君の友達に、山スキーの醍醐味を教えてあげよう。マウスのそばにあるオカリナを持って今夜はお休み。　―辻まことより。」と出ていた。

マウスの横に、サツマイモに似て、横に数個の小さな穴があいている、陶器が置いてあった。

まことは、青いスキーウェアを着て、風の強い雪山の頂上に立っていた。五十メートルほど先に、手を振っている人がいるので、近づくと猟師の服装をした辻さんだった。

「まこと君、よく来たね。その青いスキー服はとても似合っているよ。今日は君の友達にも声をかけてあるので、山スキーを精いっぱい楽しもう。

リフトに乗って上り、ただ滑り降りるだけなんてつま

らないから、山から山へと滑って行く山スキーを、みんなに教えてあげよう。」と言いながら頂上のゲレンデへ案内した。

ヨコテン山の頂上は、相変らず突風が吹いていたが、空はどこまでも青く澄み、遠方に白く連なる雪山が、三百六十度見渡せた。

下をのぞくと、炊きたてのご飯をてんこもりしたような山や、一面に凍結した大きな沼を見ることが出来た。

辻さんが、「まこと君、ギザ〳〵した白い山の後方から、こっちへ近付いてくる黒い点のようなものが見えるだろう。あれは君の友達の乗っているデコ3号だよ。」と言い指さす方向を見ると、煙突からけむりは、風に吹きとんだのか見えなかったが、紛れもなく山頂目指し疾走して来るデコ3号だった。

デコ3号は雪原に滑るように降りてくると、機関車と客車からは、それぞれ派手なスキー服を着た、ヒロヤ、カンタ兄弟に、ケンジ、ミハルちゃん、モネちゃん、ヨハンナちゃんと猫のテオさんが出て来た。

赤いスキー服を窮屈そうに着ているテオさんが、いつに無くあらたまって、「今日は、私たちを山スキー教室へお招きいただき、まことにありがとうございました。常夏のアルル村に住んでおりますので、スキー服を着るのは初めてです。でもとっても暖かいので大助かりです。今日はベルギーから、ヨハンナちゃんを呼んであげましたが、ババルの塔依頼かな。

ヨハンナちゃんは、ヨーロッパアルプスでスキーは経験ずみとのことだから、腕前はプロ級かも知れませんね。」といつもの長靴に変って赤いスキー靴をとん〳〵と踏みならした。

辻さんが、「腹がへってはいくさが出来ないというたとえもあるし、向に見える二階建ての丸太小屋で、シネランおばさん手作りの、焼きたてのおいしいパンをごちそうしよう。食事が済んでひとやすみしたら、スキーをつけて、頂上から一気にクマフロ温泉まで滑り降りよう。」と言って小屋の中へみんなを招き入れた。

焼きたてのパンは、父親が時々、おいしいよと言って買ってくる。北鎌倉のパン屋さんのパンと同じくらいおいしかった。

熱いコーンスープもおかわりし、ソーセージやバナナなど、たっぷりおなかへ詰め込んでみんな満足だった。

いつものように、食べ過ぎたようで、スキーズボンのチャックがしまらないと嘆く、テオさんを見たカンタが、「テオさん、おなかを出していると風邪をひくよ。」と憎まれ口をたたいた。

「みんな、食休みは終ったかな。それぞれ背たけに合った、スキーが立てかけてあるので、外へ担ぎ出してくれ。このスキー板は、『マウンテンフリーボード』と言い、僕が三年もかけ考案し作り上げたもので、これをはけば、

どんな初心者でも転んだり、怪我をしたりする心配のない、スーパースキー板なんだ。」と辻さんは鼻高々だったが、自分だけは、竹製のスキーをつけて、わらで編んだ靴をはいていた。

少し風もおさまって来たようなので、まことたち八人が横一列に並ぶと、派手なスキー服の一団は、白い雪原に鮮やかな虹がかかったようだった。

女の子の三人は、手をつないで、大声で「スキーの歌」をうたい、ヒロヤ、カンタ、ケンジは、調子の乗って、コブをいくつも越えながら、空中でくる〳〵と回転したりした。ヒロヤが、「十二年先の冬季オリンピックには、金メダル間違いないね。」と叫ぶと、カンタが、「お兄ちゃんが出られるのは、せいぜい雪だるまのコロリンピックだよ。」とやり返した。

あっという間に、クマフロ温泉に着き、辻さんが、「みんな上手に滑れたかな。ひと休みし、露天風呂に入ろうか。次にはミューコン山から、トンガクシ山へ続く山スキーに挑戦だ。

ナダレに会っても大丈夫なように、波乗りに似た、ナダレヘッチャラ乗りも教えてあげよう。

それから、シマウマ山のジャンプ台から、鳥になれる大ジャンプも楽しみにしていてくれ。

今日のスキー教室はこれくらいにして、ジーゴングのお湯で、お猿たちと一緒に温泉につかってひと汗流す予定だ。しかし猫のテオさんが猿たちとけんかをしないといいんだが、少し心配だな。」と言い。先頭に立って滑り出した。

山から山へのスキーは、空を飛んでいるように爽快で、八人はスキーを十年分も満喫したような気分だった。

次の日には、ヨコテン山から、クサツン温泉に抜ける、長いツアーコースを滑ろうということになった。

「これから、ダマシ平という広い雪原を横切って行くが、ダマシ平というくらい、迷いやすいところなので、僕のうしろにしっかり着いて来なさい。

そこを過ぎひと下りすると、今夜の宿は、僕のなじみの岩の湯ロッジだ。

白く長いひげをはやした、ミヤンチさんの作る料理は、とびっきりおいしいぞ。テオさんのおなかはさっきからぐう〳〵と鳴っているし、まこと君だちも滑りどおしで、さぞおなかも空いただろう。さあ急ごうか。」と辻さんは煙草をのパイプをポケットに入れながら言った。

岩の湯ロッジの板壁には、辻さんが描いた山の絵がたくさんかけてあったが、辻さんの人柄を表わすかのような、暖かいタッチであり、ミハルちゃんは絵の前からしばらく離れることが出来なかった。

ミヤンチ老人の、心のこもったおいしい料理に舌づつめみ打ち、秋に老人がつんで来たという、山ぶどうや野いちごをほおばった。

食後には、辻さんがリコーダーを太らせて小さくしたような、オカリナの吹き方をみんなに教えた。

「僕が山に入って行き、オカリナを吹いていると、リスや小鳥たちがたくさん寄ってくるんだ。これはちょっととぼけた音を出す楽器だが、森の中や、谷間でも良く響くのさ。

みんなの分、数もそろっているので、手に取ってくれ。口に当て、このように吹くんだ。」と辻さんのオカリナレッスンが始った。

みんなは間もなく吹き方を覚えて、大きな薪ストーブを囲んで、「山の娘ロザリア」や「アルプス一万尺」「スキーの歌」などの楽しい山の歌を合奏した。

ケンジは、「星めぐりの歌」を情感豊かに吹いたが、どこか哀愁がただよっており、辻さんも目を細めて聞き入っていた。

最後に、辻さんが、自作の詩「さらば佐原村」をギターをつまびきながら、良く通る声で朗読してくれた。

まことは、お母さんの大好きだった詩を思い出していたが、辻さんの横顔は何ぜか寂しそうで気がかりだった。

ロッジの外は、雪がしん〳〵と降っており、室内では、赤赤とストーブが燃えていた。

テオさんが真っ先にいねむりを初め、みんなとかいこ棚のような木製のベッドに横になった。

目が覚めると、ベッドの枠には、辻さんがヨコテン山でつけなさいと言い、くれたゴーグルがつるしてあった。

食堂のラジオからは、ダンディという人が作曲した「アルプスの山人の歌」が流れており、食卓の上には、トーストに目玉焼きと、スープが乗っていた。

まことは、ヨコテン山の丸太小屋のシラネンおばさん手作りのパンの味には、遠く及ばなかったが、「お父さん、とってもおいしいよ。」と言いながら食べた。

ベランダに出ると、今朝も細かい雪が舞っており、二月に父親と行く、北海道のスキーに思いをはせながら、また辻さんに会っていろ〳〵のことを教わりたかった。

（第十九話　終）

第二十話　ハナカマキリの変身術

まことが少し前まで通学していた、フランス語学校のシャルル・コンチューニ先生は、面長で目が左右に離れているので、生徒たちからは、バッタ先生というあだ名で呼ばれていた。

噂によると、昆虫記を書いた名高いファーブルさんの子孫とのことである。

先生の家へ招かれたことのある生徒が、先生の部屋の中は、昆虫の標本でいっぱいで、足の踏み場も無いと言っていた。

ある日の授業で、ファーブル昆虫記を教材にして、タマオシコガネやカリュウドバチなどの生態を、面白おかしく話してくれたので、生徒たちは目を輝かせて聞いていた。

今日は土曜日、まことは夕方五時にパソコンの前に座った。

マウスの横には、ペンダントが置いてあり、コハクの中に閉じ込められた、小さな虫が入っていた。メールの画面には、

「まこと君こんにちは。僕は鉄腕アトムや、ジャングル大帝、火の鳥ほかたくさんの漫画を描いた手塚治虫だよ。

名前の通り、本気で昆虫学者になりたかったほど、幼い頃から虫が大好きだったんだ。十五才の頃に描いた、いろ〳〵の蝶の絵は、本物そっくりだと、両親や友達に大いに賞められたものさ。

今日は君の親友のヒロヤ、カンタ兄弟の他に、ミハルちゃん、モネちゃん、ホノミンさんも、昆虫の夢の世界へ招いてあげよう。

みんなで楽しいアニメ映画を作ってみようとも思っている。今夜はそのペンダントを握って眠りなさい。―手塚治虫より―」と、出ていた。

イギリス海岸には、デコ3号の姿は見えず、特大のカブト虫の形をした蒸気機関車と、青虫の姿をした客車が止っていた。

猫のテオさんが、カブト虫の羽の運転席から顔を出し、「やあ、まこと君、デコ3号は画家のダリさんに会って以来、すっかり変身ぐせがついてしまい、今度はカブト虫に化けて、こんな姿でみんなを驚かせているよ。青虫の客車の中で、ミハルちゃんだちが待ちかねている。早く乗ってくれ。座席はみどり一色でふわ〳〵してとても快適だよ。

クワガタ星のアニメ研究所で、オサムシ所長さんが、首を長くして待っているだろうから、直ぐ発車するぞ。」と叫ぶと、カブト虫の角の先から、蒸気が吹き出し、汽笛が周囲の山々にこだました。

イギリス海岸が遠のいて、もうデコ3号は天の川の中を全速力で走り抜けた。

しばらくして、窓の外には、原子の構造に似た十数個の大きな丸い玉を、パイプでつないだ星の集団が現れた。

デコ3号は、その中のこがね虫色に輝く星に近づくと、厚く積った枯葉の上に、ふわっと降りて停車した。

懐しい香りがする枯葉を踏みながら、雑木林の中を歩いて行くと、ベレー帽に丸いメガネをかけた、鼻の丸いおじさんが、にこ〳〵しながらみんなを迎えてくれた。

「やあ、クワガタ星に良く来てくれたね。僕はこのアニメ研究所のオサムシ所長と言うんだ。

僕の虫好きなのは、みんなも良く知っていると思うが、今日から一週間は、素晴らしい虫の世界へ案内しよう。それからもう一つの楽しみは、みんなとアニメ映画を共に作ることだ。」と言い、空を見上げて、「この星のまわりをぐるっと見てごらん。いろ〳〵の星があるだろう。あれはこの星の兄弟星たちなんだ。

超高速で走るそりが、あのパイプの中を走っていて、どの星へ行くのも自由自在というわけさ。右側にある白とピンクのまだら模様の星は、ハナカマキリ星といい、変身の得意な虫たち住んでいる。

その隣にある茶色の星は、きれいな名前がついていなくて気の毒だが。フンコロコロ星と言う。

ブンブンという羽音が、ここまで聞こえてくるのは、蜂たちの王国コハナンバチ星、虹色をした星は、たくさんの蝶たちの舞うバタフラメンコ星だよ。

その他にも優しいサソリたちのいるドングリサソリ星、八本の長い足でノシノシ歩いている虫がいるコガネングモ星、トンボやアリ、バッタの住む星もある。クワガタとオサムシはこの国にいるので直ぐに会えるよ。」と丸い鼻の頭に汗をかきながら、くわしく説明してくれた。

「この星には、新鮮な野菜や、蜂蜜、キノコなどもあり、本当においしいんだよ。お昼ごはんを食べ終ったら、僕の研究所を是非見学してほしい。明日は、ハナカマキリ星を案内しよう。午後はみんなそれぞれに好きな星へ行ってくるといい。」と言う所長さんの目はメガネの奥でやさしく笑っていた。

ヒロヤとカンタの兄弟は、大好きな昆虫たちに会えるというので、ゴッホッホ校長の授業の時とは、うって変って目をキラキラと輝かせて聞き入っていた。

ダイエット食のようだったが、すこぶるおいしい昼食のあと、オサムシ所長について、金色に輝くコガネ虫型の研究所の中に入って行くと、長い二本の触角がついた、アトムの頭の型をした帽子をかぶっている、二十人ほどの研究員の姿があった。

帽子の色は、それぞれ違った色なので、まことたちは不思議に思った。

オサムシ所長は、研究員たちを集め、「この元気で可愛い少年少女たちは、遠い地球という星からやって来たんだ。一人だけ毛色の違ったのは、猫のテオさんといい、機関車の運転手だが、根はやさしく、君たちにじゃれついたりはしないから安心しなさい。

これから、この研究所の中を案内して、地球の為に役立つものをいろ〳〵学んでもらおうと思っている。

まこと君はじめみんなは研究員の帽子の色が、それぞれ違っているのを、変に思っているだろうが、人に個性があるように、このロボットたちも帽子で色分けされ、

特殊な技術や能力を備えているんだよ。申し遅れたが、この研究員は全て、僕とオチャノコサイサイ博士が作り上げたロボットなのさ。

まこと君たちが、地球へ戻る時には、新しいロボットを数体お土産としてあげよう。地球の子供たちに良い影響を与えてくれると太鼓判を押すよ。」と言った。

オサムシ所長は、まことたちに研究員一人一人を紹介したあと、研究所の中のいろ〳〵な設備や機械について、説明してくれた。

「むずかしい話は、これまでとして、あさってからは、僕のスタジオで、楽しいアメニ映画作りに挑戦だよ。今夜は、とても寝ごこちの良い、枯葉のベッドでゆっくり休んでくれ。」と言うと、ベレー帽をとり、指先でくる〳〵とまわしおどけて見せた。

次の朝、虫たちは早起きらしく、ブン〳〵と飛びまわり、その羽音で目が覚めた。

オサムシ所長は、まことたちを、ハナカマキリ星へ高速のそりに乗せて案内した。ヒロヤは、「冬季オリンピックを、テレビで見てから、こんなのに乗りたかった。」とひとりはしゃいでいた。

鮮やかに花たちが咲き乱れる庭園や、うす暗い密林で、ハナカマキリや、ナナフシ、コノハムシなどに出合い、半日があっという間に過ぎてしまった。

午後からは、みんなそれぞれに好きな虫のいる星へ向った。男の子たちは、まことについて、クワガタ星に戻り、オウゴンクワガタや大きなコーカサスカブト虫が、角と突きあわせて戦う様子に拍手をし、声を上げて喜んでいた。

女の子たちは、鮮やかに羽を広げて舞う蝶々たちでいっぱいのバタフラメンコ星で、蝶が貸してくれた羽根を背中につけ、花園の中を自由にとびまわり、歓声を上げていた。

翌日は、朝食をすませると、みんなはオサムシ所長について、アニメ映画のスタジオに向った。

枯枝や枯葉を集め、屋根を葺き、壁を作った建物の中に入って行くと、オサムシ所長がこれまで作り上げたアニメ映画の下絵が、四方の壁を埋めていた。

部屋の中では、昨日紹介された研究所たちが熱心に作業を続けており、オサムシ所長が、「長編のアニメ映画を作るということは、これまでは大変な苦労と、日時を必要とした。そのため徹夜続きで、過労のため倒れてしまう人も出てしまったんだ。それを何とか解決いしょうと、僕はオチャノコサイサイ博士の協力を得て、頭にヘルメットのような装置をつけるだけで、考えたストーリーをアニメ化することを可能にしたのさ。頭の装置からは、コンピューターの中に記憶されることになる。

君たちは、いままで有意義で楽しい、たくさんの旅をして来たよね。その旅で見聞きし、感じたことを、自由

な発想を加えて、アニメ映画の案を作ってほしい。
まず、そこにあるヘルメットをつけて、パソコンの前に座り、作業を続けてくれ。ディスクに全て記憶させることが終ったら、みんなの作品をスクリーンに写し出し、自由に意見を述べ合って、一編のアニメのストーリーを組み立てよう。僕は前の作品の仕上げ作業が残っているので、席を外すが、みんなのアニメ原案が完成したら呼びに来てくれ。」と言いながらスタジオを出て行った。
まことたちは、無駄口をたたくことも無く作業に集中した。
所長の指導により、最終の打合せがすむと、「みんなの作品の個性の良いところがまとまって、本当に素晴らしいよ。それでは、まこと君の『ガルシア星の結婚式』を軸にして、組立ててみよう。最終的には僕が仕上げることにするが、色着けは慣れている研究員たちにまかせたい。
明日は、まずみんなで、試写会を行い、出来映えを見てから、午後から住民の人たちに集まっていただき、アトム劇場で映写会を開くから楽しみにしていてくれ。
今日はみんなも全力を出したので、さぞ疲れただろうね。でも何か一つを成しとげるということは素晴らしいことだと思わないか。
夕食はとびっきりの料理を準備しているので、ゆっくり食べ、今夜はぐっすり眠るといい。」というオサムシ所長も、さすがに疲れたのか、丸いメガネの奥で眼をしばたたかせていた。
翌日町のアトム劇場で開かれた、まことたちのアニメ作品の映写会は、超満員となり、やんやの喝采を浴びた。また、この映画は、兄弟星へも虫星デジタル放送によって放映されることも決ったようだ。
目が覚めると、ベッドの上には紙粘土で上手に作られた、ピンク色のハナカマキリが置いてあった。
食堂のラジオからは、ストラビンスキーの作曲した「火の鳥」が流れていたが、オサムシ所長もクラシック音楽をアニメを考えるときに良く聞くと言っていたっけ。
ベランダに出ると、海から吹き上げてくる風は、もう春の香りを含んでいるように思われた。
遠く水平線の上に、若くして天国へ旅立ってしまった、母の横顔に似た白い雲が浮かんでいた。

（第二十話　終）

第二十一話　ガルシャ星の結婚式

まことの通うフランス語学校のアダモーラ先生は、タヒチの風景の中に女性を描いた、画家のゴーギャンにそっくりだ。
先生の授業は、次が待ち遠しいほど楽しく、生徒たちの笑顔が絶えたことが無い。
今日は、フランス映画の話だった。ヤクザに扮した松田優作と、刑事役のアラン・ドロンの共演で、刑事が、「こらー、待つんだユーサク、どろんしても直ぐつかまえるぞ。」と叫んだとか、ダジャレを連発し、身振り手振りで生徒たちを笑いの渦にまきこんでいた。
次回の授業では、ふるさとの白ロシアを逃れ、フランス国籍を得た画家、マルク・シャガールについて話してあげようと言っていた。
夕方に、パソコンの前に座ると、マウスの横に、金属製の鈴が一つ転がっていた。
Eメールの画面には、
「まこと君、僕はシャガールの兄で、モンターニという名前だ。君は弟の絵が好きで、何枚も部屋の壁に貼っているよね。
弟が、何ぜあのような幻想的な絵を描いたのか、その謎を解く鍵を教えてあげよう。
そのカウベルに似たロバベルを握って、今夜は眠ってくれ。　モンターニより。」と出ていた。
銀河鉄道のイギリス海岸駅には、ヒロヤ、カンタ兄弟と一緒に、アニメ映画の「風の谷のナウシカ」の主人公の少女に似た女の子が、デコ3号の横で待っていた。
「やあ、まこと、今日は機関手の猫のテオさんが、昼寝をしている時に、ネズミに鼻をかじられてしまい、来られないんだ。
たいした怪我じゃないので、直ぐ良くなるさと言い、まことによろしく伝えてくれとも言っていたよ。
テオさんに代って、昔フランスの汽車を走らせたことのある、モンターニさんがデコ3号を運転してくれる。それから、この女の子は僕等のいとこのモネと言う。今年からカラット中学に入ったが、一度銀河鉄道の旅がしたいと、さんざん、だだをこねてついて来た。まことも仲良くしてやってくれ。モンターニさんが、これから行く星については、自分に全てまかせてほしいと言っている。」とヒロヤがいつものかん高い声で言った。
モンターニさんは、「まこと君、メールで伝えた通り、画家シャガールの三つ年上の兄だ。これからとても素適な旅に案内するので、直ぐに列車に乗ってくれ。出発進行。」とボーッと汽笛を鳴らすと、デコ3号は空へ向って走り出していた。
「ここは、もう地球から百万キロメートルも離れた宇宙の真ん中だ。すぐそこに丸い輪をつけた、土星にそっくりで七色に輝く星が見えて来ただろう。ガルシャ星という名の星だよ。間もなく着陸するよ。」と言いながら、モンターニさんは機関車のブレーキを作動させた。

オパールのように幻想的に輝く星が近づき、列車は、砂漠の中のオアシスに似た広場に降りた。あちこちに大型のテントが張ってあり、中からは歓声が響いていた。

テントの上を、羽根をつけたロバや、牛、羊、にわとりなどが、楽しそうに飛びまわっている。

赤、青、黄、緑と、カラフルな動物たちに交って、天使のような羽根をつけた人たちが、動物たちと同じカラフルな服を着て、何かここち良い歌を歌いながらふわ〳〵と空中を舞っていた。

モンターニさんは、「まこと君、みんな聞いてくれ。この星は、お月さんと同じように重力というものが無いんだ。人も動物だちも地上を歩くときには、地下深くから掘り出した、特殊な金属で作った靴をはくのさ。さあ、君たちもこの靴をはいてくれないか。サイズはぴたっと合うように出来ているから。」と、みんなは、形がオランダの木靴に似た靴をはかされた。モネちゃんだけ赤い花模様の靴だった。

テントの中をのぞくと、サーカスの興業中で、「ガルシャ星の人たちの一番の楽しみは、サーカスを見物することと、自分たちも演じることなんだ。重力が無いから、空中ブランコでもなんでも自由自在で、落っこちて怪我をすることも無い。そう〳〵、言い忘れたが、僕も、弟のシャガールも、この星で生まれ育ったのさ。

弟がフランスにおいて、何ぜあんな不思議な絵を描いたかという謎が、ここの様子を見て解けたよね。

この星に住む動物たちは、みんな人間の言葉がわかり、話すことも出来るんだ。まこと君や、みんなも空を飛びたいかい。この白い羽根を肩につけ、靴をぬいでごらん。ほら、自由に飛べるだろう。動物たちと空中での会話を楽しみながら、サーカスの練習をするといい。」とモンターニさんは、友人が待っているのでと、テントの中へ消えて行った。

四人は動物たちと一緒に、楽しいゲームに時を忘れ、町の人たちからは、親切なサーカスの手ほどきを受けた。

モネちゃんは、運動神経が良いらしく、空中ブランコや綱渡り、馬術などを直ぐマスターしてしまい、将来はオリンピックの体操の選手になりたいと目を輝かせていた。

十分にサーカスなど楽しんだあと、四人は星の裏側へ行こうということになった。

ふわ〳〵の雲の上に白い教会が浮かび、多くの人だかりがあり、いま結婚式の最中のようだった。モーニングを着た背中に、白い羽根をつけた花婿さんがおり、白い衣裳をつけた花嫁さんが見えた。

まことは、近づいて行って驚いた。その新郎と新婦は、まことの父と母だった。

「まこと、ガルシャ星へ良く来てくれたね。そこの三人はお友達だね。利発で優しそうな子供のようだ。

まことが生れる前のことだから、私たちの結婚について知るよしも無いが、お父さんもお母さんも若い頃は大変貧しくて、正式な結婚式を挙げることが出来なかったのさ。

それを知ったガルシャ星の人たちが、たくさん集ってくれ、私たちの結婚式をにぎやかに祝ってくれている。お母さんとてもきれいだろう。」と父は少しはずかしそうに言って、母を人さし指の先で、軽々と持に上げるとくる〳〵とまわした。

母は本当に嬉しそうに、キャッキャッと声を上げ宙を舞っていた。

母は、まことに向い、「私たちはこれからロバの引く二輪馬車で、旅行に出るけれど、またきっと会えるから元気でね。」と馬車に乗った。

鈴をいっぱいつけたロバひ引かれた馬車は、シャンシャンと音を響かせて雲の彼方へ消えて行った。

まことたちが、テントのある星の裏側の町に戻ってくると、モンターニさんが、「大部ゆっくりして来たんだね。みんなとてもいい顔をしているが、とても楽しいことでもあったのかな。そろ〳〵日が暮れるので汽車を発車させるよ。

この星の人たちは、空を自由に飛びまわり、何の苦労も無いような顔をしているが、僕たちが幼かった頃には、戦争やいろ〳〵の悲しい出来事が続いていたのさ。弟の描いた絵はメルヘンに満ちた、暖かい絵と思うだろうが、本当は人間の、いや生き方も全ての悲しみが描きこまれているのだよ。

テオさんの怪我も大部回復したようだし、次の駅で運転を代ってもらうことにする。

まこと君たちが大きくなって、フランスに来たときは、僕がガイドを引き受けよう。四人とも元気でね。」と別れのさびしさを隠すように汽笛を何度も鳴らした。

目が覚めると、枕もとにはガルシャ星ではいた靴があり、壁にかけたシャガールの絵の中のロバが、まことに何か語りかけたような気がした。

食堂に流れている音楽の曲名を父に聞くと、「これはラベルが作曲した『ダフニスとクロエ』という曲だよ。たしかシャガールが、この芝居の舞台の背景の絵を描いているはずだ。」教えてくれた。

ベランダから海を見下ろすと、二羽のかもめが寄りそうように舞っていた。

まことは、ガルシャ星での父と母の晴れやかな結婚式を思い出し、可愛いモネちゃんともまた会いたいと思っていた。

（第二十一話　終）

文学、音楽、スポーツ巡礼〜創作ノートから

岩上和道

今回は、本来であれば、「イェイツ詩集を読むパート2」の予定でしたが、個人的に様々な事柄が起こり、それを一回延期して、創作ノートの中からいくつかのエピソードを加筆して掲載します。

Dec. 2, 2023

「偉大なるギャツビー」The Great Gatsby のタイヤ

スコット・フィッツジェラルドのザ・グレート・ギャツビー（偉大なるギャツビー）の Scribner 版を朝、少し読んだ。冒頭のほうだ。ニックとデイジーの会話。こうある。

"All the cars have the left rear wheel painted black as a mourning wreath"

村上春樹訳ではこうなってる。

「どの自動車も葬式の花輪がわりに、左側の後輪を真っ黒に塗っていたよ」

これはデイジー（ギャツビーの元恋人）が去ったシカゴの街（男たち）が皆悲しんでるということをいってるわけだけど、この左側の後輪を真っ黒に塗ったというのがなんか面白い。この頃は、恐らくホワイト・リボン・タイヤだったんだと思う。つまり、タイヤに白い帯がその径に沿って入っているのが普通で、それを黒く塗ったということだと思う。なかなかジョークとしては粋だ。もともと、自動車のタイヤは白だったそうだ。ミシュラン・タイヤのビベンダム君が全身白いのは、当時のタイヤが白だった証だそうだ。タイヤに使うゴムは生成りだと白だったらしい。今となっては不思議だけれど。

ともかくデイジーはシカゴの社交界が、彼女が東部に行ってしまうのを残念がったほどの美人だったってことですね。

Dec.3, 2023

ロアルド・ダール「キス・キス」Roald Dahl "Kiss Kiss" とセンチメンタル・ジャーニー

昨日は、用があって日本橋の丸善に行った。（芥川龍之介のようだ）

洋書を見ていたら、Roald Dahl の Kiss Kiss があったので、懐かしくて買った。１９７１年に一浪して大学に合格したあと、父がロンドン勤務だった関係で、そのまま休学届をだして、ロンドンに行った。英語は全然できなかったので、語学学校（St. Giles School Of English という名前だったと思う）へ通ったが、そこで英語のテキストの一つとして、このロアルド・ダールの「キス・キス」を読んだ。ペンギンブックスのペイパーバックで、表紙は黒いバックに赤い唇がイラストで描かれていた。昨日買ったのは、同じペンギンだけど、表紙のデザインは変わっていて（あれから５０年以上経ってるからあたりまえだけど）女性の赤い唇が大きく出ているものの、それはリアルな感じで、周りには蜜蜂が飛んでいるという絵柄。二編ほど読んだけど、まったく覚えていなかった。二編目の、William and Mary という短編（ロアルド・ダールは短編の名手）は、結構新鮮だった。夫が病死して、そのあとに妻は、夫からのパーソナルな手紙を弁護士から受けとる。読んでみると、夫は知り合いの医師の勧めで、脳と片目だけを生かして、癌で死亡したのちも洗面器みたいな中で水に浮かんで生存していることを知る。夫の手紙は、これを読んだら会いに来いと書かれている。さて、どうしたものか?という展開。面白いし、怖い。こういう話を考える人はどういう頭の構造なんだろうと思う。ダールは第二次大戦では英国空軍のエースパイロットだったのだが（敵機を五機撃墜したらしい）、それに関連する Over To You という作品もある。もっとも、今の世界ではロアルド・ダールの一番有名な作品は「チャーリーとチョコレート工場」だろう。あんなにヒットするとはご本人も驚いたことだろう。ダールはそれ以外にも、グレムリンを小品の小説にしてディズニーと一緒に出したとかいろいろ逸話がある。グレムリンが映画化されたときに印税はもらえたのだろうか?それはともかく、この話の妙味は、結末だ。ここではもちろん言わない。結局、妻は夫に会いに行く。彼女は決して夫を愛していなかったのだ。むしろ、すべてを夫の言いなりに生きていた。さて、彼女は静かに夫の目玉と脳が入っている（そしてもちろん生きている）洗面器に向かいあう。果たして・・・。

Dec. 4, 2023
Nora Barnacle 余話

ジェイムズ・ジョイスの「ダブリナーズ」を読む。

ところで、ジョイスの妻である Nora Barnacle は一九〇四年六月十六日にジョイスと初デートをして、その後にジョイスが積極的に押しまくり、ついに一緒に大陸へ行くこと承諾させる。トリエステで二人は家庭を築くわけだ。彼女は Galway というところの出身とある。Galway はアイルランド西部の町。といっても、僕はアイルランドに行ったことがないので全く見当がつかない。

Nora Barnacle でウィキペディアを検索したら、日本語訳?があって、そこではノラ・フジツボさんとなっているのでくすくす笑ってしまった。フジツボさんかあ、と思ったら可笑しくなって。ジョイスは四角四面で、謹厳実直で、面白くなさそうな男に思えるが、実際は結構ユーモアのある、普通のおじさんのところもある。ピアノ弾いたり、ギター弾いたり、家族とも、にこやかまではいかないが、やや楽し気に写真におさまっている。ところで、barnacle は確かにフジツボとかの海産甲殻類のことであるが、一方で、カオジロガンという鳥のことも指すようだ。写真を見ると、確かに顔が白い雁なのか鵞鳥なのか、そんな鳥でなかなか美しい。そっちの方がご本人は良かったかもしれない。ウィキペディアでは、パン屋だったノラの父親の姓は、野雁から取られたと書いてあるので、やはりフジツボではなく、ワイルド・グースという意味なのかとも思う。ジョイスとノラがダブリンで初めて会ったのが、一九〇四年の六月十日で、ファーストデートが六月十六日だから、ジョイスはかなり熱を上げていた。しかし、ノラはジョイスを最初はスウェーデンの船員だと思ったらしい。それは、彼がスポーティなカンバス地のスリップオンシューズを履き、青く透き通るような瞳を持ち、ヨット帽をかぶっていたせいらしいが。でも、なかなかおしゃれだ。そのうち、ノラを主人公にした短編を書いてみたいものだ。さて、ノラの姓、barnacle をどう解釈するか?は両方の意見があるようだ。果たして、ノラ・フジツボさんなのか、ノラ・カオジロガンさんなのか?

こういうことはチャット GPT に聞くと面白い返答が来る。この場合は、僕の質問に対してこう返事が来た。

「バーナクルは、フジツボ、あるいはガンカモ（カモの一種）の意味です。直訳すればノラ・フジツボになります。フジツボは海にくっついて離れない生き物なので、比喩的には「粘り強い」「しつこく付きまとう」などの意味です。ノラがアイルランド西部の海沿いの町ゴールウェイ出身なのでフジツボという名前は土地の影響を受けている可能性もあります。ジョイスとの関係で考えると、ノラはジョイスに寄り添い続けた妻だったので、フジツボという名前は運命的だったのかもしれませんね。」

AI はなかなか興味深い解釈をするものです。しかし、ノラをナンパしたのはジョイスで、生涯ノラと粘り強く生活したのも、ジョイスのほうだと思うので、さてどうなのでしょうか?ノラは最後までジョイスの小説（ユリシーズやフィネガンズ・ウエイクなど）を面白いとも、素晴らしいとも評価しなかったし、興味もなかったそうです。

Jan. 4, 2024
大江健三郎「取り替え子（チェンジリング）」とドアーズのことなど
Changeling, The Doors, Kenzaburo-Ohe

たまたま二〇〇〇年頃に買って、ずっと本棚に放り込んでいた大江健三郎の「取り変え子（チェンジリング）」を見つけて読みだした。まだ途中なので、この本のことを書くには早いが、まずは感想を。タイトルの取り変え子というのは、英語で Changeling、僕にとってはこの単語は「ドアーズ」の楽曲を思い出させる。スタジオ盤としては、ジム・モリソンがいた最後の録音である LA ウーマンの中の曲だけど、それほど好きではなかった。ここでジム・モリソンが歌ってるのは、まあ、くずというか空っぽの男の話（多分自分のことだろうけど）。チェンジリングとは普通は欧州の伝承では、人間の子供が妖精にさらわれたときに、代わりに残される醜い子供というような意味だが、ドアーズのは割と単純に、ただの中身のない、金もないどうしようもない男が、街を離れて新しい人生に出て行くという話のように思える。何故チェンジリングという題をつけたのか、この大江の小説はこのタイトルとどう結びつくのか、まだ序章しか読んでないので、僕には現時点ではわからない。主人公は大江のことと思われる作家、古義人（コギト＝ cogito, ergo sum、われ思う、ゆえにわれあり）。義理の兄である吾良（ゴロウ）が自殺したところから始まる。当然、僕としては、吾良は映画監督、俳優、エッセイストであり、大江の義理の兄であった、伊丹十三を想起させる。古義人は、義兄吾良が残した自分宛のカセットテープを、田亀（タガメ）と呼ぶカセットレコーダーで再生して聞いているのだが、それは本来一方通行の言葉であるはずが、古義人はそれを少しずつ聞いては、止めて、それに返答したり、コメントを返したりしている。それが義兄の自殺後もいわばあちらの世界にいる吾良との現実的なやり取りのように会話するわけだ。この導入部分はなかなか

刺激的だ。これは決して私小説ではないという前提でいうと、吾良の妻らしき梅子は宮本信子、古義人の妻、千樫（チカシ）は大江の妻であり、伊丹十三の妹であるゆかりとなる。娘（息子かもしれない）と思われるアカリは、大江の長男の光（音楽家、脳に障害がある）ということになる。伊丹十三は一九九七年十二月に自殺（他殺という説もあるが）、この取り替え子の設定は実際の大江と伊丹を思わせることになる。邪推すれば、自殺した吾良の代わりにこの世界を生きる古義人が取り替え子なのかもしれないが。ま、先を読んで行こう。ちなみにこの本は講談社発行で、書下ろし。僕のは初版のようだ。全く本棚に置いてあったので新品のままだ。装丁は司修となっている。シンプルだが美しいデザインで、猫らしき絵（司氏は「犬」という小説を書かれているので、犬かもしれない）がChangelingの英文字と一緒にスタンプのように押してあるイラストの中表紙も素晴らしい。こういう本を出してみたいものだ。

Jan. 7, 2024
Fragile ～人間、この壊れやすいもの

「チェンジリング」の続き。少し読み進んだ。古義人は、田亀から離れるために、ベルリンからの講師としての招聘を受けて出発する。それは吾良としては、quarantineだという。この単語は、僕自身は空港での「検疫」という意味で認識してるが、ここでは、隔離とか孤立化のような意味のようだ。一旦、日本での日常から逃れて一人になるという感じかな。ま、それはともかく、このチェンジリングは、もちろん虚構というかフィクションなのだが、次第に、伊丹十三（吾良）の自殺、やくざによる襲撃を経てのというあたりに及び、また一方で、大江（古義人）の「政治少年死す」（この小説上は「政治少年の死」）をめぐっての、右翼からの圧力などの話になっていく。さらには、愛媛の森から、古義人の父の終戦の時の蹶起とその死へも進み、僕はこのあたりの事実には疎いので何が本当に起こったことであり、何がこの小説での架空の話なのかわからなくなる。ところで、同じ大江の作品「万延元年のフットボール」の英語のタイトルがThe Silent Cry（沈黙の叫び）というのも初めて知った。ドイツ語のタイトルはDer stumme SchreiRomanとあるが、グーグルの翻訳は、英語だとThe Silent Scream、日本語だと静かな叫び声と出る。サイレント・スクリームってなんか山下達郎の曲のタイトルみたいだ。ちなみに、The Football Game in 1860というタイトルはあり得ないのかなあ？Theか、冠詞なしかわからないけど。後日、チャットGPTと議論したが（いつも面白い）、英語のタイトルを日本語に近い感じにするには、Football in the year 1860あるいは、Football in the year Man'en

Oneだろうということになった。定冠詞はないほうが良いとも。

気になった言葉としてはFragile。まあ、人間は壊れやすい。間違いなく。僕は、いつか、何度も癌を克服しながら、しかし、次第に弱っていく人間を書いてみたいと思う。自分の癌のこともそうだし、妻の父親（妻の母親には生前会えずじまいだったが、やはり癌で亡くなっている）、友人、弟、父などの死を見てきて思う。

と、こんなことを書きながら、音楽を流している。実に久しぶりに聞くのだが、Joe Henry の Tiny Voices。一時、すっかりはまってずっと聞いていたように思うが、もう何年も聞いていなかった。これがとても良い。この頃のジョー・ヘンリーはジャズっぽい。後ろで鳴ってる喇叭が結構アヴァンギャルドで面白い。

Jan. 9, 2024
パスサッカー、弾き語りの十曲、ナツメグなど

昨日は、国立競技場に高校サッカー決勝を見に行った。青森山田対近江。近江は実際に目の前で見るのは初めてだったけど、そのパスサッカーはとても面白かった。というか、狭いエリアでパスを近距離でまわすのだが、これが滅茶苦茶上手。当然青森山田のディフェンス陣もわかっているから、すぐに奪うのだが、それをまた近江は取り返す。これは見事で、特にサイドライン沿いの狭いエリアで曲芸のようにボールを奪って、ドリブルと短いパスで前進する。全然奪われても取り返せるという自信なんだろうけど、青森山田は結構苦戦した。特に後半すぐに近江が同点に追いついたときは、判官びいきのスタジアムはほぼみんな近江を応援していた。しかし、やはりいかに短いパスで相手を翻弄しても、最後、相手のディフェンスラインを突破しないと点が取れない。その意味では、青森山田はしっかりしていた。それと近江は良い意味であっけらかんというのか、パスを楽しんでる感じで、ある種、飄々というのか、緻密なパスだけど、全体としてはおおらかというか、そこがやはり最後に青森山田の厳しさに負けてしまった。近江はあまり高校サッカーでは見たことがない素晴らしいチームだったので惜しまれるが、結果はオウンゴールも含めて三対一で敗戦。でも、楽しんだ。平均体重差が十キロあるにしてはほぼ互角だったのも凄い。と、いうことで、年初のサッカーはこれでおしまい。スタジアムで松本育夫さんに会う。育夫さんから、三月後半に戸山高校サッカー部の総会があるからあなたも来るように言ってくれと水谷氏から言われたと。（育夫さんはなんだか戸山高校サッカー部の顧問みたいだ。僕はラグビー部。）二人で新年の自撮り。

それを戸山サッカー部のLINEに上げた。

さて、昨日は国立競技場から、妻と待ち合わせて伊勢丹に行った。特に収穫はなかったが、伊勢丹の食堂で食べたカジュアル・フレンチのフランス風ハンバーグは香辛料が変わっていて（ナツメグがいっぱい入っていた）美味しかった。

今朝は、今年こそギター弾き語りで歌える曲をまず十曲覚えようと思い、まずは、ビートルズのCan't Buy Me Loveの歌詞を書きとって、それを印刷して、コードを鉛筆で上に書いていった。楽譜が読めないので、簡単な弾き語りのシートを作るとするとこれしかない。ギターソロのパートは、小節数とコードだけ書いて、別途ソロを弾けるように練習する。ジョージのギターはなんてことないようだけど考えられていて素晴らしいと思う。昔なぜこういうところが理解できなかったんだろう。目標として、十曲だとすると、エルビス・コステロのアリソン、ザ・バンドのザ・ウエイト、イーグルスのデスペラード、それにビートルズ三曲くらいをまずは仕上げたい。ビートルズはこのあとは、オール・マイ・ラビング、ヘイ・ジュード、サムシングとかかなあ。あと、ジョンのバージョンのスタンド・バイ・ミーは大体できる。クラプトンのティアーズ・イン・ヘヴンもやらなくては。やはり人口に膾炙している曲が良い。（と、書いたのですが、諸般の事情で、まったく達成できてません。今年、２０２５年は、どうしてもこれを実行しようと思います…）

Jan. 11, 2024
Day dreaming, The Soul, The Heart, The Soul, The Heart…

昨日は、ぼうーっと考え事をした時間が長かった。一つはHello Good Bye（これは今僕が書いている小説のタイトル）の続き。出来ればイェイツの詩を少し使いたい。でも、うまく嵌るかわからない。書いてみるしかない。大江の「チェンジリング」を夜少し読んだ。次第に四国の森に落ち込んで行く。やはり、「万延元年のフットボール」を読まなくてはならないかな。すっぽんとの格闘がなかなか凄くて、思わず力がはいってしまった。大江健三郎は、やはりかなりユーモアのある人だと思う。普通のユーモアではないけれど。全長三十五センチのすっぽんってどのくらいの力があるものなのか？ちなみに僕はすっぽんは食べたことはあるが、あまり好きではない。すっぽん好きの人は結構いると思うが、何が美味しいのかまだわからずにいる。まあ、亀の一種だし、鳥のような質感だとはおおよそわかっているが。このすっぽんの話がフィクションなのか、あるいは本当に起こったことなのか知らないが。

さて、これからの予定というか、計画だが、時間がかかっている「取り替え子」を早く読んでしまい、次は「オデュッセイア」に取り掛かろうと思ってる。ユリシーズの解説などで、大体話は知っているものの、やはりちゃんと読むべきだと思う。楽しめるのかどうかわからないが。もっとも、ちょっとボルヘスの伝奇集を読んでいたら、こう書いてあった。「現代の一冊の本が古い本に由来しているということは明らかに名誉あることである。とくに何人（なんぴと）も（ジョンソン博士が言うように）同時代人には負債をおいたがらぬものであるから、ジョイスの『ユリシーズ』がホメーロスの『オデュッセイア』に対してもつ、言いふるされた、意味のない関係は―わたしにはその理由がどうしても納得できそうにないが―気紛れな批評家連の賞讃を得つづけている。」（アル・ムターシムを求めて、集英社、篠田一志訳）ま、そうかもしれない。

それはともかく、並行して、「Hello Good Bye」を仕上げる。ここが一番難所だけど、失われた恋人を取り戻せるのか？会話が中心だろうけど、客観的な描写が必要だと思う。それが終わったら、「街路は荒れ果てていた」（こちらは、少し前にかなり書いた小説だが、途中で止まったままになっている）の書き直しをする。こちらは、全体の構成、ストーリーなど全面見直しだ。近未来の抑圧された世界でアナログレコードの製作を再開するという話と、御禁制のロックコンサート行う若者たちという話の二つを核とするストーリーに変更する。何とか、三月三十一日の締め切りまでに二作品を仕上げることがまず目標だ。ま、時間があるようでないので、気合いを入れたい。そういえば、一月七日にベッケンバウアーが亡くなったことと、八代亜紀が年末に膠原病で亡くなったのは驚いた。八代亜紀さんは、特にファンではなかったが、近年ジャズのアルバムなども出していて一度聞いてみようと思っていたが、未聴だ。膠原病、皮膚筋炎、間質性肺炎というと弟と全く同じ病気だ。昨年亡くなった僕の友人は同じ、リューマチと皮膚筋炎（膠原病だが）になって、かなり強いステロイドで生還した。しかし、その後、悪性リンパ腫を発症し、これも無事克服したが、さらに脳への転移が起こり、抗がん剤治療を行ったが、昨年十月に力尽きた。友人達での会食会が不定期にあったのだが、葬儀後に会合を行い、献杯をして故人を偲んだ。間質性肺炎は、癌でも膠原病でも最後に起こるもののようで、恐ろしい。

夕方、ようやく「取り替え子（チェンジリング）」を読了。なかなか難しい小説だ。まさにその中に独白のよ

うに出てくるが、大江の小説は、文章は、人を翻弄する。あえてなのか、意図せずなのか、分からないが、恐らく彼の頭脳は恐ろしくすぐれていて、諸々の事象を同時に考えて、文章にしていくのだと思う。ただ、それは僕のような普通の人間の理解力を越えている。大筋はわかるのだが、理解できないところも多い。チェンジリングは、モーリス・センダック Maurice Sendak の Outside Over There から取られていたことを知った。古義人の妻、千樫がセンダックの絵本を読みながら（見ながら）というところが終章に具体的に出てくる。話はゴブリン（小鬼）が赤ん坊を盗みに来て、取り替え子として、氷で出来た赤ん坊を置いていくという、まさに西欧の取り替え子話が出てくるわけだ。しかし、では、小説の登場人物の中で誰が取り替え子なのかは様々な考察があり、よくはわからない。吾良は森から戻ったときにはすでに取り替え子だったと、千樫は思うし、吾良と古義人が戻った時に、二人の様子があたかもゴブリンのようだったとも書かれている。千樫は吾良の妹であり、むしろ、古義人が吾良を助け出す人間のようにも受け取れる。外の世界へ行ってしまった吾良。それは新生（再生、再臨）なのか、あるいは、残された古義人が再臨なのか、ドアーズのジム・モリソンは卑小なダメ男が街を出て行くことに再生 The Second Coming を見ているように思うが、小説の方はいずれもう一度読み返して、そのあたりの大江の書きたいことを理解してみたい。

Jan. 15, 2024
Outside Over There

結局、やはり大江の「取り替え子」をもう少し理解（？）するために、モーリス・センダックの Outside Over There を Amazon で買った。この人の絵はなんとなく知っていたが、タッチとしては個人的には好みではない。ただ、小説上でややイメージしにくかったのが、実物を見てかなり実感できた。アイダが背中向けに窓からゴブリンを追って飛び出す、背中向けは実は間違いなのだが、このあたりは、なんかシュールというか、不条理だ。英国のバラッドなどでは、不可思議というか、論理が通らない、かつ、残虐な歌詞が結構あるが、これもそういうものかとも思う。そして、その間違いを、海にいるパパの歌が救う。こういう展開は面白い。いつか、僕も使ってみよう。

Jan. 30, 2024
ボルヘス　死とコンパス

ボルヘスの続き。伝奇集をぼちぼちと読み続けている。ボルヘスのファンのかたたちには、何言ってんだよ今頃、かもしれないけど。

「死とコンパス」はまあ推理探偵小説ということかな。（ポスト・モダーン探偵小説といういい方もあるようだが）とはいえ、読んでも良くは事情が理解できない。僕だけかもしれないけど。ボルヘスの登場人物は、イギリス人とか、アイルランド人とか、ユダヤ人とかあまりアルゼンチン人などは出てこないように思える。エリック・レンロットという探偵がどこの国の人なのか僕にはよくわからないが、最初の死体になるのは、ユダヤ人法律学者ヤルモリンスキーだ。当然ユダヤ人という設定だ。「イディッシュ新報」の主筆からの電話などという記述もある。

Feb. 12, 2024
I Am a Cat

夏目漱石「吾輩は猫である」です。大昔、良くは覚えていないけど、僕はこの「吾輩は猫である」が大好きだった。あれは中学生か、高校生か良くは覚えていない。ともかく、これも不確かだが、文庫本か、単行本か、それを何度も読み返した時期があった。で、一九九五年頃に、また読んでみようと思って、岩波書店の「吾輩は猫である」の文庫版を買った。しかし、その時はあまり乗らなかったというか、五十頁ほど読んでそのまま棚に積ん読になってしまった。それを昨日、たまたま本棚で見つけて、久しぶりに読んでみようと思い立った。で、読んでみるとこれが滅茶苦茶面白い。苦沙弥先生、迷亭、寒月などまったく旧友に再会したようである。確かに猫の独白というか、猫が語り部になっているから、改めて読むとちょっと説教臭いところがあるが、それを割り引いても、中身が恐ろしく面白い。特に迷亭の出鱈目な放談というか、法螺話が最高だ。

僕なりに、昔から覚えている場面がいくつかある。順不同でいうと、一つは迷亭先生の蕎麦講釈だ。夏の暑い日に、ふらりと現れる迷亭先生、挨拶もなく苦沙弥先生の家に上がり込む。昼を、勝手に出前を取ってここに届くようにしたと、のたまう。夫人は、なんて勝手なとも思いつつ、手間が省けて安堵する。苦沙弥先生もやれやれという顔で加わる。そこへざる蕎麦が二枚届く。早速に迷亭先生、食べ始めるが、まずは蕎麦の食べ方の講釈がある。こう、ざるから蕎麦を箸でつまんで、といいながら、いかにも長い。蕎麦つゆは三分一くらいつけて一気に飲み込む。もちろん、大事なのは山葵だと。で、つまみ上げた蕎麦がかなり長くて量も多いため、もともと八分目入っている蕎麦つゆにつけると、四分の一もつけられない。やや困ったと思いつつも、後へは引けないので、そのまま長い蕎麦を一気にすすり込む。のどを通るときに相当苦しかったらしく、涙目になるが、なんとか

全部飲み込む。というくだりが流石に漱石、この描写が天才的に上手だ。これは昔読んでいたく感動した覚えがあるし、また改めて読むと素晴らしい。

こうやって書き出すと際限なく名場面があるが、それはよしておこう。いくつか、思ったことは、寒月が物理学の演舌をするというくだりで、（絞首刑の仕方について講演するという設定）、寒月が事例として、オジセー（オデュッセイア）をひいてテレマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺する件の話をする。これなどは、僕は忘れていたが、立派にオデュッセウスを漱石が読んで良く知っていたことがわかる。漱石はラフカディオ・ハーンの後任で、東京帝大の英文学の先生になったくらいだから、英文学にかぎらず、ギリシア神話なども読んでいたんだなあと感慨深い。

猫のことも気になる所がある。第一話を書いたときはこんなに長い小説になるという認識がなかったのと、吾輩は猫であるというタイトルで書き始めたので、恐らく猫の生活や心情も書きたかったのだろう。車屋の黒、二弦琴の師匠のうちの三毛子という二匹の猫友が出てくる。黒は無学で乱暴者だが、実際は結構抑圧されて、辛い渡世を渡っている。三毛子は、猫として上品で美人な素敵な女の子だが、そして、吾輩が淡い恋心をいだいている友達のひとりであるが、風邪をこじらせてあっという間に亡くなってしまう。このあたりも漱石は淡々と世の無常を書いている。吾輩は、泥棒が苦沙弥家に入った時も、夜見ていたものの、何も出来ない。さらに、少しは自分が役に立つところを見せようとして、ネズミ捕りを試みるが、ネズミに翻弄される。さらに、漱石は、猫が蟷螂狩りをするさまを詳細に描く。蝉取りも同じように細かく描写する。いずれも猫の視点だ。さらに、木の上で三羽の鴉に会うことも詳述する。こういうところは面白い。実際に猫を飼っていたから、よくその生態は知っていたのだと思う。

銭湯を吾輩が観察に行く場面も懐かしい。最後に、ニーチェの超人が出てくるのは昔読んで心に焼き付いて、鮮烈に覚えている。逆に、まったく覚えていなかったのが、隣の空き地をめぐっての、落雲館という学校の生徒たちとの戦闘場面で、これはあまり面白くない。だから当時もあまり感心しなかったので覚えてなかったのだろう。

全般に、漱石個人はもちろん、当時の学士クラスの人々の高い教養や、学識、西欧の文学などの知識は、今我々が思うより遥かに高いのは驚くべきだし、この小説が発表された一九〇五年から、すでに百二十年近く経っているのに、我々の教養というのは大して高尚になっていないことがわかる。一方で、やはり、時代だと思うのは、漱石といえども、車夫（今で言えばタクシーの運転手さん）などに対する偏見というか、見下し方はさすがにまだある種の階級社会的な認識があることがわかる。また、夫妻の会話を聞くと、当時としては仲の良いほうだとは思うものの、自分は東京帝国大学出の文学士で、夫人は多分学歴がないのだろうけど、明らかに女性を蔑視していると思われるところも多々ある。それでもこの夫婦はとても仲の良い夫婦だと思うが。ただ、苦沙弥先生は、実業家はまったく馬鹿にしていて、金持の金田家、その妻の鼻子、娘の富子などはひどい書かれようである。高等遊民の迷亭先生ともども、金儲け主義に走るようなやからは軽蔑しているし、また、自分は貧乏でも、そんなことは大して頓着していない。（迷亭先生は金持ちらしいので、今で言えばドラ息子なんだろうけど、社会に迎合する気持ちはまったくない）漱石自身の価値観や、人物感、ものの見方が投影されているのは良く理解できる。

Jan. 18, 2024
Rock and Other Four Letter Words

本棚から持ってきた本が何冊かある。読んでみたり、眺めてみたりする。昨日は、音楽評論家の中村とうよう氏の「ロックが熱かったころ」（ミュージックマガジン社）をパラパラ読んだ。これは一九九九年九月二十五日発行になってる。中身はミュージックマガジン誌（元々はニューミュージックマガジンであったが、改称）ほかに載った記事をまとめたシリーズの一冊目でロック編とある。いつ買ったか覚えていないけど、久々に読むといろいろ考えさせられる。始まりは一九六九年からで、当たり前だけど、ここが一番面白い。詳細は書かないが、タイトルだけ見ると、「ロックはオトナの音楽じゃない」とある。タイムとニューズウィークが、ウッドストック・ミュージック・フェスティバルのことを取り上げたことなのだが、要はロック音楽が盛り上がりを見せ始めたのを、外から大人たちが見て、好意的に評しているというような文脈だ。六九年というと僕は、十七歳の都立高校生で、毎日はオーバーだけど、ラグビーに明け暮れていた頃だ。この頃、僕が好きだったのが、フジテレビが土曜日の午後にやっていた「ビートポップス」という洋楽の番組だった。ウィキペディアにも大した情報は出ていないが、ともかく覚えているのは、大橋巨泉と星加ルミ子（当時 Music Life 誌編集長）だった。巨泉がまだ若くてノリノリで次々にギャグを飛ばしていたのが記憶に残っている。巨泉は、たとえば、カウシルズの名曲「雨に消えた初恋」（The Rain, the Park & Other Things)

を紹介するたびに「牛も知ってるカウシルズ」とダジャレを言っていた。僕は、ビートルズ程度は知っていたが、洋楽に関しては、ほとんどこの「ビートポップス」と、オールナイトニッポンの福田一郎さんのトーク、それにたまにミュージックライフを立ち読みしたり、買ったりして知識を得ていたように思う。一つ不明確なのが、ビートポップスは一九六八年四月から七十年一月三十一日までが一番後期の放送で、土曜日の十五時からだったとWikiに書いてあるが、土曜日はラグビーの練習があり、もちろん、授業は昼で終わって、短い練習だったと思うものの、十五時までに家に帰って見ることが出来たのは少し不思議な気もする。ちなみに僕は都立高校に一九六八年四月から七十一年三月までいたと思うが、そうだとすると、高校一年生、二年生、三年生の一月まで見れたことになる。部活は、三年生の新宿戦（五月）で終わりなので、ほぼ高校全期間見ていたことになると思う。

まあ、ビートポップスのことはまた別に書きたいが、そんなころの中村とうよう氏は、個別に見ると、六九年は「オトナのためのロックの本」、「スーパー・グループへの失望」（主にブラインド・フェイスのこと）、「大型ロック・バンドのつまらなさ」（ブラッド・スウェット&ティアーズへの批判。シカゴは評価。）、「ロックは断固わが道を行くべし」（ジャズの影響を良しとしない）などの見出しで書かれている。次は七一年になり、「ニューフォークへのほろ苦い思い」という大きなタイトルになるという具合。ここでの大きなテーマはボブ・ディランだ。ここで論じるのはやめるが、当時の僕の受け取り方と同じこともあれば、逆のこともある。もちろん、大衆音楽としてのロックというものをすでに視野に入れていた中村とうようさんだから納得できる点が多い。

あとの方で、各誌でのとうよさんのレコードの評価、点数などがのっている。Part3となっていて、「レコードの穴からロックを聞く」という扉のタイトルだが、これが面白い。レコード芸術六七年五月号のジャニス・イアンのデビューアルバムから始まる。そして、ボンゾ・ドッグ・ドゥー・ダー・バンドが出てくる。ライブ・アドヴェンチャー（ブルームフィールド、アル・クーパー）、マザーズのフリーク・アウト、ストリート・ノイズなどと並ぶ。当たり前だが、当時LPレコードは、二千五百円くらいはした。高校生にとってはとんでもなく高い。銀座ヤマハなどで輸入盤を買うケースもあったように思うが、それも最低でも同じくらいの値段だった。僕などは、ビートポップスに嵌って、最初に買ったまともなロック・レコードは、ステッペンウルフだったけど、ともかく一枚買うのがもう清水の舞台から飛び降りるという感じだった。やはり、シングルを買うことも多くて、カウ

シルズも持ってるし、ファウンデーションとか、クリーム、ストーンズなどを買っていた。（これらは今でも残っているので、間違いない）

とうようさんの評価を見て驚いたのは、八十年代初めのいわゆる、ニューウェーブの作品の評価が高いことだ。例えば、以下に並べるものは、本来同じ土俵での評価はおかしいかもしれないが、スロビング・グリッスルなどは手放しの高評価。PIL、ジャパン、フライング・リザーズ、イアン・デューリーなども軒並み高評価だ。これは僕も大好きなのもあれば、同系統でも全く聞かなかったものもある。逆にエルビス・コステロはある部分は認めながらも彼の塩辛いヴォーカルが嫌いで、あまり評価されていない。時代はぐっと新しくなって、ポール・サイモンのグレースランドなどは民族音楽の簒奪者としてくそみそだ。僕は、グレースランドは当時も好きだったし、今でもお気に入りのアルバムだけど。まあ、このくらいはっきりと選評を書いて、何を言われても自説を曲げないのが中村とうようさんで、音楽評論という観点で言えば、昨今の批評家はまったくダメになったと思う。特にミュージックマガジン誌は、作品の評価を見ると、とても音楽の専門家の評価が多くなった。例えば、コード進行の分析などを具体的に語る評者が増えた。別にそういうのは、ギターマガジンとかの専門誌に任せておけばいいし、そんな音楽理論が語りたければ、会得したければ、音大でも、ジュリアードでもなんでも入学すれば良いことだ。マガジンの真骨頂は、批評性にあった。主に中村とうようさんが担っていた部分とは思うけど、小倉エージ氏などもそうした目線が常にあったと思う。今のマガジンの評者は（レコードコレクターズ誌も大同小異だが）、やれテンションコードがどうのこうのとかすぐにそうした音楽そのものの技術に関する評価になる。ジェフ・ベックの古いインタビューを先日読んでたら、「一ミリの音楽理論も知らないし、楽譜などまったく読めない」と明言していた。ミュージシャンは、基本的には自分の耳と、あとは感情や感覚で作っていたのが、六十年代後半のロックだと思う。ポールのゲットバックセッションでのレットイットビーの作曲の様子を見ると、何度も何度もピアノを弾きながら、歌いながら、少しずつ曲の形を作っていく様は、感動すら覚える。譜面とか、音楽理論じゃあなくて、ここはこういうコードだ、こういう音が入ったほうが良いとか、自分の感性だけを頼りに曲を作っていく様はこれぞ大衆音楽って感じです。まあ、そうは言いながら、今となってビートルズの曲を音楽的分析すれば、こうこうで、ここが凄いという解説はもちろん意味がないわけではない。ただ、ミュージックマガジン誌のような雑誌の使命は、批評性にあるわけだから、その本来の趣旨をぼやかすような解説が多くなるのは納

得がいかない。と、年よりの繰り言ですが。この稿は、また続きを書きたいと思う。

と、今回はこのくらいで終わります。次号は、「イェイツ詩集を読む2」をお届けします。岩上和道

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

私の本州マラソン歴史紀行（中部編③―山梨県―）

安藤　剛

【山梨県　富士吉田の火祭りと浅間神社】

山梨県のマラソン大会は、マラソンを始めて一年後の二〇〇八年五月に「山中湖ロードレース」を走ったが、生憎の雨天となり、湖面に逆さ富士を映す美しい山中湖を周回する走りが叶わず、次なる機会を窺っていた。

五年後の六月二二日にユネスコ世界文化遺産に登録されて観光と登山のブームに沸いている富士山の北麓を走る「富士吉田火祭りロードレース」の開催情報に、富士山との再会を楽しみに早速エントリーした。

昭和四九年に富士市に転勤となり四季折々山容を変える富士山を仰ぎながら通勤、休日には富士五湖をドライブしてきたが、地元の人から富士は見る山で登る山ではないと聞かされ富士登山の機会を逸していた。この機会に登山ではないが富士の山麓を存分に走ってきたい。

二〇数万年前に現在の富士山の北側に二五〇〇mの小御岳火山が誕生、一〇万年前に中腹で大規模な噴火があり火山灰が小御岳を呑み込んで新たに三〇〇〇mの古富士が誕生、更に一万年前にかけた火山活動によって広い裾野を持つ現在の新富士火山が形成されたといわれる。

過去二千年の間に溶岩流出する噴火が四三回あり、直近の宝永四年（一七〇七年）の大噴火では、山腹に宝永山が生まれて大量の火山灰が江戸に達した。宝永の噴火後、三〇〇年ほど噴火しておらず、富士山がいつ噴火しても可笑しくないと考えられている。

最近マスコミで話題の富士山噴火予知では、宝永噴火と同規模としても、噴煙は二万メートルに達し、火山灰は一八億トン以上、東京にも五センチの火山灰が降り積もり、全交通機関ストップや農作物被害や健康被害、電子機器障害など甚大な影響が予測されている。

富士山は古来より神体山の禁足地であり遥拝信仰の対象だった。平安前期の大噴火に伴い鎮爆祈念のため浅間神社が建てられ、平安後期に修験道が盛んになると修行のため登拝する信仰の山となり、江戸時代の富士講出現で巡礼登山が庶民の間で爆発的に流行、また浮世絵師がこぞって美しい富士山を描き、葛飾北斎の富嶽三十六景や歌川広重の東海道五十三次が西洋でも人気を博して日本のシンボルとして海外に広く知れ渡っていった。

富士山の世界遺産登録が自然遺産ではなく文化遺産だった背景も、古くから信仰や芸術の対象になってきたことにあるが、今回の出走を機に、秀峰富士と霊峰富士の両面から富士山の魅力を体感してきたい。

【富士吉田火祭りロードレース（二〇一三年）】

今回のマラソン紀行は、富士北麓を走る一〇キロロードレースに加え、富士山登録文化遺産の構成要素三三箇所の内八箇所を占める浅間神社の探訪と富士五湖の河口湖畔の散策、マラソン大会の冠名となった富士吉田の火祭りの見学をセットした盛り沢山の一泊旅行である。

富士吉田の火祭りは、八月に富士の夏登山が終わる山じまいの伝統行事で四〇〇年の歴史があり、富士吉田市の北口本宮浅間神社と諏訪神社の祭事として浅間神社から富士山駅までの市街メイン通りに並んだ大松明が焚き上げられる壮観な光景は日本三奇祭の一つといわれる。

今回走る「富士吉田火祭りロードレース」は、八月の猛暑と高低差三〇〇mのアップダウンが続く日本一過酷な文字通りの火祭りロードで、自己ワースト記録を更新する悪評高い大会でもある。

世界遺産登録に伴い自然保護のため今回から未舗装の登山道は走れなくなったが、お天気は雨で凌ぎやすそうだ。フルマラソン七大会完走を自信に走り切りたい。

八月二五日、新宿からの特急スーパーあずさ一号は、アルプス方面の登山者でほぼ満席だった。朝霧に煙る相模川渓谷を車窓に、隣り合わせた八ヶ岳登山に向かう乗客と山やマラソン談義をするうち大月駅に着き、富士急行に乗り換えて富士山駅に下車したのは九時丁度、小雨交じりの天気で待ち望んだ富士の姿は雲に隠れていた。

二〇一一年に駅名を富士吉田から富士山に改称した駅構内には、富士山の世界文化遺産登録を祝う幟が立ち並び、駅ビル入口に取り付けられた赤い鳥居が真新しい。

駅前に会場行のシャトルバスを待つ長い列が出来ていたが、なかなか来ない。受け時限が迫り焦ってくる。ようやく二台が連なってきて安堵の声が広がった。

渋滞する富士吉田市街地を抜けて林道を走り始めると「この上りがキツいんだよね」「それを言わないで」連続参加のランナーたちの軽快な会話を耳元に、覚悟はしてきたが今日は厳しい走りになりそうである。

会場の富士北麓公園は、駐車場が既に満杯で陸上競技場周辺は参加者六〇〇〇人で溢れていた。辛うじて受付時限に間に合い、ごった返す競技場内の通路で慌ただしく着替えてトラックに出た。既に開会の式典は終わり皆がトラックを試走していた。小雨が降りしきり、辺りの山並みは朝霧に包まれ、墨絵のように幻想的である。

会場アナウンスが気温一九度、湿度九五%、風〇mを伝えていた。標高一〇〇〇mの高原とはいえ無風高湿のランは厳しいが、小雨と気温一九度は助かる。

気温が徐々に上がってきたのだろう、朝霧が濃くなり、周りの山並みをすっぽり包み隠してしまった。

濃霧の中をまずハーフ三〇〇〇人がスタート、二〇分後に我々一〇キロ二〇〇〇人がスタート、まさに五里霧中のスタートである。前方に係員がスターターに差している赤いコーモリ傘が霧の中に浮かんでいた。

視界は五〇mもない、陸上競技場のスタンドも霞んで全く見えない、雨に濡れて鮮やかな赤いトラックを二〇〇〇人が整然と四分の三周、競技場の外周を一周、富士山麓の雨に煙る幻想的な樹林ロードに走り出た。

いきなり緩い上り坂が始まった。キロ標識を見逃して自分のペースが掴めなかったが、五キロレースの折り返し標示でキロ六分ペースを確認、富士山頂から富士吉田市街に向かう吉田口登山道の下り坂に入った。

ハーフマラソンはこの登山道を右折して高低差三〇〇mの上り坂五キロを往復するのだから、ハーフにしなくてよかったかもしれない。そんな思いで深緑の樹林に囲まれた下り坂を快走していた。復路はこの坂を上らなければならないが今はそのことは考えまい。

登山道の下り坂を一キロ程で、東富士五湖道路に右折すると緩やかアップダウンに変わった。雨も上がり濡れたロードをピタピタ走る足音が、規則正しく静謐な深緑の樹林に響いていた。やがて折り返した先行集団が続々と走ってきた。まもなく折り返しだ。

五キロのタイムが二八分四五秒は、先月の皇居マラソン一周目とほぼ同タイム、復路は上り坂になるが、なんとか一〇キロ六〇分は切れそうだ。

折り返しながら前後のランナーを測ると三分の二ぐらいの位置である。往路で緩やかなアップダウンと感じたロードが下りのように感じるのは調子のいい証だ。やがて吉田口登山道の上り坂に戻ってきた。

さすがに復路の上り坂はきつい。シャトルバス内で耳にした会話が蘇って来た。往路の長い下り坂で受けた膝のダメージが出てきた。心拍も苦しくなってきたが、憧れの富士山が走れている喜びを噛みしめて走り切ろう。

富士吉田市街から富士山頂に向かって真っすぐ延びる吉田口登山道の前方に、晴れていれば雄大な富士山が聳

えて見えるはずだが、今日の天気では止むを得ない。いにしえより多くの先人が霊なる富士を目指して苦行した登山道を今喘ぎながら走っていた。誰もが歩くのと変わらないスピードだが、気持ちだけで走っていた。

一キロほどの上り坂を九分もかかってしまったが、ついに上り坂が終わった。歩かずに走り切れた。前を走るランナーが次々に右折すると、ランナーがいなくなった登山道が真っ直ぐ富士山頂に向かって延びていた。二度目の給水を取り競技場に向かうラスト二キロに入った。

突然背後から「同じシャツ！着てる！」と声を掛けられた。背中の東京オリンピック二〇二〇招致運動ワッペンを見つけたようだ。振り向くと同じ一〇〇〇キロ縦断リレーのTシャツを着た同年代の女性である。

並走しながら言葉を交わすと、先月三一日に宮城県の区間を走ったという。私が山元町を走った前日ではないか。もしかしたら彼女のタスキを繋いだかもしれない。

東京オリンピック招致運動を兼ねた東日本大震災の被災地復興支援を目的に今年から始まった青森から東京までの一〇〇〇キロ縦断リレーのイベントの参加者は僅か七〇〇人、その中の一人と山梨県のマラソン大会で並んで走れるとはまさに奇遇である。「私はアップアップなのでどうぞお先に」と先を譲ったが、同じTシャツで並んでゴールしてやろうと思い直して後を追った。

ゴールの富士北麓公園の入口に走り終えたランナーたちが後続の我々を熱い声援で迎えていた。陸上競技場に入るとスタート時は朝霧に隠れていたメインスタンドが聳え立ち、濡れて赤く映えるトラックを走れている自分が勇者のように心地よい。ピッチをあげて彼女に追いついたが並べないままゴールした。タイムは五八分五三秒、一〇キロ男子六六才以上一三〇人中四六位だった。

彼女に「速かったですね」と声掛けすると、「ゴール前で抜かれたので抜き返してやったわ」と笑っていた。一緒に並んでゴールしようという思いが伝わらなかったのは残念だが、勝負に拘るアスリートさんのようだ。

震災直後の岩手県宮古市に泥片付けのボランティアに泊まり掛けで行かれたという。被災地宮城の出身者として「ありがとうございます」と丁寧にお辞儀した。

参加賞の富士吉田名物「吉田のうどん」を立ち食いしながら、被災地の炊き出し風景のようだねと二人の会話は弾んでいた。陸上競技場のロッカー室で急ぎ着替えを済ませ、シャトルバスに直行、富士山駅に戻った。この後の予定は御師の家訪問と富士浅間神社参拝である。

【富士吉田市街散策と北口本宮富士浅間神社】

富士吉田は江戸に最も近い富士登山口で、御師の家と呼ばれる登山者の世話をする宿が、江戸末期には八六軒あり、一夏に二万人ほどが富士山に登ったといわれる。

富士山駅から浅間神社に向かう本町通りに出ると、銅板の巨大な金鳥居が現れた。鳥居の扁額に金文字で富士山と書かれ、明日の「吉田の火祭り」のために太い注連縄が掛けられていた。この鳥居の中にご神体の富士山を入れて遥拝するとご利益があるそうだが、生憎の曇天で富士山を拝むことは叶わなかった。

金鳥居をくぐり浅間神社に向かう約一キロの本町通りの両側の歩道に、明日の火祭り用の大松明が並べ置かれていた。長さ三m直径一mの大松明は、アカマツの薪を束ねてヒノキの経木で表面を覆い縄で筍形に結い上げられ、数えただけでも五〇本はあったろうか。富士吉田市に一泊しての明日の火祭りが大いに楽しみである。

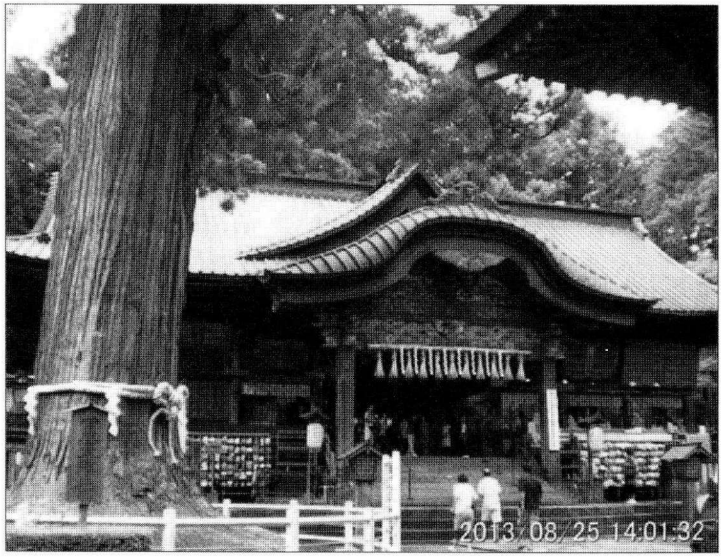
本町通りに軒を連ねる御師の家の中で、世界文化遺産の構成資産になっている旧外川家住宅に入った。間口が狭く奥行きの長い短冊状の屋敷地で、表通りから延びる細いタツミチの奥に中門と主屋が見えていた。

御師とは、御祈祷師を略した呼称といわれ、神社や寺院に所属する宗教家で、巡礼や参拝者たちに宿を貸し食事を提供、祈祷や案内などの世話をして、富士山信仰の参拝者が集まる上吉田宿は一大御師町を形成していた。

昔ながらの格式ある御師の家や今日的な民宿に建て替えられた御師の家を巡りながら、本町通りを三〇分ほどで森に包まれた北口本宮富士浅間神社に着いた。

小雨煙る中、深緑の老杉聳える参道に苔生す石灯篭が並び立ち、荘厳な神域の正面に建つ日本最大木造鳥居の大鳥居は改修工事中だった。江戸時代に富士講が始まると全国から信仰の霊山を訪れる参詣者の列がこの参道を行き交っていたに違いない。

北口本宮富士浅間神社拝殿と太郎杉



富士山頂を背に拝殿と本殿、その両側に東宮と西宮が並び、いずれも国指定重要文化財で桃山様式の荘厳な神域を形成、拝殿の前に聳える太郎杉は樹齢一〇〇〇年を超え富士山信仰の歴史を今に伝えている。西宮の裏手から今日走ってきた吉田口登山道が延びていた。

境内右側に小さな摂社が九社並び、奥に摂社よりは大きな諏訪神社が鎮座していた。古文書に「往古より此社中を諏訪の森と称するは、浅間明神勧請せざる以前より諏訪明神鎮座ある故なり」とあり、当初ここに鎮座していたのは、浅間神社ではなく諏訪神社だったらしい。

諏訪神社の拝殿に明日の火祭りに担がれる明神神輿と赤富士の姿を模した御影神輿が展示されていた。元々火祭りは諏訪神社の例祭だったもので、諏訪の神様が追われて逃げる夜に、当地の住民が手に松明を持って迎えたところ、追手が援軍と見間違えて退却したことから、諏訪の神様は当地にしばらく滞在され、この地を諏訪の森と呼び、地主神として諏訪神社が祀られたという。

諏訪の神様は大国主命の息子建御名方神、古事記の国譲り神話に、天照大神が葦原中国平定のため出雲に遣わした武甕槌命との力比べに敗れ、科の国（信濃国）の洲羽の海（諏訪湖）に逃れたとあり、逃走途上でこの地に一時逗留したのであろうか。後に浅間明神に母屋を取られて隅に追いやられた諏訪明神の安寧を祈った。

静謐な境内をもう少し散策していたかったが、雨脚が強くなり、少し早いが宿泊を予約していた駅前ホテルにチェックイン、風呂に入りビールを飲みながら、神社で貰って来た三つ折りの案内パンフレットを広げた。

北口本宮富士浅間神社は、世界文化遺産に登録された「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産の富士山域の一つで、備え付けパンフレットの由緒に『景行天皇四〇年（一一〇年）日本武尊、御東征の砌、箱根足柄より甲斐國酒折宮に向かう途次、当地御通過、大塚丘にお立ちになられ、親しく富士山の神霊を御遥拝され、大鳥居を建てしめ「富士の神山は北方より登拝せよと」勅され、祠を建てて祀ったのが始まりとされている。延暦七年（七八八年）甲斐守紀豊庭占し現在の位置に神殿を建て浅間の大神を奉り、大塚丘には日本武尊の神霊を祀った』とあり、祭神は、木花開耶姫命（コノハサクヤヒメノミコト）大山祇神（オオヤマヅミノカミ）天孫彦火瓊瓊杵尊（ヒコホノニニギノミコト）の三柱とあった。

由緒の前段にある日本武尊の東征は勿論史実ではないが、天高く聳える富士山を遥拝信仰の対象に、小さな祠を建てて奉斎する古代人の姿を投影した話なのだろう。

律令国家体制になると、大陸文化の影響を受けて後段のように仏教寺院に匹敵する神殿が建立され、山の神（浅間大神）を祀るようになったに違いない。

由緒の後段に占いで神殿を建て浅間の大神を奉った延暦七年の七年前の天応元年（七八一年）に、富士の噴火に伴う降灰の記録が続日本記にある。占いでということは、七年前の富士の噴火が、山の神の祭祀を怠ってきたことへの神の祟りだという占いがあり、国司が山の神の怒りを鎮めるため社殿を建立させたのかもしれない。

しかし現在の祭神は、浅間の大神ではなく木花開耶姫命と天孫彦火瓊瓊杵尊と大山祇神の三神になっている。

なぜ三神に変わったのだろうか。三神はいかなる神様なのだろうか。いつもの好奇心が燃え上がって来た。

後日、三祭神について調べてみると「日本書紀」の建国神話に登場する神々で、天上界の天照大神が地上界の大国主神から国譲りされた葦原中国を統治するため、高天原から降臨させた孫の彦火瓊瓊杵尊が、葦原中国の山の神の大山祇神の娘木花開耶姫命を妻に娶っており、三祭神は、木花開耶姫命とその父と夫の関係にあった。

因みに全国に約一三〇〇社ある浅間神社の総本社で静岡県富士宮市にある富士山本宮浅間大社の主祭神木花之佐久夜毘売命は「古事記」に載る名称で、木花開耶姫と同一神である。この女神は一体何者なのだろうか。

日本書紀の巻二（神代下）に、木花開耶姫が夫彦火瓊瓊杵尊に疑われて火の中で出産する神話が載っている。

『神吾田鹿葦津姫、見皇孫曰「妾孕天孫之子、不可私以生也」皇孫曰「雖復天神之子、如何一夜使人娠乎、抑非吾之兒歟」木花開耶姫、甚以慙恨、乃作無戸室而誓之曰「吾所娠、是若他神之子者、必不幸矣、是實天孫之子者、必當全生」則入其室中、以火焚室、于時、焔初起時共生兒』とあり、文中の神吾田鹿葦津姫は木花開耶姫の本名、皇孫は天照大神の孫の彦火瓊瓊杵尊である。

火中出産を詳述する古事記の現代語訳を見ると「木花之佐久夜毘売命が夫の天津日子番能邇邇芸命に、あなたの子を妊娠したが勝手に産めないので相談に来たと話すと、天津神の子をどうして一夜で孕めようか、私の子ではないだろうと夫に疑われ、辱めを受けた恨みから、もし国津神の子ならお産は必ず不幸になるが、天津神の子なら無事に生まれるだろうと、戸のない産屋を造り火を放ち、炎の中で三人の御子を出産した」という。

木花開耶姫が火焔の中で産んだ三人目の彦火火出見尊の孫が初代天皇である。木花開耶姫は、天上界の天津神と地上界の国津神を結ぶ鎹（かすがい）であり皇祖の大御母神ということになる。

それでは浅間神社の三祭神は、いつ頃にいかなる理由で浅間大神に代わって祭神になったのだろうか。

江戸初期の儒学者林羅山が一六一六年に著した丙辰紀行に「三島と富士とは父子の神であると古くから言い伝えられており、三島大社では大山祇神を祭神とするから

富士の浅間大神を木花開耶姫とみると日本書紀の記事によく合致する」と記し、富士山の神は大山祇神の子の木花開耶姫であろうと初めて提唱したといわれる。

林羅山は神儒一致思想を展開、朱子学の発展と儒学の官学化に尽力、神仏分離思想から神仙道的な浅間大神を神道の祭神にすり替える意図があったのかもしれない。

山の神である大山祇神の娘で木花咲くという美しい名を持ち火の中で出産して火を鎮める神性を持った女神と麗峰富士の女性的な美しさが一致して林羅山の提唱した木花開耶姫説が広く流布されていったに違いない。

江戸中期に仏教伝来以前の古代から天皇が天下を知ろ示す古道があったとする本居宣長に始まる国学が起き、やがて尊皇攘夷思想と結びつき、明治政府による天皇とその祖神である天照大神を中心とした皇国史観に基づく神道国教化と神仏分離令により、夫の彦火瓊瓊杵尊と父の大山祇神を加えた皇祖三神が祀られたようである。

【河口浅間神社探訪（八月二六日）】

朝五時に目覚めるとホテルの窓外に富士が姿を現わしていた。溶岩で少し赤茶けた夏山で、冠雪姿で見慣れた優美な富士とは違った力感溢れる逞しい山容である。

九時に駅前ホテルをチェックアウト、河口湖駅からレトロな周遊バスに乗車、湖畔に出ると静かな蒼い湖面が広がってきた。朝方見えていた富士は、雲に隠れてしまっていた。河口湖美術館前で下車、途中のコンビニで「河口浅間（センゲン）神社はどちらですか」と尋ねると「吉田の浅間はセンゲンだけど、河口の浅間はアサマなんですよ」と教えてくれた。え？　読み方が違う？　あえてアサマと呼ばせる理由は一体なんなんだろう。

晩夏の赤冨士（富士吉田のホテルから北麓を望む）



吉田口の御師が江戸からの登拝者を受け入れたのに対して、河口の御師は信濃や甲斐や武州からの登拝者が多く、江戸時代には吉田口に勝る繁栄ぶりだったという。

吉田口との対抗意識から差別化を図るべく浅間の読み方をあえて変えたのだろうか。浅間の読み方を自問自答しながら、河口湖畔から二〇分程山道を登っていくと、鬱蒼とした参道の奥に赤い大鳥居と老杉に囲まれた「河口浅間神社」が見えてきた。参道に根回り七m樹高四五m樹齢八百年の杉並木が、境内に樹齢一二〇〇年のご神木の七本杉が聳えて、荘厳な雰囲気を醸し出していた。

神社案内の由緒に「貞観六年（八六四年）五月富士山西北峰大噴火の事あり、時の住民は甚大な災害を被く、この事甲斐ノ国司より朝廷に奏上、翌貞観七年の勅命に依り鎮火の神　浅間明神を此の地に奉斎、富士噴火祭を執行す。これ当神社の御創祀なり」とあり、河口浅間神社の祭神は、天津神の彦火瓊瓊杵尊でも国津神の大山祇神でもなく、木花開耶姫命だけだった。

富士吉田市歴史民俗博物館に、富士山の頂上火口から噴き出す火焔の中に立つ木花開耶姫命像（下段の写真）が展示されている。御師中雁丸家の神殿内に安置されていたもので、江戸時代末期に千葉の富士講が奉納したとあり、ここでは木花開耶姫命が、浅間の大神であり、富士の噴火を鎮める火の神になっていた。

木花開耶姫命像
（富士吉田市歴史民俗博物館蔵）



河口浅間神社の拝殿の前に玉垣に囲まれた小さな石の祠があり、美麗石と呼ばれる丹青石で造られた屋根型の古代祭祀の石閣で元宮的存在だという。美麗石の下から奈良平安時代の須恵器破片、古墳時代の管玉、縄文時代の磨製石斧が重層的に出土、境内に縄文時代の遺跡もあり、富士山の大噴火に神の怒りを鎮めようとこの美しい石祠を祭祀している古代人の姿が浮かんでくる。

本殿の裏手に小さな社が三つ、出雲社と諏訪社、その奥に山神社が佇んでいた。出雲社の祭神は大国主神、諏訪社は建御名方神、いずれも国津神であり「古事記の国譲り神話」の主役である。それでは両社から離れて一番奥に隠れる山神社の祭神は一体何者なのだろうか。

薄暗い森に囲まれた山神社の祠の中を覗いていると、さっき境内ですれ違った親娘三人連れに「どちらから来られたのですか」と声をかけられた。私の挙動を不審に思ったのか、それとも研究熱心な人に見えたのか。

「埼玉からです。この山神社は誰を祀っているのでしょうね。大山祇神ではないかなと思って・・」私の返事に三人は好意的な反応を見せてきた。そこで先ほどからの疑問をぶつけてみた。「なぜこちらはセンゲンジンジャではなくアサマジンジャと読ませるのですか」

娘さんが「アサマとは、荒ぶる、の意味で、荒々しく噴火する富士山を指すようです。アサマに漢字の浅間が当てられ、後に浅間が音読されてセンゲンになったといわれています。他の浅間神社はほとんどセンゲンですがここだけはアサマ神社、ここが沢山ある浅間神社の最初の神社なんですよ」と説得力ある解説だった。

枕草子の「あさましきもの」に「指櫛すりて磨くほどにものに突きさへて折れたる心地。車のうちかへりたる。さるおほのかなるものは、所せくやあらむと思ひしに、ただ夢の心地してあさましうあへなし」とあり、あさましきとは、驚き呆れる、あってはならないの意である。

今でこそ秀麗な富士だが、古の富士は突然荒々しく噴火して大きな災難をもたらすあさましき山（浅間山）と呼ばれてアサマの名称が本源だったのだろう。

父親が当地で流鏑馬をやる家系の者だと言っていたが、思いがけない出会いと地元に来なければ知り得ない話に感謝である。河口浅間神社を辞して山道を下りながら、先ほどのアサマ談義を反芻していると、河口湖美術館前の交差点のところで後ろからクラクションが鳴った。

河口浅間神社（アサマジンジャ）拝殿



先ほどの男性が車から顔を出して次の冨士御室浅間神社まで送りましょうと言ってくれた。昨日のマラソンで富士山麓を一〇キロ走ったあと富士吉田市内を散策、今日も朝から山道を歩いていたので正直助かった。お陰で美しい河口湖の車窓ドライブを楽しませてもらった。

富士五湖は、九〇〇〇年程前の富士山の大噴火で溶岩に堰き止められて二つの湖が生成され、延暦一九年（八〇〇年）の大噴火で更に分割され、貞観六年（八六四年）の大噴火で現在の五湖の形になったという。

河口湖へ突き出た岬に見える産屋ケ崎神社は、木花開耶姫命が火中出産した三番目の彦火火出見尊（山彦神）と妻の豊玉姫神（乙姫様）を祀る神社で、この岬に茅で産屋を作って産んだ鵜茅葺不合尊が神武天皇の父だとガイドしてくれた。五キロほど河口湖を半周、対岸になる「冨士御室浅間神社」まで乗せていただいた。

【冨士御室浅間神社探訪】

冨士御室浅間神社はセンゲン神社で、河口湖を背にした里宮と向き合うように本宮が建ち、本宮は、文武天皇期（六九九年）に富士山中に最初に祀られた神社で、富士山二合目という自然条件厳しい場所で腐朽激しく、皇室や有力武将によって再興を重ねてきたが、富士スバルラインの開通で旧登山道が荒廃したため、昭和四九年に里宮のある当地に移築復元されたのだという。

冨士御室浅間神社（センゲンジンジャ）本宮



里宮は、本宮が富士山の二合目にあって登攀して参拝するに難儀なため、崇敬者の礼拝儀祭の便を図るべく、九五八年に富士山頂の真北に一六キロの河口湖畔の風光明媚な霊所に神宣により建立され、祭神に木花開耶姫命が鎮座されていた。ここも木花開耶姫命だけだった。

里宮の参道に、扇に矢を射抜いた石柱が建ち、この長い参道で武田流流鏑馬の伝統行事が四月二九日に行なわれるという。後三年の役で苦戦する源義家を救援すべく弟の新羅三郎義光が甲斐国で援軍を集め、御室浅間神社で神護を祈願して清原軍を鎮定、当地に立ち寄り御礼祭を挙げて流鏑馬神事を奉納したことが始まりとされる。

義光は戦功により甲斐守に任じられ甲斐源氏の祖となり、御室浅間神社は子孫の武田氏の手厚い庇護を受けて武田信玄公祈願所となった。車を運転してくれた男性が鹿革の行縢姿で的を射る乗馬姿を思い描いてみた。

【河口湖畔の谷崎潤一郎文学碑】

午後一時を回っていた。三人と別れて河口湖畔の遊歩道を一人散策、谷崎潤一郎文学碑に向かった。月見草やアカツメクサの咲き乱れる遊歩道から湖に突き出た岬に出ると、本を開いた形の黒御影石の碑が建っていた。

湖面の映る石碑に、谷崎が昭和一七年秋に河口湖町に滞在して執筆した小説「細雪」の一節が刻まれていた。

「何処か日本の國でない遠い所へ来たやうな気がしたが、それは眼に訴へる山の形や水の色が変わってゐるからと云ふよりは、むしろ觸覚に訴へる空気の肌ざはりのせゐであった。彼女は清冽な湖水の底にでもゐるやうに感じ、炭酸水を喫するやうな心持であたりの空気を胸一杯吸った。

谷崎潤一郎　細雪より」

谷崎潤一郎と聞くと細君譲渡事件を起こした佐藤春夫を思い浮かべてしまう。いま地元埼玉のコーラスで歌っている佐藤春夫作詩の「秋の女よ」を口ずさんだ。

「泣き濡れて　秋の女（おみな）よ　わが幻のなかに来る　泣き濡れた秋の女を　時雨だとわたしは思ふ」

大中恩の作曲で、しっとりと情感に溢れ、もの悲しく美しいメロディは、秋の女の儚さと愛の切なさが歌われ心揺さぶられる混声合唱の名曲である。佐藤春夫の親友谷崎の最初の妻千代への慕情が込められているという。

碑文に「彼女は清冽な湖水の底にでもゐるやうに」と刻まれ、女性遍歴の絶えない官能を耽美的に描いてきた谷崎潤一郎とは別人のようで少し裏切られた感である。

遊歩道を八木崎公園まで歩き、周遊バスで河口湖駅へ、富士急行で富士山駅に着いたのは一六時になっていた。

【吉田の火祭り】

楽しみにしていた吉田の火祭りに間に合った。駅前から本町通りにかけて既に大変な人出になっていた。富士山が世界文化遺産登録となって初めての火祭りとあって地元も観光客もそしてマスコミも熱気に溢れていた。

今日はこれまでで最多の九二本の大松明が並ぶという。

火祭りのビューポイントの金鳥居の周りには、既に沢山のカメラマンが脚立を持って好位置に陣取ろうと午後四時半の交通規制の開始を待ち構えていた。

交通規制が始まると、メイン通りの真ん中に白板を下敷きに枠木で囲い、枠内にスコップで土を敷き詰めて大松明を立てる土台作りが各所で一斉に始まった。

大松明は既に路肩に横たえてあったが、高さ三ｍ太さ一ｍの大松明を一本一本、手作業で作るのに相当な日数がかかり、出来た大松明をお祭りの日までひと所に置いておけないため、出来たらすぐ通りの路肩に置いておくのだという。一本二〇万から三〇万はするらしく、立札に名がある協賛企業が出資しているんですよと、私の立っていた家の人が話しかけてきた。

大松明と大松明の間に赤松の角材を背丈ほどに積み上げた井桁松明作りも始まったが、その金と労力は通りに面している家の役目だという。マサカリで割った不揃いのままきを崩れないように積み上げるのは容易でない。

大人に混じって子供や高校生がまきを積み上げていたが、その高校生を指差して「あの子は小さい頃から手伝っていたんだよ」と先ほどのお婆さんが教えてくれた。こうして郷土の伝統文化が引き継がれていくのだろう。

この時、突然どよめきが起こった。雲に隠れていた富士山が忽然と姿を現した。主役登場である。カメラマンが一斉に金鳥居の中に富士山が入る撮影ポイントに移動してシャッターを切り始めた。まだ大松明に火が入らないのに一気に活気を呈してきた。（下の写真）

金鳥居の中に現れた富士山



やがて一〇人程の世話人がやってきて道路脇に仮置きされていた大松明を、枠木に土を盛って作った土台の上に立てかける作業が始まった。高さ三ｍあり重さ二〇〇kgの大松明を真っ直ぐ立てる作業は容易ではない。観光客や住民が固唾をのんで見守る中、ようやく立て終える

と次の大松明の所に走っていった。すっかり日の落ちた一八時三〇分、本町通りの奥の方から順次立てられた松明に点火された。提灯を持ったハッピ姿の世話人達が目の前に立つ大松明の先端に点火すると一斉に拍手と歓声が沸いた。次いで井桁松明にも点火された。

大通りに立ち並ぶ九二本の高さ三mの巨大な松明が火柱となって燃え上がる光景は壮観である。富士山は既に漆黒の空に隠れ、列をなす炎の柱の火の粉が宙に舞い、金鳥居が夜空に浮かび上がり、観光客の携帯カメラを向ける手が無数に伸びて、脚立に立つマスコミ関係者の連続シャッター音が鳴り響いていた。（下の写真）

さっきのお婆さんが「ずうっと立っていて疲れたでしょ」と缶ビールと赤飯のおにぎり二個を差し入れてくれた。思いもよらないご好意に感謝感激である。燃え盛る炎のピークはこれからだが、帰りの電車時間が迫っていた。ここで帰るのは口惜しいが火祭り会場を後にした。

今回は、念願の富士山麓を走れただけでなく、被災地復興支援リレーを走られた女性ランナーさん、河口湖で浅間神社を案内してくれた親娘さん、吉田の火祭りで話し相手になり差し入れまでしてくれたお婆さん、いろんな人との出会いがあった素晴らしい旅になった。

帰りの電車内で吉田の火祭りの起源を調べてみた。諏訪神社の祭神建御名方神を松明を焚いて追手から救った故事に基づく説や浅間神社の祭神木花開耶姫命が火焔の中で出産した神話に基づく説など諸説あるが、四〇〇年前の絵図に火防御祭礼之図や鎮火大祭図があり、富士山の噴火を鎮める祭事がどうも起源のようだ。帰路の電車を乗り継ぎ、埼玉の自宅に着いたのは二三時近かった。

金鳥居と吉田の火祭り



武漢・熱乾麺

山本勉

二〇一六年八月に武漢に池莉氏を訪ねたときにいただいた『武汉印象　二〇一五　散文』の中に、池莉氏が執筆した散文、『就这样爱上热干面』がある。この度、まんじ一七六号の誌面を借りて池莉氏の散文を翻訳し掲載する。

散文『就这样爱上热干面』

（こうして熱乾麺を好きになった）

池莉原作

いつも流れに逆らって行動するので、だから早寝早起きして体調がいいなんてどうでもいいことだ。この日はまたもや明け方やっとベッドに入り随分と寝坊してしまった。起きた後はのらりくらりしていて、もう十一時に近い。とうとう気がついた、お腹が空いたと。一番お腹が空いたとき、一番物臭になってしまったとき、朝飯と昼飯を一緒に解決してしまいたいときには、自然と熱乾麺が親しみを持って私の心の中に浮かび上がる。

空腹な労働者にとって熱乾麺は親しみが湧くものだ。先ず、腹いっぱいになる。一口目で美味しく、二口食べれば腹が膨れ、三口目でほとんど食べ終えてしまう。今日一日、これ以上空腹になることはない。

しかも、熱乾麺の有り様は熱々で汁がないけれどなめらかで、口に入ると舌触りがよくざらつかず、しなやかで腰がある。ごま味噌のごま油がプンプンといい香りがする。ネギのみじん切りとダイコンのさいの目切りの塩辛さは新鮮で歯触りがいい。辛くない、やや辛、或いは激辛、好みに応じて選べる。さらに最高の取り合わせを見ていると気分が良くなる。一杯の甘酒だ。甘系に塩辛いものの組み合わせ、スープに熱乾麺の取り合わせは、

自然と錦上に花を添えるようなものになるだろう。甘酒も種類が多い。一種類だけではない。甘くてべたつかない甘酒や卵入りの甘酒、或いはモクセイと団子の入った甘酒を選んでもいい。これはまるでコーヒーにミルクを添えるようなものである。

熱乾麺はこうして見れば、街角や路地のあちこちで通俗的な食べ物となり、表面上は粗野だが中身は上品だ。本物の美味しい熱乾麺には甘酒を取り合わしなければならず、原料十数種類全てに深い道理があり、みな産地と出どころあり、熱乾麺の製造の過程は時間がとても大切で、本当に優れたものを作るには容易なことではない。現在一般的な熱乾麺は名ばかりだ。ただ熱乾麺というブランドに頼って金をだまし取ればそれで良いとわかっているために、本当に優れているものを追求する必要がないのだ。

人生は苦しくて短く真剣に生きていると疲れてしまう。それに多くの熱乾麺はもう既に化学薬品を添加した牛肉スープに鶏ガラスープ、化学調味料、肉のそぼろなどまで堕落してしまった。しかしこれは致し方ないことで、歴史が早くから証明している。世の中はいつも海千山千が多く、トップレベルの達人は深い山の中にいる。また、一般の人は騙されやすく、詐欺まがいの商売がはびこった。熱乾麺の領域においては、騙されてもわずか一杯数元であり、人々にはどうでもいいことであり、食べたらそれまでのことだ。食べたことが結果である。人々は更に多くの時に結果が必要となる。人生が苦しく短く、生まれてから死に向かって行くことが必然の結果であるからには、その過程は明らかにますます重要になってきていて、ひとりの人間として生活していかなければならない。美味しく食べることは、満腹になることを含めて、他に文化や人道的配慮、美を理解することなどの諸々の要素を含んでいる。満腹になることは決して幸せなことではない。気持ちよく美味しく食べられることが、間違いなく幸せなことなのだ。私は武漢で熱乾麺を食べる。可能でさえあれば、必ず百パーセントの努力で幸せだなと感じるほどに食べる。そこでこのような一日が現れたのだ。私はお腹が空いたとき、自分で作る気がしないとき、親愛なる熱乾麺は最も直近の時間、目が覚めてすぐに私の心に浮かんだ。私は自分の感じるがままに熱乾麺を食べに行った。私は理想があり探究心もあるので、お腹が空くのを我慢して、二つの通りを駆け抜けて、あまたの熱乾麺の店の誘惑を無視して、私の見定めた店に急いだ。この熱乾麺の店は「武漢熱乾麺」と呼んでいる。看板はとてもおかしい。よその土地で営業しているようだ。実際によその土地で営業していたとしても「武漢」と書く必要もなく、熱乾麺は武漢のものであるわけで、中国では熱乾麺を売っている町が武漢以外にまだ他にあるというのか？中国ではどの町に私たちのように熱

乾麺を熱心に食べている人がいるというのか、いるはずはない。飲食店の経営者は常識に欠けている。

私は飲食店に入ると麺を茹でている親方に笑って話しかけた。

「武漢熱乾麺を一杯茹でてください」

武漢方言で「武漢」という二文字を少し揶揄して言った。親方はもちろんわかっている。彼もいたずら心で応えた。

「武漢の熱乾麺？」

「そうです」

お互いに笑った。これはちょっとした冗談だ。私は麺を茹でている親方といっしょに店の看板の背後に隠れている経営者をあざ笑った。「武漢熱乾麺」この名前の付け方は少し田舎くさい。しかし、更に重要なことは、このちょっとした冗談は決して冗談ではなく暗黙の了解なのだ。物事の本質というものは、暗黙の中で明らかになってくる。面白い！万物は面白味の中から発展していくのだ。面白味で私たちの気持ちが愉快になり、互いの顔が善人に見える。面白味は私たちの味蕾を生花が咲き乱れるが如く思い切り感知させる。これは言うなれば良い親方だ！近頃の絶対多数の商売人は冷淡でひたすら金儲けをするばかりで、趣などどうでもいいのだ。しかも趣などわからないだろう！今、多くの大都市で、あなたは一杯の麺をわずかに食べるだけで、店は僅かしか小銭も稼げない。誰があなたと心を込めて話をするのか？この親方は私と心を込めて話をした。お互いにほんのひと言ふた言気持ちの通う話をした。いい加減に話をしているわけではない。私たちが話しをしている間に熱乾麺は茹であがり、一杯の湯気が立った甘酒も運ばれてきた。親方は心を込めて麺を茹でるが、私が数秒かけて熱々にするのをわかっているし、私が網杓子で数回振るう麺が好きなことをわかっているし、私が化学調味料の鶏ガラスープの素を要らないこともわかっている。私がごま味噌調味料の他にごま油を少しかけることをわかっていて、このごま油はカウンターの下にしまってあるので、誰しもがみなもらえるものではない。親方はこの一杯の熱乾麺を私に手渡したくれただけだが、香りはもうすでに漂ってくる。それはもちろん普通の熱乾麺とは違いが際立っている。

醍醐味はやはりこれからだ。私がどんぶりを見ると、熱乾麺は僅かしか入っていなかった。大きなどんぶりに麺は底の方にほんの少しだけだ。これは私に対するちょっとした仕返し、急に私は落ち込んで悲しくなった。私はすぐに落ち込んだ悲しみの視線で気持ちを込めて親方を見つめた。この親方は案の定尋ねた。

「どうしたの？」

私は不満だった。

「これじゃ、少ないわ」

「われわれの店のどんぶりは大きすぎる。若い娘が食べきれないことに気づいたんだ」

「私が若い娘であるはずないわ。私は娘のお母さんよ、私は食べきれるわ。今日はとてもお腹が空いたのよ」

私が言い終わるやいなや、大胆に言い放った。

「へえ、早く言ってくれよ！もう少しあげるからいいだろう！」

親方はすぐにまたひと玉麺を熱々にして私のどんぶりに入れて、調味料を加えて寄こした。

「金は要らないよ！」

「あなたは美食家だね。あなたがこんなに遠くまでやって来てくれたのだからお代がほしいわけないだろう」

久しぶりの義理人情の厚さが、熱乾麺から満々と満ちあふれて来て、食べれば食べるほど美味しい。年齢的にはすでに娘のお母さんになった。町を走り回ったが、熱乾麺を食べ、熱乾麺を食べる義侠心は武漢にしかない。熱乾麺にしかない。どうして熱乾麺を愛さないことがあろうか？

随分前のことだと記憶しているが、私がまだ娘の頃、私たちはこうして熱乾麺を食べて、こうして熱乾麺を好きになったのだ。熱乾麺の店にいるとあたかも家にいるようだ。

食べられないときは、「親方、ちょっと、少なくして」、腹ぺこのときは、「親方、少し多めにして」と言えるだろう。

親方はいつもわかってくれる。

蔡林記という店には、当時太った顔つきの親方がいた。笑うとふたつのえくぼで「よしきた」と陽気に私たちに返事を返してくれるだろう。

最後にひと言申し上げたいことがある。熱乾麺はその場で必ず食べなければならない。少し食べるのを遅らすと腰がなくなってしまい、ごま味噌がベトベトになるし、冷めてしまうと香りも飛んでしまう。熱乾麺を食べるときは、熱々で食べ、脇目も振らずに差し向かいで相手を見ながら、心に激情を起こして、あたかも恋愛に陥ったかのようにしなければならない。

参考文献

一　劉醒龍編『武汉印象　二〇一五　散文』（武漢出版社　二〇一五年十二月）七十七～八十頁

近藤勇プロジェクト（六）

匠　克仁

6　近藤勇の人生マップ

アリバイクイズと同様なＣＧ映像で近藤勇の一生を日本地図上で表示するということが正式に決定した。

きっかけは新入社員の提案である。

「クイズのＣＧがかなり好評だよ。ありがとう」

吉村勇は部下の女性に声をかけた。彼女は大学卒業して入社一年目であったが、ＣＧ制作をほとんど一人で仕上げた。

吉村にとっても期待以上の成果であった。

「それで、もう一つ企画があるのですが……」

彼女は新たな提案をした。

「同じようなシステムで近藤勇の一生をマッピングしたらどうでしょう。コストはかかりませんし、何より私一人でできますから」

ということがあり、新たにネット上の企画「近藤勇の人生マップ」が誕生したのである。

もっとも、今回は解説文が必要になってくる。全体で地図や写真を映し、解説が必要なところは右の部分を黒背景にして白字に縦書きでコメントを入れた。

コメントは吉村が担当した。

映像はまず近藤勇の出生地から始まる。

最初の映像は日本全土の衛星写真である。それから東京を中心にズームインし、現在の東京都調布市野水の航空写真となった。

そして、空から地面に着地するように航空写真が拡大

する。そして地面を映したところで、カメラが前を向き、小さな神社のほこらを映し出した。

『近藤勇の生家跡と近藤神社』

そのようなコメントが右に表示される。

近藤勇の生家は第二次世界大戦で調布飛行場を造る際に取り壊された。しかし、近藤勇が産湯で使った井戸は現在も残っている。

その場所にほこらが建てられ、近藤神社と呼んでいた。

さらに右三分の一が黒背景になって、コメントが続く。

『近藤勇は一八三四年（天保五年）、武蔵国多摩郡上石原村に百姓・宮川久次郎と母みよの三男として生まれる。幼名は勝五郎、後に勝太。長女・りえ、長男・音五郎、次男・粂次郎がいた。』

カメラは一八〇度回転して、古い家屋を映した。

『撥雲館（はつうんかん） 近藤勇五郎が開いた剣術道場』

カメラは地面に向けるとそのまま上空へ飛ぶように航空写真となり、それが地図に変わった。

地図は東京都全体を含む大きさにズームアウトし、中心が新宿に移ると、ズームインする。

先ほどと同様に地図が航空写真になりどんどん拡大して、市谷柳町の地面まで近づく。

カメラが下から前に切り替わる。映像は柱が映っており、それには『試衛館跡記念柱』と書かれていた。現在、市谷柳町に試衛館跡記念柱がある。

『一八四八年、勝五郎は江戸牛込（東京都新宿区）の天然理心流剣術道場・試衛場に入門した。』

〈著者注 一般には試衛館として知られているが、試衛場が正しいのでないかと言われている。〉

全体が黒背景になり、コメントが続く。

『一八四九年、近藤周助の養子になり、近藤勇を名乗った。

一八六〇年、清水徳川家の家臣である松井八十五郎の長女・松井つねと結婚。

一八六二年、つねとの間に長女・たま（瓊子）が誕生』

画面上では近藤勇の家系図を表示していた。たまは音五郎の息子の勇五郎と結婚するのであるが、それも分かるようにした。

吉村は部下が映像を作成するのを感心して見ていた。自分ではとても不可能であると思ったのである。

「どうしてそんなに簡単に作れるの」

吉村は不思議に思って質問した。

「私が作っているのでなく、生成ＡＩつまり人工知能に作ってもらっているんです」

彼女は大したことでないという様子で答えた。

「よく分からないが、君に完全に任せるよ」

吉村は部下に全面的に委任した。もちろん著作権など

のチェックは厳重にしていた。

東京を中心とした地図が現れるが、すぐに地図は東京と京都を含む大きさになった。

『一八六三年、近藤勇は浪士組一行とともに京都に向けて出発した。』

近藤たち一行はこの時、江戸から京都へは東海道でなく、中山道を通ったと言われている。

〈著者注 江戸から京都へは東海道の方が短くて便利であるが、大井川や安倍川の長期の川止めのおそれがあり、中山道もよく利用されていた。〉

地図上の江戸から京都までの中山道を薄い青線で表示した。

その線上を青い点が江戸から京都へ移動する。

近藤たちの動きを青色で示していた。新選組というと水色、正確には浅葱色（あさぎいろ）と赤い誠の旗がある。今回、青を使用した。

映画やドラマでも旗の赤よりも羽織の青のイメージが目につく。

実際に新選組をテーマにした少年漫画『青のミブロ』が流行っており、若者の間では、新選組の色は青のイメージが強い。

正確には浅葱色は藍色の薄い色を指す。ネギの色を薄くした色という意味である。

しかし、ネットでは視覚的に認識しにくいことから原色の青色を使用した。

青い点は京都に着くと、線が消え、京都を中心にズームインする。

『近藤は京都に到着すると、壬生村（京都市中京区）の民家や寺社に分宿した』

地図上に分宿したと言われる個所を表示した。

『一八六三年三月、会津藩預かりとして将軍在京中の市中警護を担う「壬生浪士組」が結成された。

一八六三年八月、八月十八日の政変での働きを評価され、「新選組（新撰組）」の隊名を下賜された。』

誠の赤い旗など映像が流れた後、地図に切り替わる。

京都の地図がさらに拡大し、三条木屋町を中心に拡大した。池田屋事件の場所である。

『一八六四年七月 池田屋事件』

池田屋事件は長州藩・土佐藩などの尊王攘夷派志士を新選組が襲撃した事件である。

同様に地図が航空写真となり、地上へ降りて現在の姿を見せた。

現在の池田屋跡地は「海鮮茶屋 池田屋 はなの舞」となっている。

近藤は隊士募集のために帰郷し、伊東甲子太郎ら新隊

士を得た。
地図が江戸まで広がり、京都と江戸を結んだ中山道の線上を点が往復する。
〈著者注　この時、近藤が通ったのが東海道か中山道か資料が見当たらないので、推測である。〉
今度は京都と広島を含む地図になった。
『一八六五・一八六六年、近藤は長州藩と会見のため広島の国泰寺に二度出張』
近藤は長州入りを要請するが、長州藩に拒否されている。
地図上の京都と広島を結ぶ線上を忠実に二往復した。
江戸時代は京都と下関を結ぶ西国街道があり、その街道沿いに往復したと考えて、その街道を線で表現したのであった。
西国街道は江戸時代の五街道（東海道、中山道、日光道、奥州道、甲州道）に入っていないが、それに次ぐ規模の街道である。
黒背景になり、コメントが続く。
『一八六七年六月、新選組は会津藩預かりから隊士全員が幕臣となる。近藤は幕府代表者の一員として要人との交渉を行う。
屯所を西本願寺から不動堂村（京都市下京区）に移転』
京都の地図で西本願寺と不動堂村を表示した。
『一八六七年十月　油小路事件』
地図は下京区七条油小路を表示した。
油小路事件は新選組最後の内部抗争で、新選組を離脱した御陵衛士の伊東甲子太郎暗殺事件である。
次に伏見区竹田街道・墨染が中心となる。
『一八六七年十月　近藤が銃撃され、肩を負傷』
この墨染で、御陵衛士から、近藤は銃撃された。
近藤は伏見城へ逃れた後、大坂城で療養した。青い点が図の伏見城、続いて大阪城に移動した。
〈著者注　鳥羽・伏見の戦いが発生するが、近藤負傷のため土方が隊を指揮した。〉
鳥羽・伏見の戦いにおいて敗れた新選組は、幕府軍艦で江戸に戻る。（近藤は富士山丸に乗艦）
富士山丸の航路については、現在の航路を調べて、映像に反映させた。
『江戸鍛冶橋門外（東京都千代田区）の秋月種樹邸を屯所とした。』
現在の東京の地図になると、千代田区中心に拡大する。
『近藤は江戸帰還後に徳川慶喜に対して甲斐国の甲府城（山梨県甲府市）の委任を要請する建白書を提出した』
映像は甲府城跡を映した。現在は、城跡の一部が「舞鶴城公園」「甲府市歴史公園」として開放されている。
『一八六八年二月、近藤は幕府から甲陽鎮撫を命じられ、新選組は「甲陽鎮撫隊」と改名した。近藤は「大久保剛」に変名。

一行は江戸鍛冶橋屋敷を出立すると、甲州街道を甲府へ向かった。』
今までは通る道を薄い青線で記し、その上を青い点で移動の経路を表していた。ここから甲州街道を薄い青線とし、近藤を表す青点の通った道を濃い青線に変えた。
新政府軍の動きを示す色であるが、最初は皇族に縁の深い紫を使おうとしたそうである。
しかし、新選組の色を濃い青を使っており、紫を使うと映像上で見分けにくく、混乱してしまう。そこで新政府軍の動きを赤色で示すことにした。
『新政府軍が信濃国諏訪から中山道・甲州街道に分かれて江戸へ進軍』
京都から江戸に向けて赤い点が動き、通過した後は濃い赤線になった。
『近藤は花咲宿（山梨県大月市）において新政府軍が甲府を制圧したことを知る。
さらに甲州勝沼の戦い（柏尾戦争）で新政府軍と戦い敗走する。』
江戸東京博物館に一八八〇年に書かれた「勝沼駅近藤勇驍勇之図」という錦絵が展示されており、その錦絵を写した。
地図では甲州街道をなぞった薄い青線上を青い点が移動するが、途中で逆戻しになり、濃い青線が短くなっていった。
『近藤は八王子宿（東京都八王子市）において江戸引き上げを宣言した。』
近藤の行動だけでなく、他の場所での幕府軍と新政府軍の動きも調べて映像に反映した。
吉村勇は部下が動画を作成するところを時折見ていた。この場面では、新政府軍が勢いを得て、幕府軍が弱まった様子が感覚的に理解できる、
「まるで静脈と動脈みたいだな」
近藤たちの幕府軍と新政府軍の動きが吉村にはそのように感じた。
「ネットの対戦ゲームを参考にしたのです」
吉村はネット上の対戦ゲームについて知識は無かったが、部下はゲーム画面のように演出しているということであった。
地図は東京都足立区綾瀬が中心になった。
『一八六八年三月、近藤は土方と共に会津行きに備えて隊を再編成。幕府兵らを五兵衛新田（足立区綾瀬四丁目）で募集し、隊士を増加した。
近藤は変名をさらに「大久保大和」と改めた。』
地図は千葉県まで拡大し、綾瀬から千葉県流山市まで青い点が動く。
『一八六八年四月、近藤ら一行は下総国流山（千葉県流

山市）に屯集した。』
一方の赤い点は板橋まで移動していた。
『その時、新政府軍はすでに板橋宿（東京都板橋区）に入っていた。』
流山の地図が拡大すると航空写真に変わり、上空から飛び降りて前を見るような感じで動き、最初に光明院を映した。
『新選組は流山の光明院・流山寺に分宿し、近藤は土方とともに長岡七郎兵衛宅を本陣としていた。』
それから早送りで移動するイメージで流山寺までたどり着いた。
光明院と流山寺はともに現在、近藤勇忌を行っている。
さらに移動して、現在の近藤勇陣屋跡を写した。
『流山の新選組は新政府軍に囲まれ、近藤は捕縛された。』
包囲されたといえ、近藤は抵抗することなく、出頭したのである。「新選組流山事件」とも呼ばれ、近藤が出頭した理由が謎とされている。
実際に、一緒にいた土方歳三はこの場を逃れた。
近藤は変名を使っており、本人と分からないと思っていたようであるが……連行された後で、新政府軍に近藤の顔を知っている者がいて、本人と露見したのである。
地図上では赤い点が青い点の周りを一周した。青点を囲んだ赤丸が流山から板橋まで移動する。
近藤は捕縛されて、次の経路で板橋に連れて行かれたとされており、忠実に再現した。
近藤は流山の矢河原（やっから）の渡しから埼玉県三郷市の前間（ぜんま）の渡しまで江戸川を舟で渡って護送された。
そして、越ヶ谷宿、浦和宿、田島村を経て、荒川を船で渡り、笹目の渡しから板橋宿まで行ったのである。
そして……
『一八六八年五月十七日（慶應四年四月二十五日）、近藤勇は板橋宿近くの板橋刑場で斬首された。享年三十五（満三十三歳没）。』
地図上の板橋宿の青い点が消滅した。
『近藤の首は京都の三条河原でさらし首にされた。』
地図は東京と京都を含む大きさになり、京都三条の場所で一度点滅して消えた。
近藤勇の人生マップを作成した社員が完成後に、プレゼンテーションで吉村たちに見せた。
「期待以上の完成度だよ」
プレゼンが終わると、吉村は拍手して作成した女性をたたえた。
インターネットで配信後、近藤勇の人生が地図上で視覚的に表現されたという評価を得た。
これが近藤勇まつりの宣伝にも貢献したのであった。

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）3
解雇自殺？（六）

匠　克仁

〈登場人物〉
弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
七田光男　アサヒ信用保証総務部平社員
七田夕子　アサヒ信用保証営業部　光男の妻
景地・出下　刑事
〈時系列〉
参考　第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第三話（本編）
二〇一八年七月からの数週間

6　墜落死の真相

アサヒ信用保証人事部長の弓本良香の元に『週刊格闘技』の記者が取材に現れた。
良香はテレビCMに出演していたが、格闘技専門誌の記者がそれを見ていた。
たまたま、その記者は過去に良香がキックボクシングの現役時代に取材した経験があった。
昔と変わらない容姿の良香に気づき、取材を申し出たのである。もちろん取材内容は過去の格闘技の経験についてであった。
本来は現在の仕事と関係のない取材であるから、当然ながら断る取材である。
しかし、色々な意味でマスコミ受けや、炎上の多いこ

とが逆に会社の知名度を上げたことがあって、そんな良香へのマスコミ取材は会社で認められていた。
むしろ、今回の取材について話をしたところ、御木武利会長からは激励を受けた。
「格闘技ファンにも、我が社の認知度を増やせ」
御木武利会長はアメリカンフットボールの選手であったが、空手・柔道などの格闘技も経験している。
「俺たちの仕事は格闘技経験があるくらいの人でないと勤まらないからな」
実際に家賃保証の世界はかなり厳しく、債権回収の現場では暴力事件が発生している。
例えば、家賃を払えずに自暴自棄になった賃貸人が暴力をふるう事例もある。
また、暴力団関係者を交渉の場に呼んでくる場合もある。それどころか勝手に暴力団関係者が住んでいる場合もあった。
そのような意味でもアサヒ信用保証で、特に自ら暴力をふるわないことは絶対であるが、暴力に対抗できるような人材が重宝されていた。そのためか格闘技経験者が多く所属しているのである。
良香がCMに出演した後も、ボクシング・キックボクシング・総合格闘技の選手のスポンサーになり、かなり格闘技界のスポンサーとしてもアサヒ信用保証は有名になっていた。
そのようなタイミングで格闘技週刊誌から取材の申し込みがあったのである。
取材を申し込んだ記者の名前を耳にしたとき、良香が過去にキックボクシングの試合に勝ったときにインタビューした人だと分かった。
(もう数年、私が生まれるのが遅かったら、女子格闘技界の美しいヒロインになっていたのに)
日頃のスパーリングでは男性選手をなぎ倒していた良香であったが、そもそも女性の格闘技の試合はほとんど無かった。
対戦できる女性選手もいなかった。良香が生まれた世代の女性の格闘技選手そのものが少ないのである。
少ないどころか女子格闘技自体が、良香が現役でキックボクシングなどしていた頃は認知されていなかった。
格闘技を女性がするなんてとんでもないという風潮だったのである。
なお、良香は一九七二年生まれである。
良香より若い世代で、初期に女性の活躍した格闘技選手としては、山本美憂選手がいる。
山本美憂選手は一九七四年生まれ。アマチュアレスリングから総合格闘技で活躍した。総合格闘家の故山本KID徳郁の姉で、ダルビッシュ有の妻・聖子の姉でもある。
(もし私が女子格闘技界で活躍していたら、美人格闘技

選手として世の中の男性はメロメロであったでしょうね)
ちなみに山本美憂選手のライバル的存在であったRENA(レーナ)選手は一九九一年生まれである。実際に大みそかなどの数度の対戦経験のある両者であるが、年齢差は十七歳である。
最近は多く女子格闘技選手が登場してきて、女子だけの格闘技大会も開催されている。
週刊誌のインタビューは良香の現役格闘技時代のエピソードがほとんどであった。
良香のプロフィールとしてアサヒ信用保証勤務と部長職であることを記事にすることも約束された。また、CMに本人が出演したことも報道されることになった。
(このインタビュー記事を読んで、格闘技経験者が入社してくれるかしら)
良香自身はそんな単純なことはないと思った。しかし、会長から必ず取材を受けるように言われていた。
(まあ、ゴキブリの言うことも聞いておくか)
良香は御木武利会長のことをミキタケトシでなく。ゴキブリと呼んでいる。たまに本人に対して、ゴキ会長と呼びかけそうになるが。
インタビューが終わって、後は雑談になった。
「実は先日、葬式に行ってきましてね」
取材記者はある男性格闘家の名を挙げた。良香も知っている人物であった。
「引退後、荒れた生活をしていたようで、喧嘩が原因で亡くなったのです」
「でもあんな屈強な選手が喧嘩に負けて、亡くなったのですか」
「正確には違うので、言い直します。喧嘩は雑居ビルのバーであったんです。彼がビルから出ようとしたところを、負けた相手が店内のビール瓶を投げ落としたんですよ。それで、打ちどころが悪くて、亡くなりました」
「そんなことがあったのですか」
「しかし、相手も間抜けで、酔っぱらっていたものですから自分も転落死したのです。自業自得ですが」
この話を聞いた瞬間、良香は衝撃が走ったのである。
(七田はもしかしたら……)
刑事からの現場の状況の説明で違和感を抱いていたのである。その違和感が何か分かったのであった。
また、七田の叫び声が疑問に思っていた。七田が叫び声を上げなかったら、良香は気付かず、直撃していた。七田の叫び声の理由……それも判明したと思った。
「どうかしましたか」
記者は怪訝そうに良香の顔を見つめた。良香が凍りついたような表情をしたらしかった。
「いえ、ちょっとショッキングな話だったので」
良香はごまかしたが、後の会話は上の空であった。

格闘技誌の取材が終わると、良香は刑事から伝えられた連絡先に電話した。

「ケイジさんか、デカさんはいらっしゃいますか」

良香は人の名前を覚えるのは得意であるが、特殊な記憶法を使っていた。あえて別の読み方をして記憶するのである。例えば菊池さんはキクイケ、菊地さんはキクジと覚える。

相手はとまどったようだった。周りには刑事（デカ）しかいない。

良香は景地をケイジ、出下をデカで覚えていた。動揺していたのか、間違ってしまったのである。

「カゲチさんか、イデシタさんはいらっしゃいますか」

良香は言い直した。

「景地は席を離していますが、出下ならいますので、つなぎます」

先日、主に話をした景地刑事でなく、出下刑事と電話がつながった。

「先日の七田の事件で新たに気づいたことがあります」

「それは何でしょうか」

「電話ではなんですから、直接、会ってお話することは可能でしょうか」

一時間後に出下刑事が景地刑事とともにアサヒ信用保証に来ることになった。

二人の刑事が到着すると、良香は事件当時の屋上の様子を確認した。

「先日、刑事さんがいらっしゃったとき、たしかこうおっしゃったと思います。『七田氏は内側の鍵をバールで壊して屋上に出ました』」

両刑事はうなずいた。

「さらに続けて『飛び降りた場所にあったバールから七田氏の指紋・掌紋が検出されました』」

刑事が同意するのを確認して、良香は続ける。

「七田は自殺ではありません」

七田はとても自殺なんかするタイプの人間ではないと思っていた。他人を殺すことがあっても自殺はしないと確信していた。

「自殺したのでなければ、どうして彼は死んだのですか」

景地が質問した。

「七田は私を殺そうとして、失敗し、墜落死したのです」

良香は断言した。しかし、二人の刑事は特に意外そうな反応をしなかった。

「なぜ、そう思うのですか」

今度は出下が訪ねた。

「発見されたバールの場所です。刑事さんに現場の状況を説明していただきました。しかし、それからずっと違和感を抱いていたのです。最初は違和感はビーズかと思ったのですが、ビーズでなく、バールでした」

良香は息をついで続ける。

「七田はバールで南京錠を破壊しました。バールはこの時点で用済みです。それでは、なぜ、バールが七田の飛び降りた場所で見つかったのでしょうか」

その質問に景地は答えず、逆に質問を返してくる。

「弓本さんはその理由が分かったのですか」

「はい。バールを凶器に使うためです。つまり、七田は私の頭上にバールを落とそうとしたのです。しかし、私に狙いをつけるためには屋上から大きく下にのぞき込まなければいけません。そうして誤って落下したのです」

良香は一気に話し終えた。

当然ながら刑事たちは反論してくるだろう、と良香は思っていた。しかし……

「実は、警察としても自殺を否定する見解がありました」

景地は意外な回答をした。

「弓本さんが推理したように、弓本さんを殺そうとして失敗して転落した可能性があるという判断です」

「やはり、バールの位置ですか」

「それもありますが、別の物があります」

「別の物……それは何ですか」

「捜査情報は教えられません」

出下が即答したが、景地が制した。

「今回は弓本さん自身が推理されたことですので、説明しましょう。実は七田光男氏のスマホに夕子さんに宛てたＬＩＮＥのメッセージが残っていました」

「それは何と書かれていたのですか」

景地は手元の資料から一枚の写真を取り出した。ＬＩＮＥのやりとりの画像である。

『クビになった』

ＬＩＮＥは光男のコメントから始まっていた。

『どういうことよ。無色になったらもうリコピンよ』

二人の文言は誤字脱字だらけで、無職が無色になっていた。

リコピンはリコまで打って途中で変換したので、離婚のことだと良香は容易に推測した。ちなみにリコピンは近年注目されている栄養素である。

良香は七田夫妻が離婚を検討して別居している事実を思い出した。続けて読み進むと……

『ゆみもとの野郎物故ロス』

物故ロスはぶっ殺すだろう。

『真痔なの？剃れならリコピン後にしてよ』

このコメントを翻訳すると次の様になる。

『マジなの？それなら離婚後にしてよ』

『痔ん痔部腸、コロさんと飢餓収まらん』

普段からわざとおかしな変換をしているであろう。これも正しく変換されると……

『人事部長、殺さんと気が収まらん』

『やめて。殺人犯の妻と呼ばれるのはいやだわ』

この夕子の文言は正しく変換されていた。

（普通の感覚なら犯罪行為を止めるようにいさめるコメントをするところでしょ）

良香は光男だけでなく夕子の態度にもあきれていた。

（自分のことしか考えていないのは、まあ夕子らしいけど）

そう良香は思った。

「そんな重要な情報をなぜ被害者の私に教えてくれなかったのですか」

「先ほども言いましたが、いくら被害者だからといっても、捜査情報は教えることができません。今回は弓本さん自身が推理されていることの証拠なので、初めて教えたわけです」

出下が答えた。

「それに、バールの位置が不自然といいますが、もし殺人道具として使おうとしたなら、それこそ不自然な位置ですね」

景地の指摘で、良香は自分の推理が検証不足であることに気付いた。

（そう言われると、たしかにバールの場所はおかしいわ）

良香の推理では、バールが屋上の七田が転落した場所にあったことが凶器に使用する目的であるということなのである。

しかし、冷静に判断すると、それも不合理である。

「仮に七田氏が誤って落ちたとしたら、彼はバールを持った状態でないでしょうか。バールごと七田氏は落下したでしょう」

良香もそのことは認めざるを得なかった。バールが屋上にあったことがどう考えても不自然であった。

「その事実から、七田氏があなたを殺害しようとして誤って落ちたというのも推理の一つでしか過ぎません。つまり、警察としても七田氏が自殺したか、殺人を試みて過失死したか、判断をする決定的な証拠はないのです」

景地は淡々と説明続ける。

「現実問題として、既に七田光男氏は亡くなっています。その死亡が弓本さんを巻き添えに自殺しようとしたのか、弓本さんを殺そうとして誤って事故死したか、どちらにしても被疑者死亡で終わった事件です」

景地は説明するが、良香には納得できないことである。

（どちらにしても……終わったって、それはないでしょう）

当事者にとっては納得のいかないことである。

相手が自殺して、その巻き添えになりかけたのであれば、少なくとも七田に対しあわれみの感情を持っていた。

しかし、実際には自分を殺そうとして失敗して死んだだけである。そんな相手にあわれみを感じるわけがない。

（絶対に七田が私を殺そうとして失敗して墜落死した証拠を見つけてやるわ）

一緒にすることじゃないと良香は内心で怒りを感じた。

編集後記

アメリカ第一主義を掲げ全世界相手に相互関税を武器に恫喝まがいの独善的外交を展開するトランプ大統領の言動を、永畑俊三氏が「吾輩は紙魚ロボである」でドキュメンタリーのように詳述、映像の世紀ならぬ活字の世紀の証人を担っておられます。

苦しい闘病生活の村上邦治氏が、戦後八〇年の節目の年に相応しい「終戦工作に動かなかった重臣たち」の連載に果敢に挑戦されて、その不死鳥ぶりには頭が下がる思いです。

前号から維持会員になられた杉浦崇氏が、我々には非日常的な船長航海や造船営業に纏わる興味深い思い出を寄せられました。

悲しいお知らせがあります。同人の三戸岡道夫氏が四月一日にご逝去されました。まんじ創刊からの同人であり八〇号から二四年の長きに亘り発行人を担って来られました三戸岡道夫様のご人徳とご功績を偲び心からご冥福をお祈り申しあげます。

今回寄稿された「徳川家康の長期政権戦略（その一）」が絶筆となりましたが、九六歳にしてなお新たな連載を構想されておられた飽くなき執筆意欲とたゆまぬ情熱に心より敬服いたします。

まんじ発行人の後任に同人の忠内正之氏が就任されました。これまでと変わらぬご支援ご協力を宜しくお願いいたします。

安藤　剛

「告知版」

会員逝去

三戸岡道夫氏（本名大貫満雄）
令和7年4月1日
享年96歳

合評会予定

5月24日（土曜日）12時
アルカディア市ヶ谷
（旧私学会館）

まんじ第176号

令和7年5月1日発行（非売買）

発行人　忠内正之
編集長兼事務局長　安藤　剛
〒362-0022
埼玉県上尾市瓦葺2055-29
TEL・FAX 048(721)2001

（郵便振替口座）No.00270-0-64592　加入者名　まんじ
（印刷製本）　中川印刷株式会社　〒231-0036　横浜市中区山田町7-1

表紙の絵について「光への再生」　田寺怜葦（たでられい）画